

聖日  
公會

祈

禱

書

本書は正本に準拠したものであることを  
証明する

日本聖公会祈祷書正本保管委員

救主降生一九五九年改定

日本  
聖公會

祈

禱

書

日本聖公會教務院



本書は聖公会の公禱・聖サクラメント禮および諸式を  
載せたもので日本聖公会の所用に属する

次

諸祈禱・感謝	聖餐	特禱・使徒書・福音書	聖洗	公會問答	堅信式（信徒按手式）	聖婚式	產後感謝式
………	………	………	………	………	………	………	………
一〇〇	二七	一六九	四〇一	四一九	四二六	四三三	四四八

病者訪問式……………四三

葬送式……………四三

幼年葬送式……………四六

大斎懺悔式……………五九

聖職按手式……………五七

主教就任式……………五六

禮拜堂聖別式……………五三

牧師任命式……………五四

付録

家族の朝の祈り……………五九

家族の夕の祈り……………六〇

午禱……………六四

終禱……………六三

日本聖公会組織成立記念日祈禱……………六四

收穫感謝……………六八

伝道祈禱……………三一

洗礼志願式……………三九

伝道師認可式……………四一

女執事任命式……………四四

逝去者記念……………五一

# 公会暦

公会暦には祝日と斎日とが定められている。

## 祝日

祝日には移動祝日と固定祝日とがある。固定祝日は毎年同じ日に当たるが、移動祝日の日取りはその年の復活日をもととして定められる。ただし降臨節の主日の日取りは降誕日をもととして定める。

移動祝日は次のとおりである。

復活日 三月二十一日以後の満月に次ぐ主日（もし満月が主日に当たる

時はその次の主日）

復活後月・火曜日

大斎前第三主日 復活日前の第九主日

大斎前第二主日 復活日前の第八主日

公 会 曆

大齋前第一主日 復活日前の第七主日

大齋第一主日 復活日前の第六主日

昇天前主日 復活日後の第五主日

昇天 日 復活日後四十日目

聖靈降臨日 復活日後五十日目

聖靈降臨後月・火曜日

三位一体主日 復活日後の第八主日

降臨節第一主日 降誕日前の第四主日

その他の各主日

固定祝日は次のとおりである。

一月一日 主イエス命名日（受割礼日）

六日 顕現日

二十五日 使徒 聖パウロ改心日

二月二日

被 献 日

二十四日

使徒 聖マツテヤ日

三月二十五日

処女 聖マリヤ蒙告日

四月二十五日

福音記者 聖マルコ日

五月一日

使徒 聖ピリポ・聖ヤコブ日

六月十一日

使徒 聖バルナバ日

二十四日

施洗者 聖ヨハネ誕生日

二十九日

使徒 聖ペテロ・聖パウロ日

七月二十五日

使徒 聖ヤコブ日

八月六日

変容貌日

二十四日

使徒 聖バルトロマイ日

九月二十一日

福音記者 使徒 聖マタイ日

二十九日

聖ミカエル及び諸天使日

十月十八日

福音記者 聖ルカ日

二十八日 使徒 聖シモン・聖ユダ日

十一月一日 諸聖徒日

三十日 使徒 聖アンデレ日

十二月二十一日 使徒 聖トマス日

二十五日 降誕日

十二月二十六日 聖ステパノ日

二十七日 福音記者 使徒 聖ヨハネ日

二十八日 聖嬰児日

齋 日

齋日は次のとおりである。

大齋始日 (断食日)

受苦日 (断食日)

大齋始日以後主日を除いた四十日

聖職按手節

冬期 降臨節第三主日

春期 大斎第一主日

夏期 聖靈降臨日

秋期 九月十四日

後の水・金・土曜日

(九月十四日が水曜日に当たるときは、その次の週の水・金・土曜日)

昇天前祈禱日 昇天前の月・火・水曜日

毎金曜日 但し降誕日から顕現日までと復活週及び昇天週の各金曜日を除く

次の祝日の備え日(前日) 但し祝日が月曜日に当たるときは土曜日

降誕日、聖靈降臨日、施洗者聖ヨハネ誕生日、諸聖徒日、使徒聖アンデレ日

主日と他の祝日、または祝日と斎日とが重なるときの規定

- 一 降臨節第一主日が使徒聖アンデレ日と重なるときは、使徒聖アンデレ日を月曜日に移す。
- 二 降臨節第四主日が使徒聖トマス日と重なるときは、使徒聖トマス日を月曜日に移す。



三 聖ステパノ日、使徒聖ヨハネ日、または聖嬰児日が降誕後第一主日と重なるときは、その固定祝日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

四 顯現日が降誕後第二主日と重なるときは、顯現日を主とする。

五 使徒聖パウロ改心日が顯現後第三主日と重なるときは、使徒聖パウロ改心日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

六 被献日が顯現後第四主日、または大斎前第三・第二・第一主日と重なるときは、被献日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

七 大斎前第三主日が使徒聖パウロ改心日と重なる時は使徒聖パウロ改心日を月曜日に移す。

八 大斎前第二・第一主日・大斎始日、または大斎節の主日が使徒聖マツテヤ日と重なるときは、使徒聖マツテヤ日をその翌日に移す。

九 大斎第三・第四、または第五主日が蒙告日と重なるときは、蒙告日を月曜日に移す。

一〇 復活前主日と復活後第一主日の間に、蒙告日、福音記者聖マルコ日または使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日が来るときは、復活後第一主日後の月曜日に移す。

一一 福音記者聖マルコ日、使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日が復活後第二・第三・第四、または第五主日と重なるときは、その固定祝日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

一二 昇天日が使徒聖ビリポ・聖ヤコブ日と重なるときは、使徒聖ビリポ・聖ヤコブ日を翌金曜日に移す。

一三 聖霊降臨日と三位一体主日の間に使徒聖バルナバ日が来るときは、使徒聖バルナバ日を三位一体主日後の月曜日に移す。

一四 施洗者聖ヨハネ誕生日、変容貌日、使徒または福音記者の祝日、聖ミカエル及び諸天使日あるいは諸聖徒日が三位一体節中の主日と重なるときは、その固定祝日を主とし、主日の特祷を当日の第二特祷とする。

一五 降誕日、顕現日、復活日、昇天日、聖霊降臨日、三位一体主日には、当日の特祷だけを用いる。ただし翌日が祝日に当たるときは、その祝日の特祷を晩祷の第二特祷とする。

一六 祝日が土曜日に当たるときは、晩祷にはその祝日の特祷を第一特祷とし、主日の特祷を第二特祷とする。ただし降臨節各主日、大斎第五主日、復活前主日の晩祷には、主日の特祷を第一特祷とし、その固定祝日の特祷を第二特祷とする。

一七 使徒聖マツテヤ日が大斎始日の翌日に当たるときは、大斎始日の晩祷には当日の特祷を第一特祷とし、使徒聖マツテヤ日の特祷を第二特祷とする。

一八 使徒聖ビリポ・聖ヤコブ日が昇天日の前日に当たるときは、当日の晩祷には昇天日の特祷

を第一特禱とし、使徒聖ビリボ・聖ヤコブ日の特禱を第二特禱とする。

- 一九 使徒聖ビリボ・聖ヤコブ日が昇天日の翌日に当たるときは、木曜日の晩禱には昇天日の特禱を第一特禱とし、使徒聖ビリボ・聖ヤコブ日の特禱を第二特禱とする。

- 二〇 週日に祝日が来るときは、祝日の特禱だけを用いる。

第一表 年次移動祝齋日

年次	主日數	顯現後	大齋前	大齋始日	復活日	昇天日	聖臨日	三位一體	降臨節
一九五九	二	五	一	二	三	五	五	二	一
一九六〇	三	六	二	三	四	六	六	三	二
一九六一	四	七	三	四	五	七	七	四	三
一九六二	五	八	四	五	六	八	八	五	四
一九六三	六	九	五	六	七	九	九	六	五
一九六四	七	一〇	六	七	八	一〇	一〇	七	六
一九六五	八	一一	七	八	九	一一	一一	八	七
一九六六	九	一二	八	九	一〇	一二	一二	九	八
一九六七	一〇	一三	九	一〇	一一	一三	一三	一〇	九
一九六八	一一	一四	一〇	一一	一二	一四	一四	一一	一〇
一九六九	一二	一五	一一	一二	一三	一五	一五	一二	一一
一九七〇	一三	一六	一二	一三	一四	一六	一六	一三	一二
一九七一	一四	一七	一三	一四	一五	一七	一七	一四	一三
一九七二	一五	一八	一四	一五	一六	一八	一八	一五	一四
一九七三	一六	一九	一五	一六	一七	一九	一九	一六	一五
一九七四	一七	二〇	一六	一七	一八	二〇	二〇	一七	一六
一九七五	一八	二一	一七	一八	一九	二一	二一	一八	一七
一九七六	一九	二二	一八	一九	二〇	二二	二二	一九	一八
一九七七	二〇	二三	一九	二〇	二一	二三	二三	二〇	一九

第二表 移動・固定小祝日

\* 符号は移動小祝日

\* 聖餐制定記念日 (復活前木曜日)

\* 聖餐感謝日 (三位一体主日後の木曜日)

一月 十四日 主教ヒラリー (三六八年)

十七日 修院長アントニオ (三五六年)

二十日 殉教者主教ファビアン (二五〇年)

二十一日 殉教者処女アグネス (三〇五年頃)

二十二日 殉教者執事ビンセント (三〇四年頃)

二十四日 殉教者主教聖テモテ (第一世紀)

二十六日 殉教者主教ポリカープ (一五五年頃)

二十七日 主教博士ヨハネリキリソストム (四〇七年)

二月 一日 殉教者主教イグナシオ (一一〇年頃)

五日 日本殉教者

十一日 日本聖公会組織成立記念日 (一八八七年)

三月一日 主教デビッド（五四四年頃）

七日 殉教者パベチュアとそのともがら（二〇二年）

八日 博士トマスIIアクイナス（一二七四年）

十二日 主教博士グレゴリー（六〇四年）

十七日 主教バトリック（四六一年）

十八日 主教博士エルサレムのシリル（三八六年）

十九日 聖ヨセフ

二十一日 修院長ベネジクト（五四〇年頃）

四月三日 主教リチャード（一二五三年）

四日 主教博士アムブローズ（三九七年）

十一日 主教博士レオ（四六一年）

十三日 殉教者ジャスチン（一六七七年頃）

二十一日 主教博士アンセルム（一一〇九年）

二十三日 殉教者ジョージ（三〇三年頃）

三十日 処女シエナのカタリナ（一三八〇年）

五月 二日 主教博士アタナシオ(三七三年)

四日 寡婦モニカ(三八七年)

六日 聖ヨハネのラテン門前の受難(第一世紀)

九日 主教博士ナジアンザスのグレゴリー(三九〇年頃)

二十六日 主教カンタベリーのオーガスチン(六〇五年)

二十七日 司祭博士ビード(七三五年)

六月 五日 殉教者 主教ボニファース(七五四年)

九日 修院長 コロンバ(五九七年)

十四日 主教博士バシル(三七九年)

二十二日 殉教者 オルバン(三〇四年頃)

二十八日 殉教者 主教イレネウス(二〇二年頃)

七月 二日 処女聖マリヤの訪問

二十日 殉教者 処女 マーガレット(二七八年頃)

二十二日 マグダラの聖マリヤ(第一世紀)

二十六日 アンナ

八月 一日

聖ペテロ、鎖を解かる

四日

ドミニコ（一二二二年）

十日

殉教者 執事 ローレンス（二五八年）

十二日

処女 クララ（一二五三年）

十五日

聖母 マリヤ安息の日

十八日

ヘレナ（三二八年頃）

二十日

修院長 博士 ベルナルド（一一五三年）

二十八日

主教 博士 オーガスチン（四三〇年）

二十九日

施洗者 聖ヨハネの断頭

九月 一日

修院長 ジャイルス（七二〇年頃）

八日

処女 聖マリヤの誕生日

十四日

聖十字架頌栄日

十九日

主教 セオドル（六九〇年）

二十六日

殉教者 主教 シブリヤン（二五八年）

三十日

司祭 博士 シェローム（四二〇年）



十月 四日 アシジのフランシス（一二二六年）

九日 殉教者 主教 デニス（二八六年頃）

十三日 王 エドワード（一〇六六年）

十一月 二日 諸 魂 日

十一日 主教 マルチン（三九七年頃）

十七日 処女 ヒルダ（六八〇年）

二十二日 殉教者 処女 セシリヤ（二三〇年頃）

二十三日 殉教者 主教 クレメント（一〇〇年頃）

二十五日 殉教者 処女 アレキサンドリヤのカタリナ（三〇七年頃）

十二月 二日 ウイリアムス主教記念日（一九一〇年）

三日 フランシス・サビエル（一五五二年）

四日 博士 アレキサンドリヤのクレメント（二一〇年頃）

六日 主教 ニコラス（三二五年頃）

十三日 殉教者 処女 ルシャ（三〇三年頃）

二十九日 殉教者 主教 カンタベリーのトマス（一一七〇年）

# 日課・詩篇表

旧約聖書・新約聖書・旧約聖書外典各巻の書名を次のように略記する。

## 旧約聖書

略記	書名	略記	書名	略記	書名
創	創世記	歴	歴代志略下	ダ	ダニエル書
出	出エジプト記	エ	エズラ書	ホ	ホセア書
レ	レビ記	ネ	ネヘミヤ記	ヨ	ヨエル書
民	民数紀略	エ	エステル書	ア	アモス書
申	申命記	ヨ	ヨブ記	オ	オバデヤ書
ヨ	ヨシュア記	詩	詩篇	ヨ	ヨナ書
士	士師記	箴	箴言	ミ	ミカ書
ル	ルツ記	伝	伝道之書	ナ	ナホム書
サム前	サムエル前書	雅	雅歌	ハ	ハバクク書
サム後	サムエル後書	イ	イザヤ書	ゼ	ゼパニヤ書
列上	列王紀略上	エ	エレミヤ記	ハ	ハガイ書
列下	列王紀略下	哀	エレミヤ哀歌	ゼ	ゼカリヤ書
歴上	歴代志略上	エ	エゼキエル書	マ	マラキヤ書

## 日課・詩篇表

新約聖書

略記

書名

略記

書名

略記

書名

マタ

マタイ伝福音書

エベ

エベソ書

ヘブ

ヘブル書

マル

マルコ伝福音書

ピリ

ピリピ書

ヤコ

ヤコブ書

ルカ

ルカ伝福音書

コロ

コロサイ書

ペテ前

ペテロ前書

ヨハ

ヨハネ伝福音書

テサ前

テサロニケ前書

ペテ後

ペテロ後書

使徒

使徒行伝

テサ後

テサロニケ後書

ヨハ卷

ヨハネ第一書

ロマ

ロマ書

テモ前

テモテ前書

ヨハ武

ヨハネ第二書

コリ前

コリント前書

テモ後

テモテ後書

ヨハ参

ヨハネ第三書

コリ後

コリント後書

テト

テトス書

ユダ

ユダ書

ガラ

ガラテヤ書

ピレ

ピレモン書

黙

ヨハネ黙示録

旧約聖書外典

エズ武

エズラ第二書

ソロ

ソロモンの知恵

バル

バルク書

トビ

トビト書

ベン

ベシラの知恵

三童

三童児の歌

第一表 年間日課及び主日・移動祝斎日詩篇

公会 暦		早 禱		晚 禱	
降臨節第一主日	月 火 水 木 金 土	第一日課・詩篇	第二日課	第一日課・詩篇	第二日課
イザ一―一二〇 詩八、五〇	二 五一八	黙ハ一	ルカ一五―三五	イザ一―一二 詩九、九七	ヨハ五―一九〇
七	九	三		六	二
七	七	四		八	三一―四一〇
土	一〇―二〇	五		一〇―一九	四二―五
二	二	六		二四―三一	ベテ前
降臨節第二主日	月 火 水 木 金 土	イザ四二―五七 詩一九―二四	ルカ一―二六―五六	イザ二―一〇 詩一九―二五―二六	テモ後三一―四一八
月	イザ二四―二七	黙七―一八		イザ二六	ベテ前三八―四二
火	一七	八―一九		一八	四三―五

降臨節第三主日		冬期聖職 按手節				同		同	
水	木	金	土	月	火	水	木	金	土
一九一—一七	二二—一二	二五	二六 一三—二七	イザ二八 二三—二九 二三 詩九、九	五〇 一一—一四 三二 一五 エレ二五 一一—一五 詩一、二五	イザ五〇 四〇 一八 または エレ二六 一一—一九 詩四二	イザ四三 または マラ三一—一六 詩四三	同	同
一〇一—一一四	一一五—一二	三一—一四五	四六—一五四	黙 一五 五一—六	一八	ヨハ 一九 または ヨハ 一九—一七	黙 二〇	ヨハ 三三 二二 または ヨハ 三三	黙 二三 または ルカ 三三 五—六
一九一—二〇	二三	二四	二八 一一—三	イザ二九 一三— 詩五、九	五〇 一五 三三 一六 または エレ二三 一六 詩九	イザ四〇 一—一七 四一 一八 または マラ二一—一九 詩五一	イザ四三 または マラ三一—一六 詩一三	同	同
ペテ後 一	二	三	ヨハ 二一—二二 二七	テサ 前五 一二—一四	ヨハ 二一—二二 二三 五 一—一六 または エペ 四 一—一六	ヨハ 式全	ヨハ 参全 または テモ 前三	ユダ 全 または テモ 後一	同

\* 降誕日から顕現日までの祝日は固定祝日であるが特にここに掲げる。

降臨節第四主日		月	火	水	木	金	土	* 降誕日		聖ステパノ日	福音記者	使徒聖ヨハネ日	聖嬰兒日
イザ三二一八 詩三、五	ペン一二〇 三一七—四一〇 六五	ヨハ三一三	四一—六 五一九—四七	一四二〇—二五	一八一—元	二二一六—三二五		イザ九二七 詩一九、四五	創四一一〇 詩二八 出三三九—九 詩三、二四	エレ三一—一七 詩八、二六	マタ二八一—一〇	ヨハ三二—三 詩九七	イザ四九—四一五 詩二六
イザ三五 詩一〇一、一〇四	ペン二 四二—五七 一〇七	セカ二二〇 詩八五	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四	イザ七二〇—四
テサ後一三—二八	マタ二四—一八 二四二九 二五—一三 二五—四三〇 二五—三	テト二二—三七	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四	ヨハ七四七—四

降誕後第一主日	イザ四〇一—二 詩二、八	ルカ二五—三六	イザ四〇二—三 詩八九—一九	エペ一
十二月廿九日	四四一—三	マタ一—八	四四二—四、五—七	ロマ一—七
三十日	四五—八—四六	二	四七	一—八—二—六
卅一日	四八	三	申 詩九〇 一〇二—一一—	二—七—三—八
主イエス命名日 (受割礼日)	創一七—一—三 詩一〇五—一—八、二—三	ピリ二五—二 または マタ一—二—五	申 詩三〇 一—三—一—三	黙一九—二—六
降誕後第二主日	イザ四三—一—六 詩八四、八五	ヨハ一〇—一—六	イザ四三—一—三 詩九〇、九一	コロ二六—七
一月二日	イザ四九—三—五〇—三	マタ四	イザ五〇—四—五—八	ロマ三—九—四
一月三日	五一—九	五一—三	五二—一—三	五一—六—四
一月四日	五二—一—三—五—五	五三—六—八	五四	六—五—七
一月五日	五五	六一—九—七—六	イザ四九—一—三 詩二九、九八	エペ三—一—一
顕現日	イザ六〇、六二 詩四六、七	ルカ三—一—五—三 (前タ)	イザ六〇、六二 詩一〇〇、一一七	ロマ五—八—二

顯現後第一主日						顯現後第一主日					
月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土
ベシ二四一—一三	二九一—一〇〇	三四	三六—一七	四二—一五	四四—一五	イザ四四六 詩四七、四八	イザ五六	五八	六〇	六二	六四
使一〇四—一一八	一五一—一九	一七一—一二	二〇七—三五	二二—一二	二六—一九	ルカ四一—三〇	マタセセ	八	九一—一六	九二七—一〇二五	一〇一六
ベシ二七二五—二六	三二七—三六	三五	三八—一三〇	四三	五一	イザ四五 詩六六、六七	イザ五七	五九	六一	六三	六五—一六
マル一三—一二	四三五—五二〇	五二	六三四—五二	七二四—八二〇	九一四—二九	ルカ七三六—八三	ロマ八	九	一〇一—一一三	一一三	一二—一三
											一四



日課・詩篇表

一一一

顕現後第二主日						顕現後第三主日					
月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土
イザ 詩四、三三	ホセ一	四一三	七	九	二三 一五—二四	ホセ一 詩四、四六	アモ一	四	五 二五—六	八	オバ全
ルカ一〇二五	マタ二一三七	二三六	二一 一三三	二三四	二四 一二二	ルカ三一一〇	マタ二二一六二〇	一六 二一—七二〇	一七 三一—八二〇	一八 二一—九二五	一九 一六—二〇一九
イザ 詩六	ホセ二	五八—六	八	一〇	ヨエ一 二二—三八	ホセ一 詩三〇、三二	アモ二	五 一一—四	七	九	ヨナ一
ルカ二一三四	ロマ二五	一六	コリ前 一	二一—三二七	三一八—四	ルカ一五	コリ前 七	八	九	一〇 一一—一二一	一一 一二—一二一

土	ヨナ二	二〇—二一七	五—四	一二—三
顯現後第四主日	ヨエ五九 詩七五、七六	ルカ一六一九—一七一九	アモ五 詩七四	ルカ一七〇—一八一四
月	ミカ一—一九 および 二—二一	マタ二—一八	ミカ二—二—三	コリ前—四
火	四—一五一	三—一四〇	六九—七	一五
水	ナホ一—二七	三—四—三—三六	ナホ二—八—三	一六
木	ハバ一—二八	二—三—二—四—三	ハバ三	コリ後—
金	ゼバ—	二—四—三—二—五—一—三	ゼバ二—一—三—八	二—一—三
土	ハガ—	二—五—一—四	ハガ二	四—一—五—一〇
顯現後第五主日	ミカ五—二—六—八 詩六〇、六一	ルカ一八—一八—一九—二〇	ハバ二—九—一—四 および 一—八—一〇 詩六二、六三	ルカ一九—二—九—二〇—八
月	ゼカ一—二—七	マタ二—六—一—三—〇	ゼカ一—一—八—二	コリ後五—二—一—七—一
火	三—一—四	二—六—三—一—五—六	五—一—六	七—二—一—八—一五
水	七	二—六—五—七	八	八—一—六—一—九



大賣前第二主日	土	金	木	水	火	月	大賣前第一主日	月
創七 詩五九	一六	一四	一一七—二一〇	八	一九二—二一五	創一八—一五	創二二—一八 詩二一、一三	創二八—二〇—二九—二〇
ヨハ一—一九—三四	五二—六—一三	四二—五—二〇	三二—四—二〇	二一八—三—一九	七	マル六—一四	ヨハ四—一四—三	マル一〇—四六—一一—一九
創九—一—一九 詩五〇	一七—一—二三	二五	二二	二二—一—二二	一八—六	創一八—六	創二五、一六 詩一五、一六	創三一—一—三三
ヨハ二—一—二一	六	五	四	三	二	エペ	ヨハ五—一—一九	ピリ
五三一—六	五—一—二	四	三	二	一	五三一—六	五三一—六	五三一—六

<p>大齋始日</p> <p>火 三三六</p> <p>水 イザヤ 詩六 三三、三六</p> <p>木 創 三三</p> <p>金 三三三—三三八</p> <p>土 三九</p>	<p>二二〇—二二三</p> <p>二二二—二三</p> <p>二三三</p> <p>二三</p> <p>一四—一六</p>	<p>ヨナ五 詩一〇、一四〇、一四三</p> <p>創 三三 三三—一四〇</p> <p>三七</p> <p>四〇—一四—一三</p>	<p>二</p> <p>ヘブ三 二二—四—一三</p> <p>ピリ三</p> <p>四</p> <p>コロ—一—三</p>	<p>大齋第一主日</p> <p>創 一八 詩五、五四</p>	<p>ヨハ六 三三—四〇</p>	<p>創 二—一三 詩一九—一三</p>	<p>ヨハ六 四一</p>	<p>春期聖職 按手節</p> <p>月 創 四—一四—四五</p> <p>火 三二—一八</p> <p>水 三二六—二六—四四—一七 または エゼ二 詩二六</p> <p>木 創 四六—一六—四六—七</p> <p>金 同 エゼ三三—一—二〇 詩一六</p>	<p>マル二 四—二七—五二</p> <p>一四五三</p> <p>一五—一四—一 また マタ九 三五—一〇—二〇</p> <p>マル一 五—四—二—一六</p> <p>ルカ一 一—一六— 九 五七—一〇—二四</p>	<p>創 四—一四—四—二七</p> <p>三—一—五</p> <p>四—一八—四—五—一五 または エゼ三—一六 詩四</p> <p>創 四六—二六—四七—二</p> <p>エゼ三三—一—一六 詩七七</p>	<p>コロ—二四—二—一九</p> <p>二二〇—三—一七</p> <p>三—一八—四 または コリ前—一八</p> <p>テサ前—</p> <p>コリ前—</p> <p>二—または コリ前—</p>
---	--	---	---	-------------------------------------	------------------	--------------------------	---------------	--	---	---	--

大齋第二主日				大齋第三主日				同			
月	火	水	木	金	土	月	火	土	月	火	水
出二	四一—三	五一—六二三	八	一〇一—〇	二二—一六	創 詩三六	出二	創 詩三六	出二	一五	一六—一七
ルカ二—二二	二三	三一—二三(前半)	四一—三〇	四三—一五六	五七—六二	ヨハ八—三	ルカ二—二二	ヨハ七—四—六六	ヨハ二—一五—二三	一三九 または 一五—二三	七三六—八—三二
出三	四二—五—四	六二—七	九	一〇二—一一	二二—元	創 詩一九七—三—一〇四	出三	創 詩一九七—三—一〇四	出三	一六—一七	一八
テサ前四	五	テサ後一	二	三	テモ前一—一七	ヨハ九	テサ前四	ヨハ七—七—八—二	テサ前 コリ前	一八—二	四

大齋第四主日			大齋第五主日		
土	金	木	土	金	木
一 九	二〇 三二—二二七	二二 一四	出 二二三—三二二 詩一四三、一四三	レビ 二	火 四
八 二七	九 一七	九 二八—五六	ヨハ 二一—三六	ルカ 二四	一 五
二〇 一—二二	二二 一—二二	二二 一—二二	レビ 一	出 四一—四三 詩一九一—四一七六	レビ 三
二 一	二 二	二 三	テモ 後一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 二	二 三	二 四	テモ 後二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 三	二 四	二 五	テモ 後三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 四	二 五	二 六	テモ 後四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 五	二 六	二 七	テモ 後五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 六	二 七	二 八	テモ 後六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 七	二 八	二 九	テモ 後七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 八	二 九	三〇	テモ 後八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
二 九	三〇	三一	テモ 後九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三一	三二	テモ 後十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三二	三三	テモ 後十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三三	三四	テモ 後十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三四	三五	テモ 後十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三五	三六	テモ 後十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三六	三七	テモ 後十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三七	三八	テモ 後十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三八	三九	テモ 後十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	三九	四〇	テモ 後十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四〇	四一	テモ 後十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四一	四二	テモ 後二十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四二	四三	テモ 後二十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四三	四四	テモ 後二十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四四	四五	テモ 後二十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四五	四六	テモ 後二十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四六	四七	テモ 後二十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四七	四八	テモ 後二十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四八	四九	テモ 後二十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	四九	五〇	テモ 後二十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五〇	五一	テモ 後二十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五一	五二	テモ 後三十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五二	五三	テモ 後三十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五三	五四	テモ 後三十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五四	五五	テモ 後三十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五五	五六	テモ 後三十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五六	五七	テモ 後三十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五七	五八	テモ 後三十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五八	五九	テモ 後三十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	五九	六〇	テモ 後三十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六〇	六一	テモ 後三十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六一	六二	テモ 後四十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六二	六三	テモ 後四十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六三	六四	テモ 後四十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六四	六五	テモ 後四十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六五	六六	テモ 後四十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六六	六七	テモ 後四十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六七	六八	テモ 後四十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六八	六九	テモ 後四十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	六九	七〇	テモ 後四十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七〇	七一	テモ 後四十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七一	七二	テモ 後五十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七二	七三	テモ 後五十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七三	七四	テモ 後五十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七四	七五	テモ 後五十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七五	七六	テモ 後五十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七六	七七	テモ 後五十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七七	七八	テモ 後五十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七八	七九	テモ 後五十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	七九	八〇	テモ 後五十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八〇	八一	テモ 後五十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八一	八二	テモ 後六十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八二	八三	テモ 後六十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八三	八四	テモ 後六十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八四	八五	テモ 後六十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八五	八六	テモ 後六十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八六	八七	テモ 後六十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八七	八八	テモ 後六十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八八	八九	テモ 後六十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	八九	九〇	テモ 後六十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九〇	九一	テモ 後六十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九一	九二	テモ 後七十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九二	九三	テモ 後七十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九三	九四	テモ 後七十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九四	九五	テモ 後七十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九五	九六	テモ 後七十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九六	九七	テモ 後七十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九七	九八	テモ 後七十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九八	九九	テモ 後七十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	九九	一〇〇	テモ 後七十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇〇	一〇一	テモ 後七十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇一	一〇二	テモ 後八十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇二	一〇三	テモ 後八十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇三	一〇四	テモ 後八十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇四	一〇五	テモ 後八十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇五	一〇六	テモ 後八十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇六	一〇七	テモ 後八十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇七	一〇八	テモ 後八十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇八	一〇九	テモ 後八十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一〇九	一一〇	テモ 後八十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一〇	一一一	テモ 後八十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一一	一一二	テモ 後九十	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一二	一一三	テモ 後九十一	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一三	一一四	テモ 後九十二	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一四	一一五	テモ 後九十三	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一五	一一六	テモ 後九十四	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一六	一一七	テモ 後九十五	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一七	一一八	テモ 後九十六	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一八	一一九	テモ 後九十七	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一一九	一二〇	テモ 後九十八	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一二〇	一二一	テモ 後九十九	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一
三〇	一二一	一二二	テモ 後一百	ヨハ 二一—四五	ヘブ 一

復活前主日					土	金	木	水
月	火	水	木	金	土	土	金	木
哀詩七一 イザ二一 詩六二	民二四九 詩九四	出二四一 詩四一	創三一 詩三、四、五	ヨブ二四 詩二六、二七	ゼカ九一 詩九七、一〇〇	二六 一〇	二五 一三	二四 一三
ヨハ二四	二五	二六	二七	二八	マタ二六	二六 一七	二五 一四	二四 一三
哀詩三一 詩二五、二六	ホセ二四 詩五一	レビ二六 詩七四	出二六 詩一四、一五	イザ五三 詩六、八	出六 詩三	二六 一〇	二五 一三	二四 一三
ヘブ九一 一五	ロマ五 一	ペテ前 一	ヨハ六 二七、二八	ペテ前 二	ルカ九 二八	二一 三六	二〇 一三	一九 一三
ロマ六 三						六	四 一五	三



復活 日	出 詩三、 五七、 一一四	黙 一四一八	イザ 五十一、 一六六、 一一八	ヨハ 二〇、 一一五
復活後月曜日	出 詩三〇 一五、 一一八	マタ 二八、 一一五	雅 二一〇 詩一〇三	コリ 前二五、 一三
同 火曜日	イザ 二五、 一八九 詩九	使 三二、 二六六	イザ 二六、 一一九 詩二五	ビリ 三、 七
水	民 六	ルカ 九、 二六、 二〇八	民 九、 一五、 一〇、 一〇	ヘブ 七
木	一〇、 一一	二〇、 九	一一、 一三	八
金	二二、 二四	二二	二二	九
土	三三、 三七	三三、 一三四	二四、 一三五	一〇、 一八
復活後第一主日	イザ 五三、 一一三 詩三、 二五	ヨハ 二〇、 二六	イザ 五四、 一七 詩二六、 一七	ヨハ 二二
月	民 一四、 二六	ルカ 三三、 三五、 六五	民 一六、 一三三	ヘブ 一〇、 一九
火	一六、 二五	三六、 一三三、 二五	一七、 一八、 七	二一、 一六
水	二〇、 一一、 二二	二五、 二六、 四九	二〇、 二二、 二九	二二、 一七
木	二二、 一〇	二五、 五〇、 二四、 二二	二二、 一三	三

[illegible]

復活後第四主日		土	金	木	水	火	月
民 詩二三、一三五	二六	二八	二八	二六	二六	二六	申 三〇
	二八 一四	二八 一四	二八 一四	二六	二六	二六	申 三〇
復活後第五主日		土	金	木	水	火	月
民 詩二三、一三五	二六	二八	二八	二六	二六	二六	申 三〇
	二八 一四	二八 一四	二八 一四	二六	二六	二六	申 三〇
昇天前祈祷日		土	金	木	水	火	月
申 詩一〇七	二六	二八	二八	二六	二六	二六	申 三〇
	二八 一四	二八 一四	二八 一四	二六	二六	二六	申 三〇

同				同				昇天後主日			
火				水				月			
申 詩二八 一四				ヨエ二二 七 詩一四				ヨシ三二 二			
五一一				ヨハ六三 一四〇				ヨハ一五			
列上八二三 四三 詩六五、六七				ハバ三 または 三章二九 一七 詩九				ヨシ二 三			
ヤコ五 一八				ヘブ一 二三				マタ三 一四一六			
昇天日				木				火			
列下二 一四 詩八、九				金				土			
エペ四 一六				ヨハ二三				八二三			
ルカ二 四四				二四				一八二 一五			
マタ一 一八				申 詩九、一〇 八				ヨシ三 二			
ニ				ヨハ二三 一四〇				二六			
同				木				水			
ハバ三 または 三章二九 一七 詩九				金				土			
ヘブ一 二三				六二五				五			
ヤコ五 一八				一八二 一七				一八二 一七			
同				土				月			
列上八二三 四三 詩六五、六七				一八二 一七				ヨシ三 二			
ヤコ五 一八				一八二 一七				二六			
同				一八二 一七				四一七 一五一六			
同				一八二 一七				五二七			
同				一八二 一七				六			
同				一八二 一七				七			

聖靈降臨日	ヨエ二二六 詩四八、六八	ロマ八五七	申一六九二三 詩四六、二三 イザ一、一九 詩一四、一四五	コリ前二 ガラ五、一六、一五
聖靈降臨後 月曜	エゼ二二四 詩三九	使八四一七	エゼ三六、三三、三六 ソロ一、一七 詩一〇五	コリ前二、一一三
同 火曜日	三七、一四 詩一四八	一九一七	エレ三一、二七、三四 ソロ七、二五、八一 詩八、一一〇	ヨハ卷四、一一三
夏期聖職 按手節 水	士一〇九、一一六 またはイザ六一、一八 詩三三	ヨハ二〇 または マタ二〇、三四	士一一、元、二三 またはエレ四二、一一二 詩八四	マタ八、または コリ前九、一六
木	士二三	ヨハ二二	士一四	マタ九
同 金	一五一、一六三 またはイザ六一 詩二五	使一、または ルカ二、一二	エゼ一六、または 一、一六 詩四、一三四	コリ後四 一〇、一三三、または
同 土	ルツ一、または 民八一、一九 詩九	使二、一四三、または マタ二六、二三	ルツ二、または 民六	マタ二〇、三四、一、または コリ後五、一四、一六、一〇
三位一体主日	イザ六一、一八 詩二九、三三	ヨハ一四、一七	出三四、一、一〇 詩九、九七、一五〇	マタ二八、一六

第三一位後						第三一位後					
月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土
ルツ三	サム前一	二二三	四一—五五	七	九	ヨシ一 詩一、五、五	サム前二	二二三	四一—五五	七	九
使 二四三—五	四	五一—三	五三—六	七一—四	七五—八三	使 一	八四	九一—三	九三—一〇二三	一〇二四	一一
ルツ四	サム前二—一	三	五六—六	八	一〇	ヨシ五—三—六—二 詩二、四、八	サム前二	一四—一三	一五	一七一—〇	一七五—一八六
二二—一三七	二六六—二二三	二三四	一四—一二	一四—一五	一五—一六	使 二—四—三	マタ一六 二—一七	一八一—一九二	一九三—一〇六	一〇七—一一三	一二三—一三四



三位一体後 第四主日				三位一体後 第五主日			
土	月	火	水	土	月	火	水
サム前二 詩一九	サム後二四	列上一三	三	サム前七一五四 詩二四、二五	列上一二六	二五—二三 一〇	二四—二〇 一〇
使 三一—二七	二三	二四	二五	使 一七—一六	ヤコ一	二	三一—二四 一〇
サム前二五—一三 詩二〇—二三	列上一五—三	歴上二九—一〇	列上四二—一五	サム前一〇—一七 詩二六、二七	列上三一—二四	二二—二	歴下二三 二四
使 一五—一九	マル三二〇—四二〇 四二—五二〇 五二—六三	六—四	七	使 二〇—二五 一〇—一五	マル九二—三三 九三—一〇一六	一〇一七—四五	一〇四六—一一九





第三一位後 第九主日		第三一位後 第八主日		第三一位後 第七主日		第三一位後 第六主日		第三一位後 第五主日		第三一位後 第四主日		第三一位後 第三主日		第三一位後 第二主日		第三一位後 第一主日	
火	月	土	金	木	水	火	月	土	金	木	水	火	月	土	金	木	水
列下三 一—二 三	列上二 七 詩四	イサ 三六 九—二〇	列下九	歴下三〇 一—三一 一	一八—二二	列下七 一—三 三	歴下二六	列上二〇 一—三 三	三	一〇—一七	二—一〇	二	ヨハ 参全	ユダ 全	ヨハ 参全	ヨハ 参全	ヨハ 参全
九	ロマ 八—三	ガラ 一	七—八 二	六	五	二—三 二八	ロマ 一	コリ 後四—五 二〇	二五	一〇—一八	歴下二 四	列上三 三 詩五—四 一	歴下二七 一—二八 一五	列下七 二—四	歴下二九 一—四 四	列下八 一—三	二〇
二五	列下二 四—五 〇	列上二 八 詩四—四 七	歴下三	二〇	七—二 三	五—七 二一	ルカ 四—五 一六	コリ 後六—七 一	四—一〇	二三	三—一三 (前半)	二五	二五	二五	二五	二五	二五
九 二八—五 六	ルカ 九—一七	ガラ 三—一三	八—三	七—八 二二	七—二 三	六—二 七	五—七 二一	四—一〇	三—一三 (前半)	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五

日課・詩篇表

四〇

三位一体後 第十主日				三位一体後 第十主日			
水	木	金	土	水	木	金	土
エズーおよび三	五	八一五	一〇一―九	エズーおよび三	二一三	二二―三	一四
列上三 詩四八、四九	ネヘ二	五	七三―八	エヘ二	二二―三	二二―三	二四
月	火	水	木	月	火	水	木
ネヘ二	五	七三―八	一三―五	エヘ二	二六	二二―三	二二―三
列下五 詩六、六二	エス二―五―三	五	五	エヘ二	二六	二二―三	二二―三
第三十一主日	第三十一主日	第三十一主日	第三十一主日	第三十一主日	第三十一主日	第三十一主日	第三十一主日
エス七一―八八	エス七一―八八	エス七一―八八	エス七一―八八	エス七一―八八	エス七一―八八	エス七一―八八	エス七一―八八
エズ四	七	九	ネヘ一	エズ四	七	九	ネヘ一
列上三―一四〇 詩五四、五五	ネヘ四	六―七四	二四三―二四四	エヘ二	二六	二二―三	二二―三
エヘ二	二六	二二―三	二二―三	エヘ二	二六	二二―三	二二―三
ルカ二二三	二三	二四	二五	ルカ二二三	二三	二四	二五
列下六―八二三 詩六三、六四	ヨブ一	六	六	ヨブ一	六	六	六
エヘ二	二六	二七	二七	エヘ二	二六	二七	二七
ルカ二二三	二三	二四	二五	ルカ二二三	二三	二四	二五
エヘ二	二六	二七	二七	エヘ二	二六	二七	二七
ルカ二二三	二三	二四	二五	ルカ二二三	二三	二四	二五
列下六―八二三 詩六三、六四	ヨブ一	六	六	ヨブ一	六	六	六
エヘ二	二六	二七	二七	エヘ二	二六	二七	二七
ルカ二二三	二三	二四	二五	ルカ二二三	二三	二四	二五
エヘ二	二六	二七	二七	エヘ二	二六	二七	二七
ルカ二二三	二三	二四	二五	ルカ二二三	二三	二四	二五

第三十一位主日	列下三詩八、六	テサ前四一三—五	列下三詩八、五	テモ前一—七
土	四二	四一—五〇	四二	ヨハ一—二八
金	三八—三九 九	二一—三	四〇	二四—三
木	三三—三六 一八	コリ後一	三八—三六	二五〇—二四二
水	二九—三〇 二六	一六	三一—三	二六—二四九
火	二五—二六	二五	二七—二六	二六六—二五二
月	ヨブ三一—二八	コリ前四	ヨブ三一—二四	ルカ三—三五—六五
第十二位主日	列下八詩七、七	コロ一—二三	列下九詩七	コロ三—一七
土	一九	二二—二三	二二	三三—三四
金	一三—一四	二二—二二	一六—一七	二二
木	一〇—一一	一〇—一一	二二—二三	二〇九
水	六—七	九	八一—九	一九二八—二〇八
火	ヨブ二—三	八	四—五	一八—一九二七

月		火	水	金	土	日	月
箴一		三	五	八	一〇	一二〇—一三	箴一
コリ後五二—七一		七二—八二五	八二六—九	一〇—一一五	一一六—一二三	一二四—三	箴二
民二七—一五		詩二六	列上二九—一八	詩二二	ミカ三—五	詩九、一〇〇	箴二
ヨハ一二九		二	五—一二	五—三	四—四三	四四—五—一八	箴二
テモ前六六		テモ後二—一五	ヘブ二三—七二	テト一	ヨハ五—一九	六—四〇	箴二
テモ後一—三四		ガラ一	ニ	ニ	ニ	ニ	箴二
申一八—一五		詩二四	列上二—一六	詩四八	列下二—一三	詩二—三	箴二
按秋期聖職 九月十四日 後の水・金・土曜日		土	金	土	日	月	火
第三位一体後		第十四主日	第十四主日	第十四主日	第十四主日	第十四主日	第十四主日

月	第三十六位主日						第十五位主日	月	第三十六位主日				
		土	金	木	水	火				土	金	木	水
エレ	エズー一八および三詩九七、九八	二	九	七	五	三	伝一	ダニ六、詩八六、八七	六	二九—三〇	二五—二六	二五	二
ピリ	ヤコ	ピリ	五三—六	五一—二	四	二—三	エペ—二一〇	ヘブ	六	五	四	三	三
エレ二—一九	ネヘ—二一八詩九—一〇一	三	一〇	八	六	四	伝二	ダニ七—一七詩九、一〇一	三—一〇	二七—三三	二四	三—一六	六—一四
ヨハ三	ヤコニ	三—一〇	二—四七—二一九	二—一四六	一〇	九	ヨハ八—三	ヘブ九—二	八—一〇	七—一四	七一—四	六—一四	六—一四

第三十八位 主日 後	土	金	木	水	火	月	第三十七位 主日 後	土	金	木	水	火
箴 詩三 一四、一五	三〇	二八	二四 一—二五 一四	二二 一—二三 二一	一八 一—一七	エレ六二四	ヨブ 詩一〇一	二五 一—二三	二二	九	七	五
ペテ後三三	五	四	三	二	テサ前 一	コロ三 一八—四	ペテ前 一—二二	二二 一〇—三 一七	一四 一—二 一九	コロ一 一—三	四	五
箴 詩一〇六	三一 一—二	二九 一—一〇	二六	二三 一—二 三八	一九	エレ七 一—一八	箴 詩一〇五	二五	二二	一〇	八 四	六 一—二
ヨハ壹一 一—二七	二一 一—四二	使 一	二	一〇	一九 二四	ヨハ一八 二六—九 一三	ペテ前 四二—五 一一	一八 一—一七	一七	一六	一五	一四

第三十一位一體後						第十九位主日					
月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土
エレ三三	三六	三九	四二	四四	五〇	哀一一四	三三	五	エゼ二一—三二	六	八
テサ後一	二	三	テモ前一一七	一八—二	三	テモ前四	五	六	テモ後一	二	三
エレ三五	三八	四〇	四二	四四	五一	哀三一—三三	四	エゼ一	三二	七	九
使二四三—五	四	五一—三二	五三—六	七一—三四	七三—八三	使八四	九一—三二	九三—一〇三	一〇二—四	二	三
ユダ全						エレ一七—一四—一八—一七					
詩二八						エレ一七—一四—一八—一七					
詩二六、一七						ヨハ書三一—四—二					



## 四六

第三位 主日	月	火	水	木	金	土	第三位 主日	月	火	水	木	金	土	第三位 主日
エゼ 詩二〇—二三	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 詩二〇—二三	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 詩二〇—二三
マル 一—二六	テモ後四	テト 一	二	三	ピレ全	ヘブ 一	マル 一—二六	テモ後四	テト 一	二	三	ピレ全	ヘブ 一	マル 一—二六
エゼ 詩二三—二五	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 詩二三—二五	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 二二—二六	エゼ 詩二三—二五
マル 二—二二	使 一五—二五	一四	一五	一六	一七	一八	マル 二—二二	使 一五—二五	一四	一五	一六	一七	一八	マル 二—二二
マル 二—二二	使 一五—二五	一四	一五	一六	一七	一八	マル 二—二二	使 一五—二五	一四	一五	一六	一七	一八	マル 二—二二

三位一体後第二十三主日	金	四一七	七	四七一	二七
三位一体後第二十二主日	土	ダニ	八	ダニ一三	三
三位一体後第二十一主日	日	エゼ八 詩三六—二六	マル九二—三	エゼ五 詩四〇、一四	マル九三—一〇六
月	月	ダニ二四	ヘブ九	ダニ三	使三
火	火	四一八	一〇	四一九	二四
水	水	五	一一六	九	二五
木	木	七一四	一一七	七五	二六
金	金	九一九	三	九二〇	二七
七	七	一〇	三	三	二八

三位一体後第二十三主日週以下の日課は顕現後第三主日週以下の日課を次のように用いる。

三位一体後第二十三主日週までは顕現後第六主日週の日課

三位一体後第二十四主日週までは顕現後第五、六主日週の日課

三位一体後第二十五主日週までは顕現後第四、五、六主日週の日課

三位一体後第二十六主日週までは顕現後第三、四、五、六主日週の日課

三位一体後第二十三主日の詩篇は、早禱一二九—一三一 晩禱一四四、一四五  
 三位一体後第二十四主日の詩篇は、早禱七五、七六 晩禱七八  
 三位一体後第二十五主日詩篇は、早禱三七 晩禱一〇七  
 三位一体後第二十六日の詩篇は、早禱一八 早晩八九

降臨節前主日		ハガニ一九 詩一四八—一五〇		ヘブ二三—一三三	
月	ソロ一七	ヨハ二三—五〇	ソロ五—一六	マタ二三—一三三	二四—五〇
火	六一—二	二四	六二—二二	二〇—一六	二一—二六
水	七七一四	二五	七一五—八一	二〇—一六	二一—二六
木	九一—四 および 九一—八	二六—一五	一〇一—四 および 一五—二二	二二—四四	二三—四四
金	一一三—二二	二六—一六	一二二—一九	二二—四四	二三—四四
土	二三—一九	二七	ゼバ—二四	ルカ—七二—三七	七三—三七

第二表 固定祝日日課・詩篇 (降誕日から顕現日までは第一表に掲げる)

公会暦	早		晩	
	第一日課・詩篇	第二日課	第一日課・詩篇	第二日課
使徒 アンデレ 日徒	ゼカハ二〇 詩三四	ヨハ一五四二 (前 夕)	イザ四九一六 または ベン二四二〇 詩九七 エゼ四七 詩六、一〇〇	コリ前一八三二 ヨハ三二二六
使徒 聖トマス 日	ヨブ四一六 詩三七	ヨハ二一七 (前 夕)	サム後二五七二 詩三三 イザ四三 詩二二、二三	二一六 ペテ前一五
使徒 パウロ改心 日徒	イザ四九一三 詩六	ガラ二二 (前 夕)	エレ一四一六 詩一、一九 イザ四一 詩七、一八	使二六二三
被 献 日	サム前一三 詩八四	ヘブ一〇一〇 (前 夕)	出二二一六 詩二三、二三 ハガ二一九 詩四八、一五四	ガラ四一七 ロマ三二五

使徒 マツテヤ日	イザ三 詩三三 サム前二一七 詩一五、二四	ヨハ卷二二五
処女 マリヤ蒙告日	イザ三 詩八 ヘブ二五	ロマ五二二 マタ一八、二三
福音記者 マルコ日	イザ六六 ベニ五 詩一〇二五 使一五	使三二五 テモ後四一二
使徒 コリント日	ヨブ三三 詩三九 ヨハ六一四	ヨハ一四三 一七一八
使徒 バルナバ日	ヨブ二九 詩三四 使九二六	使四三七 一四八八
施洗者 ヨハネ誕生	マラ三 詩一〇五	ルカ一五二三

使徒聖マタイ日	福音記者	使徒聖ペテロ・パウロ日	使徒聖ヤコブ日	変容貌日	使徒聖バルトロマイ日
列上二一七 ベニ 詩八、九	マタ三	エゼ三四一四 詩三二四三、 六七	エレ四 詩五	出三四二 詩二七	申一八 ベニ 詩九
（前タ）	（前タ）	（前タ）	（前タ）	（前タ）	（前タ）
マラ四 詩二四、九六	エゼ二一七 詩二八	エゼ四一 詩三、二二	列下一一六 詩二、一三	出二四二 詩九、九	列上一九五 詩六、一七
マタ二一九	使四八一〇	ヨハ二一五二	マル五二一四三	ルカ九四六五	テモ前六六一

諸 聖 徒 日	使徒 聖 ユ ダ シ モン 日・	聖 福 音 カ 記 日 者	聖 ミ カ エ ル 及 び 天 使 日	
ダニ二二一三 または ソロ五一一六 詩一、一五	イザ二八九一六 または ベン二二八 詩二八	イザ六一一六 詩七、九六	列下六八七セ 詩八、九一	箴 三一―三 詩一九一―六
黙 一九四一六	ルカ六二二三	使 一六六―八	使 三二―二	マタ一九一六
(前 夕)	(前 夕)	(前 夕)	(前 夕)	
ダニ七九一八 または ソロ五一一九 詩九七、一二三	エレ二三三―八 詩六、二三	イザ五五 または ベン三三 詩一四七	イザ五五―一〇 詩二〇三	歴上二九一九七 詩一九、二二
マラ三三六―四三 または ベン四四一―五 詩一四八、一五〇	イザ四二 詩六	イザ五五 または ベン三三 詩一四七	ダニ二二一三 詩三四	エゼ一〇八 詩一四八、一五〇
黙 二二三―三五	ヨハ二四一五	エペ二二	ルカ一一四	黙 五
ヘブ二三―二三		コロ四二	黙 一〇	ルカ一八九七

# 第三表 記念日及び感謝日日課・詩篇

この表の日課・詩篇にかえて平日のものを用いてもよい。

公会 暦	早		晩	
	第一日課・詩篇	第二日課	第一日課・詩篇	第二日課
日本聖公会 組織成立記念日	イザ四三・一二三 詩六、七二	コロ一・一二三	イザ四九・一二三 詩四、二二、三三	エペ三
聖堂記念日	列上八三・一三〇 詩一三三	ヨハ一〇三・一三〇	ハガ二・一九 またハ 創二六・二〇 詩四、八四、二三	コリ前三・九一七 またハ ヘブ一〇・一九二五
收穫感謝日	申八 またハ 申二六・一一二 詩五、一四七	使一四・一八 またハ テサ前五・二三三	申二・一八三 またハ イザ二 詩一〇、一五	ピリ四・四七 またハ テモ前六・六一九



五四

毎月この順序に従って用いる。  
三十一日には三十日のものをくり返す。

一 日	一 一 五	六 一 八	一 六 日	早 禱	八 二 一 八 五	晚 禱
二 日	九 一 一	一 二 一 一 四	一 七 日	七 九 一 八 一	八 九	
三 日	一 五 一 一 七	一 八	一 八 日	八 六 一 八 八	九 三 、 九 四	
四 日	一 九 一 二 一	二 二 、 二 三	一 九 日	九 〇 一 九 二	九 八 一 一 〇 一	
五 日	二 四 一 二 六	二 七 一 二 九	二 〇 日	九 五 一 九 七	一 〇 四	
六 日	三 〇 、 三 一	三 二 一 三 四	二 一 日	一 〇 二 、 一 〇 三	一 〇 六	
七 日	三 五 、 三 六	三 七	二 二 日	一 〇 五	一 〇 八 、 一 〇 九	
八 日	三 八 一 四 〇	四 一 一 四 三	二 三 日	一 〇 七	一 一 四 、 一 一 五	
九 日	四 四 一 四 六	四 七 一 四 九	二 四 日	一 一 〇 一 一 三	一 一 九 一 一 三	
一 〇 日	五 〇 一 五 二	五 三 一 五 五	二 五 日	一 一 六 一 一 八	一 一 九 、 一 二 〇	
一 一 日	五 六 一 五 八	五 九 一 六 一	二 六 日	一 一 九 、 一 二 〇	一 一 九 、 一 二 〇	
一 二 日	六 二 一 六 四	六 五 一 六 七	二 七 日	一 二 〇 一 一 二 五	一 二 六 一 一 三 一	
一 三 日	六 八	六 九 、 七 〇	二 八 日	一 三 二 一 一 三 五	一 三 六 一 一 三 八	
一 四 日	七 一 、 七 二	七 三 、 七 四	二 九 日	一 三 九 、 一 四 〇	一 四 一 一 四 三	
一 五 日	七 五 一 七 七	七 八	三 〇 日	一 四 四 一 一 四 六	一 四 七 一 一 五 〇	

第五表 特選詩篇

特別な礼拝、集会などに用いる。

一	造	り	主	八、一九。	三三。	六五、一一一。	一〇四。	一四五。	一四七。
二	贖	い	主	三三。	一〇三。	一一一、一二六。	一一三、一二四。	一三〇、一三八。	
三	さ	ば	き	主	一、一一。	七。	四六、九七。	五〇。	六二、八二。
				九〇。	九六。	九八。		七五、七六。	
四	神	の	栄	光	一八・一二〇。	二九、九九。	三六・五十三、四六。	一四八、一五〇。	
五	王	な	る	神	二四、九三。	四六、四七。	七二。	八九・一九。	九六、九七。
				九九。	一一二、一四六。	一四五。		九八、	
六	神	の	知	恵	三三。	一〇四。	一一一、一三九。	一四五。	一四七。
七	神	の	律	法	一九。	五〇。	六二、一一一。	一一九。	一四七。
八	神	の	摂	理	二三、一二一。	三三。	三四。	三七・五、一二四。	八九・一九。
				一三九。	一四五。	一四六。	一四七。		
九	神	の	慈	愛	二三、一〇〇。	三二、一三〇。	五七、六一。	六二、六三。	七三。
				七七。	八五。	八六。	一〇三。	一一八。	一四五。
一〇	受	肉	降	世	二、一一〇。	八、一一三。	八五、一一一。	八九・一二〇。	一〇二・二五。
				一三二。					

一一 受 雄 二二。三一。三四。三五。三七。四〇・一一六。四二。五四、  
一三〇。六九・一二。二、三〇—三七。八八。一一六。

一二 公 会 四六、一一一。四八。八四。一二一、一三三。一四七。

一三 礼 拜 五。二六、四三。六三、六五。六六。六七、一二二。八四、  
一三八。九六、一〇〇。一〇二・五。一一六。

一四 感 謝 三〇、六七。六五。九二、一〇〇。九八、一一一。一〇三。一〇七。  
一六。一三四、一三八。一四五。一四七。一四八、一五〇。

一五 祈 願 五。一七。二〇、二八。三一。五四、六一。八四。八六。  
一四一・一四、一四二。

一六 信 頼 二七。三一。五七、一四六。六二、六三。七一。七三。七七。  
八四。九一。一一八。一二一、一二四、一二五。一二三、一四三。

一七 避 け 所 なる 神 四、二〇。一七。三七。四六。四九。五四。六〇。六一。  
七一。九一。一〇三。一二一、一四六。

一八 神 の 指 導 二五。四三、八五。八〇。一一一、一二二。

一九 悩 み の 時 三、一一。一二、一三。一八・一五。二〇、四六。三〇、一四六。  
四〇。四九。五七、八五。六二、六三。八〇。八六。九〇。  
一〇七・一二六。一一八。一四四。

二〇 正 義 一、一五。一一、一二、一八・三一。一九。二六。三四。四〇。  
一六。九二。一一一、一一二。

二一	平	和	二九、四六。	七六。	八五。	九八、一〇〇。	一二四、一二五、一二六。
二二	は	かなき世	三九。	四九。	九〇。	一〇二、一五。	
二三	永生の希望		一六、一四六。	四二。	三〇、四九、一二一。	六六。	七三。
			一一六。	一三九。			一〇三。
二四	朝		三、二〇。	五、六三。	九〇。	一四三。	
二五	夕		四、三一・一七、九一、一三四。	一三、一二一。	一六、一七。	七七。	
二六	痛	悔	六、三二、三八、五一、一〇二、一三〇、一四三。				
二七	陪餐準備		二三、三六、 <del>五</del> 三。	二五。	二六、四三。	四一。	六三。
			八五。	八六。	一三〇、一三三。	一三九。	八四、一二二。
二八	陪餐後感謝		八、一五。	一八、 <del>二</del> 〇。	一九。	二七。	二九、三〇。
			一一〇。	一〇三。	一一八。	一四五。	一五〇。
							三四。
							一〇〇、

# 早禱序式

主日には早禱につづいて聖餐式を行なわないとき、この序式を用いる。他の日にも用いてよい。

司式者は次の聖語の一節または数節を朗読する。

主はその聖なる宮にまします。全地その御前に黙すべし

ハバクク書二章二〇節

日のいずる所より日の入る所までの国々のうちに、わが名は大いならん。又いずこにても、香と清きささげ物をわが名にささげん。そはわが名、国々のうちに大いなるべければなりと万軍の主言いたもう

マラキ書一章一一節

主よ、わが岩よ、わが贖い主よ、わが口の言葉、わが心の思いを、御心になわしめたまえ

詩一九篇一四節

もし悪人そのなせる悪を離れて、律法と正しきを行なわば、その命を救い生かすべし

エゼキエル書一八章二七節

我はわがとがを知る。わが罪は常にわが前にあり

詩五一篇三節

願わくは御顔をわが罪よりそむけ、わがすべての不義を消したまえ

詩五一篇九節

神かみの求めたもう供そなえ物は碎くだけたる魂たましいなり。神かみよ、なんじは碎くだけたる悔くいし心こころを輕かろしめ  
たもうまじ

詩五一篇一七節

なんじら衣えを裂さかでその心こころを裂さき、なんじらの神かみ・主しゅに帰かえるべし。主しゅは恵めぐみあり、あ  
われみあり、怒いかることおそく、いつくしみ大おほいにして、災わざいをなすを悔くいたもうなり

ヨエル書二章一三節

我われら主しゅにそむき、我われらの神かみ・主しゅの言葉ことばに従したがわず、我われらの前まへに設もうけたまいし律法おきての道みちを  
歩あゆまざりしが、あわれみと赦ゆるしは主しゅたる我われらの神かみにあり  
主しゅよ、公義こうぎをもて我われを懲こらしたまえ。怒いかりたもうなかれ、恐おそらくは我われほろびん

ダニエル書九章九一〇節

エレミヤ記一〇章二四節

なんじら悔くい改あらためよ。天国てんこくは近ちかづきたり

マタイ伝三章二節

立ちてわが父ちちにゆきて言いわん、「父ちちよ、われは天てんに對たいし、またなんじの前まへに罪つみを犯おかし  
たり。今いまよりなんじの子ことなえらるるに、ふさわしからず」と

ルカ伝一五章一八、一九節

主しゅよ、なんじのしもべのさばきに、かわりたもうなかれ。そは生いける者ものひとりだ

に、御前に義とせらるるはなし

詩一四三篇二節

もし罪なしと言わば、これ、みずから欺けるにて、まこと我らのうちになし。もしおのれの罪を言いあらわさば、神はまことにして正しければ、我らの罪をゆるし、すべての不義より我らを清めたまわん

ヨハネ第一書一八、九節

司式者は次の勧告をする。かつこの中は省いてもよい。

勧 告

愛する兄弟よ、「聖書にしばしば、しるせるごとく、天の父・全能の神は罪を懺悔すべきことを勧めたもう。我ら多くの罪を犯したれば、包みかくすことなく、まことに悔やみ、謙そんなる心にてこれを言いあらわし、父の深きあわれみによりて赦しを求めむべし。これはいつにてもなすべきことなり。しかれども相ともに集まりて、父の御手より受けし大いなる恵みを謝し、御名をほめ、御言葉をきき、からだと魂とに必要なるものを願う時には、格別になすべきことなり。ゆえに」恵みの御座にむかい、きよき心と静かなる声をもって懺悔し奉るべし

一同ひざまずいて次の懺悔をする。

懺悔

あわれみ深き全能の父よ、我らは迷える羊のごとく父の道を離れ、多くおのれの工夫と欲に従い、主の聖なる律法をおかし、なすべき事をなさず、なすべからざる事をなし、全きところあることなし。しかれども父よ、主イエス・キリストをもつて世の人に約したまえるごとく、罪に悩める者をあわれみたまえ。とがを懺悔するものを赦したまえ。悔やめる者をかえしたまえ。あわれみふかき父よ、願わくは今よりのち神を敬い、正しきを行ない、身を修めて、御名の栄光をあらわすことを、イエス・キリストのいさおによりて得させたまえ アーメン

特に示したときのほか、一同でアーメンと言う。但し、アーメンの前に「。の、くぎり符号があるとき、司式者は言わない。以下これにならう。司祭は立つて次のように言う。

赦罪

我らの主イエス・キリストの父・全能の神は、罪びとの死ぬることを好まず、惡より歸りて生くることを望み、又その仕えびとに權威をあたえて、主の民に罪の赦しを告ぐることを命じたまえり。神は、まことに悔い改めて福音を信ずる者をことごとく赦



したもう。願ねがわくはあわれみ深ふかき全ぜん能のうの神かみ、なんじらの罪つみを赦ゆるし、恵めぐみと力ちからを与あたえ、  
悔くい改あらためにかのう新あらたなる生い涯ぎを送おくらしめたまわんことを。アーメン

早さう

禱さう

(毎朝の祈り)

一同ひざまずき、準備の黙禱の後に次の唱和を用いる。

司式者ししきしゃ

主よ、我らの口を開きたまえ

会衆かいしゅう

我ら主の誉れをあらわすべし

司式者

神よ、すみやかに我らを救いたまえ

会衆

主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

ここで一同立つ。

司式者

父と子と聖霊に栄光あれ

会衆

始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり アーメン

司式者

なんじら主をほめまつれ

会衆

主の御名をほめまつるべし

ここで次の詩を歌いまたは唱える。降誕節、顕現日とその後の七日間、復活節、昇天節、聖霊降臨節、三位一体主日、その他の祝日には第八節以下を省いてもよい。復活日とその後の六日間、この詩にかえて復活の頌(二六八頁)を用いる。

詩九十五篇

一 いざ我ら主にむかいてうたい＝ 救いの岩に向かいて喜ばしき声をあげん  
二 我ら感謝をもてその御前にゆき＝ 主に向かい歌をもて喜ばしき声をあげん  
三 主は大いなる神なり＝ もろもろの神にまされる大いなる王なり  
四 地の深き所みなその手にあり＝ 山の頂もまた神のものなり  
五 海は神のもの、その造りたもうところなり＝ かわける地もまたその手にてつく  
りたまえり

六 いざ我ら拝みひれ伏し＝ 我らを造れる主の御前に、ひざまずくべし  
七 主は我らの神なり＝ 我らはその牧の民、その手のひつじなり

八 きようなんじら御声をきけよかし＝ なんじら荒れ野にて神を試み、かつ怒らし  
し日のごとく、心をかたくなにするなかれ  
九 その時なんじらの親たち我をこころみ＝ 我をためし、わがわざをみたり  
一〇 我その世のために憂いて、四十年を経たり＝ われ言えり「彼らは心あやまれる

民、わが道を知らざりき」

二 このゆえに我いきどおりて誓えり＝「彼らはわが休みに入るべからず」と

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩 篇

ここで、定められた詩篇を歌いまたは唱える。但し詩九十五篇は重ねて用いない。  
一篇終わるごとに栄光の頌を用いる。

第一日課

日課を朗読する前に、「――(書)第一章一節より」と言い、読み終われば、「第一日課終わる」と言う。第二日課のときもこれにならう。第一日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。平日には万物の頌を用いてもよい。但し降臨節、大斎前節、大斎節及び聖職按手節(聖霊降臨節を除く)には賛美の頌にかえて、万物の頌を用いる。

賛美の頌

一 我れ神をほめまつり＝ 神を主なりと信認す

二 全地はとこしえの父を＝ あがめたてまつる

三 御使いと天のうちの、ちからあるもの＝ みな主にむかいて歌い

- 四 ケルビムとセラビム＝ 絶え間なく歌いていわく
- 五 聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな＝ 万軍の神なる主
- 六 主の栄光あるみいつ＝ 天地に満つと
- 七 栄光ある使徒のくみ＝ みな主をほめまつる
- 八 誉れある預言者のむれ＝ みな主をほめまつる
- 九 白き衣の殉教者のたい＝ みな主をほめまつる
- 一〇 天下の聖公会＝ みな主を信認す
- 一一 そは、はかり無き＝ みいつある父
- 一二 まことなるひとりの御子＝ なぐさめ主なる聖霊なり
- 一三 キリストよ＝ 主は栄光の王なり
- 一四 主は父の＝ とこしえにいます御子なり
- 一五 主は人を救わんため、人となりたもうとき＝ おとめの胎をも厭いたまわざりき
- 一六 主は死の苦しみに勝ちて＝ すべての信徒のため天国の門を開きたまいぬ
- 一七 主は父の栄光のうちにて＝ 神の右に座したまえり

六 またふたたびきたりて＝ 我らをさばきたもうことを信ず

元 ゆえに尊き血にて贖いたまいししもべを＝ 助けたまわんことを祈りたてまつる

三 我らを主の聖徒につらねて＝ 限りなき栄光を得させたまえ

二 主よ、主の民をすくい＝ 主のゆずりをさきわいたまえ

三 彼らをやしないで＝ とこしえに、いだきたすけたまえ

三 われら日々＝ 主をあがめまつる

四 我ら世々かぎりなく＝ 御名をほめまつる

五 主よ、きよう我らをまもりて＝ 罪を犯すことなからしめたまえ

六 主よ、我らをあわれみたまえ＝ 我らをあわれみたまえ

七 主よ、我ら主にたよれり＝ 我らをあわれみたまえ

八 主よ、我は主にたよれり＝ 我に限りなく恥なからしめたまえ

### 万物の頌

平日には三節から二十五節までを省いてもよい。

一 主の万物よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

二 主しゅの御使みつかいよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

三 もろもろの天てんよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

四 空そらの上うへの水みづよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

五 主しゅの万軍ばんぐんよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

六 日ひと月つきよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

七 空そらの星ほしよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

八 雨あめと露つゆよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

九 風かぜよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

一〇 火ひと熱あつよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

一一 冬ふゆと夏なつよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

一二 露つゆと霜しもよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

一三 あられと寒さむさよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

一四 氷こおりと雪ゆきよ、主しゅを祝いわい＝ 世々よようた歌うたいあがめまつれ

- 五 夜と昼よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 六 明かきと暗きよ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 七 いなずまと雲よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 八 地よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 九 山と岡よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一〇 地に生うるすべての草木よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一一 泉よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一二 海と川よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一三 鯨とすべて水に泳ぐものよ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一四 空を飛ぶ鳥よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一五 野獣と家畜よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一六 世の人よ、みな主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ  
 一七 イスラエルよ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ



六 主の祭司よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

元 主のしもべよ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

三 義人の魂よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

三 心きよく、へりくだる者よ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

三 ハナニヤとアザリヤとミサエルよ、主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

三 父と子と聖霊を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

三 天の天空にまします主を祝い＝ 世々歌いあがめまつれ

第二日課

第二日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。この頌の前にその日にふさわしい聖歌を用いることができる。ザカリヤの頌にかえて詩百篇を用いてもよい。

ザカリヤの頌

一 ほむべきかな、主イスラエルの神＝ その民をかえりみて、あがないをなし

二 我らのために救いの角を＝ そのしもベダビデの家に立てたまえり

三 これぞ、いにしえより＝ 聖預言者の口をもて言いたまいしごとく

四

我らをあだより、すべて我らを憎む者の手より＝ 取りいだしたもう救いなる

五

我らの先祖にあわれみをたれて＝ その聖なる契約をおぼし

六

我らの先祖アブラハムに＝ 立てたまひし御誓いを忘れずして

七

我らをあだの手より救い＝ 生涯主のみまえに

八

聖と義とをもて＝ おそれなく仕えしめたもうなり

九

幼な子よ、なんじはいと高き者の預言者となえられん＝ これ主の御前にさき

だち行きて、その道をそなえ

一〇

主の民に罪のゆるしによる救いを＝ 知らしむればなり

一一

これ我らの神の深きあわれみによるなり＝ このあわれみによりて、あしたの光

うえよりのぞみ

一二

暗きと死の陰とに座する者をてらし＝ 我らの足を平和の道にみちびかん

一三

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

ここで聖餐式にうつることができる。またその前に嘆願を用いてもよい。

一同使徒信經を歌いまたは唱える。

使徒信經

我<sup>われ</sup>は天地<sup>てんち</sup>の造<sup>つく</sup>り主<sup>ぬし</sup>・全能<sup>ぜんのう</sup>の父<sup>ちち</sup>なる神<sup>かみ</sup>を信<sup>しん</sup>ず

我<sup>われ</sup>はそのひとり子<sup>こ</sup>・我<sup>われ</sup>らの主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストを信<sup>しん</sup>ず。主<sup>しゅ</sup>は聖靈<sup>せいれい</sup>によりてやどり、おとめマリヤより生<sup>う</sup>まれ、ポンテオ・ピラトのとき苦<sup>くる</sup>しみを受<sup>う</sup>け、十字架<sup>じゅうじか</sup>につけられ、死<sup>し</sup>にて葬<sup>ほう</sup>むられ、よみにくだり、三日目<sup>かみ</sup>に死<sup>し</sup>にし者<sup>もの</sup>のうちよりよみがえり、天<sup>てん</sup>に昇<sup>のぼ</sup>り、全能<sup>ぜんのう</sup>の父<sup>ちち</sup>なる神<sup>かみ</sup>の右<sup>みぎ</sup>に座<sup>ざ</sup>したまえり。かしこよりきたりて生<sup>い</sup>ける人<sup>ひと</sup>と死<sup>し</sup>ねる人<sup>ひと</sup>をさばきたまわん

我<sup>われ</sup>は聖靈<sup>せいれい</sup>を信<sup>しん</sup>ず。また聖公会<sup>せいこうかい</sup>、聖徒<sup>せいと</sup>の交<sup>まじ</sup>わり、罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆる</sup>し、からだのよみがえり、限<sup>かぎ</sup>りなき命<sup>いのち</sup>を信<sup>しん</sup>ず アーメン

一同ひさますく。以下、恵みのための祈りまでを歌つてもよい。

司式者<sup>ししきしゃ</sup> 主<sup>しゅ</sup>よ、あわれみたまえ

会衆<sup>かいしゅう</sup> キリストよ、あわれみたまえ

司式者<sup>ししきしゃ</sup> 主<sup>しゅ</sup>よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いだしたまえ アーメン

ここで司式者は立つ。

司式者 主よ、あわれみを我らに現わしたまえ

会衆 主の救いをあたえたまえ

司式者 主よ、正しきをもつて主の仕えびとを装いたまえ

会衆 主の聖徒を喜ばせたまえ

司式者 主よ、主の民を救いたまえ

会衆 主のゆずりを祝したまえ

司式者 主よ、この世を安らかに治めたまえ

会衆 地のはてまで戦いをやめしめたまえ

司式者

神よ、我らの心をきよめたまえ

会衆

我らより聖霊を取りたもうなかれ

司式者

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

司式者

我ら祈るべし

特 禱

ここで当日の特禱を用い、つづいて次の二つの特禱を用いる。

平安のため

親しみを好み、平安をあたたかもう神よ、主を知るはこれ限りなき命なり、主に仕うるはこれ全き自由なり。願わくは常にしもべらを守り、すべて攻めきたる敵を防ぎ、いかなる強きあだをも恐れず、堅く主にたよりて安んずることを得させたまえ。大能の主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

恵みのため

天の父・かぎりなく生ける全能の神よ、我らを今朝まで安全に至らせたまえること

く、今日こんにちも大いなる力ちからをもつて守りたまえ。願ねがわくは罪つみに陥おとらず、危あやうきことにもあ  
わず、常つねに主しゅの導みちびきをこうむり正ただしき行せないをなすことを得えさせたまえ。主しゅイエス  
キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

ここで司式者はひざまずき、諸祈禱、嘆願、感謝を用いてもよい。  
終わりに次のように言う。

願ねがわくは主しゅイエスキリストの恵めぐみ、神かみのいつくしみ、聖せい霊れいのまじわり、我われらとともに  
限りなくあらんことを。アーメン

晩 禱 序 式

晩禱の前にこの序式を用いてもよい。  
司式者は次の聖語の一節または数節を朗読する。

主はその聖なる宮にましませり。全地その御前に黙すべし

ハバクク書二章二〇節

日のいずる所より日の入る所までの国々のうちに、わが名は大いならん。又いずこにても、香と清きささげ物をわが名にささげん。そはわが名、国々のうちに大いなるべ

ければなりと万軍の主言いたもう

マラキ書一章一一節

主よ、わが岩よ、わが贖い主よ、わが口の言葉、わが心の思いを、御心になわしめたまえ

詩一九篇一四節

もし悪人そのなせる悪を離れて、律法と正しきを行なわば、その命を救い生かすべし

エゼキエル書一八章二七節

我はわがとがを知る。わが罪は常にわが前にあり

詩五一篇三節

願わくは御顔をわが罪よりそむけ、わがすべての不義を消したまえ

詩五一篇九節

神かみの求めたもう供みなえ物は碎くだけたる魂たましいなり。神かみよ、なんじは碎くだけたる悔くいし心こころを輕かろしめ  
たもうまじ

詩五一篇一七節

なんじら衣えを裂さかずしてこころを裂さき、なんじらの神かみ・主しゅに歸かえるべし。主しゅは恵めぐみあ  
り、あわれみあり、怒いかることおそく、いつくしみ大おほいにして、災わざいをなすを悔くいたも  
うなり

ヨエル書二章一三節

我われら主しゅにそむき、我われらの神かみ・主しゅの言葉ことばに従したがわず、我われらの前まえに設もうけたまいし律法おきての道みちを  
歩あゆまざりしが、あわれみと赦ゆるしは主しゅたる我われらの神かみにあり  
主しゅよ、公義こうぎをもて我われを懲こらしたまえ。怒いかりたもうなかれ、恐おそらくは我われほろびん

ダニエル書九章九、一〇節

エレミヤ記一〇章二四節

なんじら悔くい改あらためよ。天国てんごくは近ちかづきたり

マタイ伝三章二節

立たちてわが父ちちにゆきて言いわん、「父ちちよ、われは天てんに對たいし、またなんじの前まえに罪つみを犯おかした  
り。今いまよりなんじの子ことなえらるるに、ふさわしからず」と ルカ伝一五章一八、一九節  
主しゅよ、なんじのしもべのさばきに、かかわりたもうなかれ。そは生いける者ものひとりだ  
に、御前みまえに義ぎとせらるるはなし

詩一四三篇二節



もし罪なしと言わば、これ、みずから欺けるにて、まこと我らのうちになし。もしおのれの罪を言いあらわさば、神はまことにして正しければ、我らの罪をゆるし、すべての不義より我らを清めたまわん

ヨハネ第一書一章八、九節

勸 告

司式者は次の勸告をする。かつこの中は省いてもよい。

愛する兄弟よ、「聖書にしばしば、しるせるごとく、天の父・全能の神は罪を懺悔すべきことを勧めたもう。我ら多くの罪を犯したれば、包みかくすことなく、まことに悔やみ、謙そんなる心にてこれを言いあらわし、父の深きあわれみによりて赦しを求むべし。これはいつにてもなすべきことなり。しかれども相ともに集まりて、父の御手より受けし大いなる恵みを謝し、御名をほめ、御言葉をきき、からだと魂とに必要なるものを願う時には、格別になすべきことなり。ゆえに「恵みの御座にむかい、きよき心と静かなる声をもつて懺悔し奉るべし

一同ひざまずいて次の懺悔をする。

懺 悔

あわれみ深き全能の父よ、我らは迷える羊のごとく父の道を離れ、多くおのれの工夫と欲に従い、主の聖なる律法をおかし、なすべき事をなさず、なすべからざる事をなし、全きところあることなし。しかれども父よ、主イエス・キリストをもつて世の人に約したまえるごとく、罪に悩める者をあわれみたまえ。とがを懺悔するものを赦したまえ。悔やめる者をかえしたまえ。あわれみふかき父よ、願わくは今日のち神を敬い、正しきを行ない、身を修めて、御名の栄光をあらわすことを、イエス・キリストのいさおによりて得させたまえ アーメン

司祭は立つて次のように言う。

### 赦罪

我らの主イエス・キリストの父・全能の神は、罪びとの死ぬることを好まず、惡より歸りて生くることを望み、又その仕えびとに權威をあたえて、主の民に罪の赦しを告ぐることを命じたまえり。神は、まことに悔い改めて福音を信する者をことごとく赦したもう。願わくはあわれみ深き全能の神、なんじらの罪を赦し、恵みと力を与え、悔い改めにかのう新たな生涯を送らしめたまわんことを。アーメン

晩

禱

(毎夕の祈り)

一同ひざまずき、準備の黙禱の後に次の唱和を用いる。

司式者

神よ、すみやかに我らを救いたまえ

会衆

主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

ここで一同立つ。

司式者

父と子と聖霊に栄光あれ

会衆

始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり アーメン

司式者

なんじら主をほめまつれ

会衆

主の御名をほめまつるべし

詩

篇

ここで、定められた詩篇を歌いまたは唱える。一篇終わるごとに栄光の頌を用いる。

第一日課

第一日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。この頌の前に、その日にふさわしい聖歌を用いてもよい。

聖なるおとめマリヤの頌

一 わが心、主をあがめ＝ わが霊は、わが救い主なる神を喜びまつる  
二 そのはしための卑しきをも＝ 顧みたまえばなり  
三 みよ今よりのち、よろず代の人われを幸いとせん＝ 全能者われに大いなること  
をなしたまえばなり

四 その御名は聖なり＝ そのあわれみは世々かしこみ恐るる者に臨むなり

五 神は御腕にて力をあらわし＝ 心のおもいのおごれる者をちらし

六 勢いある者を位よりおろし＝ 卑しき者を高うし

七 飢えたる者をよき物に飽かせ＝ 富める者をむなく去らせたもう

八 また我らの先祖に告げたまひしごとく、アブラハムとそのすえとに對するあわれ

みを＝ とこしえに忘れじと、しもベイスラエルを助けたまえり

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

第二日課

第二日課の後に次の煩を歌いまたは唱える。

シメオンの煩

- 一 主よ、今こそ御言葉にしたがいて＝ しもべを安らかに逝かしめたもうなれ
  - 二 わが目は、はや＝ 主の救いを見たり
  - 三 これ、もろもろの民の前に＝ 備えたまいしもの
  - 四 異邦人をてらすひかり＝ 御民イスラエルの栄光なり
- 父と子と聖靈に＝ 栄光あれ
- 始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

一同使徒信經を歌いまたは唱える。

使徒信經

我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず

我はそのひとり子、我らの主イエス・キリストを信ず、主は聖靈によりてやどり、お

とめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、

全能ぜんのうの父ちちなる神かみの右みぎに座ましたまえり。かしこよりきたりて生いける人ひとと死しねる人ひとをさばきたまわん

我われは聖せい霊れいを信しんず。また聖せい公こう会かい、聖せい徒との交まじわり、罪つみの赦ゆるし、からだのよみがえり、限かぎりなき命いのちを信しんず　アーメン

一同ひざまずく。以下、みたますけのための祈りまでを歌つてもよい。

司し式しき者しゃ　主しゅよ、あわれみたまえ

会かい衆しゆ　キリストよ、あわれみたまえ

司し式しき者しゃ　主しゅよ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天てんにまします我われらの父ちちよ、願ねがわくは御み名なを聖せいとなさしめたまえ。御み国くにをきたらしめたまえ。御み心こころを天てんにおけるごとく、地ちにも行おこなわしめたまえ。我われらの日にち用の糧かてを今こん日にちも与あたえたまえ。我われらに罪つみを犯おかすものを我われら赦ゆるすごとく、我われらの罪つみをも赦ゆるしたまえ。我われらを試こころみにあわせず、惡あくより救すくいだしたまえ　アーメン

ここで司式者は立つ。

司式者 主よ、あわれみを我らに現わしたまえ

会衆 主の救いをあたえたまえ

司式者 主よ、正しきをもつて主の仕えびとを装いたまえ

会衆 主の聖徒を喜ばせたまえ

司式者 主よ、主の民を救いたまえ

会衆 主のゆずりを祝したまえ

司式者 主よ、この世を安らかに治めたまえ

会衆 地のはてまで戦いをやめしめたまえ

司式者 神よ、我らの心をきよめたまえ

会衆 我らより聖霊を取りたもうなかれ

司式者 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

司式者 我ら祈るべし

ここで当日の特祷を用い、つづいて次の二つの特祷を用いる。

### 平安のため

もろもろの聖なる望み・よき思い・正しきわざのもととなる神よ、願わくは、しもべらに世のあたえ得ざる平安をあたえ、主の戒めに従うことを決心せしめ、また主の守りによりてあだを恐れず、おだやかに世を渡ることを得させたまえ。救い主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

### みたすけのため

主よ、御光をもつて我らの暗きを照らし、主の大きいなるあわれみをもつて今夜の危うきを防ぎたまわんことを、御子・われらの救い主イエス・キリストのいつくしみによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで司式者はひざまずき、諸祈祷、嘆願、感謝を用いてもよい。  
終わりに次のように言う。

願わくは主イエス・キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを アーメン



# アタナシオ信経

この信経は三位一体主日に、使徒信経にかえて歌いまたは唱える。他の日にも用いることができる。

- 一 救われんと願う者は＝ 聖公会の信仰簡条を奉ずること最も肝要なり
- 二 この信仰簡条を乱すことなく、全く守る者にあらざれば＝ 必ず世々限りなく滅ぶべし
- 三 聖公会の信仰簡条は次のごとし＝ 唯一の神に三位あり、三位は一体なり
- 四 三位を乱さず＝ 一体を分かつて拜むべきことなり
- 五 父一位、子一位＝ 聖霊一位なり
- 六 されど父も子も聖霊も神たることは一つなり＝ その栄光ひとしく、みいつ限りなし
- 七 父のかくあるごとく、子もかくあり＝ 聖霊もかくあるなり
- 八 父も造られず、子も造られず＝ 聖霊も造られず

- 九 父も量りなく、子も量りなく＝ 聖靈も量りなし
- 一〇 父も限りなく、子も限りなく＝ 聖靈も限りなし
- 一一 されど限りなき者は三つにあらず＝ ただ一つなり
- 一二 また造られざる者は三つにあらず、量りなき者は三つにあらず＝ 造られざる者も一つ、量りなき者も一つなり
- 一三 父も全能、子も全能＝ 聖靈も全能なり
- 一四 されど全能なる者は三つにあらず＝ ただ一つなり
- 一五 父も神、子も神＝ 聖靈も神なり
- 一六 されど三つの神にあらず＝ ただ一つの神なり
- 一七 父も主、子も主＝ 聖靈も主なり
- 一八 されど三つの主にあらず＝ ただ一つの主なり
- 一九 キリスト教の真理によれば三位をおのおの神と信認し＝ 主と信認せざるを得ず
- 二〇 聖公会の教理には＝ 三つの主ありと云うことを禁ず
- 二一 父は、たれよりも成りたるにあらず＝ 造られず、生まれざるなり

三 子はただ父ちちよりの者ものにして、成なりたるにあらず＝ 造つくられず、生うまれたるなり

三 聖靈せいれいは父ちちと子こよりの者ものにして、成なりたるにあらず＝ 造つくられず、生うまれず、ただいずるなり

四 一つの父ちちあり、三つの父ちちあらず、一つの子こあり、三つの子こあらず＝ 一つの聖靈せいれいあり、三つの聖靈せいれいあらず

五 この三位さんいは前後ぜんごあることなく＝ また大小だいじょうあることなし

六 三位さんいは皆みなともに限りなく＝ ともに等ひとしきなり

七 さればすべてのことにおいて前まえに言いえるごとく、一いつ体に三位さんいあり＝ 三位さんいは一いつ体たいなりとして拜おがむべし

八 救すくわれんと願ねがうものは＝ 三位さんい一いつ体を、かくのごとく思おもわざるべからず

九 また限りなき救すくいに至いたらんがために＝ 主しゅイエススキリストの肉にく体たいとなりたまひしことをも、まことに信しんずるは肝かん要ようなり

一〇 それ正ただしき信しん仰やうは＝ 神かみの子こ、主しゅイエススキリストの神かみまた人ひとたるを信しんじて言いい表あらわすことなり

三 神とは父の性にてよろず世のさきに生まれ＝ 人とは母の性にてこの世に生まれ

たまえることなり

三 主は全き神・全き人にして＝ 靈魂と肉体とを備えたまえり

三 その神性によれば父と等しく＝ その人性によれば父に劣る

三 神また人なりといえども二つにあらず＝ ただ一つのキリストなり

三 その一つなるは、神性を肉体に変ぜしにあらず＝ 神に人性を取りたまえるなり

三 全く一つなり＝ これ両性を混ぜしによらず、ただ一つなるによる

三 靈魂と肉体にて一つの人なるごとく＝ 神と人にて一つのキリストなり

三 主はわれらを救わんがために苦しみを受け、よみにくだり＝ 三日目に死にし者

のうちよりよみがえり

三 天に昇り、父の右に座したまえり＝ かしこよりきたりて生ける人と死ぬる人を

さばきたまわん

三 そのきたりたもうとき、すべての人、そのからだをもつてよみがえり＝ おのお

のその行ないを述べし

四 善ぜんを行おこないし者ものは限かぎりなき命いのちに入いり＝ 惡あくを行おこないし者ものは限かぎりなき火ひに入いるべし  
三 これ聖せい公會こうかいの信しん仰よう箇か条じょうなり＝ まことに、これこれを確かく信しんする者ものにあらざれば救すくわる

ることを得えじ

父ちちと子こと聖せい靈れいに＝ 榮えい光こうあれ

始はじめにあり、今いまあり＝ 世よ々々限かぎりなくあるなり アーメン

嘆 たん

願 がん

日曜・水曜・金曜・昇天祈禱日に用いる。その他のときに用いてもよい。

司式者 ししきしゃ

天の父なる神よ

会衆 かいしゅう

我らをあわれみたまえ

司式者

世を贖いたまいし子なる神よ

会衆

我らをあわれみたまえ

司式者

父と子よりいずる聖霊なる神よ

会衆

我らをあわれみたまえ

司式者

至聖にして栄光ある三位一体の神よ

会衆

我らをあわれみたまえ

司式者

主よ、我らと先祖とのとがを思いたもうことなく、また我らの罪を罰したもうことなかれ。あわれみふかき主よ、尊き血にて贖いたまいし民を赦し、世

嘆 願

世怒りたもうことなけれ

会衆

主よ、赦したまえ

司式者

すべての罪・災い、悪魔のてだて、主の怒り・かぎりなき罰より

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

心暗きこと、高慢・虚栄・偽善、ねたみ・憎み・恨み、及びすべての無慈悲

より

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

淫行その他すべての重き罪、また世と肉と悪魔の欺きより

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

雷電・暴風、洪水・地震・火災・疫病・ききん、戦争・凶殺・急死より

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

徒党・密計・むほん、邪道・異端・分裂、及び心をかたくなにし、主の御言

葉と戒めを軽んずることより

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

主の肉体と成りたまひしこと、降誕・割礼・洗礼・断食、また試みられたま

いしことにより

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

主の偉大なる愛いと血の汗、十字架とその苦しみ、尊き死と葬り、栄光ある復活と昇天、また聖霊の降臨により

会衆

主よ、救いたまえ

司式者

我らの災いのとき、また幸いするとき、死ぬる日にも、さばきの日にも主よ、救いたまえ

会衆

司式者

主なる神よ、我ら罪びとの願いをきき、天下の聖公会を治め、正しき道に導

きたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは主教・司祭・執事の心を照らして、まことに主の道を悟らせ、又その教えと行ないにて、これを宣べ伝えさせたまわんことを



会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは主の刈り入れ場に働く者をおくりたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは主の民を祝し、これを守りたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは我らに主を愛し、主をおそれ、ねんごろに主の戒めに従う心を与え

たまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは主のすべての民にますます恵みを加え、慎みて御言葉をきき、真心

にてこれを守り、聖霊の実を結ばしめたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくはすべて迷える人、また欺かれたる人を、まことの道に導きたまわん

ことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは立てる者を強め、心弱き者を助け、倒れたる者を起こし、ついにサ  
タンを我らの足の下に打ち伏せたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは天皇・大臣・議員および行政官に才能・知識を与えたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは裁判官を導き、裁判を公平にし、正義をまもる恵みを与えたまわん  
ことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは万国に和睦と大平とを与えたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは危うき者を助け、貧しき者を救い、災いのうちにある者を慰めたま  
わんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは旅びと、産婦・病人・幼な子をまもりたまわんことを

嘆 願

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくはみなしご・やもめ・よるべなき人、しいたげらるる人を守り、これを養いたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは、ひとやにある者と、とりこをあわれみたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくはすべての人をあわれみたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは地の産物を榮えしめ、これを守りて我らの用にあてたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは我らを憎み、そしり、悩ます者を赦し、その心を改めさせたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

願わくはまことに悔ゆる心を与え、我らの罪と怠りと過ちとをことごとく赦

し、また御言葉に従いて行ないを改むるために聖霊の恵みを与えたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

司式者

神の子よ、我らの願いをききたまえ

会衆

神の子よ、我らの願いをききたまえ

司式者

世の罪を除きたもう神の小羊よ

会衆

我らをあわれみたまえ

司式者

世の罪を除きたもう神の小羊よ

会衆

主の平安を与えたまえ

司式者

キリストよ、我らの願いをききたまえ

会衆

キリストよ、我らの願いをききたまえ

ここで聖餐式または大齋懺悔式にうつつてもよい。

司式者

主よ、あわれみたまえ

嘆 願

国会衆、キリストよ、あわれみたまえ

司式者 主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いだしたまえ アーメン

司式者 主よ、憐れみを我らにあらわしたまえ

会衆 我ら主にたよれり

司式者 我ら祈るべし

父よ、あわれみをもって我らの弱きをみそなわし、御名の栄光のために我らの受くべき災いを防ぎたまえ。また悩みのうちにあるとき、全く主のあわれみにたより常に清き行ないをもって主に仕え、主の誉れをあらわすことを得させたまえ。我らのとりな

し・主イエスキリストによりてこいねがい率<sup>たせう</sup>る。アーメン

ここで適当な祈りを用いてもよい。

願<sup>ねが</sup>わくは主イエス<sup>しゅ</sup>キリストの恵<sup>めぐ</sup>み、神<sup>かみ</sup>のいつくしみ、聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>のまじわり、我<sup>われ</sup>らとともに限<sup>かぎ</sup>りなくあらんことを。アーメン

# 諸<sup>しよ</sup> 祈<sup>き</sup> 禱<sup>とう</sup> ・ 感<sup>かん</sup> 謝<sup>しや</sup>

## 祈 禱

- 一 教会・教区のため
- 二 総会・教区会のため
- 三 教区主教選挙のため
- 四 聖職按手のため(一)―(二)
- 五 聖職に召さるる人の増さんため
- 六 聖職と信徒のため
- 七 神学校のため
- 八 伝道のため(一)―(四)
- 九 洗礼志願者のため
- 一〇 堅信式志願者のため
- 一一 信徒一致のため(一)―(二)
- 一二 主日厳守のため
- 一三 万民のため
- 一四 日曜学校のため

- 一五 諸学校のため
- 一六 病院・療養所のため
- 一七 新年祈禱(一)―(二)
- 一八 豊年のため
- 一九 世界平和のため
- 二〇 社会正義のため
- 二一 天皇のため
- 二二 皇室のため
- 二三 国会のため
- 二四 こどものため
- 二五 誕生日のため
- 二六 病人のため(一)―(二)
- 二七 病児のため(一)―(二)
- 二八 手術を受ける者のため
- 二九 産婦のため(一)―(二)
- 三〇 旅行者のため
- 三一 遭難者のため

- 三二 逝去者のため(一)―(二)
- 三三 逝去後三日・一週・一か月記念
- 三四 逝去周年記念
- 三五 洗礼を受けるおりなくして世を去りし者のため
- 三六 随時に用うる祈禱
- (二)―(七)
- 三七 キリソストムの祈り
- 一 出産のため
- 二 生まれし幼な子のため
- 三 病のいやされし者のため
- 四 旅行を終えし者のため
- 五 特別な恵みのため
- 六 一般的に用いる感謝

## 感 謝

# 祈禱

## 一 教会・教区のため

天地万物を治めたもう全能の神よ、あわれみをもってわれらの祈りを聞こし召し、この会衆（教区）を祝し、靈的進歩に必要なものを与えたまえ。願わくは聖職と信徒に恵みをくだし、信仰厚き者を強めてその数を増し、病める者を慰めてこれをいやし、幼き者を祝してこれを守り、惡に陥る者をひるがえして善に向かわせ、眠れる者をさまし、倒れたる者を起こし、悔ゆる者を赦し、この地のすべての未信者を主の救いに入らしめたまえ。願わくは主の道の妨げを除き、主の御名をとのうる人々ことごとく聖公会のうちにありて一致親愛することを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 二 総会・教区会のため

とこしえにいます全能の神よ、主は昔、聖靈をもって使徒たちの議會をつかさどり、また御子イエス・キリストによりて世の終わりまで公会とともにいますことを約した



まえり。願わくは今、御名によりて集まれる議会のうちにいまし、愚かと誤り、かたくなと高ぶりを除き、聖霊のたいなる力をもつて議員の心を清め、その働きを治めたまえ。又これによりてキリストの福音いずこにも宣べ伝えられ、聞く人々これにしたがい、罪と死とサタンの国は砕け、散りたる羊の群れはついに一つの群れとなり、限りなき命に入ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

### 三

#### 教区主教選挙のため

すべての良き賜物を与えたもう全能の神よ、願わくは主教を選挙せんとする（――）教区の聖職および信徒代議員に恵みをくだし、聖霊をもつて導き、託さるる群れを正しく治め、御名の栄光をあらわし、公会の徳を建つる主教を選ばしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 四

#### 聖職按手のため

聖職按手節中、当日の特権につづいて、次の祈りのいずれか一つを用いる。

御子の尊き血をもつて聖公会をあがないたまひし全能の神・天の父よ、今その公会を  
みそなわして主の群れを牧する主教の心を導き、軽々しく人に手をおくことなく、忠  
實を尽くし、思いをこらして、聖職にかのう人を選ばせたまえ。また選ばるる人に天  
の祝福をあたえ、その教えと行ないをもつて主の栄光をあらわし、人々を救いに導く  
ことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

すべての良き賜物を与えたもう全能の神よ、主は聖公会のうちに聖職を立て、その位  
を分かちたまえり。この職務に召さるる者に恵みを与えたまわんことを、せつに祈り  
奉る。願わくは主の道の真理をもつて、彼らに満たし、清き行ないをもつて彼らを装  
い、忠実に主に仕えしめ、御名の栄光を現わし、聖公会の徳を建つることを得させ  
たまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

五 聖職に召さるる人の増さんため

全能の神よ、願わくは御子のとうとき血にてあがないたまひしこの世をみそなわし、  
公会の聖職に召さるる人を増しくわえ、その働きによりて御光を輝かせ、救わるる者

の数<sup>かず</sup>を満<sup>み</sup>たし、御国<sup>みくに</sup>をとくきたらしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉<sup>ほう</sup>る。アーメン

## 六 聖職と信徒のため

とこしえにいます全能<sup>ぜんのう</sup>の神・すべてのよき賜物<sup>たまもの</sup>を与<sup>あた</sup>えたもう父よ、願<sup>ねが</sup>わくは我<sup>われ</sup>らの主<sup>しゅ</sup>教<sup>きょう</sup>と他の聖職<sup>せいしよく</sup>、およびその預<sup>あず</sup>かりたる会衆<sup>かいしゅう</sup>に聖靈<sup>せいれい</sup>をくだし、常に恵<sup>めぐ</sup>みの露<sup>つゆ</sup>を注<sup>そそ</sup>ぎ、まことに主<sup>しゅ</sup>の御心<sup>みこころ</sup>になわしめたまえ。主よ、この願<sup>ねが</sup>いを我<sup>われ</sup>らのとりなしイエス・キリストの誉<sup>ほま</sup>れのために許<sup>ゆる</sup>したまえ。アーメン

## 七 神学校のため

神<sup>かみ</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>は御心<sup>みこころ</sup>にかのう者を尊<sup>そと</sup>き務<sup>つと</sup>めに召<sup>め</sup>し、聖靈<sup>せいれい</sup>をもつてその心<sup>こころ</sup>を照<sup>て</sup>らし、その生涯<sup>せいぎ</sup>をきよめたもう。願<sup>ねが</sup>わくは御名<sup>みな</sup>によりて建<sup>た</sup>てられし神学校<sup>しんがっこう</sup>をみそなわし、教授<sup>きょうじゅ</sup>・学生<sup>がくせい</sup>を祝<sup>いわ</sup>し、召<sup>め</sup>されたる召<sup>めし</sup>にかのう知識<sup>ちしき</sup>をひたすら求めしめ、常<sup>つね</sup>に御子<sup>みこ</sup>・我<sup>われ</sup>らの救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>の教<sup>おし</sup>えにしたがい、喜<sup>よろこ</sup>びてその務<sup>つと</sup>めを全<sup>まも</sup>うすることを得<sup>え</sup>させたまえ。主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストによりてこいねがい奉<sup>ほう</sup>る。アーメン

## 八 伝道のため

(一)

万民の主なる神よ、主のかたちに似せて造られしといえども、いまだ主の愛を知らざる人々をかえりみたまえ。願わくは主の公会の働きを盛んならしめ、御子イエス・キリストのいさおによりて彼らを迷信と不信より救い、主をあがむることを得させたまえ。我らの救い、またすべて信ずる者のよみがえりと命なる御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

良き羊飼いなる主イエス・キリストよ、主は迷える者をたずねいだして救わんがために世にくだりたまえり。願わくは御力を現わしてわが国の伝道を盛んならしめ、弱き者をあわれみ知らざる者をさとらせ、悲しむ者を慰め苦しむ者を助け、迷える者を導きて主の群れに加えたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

(三)

神よ、一つの血筋より万民をいだして地の全面に住ましめ、また御子をくだして、遠

き者にも近き者にも、やわらぎを宣べしめたまえり。願わくはわが国の人々を恵みて主を探ることを得させたまえ。またすみやかに約束を遂げ、万国の民に御霊を注ぎたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(四)

全能の神よ、主はもろもろの人の、救いを受け、真理を悟るに至ることを望みたまえ。願わくは多くの働き人を刈り入れ場に送り、天よりの力をもつて彼らを強め、その働きを祝し、よき実を結ばしめ、ついに異邦人の数みち、イスラエルの人のことごとく救わるる時をきたらせたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

九 洗礼志願者のため

いと高きみくらにいます全能の神よ、地に住む者の卑しきさまをあわれみ、我らを救はんがために御子イエス・キリストをくだしたまえり。願わくは洗礼を受ける備えをなすしもべらを顧み、彼らに聖霊の助けを与え、ねんごろにまことの道を学び、ついに生まれかわりの洗いを受けて罪の赦しを得るに至らせたまえ。主イエス・キリスト

によりてこいねがい奉る。アーメン

一〇 堅信式志願者のため

神よ、御子イエス・キリストの教えによりて弟子たちの心をそなえ、聖霊を受くるにふさわしき者となしたまえり。願わくは主教の按手によりて聖霊の賜物を受くる備えをなすしもべらを顧み、まことに罪を悔やみ、謙そんなる心にて近づき、聖霊の力にて満たされ、生涯忠実に主に仕え、御名の栄光を現わすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一一 信徒一致のため

(一)

主イエス・キリストよ、主は、我なんじらに平安をのこす、わが平安をなんじらに与うと使徒たちにのたまえり。願わくは我らの罪を思いたもうことなく、公会の信仰をよくみし、御心にかのう一致・平安を与えたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

(二)

平和の君・ひとりの救い主イエス・キリストの父よ、願わくは我らに恵みを与え、すべて一致・平和を妨ぐるものを除きたまえ。からだ一つ、御霊一つ、召されて保つところの望み一つ、主一つ、信仰一つ、洗礼一つ、我ら万民の父一つなるがごとく、心一つにし、精神を一つにし、真実・平和・信仰・慈愛をもつて相結び、思いを同じゅうし、言葉を同じゅうして主をあがむることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 一二 主日厳守のため

全能の神よ、主は一週の始めの日を、御子のよみがえりの記念となしたまえり。願わくは主のきよめたまひしこの日を守り、使徒たちの模範に従い、相ともにつどいて主を拜み、御言葉をきき、主の大きな恵みにあずかりて、身も魂も健やかに、生涯忠実に主に仕えることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アトメン

## 一三 万民のため

すべての人の造り主・守り主なる神よ、主の道を万民に教え、主の救いを万国に知ら

せたまわんことをこいねがい奉る。ことに願わくは聖霊をもつて聖公会を導き、自らキリストの信徒ととのうる者、みな真理を悟り、信仰を保ちて心を一にし、相やわらぎ、常に正しき事を行なわしめたまえ。また心に身になりわいに悩みある人々（ことに主のしもべ——）を父の恵みにゆだね奉る。願わくはおのおのその悩みに応じてこれを助け、これを慰め、苦しみを忍ぶ力をあたえ、ついに患難のうちより救い出して、幸いなる道に至らせたまえ。これらの事を主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 一四 日曜学校のため

全能の神・天の父よ、願わくは我らの日曜学校を祝し、教うる者と教えらるる者の心を照らし、喜びて主の真理を学び、生涯主をあがめ、主に仕うることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 一五 諸学校のため

全能の神よ、我らの知恵を得るは、ただ主の賜物によるなり。願わくは御名によりて建てられたる諸学校を恵み、教うる者と学ぶ者を祝して、ともに知識を深め、主の真



理を悟らせ、謙そんなる心にて唯一の神を仰ぐことを得させたまえ。主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一六 病院療養所のため

全能の神よ、御子イエスⅡキリストはあまねく巡りて良き事をなし、もろもろの病をいやしたまえり。願わくは主の御名によりて建てられし（――）病院（療養所）における主のみわざを榮えしめ、病める者をいやし強め、医師・看護婦・職員に知恵と力、愛と忍耐を与えて、絶えずそのなすわざを祝したまわんことを。主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

一七 新年祈禱

（一）

とこしえにいます全能の神よ、主のしもべら御恵みによりて守られ、過ぎし年月を安らかに送り、無事に新年を迎えて、主の深き慈愛を感謝し、御名をほめ奉る。願わくは、この我らの日に、我らの平安にかかわる事を学び、常に主の恵みに感じ、御心に従いて救いの道を絶えず歩み、ついにとこしえの御国に至る幸いを得させたまえ。

父と聖靈とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

天地の主なる神よ、主は万民を治め、その盛衰をつかさどり、栄光を現わしたまえり。ことにわが国をあわれみ、御心になわさることを見過ぐし、今日まで守りて新年を迎えしめたまいしことを感謝し奉る。願わくは今年もわが国を祝し、もろもろの災いを免れしめたまえ。また我ら相むつみ、相やわらぎ、おのおのその本分を尽くし、国の基いよいよ堅からしめたまえ。愛に富みたもう主よ、わが国たみも他の国たみも皆ひとしくキリストの御国の民となり、もろともに主の栄光を賛美し、主を知る知識の地上に満つる時を、とくきたらしめたまえ。これらの願いを、ほめたとうべき救い主イエスⅡキリストの御名によりてささげ奉る。アーメン

一八 豊年のため

この祈りは昇天前祈祷日に用いる。

全能の神よ、主は地を人のために造り、人を主の栄光のために造りたまえり。願わく

は御民の祈りを聞こし召し、御誓いのごとく地の産物を榮えしめ、豊かに刈り入れを与えたまえ。また御言葉の種を豊かに結ばしめ、御名の榮光をあらわさせたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

# 一九 世界平和のため

真理と平和の源なる全能の神よ、不幸にして争い分かれ、大いなる危険におちいりて御心を痛めまつりしことをさんげし奉る。願わくは国々の民みな主の大いなる愛を悟りて、互いに親しく交わる時をとくきたらしめたまえ。また相たずさえて主に仕え、ともに御国の民となることを得させたまえ。万民のためにいけとなりて死にたまひし御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

# 二〇 社会正義のため

万民の父なる神よ、主はすべての人みな兄弟としてむつまじく生くることを望みたまう。願わくは不幸にして分かれ争う人々にその本分を悟らせ、正義と公平を保ちて、ともに社会の福祉をはかり、御名の榮光をあらわすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 二一 天皇のため

王の王・主の主いと高き天の父よ、恵みをもつて我らの天皇を顧みたまえ。願わくは聖霊の導きによりて、まことに主を敬い、救い主イエス・キリストを信じ、常に御心に従うことを得させたまえ。また豊かに天の賜物を授け、健やかに、盛んに、命ながく、ついに限りなき幸いに至らしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 二二 皇室のため

恵みに富みたまう全能の神よ、我らの皇后・皇太子・すべての皇室をみそなわしたまえ。願わくは聖霊をもつて導き、まことに主を信じ、ついに限りなき御国に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 二三 国会のため

恵みに富みたまう神よ、わが国のため、ことに国会のために祈り奉る。願わくは議員の心を導き、その図るところにより、国民にまことの平安と福祉とを得させたまえ。救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二四 子どものため

天の父よ、主は御子をもつて幼な子らを祝し、天国はかくのごとき者の国なりと教えたまえり。願わくは我らを導き助け、我らに授けたまいし子どもを主の恵みのうちに養い育てしめ、その身も魂も健やかにしてキリストの道を学び、常に公会にありてともに主に仕え、御栄えをあらわすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二五 誕生日のため

主よ、主のしもべ（——）を守りて今日誕生日を迎えしめたまいしことを感謝し奉る。願わくは変わらざる恵みをもつて彼を導き、絶えざる助けをもつて彼をとめない、御名の栄光をあらわし、ついに主の聖徒とともに、限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二六 病人のため

（一）  
とこしえにいます全能の神よ、病める主のしもべ（——）のためにささぐる祈りを聞

こし召したまえ。願わくは彼をあわれみ、医師と看護する者とを導き、豊かなる恵みによりて、その病をいやし、安きを与え、健やかなる身と魂とをもつて主の宮にいたり、感謝をささぐる日をとききたらしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

慈悲の父・慰めのもととなる神よ、我らが悩むとき主のほかに助くる者なし。あわれみをもつて今病める主のしもべ(――)を、みそなわしたまわんことをせつに祈り奉る。願わくは主の慈愛を悟らせて、彼を慰め、悪魔の試みを防ぎ、苦しみを耐え忍ぶ力を与えたまえ。また御心にならば彼の病をいやし、生涯主をうやまい、主の栄光をあらわし、ついに主とともに限りなき命の御国に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二七 病児のため

(一)

天の父なる神よ、願わくは今病める幼な子(――)のためにささぐる祈りを聞こし召

し、愛の御手をもつて彼を守り、その病をいやしたまえ。慈悲ふかき父よ、御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

全能の神・慈悲の父よ、生死を定むる力はただ主にあり。あわれみの目をもつて今病める幼な子（――）をみそなわしたまわんことをせつに祈り奉る。願わくは主の良しとしたもう時に至りて、そのからだの苦しみを除き、平安を与えたまえ。又そのいのち長るうること御心になわば、生涯忠実に主に仕え、主の栄光をあらわす器とならしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

二八 手術を受ける者のため

主イエス・キリストよ、主は御民のからだと魂を救わんがために甘んじてむち打たれ、傷つけられ、苦しみを忍びたまえり。願わくは今手術を受ける主のしもべ（――）に御力を与え、その身と魂をいやしたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもうなり。アーメン

二九 産婦のため

(一)

主よ、願わくはこのしもべを祝し、その憂いを除き、安らかに出産せしめ、その尊きつとめを果たして大いなる喜びを得させたまえ。御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

あわれみ深き神よ、喜びにも悲しみにも我らはただ主をほめ奉る。願わくは生まるべき者を失いて悲しむこのしもべを慰め、身と魂を健やかならしめ、主に栄光を帰することを得させたまえ。御子イエス・キリストのいつくしみによりてこいねがい奉る。

アーメン

三〇 旅行者のため

知りたまわざることなく、いましたまわざる所なき全能の神よ、願わくは主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞こし召し、その旅路を守り、正しき望みをとげしめたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三一 遭難者のため



慈悲の神・天の父よ、主は世の人を悩ますを喜ばずと教えたまえり。あわれみをもつて、悩みにあえる主のしもべ（――）をみそなわしたまわんことをせつに祈り奉る。願わくは彼に恵みを与え、すべてを御手にゆだね、苦しみを忍びて、その災いを益となすことを得させたまえ。また願わくは主の慈悲を悟らせて彼を強め、御顔の光をもつて彼を照らし、平安を与えたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

## 三二 逝去者のため

(一)

万民の主なる全能の神よ、主にありて死ぬる死人は幸いなりと教えたまえり。願わくは主を信じて世を去り、安らかなる眠りにつけるしもべら（――）に豊かなる祝福を与え、彼らのうちに主の始めたまいし良きわざをイエス・キリストの日まで全うしたまえ。天の父よ、なお世にありて主に仕うる我らも、主の恵みにより、ついに彼らとともに御国にて聖徒の嗣業にあずかるにふさわしき者とならしめたまえ。我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

全能の神よ、主にありて世を去りし者の霊、主とともに生き長らえ、主を信ずる者の魂、肉の重荷をおろして後、主とともにおりて楽しむ。主よ、すでに信仰の馳せ場を走り終わりて、そのやすみに入れる主のしもべのゆえによりて御名をほめ奉る。願わくはよみがえりの日に我らも彼らとともに、わが父に祝せられたる者よ、きたりて世の始めより、なんじらのために備えられたる国を継げとの、いと喜ばしき御声をきくことを得させたまえ。この願いを我らのとりなし・御子イエス・キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

三三 逝去後三日・一週・一か月記念

主よ、世を去りてすでに三日（一週、一か月）を経たる主のしもべ（――）の魂のために祈り奉る。願わくは変わらざるいつくしきをもつて彼を守り、絶えず恵みの露をそそぎたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三四 逝去周年記念

あわれみ深き主なる神よ、我ら今、主のしもべ（――）の世を去りし（――）周年記念の日に当たりその魂のために祈り奉る。願わくは彼にとこしえの安きを与え、絶えざる御光をもつて導きたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたまう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 三五 洗礼を受けるおりなくして世を去りし者のため

万民の造り主・慈悲ふかき全能の神よ、主を知らず、洗礼を受けるおりを得ずして世を去りし者を主の御手にゆだね奉る。願わくはその罪にしたがいて報いたまわず、主のいつくしみの多きによりて報いたまわんことを。御子、我らの救い主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

### 三六 随時に用うる祈禱

#### （一）

主よ、あわれみをもつて我らの祈りを助けたまえ。この定まりなき世におるあいだ、変わらざる恵みをもつて我らを守り、常に限りなき救いの道を歩ましめたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(二)

全能の神よ、今日われら耳にききし言葉を心に植えたまいて、良き行ないの実を結び御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(三)

主よ、変わらざる恵みにて我らにさきだち、絶えざる助けにて我らをとめない、何事をなすにも始めより終わりまで主にたより、御名の栄光を現わし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(四)

全能の神よ、我らは愚にして願うべきことを知らざれども、主はすべての知恵の源にして、願わざるさきに我らの必要なる物を知りたもう。願わくは我らの弱きをあわれみ、いさおなきによりて、あえて願わざるもの、心暗きによりて願ひ得ざるものを与えたまえ。御子・われらの主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。

アーメン

(五)

全能の神よ、御子の名によりて祈る人の願いを聞かんと約したまえり。今信仰をもつてささげたる祈りに、あわれみの耳を傾け、御心にかのうところを許し、我らの乏しきを助け、御名の栄光をあらわしたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(六)

悔ゆる人の嘆き、憂うる人の望みを輕しめたまわざるあわれみふかき父よ、我らが災いに悩むとき御前にてなす祈りを助けたまえ。また恵みをもつて悪魔と人との惡しきでだてを滅ぼし、しもべを守り、いかなる攻めにもそこなわれず、つねに聖公会のうちにて感謝をささぐることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

(七)

人をあわれみ、罪を赦すことを喜びたもう神よ、我らのささぐる祈りを聞こし召したまえ。我らのおの罪の鎖につながるといへども、ふかき慈悲をもつてこれを解き

たまわんことを、我らのとりなし・主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい  
奉る。アーメン

### 三七 キリストの祈り

今こころを合わせて主に祈る恵みを与えたまえる全能の神よ、御名によりて両三人あ  
つまる時は、その願いを許さんと約したまえり。願わくは我らの益をはかりて望みと  
願いを遂げしめ、この世においては主の道を悟り、後の世においては限りなき命に至  
ることを得させたまえ。アーメン

感

謝

### 一 出産のため

天の父・全能の神よ、主のしもべ（――）をみそなわし、つつがなく出産の苦しみと  
危うきを過ぎさせたまえることを感謝し奉る。願わくは御手をのべてこのしもべに御  
力を与え、身と魂とを健やかならしめ、主の宮にいたりて、御名をほめたとうること

を得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 二 生まれし幼な子のため

神よ、主は我らの救いのために、ひとりの御子をくだし、聖なるおとめマリヤより生まれしめ、また御子によりて、幼な子の天使は常に主の御顔を仰ぐなりと教えたまえ。願わくはこの幼な子を御手に抱き、天の祝福を与えたまえ。また悪の力を防ぎ、洗礼によりて新たに生まれ、生涯主のしもべとなりて、限りなき栄光に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 三 病のいやされし者のため

命を与えたもう神よ、このしもべの病をいやしたまいしによりて、ともに感謝し御名をあがめ奉る。主は恵みにみち、世の人を常にあわれみたまう。願わくはこの人に深く主の慈愛を悟らせ、常に主の聖なる道を歩ましめたまえ。この感謝と祈りを聞こしめしたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 四 旅行を終えし者のため

造りたまひしものを常にあわれみたまう主よ、このしもべを守りて、つつがなくその

旅路を終わらせたまいしことを、ともに感謝し、御名をほめ奉る。願わくはこの恵みを忘れず、生涯主にたより、主の戒めの道を歩み、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。この感謝と祈りを聞こし召したまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 五 特別な恵みのため

慈悲ふかき父よ、主はこのしもべに恵みをあらわしたまえることを感謝し奉る。願わくは今ささぐる感謝をうけ、喜びをもつて生涯、御心に従うことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 六 一般的に用うる感謝

一同で唱える。

全能の神・慈悲の父よ、我らと人々に豊かな恵みをくだしたもうことを感謝し奉る。主は我らを造り、我らを守り、この世の物をあたえ、ことに主イエス・キリストにより世を贖いて量りなき愛をあらわし、恵みを受くる法を示し、のちの世の栄光の望みをいだかしめたまえり。願わくはこのもろもろの恵みに深く感じ、ただ言葉のみを用



いず、おのれをささげて主しゅに仕つかえ、生涯しやがゐきよき行おこないを用もちいて主しゅの栄光えいこうをあらわすこ  
とを、イエスイエスキリストによりて得えさせたまえ。願ねがわくは誉ほまれと栄えかぎりなく父ちちと  
子こと聖靈せいれいにあらんことを。アーメン

聖<sup>せい</sup>

餐<sup>さん</sup>

式<sup>しき</sup>

在籍外の教会で陪餐しようとするときは、前もって、司式者に申し出なければならぬ。

受聖餐者のうち、明らかに大罪を犯すか、言行で隣人を害して会衆を恥ずかしめた者があれば、司祭はその人に対して、その罪を悔い改め、加えた害を償い、または後に償う決心を明らかにし、会衆の恥をすすがないうちは、陪餐してはならないことを告げなければならぬ。

また互いに恨みをいだく者があれば、前の規則により、陪餐させてはならない。但し一方が、その受けた害をゆるし、償いを明言し、和を求めているのに、他方が、それを受けいれず恨みを解かないときは、司祭は和を求めている者に陪餐を許し、受けいれない者には許さない。

これらの処置をしたとき、司祭は二週間以内に教区主教に報告する。

### 勸告

司祭は時々（少なくとも一回は大斎節中）公禱の際、この勸告を朗読する。  
会衆は座につく。

愛する兄弟よ、主イエスキリストは我らの救いのために、主のからだと血の聖餐を定めたまえり。これ敬虔なる人々これを受けてキリストの十字架と苦しみを記念し、

主によりて強くせられんがためなり。我ら罪の赦しを得て天国の幸いにあずかるは、ただ主のいさおのみに因る。このゆえに全能の神・天の父は、その御子・救い主イエスキリストを与えて、我らのために死なしたまいしのみならず、この聖餐によりて霊なる糧となしたまいしことを心より感謝し奉るべし。そもそもこの聖餐は、これを受くる人に神の力を与うるものなれども、みだりにこれを受くるは、いと危うきこととなれば、その尊きことと危うきことを考え、軽々しくせず、また神を欺く者のごとくせず、ねんごろにおのれの心をただし、聖書のうちに命じたまえる礼服をつけ、清く潔くして、この聖卓にきたり、神のふるまいにつらなるべし

まず、神の戒めをもつて、おのれをしらべ、あるいは思い、あるいは言葉、あるいは行ないにて罪を犯したることを悟らば、これを嘆き、まことに改むることを決心して、全能の神にさんげすべし、もしまた隣に對して罪を犯したることあらば、直ちに和を求め、力を尽くして償いをなし、かつ、おのれの罪の赦しを神に望むごとく、他人の罪をも赦すべし。これらの事をせずして聖餐を受くれば、ただ、おのれの罪を重ねぬるのみなり。されば、もし、なんじらのうちに神を罵る者・御言葉をそしる者・姦

淫いんを行おこのう者もの・恨うらみ憎にくむ者もの・その他重おもき罪つみを犯おかせる者ものあらば必ず悔かない改あらためよ。しからざればこの聖せい卓たくに近ちかづくべからず

また聖せい餐さんを受うくる者ものは、神かみのあわれみを堅かたく信しんじ、良りょう心しんの責せめなきこと肝かん要ようなり。もし前まえの方法ほうほうに従したがうとも、なお心こころおだやかならぬ者ものあらば、我われにきたるか、または、ほかの司し祭さいに行ゆきて、その憂うれいを述のべよ。さらば赦しやぐい罪ざいの恵めぐみと魂たましいを健すこやかならしむる教おしえと力ちからを受うけて疑ぎいを去さり、良よ心しんやすんずることをうべし

堅信式を受けし者は努めて陪餐し、ことに復活節には必ず陪餐すべし。また、その日の食事にさきだちて陪餐するは古来の慣習なり。

## 準じゆん 備び

この準備は聖餐式の前に用いる。前夜に勸告、講話、または黙想とともに用いてもよい。

会衆はひざまずき、一同、主の祈りを唱える。

天てんにまします我われらの父ちちよ、願ねがわくは御名みなを聖せいとなさしめたまえ。御国みくにをきたらしめたまえ。御心みこころを天てんにおけるごとく、地ちにも行おこなわしめたまえ。我われらの日用にちようの糧かてを今日こんにちも

与<sup>たま</sup>へたまえ。我<sup>われ</sup>らに罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>すものを我<sup>われ</sup>ら赦<sup>ゆる</sup>すごとく、我<sup>われ</sup>らの罪<sup>つみ</sup>をも赦<sup>ゆる</sup>したまえ。我<sup>われ</sup>らを試<sup>こ</sup>みにあわせず、惡<sup>あく</sup>より救<sup>すく</sup>いいだしたまえ アーメン

司式者は次の祈りを唱える。

全能<sup>ぜんのう</sup>の神<sup>かみ</sup>よ、すべての人<sup>ひと</sup>の心<sup>こころ</sup>は主<sup>しゅ</sup>に現<sup>あら</sup>われ、すべての望<sup>のぞ</sup>みは主<sup>しゅ</sup>に知<sup>し</sup>られ、すべての密<sup>みつ</sup>事<sup>じ</sup>は主<sup>しゅ</sup>に隠<sup>かく</sup>るることなし。願<sup>ねが</sup>わくは聖<sup>せい</sup>靈<sup>れい</sup>によりて我<sup>われ</sup>らの心<sup>こころ</sup>をきよめ、全<sup>また</sup>く主<sup>しゅ</sup>を愛<sup>あい</sup>し、御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>の榮<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>をあらわすことを得<sup>え</sup>させたまえ。主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストによりてこいねがい率<sup>なでさ</sup>る。アーメン

十

戒<sup>かい</sup>

各<sup>おの</sup>答<sup>こた</sup>の後に、しばらく自らを省<sup>しる</sup>みる。

司式者<sup>ししきしや</sup> 神<sup>かみ</sup>このすべての言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>をのべて言<sup>い</sup>いたまわく、我<sup>われ</sup>はなんじの神<sup>かみ</sup>・主<sup>しゅ</sup>なり。我<sup>われ</sup>の

ほかなにものをも神<sup>かみ</sup>とするなかれ

会衆<sup>かいしゅう</sup>

主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律<sup>おきて</sup>法<sup>ぽう</sup>を守<sup>まも</sup>る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ、おのれのために、上<sup>かみ</sup>は天<sup>てん</sup>にあるもの、下<sup>しも</sup>は地<sup>ち</sup>にあるもの、また地<sup>ち</sup>の下の水<sup>みづ</sup>の中<sup>なか</sup>にあるものの形<sup>かたち</sup>に似<sup>に</sup>せて偶<sup>く</sup>像<sup>ざう</sup>をつくり、これにひれ伏<sup>ふ</sup>し仕<sup>つか</sup>うるな

かれ

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじの神<sup>かみ</sup>・主<sup>しゅ</sup>の名<sup>な</sup>を、みだりに言<sup>い</sup>うなかれ

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ安息日<sup>あんそくいち</sup>を聖<sup>せい</sup>として忘<sup>わす</sup>れるなかれ

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ父<sup>ちち</sup>と母<sup>はは</sup>とを敬<sup>うやまつ</sup>え

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ殺<sup>ころ</sup>すなかれ

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ姦淫<sup>かんいん</sup>するなかれ

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ盗<sup>ぬす</sup>むなかれ

会衆

主よ、我<sup>われ</sup>らをあわれみ、この律法<sup>おきて</sup>を守る心<sup>こころ</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえ

司式者

なんじ、偽りの証しを立つるなかれ

会衆

主よ、我らをあわれみ、この律法を守る心を与えたまえ

司式者

なんじ、むさぼるなかれ

会衆

主よ、我らをあわれみ、これらの律法を我らの心にしるしたまわんことをこいねがい奉る

司式者

主イエス、キリストの、のたまえる言葉をも聞くべし

なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なるなんじの神を愛すべし。これは大いにして第一の戒めなり。第二もまたこれに等し、おのれのごとくなんじの隣を愛すべし。律法全体と預言者とは、この二つの戒めによるなり

会衆

主よ、我らをあわれみ、この律法を我らの心にしるしたまわんことをこいねがい奉る

司式者

我ら祈るべし

とこしえにいます全能ぜんのうの神かみよ、我われらの心こころとからたを清きよめ、主しゅの律法おきてを踏ふましめ、主しゅの言いいつけを行おこなわしめ、大おおいなる力ちからにていつまでも守まもりたまわんことを、救すくい主しゅイエスイエキリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

つづいて聖餐式を行なうときは、以下を省いて直ちに本文にうつる。

### 懺悔

司式者 我われら全能ぜんのうの神かみに罪つみをさんげし奉たてまつるべし

一同次のさんげを唱える。

我われらの主しゅイエスイエキリストの父ちち・よろずの物ものの造つくり主しゅ・よろずの人のさばき主しゅなる全能ぜんのうの神かみよ、我われら思おもいと言ことば葉はと行おこないをもつて罪つみを犯おかし、いくたびとなく主しゅにそむき、主しゅの怒いかりをひきたることを、悲かなしみてさんげす。我われら深ふかく悔くみ、まことに罪つみを嘆なげき、これと思おもいはずのごとに憂うれい、その重荷おしにに堪たえがたし、慈悲じひふかき父ちちよ、我われらをあわれみたまえ。我われらをあわれみたまえ。御子みこ・われらの主しゅイエスイエキリストのいさおによりて、過すぎし罪つみをことごとく赦ゆるし、今いまよりのち、行おこないを改あらためて常つねに主しゅに仕つかえ、御心みこころにかない、御名みなの榮光えいこうを現あらわわせたまえ。主しゅイエスイエキリストによりてこいねがい



奉る アーメン

慰めの言葉

司式者は言う。

真心をもつて帰依する人に、救い主キリストの言いたもう慰めの言葉を聞くべし  
すべて勞する者・重荷を負う者よ、我にきたれ。我なんじらを休ません

マタイ伝二一章二八節

神はそのひとり子を賜うほどに世を愛したまえり。すべてかれを信ずる者の滅びず  
して、とこしえの命を得んためなり

ヨハネ伝三章一六節

聖パウロの言葉をも聞くべし

キリストイエス罪びとを救はんために世にきたりたまえり。これすべての人の受  
くべきまことの言葉なり

テモテ前書一章一五節

聖ヨハネの言葉をも聞くべし

人もし罪を犯さば、我らのために父の前に助け主・義なるイエス・キリストあり。  
かれは我らの罪のために、なだめの供え物たり

ヨハネ第一書二章一、二節

ここで適当な祈りまたは嘆願を用いてもよい。

聖餐式の直前にこの準備を用いないときは一同立ち、司祭は本文の「主よ、あわれ  
みたまえ キリエ・エレイソン」の前に次の祈りを用いる。ただし本文を他の式と  
合わせて用い、主の祈りをすでに用いたときは、この主の祈りを省く。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめた  
まえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も  
与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我ら  
を試みにあわせず、惡より救いいだしたまえ。アーメン

全能の神よ、すべての人の心は主に現われ、すべての望みは主に知られ、すべての密  
事は主に隠ることなし。願わくは聖霊によりて我らの心をきよめ、全く主を愛し、  
御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい  
奉る。アーメン

本文

序 禱

ここで聖歌、詩篇中の一篇、または数節を参入唱として用いてもよい。  
一同立つて次の言葉を歌いまたは唱える。各節を三回ずつ繰り返してもよい。

主よ、あわれみたまえ

(または) キリエ・エレイソン

キリストよ、あわれみたまえ

キリスト・エレイソン

主よ、あわれみたまえ

キリエ・エレイソン

主日およびその他の祝日には、一同次の頌を歌いまたは唱える。但し降臨節、大斎前節および大斎節の主日には用いない。

いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、人には恵みあれ。全能の父・天の王・主なる神よ、我ら主をほめ、主をたたえ、主を拝み、主をあがめ、主の大きいなる栄光のゆえによりて、感謝したてまつる

神の生みたまいしひとり子・主イエス・キリスト、世の罪を除きたもう神の小羊・父

の御子・主なる神よ、我らをあわれみたまえ。世の罪を除きたもう主よ、我らの祈りをうけたまえ。父の右に座したもう主よ、我らをあわれみたまえ。イエス・キリストよ、主のみ聖なり。主のみ王なり。主のみ聖霊とともに、父の栄光のうちにいまして、もつともたかし　アーメン

特　　禱

司祭

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

司祭

われら祈るべし

（ここで当日の特禱を用いる。）

使　徒　書

会衆は座につき、補式者または司祭は使徒書を歌いあるいは朗読する。読む前に「使徒書は——書第一章一節以下にあり」と言い、終わったとき「ここに使徒書終わる」と言う。  
次に一同立つ。ここで聖歌、詩篇中の一篇、または数節を昇階唱として用いてもよい。

聖餐式

一三八

福音書

執事または司祭は次の唱和の後、福音書を歌いあるいは朗読する。

朗読者

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの靈とともにいますことを

朗読者

聖なる福音は、聖——の福音書第一章——節以下にあり

会衆

主に榮光あらんことを

会衆

主に感謝したてまつる

福音書が終わったとき、次のように歌いまたは唱える。

説教

説教の前または後に、司祭はその週の祝日、斎日および聖餐を行なう日に関する告示、教区主教の教示、結婚の予告、懲戒等の告示をする。  
説教の後に、伝道のため、洗礼志願者のため等の祈りをしてよい。  
説教はニケヤ信経の後にしてもよい。

ニケヤ信経

主日およびその他の祝日には、一同立つて歌いまたは唱える。

我は唯一の神・全能の父・天地とすべて見ゆる物と見えざる物の造り主を信ず

我は唯一の主イエスキリストを信ず。主は、よろず世のさきに、父より生まれたる

ひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずし

て生まれ、父と一体なり。よろずのもの主によりて造られたり。主はわれら人類のた

め、また我らを救わんがために、天よりくだり、聖霊によりておとめマリヤより肉体

を受け、人性をとり、我らのためにポンテオピラトのとき、十字架につけられ、苦

しみを受け、葬られ、聖書にかないて三日目によりみがえり、天に昇り、父の右に座し

たまえり。また栄光をもつて再びきたり、生ける人と死ねる人をさばきたまわん。そ

の国は終わることなし

我は聖霊を信ず。聖霊は命を与うる主、父と子よりいで、父と子とともに拜みあがめ

られ、預言者によりて語りたまひし主なり。我は使徒たちよりの唯一の聖公会を信

ず。罪の赦しをうる唯一の洗礼を信認す。死にし人のよみがえりと来世の命を望む

アーメン

聖餐式

一四〇

ここで聖歌を用いてもよい。

懺悔・赦罪

執事または司祭は言う。

主の御心にかのう供え物をささげ、この聖餐を行なわんがために、罪をさんげし奉るべし

会衆はひざまずく。

司祭

父と子と聖霊なる全能の神、及び天の会衆と兄弟の前に、われは思いと言葉と行ないをもつて、多くの罪を犯せしことを悲しみてさんげす。神よ、願わくは我をあわれみたまえ。兄弟よ、わがために主なる神に祈らんことを願わくは全能の神、なんじをあわれみ、なんじの罪をことごとく赦し、限りなき命に至らせたまわんことを

会衆

司祭

会衆

アーメン  
父と子と聖霊なる全能の神、及び天の会衆と師父の前に、われらは思いと言葉と行ないをもつて、多くの罪を犯せしことを悲しみてさんげす。神よ、願

わくは我<sup>われ</sup>らをあわれみたまえ。師<sup>し</sup>父<sup>ふ</sup>よ、われらのために主<sup>しゅ</sup>なる神<sup>かみ</sup>に祈<sup>いの</sup>らんこ  
とを

次に司祭は会衆に向かつて言う。教区主教臨席のときは同主教が言う。

司祭

願<sup>ねが</sup>わくは、あわれみ深<sup>ふか</sup>き全<sup>ぜん</sup>能<sup>のう</sup>の神<sup>かみ</sup>、なんじらの罪<sup>つみ</sup>を赦<sup>ゆる</sup>し、恵<sup>めぐ</sup>みと力<sup>ちから</sup>を与<sup>あた</sup>え、  
悔<sup>く</sup>い改<sup>あらた</sup>めにかのう新<sup>あら</sup>たなる生<sup>しやう</sup>涯<sup>がい</sup>を送<sup>おく</sup>らしめたまわんことを

会衆

アーメン

ここで一同立つ。

奉<sup>ほう</sup> 献<sup>けん</sup>

司祭

主<sup>しゅ</sup>なんじらとともにいますことを

会衆

主<sup>しゅ</sup>なんじの靈<sup>れい</sup>とともにいますことを

ここで執事または司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。

我<sup>われ</sup>ら供<sup>みな</sup>え物をささげまつるべし

次に左の聖語の一節または教節、あるいは奉献唱（一五二ページ以下）を用いる。



われ主しゅの幕屋まくやにて喜びよろこのいけにえをささげ、歌うたをもて主しゅをほめたたえん

詩二七篇六節

なんじらの光ひかりを人ひとの前に輝あやかせ。これ人ひとのなんじらが良よき行おこないを見て、天てんにいます  
なんじらの父ちちをあがめんためなり

マタイ伝五章一六節

我われに向むかいて、「主しゅよ主しゅよ」と言いう者もの、ことごとくは天國てんこくに入いらず。ただ、天てんにいます  
わが父ちちの御心みこころを行おこのう者もののみ、これに入いるべし

マタイ伝七章一二節

「与あうるは受うくるよりも幸さいいなり」と主しゅイエスの言いいたまいし御言葉みことばを記憶きおくせよ

使徒行伝二〇章三五節

神かみは不義ふぎにいまさねば、なんじらの勤勞きんろうと、さきに聖徒せいとにつかえ、今いまもなお、これに  
仕つかえて、御名みなのために現あらわしたる愛あいとを忘わすれたもうことなし

ヘブル書六章一〇節

信施はここで集め、会衆の代表者はパンとぶどう酒および信施を司祭に渡す。その  
間に聖歌を歌つてもよい。

司祭はこれをささげる時、次の祈りを用いる。信施を集めないときは、かつこ内の  
語を省く。

全能の父なる神よ、願わくは我らのささぐる「信施」供え物を受け、我らを祝し恵みたまわんことを。御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

あるいは次の聖語を一同で歌いまたは唱えてもよい。

よろずの物は主よりいず。我らはただ主の御手より受けて主にささげたるなり

### 伏 拝

会衆はひざまずく。司祭は「我ら——のために祈るべし」と言つて会衆の黙禱を求めてもよい。  
次に司祭は言う。

我ら全公会のために祈るべし

とこしえにいます全能の神よ、主は聖なる使徒をもつて、もろもろの人のために願ひ祈り、感謝することを教えたまへり。願わくは我らの祈りを聞こし召し、全公会に、まことと親しみを慕う心を与え、御名を唱うる者、みな同じく御言葉の真理によりて一致親愛することを得させたまえ。天の父よ、すべての主教・司祭・執事（ことに我らの主教——）に恵みを与え、その行ないと教えとによりて、主の生けるまことの言

葉はを示しめし、正ただしく聖せい餐いんを行おこなわしめたまえ。また主しゅの民たみ、ことにこの会衆かいしゆに天てんの恵めぐみをくだし、慎つつしみて御言みことば葉はを聞きき、生涯しうがいよく正ただしく主しゅに仕つかうることを得えさせたまえ。主しゅよ、この定さだまりなき世よにありて、なやめる者もの、悲かなしめる者もの、病やめる者もの、貧みしき者もの、その他た、災わざいに会あえる者ものを、御恵みめぐみをもつて強つよめ助たすけたまえ。また主しゅを信しんじて世よを去さりし者ものを主しゅの守まもりにゆだね、彼らかれのためにとこしえの光こう明めいと平へい安あんを祈いのり、ことに恵めぐみのあかしとなり、世よの光ひかりとなりし聖徒せいとたちのために御名みなをほめ奉たてまつる。父ちちよ、これらの事ことを御子みこ・我らわれの主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

聖別

司祭しきさ 主しゅなんじらとともにいますことを

会衆かいしゆ 主しゅなんじの靈れいとともにいますことを

司祭しきさ なんじら心を挙あげよ

会衆かいしゆ 我ら心を主しゅに挙あげん

司祭しきさ 主なる神かみに感謝かんしゃし奉たてまつるべし

会衆　それは正當せいとうにしてなすべきことなり

司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖しせいなる父・とこしえにいます全能ぜんろうの神かみよ、いついずこにても主しゅに感謝かんしゃし奉たてまつるは、正當せいとうにしてなすべき務つとめなり

特別序唱（一五二ページ以下）はここで用いる。

ゆえに我われら御使みつかいと御使みつかいのおさ及び天てんの全会衆ぜんかいしゅとともに、主しゅの尊ととき御名みなをあがめ、常つねに主しゅをたたえて言いわん

一回次の言葉を歌いまたは唱える。

聖せいなるかな、聖せいなるかな、聖せいなるかな、万軍ばんぐんの神かみ。主しゅの栄光えいこう天地てんちに満みてり。いと高たかきところところにホサナ

つづいて、一同、次の言葉を歌いまたは唱えることができる。陪餐の直前に用いてもよい。

ほむべきかな、主しゅの御名みなによりてきたる者もの。いと高たかきところところにホサナ

次に司祭は言いう。

感謝・賛美・栄光・知恵・ほまれ・ちから・いきおい、世々限りなく全能の父なる神にあらんことを

主はみことばによりて万物を造り、また我ら人類を救わんがため、ひとりの御子をあたえ、まことの人生をとりてこの世に生まれしめたまえり。御子イエス・キリストは万民の罪のため、ただひとたび十字架の上にその身をささげ、唯一の全き供え物として贖いをなし、かつその尊きいけにえと死を記念する式を建てて、再びきたるまで常にこれを行なえと福音のうちに命じたまえり

あわれみ深き父よ、我らの祈りを聞こし召し、このパンとぶどう酒を受け、みことばと聖霊によりて、これを祝し、聖となして、御子イエス・キリストの尊きからだと血にあずかることを得させたまえ

主イエスわたさるる夜、パンを取り（この時パンを手にとる）謝して後これを裂き、弟子に与えて言いたまいけるは、取りて食せよ。これはなんじらのために与うるわがからだなり。なんじらわが記念としてこれを行なえ。またようげ終わりしのち、杯を取りて（この時杯を手にとる）謝し、彼らに与えて言いたまいけるは、なんじら皆この杯より

飲め。これは新約のわが血にして、罪を赦さんとて、なんじら及び多くの人のために流すところのものなり。なんじら飲むごとに、わが記念としてこれを行なえ。ゆえに天の父よ、我らは主の愛子・救い主イエス・キリストの御定めに従い、その尊き苦しみに死、及びよみがえりと昇天を記念し、かつ、これよりいずる大いなる恵みを感じ、主の御前にこの聖なる命のパンと救いの杯をささげて、御子の命じたまひし記念の祭りを営み、再びきたりたもう日を望み奉る。願わくはこの感謝・賛美のいけにえを天の祭壇に至らせ、ここにもいずこにても、これにあずかる者みなキリストと一つからだとなり、我らキリストにおり、キリスト我らにいますことを得させたまえ。またこれにより、主を信じて世を去りししもべらとの交わりを保ち、主の聖徒とともに天国の幸にあずかることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

願わくは我らのうちに働くちからに従いて、我らのすべて求むるところ、すべて思うところよりも、いたくまさる事をなしうる全能の父に、栄光世々限りなく、教会によりて、またキリスト・イエスによりてあらんことを。アーメン

陪 餐

司祭は次の言葉を歌いまたは唱える。

救い主キリストの教えたまいしごとく我ら祈るべし

一同主の祈りを歌いまたは唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いいだしたまえ。アーメン

ここで司祭は聖別されたパンをさく。

次に左の唱和を用いてもよい。

司祭

主の平安つねになんじらととにあらんことを

会衆

なんじの靈とともにあらんことを

つづいて次の頌を歌いまたは唱えてもよい。但し逝去者記念のときは「我らをあわれみたまえ」にかえて「彼らをいこわせたまえ」を、また「主の平安を与えたまえ」にかえて「とこしえのいこいを与えたまえ」を用いる。

世の罪を除きたもう神の小羊よ、我らをあわれみたまえ  
世の罪を除きたもう神の小羊よ、我らをあわれみたまえ  
世の罪を除きたもう神の小羊よ、主の平安を与えたまえ

一同次の祈りを唱える。

あわれみ深き主よ、我らはあえておのれの正しきによらず、ただ主の大きいなるあわれ  
みを頼みて、今みつくえのもとにきたれり。我らはみつくえより落つるくずを拾うに  
も足らぬ者なれども、主は変わることなく、常にあわれみを施したもう。恵み深き主  
よ、願わくは我ら、主の愛したもう御子イエス・キリストの肉を食し、その血を飲  
み、罪ある我らのからだと魂は、キリストの尊きからだと血にて清められ、我らは常  
にキリストにおり、キリストは常に我らにいますことを得させたまえ アーメン

司祭まず陪餐し、次に聖職、会衆の順で陪餐する。分餐のとき、おのおのに次のよ  
うに言う。

なんじのために与えたまいし主イエス・キリストのからだ  
なんじのために流したまいし主イエス・キリストの血



聖餐式

一五〇

ここで聖歌、詩篇中の一節または数節を陪餐唱として用いてもよい。  
聖品が尽きたときは、再度の聖別（一六八ページ）の式分を用い、残ったときはその場で慎んで飲食してしまふ。

感謝 謝

司祭

我ら祈るべし

一同次の祈りを唱える。

とこしえにいます全能の神よ、この聖餐にあずかりし者を、御子・我らの主イエス  
キリストの、尊きからだと血の靈なる糧をもつて、養いたもうことを感謝し奉る。主  
またこれによりて深き慈愛をあかしし、御子の尊き死と苦しみのいさおによりて、我  
らが主の民にたらなり御子のからだの肢たることを示し、かつ御国の世継ぎたる望み  
をいよいよ堅くしたまえり。天にいます父よ、恵みをもつて常に我らを助け、御子の  
いさおにより、身をも魂をも生ける供え物としてささげ、絶えずこの聖なる交わりの  
うちにありて、主の備えたまいし良きわざを行のうことを得させたまえ。主イエス  
キリストによりてこいねがい奉る。願わくは栄光世々限りなく父と子と聖靈にあらん

ことを アーメン

ここで次のように言つて陪餐後禱（一五二ページ以下）を用いてもよい。

司祭

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの靈とともにいますことを

司祭

我ら祈るべし

祝

福

司祭（教区主教臨席のときは同主教）は次の語を用いて会衆を祝福する。

願わくは父と子と聖靈なる全能の神の恵み、常になんじらとともにあらんことを。

アーメン

次に左の唱和を用いてもよい。

執事または司祭

いざ我らいでゆかん

会衆

主の御名によりて アーメン

奉獻唱・特別序唱・陪餐後禱

降誕日

当日から八日間用いる。つづいて顕現日の前日までと、被獻日および処女聖マリア蒙告日に用いてもよい。

奉獻唱

天は喜び地は楽しみ、海とそのなかに満つるものとは鳴りどよむべし。そは主きたりたまえばなり

詩九六篇一一、一三節

特別序唱

ことに、ひとりの御子イエス・キリストを与え、聖靈の働きによりて、その母・おとめマリヤより生まれ、まことの人生をそなえしめたまえり。これ、その罪の汚れなきをもつて、我らの罪をことごとく清めんがためなり。(ゆえに

陪餐後禱

全能の神よ、願わくは世に生まれたまいし御子をまことに救い主と信ぜしめ、恵みに

よりて再び生まれ、神の子とせられしことを日々感謝し、ついにとこしえの命に至ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 復活日

当日から八日間用いる。つづいて昇天日の前日まで用いてもよい。

### 奉獻唱

まさしくキリストは死人のうちより、よみがえり、眠りたる者の初穂となりたまえり  
ハレルヤ

コリント前書一五章二〇節

### 特別序唱

ことに御子・われらの主イエス・キリストの尊きよみがえりのゆえによりて、主をほめ奉る。御子はまことの超越の小羊にして、われらのために供えられ、世の罪をのぞき、その死をもつて死をほろぼし、そのよみがえりをもつて限りなき命をあたえたまえり。(ゆえに)

### 陪餐後祷

全能の主なる神よ、御子・われらの主イエス・キリストは死に勝ちてよみがえりたまえり。願わくは主とともによみがえらせられし我らも、ひたすら天にあるものを求むることを得させたまえ。栄光のみくらに座したもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

昇天日

当日から八日間用いる。つづいて聖霊降臨日の備え日（前日）まで用いてもよい。

奉獻唱

かれ高き所に昇りしとき、多くのとりこを率い、人々に賜物をたまえり　ハレルヤ

特別序唱

エペソ書四章八節

ことに主の愛したもう御子・我らの主イエス・キリストの昇天のゆえによりて感謝し奉る。御子はいと尊きよみがえりの後、明らかに使徒たちに現われ、我らのために住まいを備えんとて、その目の前にて天に昇りたまえり。こは我らを主のいます所に昇らせ、栄光のうちにてともに王たらしめんがためなり。（ゆえに

陪餐後禱

神よ、願わくは常に公会をみそなわし、御子の仰せに従がいて御言葉を宣べ伝え、御国をひろむることを得させたまえ。栄光をもつて天に昇りたまひし御子・我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖靈降臨日

当日から七日間用いる。

奉獻唱

神よ、御力を奮い起こしたまえ、我らのためにみわざを行ないたまひし神よ、御力をしめしたまえ。王たちはなんじに礼物をささぐ、これエルサレムなるなんじの宮のためなり

詩六八篇二八、二九節

特別序唱

ことに我らの主イエス・キリストは天にのぼり、父の右に座したまいしのち、公会に聖靈をくだし、その大いなる力によりて万国にとこしえの福音を宣べ伝えしめたまえり。我らは聖靈によりて、やみと惑いのうちより明らかなる光に導かれ、父とその御

子・イエス・キリストをまことに知ることを得たり。(ゆえに

陪餐後禱

神よ、願わくは聖靈を我らに満たし、御力によりて勇ましく御子をあかしし、その命じたまひしことを守りて、すべての国びとを弟子となすことを得させたまえ。父と聖靈とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

三位一体主日

他に定めのない主日にも用いてよい。

奉獻唱

主よ、たれかなんじを恐れざる。たれか御名を尊ばざる。なんじのみ聖なり

黙示録一五章四節

特別序唱

主は御子と聖靈とともに唯一の主なり。ただ一位にあらずして一体のうちに三位ましませり。我らは父と子と聖靈との栄光ともに等しくして、差別なきことを信じ奉る。

(ゆえに)

陪餐後禱  
ばいさんごう

至聖なる三位一体の神よ、願わくは主の恵みによりてまことの信仰を堅く保ち、ついに天にて主の栄光を仰ぎ見ることを得させたまえ。主は一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

次の時には左の奉献唱・特別序唱・陪餐後禱を用いてよい。ただし祝日には当日のものを用いる。

降臨節  
こうりんせつ

奉献唱  
ほうけんしやう

シオンの娘よ、大いに喜べ。エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、なんじの王、なんじにきたる

特別序唱  
とくべつじやうしやう

ゼカリヤ書九章九節

ことに、ひとりの御子の降臨によりて、人類に救いを与えたまいしことを感謝し奉る。



聖餐式

一五八

御子は大きな栄光をもつて再びきたり、義によりて世をさばきたもう時、すべてのものを新たにしたもうなり。(ゆえに)

陪餐後禱

全能の神よ、御子イエス・キリストは迷える者を尋ね、これを救わんとてこの世にくたりたまえり。願わくは我らのうちに始めたまいし良きわざを、主の再びきたりたもう日まで成しとげたまわんことを。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

顕現日

当日から八日間用いる。変容貌日にも用いてよい。

奉獻唱

全地は主を拝みてうたい、御名をほめうたわん。神をおそるる人よ、皆きたりて聞け。われ神のわがためになしたまえることを告げん

詩六六篇四、一六節

特別序唱

ことに、ひとりの御子イエス・キリストは、我らと同じ肉体をととりて、栄光を現わし

たまえり。これすべての人をやみと惑いのうちより導きいだし、主の大きいなる御光に浴せしめんがためなり。（ゆえに）

陪餐後禱

全能の神よ、御子・我らの救い主イエス・キリストによりて、大いなる栄光を現わしたまえり。願わくは御恵みを我らにそそぎ、言葉と行ないをもつて主の栄光をあらわし、多くの人をみもとに導くことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

大齋始日より大齋第五主日前日まで

奉獻唱

なんじら衣を裂かずしてその心を裂き、なんじらの神・主に帰るべし。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ大いなり

特別序唱

ヨエル書二章一三節

ことに主イエス・キリストは、四十日四十夜断食してのち餓え、悪魔にこころみられ

てこれに打ち勝ちたまえり。これわれらの試みらるとき、主のいさおにより、はばからずして、恵みの御座にきたり、あわれみを受け、恵みと力とを得んがためなり。

(ゆえに)

陪餐後禱

悔い改むる者を赦したもう、いつくしみ深き神よ、願わくは我らの祈りを聞こし召し、大いなるあわれみをもつて、罪のなわめより解きはなち、御名の栄光を現わすことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々続べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

大齋第五主日より復活前水曜日まで

奉獻唱

そしりわが心を砕きぬれば、我いたく氣落ちせり。我あわれみを寄する者を待ちたれど、ひとりだになく、慰むるものを待ちたれどひとりをも見ざりき 詩六九篇二〇節

特別序唱

ことに我らの主イエス・キリストは人となり、おのれを低くして死に至るまで、十字

架の死に至るまで従いたまえり。これ地より挙げられ、すべての人をおのがもとに引き寄せんがためなり。(ゆえに)

### 陪餐後禱

あわれみ深き父なる神よ、主は人類を救わんとて御子イエス・キリストをこの世につかわしたまえり。願わくは御子の十字架の苦しみのいさおによりて我らを助け、我らを救いたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 復活前木曜日

聖餐感謝日にも用いてよい。

### 奉獻唱

なんじらこのパンを食し、この杯を飲むごとに、主の死を示して、そのきたりたもう時にまで及ぶなり。されば、よろしきになわすして主のパンを食し、主の杯を飲む者は主のからだを犯すなり

### 特別序唱

コリント前書一章二六、二七節

ことに我らの主イエスキリストは、世にあるおのれの者を愛し、きわみまで愛したまえり。主はわたさるる夜、弟子たちとともに食卓につき、この聖餐を定めたまえり。これ我らをして主の苦しみよりいずる恵みを受け、そのよみがえりによりて生かされ、主の神性にあずかしめんがためなり。（ゆえに）

陪餐後禱

神よ、しもべらに御子の尊きからだと血にあずかることを得させたまえり。願わくは我らをきよめて、いよいよ御子に似ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒または福音記者の日

奉獻唱

なんじの子らは先祖たちに代わりて立ち、なんじは彼らを全地に君となさん。我なんじの名をよらず代に知らしめん。ゆえにもろもろの民は世々限りなくなんじに感謝すべし

特別序唱

ことに御子・我らの主イエス・キリストにより聖——を召して使徒（福音記者）となしたまいしことを感謝し奉る。これ我らがその伝えし教えを守り、すべての人に恐れなく福音を宣べ伝えんがためなり。（ゆえに

陪餐後禱

全能の神よ、主は御子によりて（福音記者）使徒聖——を召し、もろもろの恵みをあたえ、地のはてまで福音を宣べ伝えしめたまえり。願わくは我らに恵みをあたえ、彼らの伝えし教えを守り、その模範にならいて、御国をひろむることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖徒日

奉獻唱

主よ、すべてのみわざはなんじに感謝し、なんじの聖徒はなんじをほめたたえん

特別序唱

主は聖徒により我らにきよき生涯の模範を与え、我らの召されし望みを堅くしたまえり。これ我らも多くのあかしびとに雲のごとく囲まれ、忍耐をもつて信仰の馳せ場を走り、ともに朽ちぬ栄光の冠を得んがためなり。（ゆえに

陪餐後禱

神よ、あがなわれし者は地のはてより御前につどい、御使いととも主をあがむるなり。願わくは我らに御力を与え、聖徒の模範にならい、勇ましく世と肉と悪魔とに向かい戦い、御名の栄光をあらわし、ついに御国に至ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

礼拝堂聖別または聖堂記念日

奉獻 献唱

この宮の後の栄えは、さきの栄えよりも大いならんと、万軍の主言いたもう

特別序唱

主のみいつは限りなく、天も地も主を入れ奉るに足らず。されど主は礼拝のために堂をきよめ、信ずる者に恵みを与うるを良しとしたまえり。(ゆえに)

陪餐後祷

全能の神よ、願わくは御名の栄光のためにささげられしこの堂にて、主に祈る人の願いを聞き召し、豊かなる恵みを与えたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

逝去者記念

奉獻唱

今よりのち主にありて死ぬる死人は幸いなり。御霊も言いたもう、彼らはその働きをやめて休まん

黙示録一四章一三節

特別序唱

ことに御子イエス・キリストによりて、我らによみがえりの望みを与えたまいしこと



を感謝し奉る。我らは死すべき定めを喰くとも、どこしえの命の約束によりて慰めを受くるなり。そは信ずる者の命は奪わるるにあらずして化するなり。この世の幕屋は朽つるとも、主はどこしえの住みかを天に備えたもうなり。(ゆえに

## 陪餐後禱

あわれみ深き全能の神よ、願わくは世を去りししもべ(――)の魂をみそなわし、とこしえの光明と平安とを与え、主の全き御旨をなしとげたまわんことを、父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## その他の時

## 奉獻唱

われ感謝のいけにえをなんじにささげ、主の御名を呼びまつらん。我わが誓いを主に果たさん、主のすべての民の前にてはたさん

## 陪餐後禱

詩二六篇一七、一八節

神よ、しもべらに御子の尊きからだと血にあずかることを得させたまえり。願わくは

我<sup>われ</sup>ら<sup>を</sup>清<sup>きよ</sup>めて、いよいよ御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>の神<sup>しん</sup>性<sup>せい</sup>にあ<sup>を</sup>ずか<sup>る</sup>こと<sup>を</sup>得<sup>え</sup>させたま<sup>え</sup>え。我<sup>われ</sup>ら<sup>の</sup>救<sup>すく</sup>いのた<sup>た</sup>  
め<sup>に</sup>人<sup>じん</sup>性<sup>せい</sup>をと<sup>と</sup>りたま<sup>い</sup>し御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>イエス<sup>ス</sup>キリス<sup>ト</sup>によりてこ<sup>こ</sup>いね<sup>が</sup>い奉<sup>をさ</sup>る。ア<sup>ア</sup>ー<sup>メン</sup>メン

## 再度の聖別

司祭は聖品が分餐の途中で尽きないように特に注意しなければならない。万一尽きたときは次の祈りを用いて兩種を聖別する。

あわれみ深き父よ、我らの祈りを聞こし召し、このパンとぶどう酒を受け、みことばと聖靈によりて、これを祝し、聖となして、御子イエス・キリストの尊きからだと血にあずかることを得させたまえ

主イエスわたさるる夜、パンを取り、(この時パンを手にとる) 謝して後これを裂き、弟子に与えて言いたまいけるは、取りて食せよ。これはなんじらのために与うるわがからだなり。なんじらわが記念としてこれを行なえ。またゆうげ終わりしのち、杯を取りて(この時杯を手にとる) 謝し、彼らに与えて言いたまいけるは、なんじら皆この杯より飲め。これは新約のわが血にして、罪を赦さんとて、なんじら及び多くの人のために流すところのものなり。なんじら飲むごとに、わが記念としてこれを行なえ。

# 特禱・使徒書・福音書

特禱は他に定めがあるときのほかは当日の前夕から用いる。

主日の特禱・使徒書・福音書は他の指定がない限り、その週の間、毎日用いる。

特禱が「主イエス・キリストによりてこいねがい奉る」、または同様の語で終わる時は、これにかえて、「父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る」と言ってもよい。

## 降臨節第一主日

特禱は降誕日の備え日（前日）の朝まで、毎日その日の特禱につづいて用いる。

### 特禱

全能の神よ、御子イエス・キリストは我らを顧み、卑しきさまにて、このはかなき世にくだりたまえり。願わくは今くらきわざを脱ぎ、光のよろいを着る恵みをあたえ、終わりの日に生ける人と死ねる人をさばかんとて、大いなる栄光をもつて再びくだりたもうとき、とこしえの命に入ることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治

めたもう主イエスしゅキリストによりてこいねがい奉るこぞう。アーメン

使徒書しと ロマ一三章八一—四

なんじら互たがいに愛を負うおのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。それ、「姦淫かんいんするなかれ、殺すなかれ、盗むぬすなかれ、むさぼるなかれ」と言える、このほかなお戒めありとも、「おのれのごとく隣を愛すべし」という言葉のうちにみなこもるなり。愛は隣をそこなわず、このゆえに愛は律法を全うするなり。なんじら時を知るゆえに、いよいよしかなすべし。今は眠りよりさむべき時なり。はじめに信ぜし時よりも今は我らの救い近ければなり。夜ふけて日近づきぬ、されば我ら暗きくらのわざをすて光のよろいを着るべし。昼のごとく正しく歩みて宴楽・酔酒に、淫楽・好色に、争い・ねたみに歩むべきにあらず。ただなんじら主イエスしゅキリストを着よ、肉の欲のために備えすな。

福音書ふくいん マタ二二章一一—三

彼らエルサレムに近づき、オリブ山のほとりなるベテパゲに至りし時、イエスふたりの弟子をつかわさんとして言いたもう、「向かいの村に行け、やがてつなぎたるるば

その子とともにあるを見ん、解きて我に引ききたれ。たれかもし、なんじらに何と  
か言わば『主の用なり』と言え、さらば直ちにこれをつかわさん。この事の起こりし  
は預言者によりて言われたる言葉の成就せんためなり。いわく、「シオンの娘に告げ  
よ、見よ、なんじの王、なんじにきたりたもう。柔和にしてろばに乗り、くびきを負  
うろばの子に乗りて」。弟子たち行きて、イエスの命じたまえるごとくして、ろばと  
その子とを引ききたり、おのが衣をその上に置きたれば、イエスこれに乗りたもう。  
群衆の多くはその衣を道に敷き、ある者は木の枝を切りて道に敷く。かつ前に行きあ  
とに従う群衆よばわりて言う、「ダビデの子にホサナ、ほむべきかな、主の御名によ  
りてきたる者。いと高きところにてホサナ」。ついにエルサレムに入りたまえば、都  
こぞりて騒ぎ立ちて言う、「これはたれなるぞ」。群衆いう、「これガリラヤのナザレ  
よりいでたる預言者イエスなり」。イエス宮に入り、その内なるすべての売り買いす  
る者を追いいだし、両替する者の台・はとを売る者の腰掛を倒して言いたもう、「わ  
が家は祈りの家となえらるべし」とするされたるに、なんじらはこれを強盗の巢と  
なす」。

降臨節第二主日

特禱

我らを教うるために聖書をしるさせたまひし主よ、願わくは、これを聞き、これを讀み、ねんごろに学び、かつ味わいて魂の養いとなさしめたまえ。また願わくは御言葉によりて強められ、耐え忍ぶことを習い、御子によりて授けたまえる限りなき命の望みをいただき、常にこれを保つことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ローマ　一五章四―一三

はやくよりしるされたところは、みな、我らの教えのためにしるししものにして聖書の忍耐と慰めとによりて望みを保たせんとてなり。願わくは忍耐と慰めとの神、なんじらをしてキリスト・イエスにならい、互いに思いを同じゅうせしめたまわんことを。これなんじらが心を一つにし口を一つにして我らの主イエス・キリストの父なる神をあがめんためなり。このゆえにキリストなんじらを入れたまいしごとく、なんじ

からも互いに相いれて神の榮光を現わすべし。われ言う、キリストは神の真理のために割礼の役者となりたまえり。これ先祖たちの被りし約束を堅うしたまわんため、また異邦人もあわれみによりて神をあがめんためなり。しるして、「このゆえに、われ異邦人のうちにてなんじをほめたたえ、またなんじの名を歌わん」とあるがごとし。またたいわく、「異邦人よ、主の民とともに喜べ」。またたいわく、「もろもろの国びとよ、主をほめまつれ、もろもろの民よ、主をたたえまつれ」。またイザヤ言う、「エッサイのひこばえ生じ、異邦人を治むるもの起こらん。異邦人は彼に望みをおかん」。願わくは望みの神、信仰よりいずるすべての喜びと平安とをなんじらに満たしめ、聖靈の力によりて望みを豊かならしめたまわんことを。

福音書 ルカ 二二章二五—三三

「また日、月、星にしるしあらん。地にては国々の民なやみ、海と波との鳴りとどろくによりてうろたえ、人々おそれ、かつ世界にきたらんとすることを思いて肝を失わん。これ天の万象、ふるい動けばなり。そのとき人々、人の子の力と大いなる榮光とをもて、雲に乗りきたるを見ん。これらのこと起こり初めなば、仰ぎてこうべをあげ



よ。なんじらの贖い、近づけるなり」。また譬を言いたもう、「いちじくの木、またすべての木を見よ、すでに芽ざせば、なんじらこれを見てみずから夏の近きを知る。かくのごとくこれらのことの起こるを見よ、神の国の近きを知れ。我まことになんじらに告ぐ、これらの事ことごとく成るまで、今の代は過ぎゆくことなし。天地は過ぎゆかん、されどわが言葉は過ぎゆくことなし」。

降臨節第三主日

特禱

主イエス・キリストよ、始めにくだりたまひし時、主にさきだちて道を備うる使いをつかわしたまへり。願わくは今、主の奥義をつかさどる仕えびとをめぐみ、もとれる者の心を正しき人の悟りに帰らす力を与えて主の道を備うることを得させ、再びくだりて世をさばきたもうとき、我らを御心にかのう民となしたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもうなり。アーメン

使徒書・コリ前四章一―五

人、よろしく我らをキリストの役者また神の奥義をつかさどる家づかさのごとく思ふべし。さて家づかさに求むべきは忠実ならんことなり。我はなんじらにさばかれ、あるいは人のさばきによりてさばかることをいと小さき事とし、またみずからもおのれをさばかず。我みずから責むべきところあるを覚えねど、これによりて義とせらるる事なければなり。我をさばきたもう者は主なり。されば主のきたりたもうまでは時に先だちてさばきすな。主は暗きにある隠れたる事を明らかにし、心のはかりごとを現わしたまわん。そのときおのおの神よりその誉れを得べし。

福音書 マタ 一 章 二一—一〇

ヨハネ獄中にてキリストのみわざを聞き、弟子たちをつかわして、イエスに言わしむ、「きたるべき者はなんじなるか、あるいはほかに待つべきか」。答えて言いたもう、「行きて、なんじらが見聞きするところをヨハネに告げよ。目しいは見、足なえは歩み、らい病人は清められ、耳しいは聞き、死人はよみがえらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おおよそ我につまずかぬ者はさいわいなり」。彼らの帰りたるおり、ヨハネの事を群衆に言いいでたもう、「なんじら何をながめんとて野にいでし、風に

そよく葦あしなるか。さらば何を見んとていでし、柔らかき衣きを着たる人なるか。見よ、柔らかき衣きを着たる者は王おうの家にあり。さらば何のためにいでし、預言者よげんしゃを見んとてか。しかり、なんじらに告ぐ、預言者よげんしゃよりもさる者なり。『見よ、わが使いつかいをなんじの前につかわす。彼はなんじの前に、なんじの道を備えん』としるされたるはこの人なり』。

### 降臨節第四主日こうりんせつだい しゅじつ

特禱は降誕日の備え日（前日）の朝まで用いる。

特禱

主よ、御力みちからをあらわして我らのうちにきたり、大いなるいきおいをもつて助けたまえ。我らは罪に妨げられて、おのが前に置かれたる恥せ場はぢばを走るに、いたく苦しむゆえ、豊かなる恵みをもつてすみやかに我らを救いたまえ。主は父と聖靈とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

使徒書　ピリ　四章四―七

なんじら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。すべての人になんじらの寛容を知らしめよ、主は近し。何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝してなんじらの求めを神に告げよ。さらばすべて人の思いにすぐる神の平安はなんじらの心と思いとをキリストイエスによりて守らん。

福音書 ヨハ一章一九—二八

さてユダヤびと、エルサレムより祭司とレビびととをヨハネのもとにつかわして、「なんじはたれなるか」と問わせし時、ヨハネのあかしはかくのごとし。すなわち言ひあらわしていなまず、「我はキリストにあらず」と言ひあらわせり。また問う、「さらば何、エリヤなるか」。答う、「しからず」。問う、「かの預言者なるか」。答う、「いな」。ここに彼ら言う、「なんじはたれなるか、我らをつかわしし人々に答えるようにせよ、なんじおのれにつきて何と言うか」。答えて言う。「我は預言者イザヤの言えるがごとく、『主の道を直くせよと、荒野に呼ばわる者の声』なり」。かのつかわされたる者は、パリサイびとなりき。また問いて言う、「なんじもしキリストにあらず、またエリヤにも、かの預言者にもあらずば、なにゆえバプテスマを施すか」。

ヨハネ答えて言う、「我は水にてバプテスマを施す。なんじらのうちになんじらの知らぬ者ひとり立てり。すなわちわが後にきたる者なり。我はそのくつのひもを解くにも足らず」。これらの事は、ヨハネのバプテスマを施したりしヨルダンの向かいなるベタニヤにてありしなり。

降誕日

十二月二十五日

特禱は十二月三十一日の夕まで用いる。

特禱

全能の神よ、ひとりの御子を我らに与え、これをして人性をとり、この時、清きおとめより生まれしめたまえ。願わくは我ら恵みによりて再び生まれ、神の子とせられし者、日々聖霊によりて新たになることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にまします主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ヘブ一章一一二

神むかしは預言者たちにより、多くに分ち、多くの方法をもて先祖たちに語りたま

いしが、この末の世には御子によりて、我らに語りたまえり。神はかつて御子を立ててよろずの物の世継ぎとなし、また御子によりてもろもろの世界を造りたまえり。御子は神の栄光のかがやき、神の本質の形にして、おのが力の言葉をもてよろずの物を保ちたもう、また罪の清めをなして、高き所にあるみいつの右に座したまえり。その受けたまいし名の御使いの名にまされることく、御使いよりはさらにまさる者となりたまえり。神はいずれの御使いに、かつてかくは言いたまいしぞ、「なんじはわが子なり、われきょうなんじを生めり」と。また「われ彼の父となり、彼わが子とならん」と。また初子をふたたび世に入れたもうとき、「神のすべての使いはこれを拜すべし」と言いたもう。また御使いたちにつきては「神は、その使いたちを風となし、その仕うる者を炎となす」と言いたもう。されど御子につきては、「神よ、なんじの御位は世々限りなく、なんじの国のつえは正しきつえなり。なんじは義を愛し、不法をにくむ。このゆえに神なんじの神は、喜びの油をなんじの友にまさりてなんじにそそぎたまえり」と。また、「主よ、なんじ初めに地の基をおきたまえり、天も御手のわざなり。これらは滅びん、されどなんじは常に長らえたまわん、これらはみな衣のごとく

古びん。しかしてなんじこれらを上着のごとくたたみたまわん、これらは衣のごとく  
 変わらん。されどなんじは変わりましたもうことなく、なんじのよわいは終わらざるな  
 り」と言いたもう。

福音書 ヨハ一章一―一四

初めにことばあり、ことばは神とともにあり、ことばは神なりき。このことばは初めに  
 神とともにあり、よろずの物これによりて成り、成りたる物に一つとしてこれによ  
 らで成りたるはなし。これに命あり、この命は人の光なりき。光は暗きに照る、しか  
 して暗きはこれを悟らざりき。神よりつかわされたる人いなり、その名をヨハネと  
 いう。この人はあかしのためにきたれり、光につきてあかしをなし、またすべての人  
 の彼によりて信ぜんためなり。彼は光にあらず、光につきてあかしせんためにきたれ  
 るなり。もろもろの人を照らすまことの光ありて、世にきたれり。彼は世にあり、世  
 は彼によりて成りたるに、世は彼を知らざりき。彼はおのれの国にきたりしに、おの  
 れの民はこれを受けざりき。されどこれを受けし者、すなわちその名を信ぜし者には、  
 神の子となる権を与えたまえり。かかる人は血筋によらず、肉の願ひによらず、

人の願ねがいによらず、ただ神かみによりて生うまれしなり。ことばは肉にく体たいとなりて我われらのうちに宿やどりたまえり、我われらその榮えい光こうを見みたり、げに父ちちのひとり子この榮えい光こうにして恵めぐみと真しん理りとにて満みてり。

## 聖せいステパノ日び

十二月二十六日

特とく 祷とう

神かみよ、願ねがわくはこの世よにおいて主しゅの道みちをあかしし、悩なやみに会あう時ときは、一いつ心しんに天てんを仰あおぎ、信しん仰ようをもつて後のちにあらわるべき榮えい光こうを望のぞましめたまえ。また聖せい靈れいに満みたされて、はじめの殉しゆん教ぎょう者しや聖せいステパノが、おのれを殺ころす者のために祈いのりし模も範はんに従したがひ、我われらを悩なやます者を愛あいし、これを祝いわふことを得えさせたまえ。神かみの右みぎに立たちて、御み名なのために苦くるしめらるる者ものを救すくいたもう我われらの唯一ゆいの仲なか立たち・尊そとき主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

使し 徒と 書しょ 使し 七しち章しやう五ご五ご一いつ六ろく〇

ステパノは聖せい靈れいにて満みち、天てんに目めを注そそぎ、神かみの榮えい光こうおよびイエスの神かみの右みぎに立たちたも



うを見て言う、「見よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ちたまうを見る」。ここに彼ら大声に叫びつつ耳をおおい心を一つにして駆け寄り、ステパノを町より追いいだし、石にて打てり。証人らその衣をサウロという若者の足もとに置きけり。かくて彼らがステパノを石にて打てるとき、ステパノ呼びて言う、「主イエスよ、わが霊を受けたまえ」。またひざまずきて大声に、「主よ、この罪を彼らに負わせたもうな」と呼ばれる。かく言いて眠りにつけり。

福音書 マタ二三章三四—三九

見よ、我なんじらに預言者・知者・学者らをつかわさんに、そのうちのある者を殺し、十字架につけ、ある者をなんじらの会堂にてむちうち、町より町に追い苦しめん。これによりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との間にてなんじらが殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上にて流したる正しき血は、みななんじらに報いきたらん。まことになんじらに告ぐ、これらのことはみな今の代に報いきたるべし。ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、つかわされたる人々を石にて打つ者よ、めんどりのそのひなを翼の下に集むることく、我なんじの子どもを集めんとせし

こと幾たびぞや、されどなんじらは好まざりき。見よ、なんじらの家は捨てられてなんじらに残らん。我なんじらに告ぐ、「ほむべきかな、主の名によりてきたる者」と、なんじらの言うときの至るまでは今より我を見ざるべし。

福音記者 使徒聖ヨハネ日

十二月二十七日

特 待

あわれみ深き主よ、願わくは御光を公会の上に放ち、福音記者 使徒聖ヨハネの教えによりて、真理の光のうちを歩み、ついに限りなき命の光に至らせたまえ。主イエスⅡ  
キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使 徒 書 ヨハ壹一章一—一〇

初めよりありしところのもの、我らが聞きしところ、目にて見しところ、つらつら見て手ざわりしところのもの、すなわち命の言葉につきて、——この命すでに現われ、我らこれを見てあかしをなし、そのかつて父とともにいまして今我らに現われたまえ、とこしえの命をなんじらに告ぐ——我らの見しところ、聞きしところをなんじら

に告ぐ、これなんじらをも我らの交わりにあずからしめんためなり。我らは父およびその子イエス・キリストの交わりにあずかるなり。これらのことを書き送るは、我らの喜びの満ちんためなり。我らが彼より聞きて、またなんじらに告ぐるおとずればこれなり、すなわち神は光にして少しの暗きところなし。もし神と交わりありと言いて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理を行なわざるなり、もし神の光のうちにいますごとく光のうちを歩まば、我ら互いに交わりを得、またその子イエスの血、すべての罪より我らを清む。もし罪なしと言わば、これみずから欺けるにて真理我らのうちになし。もしおのれの罪を言い表わさば、神はまことにして正しければ我らの罪を赦し、すべての不義より我らを清めたまわん。もし罪を犯したる事なしと言わば、これ神を偽り者とするなり、神のことは我らのうちになし。

## 福音書 ヨハ二二章一九―二五

イエス、ペテロに言いたもう、「われに従え」。ペテロふり返りてイエスの愛したまひし弟子の従うを見る。これはさきに夕げのとき御胸によりかかりて、「主よ、なんじを売る者はたれか」と問いし弟子なり。ペテロこの人を見てイエスに言う、「主よ、

この人はいかに」。イエス言いたもう、「よしや我、彼が我のきたるまでとどまるを欲すとも、なんじに何のかかわりあらんや、なんじは我に従え」。ここに兄弟たちのうちに、この弟子死なずという話つたわりたり。されどイエスは死なずと言いたまいしにあらず、「よしや我、彼が我のきたるまでとどまるを欲すとも、なんじに何のかかわりあらんや」と言いたまいしなり。これらの事につきてあかしをなし、またこれをするしし者は、この弟子なり、我らはそのあかしのまことなるを知る。イエスの行ないたまひし事は、このほかなお多し、もし一つ一つしるさば、われ思うに世界もそのしるすところの書を載するに耐えざらん。

## 聖 嬰 児 日

十二月二十八日

特 待

全能の神よ、むかし幼な子は口の言葉によらず、その死をもつて主の栄光をあらわせり。願わくは我らの心の罪惡を殺し、御恵みをもつて我らを強め、清き生涯を送らせ、死に至るまで信仰を保ちて、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエ

ス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 黙一四章一一五

われ見しに、見よ小羊シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人、これとともにおり、その額には小羊の名および小羊の父の名、しるしあり。われ天よりの声を聞けり、多くの水の音のごとく、大いなるいかずちの声のごとし。わが聞きしこの声は琴ひきの立琴をひく音のごとし。彼ら新しき歌を御位の前および四つの生き物と長老たちとの前にて歌う。この歌は地より贖われたる十四万四千人のほかはたれも學びうる者なかりき。彼らは女に汚されぬ者なり、清き者なり、いずこにもあれ小羊の行きたもうところに従う。彼らは人のうちより贖われて神と小羊とのために初穂となれり。その口は偽りなし、彼らは傷なき者なり。

福音書 マタ二章一三一—一八

見よ、主の使い、夢にてヨセフに現われて言う、「起きて、幼な子とその母とを携え、エジプトにのがれ、わが告ぐるまでかしこにとどまれ。ヘロデ幼な子を求めて滅ぼさんとするなり」。ヨセフ起きて、夜の間に幼な子とその母とを携えて、エジプトに去

りゆき、ヘロデの死ぬるまでかしこにとどまりぬ。これ主が預言者によりて、「我エジプトよりわが子と呼びいだせり」と言いたまいし言葉の成就せんためなり。ここにヘロデ、博士たちにすかされたりと悟りて、はなはだしく憤り、人をつかわし、博士たちによりてつまびらかにせし時をはかり、ベツレヘムおよびすべてそのほとりの地方なる二才以下の男の子をことごとく殺せり。ここに預言者エレミヤによりて言われたる言葉は成就したり。いわく、「声ラマにありて聞こゆ、嘆きなり、いとどしき悲しみなり。ラケルおのが子らを嘆き、子らのなきゆえに慰めらるるをいとう」。

### 降誕後第一主日

特 祷

全能の神よ、ひとりの御子を我らに与え、これをして人性をとり、この時、清きおとめより生まれしめたまえり。願わくは我ら恵みによりて再び生まれ、神の子とせられし者、日々聖霊によりて新たになることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にまします主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ガラ 四章 一―七

われ言う、世<sup>よ</sup>継<sup>つ</sup>ぎは全業<sup>ぜんぎやう</sup>の主<sup>しゆ</sup>なれども、おとなとならぬ間<sup>あひだ</sup>はしもべと異なることな  
く、父<sup>ちち</sup>の定めし時<sup>とき</sup>の至<sup>いた</sup>るまでは後見人<sup>こうけんじん</sup>と家令<sup>かれい</sup>との下<sup>した</sup>にあり。かくのごとく我<sup>われ</sup>らもおと  
なとならぬほどは、世<sup>よ</sup>の小学<sup>しうがく</sup>の下<sup>した</sup>にありてしもべたりしなり。されど時満<sup>ときみ</sup>つるにおよ  
びては、神<sup>かみ</sup>その御子<sup>みこ</sup>をつかわし、これを女<sup>おんな</sup>より生まれしめ、律法<sup>りつぽう</sup>の下<sup>した</sup>に生まれしめた  
まえり。これ律法<sup>りつぽう</sup>の下<sup>した</sup>にある者<sup>もの</sup>をあがない、我<sup>われ</sup>らをして子<sup>こ</sup>たることを得<sup>え</sup>しめんためな  
り。かくなんじら神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>たるゆえに、神<sup>かみ</sup>は御子<sup>みこ</sup>の御霊<sup>みたま</sup>を我<sup>われ</sup>らの心<sup>こころ</sup>につかわして「ア  
バ、父<sup>ちち</sup>」と呼<sup>よ</sup>ばしめたもう。されば、もはやなんじはしもべにあらず、子<sup>こ</sup>たるなり、  
すでに子<sup>こ</sup>たらばまた神<sup>かみ</sup>によりて世継<sup>よつ</sup>ぎたるなり。

福音書 マタ 一章 一八―二五

イエス<sup>イエス</sup>キリストの誕生<sup>たんじやう</sup>は、左<sup>ひだり</sup>のごとし。その母<sup>はは</sup>マリヤ、ヨセフといいなすけしたる  
のみにて、いまだともにならざりしに、聖霊<sup>せいれい</sup>によりて身<sup>み</sup>ごもり、その身<sup>み</sup>ごもりたるこ  
と現<sup>あら</sup>われたり。夫<sup>おと</sup>ヨセフは正<sup>ただ</sup>しき人<sup>ひと</sup>にしてこれを公<sup>おお</sup>けにするを好<sup>この</sup>まず、ひそかに離縁<sup>りえん</sup>  
せんと思<sup>おも</sup>う。かくて、これらの事<sup>こと</sup>を思<sup>おも</sup>いめぐらしおるとき、見<sup>み</sup>よ、主<sup>しゆ</sup>の使<sup>つか</sup>い、夢<sup>ゆめ</sup>に現<sup>あら</sup>

われて言う、「ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを入る事をおそるな。その胎に宿る者は聖霊によるなり。彼、子を生まん、なんじその名をイエスと名づくべし。おのが民をその罪より救いたもうゆえなり」。すべてこの事の起こりしは、預言者によりて主の言いたまいし言葉の成就せんためなり。いわく、「見よ、おとめ身ごもりて子を生まん。その名はインマヌエルとなえられん」。これをとけば、「神われらとともにいます」というところなり。ヨセフ眠りより起き、主の使いの命ぜしごとくして妻を入れたり。されど子の生まるまでは、相知る事なかりき。かくてその子をイエスと名づけたり。

### 主イエス命名日（受割礼日）

一月一日

特禱・使徒書・福音書は顕現日の前日の朝まで毎日用いる。

特禱  
特禱

全能の神よ、主は御子に割礼を受けしめ、これにもろもろの名にまさる名を賜いてイエスとなえしめたまえり。願わくはこの御名によりて、御民に力とやすきを与え、



その尊き御名を万国に宣べ伝うることを得させたまえ。御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 使四章八一―二

この時ペテロ聖霊にて満たされ、彼らに言う、「民のつかさたちおよび長老たちよ、我らが病める者になしし良きわざにつき、そのいかにして救われしかを、きようもしたださるるならば、なんじら一同およびイスラエルの民みな知れ、この人の健やかになりてなんじらの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、すなわちなんじらが十字架につけ、神が死人のうちよりよみがえらせたまいし者の名によることを。このイエスはなんじら家造りに軽しめられし石にして、すみの親石となりたるなり。ほかの者によりては救いを得ることなし、天の下には我らのたよりて救われるべきほかの名を、人にたまひし事なければなり」。

福音書 ルカ二章一五―二一

御使いたち、去りて天に行きしとき、羊飼ひ互いに語る、「いざ、ベツレヘムにいたり、主の示したまいし起これる事を見ん」。すなわち急ぎ行きて、マリヤとヨセフ

と、馬ぶねに伏したるみどり子とに尋ね会う。すでに見て、この子につき御使いの語りしことを告げたれば、聞く者はみな羊飼いの語りしことを怪しみたり。しかしてマリヤはすべてこれらのことを心にとめて思いまわせり。羊飼いは御使いの語りしごとくすべての事を見聞きせしにより神をあがめ、かつ賛美しつつ帰れり。八日みちて幼な子に割礼を施すべき日となりたれば、いまだ胎内に宿らぬさきに御使いの名づけしごとく、その名をイエスと名づけたり。

顕現日

一月六日

特 特

星の導きをもつて、ひとりの御子を異邦人にあらわしたまいし神よ、いま信仰によりて主を知る者を導き、後の世に主の栄光を見て樂しませたまわんことを、主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エペ 三章 一一二

このゆえになんじら異邦人のためにキリストイエスの囚人となれる我パウロ——な

んじらのために我にたまいたる神の恵みの經綸はなんじら聞きしならん、すなわち我  
 まえに簡単に書きおくりしごとく、この奥義は默示にて我に示されたり。なんじらこ  
 れを読みてキリストの奥義にかかわるわが悟りを知ることを得べし。この奥義は今御  
 霊によりて聖使徒と聖預言者と共に現わされしごとくに、前代には人の子らに示されざ  
 りき、すなわち異邦人が福音によりキリストイエスにありてともに世継ぎとなり、  
 ともに一体となり、ともに約束にあずかる者となる事なり。我はその福音の役者とせ  
 らる。これ神の力の働きに従いて我にたもう恵みの賜物によるなり。我はすべての聖  
 徒のうちのいと小さき者よりも小さき者なるに、キリストの測るべからざる富を異邦  
 人に伝え、また万物を造りたまひし神のうちに世々隠れたる奥義の經綸のいかなるも  
 のかを現わす恵みを賜わりたり。いま教会によりて神の豊かなる知恵を天のところに  
 ある政と權威とに知らしめんためなり。これはとこしえより我らの主キリストイエ  
 スのうちに、神の定めたまいし御旨によるなり。我らは彼にありて、彼を信ずる信仰  
 により、臆せず疑わずして神に近づくことを得るなり。

イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生まれたまいしが、見よ、東の博士たちエルサレムにきたりて言う、「ユダヤびとの王として生まれたまえる者は、いずこにいますか。我ら東にてその星を見たれば、拜せんためにきたれり」。ヘロデ王これを聞きて悩みまじう、エルサレムもみなしかり。王、民の祭司長・学者らをみな集めて、キリストのいずこに生まるべきを問いただす。彼ら言う、「ユダヤのベツレヘムなり。それは預言者によりて、『ユダの地ベツレヘムよ、なんじはユダの君たちのうちにていと小さき者にあらず、なんじのうちよりひとりの君いでて、わが民イスラエルを牧せん』としるされたるなり」。ここにヘロデひそかに博士たちを招きて、星の現われし時をつまびらかにし、彼らをベツレヘムにつかわさんとして言う、「行きて幼な子のことをこまかにたずね、これに会わば我に告げよ。我も行きて拜せん」。彼ら王の言葉を聞きて行きしに、見よ、前に東にて見し星、さきだちゆきて、幼な子のいますところの上にとどまる。彼ら星を見て、喜びにあふれつつ家に入りて、幼な子のその母マリヤとともにいますを見、ひれ伏して拜し、かつ宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬など礼物をささげたり。かくて夢にてヘロデのもとに帰るなどの御告げを

こうむり、ほかの道よりおのが国に去り行きぬ。

顕現後第一主日

特禱

主よ、あわれみを施して、主に呼ばれる民の祈りを受けたまわんことをこいねがい奉る。願わくは知恵と力とを与えて、そのなすべき事を悟り、忠実にこれを行のうことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ローマ　一二章　一―五

されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりてなんじらに勧む、おのが身を神のよろこびたもう清き生ける供え物としてささげよ、これ靈の祭りなり。またこの世になろうな。神の御心の善にして喜ぶべく、かつ全きことをわきまえ知らんために心を變えて新たにせよ。われ与えられし恵みによりて、なんじらのおのにおのに告ぐ、思うべきところを越えてみずからを高しとすな。神のおのにおのに分ちたまひし信仰の量りに従い、つつしみて思うべし。人は一つからだに多くの肢あれども、すべての肢その勵

きを同じゆうせぬごとく、我らも多くあれど、キリストにありて一つからだにして、おのおの互いに肢たるなり。

福音書　ルカ二章四一―五二

かくてその両親、過越の祭りには年ごとにエルサレムに行きぬ。イエスの十二才のとき、祭りのならわしに従いて上り行き、祭りの日終わって帰る時、その子イエスはエルサレムにとどまりたもう。両親はこれを知らずして、道連れのうちにおるならんと思ひ、一日路行きて、親族・知る辺のうちを尋ねれど、会わぬによりてまた尋ねつつエルサレムに帰り、三日のち、宮にて教師のなかに座し、かつ聞き、かつ問ひいたもうに会う。聞く者はみなそのさとときと答えとを怪しむ。両親イエスを見て、いたく驚き、母は言う、「子よ、なにゆえかかる事を我らにせしぞ、見よ、なんじの父と我と憂いて尋ねたり」。イエス言いたもう、「なにゆえ我を尋ねたるか、我はわが父の事をつとむべきを知らぬか」。両親はその語りたもう事を悟らず。かくてイエス彼らとともに下り、ナザレに行きて従ひ仕えたもう。その母これらの事をことごとく心に納む。イエス知恵も身のたけもいやまさり神と人とにますます愛せられたもう。

顯現後第二主日

特 待

限りなく生ける全能の神、天地万物を統べ治めたもう主よ、願わくは、あわれみをもつて主の民の祈りを聞こし召し、生涯主の平安を保たしめたまわんことを、主イエス  
|| キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ローマ一二章六一一六

われらが持つてゐる賜物はおのおの与えられし恵みによりて異なるゆえに、あるいは預言あらば信仰の量りに従いて預言をなし、あるいは務めあらば務めをなし、あるいは教えをなす者は教えをなし、あるいは勧めをなす者は勧めをなし、施す者は惜しみなく施し、治むる者は心を尽くして治め、あわれみをなす者は喜びてあわれみをなすべし。愛には偽りあらざれ。悪は憎み、善は親しみ、兄弟の愛をもてたがいにいつくしみ、礼儀をもて相譲り、努めて怠らず、心を熱くし、主に仕え、望みて喜び、悩みに耐え、祈りを常にし、聖徒の乏しきをにぎわし、旅びとをねんごろにもてなせ。なん

じらを責むる者を祝し、これを祝してのろうな。喜ぶ者とともに喜び、泣く者とともに泣け。相互に心を同じゅうし、高ぶるたる思いをなさず、かえって低きにつけ。

福音書 ヨハ二章一一

三日目にガリラヤのカナに婚禮ありて、イエスの母そこにおり、イエスも弟子たちとともに婚禮に招かれたもう。ぶどう酒尽きたれば、母、イエスに言う、「彼らにぶどう酒なし」。イエス言いたもう、「女よ、我となんじと何のかかわりあらんや、わが時はいまだきたらず」。母しもべどもに、「何にてもその命ずることとせよ」と言いく。かしこにユダヤびとの清めの例に従いて、おおよそ九十リットル入りの石がめ六つならべあり。イエスしもべに、「水をかめに満たせ」と言いたまえば、口まで満たす。また言いたもう、「今くみ取りてふるまいがしらに持ち行け」。すなわち持ち行けり。ふるまいがしら、ぶどう酒になりたる水をなめて、そのいずこよりきたりしかを知らざれば（水をくみししもべどもは知れり）はなむこを呼びて言う、「おおよそ人はまず良きぶどう酒をいだし、酔いのまわるころおい劣れるものをいだすに、なんじは良きぶどう酒を今までとめおきたり」。イエスこの第一のしるしをガリラヤの



カナにて行ない、その榮光を現わしたまいたれば、弟子たち彼を信じたり。

顯現後第三主日

特禱

限りなく生ける全能の神よ、あわれみをもつて我らの弱きを顧み、右の御手を伸べて我らを助け、危うき時も悩める時も常に守りたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　一二章一六―二一

なんじらおのれをさとしとすな。惡をもて惡に報いず、すべての人のまえに良からんことをはかり、なんじらのなしうるかぎり努めてすべての人と相和らげ。愛する者よ、みずから復讐すな、ただ神の怒りに任せまつれ。しるして、「主言いたもう、復讐するは我にあり我これを報いん」とあり。「もしなんじのあだ飢えなばこれに食わせ、かわかばこれに飲ませよ、なんじかくするは熱き火を彼のこうべに積むなり」。惡に勝たることなく、善をもて惡に勝て。

イエス山を下りたまひしとき、大なる群衆これに従う。見よ、ひとりのらい病人もとにきたり、拜して言う、「主よ、御心ならば、我を清くなしたもうを得ん」。イエス手をのべ、彼につけて、「わが心なり、清くなれ」と言いたまえば、らい病ただちに清まれり。イエス言いたもう、「つつしみてたれにも語るな、ただ行きておのれを祭司に見せ、モーセが命じたる供え物をささげて、人々にあかしせよ」。イエス、カペナウムに入りたまひしとき、百卒長きたり、請いていう、「主よ、わがしもべ、中風を病み、家に伏しいていたく苦しめり」。イエス言いたもう、「われ行きていやさん」。百卒長こたえて言う、「主よ、我はなんじをわが屋根の下に入れまつるに足らぬ者なり。ただ御言葉のみをたまえ、さらばわがしもべはいえん。我みずから權威の下にある者なるに、わが下にまた兵卒ありて、これに『行け』と言えば行き、彼に『きたれ』と言えばきたり、わがしもべに『これをなせ』と言えばなすなり」。イエス聞きて怪しみ、従える人々に言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、かかる厚き信仰はイスラエルのうちのひとりだに見しことなし。またなんじらに告ぐ、多くの

人、東より西よりきたり、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天国の宴につき、御国の子らは外の暗きに追ひいだされ、そこには嘆き・齒がみすることあらん。イエス百卒長に、「行け、なんじの信ずることくなんじになれ」と言いたまえば、このときしもべいえたり。

# 顯現後第四主日

特禱

神よ、我らが多くの危難に囲まれ、弱くして立つことあたわざることを知りたもう。願わくは御力を与えて我らを守り、すべての危難に耐え、すべての試みに打ち勝つことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ローマ　一三章　一―七

すべての人、上にある権威に従うべし。そは神によらぬ権威なく、あらゆる権威は神によりて立てらる。このゆえに権威に逆ろう者は神の定めにもとるなり、もとる者は自らそのさばきを招かん。長たる者は良きわざの恐れにあらず、悪しきわざの恐れな

り、なんじ權威を恐れざらんとするか、善をなせ、さらば彼より譽れを得ん。彼はなんじを益せんための神の役者なり、されど惡をなさば恐れよ、彼はいたずらに劍を帶びず、神の役者にして惡をなすものに怒りをもて報ゆるなり。されば従わざるべからず、ただに怒りのためのみならず、良心のためなり。またこれがために、なんじらみつぎを納む、彼らは神の仕えびとにしてこの務めに勵むなり。なんじらその負債をおののに償え、みつぎを受くべき者にみつぎを納め、税を受くべき者に税を納め、おそるべき者を恐れ、尊ぶべき者を尊べ。

福音書 マタ 八章二三—三四

イエズス舟に乗りたまえば、弟子たちも従う。見よ、海におおなるあらし起こりて、舟、波におおわるるばかりなるに、イエスは眠りいたもう。弟子たちみもとに行き、起こして言う、「主よ、救いたまえ、我らはほろぶ」。彼らに言いたもう、「なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ」。すなわち起きて、風と海とを戒めたまえば、大いなるなぎとなりぬ。人々怪しみて言う、「こはいかなる人ぞ、風も海も従うとは」。イエズスかなたに渡り、ガダラびとの地に行きたまいし時、惡靈につかれたるふたりの者、

墓よりいできたりてこれに会う。そのたけきことはなはだしく、その道を人の過ぎ得ぬほどなり。見よ、彼ら叫びて言う、「神の子よ、我らなんじと何のかかわりあらん。いまだ時いたらぬに、我らを責めんとてここにきたりたもうか」。はるかにへだたりて多くの豚のひと群れ、食しいたりしが、悪霊ども請いて言う、「もし我らを追いいださんとならば、豚の群れにつかわしたまえ」。彼らに言いたもう、「行け」。悪霊いでて豚に入りたれば、見よ、その群れみながけより海に駆け下りて、水に死にたり。飼う者ども逃げて町に行き、すべての事と悪霊につかれたりし者の事とを告げたれば、見よ、町びとこぞりてイエスに会わんとていできたり、彼を見て、この地方より去りたまわんことを請えり。

顕現後第五主日

特禱

神よ、絶えざる御恵みをもつて主の家族なる公会を守りたまえ。願わくは一心に天の恵みを望む者を、御力をもつて常に助けたまわんことを、主イエスキリストにより

てこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コロ三章一二一七

このゆえになんじらは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・  
なさけ・謙そん・柔和・寛容を着よ。また互いに忍びあい、もし人に責むべき事あら  
ば互いに赦せ、主のなんじらを赦したまえるごとくなんじらもしかすべし。すべてこ  
れらのものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。キリストの平和をしてなん  
じらの心をつかさどらしめよ、なんじらの召されて一体となりたるは、これがためな  
り、なんじら感謝の心をいだけ。キリストの言葉をして豊かになんじらのうちに住ま  
しめ、すべての知恵によりて、詩と賛美と靈の歌とをもて、互いに教え、互いに訓戒  
し、恵みに感じて心のうちに神を賛美せよ。又なすところのすべての事、あるいは言  
葉あるいは行ない、みな主イエスの名によりてなし、彼によりて父なる神に感謝せよ。

福音書　マタ一三章二四一三〇

イエスまたほかの譬を示して言いたもう、「天国は良き種を畑にまく人のごとし。人  
人の眠れる間に、あだきたりて麦のなかに毒麦をまきて去りぬ。苗はえいでて実りた

るとき、毒麦どくむぎもあらわる。しもべどもきたりて家いえあるじに言う、『主よ、畑はたにまきしは良よき種たねならずや、しかるにいかにして毒麦どくむぎあるか』。主人しゅじんいう、『あだのなしたるなり』。しもべども言う、『さらば我われらが行ゆきてこれを抜き集あつむるを欲ほつするか』。主人しゅ人じんいう、『いな恐おそらくは毒麦どくむぎを抜き集あつめんとて麦むぎをもともに抜ぬかん。ふたつながら刈かり入れまで育そだつに任せよ。刈り入れのとき我われ刈かる者ものに、まず毒麦どくむぎを抜き集あつめて、焼やくためにこれをつかね、麦むぎは集あつめてわが倉くらに入れよ』と言いわん』。

# 顕現けんげん後ご第六だいろく主しゅ日じつ

特とく 禱とう

神かみよ、ひとりの御子みこは惡魔あくまのわざをこぼち、我われらを神かみの子こ・天國てんこくの世継よつぎとなさんとて世よに現あらわれたまえり。願ねがわくは我われらこの望のぞみをいだきて御子みこの清きよきがごとくおのれを清きよくし、ついに大いなる威光いこうをもつて再び現あらわれたもうとき、天てんの御國みくにに至いたりて御子みこに似にることを得えさせたまえ。父ちちと聖靈せいれいとともに一体いつたいの神かみにましまして世々よよ統すべ治おさめたもう主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉ほうる。アーメン

使徒書 ヨハ一三章二一八

見よ、父の我らに賜いし愛のいかに大いなるかを。我ら神の子となえらる。すでに神の子たり、世の我らを知らぬは、父を知らぬによりてなり。愛する者よ、我らいま神の子たり、後いかん、いまだ現われず、主の現われたもうとき我らこれに似んことを知る。我らそのまことの様を見るべければなり。すべて主によるこの望みをいだく者は、その清きがごとくおのれを清くす。すべて罪を行のう者は不法を行のうなり。罪はすなわち不法なり。なんじらは知る、主の現われたまいしは、罪を除かんためなるを。主には罪あることなし。おおよそ主におる者は罪を犯さず、おおよそ罪を犯す者はいまだ主を見ず、主を知らぬなり。わが子よ、人に惑わさるな、義を行のう者は義人なり、すなわち主の義なるがごとし。罪を行のう者は悪魔よりいず、悪魔は初めより罪を犯せばなり。神の子の現われたまいしは、悪魔のわざをこぼたんためなり。

福音書 マタ二四章二三一三一

イエス言いたもう、「その時あるいは『見よ、キリストここにあり』、あるいは『ここにある』と言う者ありとも信ずな。にせキリスト、にせ預言者おこりて大いなるしる



しと不思議とを現わし、なし得べくば選民をも惑わさんとするなり。見よ、あらかじめこれをなんじらに告げおくなり。されば人もしなんじらに『見よ、彼は荒野にあり』と言うともいで行くな、『見よ、彼はへやにあり』と言うとも信ずな。いなずまの東よりいでて西にまでひらめきたるごとく、人の子のきたるもまたしからん。それ死体のある所には、わし集まらん。これらの日の悩みの後ただちに日は暗く、月は光をはなたず、星は空より落ち、天の万象、ふるい動かん。そのとき人の子のしるし、天に現われん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の力と大いなる栄光とをもて天の雲に乗りきたるを見ん。また彼は使いたちを大いなるラッパの声とともにつかわさん。使いたちは天のこのはてより、かのはてまで四方より選民を集めん」。

大齋前第三主日

特禱

主よ、恵みをもつて主の民の祈りを聞きたまえ。願わくは罪のために罰を受くべき者をあわれみ、御名の栄光のために救いたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまし

て世々統べ治めたもう救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ前九章二四―二七

なんじら知らぬか、馳せ場を走る者はみな走れども、ほうびを得る者の、ただひとりなるを。なんじらも得んためにかく走れ。すべて勝ちを争う者はなにごとをも節し、慎む、彼らは朽つる冠を得んがためなれど、我らは朽ちぬ冠を得んがためにこれをなすなり。かくわが走るは目あてなきがごときにあらず、わが拳闘するは空を撃つがごときにあらず。わがからだを打ちたたきてこれを服従せしむ。恐らくは他人に宣べ伝えて、みずから捨てらるる事あらん。

福音書　マタ二〇章一―一六

天国は働きびとをぶどう園に雇うために、朝早くいでたるあるじのごとし。一日、一デナリの約束をなして、働きびとどもをぶどう園につかわす。また九時ごろいでて市場にむなしく立つ者どもを見て、「なんじらもぶどう園に行け、相当のものを与えん」と言え、彼らも行く。十二時ごろと三時ごろとにまたいでて前のごとくす。五時ごろまたいでしに、なお立つ者どものあるを見て言う、「なにゆえ、ひねもすここに

むなしく立つか」彼ら言う、「たれも我らを雇わぬゆえなり」。あるじ言う、「なんじらもぶどう園に行け」。夕べになりてぶどう園のあるじその家づかさに言う、「働きびとを呼びて、あとの者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」。かくて五時ごろに雇われし者きたりて、おのおの一デナリを受く。先の者きたりて、多く受くるならんと思ひしに、これもまたおのおの一デナリを受く。受けしとき、家あるじに向かいつづやきて言う、「このあとの者どもは、わずかに一時間働きたるに、なんじは一日の勞と暑さを忍びたる我らとひとしく、これをあしらえり」。あるじこたえてそのひとりに言う、「友よ、我なんじに不正をなさず、なんじは我と一デナリの約束をせしにあらずや。おのが物を取りて行け、このあとの者になんじとひとしく与うるは、わが心なり。わが物をわが心のままにするはよからずや、我よきがゆえに、なんじの目あしきか」。かくのごとくあとなる者は先に、先なる者はあとになるべし。

大齋前第二主日

神よ、知りたもうごとく、我らはあえておのれのなすところをたのみとせず。願わくは御力をもつて我らを守り、すべての災いを免れしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後一章一九―三一

なんじらはさとき者なれば、喜びて愚なる者を忍ぶなり。人もしなんじらを奴隸とすとも、食い尽くすとも、かすめとるとも、おごるとも、顔を打つとも、なんじらはこれを忍ぶ。われ恥じて言う、われらは弱き者のごとくなりき。されど人の雄々しきところは我もまた雄々し、われ愚かにもかく言うなり。彼らへブルびとなるか、我もしかり、彼らイスラエルびとなるか、我もしかり、彼らアブラハムの末なるか、我もしかり。彼らキリストの役者なるか、われ狂えるごとく言う、我はなおまされり。わが労はさらに多く、獄舎に入れられしことさらに多く、むち打れしことさらにおびただしく、死に臨みたりしことしばしばなりき。ユダヤびとより四十に一つ足らぬむちを受けしこと五たび、むちにて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、破船に会いしこと三たびにして一昼夜、海にありき。しばしば旅行して川の難、盜賊の

難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、  
 勞し、苦しみ、しばしば眠らず、飢えかわき、しばしば断食し、凍え、裸なりき。こ  
 こに挙げざる事もあるに、なお日々われに迫る諸教会の心づかいあり。たれか弱りて  
 我弱らざらんや、誰かつまずきて我燃えざらんや。もし誇るべくば、わが弱き所につ  
 きて誇らん。とこしえにほむべき者、すなわち主イエスの神また父は、わが偽らざる  
 を知りましたもう。

福音書 ルカ 八章四一—五

大いなる群衆むらがり町々の人、みもとに寄りつどいたれば、譬をもて言いたもう、  
 「種まく者その種をまかんとていず。まくとき道のかたわらに落ちし種あり、踏みつ  
 けられ、また空の鳥これをついばむ。岩の上に落ちし種あり、生えいでたれどうるお  
 いなきによりて枯る。いばらの中に落ちし種あり、いばらとともに生えいでてこれを  
 ふさぐ。良き地に落ちし種あり、生えいでて百倍の実を結べり」。これらの事を言  
 いて呼ばわりましたもう、「聞く耳ある者は聞くべし」。弟子たちこの譬のいかなる心なる  
 かを問いたるに、イエス言いまもう、「なんじらは神の国の奥義を知ることを許され

たれど、ほかの者は譬にてせらる。彼らの見て見ず、聞きて悟らぬためなり。譬の心はこれなり。種は神の言葉なり。道のかたわらなるは、聞きたるのち、惡魔きたり、信じて救われる事のなからんために御言葉をその心より奪うところの人なり。岩の上なるは聞きて御言葉を喜び受くれども、根なければ、しばらく信じて試みのときに退くところの人なり、いばらのなかに落ちしは、聞きてのち、過ぐるほどに世の心づかいと宝と快樂とにふさがれて実らぬところの人なり。良き地なるは、御言葉を聞き、正しく良き心にてこれを守り、忍びて実を結ぶところの人なり」。

## 大齋前第一主日

特禱・使徒書・福音書は火曜日の夕まで用いる。

### 特禱

主よ、我らを教えて、愛なくば、いかなる行ないも益なし、愛は平和ともろもろの徳の帯なりとのたまえり。また愛なき者は生けるとも死にたる者と認めたもう。願わくは聖霊をくだして、この最も尊き徳を我らの心に満たしたまえ。ひとりの御子イエス

Ⅱ キリストのために聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ前一三章一—一三

たとい我もろもろの国びとの言葉および御使いの言葉を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響くによろはちのごとし。たといわれ預言する力あり、またすべての奥義とすべての知識とに達し、また山を移すほどの大いなる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。たとい我わが財産をことごとく施し、またわがからだを焼かるるために渡すとも、愛なくば我に益なし。愛は寛容にして慈悲あり。愛はねたまず、愛は誇らず、高ぶらず、非礼を行なわず、おのれの利を求めず、憤らず、人の悪を思わず、不義を喜ばずして、まことの喜ぶところを喜び、おおよそ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事望み、おおよそ事耐うるなり。愛はいつまでも絶ゆることなし。されど預言はすたれ、異言はやみ、知識もまたすたらん。それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず、全き者のきたらん時は全からぬものすたらん。我、わらべの時は語ることもわらべのごとく、思うこともわらべのごとく、論する事もわらべのごとくなりしが、人と成りてはわらべのことを捨てたり。今我らは鏡をもて見るごとく見るところおほ

るなり。されど、かの時には顔をあわせて相見ん。今わが知るところ全からず、されど、かの時にはわが知られたることく全く知るべし。げに信仰と望みと愛とこの三つのものは限りなく残らん。しかしてそのうち最も大きいなるは愛なり。

福音書 ルカ 一八章三一—四三

イエス十二弟子を近づけて言いたもう、「見よ、我らエルサレムに上る。人の子につき預言者たちによりてしるされたるすべての事は、成し遂げらるべし。人の子は異邦人に渡され、あざけられ、はずかしめられ、つばきせられん。彼らこれをむち打ち、かつ殺さん。かくて彼は三日目によりみがえるべし」。弟子たちこれらのことを一つだに悟らず、この言葉かれらに隠れたれば、その言いたまいしことを知らざりき。イエス、エリコに近づきたもう時、ひとりのめしい、道のかたわらに座して、物請いたりしが、群衆の過ぐるを聞きて、その何事なるかを問う。人々ナザレのイエスの過ぎたもう由を告げたれば、めしい呼ばわりて言う、「ダビデの子イエスよ、我をあわれみたまえ」。さきだち行く者ども、彼を戒めて、黙せしめんとしたれど、ますます叫びて言う、「ダビデの子よ、我をあわれみたまえ」。イエス立ちとどまり、めしいを



連れきたるべきことを命じたもう。かれ近づきたれば、イエス問いたもう、「わがなんじに何をなさんことを望むか」。かれ言う、「主よ、見えんことなり」。イエス彼に、「見ることを得よ、なんじの信仰なんじを救えり」と言いたまえば、たちどころに見ることを得、神をあがめてイエスに従う。民みなこれを見て神を賛美せり。

## 大 齋 始 日

特禱は当日の朝から受苦日の前夕まで、毎日その日の特禱につづいてもちい、使徒書・福音書は土曜日までの平日に用いる。

### 特 禱

限りなく生ける全能の神よ、主は造りたまひし物を一つも憎まず、悔い改むる罪びとをことごとく赦したもう。願わくは我らのために新たなる悔ゆる心を造りたまいて、まことに罪を悲しみ、その災いを悟り、慈悲ふかき父の御手より全き赦しを受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 使 徒 書 ヨエ二章一二―一七

主言いたもう。今にてもなんじら断食と嘆きと悲しみをなし、心を尽くして我に

帰れ、衣を裂かで心を裂き、なんじらの主なる神に帰れ。主は恵みありて慈悲深く、怒ることおそく、あわれみ大いにして災いを与うるを悔いまもう。主あるいは悔いて立ち帰り、恵みを残して、なんじらの主なる神に素祭と灌祭とをささげしめたもうことなしとたれか知らんや。なんじらシオンにてラッパを吹き、断食を定めておごそかなる集会を呼びつどえ。民を集め、会衆を清め、年寄りたちを集め、わらべと乳飲み子とを集めよ。花婿はそのへやより、花嫁はその奥なるねやよりいできたるべし。神の仕えびとたち祭司たちは門口と祭壇との間に嘆きてかく言わん、「主よ、御民を赦したまえ、主の産業を恥に渡し、これを異邦人に治めさせたもうな。異邦人をしていかでか、『彼らの神はいずこにいますぞ』と言わしむべき」。

福音書 マタ 六章一六—二一

なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面もちをすな。彼らは断食すること人を現わさんとて、その顔色をそのうなり。まことになんじらに告ぐ、彼らはすでにその報いを得たり。なんじは断食するとき、かしらに油をぬり、顔を洗え。これ断食することの人にあらわれずして、隠れたるにいますなんじの父にあらわれんため

なり。さらば隠れたるに見たもうなんじの父は報いたまわん。なんじらおのがために宝を地に積むな、こは虫とさびとがそこない、盗人うがちて盗むなり。なんじらおのがために宝を天に積み、かしこは虫とさびとがそこなわず、盗人うがちて盗まぬなり。なんじの宝のある所には、なんじの心もあるべし。

## 大斎第一主日

特 禱

四十日の間われらのために断食したまいし主よ、願わくはおのれに勝つ力を我らに与え、肉を靈に服せしめ、常に主の導きに従い、ますます清くなり、主の栄光をあらわすことを得させたまえ。父と聖靈とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主にこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ後六章一—一〇

我らは神とともに働く者なれば、神の恵みをなんじらがいたずらに受けざらんことをさらに勧む。神言いたもう、「われ恵みの時になんじに聞き、救いの日になんじを助

けたり」と。見よ、今は恵みのとき、見よ、今は救いの日なり。我らこの務めのそし  
られぬために何事にも人をつまずかせず、かえつてすべての事において神の役者のご  
とくおのれをあらわす、すなわち悩みにも、乏しきにも、苦しみに、打たるるにも、  
獄舎に入るにも、騒ぎにも、働きにも、眠らぬにも、断食にも、大いなる忍耐を用  
い、またいさぎよきと知識と寛容と情けと聖霊と偽りなき愛と、まことの言葉と神の  
力と左右に持ちたる義の武器とにより、また光榮とはずかしめと、悪しき聞こえと良  
き聞こえとによりて表わす。我らは人を惑わす者のごとくなれどもまこと、人に知ら  
れぬ者のごとくなれども、人に知られ、死なんとする者のごとくなれども、見よ、生  
ける者、懲らさるる者のごとくなれども殺されず、憂うる者のごとくなれども常に喜  
び、貧しき者のごとくなれども多くの人を富ませ、なにも持たぬ者のごとくなれども  
すべての物を持てり。

福音書 マタ 四章一―一

ここにイエス御霊によりて荒れ野に導かれたもう、悪魔に試みられんとするなり。四  
十日、四十夜、断食して、のちに飢えたもう。試むる者きたりて言う、「なんじもし

神の子ならば、命じてこれらの石をパンとならしめよ」。答えて言いたもう、「人の子くるはパンのみによるにあらず、神の口よりいずるすべての言葉による」としるされたり」。ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂に立たせて言う、「なんじもし神の子ならばおのが身を下に投げよ。それは『なんじのために御使いたちに命じたまわん。かれら手にてなんじをささえ、その足を石に打ち当つることなからしめん』としるされたるなり」。イエス言いたもう、「主なるなんじの神を試むべからず」と、またしるされたり」。悪魔またイエスをいと高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その榮華とをしめして言う、「なんじもしひれ伏して我を拜せば、これらを皆なんじに与えん」。ここにイエス言いたもう、「サタンよ、退け。主なるなんじの神を拜し、ただこれにのみ仕えまつるべし」としるされたるなり。ここに悪魔は離れ去り、見よ、御使いたちきたり仕えぬ。

## 大齋第二主日

特禱

全能の神よ、主は我らが自ら助くる力なきを知りたもう。願わくは常に我らを守り、外はからだをそのう災いを防ぎ、内は魂を攻むる悪念を除きたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　テサ前　四章　一―八

兄弟よ、終わりに我ら、主イエスによりてなんじらに求め、かつ勧む。なんじらいかに歩みて神を喜ばすべきかを我らより学びしごとく、また歩みおるごとくにますます進まんことを。我らが主イエスによりていかなる命令を与えしかは、なんじらの知るところなり。それ神の御旨は、なんじらの清からんことにして、すなわち淫行を慎み、おのおの、おのが妻を得て、清く、かつ尊くし、神を知らぬ異邦人のごとく情欲をほしいままにすまじきを知り、かかる事によりて兄弟を欺き、またかすめざらんことなり。すべてこれらのことを行のう者に主の報いたもうは、わがすでになんじらに告げ、かつあかしせしごとし。神の我らを招きたまいしは、汚れを行なわしめんためにあらず、清からしめんためなり。このゆえにこれを拒む者は人を拒むにあらず、なんじらに聖霊を与えたもう神を拒むなり。

福音書 マタ一五章二一—二八

イエスここを去りてツロとシドンとの地方に行きたもう。見よ、カナンの女、そのほとりよりいできたり、叫びて、「主よ、ダビデの子よ、我をあわれみたまえ、わが娘、悪霊につかれていたく苦しむ」と言う。されどイエスひとことも答えたまわず。弟子たちきたり請いて言う、「女を帰したまえ、我らのあとより叫ぶなり」。答えて言いたもう、「我はイスラエルの家のうせたる羊のほかにつかわされず」。女きたり揮いて言う、「主よ、我を助けたまえ」。答えて言いたもう、「子どものパンをとりて、小犬に投げ与うるはよからず」。女いう、「しかし、主よ、小犬も主人の食卓よりおつる食べくずを食ろうなり」。ここにイエス答えて言いたもう、「女よ、なんじの信仰は大いなるかな、願いのごとくなんじになれ」。娘この時よりいえたり。

大斎第三主日

特禱

全能の神よ、しもべらの願いを顧み、大能の御手を伸べて、すべての敵を防ぎたまわ

んことを、主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エペ 五章一—一四

さればなんじら愛せらるる子どものごとく、神になろう者となれ。またキリストのなんじらを愛し、我らのためにおのれをこうばしきかおりのささげ物としいけにえとして、神にささげたまいしごとく愛のうちを歩め。聖徒たるにかのうごとく、淫行、もろもろの汚れ、またむさぼりをなんじらのうちにてとのうる事だにすな。また恥ずべき言葉・愚なる話・戯れごとを言うな、これよろしからぬ事なり、むしろ感謝せよ。すべて淫行のもの、汚れたるもの、むさぼるもの、すなわち偶像を拜む者どものキリストと神との国の世継ぎたることを得ざるは、なんじらの堅く知るところなり。なんじら人のむなしき言葉に欺かるな、神の怒りはこれらの事によりて不従順の子らに及ぶなり。このゆえに彼らにくみする者となるな。なんじらもとはやみなりしが、今は主にありて光となれり、光の子どものごとく歩め。(光の結ぶ実はもろもろの善と正しきとまこととなり)。主の喜びたもうところのいかなるかをわきまえ知れ。実を結ばぬ暗きわざにくみする事なくかえつてこれを責めよ。彼らが隠れて行のうことはこ



れを言うだに恥ずべき事なり。すべてかかる事は責めらるるとき、光にて現わさる、現わさるる者はみな光となるなり。このゆえに言いたもう、「眠れる者よ、起きよ、死人のうちより立ち上がれ。さらばキリストなんじを照らしたまわん」。

## 福音書

ルカ一章一四—二八

さてイエスおしの悪霊を追いいだしたまえば、悪霊いでて、おし物言いしにより、群衆あやしめり。そのうちのある者ども言う、「彼は悪霊のかしらベルゼブルによりて悪霊を追いいだすなり」。またある者どもは、イエスを試みんとて天よりのしるしを求む。イエスその思いを知りて言いたもう、「すべて分かれ争う国はほろび、分かれ争う家は倒る。サタンもし分かれ争わば、その国いかに立つべき。なんじらわが悪霊を追いいだすをベルゼブルによると、言えばなり。我もしベルゼブルによりて、悪霊を追いいださは、なんじらの子はたれによりてこれを追いいだすか。このゆえに彼らはなんじらのさばきびとなるべし。されど我もし神の指によりて、悪霊を追いいださば、神の国はすでになんじらに至れるなり。強きもの武具をよるいておのが屋敷を守るときは、その持ち物、安全なり。されどさらに強きものきたりて、これに勝つと

きは、たのみとする武器をことごとく奪<sup>うば</sup>いて、分捕<sup>ぶんとり</sup>物を分<sup>わ</sup>かたん。我<sup>われ</sup>とともにならぬ者<sup>もの</sup>は我<sup>われ</sup>にそむき、我<sup>われ</sup>とともに集<sup>あつ</sup>めぬ者<sup>もの</sup>は散<sup>ち</sup>らすなり。汚<sup>けが</sup>れし靈<sup>れい</sup>、人<sup>ひと</sup>をいずるときは、水<sup>みづ</sup>なきところを巡<sup>めぐ</sup>りて、休<sup>やす</sup>みを求<sup>もと</sup>む。されど得<sup>え</sup>ずして言<sup>い</sup>う、『わがいでし家<sup>いえ</sup>に帰<sup>かえ</sup>らん。』  
歸<sup>かえ</sup>りてその家<sup>いえ</sup>の掃<sup>は</sup>ききよめられ、飾<sup>かざ</sup>られたるを見<sup>み</sup>、ついに行<sup>ゆ</sup>きておのれよりも悪<sup>あ</sup>しきほかの七つの靈<sup>れい</sup>を連<sup>つ</sup>れきたり、ともに入<sup>い</sup>りてここに住<sup>す</sup>む。さればその人<sup>ひと</sup>のちのさまは、まえよりも悪<sup>あ</sup>しくなるなり。これらのことを言<sup>い</sup>いたもうとき、群衆<sup>ぐんしゅう</sup>のうちよりある女声<sup>おんなこえ</sup>をあげて言<sup>い</sup>う、『さいわいなるかな、なんじを宿<sup>やど</sup>しし胎<sup>たい</sup>、なんじの吸<sup>す</sup>いし乳<sup>ち</sup>ぶさは』。イエス言<sup>い</sup>いたもう、『さらにさいわいなるかな、神<sup>かみ</sup>の言葉<sup>ことば</sup>を聞<sup>き</sup>きてこれを守<sup>まも</sup>る人<sup>ひと</sup>は』。

## 大齋<sup>たいさい</sup>第四<sup>だい</sup>主<sup>しゅ</sup>日<sup>じつ</sup>

特<sup>とく</sup> 禱<sup>いた</sup>

全能<sup>ぜんのう</sup>の神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>ら悪<sup>あ</sup>しきわざによりて罰<sup>ばつ</sup>せらるべき者<sup>もの</sup>なれども、あわれみをもつて我<sup>われ</sup>らを赦<sup>ゆる</sup>し、恵<sup>めぐ</sup>みをもつて我<sup>われ</sup>らを強<sup>つよ</sup>めたまわんことを、救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>イエスⅡキリストにより

てこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ガラ 四章二一—三一

律法の下にあらんと願う者よ、我に言え、なんじら律法を聞かぬか。すなわちアブラハムに子ふたりあり、ひとりのはしたためより、ひとりは自主の女より生まれたりとされるされたり。はしたためよりの子は肉によりて生まれ、自主の女よりの子は約束による。このうちに譬あり、ふたりの女は二つの契約なり、その一つはシナイ山よりいて、奴隸たる子を生む、これハガルなり。このハガルはアラビヤにあるシナイ山にして今のエルサレムに当たる。エルサレムはその子らとともに奴隸たるなり。されど上なるエルサレムは、自主にして我らの母なり。しるして言う、「うまずめにして産まぬものよ、喜べ。産みの苦しみをぬく者よ、声をあげて呼ばわれ。ひとり住みの女よりの子は多し、夫ある者の子よりも多し」とあり。兄弟よ、なんじらはイサクのごとく約束の子なり。しかるにその時、肉によりて生まれし者、御霊によりて生まれし者を責めしごとく今なおしかり。されど聖書は何と言えるか、「はしためとその子とを追いいだせ、はしための子は自主の女よりの子とともに業を継ぐべからず」とあり。さ

れば兄弟よ、我らははしための子ならず、自主の女よりの子なり。

福音書 ヨハ 六章 一—四

イエス、ガリラヤの海、すなわちテベリヤの海のかなたに行きたまえば、大いなる群衆これに従う、これは病みたる者に行ないたまえるしるしを見しゆえなり。イエス、山に登りて、弟子たちとともにそこに座したもう。時はユダヤびとの祭りなる過越に近し。イエス目をあげて大いなる群衆のきたるを見てピリポに言いたもう、「我らいずこよりパンを買いて、この人々に食わすべきか」。かく言いたもうはピリポを試むるためにて、みずからなさんとする事を知りたもうなり。ピリポ答えて言う、「二百デナリのパンありとも、人々少しすつ受くるになお足らじ」。弟子のひとりにてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う、「ここにひとりのわらべあり、大麦のパン五つと小さきさかな二つとをもてり、されどこの多くの人には何にかならん」。イエス言いたもう、「人々を座せしめよ」。その所に多くの草ありて人々座せしが、その数おおよそ五千人なりき。ここにイエス、パンを取りて謝し、座したる人々に分かち与え、またさかなをもしかなして、その欲するほど与えたもう。人々の飽きたるのち弟子た

ちに言いたもう、「すたるもののなきように裂きたる余りを集めよ」。すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの裂きたるを食らいしものの余り、十二のかごに満ちたり。人々そのなしたまいしるしを見て言う、「げに、これは世にきたるべき預言者なり」。

## 大斎第五主日

特 禱

全能の神よ、あわれみをもつて主の民を顧み、大なる恵みをもつて常に導き、身と魂とを守りたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヘブ九章一一一五

キリストはきたらんとする良き事の大祭司としてきたり、手にて造らぬこの世に属せぬさらに大いなる全き幕屋を経て、やぎと子牛との血を用いず、おのが血をもてただひとたび至聖所に入りて、とこしえの贖いを終えたまえり。もし、やぎ及び雄牛の血、雌牛の灰などを汚れし者にそそぎて、その肉体を清むることを得ば、ましてとこしえの御霊により傷なくしておのれを神にささげたまひしキリストの血は、我らの良心を

死にたる行ないより清めて生ける神に仕えしめざらんや。このゆえに彼は新しき契約のなかだちなり、これ初めの契約の下に犯したるとがを贖うべき死あるによりて、召されたる者に約束のとこしえの嗣業を受けさせんためなり。

福音書 ヨハ 八章四六—五九

イエス言いたもう、「なんじらのうちたれか我を罪ありとして責め得る。我まことを告ぐるに、われを信ぜぬはなにゆえぞ。神よりいずる者は神の言葉を聞く、なんじらの聞かぬは神よりいでぬによる」。ユダヤびと答えて言う、「なんじはサマリヤびとにて悪霊につかれたる者なりと、我らが言えるはうべならずや」。イエス答えたもう、「我は悪霊につかれず、かえってわが父を敬う、なんじらは我を軽んず。我はおのれの栄光を求めず、これを求め、かつさばきしたもう者あり。まことに、まことになんじらに告ぐ、人もしわが言葉を守らば、とこしえに死を見ざるべし」。ユダヤびと言う、「今ぞ、なんじが悪霊につかれたるを知る。アブラハムも預言者たちも死にたり、しかるになんじは、人もしわが言葉を守らば、とこしえに死を味わわざるべし」と言う。なんじ我らの父アブラハムよりも大いなるか、彼は死に、預言者たちも死に

たり、なんじはおのれをたれとするか」。イエス答えたもう、「我もしおのれに榮光を歸せば、わが榮光はむなし。我に榮光を歸する者はわが父なり、すなわちなんじらがおのれの神と、とのうる者なり。しかるになんじらは彼を知らず、我はかれを知る。もし彼を知らずと言わば、なんじらのごとく偽り者たるべし。されど我はかれを知り、かつその御言葉を守る。なんじらの父アブラハムは、わが日を見んとて樂しみかつこれを見て喜べり」。ユダヤびと言う、「なんじいまだ五十才にもならぬにアブラハムを見しか」。イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬさきより我はあるなり」。ここに彼ら石をとりてイエスに投げ打たんとしたるに、イエス隠れて宮をいでたまえり。

復活前主日

特禱は木曜日の夕まで用いる。

特禱

とこしえにいます全能の神よ、世の人を深く愛し、御子・われらの救い主イエス・キ

リストをくだし、これをして我らと同じ肉体をとり、十字架に死にて、万民のために謙その模範とならしめたまえり。願わくはその模範にしたがいて苦しみを忍び、またそのよみがえりの幸いにあずかることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ピリ二章五——

なんじらキリスト・イエスの心を心とせよ。すなわち彼は神の形にていたまいしが、神とひとしくある事を堅く保たんとは思わず、かえつておのれをむなしゆうし、しもべの形をとりて人のごとくなれり、すでに人のさまにて現われ、おのれを低うして死に至るまで、十字架の死に至るまで従いたまえり。このゆえに神は彼を高く上げて、これにもろもろの名にまさる名を賜いたり。これ天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもの、ことごとくイエスの名によりてひざをかがめ、かつもろもろの舌の、「イエス・キリストは主なり」と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せんためなり。

福音書　マタ二七章一——五四

夜明けになりてすべての祭司長・民の長老ら、イエスを殺さんと相はかり、ついにこ



れを縛り、引きゆきて総督ピラトにわたせり。ここにイエスを売りしユダ、その死に定められたまいしを見て悔い、祭司長・長老らに、かの三十の銀をかえして言う、「われ罪なきの血を売りて罪を犯したり」。彼ら言う、「我らなんぞあずからん、なんじみずから当たるべし」。彼その銀を聖所に投げ捨てて去り、行きてみずからくびれたり。祭司長ら、その銀をとりて言う、「これは血の価なれば宮の蔵に納むるはよからず」。かくて相はかり、その銀をもて陶工の畑を買い、旅びとらの墓地とせり。これによりてその畑は、今にいたるまで血の畑となえらる。ここに預言者エレミヤによりて言われたる言葉は成就したり。いわく、「かくて彼ら値積もられしもの、すなわちイスラエルの子らが値積もりし者の価の銀三十をとりて、陶工の畑の代価にこれを与えたり。主の我に命じたまいしごとし」。さてイエス、総督の前に立ちたまいに、総督問いて言う、「なんじはユダヤびとの王なるか」。イエス言いたもう、「なんじの言うがごとし」。祭司長・長老ら訴うれども、何をも答えたまわず。ここにピラト彼に言う、「聞かぬか、彼らがなんじにたいしていかにおおくの証拠を立つるを」。されど総督のいたく怪しむまで、ひとことをも答えたまわず。祭りの時には総督、群

衆の望みにまかせて、囚人ひとりをこれに赦す例あり。ここにバラバという隠れなき囚人あり。されば人々の集まれる時、ピラト言う、「なんじらわがたれを赦さんことを願うか。バラバなるか、キリストととのうるイエスなるか」。これピラト彼らのイエスをわたししはねたみによると知るゆえなり。彼なおさばきの座におる時、その妻、人をつかわして言わしむ、「かの義人にかかわることをすな、我きよう夢のうちにて彼のゆえにさまざま苦しめり」。祭司長・長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請わしめ、イエスをほろぼさんことを勧む。総督答えて、彼らに言う、「ふたりのうちいづれをわが赦さん事を願うか」。彼ら言う「バラバなり」。ピラト言う、「さらばキリストととのうるイエスを我いかになすべきか」。みな言う、「十字架につくべし」。ピラト言う、「彼なにの悪事をなしたるか」。彼ら激しく叫びて言う、「十字架につくべし」。ピラトはなんのかいなく、かえつて乱にならんとするを見て、水をとりにつくべし」。ピラトはなんのかいなく、かえつて乱にならんとするを見て、水をとりにつくべし」。群衆のまゑに手を洗いて言う、「この人の血につきて我は罪なし、なんじらみずから当たれ」。民みな答えて言う、「その血は、われらと我らの子孫とに帰すべし」。ここにピラト、バラバを彼らに赦し、イエスをむち打ちて十字架につくるために渡せり。こ

ここに総督の兵卒ども、イエスを官邸に連れ行き、全隊をみもとに集め、その衣をはぎて、緋色の上着を着せ、いばらの冠を編みて、そのこうべにかむらせ、葦を右の手に持たせかつその前にひざまずき、ちよろううして言う、「ユダヤびとの王、安かれ」。

またこれにつばきし、かの葦をとりてそのこうべをたたく。かくちよろううしてのち、上着をはぎて、もとの衣を着せ、十字架につけんとて引き行く。そのいずる時、シモンというクレネびとにあいしかば、しいてこれにイエスの十字架をおわしむ。かくてゴルゴタというところ、すなわちされこうべの地にいたり、苦みを混ぜたるぶどう酒を飲ませんとしたるに、なめて、飲まんとしたまわず。彼らイエスを十字架につけて後、くじをひきてその衣を分かち、かつそこに座して、イエスを守る。そのこうべの上に、「これはユダヤびとの王イエスなり」としるしたる罪状札をおきたり。ここにイエスとともにふたりの強盗、十字架につけられ、ひとりはその右に、ひとりはその左におかる。行き来者どもイエスをそしり、こうべを振りて言う、「宮をこぼちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならばおのれを救え、十字架より降りよ」。

祭司長らも、また同じく学者・長老らとともに、ちよろううして言う、「人を救いて

おのれを救うことあたわず。彼はイスラエルの王なり、いま十字架より降りよかし、さらば我ら彼を信ぜん、彼は神に寄り頼めり、神かれをいつくしまば今救いたもうべし、『我は神の子なり』と言えり」。ともに十字架につけられたる強盗どもも、同じ事をもてイエスをののしれり。昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。三時ごろイエス大声に叫びて、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と言いたもう。わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまひしとのころなり。そこに立つ者のうち、ある人々これを聞きて、「彼はエリヤを呼ぶなり」と言う。ただちにそのうちのひとり走りゆきて海綿をとり、酸きぶどう酒をふくませ、葦につけてイエスに飲ましむ。そのほかの者ども言う、「まで、エリヤきたりて彼を救うやいなや、我らこれを見ん」。イエスふたたび大声に呼ばわりて息絶えたもう。見よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地ふるい、岩裂け、墓ひらけて、眠りたる聖徒の死かばね、おおく生かえり、イエスの復活ののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現われたり。百卒長およびこれとともにイエスを守りいたる者ども、地震とそのありし事とを見て、いたく恐れ、「げに彼は神の子なりき」と言えり。

復活前月曜日

使徒書、ザ六三章一一九

エドムより赤き衣をまといてボズラよりきたるこの者はたれぞ、はなやかなるよそおいをなし大いなる力もて進み行くこの者はたれぞ。義をもて語り、救いを施すに強き我なり。なにゆえなんじのよそおいは赤く、なんじの衣は酒ぶねをふむ者のごとくなるか。我はひとりにて酒ぶねをふめり、もろもろの民のなかに我とともにせる者なかりき。われ怒りによりて彼らをふみ、憤りによりて彼らを踏みにじりたれば、彼らの命の血わが衣にそそぎ、わがよそおいをことごとく汚したり。そは刑罰の日わが心にある、わが贖いの年すでにきたれり。われ見て助くる者なく、さそうる者なきを怪しめり。このゆえにわがかいな我を救い、わが憤り、我をささえたり。われ怒りによりてもろもろの民を踏みにじり、憤りによりて彼らを酔わしめ、その命の血を地に流したり。我は主の我らに施したまえるもろもろの恵みとその誉れとを語り告げ、またそのあわれみに従い、その多くの恵みに従いでイスラエルの家に施したまいたるいつく

しみを語り告げん。主は、「まことに彼らはわが民なり、偽らぬ子らなり」と言いたまえり。かくて彼らの救い主となりたまえり。もろもろの悩みの時は主も悩みたまいて御前の使いをもて彼らを救い、その愛となさけとをもて彼らを贖い、いにしえの日にはつねに彼らをもたげ、かつ携え行きたまいたり。しかるに彼らはそむきて、その清き御霊を憂いしめたり。このゆえに主はひるがえりて彼らの敵となり、みずからこれと戦いたまえり。ここにその民、いにしえのモーセの日を思いだして言えり、「彼らとその群れの牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。彼らのうち清き御霊を宿らしし者はいずこにありや。栄光のかいなるモーセの右にともなわせ、彼らの前に水を分けて、おのがためにとこしえの名をあげ、彼らをつまずかすことなく、馬の荒れ野を行くごとく、淵を過ぎしめし者はいずこにありや」と。谷にくだる家畜のごとくに、主の御霊かれらをいこわせたまえり。かく御民を導き、おのれのために栄光の名をあげたまえり。ねがわくは天よりみそなわし、聖なる栄光ある御住まいより見たまえ。なんじの熱心と力あるみわざとはいはずこにありや、なんじの切なるいつくしみとあわれみとはおさえられて、我に現われず。なんじは我らの父なり、たといアブ

ラハムは我ら<sup>われ</sup>を知らず、イスラエルは認めぬとも、主よ、なんじは我ら<sup>われ</sup>の父なり。とこしえよりの贖<sup>あがな</sup>い主<sup>しゅ</sup>、これぞなんじの名<sup>な</sup>なる。主よ、なにゆえ我ら<sup>われ</sup>をなんじの道<sup>みち</sup>より離<sup>はな</sup>れ迷<sup>まよ</sup>わせ、我ら<sup>われ</sup>の心<sup>こころ</sup>をかたくなにしてなんじを恐れざらしめたもうか。願<sup>ねが</sup>わくはなんじのしもべらのために、なんじの嗣業<sup>しぎよう</sup>たるやからのために痛<sup>いた</sup>りたまえ。なんじの清<sup>きよ</sup>き民<sup>たみ</sup>、地<sup>ち</sup>を得<sup>え</sup>て久<sup>ひさ</sup>しからざるに、我ら<sup>われ</sup>のあだどもなんじの聖所<sup>せいじよ</sup>を踏<sup>ふ</sup>みにじりたり。我<sup>われ</sup>らはいにしえよりなんじの治めざりし者<sup>もの</sup>のごとく、なんじの御名<sup>みな</sup>をもてとなえられざりし者<sup>もの</sup>のごとくなりぬ。

福音書 マル 一四章 一―七二

さて過越<sup>すごこし</sup>と除酵<sup>じょぎょう</sup>との祭<sup>まつり</sup>りのふつか前<sup>まえ</sup>となりぬ。祭司長<sup>さいいしやう</sup>、学者<sup>がくしや</sup>らたばかりをもてイエスを捕<sup>とら</sup>え、かつ殺<sup>ころ</sup>さんとくわだてて言う、「祭<sup>まつ</sup>りの間<sup>あひだ</sup>はなすべからず、おそらくは民<sup>たみ</sup>の乱<sup>らん</sup>あるべし」。イエス、ベタニヤにしまして、らい病人<sup>びやうにん</sup>シモン<sup>しもん</sup>の家<sup>いえ</sup>にて食事<sup>しょじ</sup>の席<sup>せき</sup>につききたもう時<sup>とき</sup>、ある女<sup>おんな</sup>、価高<sup>あたいたか</sup>き混<sup>ま</sup>じりなきナルド<sup>ナルド</sup>のにおい油<sup>あぶら</sup>の入りたる石<sup>せつ</sup>ころのつぼを持<sup>も</sup>ちきたり、そのつぼをこぼちてイエスのこうべに注<sup>そそ</sup>ぎたり。ある人々<sup>ひとびと</sup>憤<sup>いらい</sup>りて互<sup>たが</sup>いに言う、「なにゆえかくみだりに油<sup>あぶら</sup>を費<sup>つひ</sup>すか、この油<sup>あぶら</sup>を三百デナリ余<sup>あま</sup>りに売<sup>う</sup>りて、貧<sup>まず</sup>

しき者に施すことを得たりしものを」。しかしていたく女をとがむ。イエス言いたもう、「そのなすに任せよ、なんぞこの女を悩ますか、我に良き事をなせり。貧しき者は、常になんじらとともにあれば、いつにても心のままに助け得べし、されど我は常になんじらとともにおらず。この女は、なし得る限りをなして、わがからだに、おい油をそそぎ、あらかじめ葬りのそなえをなせり。まことになんじらに告ぐ、全世界いずこにても、福音の宣べ伝えらるるところには、この女のなしし事も記念として語らるべし」。ここに十二弟子のひとりなるイスカリオテのユダ、イエスを売らんとて祭司長らのもとにゆく。彼らこれを聞きて喜び、金を与えんと約したれば、ユダいかにしてかおりよくイエスをわたさんとはかる。除酵祭の初めの日、すなわち過越の小羊をほふるべき日、弟子たちイエスに言う、「過越の食をなしたもうために、我らがいずこに行きて備うることを望みたもうか」。イエスふたりの弟子をつかわさんとして言いたもう、「都に行け、さらば水をいれたるかめを持つ人、なんじらに会うべし。これに従い行き、その入る所の家あるじに、『師言う、われ弟子らとともに過越の食をなすべき座敷はいずこなるか』と言え。さらば整え備えたる大いなる二階座敷



を見すべし。そこに我らのために備えよ」。弟子たちいで行きて都に入り、イエスの言いたまいしごとくなるを見て過越の備えをなせり。日暮れてイエス十二弟子とともに行き、みな席につきて食するとき言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、我とも食するなんじらのうちのひとり、われを売らん」。弟子たち憂いてひとりびとり、「我なるか」と言いいでしに、イエス言いたもう「十二のうちのひとりにて我とともにパンを鉢にひたす者はそれなり。げに人の子はおのれに就きてしるされたるごとくゆくなり。されど人の子を売る者は災いなるかな、その人は生まれざりしかたよかりしものを」。彼ら食しおる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに与えて言いたもう、「取れ、これはわがからだなり」。また杯を取り、謝して彼らに与たまえば、みなこの杯より飲めり。また言いたもう、「これは契約のわが血、多くの人のために流すところのものなり。まことになんじらに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日まで、我ぶどうの実より成るものを飲まじ」。かれら賛美をうたいて後、オリブ山にいでゆく。イエス弟子たちに言いたもう、「なんじらみなつまずかん、それは『われ羊飼いを打たん、さらば羊、散るべし』』としるされたるなり。されど我

よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに行かん。ときにペテロ、イエスに言う、「たといみなつまずくとも我はしからじ」。イエス言いたもう、「まことになんじに告ぐ、きょうこの夜、にわとりふたたび鳴くまえに、なんじ三たび我をいなむべし」。ペテロ力をこめて言う、「我なんじとともに死ぬべき事ありともなんじをいなまず」。弟子たちみななく言えり。彼らゲッセマネと名づくるところに至りし時、イエス弟子たちに言いたもう、「わが祈る間、ここに座せよ」。かくてペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴い行き、いたく驚き、かつ悲しみいでて言いたもう、「わが心いたく憂いて死ぬるばかりなり、なんじらここにとどまりて目をさましおれ」。少し進み行きて、地にひれ伏し、もしも得べくばこの時のおれより過ぎ行かんことを祈りて言いたもう、「アバ父よ、父にはあたわぬ事なし、この杯を我より取り去りたまえ。されどわが心のままを成さんとあらず、御心のままを成したまえ」。きたりて、その眠れるを見、ペテロに言いたもう、「シモンよ、なんじ眠るか、ひと時も目をさましおることあたわぬか。なんじら惑わしに陥らぬよう目をさまし、かつ祈れ。げに心は熱すれども肉体弱きなり」。ふたたび行き、同じ言葉にて祈りたもう。またきたりて彼らの

眠れるを見たもう、これその目、いたく疲れたるなり、彼らなにと答うべきかを知らざりき。三たびきたりて言いたもう、「今は眠りて休め、足れり、時きたれり。見よ、人の子は罪びとらの手に渡さるるなり。立て、我ら行くべし。見よ、我を売る者近づけり」。なお語りいたもうほどに、十二弟子のひとりなるユダ、やがて近づきたる、祭司長・学者・長老らよりつかわされたる群衆、剣と棒とをもちてこれに伴う。イエスを売るもの、あらかじめ合図を示して言う、「わが口づけする者はそれなり、これを捕えてしかと引き行け」。かくてきたりてただちにみもとに行き、「ラビ」と言いて口づけしたれば、人々イエスに手をかけて捕う。かたわらに立つ者のひとり、剣を抜き、大祭司のしもべを打ちて、耳を切り落せり。イエス人々に向かい言いたもう、「なんじら強盗に向こうごとく剣と棒とを持ち、我を捕えんとていできたるか。我は日々なんじらとともに宮にありて教えたりしに、我を捕えざりき、されどこれは聖書の言葉の成就せんためなり」。そのとき弟子みなイエスを捨てて逃げ去る。ある若者、素膚に亜麻布をまといて、イエスに従いたりしに、人々これを捕えければ、亜麻布を捨て裸にて逃げ去れり。人々イエスを大祭司のもとに引き行きたれば、

祭司長・長老・學者らみな集まる。ペテロ遠く離れてイエスに従い、大祭司の中庭まで入り、下役どもとともに座して火に暖まりいたり。さて祭司長らおよび全議會、イエスを死に定めんとて、証拠を求むれども得ず。それはイエスに對して偽証する者、多くあれどもその証拠あわざりしなり。ついにある者ども立ちて偽証して言う、「我らこの人の、『われは手にて造りたるこの宮をこぼち、手にて造らぬほかの宮を三日にて建つべし』と言えるを聞けり」。されどなおこの証拠も合わざりき。ここに大祭司、なかに立ちイエスに問いて言う、「なんじ何を答えぬか、この人々の立つる証拠はいかに」。されどイエス黙してなにをも答えたまわず。大祭司ふたび問いて言う、「なんじはほむべきものの子キリストなるか」。イエス言いたもう、「我はそれなり、なんじら人の子の、全能者の右に座し、天の雲のうちにありてきたるを見ん」。このとき大祭司おのが衣を裂きて言う、「なんぞほかに証人を求めん。なんじらこのけがし言を聞けり、いかに思ふか」。彼らこそりてイエスを死に当たるべきものと定む。しかしてある者どもはイエスにつばきし、またその顔をおおい、こぶしにて打ちなどし始めて言う、「預言せよ」。下役どもイエスを受け、手のひらにて打てり。

ペテロ下にて中庭なかにわにおりしに、大祭司だいさいしのはしためのひとりきたりて、ペテロの火ひに暖あたたまりおるを見み、これに目めをとめて、「なんじも、かのナザレびとイエスとともにいたり」と言う。ペテロうけがわずして、「我われはなんじの言うことを知らず、またその心をも悟さとらず」と言いいて庭口にやぐちにいでたり、時にわとり鳴なきぬ。はしため彼かれを見て、またかたわらに立たつ者ものどもに、「この人ひとは、かのともがらなり」と言いいでしに、ペテロ重かさねてうけがわず。しばらくしてまたかたわらに立たつ者ものどもペテロに言いう、「なんじはたしかに、かのともがらなり、なんじもガリラヤびとなり」。この時ときペテロうけい、かつ誓ちかいて、「われはなんじらの言いうその人ひとを知らず」と言いいず。そのおりしも、またにわとり鳴なきぬ。ペテロ、「にわとりふたたび鳴なく前に、なんじ三たび我われをいなまん」とイエスの言いいたまいし御言葉みことばを思おもいだし、思おもい返かえして泣なきたり。

復活ふつ前か火曜げん日よう

使徒書しと イザ 五〇章五——

主なる神しんわが耳みみを開ひらきたまえり。我われはそむくことをせず、退しりぞくことをせざりき。むち

打つ者にわが背をまかせ、ひげを抜く者にわがほおをまかせ、恥とつばきとを避くるために、わが顔をおおうことをせざりき。主なる神我を助けたまわん。このゆえに我恥ずることなかるべし。われ顔を火打ち石のごとく堅くして恥じしめらるること無きを知る。我を義とする者近きがあり、たれか我と争わん、我ら相ともに立たん。わがあだはたれぞや、我に近づきたれ。見よ、主なる神われを助けたまわん。たれか我を罪せん。見よ、彼らはみな衣のごとくふるびん、しみは彼らを食い尽くさん。なんじらのうちにて主を恐れ、そのしもべの声を聞く者はたれなるか、暗を歩みて光を得ずとも、主の御名を頼み、おのれの神にたよれ。見よ、火をおこし、火のたばを帶ぶる者どもよ、おのが炎のうち、おのが燃やしたる火のたばのうちを歩め。なんじら悲しみのうちに伏すべし。これはわが手より受くるところなり。

福音書 マル一五章一—三九

夜明くるやただちに、祭司長・長老・学者ら、すなわち全議会ともに相はかりて、イエスを縛り、引き行きてピラトに渡す。ピラト、イエスに問いて言う、「なんじはユダヤ人の王なるか」。答えて言いたまう、「なんじの言うがごとし」。祭司長ら、さま

さまに訴うれば、ピラトまた問いて言う、「なにも答えぬか、見よ、いかに多くの事を  
もて訴うるか」。されどピラトの怪しむばかりイエスさらになにも答えたまわす。  
さて祭りの時には、ピラト民の願いに任かせて、囚人ひとりを赦す例なるが、ここに  
暴動を起こし、人を殺して繋がれる者のうちに、バラバという者あり。群衆すすみ  
きたりて、例のごとくせんことを願いいでたれば、ピラト答えて言う、「ユダヤびと  
の王を赦さんことを願うか」。これピラト、祭司長らのイエスをわたしは、ねたみ  
によると知るゆえなり。されど祭司長ら群衆をそのかし、かえつてバラバを赦さん  
ことを願わしむ。ピラトまた答えて言う、「さらばなんじらがユダヤびとの王とどの  
うる者を我いかにすべきか」。人々また叫びて言う、「十字架につけよ」。ピラト言  
う、「そも彼はなにの悪事をなしたるか」。彼ら激しく叫びて、「十字架につけよ」と  
言う。ピラト群衆の望みを満さんとて、バラバを赦し、イエスをむち打ちたるのち、  
十字架につくるためにわたせり。兵卒どもイエスを官邸の中庭に連れゆき、全隊を呼  
び集めて、彼に紫の衣を着せ、いばらの冠を編みてかむらせ、「ユダヤびとの王、安か  
れ」と礼をなし始め、また葦にて、そのこうべをたたき、つばきし、ひざまずきて拜

せり。かくちよろうしてのち、紫の衣をはぎ、もとの衣を着せ十字架につけんとて引きいだせり。時にアレキサンデルとルフとの父シモンというクレネびと、いなかよりきたりて通りかかりしに、しいてイエスの十字架をおわせ、イエスをゴルゴタ、解けばされこうべという所に連れ行けり。かくて没薬を混ぜたるぶどう酒をあたえたれど、受けたまわず。彼らイエスを十字架につけ、しかしてたれが何を取るべきと、くじを引きてその衣を分かつ。イエスを十字架につけしは、朝の九時ごろなりき。その罪状札には、「ユダヤびとの王」としるせり。イエスとともに、ふたりの強盗を十字架につけ、ひとりとその右に、ひとりとその左におく。行き来の者どもイエスををしり、こうべを振りて言う、「ああ、宮をこぼちて三日のうちに建つる者よ、十字架よりおりておのれを救え」。祭司長らもまた同じく學者らとともにちよろうして互に言う、「人を救いて、おのれを救うことあたわず、イスラエルの王キリスト、いま十字架よりおりよかし、さらば我ら見て信ぜん」。ともに十字架につけられたる者どももイエスをののしりたり。昼の十二時に、地の上あまねく暗くなりて、三時におよぶ。三時にイエス大声に、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と呼ばわりたもう。これ



を解けば、わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまひしとの心なり。かたわらに立つ者のうち、ある人々これを聞きて言う、「見よ、エリヤを呼ぶなり」。ひとり走り行きて、海綿に酸きぶどう酒をふくませて華につけ、イエスに飲ましめて言う、「待てエリヤきたりて、彼をおろすやいなや、我らこれを見ん」。イエス大声をいだして息絶えたもう。聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。イエスに向かいて立てる百卒長、かかるさまにて息絶えたまいしを見て言う、「げに、この人は神の子なりき」。

# 復活前水曜日

使徒書　ヘブ九章一六―二八

それ遺言は必ず遺言者の死を要す。遺言は遺言者死にてのちはじめて効あり、遺言者の生くる間は効なきなり。このゆえに初めの契約も血なくして立てしにあらず。モーセ律法に従いてもろもろの戒めをすべての民に告げてのち、子牛とやぎとの血、また水と緋色の毛とヒソブとをとりて、契約書およびすべての民にそそぎて言う、「これ神のなんじらに命じたもう契約の血なり」と。また同じく幕屋と祭りのすべての器と

に血をそそげり。おおよそ律法によれば、よろずのものを血をもて清めらる、もし血を流すことなくば、赦さるることなし。このゆえに天にある物にかたどりたる物は、これらにて清められ、天にある物はこれらにまさりたるいけにえをもて清めらるべきなり。キリストはまことのものにかたどれる、手にて造りたる聖所に入らず、まことの天に入りて、今より我らのために神のまえに現われたもう。これ大祭司が年ごとに、ほかの物の血をもて聖所に入ることく、しばしばおのれをささぐるためにあらず。もししからずば世の初めよりこのかた、しばしば苦しみを受けたもうべきなり。されど今、世の末にいたり、おのれをいけにえとなして罪を除かんために、ひとたび現れたまえり。ひとたび死ぬることと、死にて後さばきを受くることとの人に定りたるごとく、キリストもまたおおくの人の罪を負わんがためにひとたびささげられ、また罪を負うことなく、おのれを待ち望む者にふたたび現われて救いを得させたもうべし。

福音書 ルカ 二二章一七

さて過越という除酵祭、近づけり。祭司長・学者らイエスを殺さんとし、その手だていかにと求む、民を恐れたればなり。時にサタン、十二のひとりなるイスカリオテと

とのうるユダに入る。ユダすなわち祭司長・宮守がしらどもに行きて、イエスをいかにしてわたさんとはかりたれば、彼ら喜びて金を与えんと約す。ユダうべないて群衆のおらぬ時にイエスをわたさんと良きおりをうかごう。過越の小羊をほふるべき除酵祭の日、きたりたれば、イエス、ペテロとヨハネとをつかわさんとして言いたもう、「行きて我らの食せんために過越のそなえをなせ」。彼ら言う、「いずこに備うることを望みたもうか」。イエス言いたもう、「見よ、都に入らば、水をいれたるかめを持つ人なんじらに会うべし。これに従いゆき、その入るところの家にいりて、家のあるじに、『師なんじに言う、われ弟子らとともに過越の食をなすべき座敷はいずこなるか』と言え。さらばとのえたる大いなる二階座敷を見すべし。そこにそなえよ」。彼らいで行きて、イエスの言いたまいしごとくなるを見て過越のそなえをなせり。時いたりてイエス席に着きたまい、使徒たちもともに着く。かくて彼らに言いたもう、「われ苦しみの前に、なんじらとともにこの過越の食をなすことを望みに望みたり。我なんじらに告ぐ、神の国にて過越の成就するまでは我またこれを食せざるべし」。かくて杯を受け、かつ謝して言いたもう、「これを取りて互いに分かち飲め。我なん

じらに告ぐ、神の国のきたるまでは、われ今よりのちぶどうの実より成るものを飲まじ」。またパンを取り謝して裂き、弟子たちに与えて言いたもう、「これはなんじらのために与うるわがからだなり。わが記念としてこれを行なえ」。夕げのち杯をもしかして言いたもう、「この杯はなんじらのために流すわが血によりて立つる新しき契約なり。されど見よ、我を売る者の手、我とともに食卓のうえにあり、げに人の子は、定められたるごとくゆくなり。されどこれを売る者は災いなるかな」。弟子たちおのれらのうちにてこの事をなす者は、たれならんと互いに問い始む。また彼らの間に、おのれらのうちたれか大いならんと争い起りたれば、イエス言いたもう、「異邦人の王は、その民をつかさどり、また民を支配する者は、恩人となえらる。されど、なんじらはしかあらざれ、なんじらのうち大いなる者は若き者のごとく、かしらたる者は仕うる者のごとくなれ。食事の席に着く者と仕うる者とは、いずれか大いなる。食事の席に着く者ならずや、されど我はなんじらのうちにて仕うる者のごとし。なんじらはわが試みのうちに絶えず、我とともにおりし者なれば、わが父の我に任じたまえるごとく、我もまたなんじらに国を任ず。これなんじらのわが国にてわが食卓

に飲み食いし、かつ位に座してイスラエルの十二のやからをさばかんためなり。シモン、シモン、見よ、サタンなんじらを麦のごとくふるわんとて誚得たり。されど我なんじのためにその信仰のうせぬように祈りたり、なんじ立ち帰りてのち兄弟たちを堅うせよ。シモン言う、「主よ、我はなんじとともに獄舎にまでも、死にまでも行かん」と覺悟せり。イエス言いたもう、「ペテロよ、我なんじに告ぐ、きょうなんじ三たびわれを知らずといなむまでは、にわとり鳴かざるべし。かくて弟子たちに言いたもう、「財布・袋・くつをも持たせずして、なんじらをつかわししとき、欠けたるところありしや」。かれら言う、「なかりき」。イエス言いたもう、「されど今は財布ある者はこれを取れ、袋ある者もしかすべし。また剣なき者は衣を売りて剣を買え。我なんじらに告ぐ、『彼はとがある人とともに数えられたり』としるされたるは、わが身に成し遂げらるべし。おおよそ我にかかわる事は成し遂げらるればなり。弟子たち言う、「主、見たまえ、ここに剣二ふりあり」。イエス言いたもう、「たれり」。ついにいでてつねのごとく、オリブ山に行きたまえば、弟子たちも従う。そこに至りて彼らに言いたもう、「惑わしに入らぬように祈れ」。かくてみずからは石の投げら

るるほど彼らよりへだたり、ひざまずきて祈り言いたもう、「父よ、御旨ならば、この杯を我より取り去りたまえ、されどわがこころにあらずして御このろの成らんことを願う」。時に、天より御使い現れて、イエスに力を添う。イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈りたまえば、汗は地上に落つる血のしずくのごとし。祈りを終え、立ちて弟子たちのもとにきたり、その憂いによりて眠れるを見て言いたもう、「なんぞ眠るか、立て、惑わしに入らぬように祈れ」。なお語りいたもうとき、見よ、群衆あらわれ、十二のひとりなるユダ先だちきたり、イエスに口づけせんとて近寄りたれば、イエス言いたもう、「ユダ、なんじは口づけをもて人の子を売るか」。みそばにおる者ども、事のおよばんとするを見て言う、「主よ、我ら剣をもて打つべきか」。そのうちのひとり、大祭司のしもべを打ちて、右の耳を切り落せり。イエス答えて言いたもう、「これにて赦せ」。しかしてしもべの耳に手をつけていやしたもう。かくておのれに向かいてきたれる祭司長・宮守がしら・長老らに言いたもう、「なんじら強盗に向こうごとく剣と棒とを持ちでできたるか。我は日々なんじらとともに宮におりしにわが上に手を伸べざりき。されど今はなんじらの時、また暗きの権威なり」。つい

に人々イエスを捕えて、大祭司の家に引き行く、ペテロ速く離れて従う。人々、中庭のうちに火をたきて、もろともに座したれば、ペテロもそのなかに座す。ひとりのはしため、ペテロの火の光を受けて座しおるを見、これに目を注ぎて言う、「この人も彼とともにいたり」。ペテロうけがわずして言う、「女よ、我は彼を知らず」。しばらくしてほかの者、ペテロを見て言う、「なんじも彼のともがらなり」。ペテロ言う、「人よ、しからず」。ひとときばかりしてまたほかの男、言い張りて言う、「まさしくこの人も彼とともにありき。これガリラヤ人なり」。ペテロ言う、「人よ、我なんじの言うことを知らず」。なお言い終えぬに、やがてにわとり鳴きぬ。主、振り返りてペテロに目をとめたもう。ここにペテロ、主の、「きよう、にわとり鳴く前に、なんじ三たびわれをいなまん」と言いたまいし御言葉を思ひだし、外にいでていたく泣けり。守る者どもイエスをちようろうし、これを打ち、その目をおおい、問いて言う、「預言せよ、なんじを打ちし者はたれなるか」。このほかなお多くのことを言いて、そしれり。夜明けになりて民の長老・祭司長・学者ら相集まり、イエスをその議会に引きいだして言う、「なんじもしキリストならば、我らに言え」。イエス言いた

もう、「われ言うともなんじら信ぜじ、またわれ問うともなんじら答えじ。されど人の子は今よりのち神の力の右に座せん」。みな言う、「さればなんじは神の子なるか」。答えたもう、「なんじらの言うごとく我はそれなり」。彼ら言う、「なんぞなおほかに証拠を求めんや。我らみずからその口より聞けり」。

## 復活前木曜日

使徒書　コリ前　一二章一七—三四

我これらの事を命じてなんじらをほめず。なんじらの集まること、益を受けずして損を招けばなり。まずなんじらが教会に集まるとき争いありと聞く、我ほこれを信ず。それはなんじらのうちには是とせらるべき者の現われんために党派もかならず起るべければなり。なんじらひとつところに集まるとき主の晩餐を食することあたわず。食する時、おのおの人にさきだちておのれの晩餐を食するにより、飢うる者あり、酔い飽ける者あればなり。なんじら飲み食いすべき家なきか、神の教会を軽んじ、また乏しき者をはずかしめんとするか、我なにを言うべきか、なんじらをほむべ



きか、これにつきてはほめぬなり。わがなんじらに伝えしことは主より授けられたる  
 なり。すなわち主イエスわたされたもう夜、パンを取り、祝してこれを裂き、かし  
 て言いたもう、「これはなんじらのためのわがからだなり。わが記念としてこれを行  
 なえ」。夕げののち杯をもさきのごとくして言いたもう、「この杯はわが血によれる新  
 しき契約なり。飲むごとにわが記念としてこれを行なえ」。なんじらこのパンを食  
 し、この杯を飲むごとに主の死を示してそのきたりたもう時にまで及ぶなり。されば  
 よろしきになわすして主のパンを食し、主の杯を飲む者は、主のからだと血とを犯  
 すなり。人みずから省みてのち、そのパンを食し、その杯を飲むべし。みからだをわ  
 きまえずして飲み食いする者は、その飲み食いによりてみずからさばきを招くべけれ  
 ばなり。このゆえになんじらのうちに弱きもの、病めるもの多くあり、また眠りにつ  
 きたる者も少なからず。我らもし、みずからおのれをわきまえなばさばかる事な  
 らん。されどさばかる事のあるは、我らを世の人とともに罪に定めじとて主の懲ら  
 しめたもうなり。このゆえに、わが兄弟よ、食せんとて集まるときは互いに待ち合  
 せよ。もし飢うる者あらば、なんじらの集まりのさばきを招くことなからんためにお

のが家にて食すべし。

福音書 ルカ二三章一—四九

民衆みな立ちて、イエスをビラトの前に引き行き、訴えいでて言う、「我らこの人が、わが国の民を惑わし、みつぎをカイザルに納むるを禁じ、かつみずから王なるキリストとどのうるを認めたり」。ピラト、イエスに問いて言う、「なんじはユダヤびとの王なるか」。答えて言いたもう、「なんじの言うがごとし」。ピラト祭司長らと群衆とに言う、「我この人にとがあるを見ず」。彼らますます言いつのり、「彼はユダヤ全国に教えをなして民をさわがし、ガリラヤより始めて、ここに至る」と言う。ピラトこれを聞き、そのガリラヤびとなるかを問いて、ヘロデの権下の者なるを知り、ヘロデこのころエルサレムにいたれば、イエスをそのもとに送れり。ヘロデ、イエスを見ていたく喜ぶ。これは彼につきて聞く所ありたれば、久しく会わんことを欲し、何をかするしを行のうを見んと望みいたるゆえなり。かくて多くの言葉をもて問いたれど、イエス何をも答えたまわず。祭司長・学者ら立ちて手痛くイエスを訴う。ヘロデその兵卒とともにイエスを侮り、かつちよろうし、はなやかなる衣を着せて、ピラ

トに返す。ヘロデとピラトとさきにはあだたりしが、この日たがい親しくなれり。  
 ピラト、祭司長らとつかさらと民とを呼び集めて言う、「なんじらの人を民を惑わ  
 す者として引ききたれり。見よ、我なんじらの前にてただしたれど、その訴うるとこ  
 ろにつきて、この人にとがあるを見ず。ヘロデもまたしかり、彼を我らに返したり。  
 見よ、彼は死に当たるべきわざをなさざりき。されば懲らしめてこれを赦さん」。民  
 衆ともに叫びて言う、「この人を除け、我らにバラバを赦せ」。このバラバは都に起  
 こりし暴動と殺人とのゆえによりて獄舎に入れられたる者なり。ピラトはイエスを赦  
 さんと欲して、ふたたび彼らに告げたれど、彼ら叫びて、「十字架につけよ、十字架  
 につけよ」と言う。ピラト三たびまで、「彼はなにの悪事をなしたるか、我その死に当  
 たるべきわざを見ず、ゆえに懲らしめて赦さん」と言う。されど人々、大声をあげ迫  
 りて、十字架につけんことを求めたれば、ついにその声勝てり。ここにピラトその求  
 めのごとくすべしと言いわたし、その求むるままにかの暴動と殺人とのゆえにより  
 て、獄舎に入れられたる者を赦し、イエスをわたして彼らの心のままならしめたり。  
 人々イエスを引き行く時、シモンというクレネびとのいなかよりきたるを捕え、十字

架をおわせてイエスのあとに従わしむ。民の大きいなる群れと嘆き悲しめる女たちの群れとこれに従う。イエス振り返りて女たちに言いたもう、「エルサレムの娘よ、わがために泣くな。ただおのがため、おのが子のために泣け。見よ、『うまずめ・子産まぬ腹・飲ませぬ乳は幸いなり』と言う日きたらん。その時人々、『山に向かいて我らの上に倒れよ、丘に向かいて我らをおおえ』と言いいでん。もし青木にかくなさば、枯木はいかにせられん」。またほかにふたりの悪人をも、死罪に行なわんとてイエスとともに引き行く。されこうべという所に至りて、イエスを十字架につけ、また悪人のひとりとその右、ひとりとその左に十字架につく。かくてイエス言いたもう、「父よ、彼らを赦したまえ。そのなすところを知らざればなり」。彼らイエスの衣を分かちてくじ取りにせり、民は立ちて見いたり。つかさたちもあざけりて言う、「彼は他人を救えり、もし神の選びたまひしキリストならばおのれをも救えかし」。兵卒どもも、ちようろうしつゝ近づき、酸きぶどう酒をさしだして言う、「なんじもしユダヤびとの王ならば、おのれを救え」。またイエスの上には、「これはユダヤびとの王なり」との罪状札あり。十字架にかけられたる悪人のひとり、イエスをそしりて言

う、「なんじはキリストならずや、おのれと我らとを救え」ほかの者これに答え戒めて言う、「なんじ同じく罪に定められながら、神を恐れぬか。我らはなしし事の報いを受くるなれば当然なり。されどこの人はなにの不善をもなさざりき」。また言う、「イエスよ、御国に入りたもうとき、我をおぼえたまえ」イエス言いたもう、「われまことになんじに告ぐ。きょうなんじは我とともにパラダイスにあるべし」。昼の十二時ごろ、日、光をうしない、地のうえあまねく暗くなりて、三時におよび、聖所の幕、まなかより裂けたり。イエス大声に呼ばわりて言いたもう、「父よ、わが霊を御手にゆだね」。かく言いて息絶えたもう。百卒長このありし事を見て、神をあがめて言う、「実にこの人は義人なりき」。これを見んとて集まりたる群衆も、ありし事どもを見てみな胸を打ちつつ帰れり。すべてイエスの知るべの者およびガリラヤより従いきたれる女たちもはるかに立ちてこれらのことを見たり。

受 苦 日

この日には早禱、嘆願につづいて特禱・使徒書・福音書までで終わつてもよい。

福音書の前後の会衆の言葉は用いない。

特祷は当日の朝から用い、早祷・晩祷には最初のものだけを用いる。

### 特 祷

全能の神よ、いつくしみをもつて主の家族を顧みたまわんことをこいねがい奉る。主イエス・キリストはこの家族を救わんために甘んじて裏切られ、悪人の手にわたされ、十字架の上に殺されたまえり。願わくは父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもう主イエス・キリストに栄光あらんことを。アーメン

とこしえにいます全能の神・聖霊をもつて全公会をきよめ常にこれを治めたもう主よ、願わくは公会の肢たるもろもろの人のためにささぐる祈りを受け、おのおのその務めを尽くし、真実に主に仕うることを得させたまえ。救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

あわれみ深き神よ、主は造りたまひし者をことごとく愛し、罪びとの死ぬることを好まず主に歸りて生くることを喜びたまう。願わくは十字架につけられたまいしキリス

トを信ぜざる人々、主を知らざるすべての人々をあわれみ、その知らざるを悟らせ、かたくななるを柔らげ、御言葉を軽んずる心を除きたまえ。ほめ奉るべき主よ、願わくは彼らを主のおりに伴いて一つの群れとなし、ひとりの羊飼ひ・主イエス・キリストに従わしめたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたまう御子によりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヘブ一〇章一二五

それ律法はきたらんとする良き事の影にしてまことの形にあらねば、年ごとにたえずささぐる同じいけにえにて、神にきたる者をいつまでも全うすることを得ざるなり。もしこれを得ば、礼拝をなす者、ひとたび清められてまた、心に罪を覚えねば、ささぐることをやめしならん。されどいけにえによりて、年ごとに罪を覚ゆるなり。これ雄牛とやぎとの血は罪を除くことあたわざるによる。このゆえにキリスト世にきたるとき言いたもう、「なんじいけにえと供え物とを欲せず、ただわがためにからだを備えたまえり。なんじ燔祭と罪祭とを喜びたまわす。その時われ言う、『神よ、我なんじの御心を行なわんとてきたる。我につきて巻物の書にしるされたるがごとし』と。

さきには、「なんじいけにえと供え物と燔祭と罪祭と（すなわち律法に従いてささぐる物）を欲せず、また喜ばず」と言い、のちに、「見よ、我なんじの御心を行なわんとてきたる」と言いたまえり。その後なる者を立てんために、その先なる者を除きたもうなり。この御旨にかないてイエス・キリストのからだのひとたびささげられしによりて我らは清められたり。すべての祭司は日ごとに立ちて仕え、いつまでも罪を除くことあたわぬ同じいけにえをしばしばささぐ。されどキリストは罪のために一つにいけにえをささげて限りなく神の右に座し、かくておのがあだのおのが足台とせられん時を待ちたもう。そは清めらるる者を一つの供え物にて限りなく全うしたもうなり。聖霊もまた我らにこれをあかしして、「『この日の後、われ彼らと立つる契約はこれなり』と主言いたもう。また、『わが律法をその心におき、その思いにしるさん』』と、言いたまいて、「この後また彼らの罪と不法とを思いいでざるべし」と言いたもう。かかる赦しある上は、もはや罪のためにささげ物をなす要なし。されば兄弟よ、我らはイエスの血により、その肉体たる幕を経て我らに開きたまえる新しき生ける道より、はばかりずして至聖所に入ることを得、かつ神の家を治むる大いなる祭司を得



たれば、心はすがれて良心のとがめを去り、身は清き水にて洗われ、まことの心と全き信仰とをもて神に近づくべし。また約束したまいし者は忠実なれば、我ら言いあらわすところの望みを動かさずして堅く守り、互いに相かえりみ愛と良きわざとを勵まし、集まりをやむるある人のならわしのごとくせず、互いに勧めあい、かの日のいよいよ近づくを見て、ますますかくのごとくすべし。

福音書 ヨハ一九章一—三七

ここにピラト、イエスをとりにて打ち打つ。兵卒どもいばらにて冠をあみ、そのころべにかむらせ、紫の上着を着せ、みもとに進みて言う、「ユダヤびとの王やすかれ」。しかして手のひらにて打てり。ピラトふたたびいでて人々に言う、「見よ、この人をなんじらに引きいだす、これは何の罪あるをもわが見ぬことをなんじらの知らんためなり」。ここにイエスいばらの冠をかむり、紫の上着を着ていでたまえば、ピラト言う、「見よ、この人なり」。祭司長、下役どもイエスを見て叫び言う、「十字架につけよ、十字架につけよ」。ピラト言う、「なんじらみずから取りて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず」。ユダヤびと答う、「我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべ

き者なり、彼はおのれを神の子となせり」。ピラトこの言葉を聞きてますます恐れ、ふたたび官邸に入りてイエスに言う、「なんじはいずこよりぞ」。イエス答をなしたまわず。ピラト言う、「我に語らぬか、我になんじを赦す権威あり、また十字架につくる権威あるを知らぬか」。イエス答えたもう、「なんじ上より賜わらずば、我に對してなにの権威もなし。このゆえに我をなんじにわたしし者の罪はさらに大いなり」。ここにおいてピラト、イエスを赦さんことをつとむ。されどユダヤびと叫びて言う、「なんじもしこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、おおよそおのれを王となす者は、カイザルにそむくなり」。ピラトこれらの言葉を聞きてイエスをそとに引き行き、數石（ヘブル語にてガバタ）というところにてさばきの座につく。この日は過越の備え日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、ユダヤびとに言う、「見よ、なんじらの王なり」。彼ら叫びて言う、「除け、除け、十字架につけよ」。ピラト言う、「我なんじらの王を十字架につくべけんや」。祭司長ら答う、「カイザルのほか我らに王なし」。ここにピラト、イエスを十字架につくるために彼らにわたせり。彼らイエスを受け取りたれば、イエスおのれに十字架を負いて、されこうべ（ヘブル語にてゴル

ゴダ）といふ所<sup>ところ</sup>にいで行<sup>ゆ</sup>きたもう。そこにて彼<sup>かれ</sup>らイエスを十字架<sup>じゅうじか</sup>につく。またほかにふたりの者<sup>もの</sup>をともしに十字架<sup>じゅうじか</sup>につけ、ひとり<sup>ひとり</sup>を右<sup>みぎ</sup>に、ひとり<sup>ひとり</sup>を左<sup>ひだり</sup>に、イエスを真中<sup>まなか</sup>におけり。ピラト罪状<sup>ざいじょう</sup>札<sup>しだ</sup>を書<sup>か</sup>きて十字架<sup>じゅうじか</sup>の上<sup>うへ</sup>にかかぐ、「ユダヤびとの王<sup>おう</sup>、ナザレのイエス」としるしたり。イエスを十字架<sup>じゅうじか</sup>につけし所<sup>ところ</sup>は都<sup>みやと</sup>に近<sup>ちか</sup>ければ、多くのユダヤびとの祭司<sup>さいし</sup>長<sup>ちやう</sup>らピラトに言<sup>い</sup>う、「ユダヤびとの王<sup>おう</sup>としるさず、我<sup>われ</sup>はユダヤびとの王<sup>おう</sup>なりと自称<sup>じこ</sup>せりとしるせ」。ピラト答<sup>こた</sup>う、「わがしるしたる事<sup>こと</sup>はしるしたるまに」。兵卒<sup>へいそつ</sup>どもイエスを十字架<sup>じゅうじか</sup>につけしち、その衣<sup>え</sup>をとりて四<sup>よ</sup>つに分<sup>わ</sup>け、おのおのその一つを得<sup>え</sup>たり。また下着<sup>したぎ</sup>を取りしが、下着<sup>したぎ</sup>は縫<sup>ぬ</sup>い目<sup>め</sup>なく、上<sup>うへ</sup>よりすべて織<sup>お</sup>りたる物<sup>もの</sup>なれば、兵卒<sup>へいそつ</sup>ども互<sup>たが</sup>いに言<sup>い</sup>う、「これを裂<sup>さ</sup>くな、たれがうるか、くじにすべし」。これは聖書<sup>せいしょ</sup>の成<sup>なり</sup>就<sup>じゆ</sup>せんためなり。いわく、「彼<sup>かれ</sup>ら互<sup>たが</sup>いにわが衣<sup>え</sup>を分<sup>わ</sup>け、わがきぬをくじにせり」。兵卒<sup>へいそつ</sup>どもかくなしたり。さてイエスの十字架<sup>じゅうじか</sup>のかたわらには、その母<sup>はは</sup>と母<sup>はは</sup>の姉妹<sup>しまい</sup>と、クロパの妻<sup>つよ</sup>マリヤとマグダラのマリヤと立<sup>た</sup>てり。イエスその母<sup>はは</sup>とその愛<sup>あい</sup>する弟子<sup>でし</sup>との近<sup>ちか</sup>く立<sup>た</sup>てるを見て、母<sup>はは</sup>に言<sup>い</sup>いたもう、「女<sup>おんな</sup>よ、見<sup>み</sup>よ、なんじの子<sup>こ</sup>なり」。また弟子<sup>でし</sup>に言<sup>い</sup>いた

もう、「見よ、なんじの母なり」。この時より、その弟子彼をおのが家に受けたり。この後イエスよろずの事のおわりたるを知りて——聖書の全うせられんために——「我かわく」と言いたもう。ここに酸きぶどう酒の満ちたる器あり、そのぶどう酒のふくみたる海綿をヒソブにつけてイエスの口に差し付く。イエスそのぶどう酒を受けて後言いたもう、「事おわりぬ」。ついにこうべをたれて霊をわたしたもう。この日は備え日なれば、ユダヤびと、安息日に死かばねを十字架のうえにとめおかじとて（ことにこのたびの安息日は大いなる日なるにより）ピラトに、彼らの足を折りて死かばねを取り除かんことを請う。ここに兵卒どもきたりて、イエスとともに十字架につけられたる第一の者とほかのものとの足を折り、しかしてイエスにきたりしに、はや死にたもうを見て、その足を折らず。しかるにひとりの兵卒、やりにてそのわきを突きたれば、ただちに血と水と流れいず。これを見しものあかしをなす、そのあかしはまことなり。彼はその言うことのまことなるを知る。これなんじらにも信ぜしめんためなり。これらのことの成りたるは、「その骨くだかれず」とある聖句の成就せんためなり。またほかに、「彼らおのが刺したる者を見るべし」と言える聖句あり。

復活前日

この日の諸式は受苦日の諸式に準じて行なう。  
特禱は当日の朝から用いる。

特禱

主よ、我ら恵みによりて尊き御子イエス・キリストの死に合う洗礼を受けたり。願わくは常に悪欲を殺し、御子とともに葬られ、ついに死と墓の門をとおりて、復活の喜びに至ることを得させたまえ。我らのために死にて葬られ、よみがえりたまひし御子イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ペテ前 三章一七—二二

もし善を行ないて苦しみを受くること神の御心ならば、悪を行ないて苦しみを受くるにまさるなり。キリストもなんじらを神に近づかせんとて正しきもの、正しからぬ者に代わりて一たび罪のために死にたまえり、彼は肉体にて殺され、霊にて生かされたまえるなり。また霊にて行き、獄舎にある霊に宣べ伝えたまえり。これらの霊はむかしノアの時代に箱舟の備えらるるあいだ寛容をもて神の待ちたまえるとき、従わざり

し者どもなり、その箱舟に入り水を経て救われし者は、わずかにしてただ八人なりき。その水にかたどれるバプテスマは肉の汚れを除くにあらず、良き良心の神に對する求めにしてイエス・キリストのよみがえりによりて今なんじらを救う。彼は天にのぼりて神の右にいます。御使いたちおよびもろもろの權威と力とは彼に従うなり。

福音書　マタ二七章五七—六六

日暮れて、ヨセフというアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、ピラトに行きてイエスの死かばねを請う。ここにピラトこれをわたすことを命ず。ヨセフ死かばねをとりて清き亜麻布につつみ、岩にほりたるおのが新しき墓に納め、墓の入口に大なる石をまろばしおきて去りぬ。そこにはマグダラのマリヤとほかのマリヤと墓に向かいて座したり。あくる日、すなわち備え日の翌日、祭司長らとパリサイ人らとピラトのもとに集まりて言う、「主よ、かの惑わすもの生きおりし時、『われ三日ののちによみがえらん』と言ひしを、我ら思いいだせり。されば命じて三日に至るまで墓を固めしめたまえ、恐らくはその弟子らきたりてこれを盗み、『彼は死人のうちよりよみがえれり』と民に言わん。しからばのちの惑いは前のよりも、はなはだ

しからん」。ピラト言う、「なんじらに番兵あり、行きて力限り固めよ」。すなわち彼ら行きて石に封印し、番兵をおきて墓を固めたり。

復活の日

早禱のとき詩九十五篇にかえて次の頌を歌いまたは唱える。  
特禱は当日の朝から用いる。

復活の頌

- 一 我らの過越の小羊、すなわちキリストは＝すでにほふられたまえり
- 二 されば我らは古きパン種を用いず、また惡とよこしまとのパン種を用いず＝眞実と誠との、種なしパンを用いて、祭りをおこのうべし
- 三 キリスト死人のうちよりよみがえりて、また死にたまわず＝死もまた彼に主となることなし

- 四 その死にたまえるは罪につきて、ひとたび死にたまえるなり＝その生きたまえるは神につきて生きたまえるなり

- 五 かくのごとく、なんじらもおのれを罪につきては死にたるもの＝義につきては、

キリストイエスにありて生きたる者とおもうべし

ロマ六章 九—二

六 まさしくキリストは死人のうちより、よみがえり＝ 眠りたる者の初穂となりた

まえり

七 それ死の、人によりてきたりしごとく＝ 死人のよみがえりもまた人によりてき

たれり

八 すべての人、アダムによりて死ぬるごとく＝ すべての人、キリストによりて生

くべし

コリ前 一五章二〇—二二

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

特 禱

全能の神よ、主はひとりの御子イエスキリストをもつて、死に勝ち、限りなき命の門を開きたまえり。願わくは殊なる恵みをもつて我らの心に起こしたもう良き願いをば、絶えざる助けによりて実行することを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン



使徒書 コロ三章一―七

なんじらもしキリストとともによみがえらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリストかしこにありて神の右に座したもうなり。なんじら上にあるものを思い、地にあるものを思うな、なんじらは死にたる者にしてその命はキリストとともに神のうちに隠れあればなり。我らの命なるキリストの現われたもうとき、なんじらもこれとともに榮光のうちに現われん。されば地にある肢体、すなわち淫行、汚れ、情欲、悪欲、またむさぼりを殺せ、むさぼりは偶像崇拜なり。神の怒りは、これらの事によりて不従順の子らにきたるなり。なんじらもかかる人のなかに日を送りし時は、これらの惡しき事に歩めり。

福音書 ヨハニ二〇章一―一〇

一週の始めの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取りのけあるを見る。すなわち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛したまいしかの弟子とのもとに至りて言う、「たれか主を墓より取り去れり、いずこに置きしか我ら知らず」。ペテロと、かの弟子といでて墓に行く。ふたりともに走りたれど、かの弟

子ペテロよりとく走りて先に墓にいたり、かがみて布のおきたるを見れど、内には入らず。シモンⅡペテロおくれきたり、墓に入りて布のおきたるを見、またこうべを包みし手ぬぐいは布とともにあらず、ほかのところに巻きてあるを見る。さきに墓にきたれるかの弟子もまた入り、これを見て信ず。彼らは聖書にしろしたる、死人のうちよりそのよみがえりたもうべき事をいまだ悟らざりしなり。ついにふたりの弟子おのが家に帰れり。

### 復活後月曜日

使徒書 使一〇章三四―四三

ペテロ口を開きて言う、「われ今まことに知る、神はかたよることをせず、いずれの国の人にても神を敬いて義を行のう者を入れたもうことを。神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音を宣べ、イスラエルの子孫に言葉をおくりたまえり。すなわちヨハネの伝えしバプテマスのおち、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に広まりし言葉なるはなんじらの知るところなり。これは神が聖霊と力とを注ぎたま

いしナザレのイエスの事にして、彼はあまねく巡りて良き事を行ない、すべて惡魔に制せらるる者をいやせり、神これとともにいましたればなり。我らはユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行ないたまひしものろのことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。神はこれを三日目によりみがえらせ、かつ明らかに現わしたまえり。されどすべての民にはあらで、神のあらかじめ選びたまえる証人、すなわちイエスの死人のうちよりよみがえりたまひし後、これとともに飲み食ひせし我らに現わしたまいしなり。イエスはおのれの生ける者と死にたる者とのさばき主に、神より定められしをあかしすることと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じたもう。彼につきては預言者たちもみな、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦しを得べきことをあかしす。

## 福音書

ルカ二四章一三—三五

見よ、この日ふたりの弟子、エルサレムより三里ばかりへだたりたるエマオという村に行きつつ、すべてありし事どもを互いに語り合う。語り、かつ論じ合うほどに、イエスみずから近づきてともに行きたもう。されど彼らの目さえぎられてイエスたるを

認むることあたわず。イエス彼らに言いたもう、「なんじら歩みつつ互いに語り合うことはなんぞや」。彼ら悲しげなるさまにて立ちとどまり、そのひとりなるクレオパと名づくるもの答えて言う、「なんじエルサレムに宿りいてひとりこのごろかしこに起こりし事どもを知らぬか」。イエス言いたもう、「いかなる事ぞ」。答えて言う、「ナザレのイエスの事なり、彼は神とすべての民との前にてわざにも言葉にも力ある預言者なりしに、祭司長らおよびわがつかさらは、死罪に定めんとてこれをわたし、ついに十字架につけたり、我らはイスラエルを贖うべき者は、このひとなりと望みいたり、しかのみならずこの事のありしより、きょうははや三日目なるが、なお我らのうちのある女たち、我らを驚ろかせり、すなわち彼ら朝早く墓に行きたるに、死かばねを見ずして帰り、かつ御使いたち現われて、イエスは生きたもうと告げたりと言う。我らともがらの数人もまた墓に行きて見れば、まさしく女たちの言いしごとくにしてイエスを見ざりき」。イエス言いたもう、「ああ愚かにして預言者たちの語りたるすべてのことを信ずるに心鈍き者よ、キリストはかならずこれらの苦しみを受けて、その栄光に入るべきならずや」。かくてモーセおよびすべての預言者をはじめ、おのれにつ

きてすべての聖書にしるしたる所を説き示したもう。ついに行く所の村に近づきしに、イエスなお進み行くさまなれば、強いて止めて言う、「我らとともにとどまれ、時夕べにおよびて、日もはや暮れんとす」。すなわちとどまらんとて入りたもう。ともに食事の席に着きたもう時、パンを取りて祝し、裂きて与えたまえば、彼らの目開けてイエスなるを認む、しかしてイエス見えなりましたもう。彼ら互いに言う、「道にて我らと語り我らに聖書を説き明かしたまえるとき、我らの心、内に燃えしならずや」。かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子およびこれとともなる者集まりいて言う、「主は実によみがえりて、シモンに現われたまえり」。ふたりの者もまた道にてありし事と、パンを裂きたもうによりてイエスを認めし事とを述べ。

# 復活後火曜日

使徒書 使一三章二六―四一

兄弟たち、アブラハムの血すじの子らおよびなんじらのうち神を恐るる者よ、この救いの言葉は我らにおくられたり。それエルサレムに住める者およびそのつかさらは、

彼をも安息日ごとに誦むところの預言者たちの言葉をも知らず、彼を罪に定めて預言を成就せしめたり。その死に当たるべきゆえを得ざりしかどピラトに殺さんことを求め、彼につきてしるされたる事をことごとく成し終え、彼を木よりおろして墓に納めたり。されど神は彼を死人のうちよりよみがえらせたまえり。かくてイエスはおのれとともにガリラヤよりエルサレムに上りし者に多くの日のあいだ現われたまえり、その人々は今、民の前にイエスの証人たるなり。我らも先祖たちが与えられし約束につきて喜ばしき音ずれをなんじらに告ぐ、神はイエスをよみがえらせて、その約束を我らの子孫に成就したまえり。すなわち詩の第二篇に、「なんじはわが子なり、我きようなんじを生めり」としるされたるがごとし。また腐れに帰せざるさまに彼を死人のうちよりよみがえらせたまいし事につきては、かくのたまえり。いわく「われダビデに約せし堅き聖なる恵みをなんじらに与えん」。そはほかの篇に、「なんじはなんじの聖者をくされに帰せざらしむべし」と言えり。それダビデは、その代にて神のみむねを行ない、ついに眠りて先祖たちとともに置かれ、かつ腐れに帰したり。されど神のよみがえらせたまいし者は腐れに帰せざりき。このゆえに兄弟たちよ、なんじら知れ。

この人によりて罪の赦しの、なんじらに伝えらるることを。なんじらモーセの律法によりて義とせられ得ざりしすべての事も、信ずる者はみなこの人によりて義とせらるる事を。さればなんじら心せよ、恐らくは預言者たちの書に言いたる事きたらん。いわく、「侮る者よ、なんじら見よ、驚け、滅びよ、我なんじらの日に一つの事を行なわん。これをなんじらにつぶさに告ぐる者ありとも信ぜざるほどの事なり」。

福音書 ルカ二四章三六―四八

これらのことを語るほどに、イエスそのなかに立ち、「平安なんじらにあれ」と言いたもう。彼らおじ恐れて見るところのものを霊ならんと思ひしに、イエス言いたもう、「なんじらなんぞ心騒ぐか、なにゆえ心に疑いおこるか、わが手わが足を見よ、これ我なり。我をなでて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、なんじらの見るごとし」。かく言いて手と足を示したもう。彼ら喜びの余りに信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう、「ここになにか食物あるか」。彼らあぶりたる魚一きれをささげたれば、これを取り、その前にて食したまえり。また言いたもう、「これらの事はわがなおなんじらとともにありし時に語りて、我につきモーセの律法、預言者および詩

篇<sup>へん</sup>にしるされたるすべての事は、必ず遂<sup>と</sup>げらるべしと言<sup>い</sup>いしところなり」。ここに聖<sup>せい</sup>書を悟<sup>さと</sup>らしめんとて、彼<sup>かれ</sup>らの心<sup>こころ</sup>を開<sup>ひら</sup>きて言<sup>い</sup>いたもう、「かくしるされたり、キリストは苦<sup>くる</sup>しみを受けて、三日<sup>かみ</sup>目に死人<sup>しにん</sup>のうちよりよみがえり、かつその名<sup>な</sup>によりて罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆる</sup>しを得<sup>え</sup>さする悔<sup>く</sup>い改<sup>あらた</sup>めはエルサレムより始<sup>はじ</sup>まりて、もろもろの国<sup>くに</sup>びとに宣<sup>の</sup>べ伝えらるべしと。なんじらはこれらのことの証<sup>しき</sup>人<sup>にん</sup>なり」。

### 復活<sup>ふっかつ</sup>後<sup>ご</sup>第一<sup>だいいち</sup>主<sup>しゅ</sup>日<sup>じつ</sup>

特<sup>とく</sup> 禱<sup>たう</sup>

全能<sup>ぜんのう</sup>の父<sup>ちち</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>はひとりの御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>を与<sup>あた</sup>えて我<sup>われ</sup>らの罪<sup>つみ</sup>のために死<sup>し</sup>なしめ、また我<sup>われ</sup>らの義<sup>ぎ</sup>とせられんがためによみがえらしめたまえり。願<sup>ねが</sup>わくは、よこしまのパン種<sup>たね</sup>を除<sup>のぞ</sup>き、常<sup>つね</sup>にまことの信<sup>しん</sup>仰<sup>やう</sup>と清<sup>きよ</sup>き行<sup>おこ</sup>ないをもつて主<sup>しゅ</sup>に仕<sup>つか</sup>うることを得<sup>え</sup>させたまえ。御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉<sup>ほう</sup>る。アーメン

使<sup>し</sup> 徒<sup>と</sup> 書<sup>しょ</sup> ヨハネ 五章<sup>ごしょう</sup>四十一二

おおよそ神<sup>かみ</sup>より生<sup>う</sup>まゐる者は世<sup>よ</sup>に勝<sup>か</sup>つ、世<sup>よ</sup>に勝<sup>か</sup>つ勝利<sup>しょうり</sup>は我<sup>われ</sup>らの信<sup>しん</sup>仰<sup>やう</sup>なり。世<sup>よ</sup>に勝<sup>か</sup>つも



のはたれぞ、イエスを神の子と信ずる者にあらずや。これ水と血とによりてきたりたまいし者、すなわちイエス・キリストなり。ただに水のみならず、水と血とをもてきたりたまひしなり。あかしする者は御霊なり。御霊はまことなればなり。あかしする者は三つ、御霊と水と血となり。この三つあいて一つとなる。我らもし人のあかしを受けんには、神のあかしはさらに大いなり。神のあかしはその子につきてあかししたまいしこれなり。神の子を信ずる者はそのうちにこのあかしをもち、神を信ぜぬ者は神を偽り者とす。これ神その子につきてあかしせしあかしを信ぜぬがゆえなり。そのあかしはこれなり、神はとこしえの命を我らにたまえり、この命はその子にあり。御子をもつ者は命をもち、神の子をもたぬ者は命をもたず。

福音書 ヨハニ二〇章一九―二三

この日、すなわち一週の始めの日の夕べ、弟子たちエダヤびとを恐るるによりておるところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らのなかに立ちて言いたもう、「平安なんじらにあれ」。かく言いてその手とわきとを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。イエスまた言いたもう、「平安なんじらにあれ、父の我をつかわしたまえるごと

く、我もまたなんじらをつかわす」。かく言いて、息を吹きかけ言いたもう、「聖靈をうけよ。なんじらたれの罪を赦すともその罪ゆるされ、たれの罪をとどむるともその罪とどめらるべし」。

### 復活後第二主日

特 特

全能の神よ、主はひとりの御子を与えて我らの罪のいけにえとなし、またきよき生涯の模範となしたまえり。願わくは深く感謝して、その量るべからざる恵みを受け、日力を尽くして御跡を踏むことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ペテ前二章一九―二五

人もし受くべからざる苦しみを受け、神を認むるによりて愛に耐うる事をせば、これほむべきなり。もし罪を犯して打たるとき、これを忍ぶともなにの功がある。されどもし善を行ないてなお苦しめらるる時これを忍ばば、これ神のほめたもうところ

なり。なんじらはこれがために召されたり、キリストもなんじらのために苦しみをうけ、なんじらをその足跡に従わしめんとて模範を残したまえるなり。彼は罪を犯さず、その口に偽りなく、またののしられてののしらず、苦しめられておびやかさず、正しくさばきたもう者におのれをゆだね、木の上にかかりて、みずから我らの罪をおのが身に負いたまえり。これ我らが罪につきて死に、義につきて生きんためなり。なんじらは彼の傷によりていやされたり。なんじらさきには羊のごとく迷いたりしが、今はなんじらの魂の牧者たる監督に帰たり。

福音書 ヨハ一〇章一一一六

イエス言いたもう、「我は良き羊飼いな、良き羊飼いは羊のために命を捨つ。羊飼いならず、羊もおのがものならぬ雇いびとはおおかみのきたるを見れば羊を捨てて逃ぐ、——おおかみは羊を奪い、かつ散らす——彼は雇いびとにてその羊をかえりみぬゆえなり。我は良き羊飼いにして、わがものを知り、わがものは我を知る、父の我を知り、我の父を知るがごとし、我は羊のために命を捨つ。我にはまた、このおりのものならぬほかの羊あり、これをも導かざるを得ず、彼らはわが声を聞かん、ついに一

つの群れひとりの羊飼いとなるべし」。

### 復活後第三主日

特 徒

全能の神よ、主は迷える者に真理の光を現わし、正しき道に帰らせたまう。願わくは公会の交わりに入れられし人々、皆その奉ずる所になわざるものを去り、もつばらこれにかのうものを追ひ求むることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ペテ前二章一一一七

愛する者よ、我なんじらに勧めむ。なんじらは旅びとまた宿れる者なれば、魂に逆らい  
て戦う肉の欲を避け、異邦人のうちにありて行状を麗わしくせよ、これなんじらをそ  
しりて悪を行のう者と言える人々の、なんじらの良き行ないを見て、かえつて顧みの  
日に神をあがめんためなり。なんじら主のために、すべて人の立てたる制度に従え。  
あるいは上にある王、あるいは悪を行のう者を罰し、善を行のう者を賞せんために王

よりつかわされたるつかさに従え。善を行ないて愚かなる人の無知の言葉をとどむるは、神の御心なればなり。なんじら自由なる者のごとくすとも、その自由をもて悪のおおいとなさず神のしもべのごとくせよ。なんじらすべての人を敬い、兄弟を愛し、神を恐れ、王を尊べ。

## 福音書 ヨハ一六章一六—二二

イエス弟子たちに言いたもう、「しばらくせばなんじら我を見ず、またしばらくして我を見るべし」。ここに弟子たちのうちある者がいに言う、「しばらくせば我を見ず、またしばらくして我を見るべし」と言い、かつ『父に行くによりて』と言いたまえるは、いかなることぞ。また言う、「このしばらくとはいかなることぞ、我らその言いたもうところを知らず」。イエスその問わんと思えるを知りて言いたもう、「なんじら『しばらくせば我を見ず、またしばらくして我を見るべし』とわが言いしを尋ね合うか。まことにまことになんじらに告ぐ、なんじらは泣き悲しみ、世は喜ばん。なんじら憂うべし、されどその憂いは喜びとならん。女産まんとする時は憂いあり、その期いたるによりてなり。子を産みて後は苦しみをおぼえず、世に人の生まれたる

喜びによりてなり。かくなんじらも今は憂いあり、されど我ふたたびなんじらを見ん、その時なんじらの心喜ぶべし、その喜びを奪う者なし」。

### 復活後第四主日

特 待

全能の神よ、主のほかに罪びとのみだりなる心を治むるものなし。願わくは我らに主の戒めを愛し、主の約束を慕う恵みをあたえ、このはかなき世におるも、常に心をまことの喜びある所に置くことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヤコ一章一七—二一

すべての良き賜物とすべての全き賜物とは、上より、もろもろの光の父よりくだるなり。父は変わることなく、また回転の影もなき者なり。その造りたまえる物のうちに我らを初穂のごとき者たらしめんとて、御旨のままに真理の言葉をもて、我らを生みたまえり。わが愛する兄弟よ、なんじらはこれを知る。されば、おのおの聞くこと

をすみやかにし、語<sup>かた</sup>ることをおそくし、怒<sup>いか</sup>ることをおそくせよ。人<sup>ひと</sup>の怒<sup>いか</sup>りは神<sup>かみ</sup>の義<sup>ぎ</sup>を行<sup>な</sup>わざればなり。さればすべての汚<sup>けが</sup>れと溢<sup>あふ</sup>る惡<sup>あく</sup>とを捨て、柔<sup>はなやわ</sup>和<sup>わ</sup>をもてその植<sup>う</sup>えられたるところの、魂<sup>たましひ</sup>を救<sup>すく</sup>いうる言<sup>ことば</sup>葉<sup>は</sup>を受けよ。

福音書 ヨハ 一六章五一一五

イエス弟子<sup>でし</sup>たちに言<sup>い</sup>いたもう、「今<sup>いま</sup>われをつかわしたまいし者<sup>もの</sup>に行<sup>ゆ</sup>く、しかるになんじらのうち、たれも我<sup>われ</sup>に『いずこに行<sup>ゆ</sup>く』と問<sup>と</sup>う者<sup>もの</sup>なし。ただこれらの事<sup>こと</sup>を語<sup>かた</sup>りしによりて、憂<sup>うれ</sup>いなんじらの心<sup>こころ</sup>にみてり。されど、我<sup>われ</sup>まことをなんじらに告<sup>つ</sup>ぐ、わが去<sup>さ</sup>るはなんじらの益<sup>えき</sup>なり。我<sup>われ</sup>さらば助<sup>たす</sup>け主<sup>ぬし</sup>なんじらにきたらじ、われ行<sup>ゆ</sup>かばこれをなんじらにつかわさん。彼<sup>かれ</sup>きたらんとし世<sup>よ</sup>をして罪<sup>つみ</sup>につき、義<sup>ぎ</sup>につき、さばきにつきて、誤<sup>あやま</sup>てるを認めしめん。罪<sup>つみ</sup>につきてとは、彼<sup>かれ</sup>我<sup>われ</sup>を信<sup>しん</sup>ぜぬによりてなり。義<sup>ぎ</sup>につきてとは、われ父<sup>ちち</sup>に行<sup>ゆ</sup>き、なんじら今<sup>いま</sup>より我<sup>われ</sup>を見<sup>み</sup>ぬによりてなり。さばきにつきてとは、この世<sup>よ</sup>の君<sup>きみ</sup>さばかるるによりてなり。我<sup>われ</sup>なおなんじらに告<sup>つ</sup>ぐべき事<sup>こと</sup>あまたあれど、今<sup>いま</sup>なんじら得<sup>え</sup>耐<sup>た</sup>えず。されど彼<sup>かれ</sup>すなわち真理<sup>しんり</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>きたらん時<sup>とき</sup>、なんじらを導<sup>みちび</sup>きて真理<sup>しんり</sup>をことごとく悟<sup>さと</sup>らしめん。彼<sup>かれ</sup>おのれより語<sup>かた</sup>るにあらず、おおよそ聞<sup>き</sup>くところの事<sup>こと</sup>を語<sup>かた</sup>

り、かつきたらんとする事どもをなんじらに示さん。彼はわが榮光を現わさん、それはわがものを受けてなんじらに示すべければなり。すべて父のもちたもうものはわがものなり、このゆえにわがものを受けてなんじらに示さんといえるなり」。

### 復活後第五主日

特禱・使徒書・福音書は水曜日の朝まで用いる。

#### 特 禱

全能の神よ、すべての良き賜物は主よりいず。願わくは聖靈の感化にて我らの心に良き思いを起こし、絶えざる導きをもつて、これを実行せしめたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 使 徒 書 ヤコ一章二二―二七

なんじら御言葉を聞くのみにして、おのれを欺く者とならず、これを行のう者となれ。それ御言葉を聞くのみにして、これを行なわぬ者は、鏡にておのが生まれつきの顔を見る人に似たり。おのれをうつし見て立ち去れば、ただちにそのいかなる姿なりしか



を忘る。されど全き律法、すなわち自由の律法をねんごろに見て離れぬ者は、わざを  
行のうちに於て聞きて忘るる者にあらず、その行ないによりて幸いならん。人もし  
みずから信心ふかき者と思ひて、その舌にくつわを着けず、おのが心を欺かば、その信  
心はむなしきなり。父なる神の前に清くして汚れなき信心は、みなしごとやめめとを  
その悩みの時に見舞ひ、またみずから守りて世に汚されぬこれなり。

## 福音書 ヨハ一六章二三—三三

イエス弟子たちに言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、なんじらのす  
べて父に求むる物をば、わが名によりて賜うべし。なんじら今まではなにをもわが名  
によりて求めたることなし。求めよ、さらば受けん、しかしてなんじらの喜びみたさ  
るべし。我これらの事を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、あらわに父のこと  
をなんじらに告ぐるとききたらん。その日にはなんじらわが名によりて求めん。我は  
なんじらのために父に請うと言わず、父みずからなんじらを愛したまえばなり。これ  
なんじら我を愛し、また私の、父よりいできたりしことを信じたるによる。われ父よ  
りいでて世にきたれり、また世を離れて父に行くなり」。弟子たち言う、「見よ、今は

あらわに語りていささかもたとえを言いたまわず。我ら今なんじの知りたまわぬところなく、また人のなんじに問うを待ちたまわぬことを知る。これによりてなんじの神よりいできたりたまひしことを信ず。イエス答えたもう、「なんじら今、信ずるか。見よ、なんじら散らされておのおの、おのがところに行き、我をひとり残すとき至らん、いなすでに至れり。されど我ひとりおるにあらず、父われとともにいますなり。これらのことをなんじらに語りたるは、なんじら我にありて平安を得んがためなり。なんじら世にありては悩みあり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」。

昇 天 日

特禱・使徒書・福音書は、主日を除き、次の木曜日まで用いる。

特 禱

全能の神よ、ひとりの御子・我らの主イエス・キリストの天に昇りまししことを信じ奉る。願わくは我らの心と思いを天に昇らせ、常に主とともにおらしめたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストにより

てこいねがい奉る。アーメン

使徒書 使一章一一

テオピロよ、我さきに前の書を作りて、おおよそイエスの行ない始め、教え始めたまいしより、その選びたまえる使徒たちに、聖靈によりて命じたるのち、挙げられたまいし日に至るまでの事をしるせり。イエスは苦しみを受けしち、多くの確かなるあかしをもて、おのれの生きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現われて、神の国のことを語り、また彼等とともに集まりいて命じたもう、「エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、なんじらは日ならずして聖靈にてバプテスマを施されん」。弟子たち集まるとき問いて言う、「主よ、イスラエルの国を回復したもうはこの時なるか」。イエス言いたもう、「時また期は父おのれの権威のうちに起きたまえば、なんじらの知るべきにあらず。されど聖靈、なんじらの上に臨むとき、なんじら力を受けん、しかしてエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、および地のはてにまでわが証人とならん」。これらのことを言い終わりて、彼らの見るがうちに挙げられたもう、雲これを受けて

見えざらしめたり。その昇り行きたもうとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、見よ、白き衣を着たるふたりの人かたわらに立ちて言う、「ガリラヤの人々よ、なにゆえ天を仰ぎて立つか、なんじらを離れて天に挙げられたまいしこのイエスは、なんじらが天に昇り行くを見たるそのごとくまたきたりたまわん」。

福音書 マル 一六章 一四—二〇

そののち十一弟子の食しおる時に、イエス現われて、おのがよみがえりたるを見し者どもの言葉を信ぜざりしにより、その信仰なきと、その心のかたくななるとを責めたもう。かくて彼らに言いたもう、「全世界を巡りてすべての造られしものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、されど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。信ずる者には、これらのしるし伴わん。すなわちわが名によりて悪霊を追いたし、新しき言葉を語り、へびを握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなばいえん」。語り終えてのち、主イエスは天に挙げられ、神の右に座したもう。弟子たちいでて、あまねく福音を宣べ伝え、主もまたともに働き、伴うところのしるしをもて、御言葉を堅うしたまえり。

昇天後主日

特禱

栄光の王なる神よ、御子イエス・キリストに大いなる勝利を与え、天の御国に昇らしめたまえり。願わくは我らを捨ててみなしごとせず、聖霊をおくりて我らを強め、救い主キリストのさきだち行きたまえる所に昇らせたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ペテ前四章七一一

よろずの物の終わり近づけり、さればなんじら心を確かにし、懐みて祈りせよ。何事よりもまず互いに熱く相愛せよ。愛は多くの罪をおおえばなり。また惜しむことなく互いにねんごろにもてなせ。神のさまざまの恵みをつかさどる良き家づかさのごとくおのおのその受けし賜物をもて互いに仕えよ。もし語るならば、神の言葉を語る者のごとく語り、仕うるならば、神の与えたもう力を受けたる者のごとく仕えよ。これイエス・キリストによりて事々に神のあがめられたまわんためなり。栄光と力とは世々

限りなく彼に帰するなり。アーメン

福音書 ヨハ 一五章二六—一六章四

イエス弟子たちに言いたもう、「父のもとよりわがつかわさんとする助け主、すなわち父よりいずる真理の御霊のきたらんとき、我につきてあかしせん。なんじらもまた初めより我とともにありたればあかしするなり。我これらの事を語りたるは、なんじらのつまずかざらんためなり。人なんじらを除名すべし、しかのみならず、なんじらを殺す者みなみずから神に仕うと思ふとききたらん。これらの事をなすは、父と我とを知らぬゆえなり。我これらの事を語りたるは、時いたりてわがかく言いしことをなんじらの思いいでんためなり」。

聖霊降臨日

特 待

神よ、この節にあたりて聖霊をくだし、その光をもつて御民の心を照らしたまえり。願わくは我らも同じ聖霊によりて正しく万事をわきまえ、常にみちからに満たさるる

ことを得<sup>え</sup>させたまへ。父<sup>ちち</sup>と聖靈<sup>せいれい</sup>とともに一体<sup>いつたい</sup>の神<sup>かみ</sup>にましまして世々<sup>よよ</sup>統<sup>す</sup>べ治<sup>おさ</sup>めたもう救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉<sup>たてまつ</sup>る。アーメン

使徒書 使二章一——

五旬節<sup>じゆんせつ</sup>の日<sup>ひ</sup>となり、彼<sup>かれ</sup>らみなひとところにつどいおりしに、激<sup>げ</sup>しき風<sup>かぜ</sup>の吹<sup>ふ</sup>きたるごとき響<sup>ひび</sup>きにわか<sup>てん</sup>に天<sup>てん</sup>より起<sup>お</sup>こりて、その座<sup>ざ</sup>するところの家<sup>いえ</sup>に満<sup>み</sup>ち、また火<sup>ひ</sup>のごときも舌<sup>した</sup>のように現<sup>あら</sup>われ、分<sup>わ</sup>かれておのおのの上<sup>うへ</sup>にとどまる。彼<sup>かれ</sup>らみな聖靈<sup>せいれい</sup>にて満<sup>み</sup>たされ、御靈<sup>みたま</sup>の宣<sup>の</sup>べしむるままに異邦<sup>いほう</sup>の言葉<sup>ことば</sup>にて語<sup>かた</sup>りはじむ。時<sup>とき</sup>に敬<sup>けい</sup>けんなるユダヤびとら天下<sup>てんか</sup>の国々<sup>こくに</sup>よりきたりてエルサレムに住<sup>す</sup>みおりしが、この音<sup>おと</sup>おこりたれば群衆<sup>ぐんしゆ</sup>あつまりきたり、おのおのおのが国言葉<sup>こくにことば</sup>にて使徒<sup>しと</sup>たちの語<sup>かた</sup>るを聞<sup>き</sup>きて騒<sup>さわ</sup>ぎあい、かつ驚<sup>おどろ</sup>き怪<sup>あや</sup>しみて言<sup>い</sup>う、「見<sup>み</sup>よ、この語<sup>かた</sup>る者<sup>もの</sup>はみなガリラヤびとならずや、いかにして、我<sup>われ</sup>らおのおのの生<sup>う</sup>まれし国<sup>くに</sup>の言葉<sup>ことば</sup>を聞<sup>き</sup>くか。我<sup>われ</sup>らはパルテヤびと、メジャびと、エラムびと、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、フリギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近<sup>ちか</sup>き地方<sup>ちほう</sup>などに住<sup>す</sup>む者<sup>もの</sup>、ロマよりの旅<sup>たび</sup>びと——ユダヤびとおよび改宗<sup>かいしゆしや</sup>者——クレテびとおよびアラビヤびとなるに、わが国言葉<sup>こくにことば</sup>にて彼<sup>かれ</sup>ら

が神の大きいなるみわざを語るを聞かんとは」。

福音書 ヨハ一四章一五—三一

イエス弟子たちに言いたもう、「なんじらもし我を愛せば、わが戒めを守らん。われ父に請わん、父はほかに助け主を与えて、とこしえになんじらとともにおらしめたもうべし。これは真理の御霊なり、世はこれを受くることあたわず、これを見ず、また知らぬによる。なんじらはこれを知る、彼はなんじらとともにおり、またなんじらのうちにいたもうべければなり。我なんじらを残してみなしごとはせず、なんじらにきたるなり。しばらくせば世はまた我を見ず、されどなんじらは我を見る、われ生くればなんじらも生くべければなり。その日には、我わが父におり、なんじら我におり、我なんじらにおることをなんじら知らん。わが戒めを保ちてこれを守るものは、すなわち我を愛する者なり。我を愛する者はわが父に愛せられん、我もこれを愛し、これにおのれをあらわすべし」。イスカリオテならぬユダ言う、「主よ、なにゆえおのれを我らにあらわして、世にはあらわしたまわぬか」。イエス答えて言いたもう、「人も我を愛せば、わが言葉を守らん、わが父これを愛し、かつ我らそのもとにきたりて



住みかをこれとともにせん。我を愛せぬ者は、わが言葉を守らず、なんじらが聞くところの言葉は、わが言葉にあらず、我をつかわしたまいし父の言葉なり。これらのことは我なんじらとともにありて語りしが、助け主、すなわちわが名によりて父のつかわしたもう聖霊は、なんじらによるずの事を教え、又すべてわがなんじらに言いしことを思いいださしむべし。われ平安をなんじらに残す、わが平安をなんじらに与う。わが与うるは世の与うるごとくならず、なんじら心を騒がすな、また恐るな。『われ行きてなんじらにきたるなり』と言ひしをなんじらすでに聞けり。もし我を愛せば父にわが行くを喜ぶべきなり、父は我よりも大いなるによる。今その事の成らぬさきに、これをなんじらに告げたり、ことの成らんとしなんじらの信ぜんためなり。今よりのち我なんじらと多く語らじ、この世の君きたるゆえなり。彼は我に對して何の権もなし、されどかくなるは、我の、父を愛し父の命じたもうところに従いて行のうことを世の知らんためなり」。

聖靈降臨後月曜日

使徒書 使一〇章三四—四八

ペテロ口を開きて言う、「われ今まことに知る、神はかたよることをせず、いずれの国の人にも神を敬いて義を行のう者を受け入れたもうことを。神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言葉をおくりたまえり。すなわちヨハネの伝えしバプテスマののち、ガラリヤより始まり、ユダヤ全国に広まりし言葉なるはなんじらの知るところなり。これは神が聖霊と力とを注ぎたまひしナザレのイエスの事にして、彼はあまねくめぐりて良き事を行ない、すべて悪魔に制せらるる者をいやせり、神これとともにいましたればなり。我らはユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行ないたまひしもろもろのことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。神はこれを三日目によみがえらせ、かつ明らかに現わしたまえり。されどすべての民にはあらで、神のあらかじめ選ばたまえる証人、すなわちイエスの死人のうちよりよみがえりたまひし後、これとともに飲み食ひせし我らに現わしたまいしなり。イエスはおのれの生ける者と死にたる者とのさばき主に、神より定められしをあかしすること、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じたもう。彼につき

ては預言者たちもみな、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦しをうべきことをあかしす」。ペテロなおこれらの言葉を語りおるうちに、聖霊、御言葉を聞くすべての者にくだりたもう。ペテロとともにきたりし割礼ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物のそそがれしに驚けり。そは彼らが異言を語り、神をあがむるを聞きたるによる。ここにペテロ答えて言う、「この人々我らのごとく聖霊をうけたれば、たれか水を禁じてそのバプテスマを受くることをこばみ得んや」。ついにイエスⅡキリストの御名によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請えり。

福音書 ヨハ 三章一六―二一

それ神はそのひとり子を賜うほどに世を愛したまえり、すべて彼を信ずる者の滅びずしてとこしえの命を得んためなり。神その子を世につかわしたまえるは、世をさばかんためにあらず、彼によりて世の救われんためなり。彼を信ずる者はさばかれず、信ぜぬ者はすでにさばかれたり。神のひとり子の名を信ぜざりしがゆえなり。そのさばきはこれなり。光、世にきたりしに、人その行ないの悪しきによりて、光よりも暗き

を愛したり。すべて惡を行のう者は光をにくみて光にきたらず、その行ないの責められざらんためなり。まことを行のう者は光にきたる。その行ないの神によりて行ないたることの顯われんためなり。

### 聖靈降臨後火曜日

使徒書 第八章一四—一七

エルサレムにおける使徒たちは、サマリヤびと、神の御言葉を受けたりと聞きてペテロとヨハネとをつかわしたれば、彼ら下りて人々の聖靈を受けんことを祈れり。これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖靈いまだそのひとりにだにくだらざりしなり。ここにふたりのもの彼らの上に手をおきたれば、みな聖靈を受けたり。

福音書 ヨハ一〇章一—一〇

イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、羊のおりに門より入らずして、ほかより越ゆる者は、盜びとなり、強盜なり。門より入る者は、羊の羊飼いなリ。門守は彼のために開き、羊はその声を聞き、彼はおのれの羊の名を呼びてひきい

だす。ことごとくその羊をいだしし時、これにさきだち行く、羊その声を知るによりてしたごうなり。ほかの者には従わず、かえつて逃ぐ、ほかの者どもの声知らぬゆえなり」。イエスこの譬を言いたまへど、彼らその何事を語りたもうかを知らざりき。このゆえにイエスまた言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、我はひつじの門なり。すべて我よりさきにきたりし者は、盗びとなり、強盗なり、羊はこれに聞かざりき。我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草をうべし。盗びとのきたるは盗み、殺し、滅ぼさんとするのほかなし。わがきたるは羊に命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり」。

### 三位一体主日

特禱

とこしえにいます全能の神よ、しもべらに、まことの信仰により、主の三位なる栄光と一体なるみいつとを認めて拜むことを得させたまえり。願わくはこの信仰を堅く守り、もろもろの災いをのがることを得させたまえ。この祈りを世々統べ治めたもう

唯一の神にささげ奉る。アーメン

使徒書 黙四章 一一一

こののち、われ見しに、見よ、天に開けたる門あり。初めに我に語るを聞きしラッパのごとき声言う、「ここに上れ、我こののち起こるべき事をなんじに示さん」。ただちに、われ御霊に感ぜしが、見よ、天に御位設けあり。その御位に座したもう者あり、その座したもう者のさまは碧玉、赤めのうのごとく、かつ御位のまわりには緑玉のごとくにじありき。また御位のまわりに二十四の位ありて二十四人の長老、白き衣をまとい、こうべに金の冠をいただきて、その位に座せり。御位よりあまたのいなずまと声といかずちといず。また御位の前に燃えたる七つのともし火あり、これ神の七つの霊なり。御位の前に水晶に似たるガラスの海あり。御位の中央と御位のまわりとに四つの生き物ありて前もうしろも数々の目にて満ちたり。第一の生き物はしのごとく、第二の生き物は牛のごとく、第三の生き物は顔の形人のごとく、第四の生き物は飛ぶわしのごとし。この四つの生き物おのおの六つの翼あり、翼の内も外も数々の目にて満ちたり、日も夜も絶え間なく言う、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

むかしいまし、今いまし、のちきたりたもう主たる全能の神」。この生き物ら御位に座し、世々限りなく生きたもう者に栄光ととうときとを帰し、感謝する時、二十四人の長老、御位に座したもう者の前に伏し、世々限りなく生きたもう物を拝し、おのれの冠を御位の前に投げいだして言う、「我らの主なる神よ、栄光ととうときと力とを受けたもうはうべなり。なんじは万物を造りたまひ、万物は御心によりて存し、かつ造られたり」。

福音書 ヨハ 三章 一―一五

ここにパリサイびとにて名をニコデモという人あり、ユダヤびとのつかさなり。夜イエスのもとにきたりて言う、「ラビ、我らはなんじの神よりきたる師なるを知る。神もしともいささずば、なんじが行のうこれらのしるしはたれもなしあたわぬなり」。イエス答えて言いたまう、「まことに、まことになんじに告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ることあたわず」。ニコデモ言う、「人はや老いぬれば、いかで生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まるることを得んや」。イエス答えたもう、「まことに、まことになんじに告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ることあた

わす。肉によりて生まるる者は肉なり、靈によりて生まるる者は靈なり。なんじら新たに生まるべしとわがなんじに言いしを怪しむな。風はおのが好むところに吹く、なんじその声を聞けども、いずこよりきたりいずこへ行くを知らず。すべて靈によりて生まるる者もかくのごとし」。ニコデモ答えて言う、「いかでかかる事どものありうべき」。イエス答えて言いたもう、「なんじはイスラエルの師にして、なおかかる事どもを知らぬか。まことに、まことになんじに告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことをあかしす、しかるになんじらそのあかしを受けず。われ地のことを言うになんじら信ぜずば、天のことを言わんにはいかで信ぜんや。天より下りし者、すなわち人の子のほかには、天に昇りしものなし。モーセ荒れ野にてへびを挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。すべて信ずる者の彼によりてとこしえの命を得んためなり」。

### 三位一体後第一主日

特 禱

すべて寄り頼む者の力なる神よ、あわれみをもって我らの祈りをうけたまえ。我ら生



まれつき弱く、主によらざれば、さらに良きわざをなすことあたわず。願わくは恵みをもつて我らを助け、主の戒めをまもり、思いをも行ないをも等しく御心になかわしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヨハネ四章七一―二一

愛する者よ、われら互いにあい愛すべし。愛は神よりいず、おおよそ愛ある者は、神より生まれ、神を知るなり。愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらにあらわれたり。神はその生みたまえるひとり子を世につかわし、我らをして彼によりて命を得しめたもうによる。愛というは、我ら神を愛せしにあらず、神我らを愛し、その子をつかわして我らの罪のためになだめの供え物となしたまいしこれなり。愛する者よ、かくのごとく神われらを愛したまいたれば、我らもまた互いにあい愛すべし。いまだ神を見し者あらず、我らもし互いにあい愛せば、神われらにいまし、その愛もまた我らに全うせらる。神、御霊を賜いしによりて我ら神におり、神我らにいたもうことを知る。また我ら父のその子をつかわして世の救い主となしたまいしを見て、そのあかしをなすなり。おおよそイエスを神の子と言いあらわす者は神

彼におり、かれ神におる。我らに對する神の愛を我らすでに知り、かつ信ず。神は愛なり、愛におる者は神におり、神もまたかれにいたもう。かく我らの愛、全きをえてさばきの日に恐れなからしむ。我らこの世にありて主のごとくなるによる。愛には恐れなし、全き愛は恐れを除く、恐れには苦しみあればなり。恐るる者は、愛いまだ全からず。我らの愛するは、神まず我らを愛したもうによる。人もし、「われ神を愛す」と言いて、その兄弟を憎まば、これ偽り者なり。すでに見るところの兄弟を愛せぬ者は、いまだ見ぬ神を愛することあたわず。神を愛する者はまたその兄弟をも愛すべし。我らこの戒めを神より受けたり。

福音書 ルカ一六章一九—三〇

ある富める人あり、紫の衣と細布とを着て、日々おごり樂しめり。またラザロという貧しきものあり、腫物にてはれただれ、富める人の門におかれ、その食卓より落つる物にて飽かんとする。しかして犬どもきたりてその腫物をねぶれり。ついにこの貧しきもの死に、御使いたちに携えられてアブラハムのふところに入れり。富める人もまた死にて葬られしが、よみにて苦しみのうちより目を上げてはるかにアブラハムとそ

のふところにおるラザロとを見る。すなわち呼びて言う、「父アブラハムよ、我をあれみて、ラザロをつかわし、その指のさきを水に浸してわが舌を冷させたまえ、我はこの炎のなかにもだゆるなり」。アブラハム言う、「子よ、思え、なんじは生ける間、なんじの良き物を受け、ラザロは悪しき物を受けたり。今ここにて彼は慰められ、なんじはもだゆるなり。しかのみならずここよりなんじらに渡り行かんとすとも得ず、そこより我らにきたり得ぬために、我らとなんじらとの間に大いなる淵定めおかれたり」。富める人また言う、「さらば父よ、願わくはわが父の家にラザロをつかわしたまえ。我に五人の兄弟あり、この苦しみのところにきたらぬよう、彼らにあかしせしめたまえ」。アブラハム言う、「彼らにはモーセと預言者とあり、これに聞くべし」。富める人言う、「いな父アブラハムよ、もし死人のうちより彼らに行く者あらば、悔い改めん」。アブラハム言う、「もしモーセと預言者と共に聞かざば、たとい死人のうちよりよみがえる者ありとも、その勧めをいれざるべし」。

## 三位一體後第二主日

特 禱

主に育てられて、御名を敬うものを助けたもう主よ、くすしき摂理のもとに我らを守り、常に主を敬愛する心を与えたまわんことを、御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヨハ卷 三章 一—二四

兄弟よ、世はなんじらを憎むとも怪しむな。我ら兄弟を愛するによりて、死より命に移りしを知る、愛せぬ者は死のうちにおる。おおよそ兄弟を憎む者はすなわち人を殺す者なり。おおよそ人を殺す者の、そのうちにとこしえの命なきをなんじらは知る。主は我らのために命を捨てたまえり、これによりて愛ということを知りたり、我らもまた兄弟のために命を捨つべきなり。世の宝をもちて兄弟の乏しきを見、かえつてあわれみの心を閉ずる者はいかで神の愛そのうちにあらんや。わが子らよ、我ら言葉と舌とをもてあい愛することなく、行ないとまこととをもてすべし。これによりて我らまことより出でしを知り、かつ我らの心我らを責むるとも神の前に心を安んずべし。神は我らの心よりも大いにしてすべてのことを知りたまえばなり。愛する者よ、我らが

心みずから責むるところなくば、神に向かいて恐れなし。かつすべて求むるところを神より受くべし。これその戒めを守りて御心にかのうところを行なえばなり。その戒めはこれなり、すなわち我ら神の子イエス・キリストの名を信じ、その命じたまいしごとく互いにあい愛すべきことなり。神の戒めを守る者は神におり、神もまた彼にいたもう。我らその賜うところの御霊によりてその我らにいたもうことを知るなり。

福音書

ルカ 一四章一六—二四

イエスこれに言いたもう、「ある人、盛んなる夕げを設けて、多くの人を招く。夕げの時いたりて、招きおきたる者のもとにしもべをつかわして、『きたれ、すでに備わたりたり』と言わしめたるに、みなひとしく断りはじむ。初めの者言う、『われ田地を買えり、行きて見ざるを得ず。請う、許されんことを』。ほかの者言う、『われ五くびきの牛を買えり、これをためすために行くなり。請う、許されんことを』。またほかの者言う、『われ妻をめとれり、このゆえに行くことあたわす』。しもべ帰りてこれらの事をその主人に告ぐ。家あるじ怒りてしもべに言う、『とく町の大路と小路とに行きて、貧しき者・かたわ者・めしい・足なえなどをここに連れきたれ』。しもべ

言う、『主よ、仰せのごとくなしたれど、なおあまりの席あり』。主人、しもべに言う、『道やまがきのほとりに行き、人々を強いて連れきたり、わが家に満たしめよ。われなんじらに告ぐ、かの招きおきたる者のうちひとりだに、わが夕げを味わいうる者なし』。

### 三位一体後第三主日

特 禱

主よ、祈りする心を我らに与えたまえり。あわれみをもつて我らの願いをきき、つねに大能をもつて我らを助け、危うきときに守り、なやめるときに慰めたまえ。主イエス・キリストによりて祈り奉る。アーメン

使徒書　ペテ前五章五——一

なんじら皆たがいに謙そんをまといえ、「神は高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みを与えたもう」。このゆえに神の力ある御手のもとにおのれを低うせよ、さらば時におよびて神なんじらを高くしたまわん。またもろもろの心づかいを神に委ねよ、神なん

ず。それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現われんことを待つ。造られたるもののむなしきに服せしは、おのが願ひによるにあらず、服せしめたまいし者によるなり。されどなお造られたる者にも滅びのしもべたるさまより解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望みは残れり。我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまでもに嘆き、ともに苦しむことを。しかのみならず、御霊の初めの実をもつ我らも、みずから心のうちに嘆きて子とせられんこと、すなわちおのがからだの贖われんことを待つなり。

福音書

ルカ 六章 三六—四二

イエス言いたもう、「なんじらの父の慈悲なるごとく、なんじらも慈悲なれ。人をさばくな、さらばなんじらもさばかる事あらじ。人を罪に定むな。さらばなんじらも罪に定めらる事あらじ。人を赦せ、さらばなんじらも赦されん。人に与えよ、さらばなんじらも与えられん。人は量りをよくし、押し入れ、揺り入れ溢るるまでにして、なんじらのふところに入れん。なんじらおのが量る量りにて量らるべし。また譬にて言いたもう、「めしいはめしいを手引するを得んや、ふたりとも穴に落ちざら

んや。弟子はその師にまさらず、おおよそ全うせられたる者は、その師のごとくならん。なにゆえ兄弟の目にあるちりを見て、おのが目にあるうつばりを認めぬか、おのが目にあるうつばりを見ずしていかで兄弟に向かいて『兄弟よ、なんじの目にあるちりを取り除かせよ』と言うを得んや。偽善者よ、まずおのが目よりうつばりを取り除け。さらば明らかに見えて兄弟の目にあるちりを取りのぞき得ん。

### 三位一体後第五主日

特 講

主よ、この世を安らかに治め、主の公会に安きをあたえ、常に喜びて主に仕えしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ベテ前第三章八一―一五

なんじらみな心を同じゅうし互いに思いやり、兄弟を愛し、あわれみ、へりくだり、悪をもて悪に、そしりをもてそしりに報ゆることなく、かえってこれを祝福せよ。なんじらの召されたるは祝福を継がんだめなればなり。「命を愛し、良き日を送らんと



する者は、舌を押えて惡を避け、くちびるを押えて偽りを語らず、惡より遠ざかりて善を行ない、平和を求めてこれを追うべし。それ主の目は義人の上にとどまり、その耳は彼らの祈りに傾く。されど主の御顔は惡を行のう者に向こう」。なんじらもし善に熱心ならばたれかなんじらをそこなわん。たとい義のために苦しめらるる事ありとも、なんじら幸いなり。「彼らのおどしを恐るな、また心を騒がすな」。心のうちにキリストを主とあがめよ。

福音書 ルカ五章一一

群衆おし迫りて神の言葉を聞きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、なぎさに二そうの舟の寄せあるを見たもう、漁師は舟をいでて網を洗ひいたり。イエスその一そうなるシモンの舟に乗り、彼に請いておかより少しく押しいださしめ、座して舟の中より群衆を教えたもう。語り終えてシモンに言いたもう、「深みに乗りいだし、網をおろして魚を取れ」。シモン答えて言う、「君よ、我ら夜もすがら労したるに何をも得ざりき、されど御言葉に従いて網をおろさん」。かくてしかせしに、魚のおびただしき群れを囲みて網裂けかかりたれば、ほかの一そうの舟における組の者を差

し招きてきたり助けしむ。きたりて魚を二そうの舟に満たしたれば、舟沈まんばかりになりぬ。シモンⅡペテロこれを見て、イエスのひざもとにひれ伏して言う、「主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり」。これはシモンもともにいる者もみな取りし魚のおびただしきに驚きたるなり。ゼベダイの子にしてシモンの仲間なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言いたもう、「恐るな、なんじ今よりのち、人を生けどらん」。彼ら舟をおかにつけ、いっさいを捨ててイエスに従えり。

### 三位一体後第六主日

特 禱

主を愛する者のために、人の思いに過ぎたる良き賜物を備えたもう神よ、すべての物よりも深く主を愛する愛を我らの心に注ぎ、望むところにまさりたる主の約束のものを得させたまわんことを、主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ　六章三—一

なんじら知らぬか、おおよそキリストⅡイエスに合うバプテスマを受けたる我らは、

その死に合うバプテスマを受けしを。我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、その死に合わせられたり。これキリスト父の榮光によりて死人のうちよりよみがえらせられたまいしごとく、我らも新しき命に歩まんためなり。我らキリストに繼がれて、その死のさまにひとしくば、そのよみがえりにもひとしかるべし。我らは知る、我らの古き人、キリストとともに十字架につけられたるは、罪のからだ滅びて、このち罪に仕えざらんためなるを。そは死にし者は罪よりのがるなり。我らもしキリストとともに死にしなければ、また彼とともに生きんことを信ず。キリスト死人のうちよりよみがえりてまた死にたまわず、死もまた彼に主とならぬを我ら知ればなり。その死にたまえるは罪につきて一たび死にたまえるにて、その生きたまえるは神につきて生きたまえるなり。かくのごとくなんじらもおのれを罪につきては死にたるもの、神につきては、キリストイエスにありて生きたる者と思ふべし。

福音書 マタ 五章二〇—二六

我なんじらに告ぐ、なんじらの義、學者・バリサイびとにまさらずば、天国に入ることあたわず。いにしえの人に、「殺すなかれ、殺す者はさばきに会うべし」と言える

ことあるをなんじら聞けり。されど我はなんじらに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、さばきに会ふべし。また兄弟に向かい、愚か者よと言う者は、衆議に会ふべし。またしれ者よという者は、ゲヘナの火に会ふべし。このゆえになんじもし供え物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟に怨まる事あるを思いいださば、供え物を祭壇の前にこしおき、まず行きてその兄弟と和ぼくし、しかる後きたりて、供え物をささげよ。なんじを訴うる者とともに道にあるうちに、早く和解せよ。恐らくは、訴うる者なんじをさばきびとにわたし、さばきびとは下役にわたし、ついになんじは獄舎に入れられん。まことに、なんじに告ぐ、一コドラントも残りなく償わすば、そこをいずるところとあたわじ。

### 三位一体後第七主日

特 禱

もろもろの良き賜物を与えたもう大能の主よ、御名を愛する愛を我らの心に植え、いつくしきをもつて育て、もろもろの善をもつて養ひ、また大いなる恵みをもつて絶

えずこの幸いにおらしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ロマ六章一九―二三

かく人の事をかりて言うは、なんじらの肉弱きゆえなり。なんじらもとその肢体をささげ、汚れと不法とのしもべとなりて不法に至りしごとく、今その肢体をささげ、義のしもべとなりて清きに至れ。なんじら罪のしもべたりしときは義に對して自由なりき。その時に今は恥とするところの事によりて何の実を得しか、これらの事のはては死なり。されど今は罪より解き放されて神のしもべとなりたれば、清きに至る実を得たり、そのはてはとこしえの命なり。それ罪の払う価は死なり、されど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くるとこしえの命なり。

福音書　マル八章一一九

そのころまた大いなる群衆にて食らうべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言いたもう、「われこの群衆をあわれむ、すでに三日我とともにおりて食らうべき物なし。飢えしままにて、その家に帰らしめば、道にて疲れ果てん。そのなかには遠

くよりきたれる者あり」。弟子たち答えて言う、「この寂しき地にては、いずこよりパンを得て、この人々を飽かしむべき」。イエス問いたもう、「パンいくつあるか」。答えて、「七つ」という。イエス群衆に命じて地に座せしめ、七つのパンを取り、謝してこれを裂き、弟子たちに与えて群衆の前におかしむ。弟子たちすなわちその前におく。また小さき魚すこしばかりあり、祝してこれをも、その前におけと言いたもう。人々、食らいて飽き、裂きたる余りを拾いしに、七つのかごに満ちたり。その人おおよそ四千人なりき。イエス彼らを帰したまえり。

### 三位一体後第八主日

特 禱

天地万物を統べ治めたもう神よ、くすしき摂理をもつて我らに害あるものを除き、益あるものを与えたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書　ローマ八章一二―一七

兄弟よ、我らは負いめあれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて生くべきにあらず。なんじらもし肉に従いて生きなば、死なん。もし霊によりてからだの行ないを殺さば生くべし。すべて神の御霊に導かる者は、これ神の子なり。なんじらはふたたび恐れをいだくためにしもべたる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、これによりて我らはアバ父と呼ぶなり。御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることをあかしす。もし子たらば世継ぎたらん、神の世継ぎにしてキリストとともに世継ぎたるなり。これはキリストとともに栄光を受けんために、その苦しみをともに受くるによる。

福音書 マタ七章一五—二一

「にせ預言者に心せよ、ひつじの装いしてきたれども、内は奪いかすむるおおかみなり。その実によりて彼らを知るべし。いばらよりぶどうを、あざみよりいちじくを取る者あらんや。かく、すべて良き木は良き実をむすび、悪しき木は悪しき実をむすぶ。良き木は悪しき実を結ぶことあたわず。悪しき木はよき実を結ぶことあたわず。すべて良き実を結ばぬ木は、切られて火に投げ入れらる。さらば、その実によりて彼らを知るべし。」

らを知るべし。我に向かいて、『主よ、主よ』と言う者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいますわが父の御心を行のう者のみ、これに入るべし。』

### 三位一体後第九主日

特 禱

主よ、我ら主によらざれば一つの良き事をもなすことあたわず。願わくは常に正しき事を思い、これを行のう心を与え、恵みをもって我らを助け、生涯御心に従わしめたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ前 一〇章 一—三

兄弟よ、我なんじらがこれを知らぬを好まず。すなわち我らの先祖はみな雲の下にあり、みな海を通り、みな雲と海とにてバテスマを受けてモーセにつけり。しかしてみなおなじく、霊なる食い物を食し、みな同じく霊なる飲み物を飲めり。これ彼らに従いし霊なる岩より飲みたるなり、その岩はすなわちキリストなりき。されど彼らのうち多くは神の御心になわず、荒れ野にて滅ぼされたり。これらのことは我らの鏡



にして、彼らがむさぼりしごとく惡をむさぼらざらんためなり。彼らのうちのある者にならいて偶像を拜する者となるな、すなわち、「民は座して飲み食いし、立ちて戯る」としるされたり。また彼らのうちのある者にならいて我ら姦淫すべからず、姦淫を行ないしもの一日に二万三千人、死にたり。また彼らのうちのある者にならいて我ら主を試むべからず、主を試みしもの、へびに滅ぼされたり。又かれらのうちのある者にならいてつぶやくな、つぶやきし者、滅ぼす者に滅ぼされたり。彼らが会えるこれらの事はかがみとなれり、かつ末の世に会える我らの訓戒のためにしるされたり。さらばみずから立てりと思う者は倒れぬように心せよ。なんじらが会いし試みは人の常ならぬはなし。神はまことなれば、なんじらを耐え忍ぶことあたわぬほどの試みに会わせたまわす。なんじらが試みを耐え忍ぶことを得んために、これとともにのがべき道を備えたまわん。

## 福音書 ルカ一六章一九

イエスまた弟子たちに言いたもう、「ある富める人にひとりの支配人あり、主人の持ち物を費しおりと訴えられたれば、主人かれを呼びて言う、「わがなんじにつきて聞

くところは、これ何ごとぞ、務めの報告をいだせ。なんじこののち支配人たるを得じ。支配人、心のうちに言う、『いかにせん、主人わが勤めを奪う。われ土掘るに力なく、物ころは恥ずかし。我なすべき事こそ知りたれ、かくせば勤めをやめらるるとき、人々その家にわれを迎うるならん』とて、主人の負債者をひとりびとり呼びよせて、初めの者に言う、『なんじわが主人より負うところ何ほどあるか』。答えて言う、『油、百樽』。支配人いう、『なんじの証書を取り、早く座して五十と書け』。またほかの者に言う、『負うところ何ほどあるか』。答えて言う、『麦、百石』。支配人言う、『なんじの証書を取りて八十と書け』。ここに主人、不義なる支配人のなしし事の巧みなるによりて、彼をほめたり。この世の子らはおのが時代の事には、光の子らよりも巧みなり。我なんじらに告ぐ、不義の富をもて、おのがために友をつくれ。さらば富のうする時、その友なんじらをとこしえの住まいに迎えん』。

### 三位一體後第十主日

特 禱

主よ、あわれみの耳を傾けて、しもべの祈りをききたまえ。又その願うところのものを得んために、御心にかのう願いをなさしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ前 一二章 一一

兄弟よ、靈の賜物につきては、我なんじらが知らぬを好まず。なんじら異邦人なりし時、いざなわるるままに、ものを言わぬ偶像のもとに導き行かれしは、なんじらの知るところなり。されば我なんじらに示さん、神の御靈に感じて語る者はたれも、「イエスはのろわるべき者なり」と言わず、また聖靈に感ぜざれば、たれも、「イエスは主なり」と言うあたわず。賜物は異なれども、御靈はおなじ。務めは異なれども、主はおなじ。働きは異なれども、すべての人のうちにすべての働きをなしたもう神はおなじ。御靈の現わしをおのおのに賜いたるは、益を得させんためなり。ある人は御靈によりて知恵の言葉を賜わり、ある人は同じ御靈によりて知識の言葉、ある人は同じ御靈によりて信仰、ある人は一つ御靈によりて病をいやす賜物、ある人は力あるわざ、ある人は預言、ある人は靈をわきまえ、ある人は異言を言い、ある人は異言を解

く力を賜<sup>たま</sup>はる。すべてこれらのことは同じ一つの御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>の働<sup>はたら</sup>きにして、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>その心<sup>こころ</sup>に従<sup>したが</sup>いておのおのに分<sup>わ</sup>け与<sup>あた</sup>へたもうなり。

福<sup>ふく</sup>者<sup>しや</sup>書<sup>しよ</sup> ルカ一九章四一―四七

イエスすでに近<sup>ちか</sup>づきたるとき、都<sup>みやこ</sup>を見<sup>み</sup>やり、これがために泣<sup>な</sup>きて言<sup>い</sup>いたもう、「ああなんじ、なんじももしこの日<sup>ひ</sup>のうちに平和<sup>へい</sup>にかかわる事<sup>こと</sup>を知<sup>し</sup>りたらんには――されど今<sup>いま</sup>なんじの目<sup>め</sup>に隠<sup>かく</sup>れたり。日<sup>ひ</sup>きたりて敵<sup>てき</sup>なんじの回<sup>まわ</sup>りに壘<sup>とり</sup>を築<sup>きず</sup>き、なんじを取り囲<sup>かこ</sup>みて四方<sup>しほう</sup>より攻<sup>せ</sup>め、なんじと、その内<sup>うち</sup>にある子<sup>こ</sup>らとを地<sup>ち</sup>に打<sup>う</sup>ち倒<sup>たお</sup>し、一つの石<sup>いし</sup>をも石<sup>いし</sup>の上<sup>うへ</sup>に残<sup>のこ</sup>さざるべし。なんじ顧<sup>かへ</sup>みの時<sup>とき</sup>を知らざりしによる」。かくて宮<sup>みや</sup>に入り、商<sup>あきな</sup>いする者どもを追<sup>お</sup>いだしはじめ、これに言<sup>い</sup>いたもう、「わが家<sup>いえ</sup>は祈<sup>いの</sup>りの家<sup>いけ</sup>たるべし」としるされたるに、なんじらはこれを強<sup>ごう</sup>盗<sup>とう</sup>の巢<sup>す</sup>となせり」。イエス日<sup>ひ</sup>々<sup>びま</sup>宮<sup>みや</sup>にて教<sup>おし</sup>えたもう。

### 三位<sup>さんい</sup>一<sup>いつ</sup>体<sup>たい</sup>後<sup>ご</sup>第<sup>だい</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>主<sup>しゅ</sup>日<sup>にち</sup>

特<sup>とく</sup> 禱<sup>とう</sup>

あわれみを施<sup>ほこ</sup>すとき、ことに全<sup>ぜん</sup>能<sup>のう</sup>を現<sup>あら</sup>わしたもう神<sup>かみ</sup>よ、願<sup>ねが</sup>わくは豊<sup>ゆた</sup>かなる恵<sup>めぐ</sup>みをあた

特禱

とこしえにいます全能の神よ、主は常に我らの祈りにさきだちて聞き、いさおなきしもべの望む所よりも多く与えたもう。願わくは豊かなる恵みを注ぎ、罪を赦して良心の恐れを除き、あえて願ひ得ざる良きものを与えたまえ。御子イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コリ後三章四―九

我らはキリストにより、神に対してかかる確信あり。されどおのれはなに事をもみずから定むるに足らず、定むるに足るは神によるなり。神は我らに新約の役者となるに足らしめたまえり、儀文の役者にあらず、霊の役者なり。そは儀文は殺し、霊は生かせばなり。石に彫りしるされたる死の勤めにも光榮ありて、イスラエルの子らはそのやがて消ゆべきモーセの顔の光榮を見つめ得ざりしほどならんには、まして霊の勤めは光榮なからんや。罪を定むる勤めもし光榮あらんには、まして義とする勤めは光榮にあふれざらんや。

イエスまたツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を経て、ガリラヤの海にきたりたもう。人々、耳しいにして物言ふこと難き者を連れきたりて、これに手をおきたまわんことを願う。イエス群衆のなかより、彼をひとり連れいだし、その両耳に指をさし入れ、またつばきしてその舌にさわり、天を仰ぎて嘆じ、その人に向かいて、「エパタ」と言いたもう、ひらけよとの意なり。かくてその耳ひらけ、舌のもつれただちに解け、正しく物言えり。イエスたれにも告ぐなど人々を戒めたもう。されど戒むるほどかえつていよいよ言い広めたり。またはなはだしく打ち驚きて言う、「彼のなしし事はみな良し、耳しいをも聞こえしめ、おしをも物言わしむ」。

### 三位一体後第十三主日

特 禱

あわれみ深き、全能の神よ、御民の正しく仕えまつるは、ただ主の恵みによれり。願わくはこの世において忠実に主に仕え、ひたすら主の約束をのぞみ、ついに、御前にいたることを得させたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　ガラ　三章一六―二二

かの約束はアブラハムとその末とに与えたまいしものなり、多くの者を指すごとく、  
 「末々に」とは言わず、ひとりを指すごとく、「なんじの末に」と言えり、これすな  
 わちキリストなり。されば我言わん、神のあらかじめ定めたまいし契約は、そののち  
 四百三十年を経て起こりし律法に廃せらるることなく、その約束もむなくせらるる  
 事なし。もし嗣業を受くること律法によらば、もはや約束にはよらず、しかるに神は  
 約束によりてこれをアブラハムに賜いたり。されば律法は何のためぞ。これ罪のため  
 に加えたまいしものにて、御使いたちを経て中立ちの手によりて立てられ、約束を  
 えられたる末のきたらん時にまでおよぶなり。（中立ちは一方のみの者にあらず、さ  
 れど神は唯一にいませり）。さらば律法は神の約束にもとるか、決してしからず。も  
 し人を生かすべき律法を与えられたらんには、げに義とせらるるは律法によりしなら  
 ん。されど聖書はすべての者を罪の下に閉じこめたり。これ信ずる者のイエス・キリ  
 ストに対する信仰によれる約束を与えられたためなり。

イエス弟子たちを顧みひそかに言いたもう、「なんじらの見るところを見る目は幸なり。我なんじらに告ぐ、多くの預言者も、王も、なんじらの見るところを見んと欲したれど見ず、なんじらの聞くところを聞かんと欲したれど聞かざりき」。見よ、ある教法師、立ちてイエスを試みて言う、「師よ、われとこしえの命を繼ぐためには何をなすべきか」。イエス言いたもう、「律法になにとするしたるか、なんじいかに誦むか」。答えて言う、「なんじ心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、主たるなんじの神を愛すべし。またおのれのごとくなんじの隣を愛すべし」。イエス言いたもう、「なんじの答は正し。これを行なえ、さらば生くべし」。彼おのれを義とせんとしてイエスに言う、「わが隣とはたれなるか」。イエス答えて言いたもう、「ある人、エルサレムよりエリコに下るとき、強盜にあいしが、強盜どもその衣をはぎ、傷を負わせ、半死半生にして捨て去りぬ。ある祭司たまたまこの道より下り、これを見てかなたを過ぎ行けり。またレビびともここにきたり、これを見て同じくかなたを過ぎ行けり。しかるにあるサマリヤびと、旅してそのもとにきたり、これを見てあわれみ、近寄りて、油とぶどう酒とを注ぎ傷を包みておのが獣にのせ、はたごやに連れ行



きて介抱し、あくる日デナリ二つをいだし、あるじに与えて、「この人を介抱せよ。費えもし増さばわが帰りくる時に償わん」と言えり。なんじいかに思うか、この三人のうち、いづれか強盜にあいし者の隣となりしぞ。彼いう、「その人にあわれみを施したる者なり」。イエス言いたもう、「なんじも行きてそのごとくせよ」。

### 三位一体後第十四主日

特 禱

とこしえにいます全能の神よ、我らに信仰と望みと愛とを増し加え、また主の約したまえるものを得んがために、主の命じたまうところを愛せしめたまわんことを、主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ガラ 五章一六―二四

我言う、御霊によりて歩め、さらば肉の欲をとげざるべし。肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいてたがいに相もとればなり。これなんじらの欲するところをなし得ざらしめんためなり。なんじらもし御霊に導かれなば、律

法の下にあらじ。それ肉の行ないはあらわなり。すなわち淫行、汚れ、好色、偶像崇拜、まじわざ、怨み、争い、ねたみ、憤り、徒党、分離、異端、そねみ、酔酒、宴楽などのごとし。我すでに戒めたるごとく、今また戒む。かかることを行のう者は神の国を継ぐことなし。されど御霊の実は愛、喜び、平和、寛容、なさけ、善良、忠信、柔和、節制なり。かかるものを禁ずる律法はあらず。キリストイエスに属する者は肉とともにその情と欲とを十字架につけたり。

福音書 ルカ 一七章 一一—一九

イエス、エルサレムに行かんとて、サマリヤとガリラヤとのあいだを通り、ある村に入りたもうとき、十人のらい病人これに会いて、はるかに立ちどまり、声をあげて言う、「君イエスよ、我らをあわれみたまえ」。イエスこれを見て言いたもう、「なんじら行きて身を祭司らに見せよ」。彼ら行く間に清められたり。そのうちのひとり、おのがいやされたるを見て、大声に神をあがめつつ帰ってきたり、イエスの足もとにひれ伏して謝す。これはサマリヤびとなり。イエス答えて言いたもう、「十人みな清められしならずや、九人はいずこにあるか。この他国人のほかは、神に栄光を帰せんと

て帰りきたる者なきか」。かくてこれに言いたもう、「立ちて行け、なんじの信仰なんじを救えり」。

### 三位一体後第十五主日

特 禱

主よ、絶えざるあわれみをもつて公会を守りたまえ。人は弱きがゆえに、主によらざれば倒るるのほかなし。願わくはすべて害あるものを防ぎ、益あるものを与えて、常に救いの道に導きたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使 徒 書 ガラ 六章 一—一八

見よ、われ手ずからいかに大いなる文字にてなんじらに書き贈るかを。おおよそ肉において麗わしき見えをなさんと欲する者は、なんじらに割礼をしよう。これただキリストの十字架のゆえによりて責められざらんためのみ。そは割礼をうくる者すらみずから律法を守らず、しかもなんじらに割礼を受けしめんと欲するは、なんじらの肉につきて誇らんがためなり。されど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇

るところあらざれ。これによりて世は我に對して十字架につけられたり、わが世に對するもまたしかり。そは割礼を受くるも受けぬも、ともに数うるに足らず、ただ尊きは新に造らることなり。この法に従いて歩むすべての者の上に、神のイスラエルの上に、平安とあわれみとあれ。今よりのちたれも我を煩わすな、我はイエスのしるしを身に帶びたるなり。兄弟よ、願わくは我らの主イエス・キリストの恵み、なんじらの靈とともにあらんことを、アーメン。

福音書 マタ 六章二四―三四

人はふたりの主にかね仕うることあたわず、あるいは、これを憎み、かれを愛し、あるいは、これに親しみ、彼を軽しむべければなり。なんじら神と富とにかね仕うることあたわず。このゆえに我なんじらに告ぐ、何をくらい、何を飲まんと命のことを思い煩い、何を着んとからだのことを思い煩うな。命は糧にまさり、からだは衣にまさるならずや。空の鳥を見よ、まかず、刈らず、倉に収めず、しかるになんじらの天の父は、これを養いたもう。なんじらはこれよりもはるかにすぐる者ならずや。なんじらのうちたれか思い煩いて命をわずかにても加え得んや。またなにゆえ衣のことを

思い煩うや。野のゆりはいかにして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。されど我なんじらに告ぐ、榮華をきわめたるソロモンだに、その装いの花の一つにもかざりき。きょう有りて、あす炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装いたまえば、ましてなんじらをや、ああ信仰うすき者よ。さらば何をくらい、何を飲み、何を着んとして思い煩うな。これみな異邦人の切に求むるところなり。なんじらの天の父はすべてこれらの物のなんじらに必要なを知るたもうなり。まず神の国と神の義とを求めよ、さらばすべてこれらの物はなんじらに加えられるべし。このゆえにあすのことを思い煩うな、あすはあすみずから思い煩わん。一日の苦勞は一日にて足れり。

### 三位一体後第十六主日

特 禱

主よ、絶えざるあわれみをもつて公会を清め、すべての害を防ぎたまえ。公会はただ主の助けによりて安全なるがゆえに、恵みをもつて常にこれを守りたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エペ三章一三一—二

さればなんじらに請う、わがなんじらのために受くる悩みにつきて氣落ちすな、これなんじらの譽れなり。このゆえに我は天と地とにある諸族の名の起るところの父にひざまずきて願う。父その榮光の富に従いて、御靈により力をもてなんじらの内なる人を強くし、信仰によりてキリストをなんじらの心に住ませ、なんじらをして愛に根ざし、愛を基とし、すべての聖徒とともにキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さのいかばかりなるかを悟り、その量り知るべからざる愛を知ることを得しめ、すべて神に満てる者をなんじらに満たしめたまわん事を。願わくは我らのうちに働く力に従いて、我らのすべて求むるところ、すべて思うところよりもいたくまさる事をなし得る者に、榮光世々限りなく教会によりて、またキリストイエスによりてあらんことを、アーメン。

福音書 ルカ七章一一—七

そのちイエス、ナインという町に行きたまいしに弟子たちおよび大いなる群衆もともに行く。町の門に近づいたもうとき、見よ、かきいださるる死人あり。これはひと

りむすこにて母はやもめなり、町の多くの人々これに伴う。主、やもめを見て、あわれみ、「泣くな」と言いて近より、ひつぎに手をつけたまえば、かくもの立ちとどまる。イエス言いたもう、「若者よ、我なんじに言う、起きよ」。死人、起きかえりて物言い始む。イエスこれを母にわたしたもう。人々みな恐れをいだき、神をあがめて言う、「大いなる預言者、我らのうちに起これり」。また言う、「神その民を顧みたまえり」。この事ユダヤ全国およびもよりの地にあまねくひろまりぬ。

### 三位一体後第十七主日

特禱

主よ、恵みをもつて常に我らの先となりあどとなりて、絶え間なくもろもろの良きわざを行なわしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書 エペ 四章一―六

されば主にありて囚人たる我、なんじらに勧む。なんじら召されたる召しにかないて

歩み、事ごとに謙そんと柔和と寛容とを用い、愛をもて互いに忍び、平和のつなぎのうちに努めて御霊の賜う一致を守れ。からだは一つ、御霊は一つなり。なんじらが召しにかかわる一つの望みをもて召されたるがごとし。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、すべての者の父なる神は一つなり。神はすべてのものの上にいまし、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいましたもう。

福音書 ルカ一四章一一

イエス安息日に食事せんとて、あるパリサイびとのかしらの家に入りたまえば、人々これをうかごう。見よ、御前に水腫をわさう人いたれば、イエス答えて教法師とパリサイびとに言いたもう、「安息日に人をいやすことは良しやいなや」。彼ら黙然たり。イエスその人を取り、いやして去らしめ、かつ彼らに言いたもう、「なんじらのうちそのろばあるいはその牛、井戸に陥らんに、安息日にはただちにこれを引き上げぬ者あるか」彼らこれに對しても言うことあたわず。イエス招かれたる者の、上席をえらぶを見、譬を語りて言いたもう、「なんじ婚宴に招かるるとき、上席につくな。恐らくはなんじよりも尊き人の招かれんに、なんじと彼とを招きたる者きたり、



て、「この人に席を譲れ」と言わん。さらばその時なんじ恥じて末席に行きはじめん。招かるるとき、むしろ行きて末席につけ、さらば招きたる者きたりて、「友よ、上に進め」と言わん。その時なんじ同席の者の前に誉れあるべし。おおよそおのれを高くする者は低うせられ、おのれを低うする者は高うせらるるなり」。

### 三位一体後第十八主日

特待書

神よ、願わくは御民に世と肉と悪魔との、いざないを防ぐ恵みを与え、清き心をいただきて、唯一の神に従うことを得させたまへ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ前一章四—八

我なんじらがキリスト・イエスにありて神より賜わりし恵みにつきて常に神に感謝す。なんじらはキリストにありて、もろもろのことすなわちすべての言葉とすべての悟りとに富みたればなり。これキリストのあかしなんじらのうちに固うせられたるに

よる。かくなんじらはすべての賜物に欠くところなくして我らの主イエスしゅキリストの現あらわれたもうを待まちてり。彼かれはなんじらを終おわりまで固かうして我われらの主しゅイエスしゅキリストの日に責せむべきところなからしめたまわん。

福音書 マタ二二章三四—四六

パリサイびとら、イエスのサドカイびとらを黙もくせしめたまいしことを聞ききて相集あひあつまり、そのうちなるひとりの教きょう法師ほうし、イエスを試こらむるために問とう、「師しよ、律法おきてのうちいずれの戒めめか大おほいなる」。イエス言いいたもう、「なんじ心を尽つくくし、精神せいしんを尽つくくし、思おもいを尽つくくして主しゅなるなんじの神かみを愛あいすべし」これは大おほいにして第一だいいちの戒めめなり。第二だいにもまたこれにひとし「おのれのごとく、なんじのとなりを愛あいすべし」律法おきて全体ぜんたいと預よ言げん者しゃとはこの二つの戒めめによるなり」。パリサイびとらの集あつまりたる時とき、イエス彼らに問といて言いいたもう、「なんじらはキリストにつきていかに思おもうか、たれの子こなるか」。彼ら言いう、「ダビデの子こなり」。イエス言いいたもう、「さらばダビデ御み霊たまに感かんじてなにゆえ彼かれを主しゅとこのうるか。いわく、『主しゅ、わが主しゅに言いいたもう、我われなんじの敵てきをなんじの足あしのしたにおくまでは、わが右みぎに座ざせよ』かくダビデ彼かれを主しゅとこのうれば、いか

でその子ならんや」。たれも一ことだに答うることあたわず、その日よりあえてまたイエスに問う者なかりき。

### 三位一体後第十九主日

特禱

神よ、主によらざれば御心にかのうことあたわざるゆえに、聖霊をもつて我らの心を治め、常に導きたまわんことを。主イエス、キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書 エペ 四章一七—三二

されば我これを言い、主にありてあかしす、なんじら今よりのち異邦人の心の空しきに任かせて歩むがごとく歩むな。彼らは思い暗くなりて、そのうちなる無知により、心のかたくなによりて神の命に遠ざかり、恥を知らず、ほしいままにすべての汚れを行なわんとておのれを好色にわたせり。されどなんじらはかくのごとくならんためにキリストを学べるにあらず。なんじらは彼に聞き、彼にありてイエスにある真理に従

いて教えられしならん。すなわちなんじら惑わしの欲のために滅ぶべきさきの振まいにつける古き人を脱ぎすて、心の霊を新にし、真理よりいずる義と聖にて、神にたどり造られたる新しき人を着るべきことなり。されば偽りをすておのおのその隣にまことを語れ、我ら互いにえだなればなり。なんじら怒るとも罪を犯すな、憤りを日の入るまで続くな。悪魔におりを得さすな。盗みする者は今よりのち盗みすな、むしろ貧しき者に分け与え得るために手ずから働きて良きわざをなせ。悪しき言葉をいっさい、なんじらの口よりいだすな、ただ時に従いて人の徳を立つべき良き言葉をいだして聞く者に益を得させよ。神の聖霊を憂いしむな、なんじらは贖いの日のために聖霊にて印せられたるなり。すべてのにかき・憤り・怒り・騒ぎ・そしり、及びすべての悪意をなんじらより捨てよ。互いになさけとあわれみとあれ、キリストにありて神のなんじらを赦したまいしごとくなんじらも互いに赦せ。

福音書 マタ 九章 一—八

イエス舟にのり、渡りておのが町にきたりたもう。見よ、中風にて床に伏しおる者を、人々みもとに連れきたれり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう、

「子よ、心安かれ、なんじの罪ゆるされたり」。見よ、ある學者ら心のうちにいう、「この人は神を汚すなり」。イエスその思いを知りて言いたもう、「なにゆえ心に悪しき事を思うか。なんじの罪ゆるされたりと言うと、起きて歩めと言うと、いずれかやすき。人の子、地にて罪を赦す權威あることをなんじらに知らせんために」。——ここに中風の者に言いたもう、——「起きよ、床をとりてなんじの家に帰れ」。彼おきて、その家に帰る。群衆これを見て恐れ、かかる力を人に与えたまえる神をあがめたり。

### 三位一体後第二十主日

#### 特禱

いとあわれみ深き全能の神よ、豊かなる恵みを我らに与え、すべて害あるものを防ぎたまえ。また常にからだと魂とに備えをなし、喜びて御心にかのうことを行なわしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 使徒書 エペ 五章一五—二一

されば憤みてその歩むところに心せよ、賢からぬ者のごとくせず、賢き者のごとく

し、またおりをうかがえ、そは時悪しければなり。このゆえに愚かとならず、主の御心のいかんを悟れ。酒に酔うな、放とうはそのうちにあり、むしろ御霊にて満たされ、詩と賛美と霊の歌とをもて語り会ひ、また主に向かいて心よりかつ歌い、かつ賛美せよ。すべての事につきて常に我らの主イエス・キリストの名によりて父なる神に感謝し、キリストをかしこみて互いに従え。

福音書 マタ二二章一―四

イエスまた譬をもて答えて言いたもう、「天国はおのが子のために婚宴を設くる王のごとし。婚宴に招きおきたる人々を迎えんとてしもべどもをつかわしに、きたるをうけがわず。またほかのしもべどもをつかわすと言う、『招きたる人々に告げよ、見よ、昼はすでに備わりたり。わが牛も肥えたる獣もほふられて、すべての物備わりたれば婚宴にきたれ』と。しかるに人々顧みずして、ある者はおのが畑に、ある者はおのが商ひに行けり。またほかの者はしもべどもを捕えて、はずかしめ、かつ殺したれば、王、怒りて軍勢をつかわし、かの凶行者を滅ぼして、その町を焼きたり。かくてしもべどもに言う、『婚宴はすでに備わりたれど、招きたる者どもはふさわしか

らず。さればなんじらちまたに行きて会うほどの者を婚宴に招けしもべども道にいでて良きも悪しきも会うほどの者をみな集めたれば、婚禮の席は客にて満てり、王客を見んとて入りきたり、ひとりの礼服を着けぬ者あるを見て、これに言う、『友よ、いかなれば礼服を着けずしてここに入りたるか』。彼もだしいたり。ここに王、侍者らに言う。『その手足を縛りて外の暗きに投げいだせ、そこにて嘆き・齒がみするものとあらん』。それ招かる者は多かれど、選ばれる者は少なし』。

三位一体後第二十一主日

特禱

あわれみ深き主よ、御民の罪を赦し、これに安きを与え、その不義をことごとく清め、おだやかなる心をもつて主に仕えしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エペ 六章一〇―二〇

なんじら主にありてその大能の勢いによりて強かれ。悪魔のてだてに向かいて立ち得

んために、神の武具をもてよろうべし。我らは血肉と戦うにあらず。政・権威、この世の暗きをつかさどるもの、天のところにある惡の靈と戦うなり。このゆえに神の武具をとれ、なんじら惡しき日に会いてあだに立ち向かい、すべての事を成就して立ち得んためなり。なんじら立つに真理を帶として腰に結び、正義を胸當として胸に当て、平和の福音の備えをくつとして足にはけ。このほかなお信仰の盾をとれ、これをもて惡しき者のすべての火矢を消すことを得ん。また救いのかぶとおよび御靈の劍、すなわち神の言葉をとれ。常にさまたまの祈りと願いとをなし、御靈によりて祈り、また目を覺ましてすべての聖徒のためにも願いてうまされ。またわが口を開くとき、言葉を賜わり、はばかりずして福音の奧義を示し、語るべきところをはばかりず語り得るように、わがためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖につながれたり。

福音書

ヨハネ 四章四六―五四

イエスまたガリラヤのカナに行きたもう、ここはさきに水をぶどう酒になしたまいしところなり、時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、イエスのユダヤにきたりたまえるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子をいやしたまわ



んことを請う、子は死ぬるばかりなりしなり。ここにイエス言いたもう、「なんじらしるしと不思議とを見ずば、信ぜじ」。近臣言う、「主よ、わが子の死なぬうちにくだりたまえ」。イエス言いたもう、「帰れ、なんじの子は生くるなり」。彼はイエスの言いたまいしことを信じて帰りしが、くだる途中、しもべも行きて、その子の生きたる事を告ぐ。そのいえはじめし時を問ひしに。「きのうの第七時に熱去れり」と言う。父その時の、イエスが、「なんじの子は生くるなり」と言いたまいし時と同じきを知り、しかしておのれも家の者もみな信じたり。これはイエス、ユダヤよりガリラヤに行きてなしたまえる第二のしるしなり。

三位一體後第二十二主日

特禱

主よ、絶えざる恵みをもつて主の家族なる公会を守りたまえ。願わくは主の守りによ  
りて、すべての災いを免れ、良き行ないをもつて熱心に主に仕え、御名の栄光をあら  
わすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　　ピリ一章三一―一

我なんじらを思うごとに、わが神に感謝し、つねになんじらすべてのために、願いのつどつど喜びて願いをなす。これなんじら初めの日より今に至るまで福音を広むることにあずかるがゆえなり。我はなんじらのうちに良きわざを始めたまいし者の、キリストイエスの日までこれを全うしたもうべきことを確信す。わがかくもなんじらすべてを思うは当然の事なり、わがなわ目にある時にも、福音を弁明してこれを堅うする時にも、なんじらはみな我とともに恵みにあずかるによりて、わが心にあればなり。我いかにキリストイエスの心をもてなんじらすべてを恋慕うか、そのあかしをなしたもう者は神なり。我は祈る。なんじらの愛、知識ともろもろの悟りによりていやが上にも増し加わり、良し悪しをわきまえ知り、キリストの日に至るまでいさぎよくしてつまずくことなく、イエスキリストによる義の実をみたして、神の栄光と誉れとを現わさんことを。

福音書　　マタ一八章二一―三五

ここにペテロみもとにきたりて言う、「主よ、わが兄弟我に對して罪を犯さばいくた

び赦すべきか、七たびまでか」。イエス言いたもう、「いな我、『七たびまで』とは言わず、『七たびを七十倍するまで』と言うなり。このゆえに天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。計算を始めしとき、一万タラントの負債ある家来つれきたられしが、償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子とすべての持ち物とを売りて償うことを命じたるに、その家来ひれ伏し、拜して言う、『ゆるくしたまえ、さらばことごとく償わん』その家来の主人、あわれみてこれを解き、その負い目を赦したり。しかるにその家来いでて、おのれより百デナリを負いたるひとりの同僚にあい、これを捕え、のどを締めて言う、『負い目を償え』。その同僚ひれ伏し、願いて、『ゆるくしたまえ、さらば償わん』と言えど、うけがわずして行き、その負い目を償うまでこれを獄舎に入れたり。同僚どもありし事を見ていたく悲しみ、行きてありしすべての事をその主人に告ぐ。ここに主人彼を呼びだして言う、『悪しき家来よ、なんじ願ひしによりて、かの負い目をことごとく赦せり。わがなんじをあわれみしごとくなんじもまた同僚をあわれむべきにあらずや』。かくてその主人、怒りて、負い目をことごとく償うまで彼を獄卒にわたせり。もしなんじらおの兄弟を赦さ

ずば、わが天の父もまたなんじらにかくのごとくなしたもうべし」。

### 三位一体後第二十三主日

特 禱

信仰のもとにして我らの避け所、我らの力なる神よ、願わくは主の公会の祈りを聞き召し、その信じて願うところを得させたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　　ピリ三章一七—二二

兄弟よ、なんじらもろともに我になろうものとなれ、かつなんじらの模範となる我らに従いて歩むものを見よ。そは我しばしばなんじらに告げ、今また涙を流して告ぐるごとく、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。彼らの終わりは滅びなり。おのが腹を神となし、おのが恥を光榮となし、ただ地の事のみを思う。されど我らの国籍は天にあり、我らは主イエス・キリストの救い主としてそのところよりきたりたもうを待つ。彼は万物をおのれに従わせ得る力によりて、我らのいやしきさまの

からだを變えておのが榮光のからだにかたどらせたまわん。

福音書 マタ二二章一五—二二

ここにパリサイ人らいでていかにしてかイエスを言葉のわなにかけんと相はかり、その弟子らをヘロデ党の者どもとともにつかわして言わしむ、「師よ、我らは知る、なんじはまことにしてまことをもて神の道を教え、かつたれをもはばかりたもう事なし、人のうわべを見たまわぬゆえなり。されば我らに告げたまえ、みつぎをカイザルに納むるは良きか、悪しきか、いかに思いたもう」。イエスそのよこしまなるを知りに納むるは良きか、悪しきか、いかに思いたもう」。イエスそのよこしまなるを知りて言いたもう、「偽善者よ、なんぞ我を試むるか。みつぎの金を我に見せよ」。彼らデナリ一つを持ちきたる。イエス言いたもう、「これはたれの形、たれのしるしなるか」彼ら言う、「カイザルのなり」。ここに彼らに言いたもう、「さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」。彼らこれを聞きて怪しみ、イエスを離れて去り行けり。

三位一体後第二十四主日

特 待

主よ、大いなるあわれみをもつて御民のとがを赦し、その弱きによりて犯せる罪のなわめを解きたまわんことを、救い主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　コロ一　章三―一二

我らは常になんじらのために祈りて我らの主イエス・キリストの父なる神に感謝す。これキリスト・イエスを信ずるなんじらの信仰と、すべての聖徒に對するなんじらの愛とにつきて聞きたればなり。かく聖徒を愛するは、なんじらのために天にたくわえあるものを望むによる。この望みのことはなんじらにおよべる福音のまことの言葉によりてなんじらがかつて聞きしところなり。この福音は全世界にもおよび、実を結びてますます大いになれり。なんじらが神の恵みを聞きて、まことにこれを知りし日より、なんじらのうちにしかりしがごとし。なんじらが、我らとともにしもべたる愛するエパfrasより学びたるは、この福音なり。彼はなんじらのためにキリストのためやかなる役者にして、なんじらが御霊によりていただける愛を我らに告げたり。このゆ

えに我らこの事を聞きし日よりなんじらのために絶えず祈り、かつ求むるは、なんじら靈のもろもろの知恵と悟りとをもて神の御心をつぶさに知り、すべてのこと主を喜ばせんがために、その御心に従いて歩み、すべての良きわざによりて実を結び、いよいよ神を知り、また神の栄光の勢いに従いて賜うもろもろの力によりて強くなり、すべての事喜びて忍び、かつ耐え、しかして我らを光にある聖徒の嗣業にあずかるに足る者としたまいし父に感謝せん事なり。

福音書 マタ九章一八一—二六

イエスこれらのことを語りいたもうとき、見よひとりの会堂司きたり、拝して言う、「わが娘いま死にたり。されどきたりて御手をこれにおきたまわば生きん」。イエス立ちて彼に伴いたもうに、弟子たちも従う。見よ、十二年血漏をわずらいいたる女、イエスのうしろにきたりて、御衣のふさにさわる。それは御衣にだにさわらば救われんと心のうちに言えるなり。イエスふり返り、女を見て言いたもう、「娘よ、心安かれ、なんじの信仰なんじを救えり」女この時より救われたり。かくてイエス会堂司の家にいたり、笛吹く者と騒ぐ群衆とを見て言いたもう、「退け、少女は死にたるにあ

らず、いねたるなり」人々イエスをあざ笑う。群衆のいだされしのうち、入りてその手  
をとりたまえ、少女おきたり。このきこえあまねくその地に広まりぬ。

三位一体後第二十五主日には、顕現後第六主日の特禱・使徒書・福音書を用いる。  
第二十六主日のあるときは、第二十五主日に顕現後第五主日のものを用い、第二十  
六主日に顕現後第六主日のものを用いる。

## 降臨節前主日

特禱

主よ、願わくは御民の心を励まし、喜びて主の御わざにたより、その大いなる恵みに  
よりにて御助けにあずかることを得させたまえ。主イエスⅡキリストによりてこいねが  
い奉る。アーメン

使徒書 エレニ三章五一八

主言いたもう。見よ、日きたらん、我ダビデのために一つの正しき枝をおこすべし。  
かれ王となり、統べ治めて栄え、地にて義と公平とを施すべし。その時ユダは救いを  
得、イスラエルは安きにおらん。その名は、「主われらの義」ととなえられん。この



ゆえに主しゅ言いいたもう、見みよ、人々ひとびと、「イスラエルの子こらをエジプトの地ちより導みちびきいだしし主しゅは生いきたもう」と言いわずして「イスラエルの家いえの末すえを北きたの国くにおよび追おいやられし国々くにくにより導みちびきいだしし主しゅは生いきたもう」と言いう日ひきたらん、彼かれらはおのれの国くにに住すむべし。

福音書 ヨハ 六章五一—四

イエス目めをあけて大おおいなる群衆ぐんしゆのきたるを見みてピリポに言いいたもう、「我われらいずこよ  
りパンを買かいて、この人々ひとびとに食くわすべきか」。かく言いいたもうはピリポを試こころむるため  
にて、みずからなさんとする事ことを知しりたもうなり。ピリポ答こたえて言いう、「二百デナリの  
パンありとも、人々ひとびと少しずつ受うくるになお足たらじ」。弟子でしのひとりにてシモンシペテ  
ロの兄弟きょうだいなるアンデレ言いう、「ここにひとりのわらべあり、大麦おおむぎのパン五つと小きき  
さかな二つとを持もてり、されどこの多おほくの人ひとにはなにかならん」。イエス言いいたも  
う、「人々ひとびとを座ざせしめよ」。そのところに多おほくの草くさありて人々ひとびと座ざせしが、その数かずおおよ  
そ五千にん人なりき。ここにイエス、パンを取りとりて謝しやし、座ざしたる人々ひとびとに分わち与あたえ、ま  
たさかなをもしかなして、その欲ほつするほど与あたえたもう。人々ひとびとの飽あきたるのち、弟子でしな

ちに言いたもう、「すたるもののなきように裂きたる余りを集めよ」すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの裂きたるを食らいしものの余り、十二のかごに満ちたり。人々そのなしたまいしるしを見て言う、「げにこれは世にきたるべき預言者なり」。

## 使徒聖アンデレ日

十一月三十日

特 殊

全能の神よ、主は聖なる使徒アンデレに直ちに御子イエス・キリストの召しに従う恵みを与えたまえり。願わくは我ら御言葉によりて召しをこうむりたる者も、直ちにこれに従い、おのれをささげて、主の命じたもうところを行のうことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使 徒 書 ロマ 一〇章九—二一

なんじ口にてイエスを主と言ひあらわし、心にて神のこれを死人のうちよりよみがえらせたまいしことを信ぜば、救わるべし。それ人は心に信じて義とせられ、口に言ひあらわして救わるるなり。聖書に言う、「すべて彼を信ずる者ははすかしめられじ」

と。ユダヤびとギリシヤびととの分かちなし、同一の主は万民の主にましまして、すべて呼び求むる者に対して豊かなり。「すべて主の御名を呼び求むる者は救われるべし」とあればなり。されどいまだ信ぜぬ者をいかで呼び求むることをせん。いまだ聞かぬ者をいかで信ずることをせん。宣べ伝うる者なくばいかで聞くことをせん。つかわざれずばいかで宣べ伝うることをせん、「ああ麗わしきかな、良き事を告ぐる者の足よ」としてゐるされたるごとし。されど、みな福音に従いしにはあらず、イザヤ言う、「主よ、我らに聞きたることをたれか信ぜし」。かく信仰は聞くにより、聞くはキリストの言葉による。されど我言う、彼ら聞えざりしか、しからず、「その声は全地にゆきわたり、その言葉は世界のはてにまでおよべり」。我また言う、イスラエルは知らざりしか、まずモーセ言う、「われ民ならぬ者をもてなんじらにねたみを起こさせ、愚かなる民をもてなんじらを怒らせん」。またイザヤはばからずして言う、「我を求めざる者に、われ見いだされ、我を尋ねざる者に我あらわれたり」。さらにイスラエルにつきては、「われ従わずして言いさかろう民に、ひねもす手を伸べたり」と言えり。

イエス、ガリラヤの海<sup>うみ</sup>を歩<sup>ある</sup>みて、ふたりの兄弟<sup>きょうだい</sup>ペテロと言うシモンとその兄弟<sup>きょうだい</sup>アンデレとが、海<sup>うみ</sup>に網<sup>あみ</sup>打ちおるを見<sup>み</sup>たもう、彼<sup>かれ</sup>らは漁師<sup>りょうし</sup>なり。これに言<sup>い</sup>いたもう「我<sup>われ</sup>に従<sup>したが</sup>いきたれ、さらばなんじらを人<sup>ひと</sup>を生<sup>い</sup>けどる者<sup>もの</sup>となさん」。彼<sup>かれ</sup>らただちに網<sup>あみ</sup>を捨<sup>す</sup>てて従<sup>したが</sup>う。さらに進<sup>すす</sup>みゆきて、またふたりの兄弟<sup>きょうだい</sup>、ゼベタイの子ヤコブとその兄弟<sup>きょうだい</sup>ヨハネとが、父<sup>ちち</sup>ゼベダイとともに舟<sup>ふね</sup>にありて網<sup>あみ</sup>を繕<sup>つくろ</sup>いおるを見<sup>み</sup>て呼<sup>よ</sup>びたまえば、ただちに舟<sup>ふね</sup>と父<sup>ちち</sup>とおきてしたごう。

## 使徒聖トマス日

十二月二十一日

特<sup>とく</sup> 禱<sup>とこ</sup>

限りなく生<sup>い</sup>ける全能<sup>ぜんのう</sup>の神<sup>かみ</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>は聖<sup>せい</sup>なる使徒<sup>しと</sup>トマスに御子<sup>みこ</sup>のよみがえりを疑<sup>うた</sup>うことを許<sup>ゆる</sup>して福音<sup>ふくいん</sup>のあかしをますます堅<sup>かた</sup>くしたまえり。願<sup>ねが</sup>わくは我<sup>われ</sup>らに御子<sup>みこ</sup>イエス・キリストを疑<sup>うた</sup>わざる全<sup>まる</sup>き信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>を与<sup>あた</sup>えて、御前<sup>みまへ</sup>に責<sup>せ</sup>むべき所<sup>ところ</sup>なからしめたまえ。父<sup>ちち</sup>と聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>とともに世々<sup>よよ</sup>栄光<sup>えいこう</sup>ある主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストによりて聞<sup>き</sup>こし召<sup>め</sup>したまわんことをこいねがい奉<sup>ほう</sup>る。アーメン

使徒書 エペ二章一九—二二

さればなんじらはもはや、旅びとまた宿りびとにあらず、聖徒と同じ國びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリストにイエスみずからそのすみの親石たり。おのおのの建物、彼にありて建て合せられ、いやましに聖なる宮、主のうちに成るなり。なんじらもキリストにありてともに建てられ、御霊によりて神の御住まいとなるなり。

福音書 ヨハ二〇章二四—三一

イエスキタリたまひし時、十二弟子のひとり、デドモと称するトマスともにおらざりしかば、ほかの弟子これに言う、「我ら主を見たり」。トマス言う、「我はその手にくぎの跡を見、わが指をくぎの跡に差し入れ、わが手をそのわきに差し入るるにあらずば信ぜじ」。八日のち弟子たちまた家におり、トマスもともにおりて戸を閉じおきしに、イエスキタリ、彼らのなかに立ちて言いたもう、「平安なんじらにあれ」。またトマスに言いたもう、「なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、なんじの手を伸べてわがわきに差し入れよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ」。トマス答えて言

う、「わが主よ、わが神よ」。イエス言いたもう、「なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸いなり」。この書にしるさざるほかの多くのしるしを、イエス弟子たちの前に行ないたまえり。されどこれらの事をしるしは、なんじらをしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により命を得しめんがためなり。

### 使徒聖パウロ改心日

一月二十五日

特 づ

神よ、主は使徒聖パウロの宣教によりて福音の光を全世界に照らしたまえり。願わくはその改心を記憶し、これを感じて、その宣べ伝えし聖なる教えに従うことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 使九章一二二

サウロは主の弟子たちに對して、なおおびやかしと殺害との氣を満たし、大祭司にいたりて、ダマスコにある諸会堂への添書を請う。この道の者を見いださば、男女にか

かわらず縛りてエルサレムに引かんためなり。行きてダマスコに近づきたるとき、たちまち天より光いでて、彼をめぐり照らしたれば、かれ地に倒れて、「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」という声を聞く。彼言う、「主よ、なんじはたれぞ」。答えたもう、「我はなんじが迫害するイエスなり。起きて町に入れ、さらばなんじなすべき事を告げらるべし」。同行の人々、物言うことあたわずして立ちたりしが、声は聞けどもたれをも見ざりき。サウロ地より起きて目をあけたれどなにも見えざれば、人その手を引きてダマスコに導き行きしに、三日のあいだ見えず、また飲み食いせざりき。さてダマスコにアナニヤというひとりの弟子あり、幻のうちに主言いたもう、「アナニヤよ」。答う、「主よ、我ここにあり」。主言いたもう、「起きて真直という町に行き、ユダの家にてサウロというタルソびとを尋ねよ。見よ、彼は祈りおるなり。またアナニヤという人の入りきたりてふたび見ゆることを得しめんために、手をおのがうえにおくを見たり」。アナニヤ答う、「主よ、われ多くの人よりこの人につきて聞きしに、彼がエルサレムにてなんじの聖徒に害を加えしこといかばかりぞや。またここにもすべてなんじの御名を呼ぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり」主

言いたもう、「行け、この人は異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前にわが名を持ち行くわが選びの器なり。我かれにわが名のためにいかに多くの苦しみを受くるかを示さん」。ここにアナニヤ行きてその家にいり、彼の上に手をおきて言う、「兄弟サウロよ、主すなわちなんじがきたる道にて現われたまいしイエス、我をつかわしたまえり。なんじがふたたび見ることを得、かつ聖霊にて満たされんためなり」。ただちに彼の目よりうるこのごときもの、落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、かつ食事して力づきたり。サウロは数日の間ダマスコの弟子たちとともにおり、ただちに諸会堂にてイエスの、神の子なることを宣べたり。聞く者みな驚きて言う、「こはエルサレムにてこの名を呼ぶ者をそこないし人ならずや、またここにきたりしもこれを縛りて祭司長らのもとに引き行かんがためならずや」。サウロますます力くわわり、イエスのキリストなることを論証してダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。

福音書 マタ一九章二七—三〇

ここにペテロ答えて言う、「見よ、我らいつさいを捨ててなんじに従えり、さればな



にを得べきか」。イエス彼らに言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、世あらたまりて人の子その栄光の位に座するとき、我に従えるなんじらもまた十二の位に座してイスラエルの十二のやからをさばかん。またおおよそわが名のためにあるいは家、あるいは兄弟、あるいは姉妹、あるいは父、あるいは母、あるいは子、あるいは田畑を捨つる者は数倍を受け、またとこしえの命を継がん。されど多くの先なる者あとに、あとなる者先になるべし」。

被 献 日

二月二日

特 禱  
限りなく生ける全能の神よ、この日、宮にてひとりの御子は我らと同じ肉体にてさげられたまえり。願わくは我らも心を清められ、御前にささげられんことを、主イエス！キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使 徒 書 マラ 三章 一—五

見よ、我わが使いをつかわす、彼わが前に道を備えん。なんじらの求むる主はにわか

にその宮にきたりたまわん。見よ、なんじの喜ぶ契約の使いきたるべしと万軍の言いたもう。されどそのきたりたもう日にはたれか耐えん、その現われたもう時にはたれか立ち得ん。彼は銀を吹き分くる者の火のごとく、布さらしのせつけんのごとくならん。彼は銀を吹き分けてこれを清むる者のごとく座し、レビの子らを清め、金銀のごとく清くしたまわん。しかして彼らは義をもて主に供え物をささげん。その時エダとイスラエルとの供え物は昔の日のごとく、いにしえの年のごとく主に喜ばれん。我またなんじらに近づきてさばきをなし、魔術者、姦淫を行のう者、偽りて誓う者、雇いびとの価をかすめ、やもめ、また孤児をしいたげ、異邦人の義をまげ、我を恐れぬ者どもに向かいてすみやかにあかしびととならんと、万軍の主言いたもう。

福音書 ルカ二章二二—四〇

モーセの律法に定めたる清めの日満ちたれば、彼ら幼な子を携えて、エルサレムにのぼる。これは主の律法に、「すべてうい子に生まるる男子は主につける聖なる者となえらるべし」としてゐるごとく、幼な子を主にささげ、また主の律法に、「山ばと、一つがいあるいは家ばとのひな二羽」と言いたるに従いて、いけにえを供えん

ためなり。見よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上にいます。また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、このとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法のならわしに従いて、行なわんとてきたりたれば、シメオン、イエスを取りいだき、神をほめて言う、「主よ、今こそ御言葉に従いてしもべを安らかに行かしたもうなれ。わが目は、はや主の救いを見たり。これもろもろの民の前に備えたまいし者、異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり」。かく幼な子につきて語ることを、その父母あやしみたれば、シメオン彼らを祝して母マリヤに言う、「見よ、この幼な子は、イスラエルの多くの人のあるいは倒れ、あるいはた立んために、また言い逆いを受くるしるしのためにおかる。――剣なんじの心をも刺し貫くべし――これは多くの人の心の思いの現われんためなり」。ここにアセルのやからバヌエルの娘に、アンナという預言者あり、年いたく老ゆ。おとめのとき、夫にゆきて七年ともにおり、八十四年やもめたり。宮を離れず、夜も昼も、断食と祈禱とをなして神に仕う。この時進み寄りて、神に感謝し、またすべてエ

ルサレムの贖いを待ちのぞむ人に、幼な子のことを語れり。さて主の律法に従いて、すべての事を果たしたれば、ガリラヤに帰り、おのが町ナザレに至れり。幼な子はややに成長して健やかになり、知恵みち、かつ神の恵みその上にありき。

## 使徒聖マツテヤ日

二月二十四日

特 待  
特 待

全能の神よ、主は御子イエスをわたししユダのかわりに忠義なるしもべマツテヤを選び、十二使徒につらねたまえり。願わくは常に公会を守りて偽りの使徒を防ぎ、忠実なる牧者をして、これを治め導かしめたまえ。主イエスⅡキリストによりてこいねが  
い奉る。アーメン

使 徒 書 使 一 章 一 五 — 二 六

そのころペテロ、百二十名ばかりともに集まりて群れをなせる兄弟たちのなかに立ちて言う、「兄弟たちよ、イエスを捕うる者どもの手引きとなりしユダにつきて聖霊ダビデの口によりてあらかじめ言いたまいし聖書は、かならず成就せざるを得ざりしな

り。彼は我らのうちに教えられ、この務めにあずかりたればなり。（この人は、かの不義の価をもて地所を得、またうつ伏しに落ちて真中より裂けて腹わたみな流れいでたり。この事エルサレムに住むすべての人に知られて、その地所は國言葉にてアケルダマとなえらる、血の地所との義なり。それは詩篇にしろして、『かれの住みかは荒れ果てよ、人その内に住まわされ』と言ひ、また、『その務めはほかの人に得させよ』と言ひたり。されば主イエス我らのうちに行き來したまいし間、すなわちヨハネのバプテスマより始まり、我らを離れて挙げられたまいし目に至るまで、つねに我らとともにありしこの人々のうちひとり、我らとともに主のよみがえりの証人となるべきなり」。ここにバルサバとなえられ、またの名をユストと呼ぶるヨセフおよびマッテヤのふたりをあげ、祈りて言う、『すべての人の心を知りたもう主よ、ユダおのがところに行かんとてこの務めと使徒の職とより落ちたれば、そのあとを継がするに、このふたりのうちいずれを選びたもうか示したまえ』。かくてくじせしに、くじはマッテヤに当たりたれば、彼は十一の使徒に加えられたり。

その時イエス答えて言いたもう、「天地の主なる父よ、われ感謝す、これらのことを賢き者、さとき者に隠してみどり子に現わしたまえり。父よ、しかり、かくのごときは御心になかざるなり。すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父のほかになく、父を知る者は子また子の欲するままに現わすところの者のほかになし。すべて勞する者、重荷を負う者、われにきたれ、我なんじらを休ません。我は柔和にして心低ければ、わがくびきを負いて我に學べ、さらば魂に休みを得ん。わがくびきは安く、わが荷は輕ければなり」。

### 処女聖マリヤ蒙告日

三月二十五日

特 禱

主よ、天の使いの御告げによりて、御子イエス・キリストの肉体となることを示したまえり。願わくは御恵みを我らの心に注ぎ、御子の苦しみと十字架のいさおによりて、そのよみがえりの栄光に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 イザ七章一〇—一五

主アハズに告げて言いたもう、「なんじの神なる主にしるしを求めよ、あるいは深き所、あるいは上なる高き所に求めよ」。しかるにアハズ言う、「我はこれを求めじ、我は主を試むることをせじ」。イザヤ言う、「ダビデの家よ、なんじら聞け、人を煩わして小事となし、またわが神をも煩わさんとするか。このゆえに主みずからなんじらしるしを与えたまわん。見よ、おとめはらみて子を生まん、その名をインマヌエルとこのうべし。かれ悪をすて、善を選ぶことを知るころおいにいたりて、牛酪とはち蜜とを食らわん」。

福音書 ルカ一章二六—三八

その六つきめに、御使いガブリエル、ナザレというガリラヤの町におるおとめのもとに、神よりつかわさる。このおとめはダビデの家のヨセフという人といひなすけせし者にて、その名をマリヤという。御使い、おとめのもとにきたりて言う、「めでたし、恵まるる者よ、主なんじとともにいますえり」。マリヤこの言葉によりて、心いたく騒ぎ、かかるあいさつはいかなる事ぞと思ひ巡らしたるに、御使い言う、「マリヤよ、

恐るな、なんじは神の御前に恵みを得たり。見よ、なんじみごもりて男子を生まん、その名をイエスと名づくべし。彼は大きいならん、いと高き者の子となえられん。また主たる神、これにその父ダビデの位を与えたまえば、ヤコブの家をそこしえに治めん。その国は終わることなかるべし」。マリヤ御使いに言う、「われいまだ人を知らぬに、いかにしてこの事のあるべき」。御使い答えて言う、「聖靈なんじに臨み、いと高き者の力なんじをおおわん。このゆえになんじが生むところの聖なる者は、神の子となえらるべし。見よ、なんじの親族エリサベツも、年老いたれど、男子をはらめり。うまずめといわれたる者なるに、今はみごもりてはや六つきになりぬ。それ神の言葉にはあたわぬところなし」。マリヤ言う、「見よ、我は主のはしためなり。なんじの言葉のごとく、我に成れかし」。ついに御使い、はなれ去りぬ。

### 福音記者聖マルコ日

四月二十五日

特 奏

全能の神よ、主は福音記者聖マルコによりて、救いの道を公会に教えたまえり。願わ



くは我ら益なき教えの風に動かさることなく、御恵みによりて堅く福音の真理に立つことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エベ 四章七一六

我らはキリストの賜物の量りに従いて、おのおのめぐみを賜わりたり。されば言えることあり、「かれ高きところに登りしとき、多くのとりこをひきい、人々に賜物を賜えり」と。すでに登りしと言え、まづ地の低きところまで下りしにあらずや。下りし者はすなわちよろずの物に満たんために、もろもろの天の上のぼりし者なり。彼はある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として与えたまえり。これ聖徒を全うして務めを行なわせ、キリストのからだを建て、我らをしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、また我らはもはやわらべならず、人の欺きごとと感わしの手だてたる悪巧みとより起こるさまざまの教えの風に吹きまわされず、ただ愛をもてまことを保ち、育ちてすべてのこと、かしらなるキリストに達せんためなり。彼を元とし全身はすべての節々の助けにて整い、かつ連なり、支体おのおの量りに応

じて働くにより、そのからだ成長し、みずから愛によりて建てらるるなり。

福音書 ヨハ一五章一一一

我はまことのぶどうの木、わが父は農夫なり。おおよそ我にありて実を結ばぬ枝は、父これを除き、実を結ぶものは、いよいよ実を結ばせんためにこれを清めたもう。なんじらはすでに清し、わが語りたる言葉によりてなり。我におれ、さらば我なんじらにおらん。枝もし木におらずば、みずから実を結ぶことあたわぬごとく、なんじらも我におらずばまたしかり。我はぶどうの木、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの実を結ぶべし、なんじら我を離るれば、なにごとをもなしあたわす、人もし我におらずば、枝のごとく外に捨てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。なんじらもし我におり、わが言葉なんじらにおらば、何にても望みに従いて求めよ。さらば成らん。なんじら多くの実を結ばば、わが父は栄光を受けたもうべし、しかしてなんじらわが弟子とならん。父の我を愛したまいしごとく、我もなんじらを愛したり、わが愛におれ。なんじら、もし、わが戒めをまもらば、わが愛におらん、我わが父の戒めを守りて、その愛におるがごとし。我これらの事を語

りたるは、わが喜びのなんじらにあり、かつなんじらの喜びの満たされんためなり。

# 使徒聖ピリポ・聖ヤコブ日

五月一日

特 禱

全能の神よ、限りなき命をうるは、まことに主を知るにあり。願わくは我ら御子イエス・キリストは道なり、真理なり、命なりと悟り、聖なる使徒ピリポ・ヤコブの跡を踏みて、限りなき命に至る道を絶えず歩ましめたまえ。御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ヤコ一章一一三

神および主イエス・キリストのしもべヤコブ、散りおる十二のやからの平安を祈る。わが兄弟よ、なんじらさまさまの試みに会うとき、ひたすらこれを喜びとせよ。そはなんじらの信仰のためしは、忍耐を生ずるを知らばなり。忍耐をして全き働きをなさしめよ。これなんじらが全く、かつ備わりて欠くところなからんためなり。なんじらのうちもし知恵の欠くる者あらば、とがむることなく、また惜むことなく、すべて

の人にあとうる神に求むべし。さらば与えられん。ただし疑うことなく、信仰をもて求むべし。疑う者は、風に動かされてひるがえる海の波のごときなり。かかる人は、主よりなにもをも受くと思うな。かかる人は二心にして、すべてその歩むところの道、定まりなし。低き兄弟は、おのが高くせられたるを喜べ、富める者は、おのが低くせられたるを喜べ。そは草の花のごとく、過ぎ行くべければなり。日いで熱き風吹きて草を枯らせば、花落ちてその麗わしき姿ほろぶ。富める者もまたかくのごとく、その道の半ばにしておのれまず消え失せん。試みに耐うるものは幸いなり、これをよしとせらるる時は、主のおのれを愛するものに、約束したまいし命の冠を受くべければなり。

福音書 ヨハ一四章一一四

イエス弟子たちに言いたもう、「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住みかおとし、しからずば我かねてなんじらに告げしならん。我なんじらのために所を備えに行く。もし行きてなんじらのために所を備えば、またきたりてなんじらをわがもとに迎えん、わがおるところになんじらもおらんためなり。なん

じらはわが行くところに至る道を知る」。トマス言う、「主よ、いずこに行きたもうかを知らず、いかでその道を知らんや」イエス彼に言いたもう、「われは道なり、まことなり、命なり、我によらではたれにても父のみもとにいたる者なし。なんじらもし我を知りたらばわが父をも知りしならん。今よりなんじらこれを知る、すでにこれを見たり」。ピリポ言う、「主よ、父を我らに示したまえ、さらば足れり」。イエス言いたもう、「ピリポ、我かく久しくなんじらとともにおりしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、いかなれば、『我らに父を示せ』と言うか。我の父におり、父の我にいたもうことを信ぜぬか。わがなんじらにいう言葉はおのれによりて語るにあらず、父われにいましてみわざを行ないたもうなり。わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我にいたもうなり。もし信ぜずば、わがわざによりて信ぜよ。まことにまことになんじらに告ぐ、我を信ずる者はわがなすわざをなさん、かつこれよりも大なるわざをなすべし、われ父に行けばなり。なんじらがわが名によりて願うことは、我みなこれをなさん、父、子によりて栄光を受けたまわんためなり。なにことにてもわが名によりて我に願わば、我これを成すべし」。

## 使徒聖バルナバ

六月十一日

特 待

聖なる使徒バルナバに聖靈の殊なる賜物を授けたまいし全能の神よ、もろもろの賜物をもつて我らを富ませ、又これを用いて常に主の栄光を現わさせたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 使 一章二二—三〇

この事エルサレムにある教会に聞えたれば、バルナバをアンテオケにつかわす。彼きたりて、神の恵みを見て喜び、彼らに、みな心を堅くして主におらんことを勧む。彼は聖靈と信仰とに満ちたる良き人なればなり。ここに多くの人々、主に加わりたり。かくてバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに行き、彼に会いてアンテオケに伴いきたり、ふたりともに一年のあいだかしこの教会の集りにいでて多くの人を教う。弟子たちのキリストアンとなえらることはアンテオケより始まり。そのころエルサレムより預言者たちアンテオケに下る。そのうちのひとりアガボと言うもの立ちて、

大いなるききんの全世界にあるべきことを御霊によりて示せるが、はたしてクラウデオの時に起これり。ここに弟子たちのおのの力に應じてユダヤに住む兄弟たちに助けを送らん事をさだめ、ついにこれを行ない、バルナバおよびサウロの手に託して長老たちに贈れり。

福音書 ヨハ一五章二二―二六

イエス言いたもう、「わが戒めはこれなり、わがなんじらを愛せしごとく互いに相愛せよ。人その友のためにおのれの命を捨つる、これより大いなる愛はなし。なんじらもしわが命ずる事を行なわば、わが友なり。今よりのち我なんじらをしもべと言わず、しもべは主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、わが父に聞きしすべてのことをなんじらに知らせたればなり。なんじら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。しかしてなんじらの行きて実を結び、かつその実の残らんために、またおおよそわが名によりて父に求むるものを、父の賜わんためになんじらを立てたり」。

施洗者聖ヨハネ誕生日

六月二十四日

特 禱

全能の神よ、主はくすしき摂理をもつて、そのしもべ施洗者ヨハネを生まれしめ、これをつかわして悔い改めの教えを宣べ、キリストの道を備えしめたまえり。願わくは我らその教えに従いて、真実に悔い改め、その行ないにならいて常に真理を語り、はばからずして惡を責め、道のために苦しみを忍ぶことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 イザ四〇章一―一

なんじらの神言いたもう、「慰めよ、わが民を慰めよ。ねんごろにエルサレムに語りて呼ばわれ、なんじのいくさの時はずでに終わり、なんじの不義はずでに赦され、なんじのもろもろの罪は主の御手より倍したる報いを受けたり」。呼ばわる者の声あり、いわく「荒れ野にて主の道をそなえ、さばくにて我らの神のために大路を直くせよ。すべての谷は高く、すべての山と岡とは低くせられ、曲がりたるは直く、けわしきは平か



にせらるべし。かくて主の榮光あらわれ、人みなともにこれを見ん。主の口これを語りたまえるなり」。声あり、いわく、「呼ばわれ」。我いう、「なにと呼ばれるべきか、人はみな草なり、その榮華はすべて野の草の花のごとし、草は枯れ、花はしぼむ。主の息その上を吹けばなり。げに民は草なり」。草は枯れ、花はしぼむ、されど我らの神の言葉はとこしえに立たん。ああ良きおとずれをシオンに告ぐる者よ、高き山にのばれ、良きおとずれをエルサレムに告ぐる者よ、力をつくして声をあげよ、声をあげて恐るな。ユダの町々に告げて、「なんじらの神を見よ」と言え。見よ、神なる主ますらをのごとくきたり、そのかいなにて統べ治めたまわん。報いはその御手にあり、価はその御前にあり。主は牧者のごとくその群れを養い、かいなにて小羊をいだき、これをそのふところに入れて携え、乳をふくまする者をやわらかに導きたまわん。

福音書 ルカ 一章五七—八〇

さてエリサベツ産むときみちて、男子を産みたれば、そのもよりのもの親族の者ども主のたいなるあわれみをエリサベツにたれたまいしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。八日目になりて、その子に割礼を行なわんとて人々きたり、父の名にちなみてザカリ

ヤと名付けんとせしに、母は答えて言う、「いな、ヨハネと名づくべし」。彼ら言う、「なんじの親族のうちにはこの名をつけたる者なし」。しかして父にこうべにて示し、いかに名づけんと思うか、問いたるに、ザカリヤ書き板を求めて、「その名はヨハネなり」と書きしかば、みな怪しむ。ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物言いて神をほめたり。もよりに住む者みな恐れをいだき、またすべてこれらの事あまねくユダヤの山里に言いはやされたれば、聞く者みなこれを心にとめて言う、「この子はいかなる者にか成らん」。主の手かれとともにありしなり。かくて父ザカリヤ聖霊にて満たされ預言して言う、「ほむべきかな、主イスラエルの神、その民を顧みて贖いをなし、我らのために救いの角を、そのしもべダビデの家に立てたまえり。これぞいにしえより聖預言者の口をもて言いたまいしごとく、我らをあだより、すべて我らを憎む者の手より、取りいだしたもう救いなる。我らの先祖にあわれみをたれ、その聖なる契約をおぼし、我らの先祖アブラハムに立てたましい御誓いを忘れずして、我らをあだの手より救い、生涯、主の御前に、聖と義とをもて恐れなく仕えしめたもうなり。幼な子よ。なんじはいと高き者の預言者となえられん。これ主の御前に先立ち

行きてその道を備え、主の民に罪の赦しによる救いを知らしむればなり。これ我らの神の深きあわれみによるなり。このあわれみによりて、あしたの光、上より臨み、暗きと死の陰とに座する者を照らし、我らの足を平和の道に導かん。かくて幼な子はややに成長し、その靈強くなり、イスラエルに現わるる日まで荒れ野にいたり。

# 使徒聖ペテロ・聖パウロ日

六月二十九日

## 特待

全能の神よ、主は御子イエス・キリストにより、使徒聖ペテロにもろもろの良き賜物を授け、主の群れを飼うことを命じたまえり。願わくは、すべての牧者は忠実に御言葉を宣べ、信徒はその教えに従い、ともに限りなき栄光の冠を受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

神よ、主は使徒聖パウロの伝道によりて多くの異邦人を公会につらねたまえり。願わくは我らこの信徒を敬いて殉教を記念する者も、その良き模範にならいて、熱心に御

名を宣べ伝うることを得させたまえ。主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書 使 一 二章 一—一

その頃ヘロデ王、教会のうちの有人どもを苦しめんとして手を下し、剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。この事ユダヤびとの心にかないたるを見て、またペテロをも捕う、ころは除酵祭の時なりき。すでに取りて獄舎に入れ、過越のちに民の前に引きいださんと心構えにて四人一組なる四組の兵卒に渡してこれを守らせたり。かくてペテロは獄舎のなかに捕われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。ヘロデこれを引きいださんとするその前の夜、ペテロは二つの鎖にてつながれ、ふたりの兵卒のあいだに眠り、番兵らは門口において獄舎を守りたるに、見よ、主の使いペテロのかたわらに立ちて、光室内にかがやく。御使い彼のわきをたたき、さまして言う、「とく起きよ」。かくて鎖その手より落ちたり。御使い言う、「帯をしめ、くつをはけ」。彼そのごとくしたれば、また言う、「上着をまといて我に従え」。ペテロいでて従いしが、御使いのする事のまことなるを知らず幻を見るならんと思う。かくて第

一、第二の固めを過ぎて町に入るところの鉄の門に至れば、門おのずから彼らのために開け、相ともにいでて一つの通りを過ぎしとき、ただちに御使い離れたり。ペテロ我にかえりて言う、「われ今まことに知る、主その使いをつかわしてヘロデの手、およびユダヤの民のすべて思い設けし事より、我を救いだしたまいしを」。

福音書 マタ一六章一三一—一九

イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問いて言いたもう、「人々は人の子をたれと言うか」。彼ら言う、「ある人はバプテスマのヨハネ、ある人はエリヤ、ある人はエレミヤ、また預言者のひとり」。彼らに言いたもう、「なんじらは我をたれと言うか」。シモン・ペテロ答えて言う、「なんじはキリスト、生ける神の子なり」。イエス答えて言いたもう、「バルヨナ・シモン、なんじは幸いなり、なんじにこれを示したるは血肉にあらず、天にいますわが父なり。我はまたなんじに告ぐ、なんじはペテロなり、我この岩の上にわが教会を建てん、よみの門はこれに勝たざるべし、われ天国のかぎをなんじに与えん。おおよそなんじが地にてつなぐところは、天にてもつなぎ、地にて解くところは天にても解くなり」。

## 使徒聖ヤコブ日

七月二十五日

特 講

あわれみ深き神よ、使徒聖ヤコブが御子イエス・キリストに召されし時、その父を離れ、すべての持ち物をすてて直ちに従いしごとく、我らも世と肉の悪欲を捨て、常に喜びて主の戒めに従わしめたまはんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 使 一章二七—二章三

そのころエルサレムより預言者たちアンテオケに下る。そのうちのひとりアガボと言ふもの立ちて、大いなるききんの全世界にあるべきことを御霊によりて示せるが、はたしてクラウデオの時に起これり。ここに弟子たちのおのの力に依じてユダヤに住む兄弟たちに助けをおくらん事をさだめ、ついにこれを行ない、バルバナおよびサウロの手に託して長老たちに贈れり。そのころヘロデ王、教会のうちのある人どもを苦しめんとして手を下し、剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。この事ユダヤびとの

心にかないたるを見て、またペテロをも捕う。

福音書 マタ二〇章二〇—二八

ここにゼベダイの子らの母、その子らとともにみもとにきたり、拜してなに事か求めんとしたるに、イエス彼に言いたもう、「なにを望むか」。かれ言う、「このわがふたりの子かなんじの御国にてひとりはんじの右に、ひとりは左に座せんことを命じたまえ」。イエス答えて言いたもう、「なんじらは求むるところを知らず、わが飲まんとする杯を飲みうるか」。彼ら言う、「うるなり」。イエス言いたもう、「げになんじらはわが杯を飲むべし、されどわが右左に座することは、これ我の与うべきものならず、わが父より備えられたる人こそ与えらるるなれ」。十人の弟子これを聞き、ふたりの兄弟の事によりて憤る。イエス彼らを呼びて言いたもう、「異邦人の君のその民をつかさどり、大いなる者の民の上に権をとる事はなんじらの知るところなり。なんじらのうちにてはしからず、なんじらのうちに大いなんと思ふ者は、なんじらの役者となり、かしらたらんとする者はなんじらのしもべとなるべし。かくのごとく人の子のきたれるも仕えらるるためにあらず、かえつて仕うることをなし、また多くの人

の贖いとしておのが命を与えんためなり」。

変容貌日

八月六日

特 捧

神よ、主は選ばたまひしあかし人に、御姿のくすしく変わり、御衣の白く輝けるひとりの御子を、山の上にて現わしたまえり。願わくは我らをあわれみ、この世の心づかいを離れて、栄光の王の麗わしきを仰ぎ見ることが得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 ペテ後一章一三—一八

我はなおこの幕屋におるあいだ、なんじらに思いいださせて励ますを正當なりと思ふ。そは我らの主イエス・キリストの我に示したまえるごとく、我わが幕屋を脱ぎ去ることのすみやかなるを知らばなり。我またなんじらをしてわが世を去らん後にも、常にこれらのことを思いいださせんと努むべし。我らはわれらの主イエス・キリスト



の力と、きたりたもう事とをなんじらに告ぐるに、巧みなる造り話を用いざりき、われらは親しくそのみいつを見し者なり。いとも尊き栄光のうちより声いでて、「こはわがいつくしむ子なり、我これを喜ぶ」と言いたまえるとき、主は父なる神より尊きと栄光とを受けたまえり。我らも彼とともに聖なる山にありしとき、天よりいずるこの声を聞けり。

## 福音書 マタ一七章一―八

六日ののち、イエス、ペテロ、ヤコブおよびヤコブの兄弟ヨハネをひきつれ、人を避けて高き山に登りたもう。かくて彼らの前にてその姿変わり、その顔は日のごとく輝き、そのころもは光のごとく白くなりぬ。見よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現わる。ペテロ差しいでてイエスに言う、「主よ、我らのここにおるはよし。御心ならば我ここに三つのいおりを造り、一つをなんじのため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん」。彼なお語りおるとき、見よ、光れる雲、彼らをおおう。また雲より声あり、いわく、「これはわがいつくしむ子、わが喜ぶ者なり、なんじらこれに聞け」。弟子たちこれを聞きて倒れ伏し、恐るることはなはだし。イエ

スそのもとにきたり、これにさわりて、「起きよ、恐るな」と言いたまえば、彼ら目をあげしに、イエスひとりのほかはたれも見えざりき。

## 使徒聖バルトロマイ日

八月二十四日

特 待

とこしえにいます全能の神よ、主は使徒聖バルトロマイに御言葉を信じてこれを宣べ伝うる恵みを与えたまえり。願わくは主の公会も御言葉を受け、これを愛し、これを宣べ伝うることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

使徒書 使五章二一—一六

使徒たちの手によりて多くのしるしと不思議と民のうちに行なわれたり。彼らはみな心を一つにして、ソロモンの廊にあり。ほかの者どもはあえて近づかず、民は彼らをあがめたり。信ずるものは男女ともますますおおく主につけり。ついには人々、病める者を大路にかききたり、寝台または床の上におく。これらのうちたれにもせよ、ペ

テロの過ぎん時、その影になりとおおわれんとてなり。またエルサレムのまわりの町より多くの人々、病める者・汚れし靈に悩まされたる者を携えきたりてつどいたりしが、皆いやされたり。

福音書 ルカ 二二章二四—三〇

弟子たちの間におのれらのうちたれか、大いならんとの争いおこりたれば、イエス言いたもう、「異邦人の王は、その民をつかさどり、また民を支配する者は、恩人となえらる。されどなんじらはしかあらざれ、なんじらのうち大いなる者は、若き者のごとく、かしらたる者は仕うる者のごとくなれ。食事の席に着く者と仕うる者とは、いずれか大いなる。食事の席に着く者ならずや。されど我はなんじらのうちにて仕うる者のごとし。なんじらはわが試みのうちに絶えず我とともにおりし者なれば、わが父の我に任じたまえるごとく、我もまたなんじらに国を任ず。これなんじらのわが国にてわが食卓に飲み食いし、かつ位に座してイスラエルの十二のやからをさばかんためなり」。

## 福音記者 使徒聖マタイ日

九月二十一日

特 奏

全能の神よ、主は御子をもつて、みつぎとりマタイを召して使徒となし、福音記者となしたまえり。願わくは我らをして世のたからをむさぼる心を捨てて、御子に従わしめたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエスⅡ  
キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 コリ後四章一―六

このゆえに我らあわれみをこうむりてこの務めを受けたれば、氣落ちせず、恥ずべき隠れたる事をすて、惡だくみに歩まず、神の言葉をみださず、まことを現わして神の前におのれをすべての人の良心にすすむるなり。もし我らの福音おおわれおらば、滅ぶる者におおわれおるなり。この世の神はこれらの不信者の心をくらまして神のかたちなるキリストの栄光の福音の光を照らさざらしめたり。我らはおのれの事を宣べず、ただキリストⅡイエスの主たる事と、我らがイエスのためになんじらのしもべた

る事とを宣ぶ。光、やみより照りいでよとのたまひし神は、イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために我らの心を照らしたまえるなり。

福音書 マタ九章九—一三

イエスここより進みて、マタイという人の收税所に座しおるを見て、「我に従え」と言いたまえば、立ちて従えり。家にて食事の席につきいたもうとき、見よ、多くの取税人、罪びとらきたりて、イエスおよび弟子たちとともにつらなる。パリサイびとこれを見て弟子たちに言う、「なにゆえなんじらの師は、取税人、罪びとらとともに食するか」。これを聞きて言いたもう、「健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。なんじら行きて學べ、『我あわれみを好みて、いけにえを好まず』とは、いかなる心ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとてきたれり」。

聖ミカエル及び諸天使日

九月二十九日

特禱

限りなく生ける神よ、主はたえなる知恵をもつて天の使いと世の人との位を立て、そ

の務めを定めたまえり。願わくは天において常に主に仕うる御使いに命じて、地にある我らを守らしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 黙 二二章七一―二

天にいくさ起これり、ミカエル及びその使いたち竜と戦う。竜もその使いたちもこれと戦いしが、勝つことあたわず、天には、はやそのおる所なかりき。かの大いなる竜、すなわち悪魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる全世界を惑わす古きへびは落とされ、地に落とされ、その使いたちもともに落とされたり。我また天に大いなる声ありて、「我らの神の救いと力と国と神のキリストの權威とは、今すでにきたれり。我らの兄弟を訴え、夜昼われらの神の前に訴ふるもの落とされたり。しかして兄弟たちは小羊の血とおのがあかしの言葉とによりて勝ち、死に至るまでおのが命を惜まざりき。このゆえに天および天に住める者よ、喜べ、地と海とは災いなるかな、悪魔おのが時のしばしなるを知り、大いなる憤りをいだきてなんじらのもとに下りたればなり」と言うを聞けり。

福音書 マタ 一八章一一〇

そのとき弟子たち、イエスにきたりて言う、「しからは天国にて大いなるはたれか」。イエス幼な子と呼び、彼らのなかにおきて言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、もしなんじら翻えりて幼な子のごとくならずば、天国に入るを得じ。さればたれにてもこの幼な子のごとくおのれを低うする者は、これ天国にて大いなる者なり。またわが名のために、かくのごときひとりの幼な子を受くる者は、我を受くるなり。されど我を信ずるこの小き者のひとりをつまずかする者はむしろ大いなるひきうすを首に掛けられ、海の深みに沈められんかた益なり。この世はつまずきあるによりて災いなるかな。つまずきはかならずきたらん、されどつまずきをきたらする人は災いなるかな。もしなんじの手、または足、なんじをつまずかせば、切り捨てよ。かたわまたは足なえにて命に入るは、両手、両足ありてとこしえの火に投げ入れらるるよりもまさるなり。もしなんじの目、なんじをつまずかせば抜きて捨てよ。片目にて命に入るは、両目ありて火のゲヘナに投げ入れらるるよりもまさるなり。なんじら慎みてこの小き者のひとりをも侮るな、我なんじらに告ぐ、彼らの御使いたちは天にありて、天にいますわが父の御顔を常に見るなり。

福音記者 聖ルカ

十月十八日

特 禱

全能の神よ、主は福音によりて養れを得たる医者ルカを召して福音記者となし、魂の医者となしたまえり。願わくは、その教えの薬をもって我らの魂の病をいやしたまわんことを、御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 テモ 後四章五——五

なんじはなにごにも慎み苦しみを忍び、伝道者のわざをなし、なんじの務めを全うせよ。我は今、供え物として血をそそがんとす、わが去るべき時は近づけり。われ良き戦いを戦い、走るべき道のりを果たし、信仰を守れり。今よりのち義の冠わがために備われり。かの日に至りて正しきさばきぬしなる主、これを我に賜わん、ただに我のみならず、すべてその現われを慕う者にも賜うべし。なんじつとめてすみやかに我にきたれ。デマスはこの世を愛し、我を捨ててテサロニケに行き、クレスケンスはガラテヤにテトスはダルマテヤに行きて、ただルカのみ我とともにおりなり。なんじマ



ルコを連れてともにきたれ、かれは務めのために我に益あればなり。我テキコをエペソにつかわせり。なんじきたる時わがトロアスにてカルポのもとに残しおきたる上着を携えきたれ、また書物、ことに羊皮紙のものを携えきたれ、金細工人アレキサンデル大いに我を悩ませり。主はその行ないに従いて彼に報いたもうべし。なんじもまた彼に心せよ、彼ははなはだしく我らの言葉に逆いたり。

福音書 ルカ一〇章一七

この事ののち、主ほかに七十人をあげて、みずから行かんとする町々ところどころへ、おのれに先きだち、ふたりずつをつかわさんとして言いたもう、「刈り入れは多く、働きびとは少なし。このゆえに刈り入れの主に働きびとをその刈り入れ場につかわしたまわんことを求めよ。行け、見よ、我なんじらをつかわすは、小羊をおおかみのなかに入るがごとし。さいふも袋もくつも携うな。また道にてたれにもあいさつすな。いずれの家に入るとも、まづ平安この家にあれと言え。もし平安の子、そこにおらば、なんじらの祝する平安はその上にとどまらん。もししからずば、その平安はなんじらに帰らん。その家にとどまりて、与うる物を食ひ飲みせよ。働きびとのその

価を得るはふさわしきなり」。

## 使徒聖シモン・聖ユダ日

十月二十八日

特 禱

全能の神よ、主は使徒と預言者の基の上に公会を建て、イエス・キリストを隅の親石となしたまえり。願わくは彼らの教えによりて我ら心をついにし、御心にかのう清き宮となることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

使徒書 ユダ 一—八

アーメン

イエス・キリストのしもべにしてヤコブの兄弟なるユダ、ふみを召されたる者、すなわち父なる神に愛せられ、イエス・キリストのために守らるる者に送る。願わくは、あわれみと平安と愛と、なんじらに増さんことを。愛する者よ、われ我らがともにあずかる救いにつき、励みてなんじらに書き送らんとせしが、聖徒のひとたび伝えられたる信仰のために戦わんことを勧むる書を、なんじらに贈るを必要と思えり。そは敬

けんならずして我らの神の恵みを好色に変え、唯一の主なる我らの主イエス・キリストをいなむ者どももぐり入りたればなり。彼らがこのさばきを受くべきことは昔よりあらかじめしるされたり。なんじらは、もとよりすべての事を知れど、我さらになんじらをして思いいださしめんとする事あり、すなわち主エジプトの地より民を救いだして、のちに信ぜぬ者をほろぼしたまえり。またおのが位を保たずしておのが居所を離れたる御使いを、大いなる日のさばきまで暗やみのうちに、とことわのなわ目をもて看守したまえり。ソドム、ゴモラおよびその回りの町々もまたこれと同じく、淫行にふけり、背倫の肉欲に走り、とこしえの火の刑罰をうけてかがみとせられたり。かくのごとく、かの夢みる者どもも肉を汚し、権威ある者を軽んじ、とうとき者をのしる。

福音書 ヨハ一五章一七―二七

イエス弟子たちに言いたもう、「これらの事を命ずるは、なんじらの互いに相愛せんためなり。世もしなんじらを憎まば、なんじらよりさきに我を憎みたることを知れ。なんじらもし世のものならば、世はおのがものを愛するならん。なんじらは世のもの

ならず、我<sup>われ</sup>なんじらを世<sup>よ</sup>より選<sup>えら</sup>びたり。このゆえに世<sup>よ</sup>はなんじらを憎<sup>にく</sup>む。わがなんじらに、『しもべはその主人<sup>しゅじん</sup>より大<sup>おお</sup>いならず』と告<sup>つ</sup>げし言葉<sup>ことば</sup>をおぼえよ。人<sup>ひと</sup>もし我<sup>われ</sup>を責<sup>せ</sup>めしならば、なんじらをも責<sup>せ</sup>め、わが言葉<sup>ことば</sup>を守<sup>まも</sup>りしならば、なんじらの言葉<sup>ことば</sup>をも守<sup>まも</sup>らん。すべてこれらのことをわが名<sup>な</sup>のゆえになんじらになさん、それは我<sup>われ</sup>をつかわしたまいし者<sup>もの</sup>を知らぬによる。我<sup>われ</sup>きたりて語<sup>かた</sup>らざりしならば、彼<sup>かれ</sup>ら罪<sup>つみ</sup>なかりしならん。されど今<sup>いま</sup>はその罪<sup>つみ</sup>言<sup>い</sup>いのがるべきようなし。我<sup>われ</sup>を憎<sup>にく</sup>むものはわが父<sup>ちち</sup>をも憎<sup>にく</sup>むなり。我<sup>われ</sup>もし、たれもいまだ行<sup>おこ</sup>なわぬ事<sup>こと</sup>を彼<sup>かれ</sup>らのうちに行<sup>おこ</sup>なわざりしならば、彼<sup>かれ</sup>ら罪<sup>つみ</sup>なかりしならん。されど今<sup>いま</sup>ははや我<sup>われ</sup>をもわが父<sup>ちち</sup>をも見<sup>み</sup>たり、また憎<sup>にく</sup>みたり。これは彼<sup>かれ</sup>らの律法<sup>おきて</sup>に、『人々<sup>ひとびと</sup>ゆえなくして、我<sup>われ</sup>を憎<sup>にく</sup>めり』としるしたる言葉<sup>ことば</sup>の成就<sup>じゅうじゆ</sup>せんためなり。父<sup>ちち</sup>のもとよりわがつかわさんとする助<sup>たす</sup>け主<sup>ぬし</sup>、すなわち父<sup>ちち</sup>よりいずる真理<sup>しんり</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>のきたらんとし、我<sup>われ</sup>につきてあかしせん。なんじらもまた初<sup>はじ</sup>めより我<sup>われ</sup>とともにありたればあかしするなり』。

諸<sup>しよ</sup> 聖<sup>せい</sup> 徒<sup>と</sup> 日<sup>び</sup>

十一月一日

特 禱

全能の神よ、主は選えらびたまひし者を結むすび合あわせ、御子みこ・われらの主キリストのからだなる公会こうかいにつらね、その交まじわりにあずからしめたまへり。願ねがわくは我われらに恵めぐみを与あたえ、主の聖徒せいとの模範もはんに従したがいて、常に清きよきことを行なない、ついに主を愛あいする者のために備たえたまいし大いなる喜よろこびにあずかることを得えさせたまへ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉たもつ。アーメン

使 徒 書 黙 七 章 二—一二

我われまたほかのひとりの御使みつかいの、生いける神の印いんを持もちて日のいずるかたより登のぼるを見みたり、かれ地ちと海うみとをそここの権けんを与あたへられたる四人の御使みつかいに向むかひ、大おお声こゑに呼よばわりて言う、「われらが我われらの神かみのしもべの額ひたいに印いんするまでは地ちをも海うみをもそここのうな」。われ印いんせられたる者の数かずを聞ききしに、イスラエルの子こらのもろもろのやからのうちにて印いんせられたるもの合あわせて十四万四千あり。ユダのやからのうちにて一万二千印いんせられ、ルベンのやからのうちにて一万二千、ガドのやからのうちにて一万二千、アセルのやからのうちにて一万二千、ナフタリのやからのうちにて一万二千、マナセ

のやからのうちにて一万二千、シメオンのやからのうちにて一万二千、レビのやからのうちにて一万二千、イサカルのやからのうちにて一万二千、ゼブルンのやからのうちにて一万二千、ヨセフのやからのうちにて一万二千、ベニヤミンのやからのうちにて一万二千印せられたり。この後われ見しに、見よ、もろもろの国・やから・民・国言葉のうちより、たれも数え尽くすことあたわぬ大いなる群衆、白き衣をまといて手にしゆるの葉をもち御位と小羊との前に立ち、大声に呼ばわりて言う「救いは御位に座したもう我らの神と小羊とにこそあれ」。御使いみな御位および長老たちと四つの生き物との回りに立ちて御位の前にひれ伏し神を拝して言う、「アーメン、賛美・栄光・知恵・感謝・尊き・力・勢い、世々限りなく我らの神にあれ、アーメン」。

福音書 マタ 五章 一—二

イエス群衆を見て、山に登り、座したまえば、弟子たちみもとにきたる。イエス口を開き、教えて言いたもう、「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。幸いなるかな、悲しむ者。その人は慰められん。幸いなるかな、柔和なる者。その人は地を継がん。幸いなるかな、義に飢えかわく者。その人は飽くことを得ん。幸いな

るかな、あわれみある者。その人はあわれみを得ん。幸いなるかな、心の清き者。その人は神を見ん。幸いなるかな、平和ならしむる者。その人は神の子となえられん。幸いなるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。わがために人、なんじらを罵り、また責め、偽わりてさまたさまの悪しきことを言うときは、なんじら幸いなり。喜び喜べ、天にてなんじらの報いは大いなり。なんじらより先にありし預言者たちをも、かく責めたりき」。

聖<sup>せい</sup>

洗<sup>せん</sup>

式<sup>しき</sup>

聖洗式はなるべく主日またはその他の祝日の公禱のときに行なう。

幼な子は出生の後なるべく早く早く聖堂につれて来て、洗礼を受けさせなければならぬ。幼な子の洗礼には、おのおの教父母三人を立てる。男の子には教父二人、教母一人、女の子には教父一人、教母二人とする。壮年が洗礼を受けるときは、司祭は本人がキリスト教の要理を充分理解したかどうかを試問し、またこれに祈りと断食をもって、この聖餐を受けることを勧める。壮年の洗礼には少なくとも二人の教父母を立てる。

聖洗盤には清水を満たす。

司祭は次のように言う。洗礼を受ける者が幼な子である時は、「**〔**」内の語を用い、壮年であるときは、「**〔**」内の語を省く。両者がともに洗礼を受けるときは、その間に、必要に応じて「及び」を入れて用いる。

この人<sup>ひと</sup>〔幼<sup>お</sup>な子<sup>こ</sup>〕はすでに<sup>ハズデス</sup>洗礼<sup>せんれい</sup>を受けしや否<sup>いな</sup>や

まだ受けていないときは、教父母は「いまだ受けず」とこたえ、明らかでないときは「明らかならず」と言う。

次に司祭は言う。

聖  
洗  
式



勸 告

愛する兄弟よ、我らの救い主キリストの教えたまいしごとく、人は水と霊とによりて、新たに生まれざれば神の国に入るにことあたわず。ゆえになんじら父なる神に祈り、この人々をあわれみ、その生まれつかぬものを与え、水と聖霊との洗礼を授け、キリストの聖公会に入れ、その生きたる肢となしたまわんことを、ひたすら願うべし

特 禱

ここで司祭は次の祈りをする。

とこしえにいます全能の神よ、大いなるあわれみによりて、このしもべを願ひ、聖霊をもつてこれを洗い、これを清め、これをして主の怒りをまぬかれ、キリストの公会なる箱舟に入らしめたまえ。願わくは信仰を堅くし、望みをいだき、愛を深くして、この世の荒波を越え、ついに限りなき命の岸に至りて、世々主とともに、みくらに座することを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

聖 言

司 祭 主なんじらとともにいますことを

会衆 かいしゅう 主なんじの靈れいとともにいますことを

司祭 さいさい 聖せいマタイの福音書第二十八章十八節以下の言葉ことばをきくべし

会衆 かいしゅう 主に榮光えいこうあらんことを

イエス進すすみきたり彼らに語りて言いいたもう、「我われは天てんにても地ちにても、すべての權けんを  
与あたえられたり。さればなんじら行ゆきて、もろもろの国くにびとを弟子でしとなし、父ちちと子こと聖せい  
靈れいの名なによりてバプテスマを施ほそし、わがなんじらに命めいぜしすべての事ことを守まもるべきを教おし  
えよ。見みよ、我われは世よの終おわりまで常つねになんじらとともにあるなり」。

会衆 かいしゅう 主しゅに感謝かんしゃし奉たてまつる

感謝かん 謝しゃ

次に一同左の感謝を唱える。

天てんの父ちち・全能ぜんのうの神かみよ、我われらを召めして主しゅの恵めぐみを知る知ち識しきをさづけ、主しゅを信しんずる信しん仰うを  
与あたえたまえることを慎つつしみて感謝かんしゃし奉たてまつる。願ねがわくはこの知ち識しきをますます加くわえ、この信しん仰う  
をいよいよ堅かたくしたまえ。また願ねがわくはこの人々ひとびとに聖せい靈れいを与あたえて、新あらたに生うまれ限かぎり  
なき救すくいの世よ継つぎとなることを得えさせたまえ。父ちちと聖せい靈れいとともに世々よよ統すべ治おさめたもう

主イエス・キリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

誓 約

次に司祭は洗礼を受ける者に言う。洗礼を受ける者が幼な子ときは教父母に言う。

洗礼を受けんとて、ここにきたれる兄弟「洗礼を受けさせんとて、この幼な子連れきたれる兄弟」よ、いま聞きしごとく、会衆はなんじら「幼な子」のために祈りをささげ、主イエス・キリストなんじら「幼な子」を受け、なんじら「幼な子」の罪をゆるし、天の国と限りなき命を与えたまわんことを願えり。キリストは福音のうちに、この願いを許すことを約したまえり。ゆえになんじらも「教父母なるなんじらも幼な子の成長して自らこれを約束しうるまでかわりて」約束せざるべからず。されば我なんじらに問わん

ここで司祭は次のように問い、洗礼を受ける者はおの答える。幼な子ときは教父母がかわって答える。

問

なんじ悪魔とそのわざを捨て、この世の虚栄・貧欲を離れ、肉の悪欲を去り、これらのものに惑わざることを努むるか

答

問

我ことごとくこれを捨て、神の助けによりて惑わざることを努む

なんじ天地の造り主・全能の父なる神を信ずるか

なんじ又、そのひとり子・我らの主イエス・キリストを信ずるか。主は聖霊

によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのとき苦し

を受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死に

者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん。なんじこれを信

ずるか。なんじ又、聖霊を信ずるか。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、

からだのよみがえり、限りなき命を信ずるか

我すべてこれを堅く信ず

なんじこの信仰をもつて洗礼を受けることを願うか

我これを願う

されば、なんじ生涯、神の御心に従い、その戒めを守ることを努むるか

われ神の助けによりてこれを努む

答

問

答

問

答

聖 洗 式

水 の 聖 別

次に司祭は聖洗盤の水を聖別する。

司祭

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの靈とともにいますことを

司祭

なんじら心を挙げよ

会衆

我ら心を主に挙げん

司祭

主なる神に感謝し奉るべし

会衆

それは正當にしてなすべきことなり

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正當にしてなすべき務めなり。ことに主の愛子イエス・キリストは我らの罪を赦さんがために、尊き御わきより水と血とを流し、又その弟子に命じ、なんじら行きて万国の民を弟子となし、父と子と聖靈の名によりてバプテスマを施せと仰せたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの会衆の祈りを聞こし召し、聖靈によりてこの水を聖別して罪を洗うしとなし、この水にて洗礼を受くる者に主の恵みを豊かにくだし、常に

主の子供のうちにおらしめたまえ。御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。  
願わくは御子と聖霊とともに栄光世々限りなく全能の父にあらんことを。アーメン

祈  
禱

あわれみ深き神よ、願わくはこの人々の古きアダムを葬り、新しき人をよみがえらせ  
たまえ。アーメン

願わくは肉の悪欲は死に、霊に属するものは生きて、ますます盛んならしめたまえ。

アーメン

願わくは悪魔と世と肉に勝つ力を与えたまえ。アーメン

世々統べ治めたもう神・あわれみ深き主よ、願わくはわが務めによりて主にささぐる  
ものを受け、天のもろもろの徳をあたえ、限りなき幸いをもつて報いたまえ。

アーメン

授  
洗

次に司祭は洗礼を受ける者を聖洗盤に近づかせ、教父母に言う。

この人（幼な子）に名をつけよ

教父母の一人、名を告げる。次に司祭は本人を水に入れるか、または頭に水を注ぎながら、その名を呼んで、左のように言う。  
次の二つの「アーメン」は司式者だけが言う。

——（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに洗礼を施す アーメン

司祭はまた言う。

我この人（幼な子）をキリストの群れに受け、その額に十字架の形をしるす（ここで額に十字架の形をしるす）このしるしは、キリストの十字架を恥とせず、生涯キリストのしもべとなり、また忠義なる兵卒となり、その旗もとにありて、勇ましく罪と世と悪魔とに向かい戦うことを表わすものなり アーメン

感 謝

司祭は言う。

兄弟よ、この人々「幼な子」はすでに新たに生まれ、キリストの公会に継がれたり。ゆえに全能の神にこの恵みを謝し、また心を合わせてこの人々「幼な子」のために祈

り、生涯しやがいにち今日のごとく過すごさせたまわんことを願ねがうべし

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救い出したまえ。国も力も榮えも世々に父のものなればなり アーメン

司祭は言う。

いとあわれみ深き父よ、聖靈によりてこの人々「幼な子」を新たに生まれしめ、これの子となし、聖公会の肢とならしめたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの人々「幼な子」罪に死に、義に生き、キリストの死と葬りにあずかり、古き人を十字架につけて、ことごとく罪を滅ぼすことを得させたまえ。また御子の死にあずかるごとく、そのよみがえりにもあずからしめ、ついに聖公会の人々とともに、限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン



聖 洗 式

勸 告

四一〇

受洗者が幼な子であるときは、司祭は次の勧めをする。

教父母に告ぐ

なんじらこの幼な子にかわりて、悪魔とそのわざを捨て、神を信じ、神に仕うることを約束せり。ゆえに幼な子の道理をわきもうる年ごろに至らば、このおごそかなる約束をこれに教うるは、なんじらの義務なり。されば幼な子に聖書の教えをきかせ、これに使徒信經・主の祈り・十戒を学ばせ、その他、魂を養うに必要なものを教え、良くこれを育て、キリストの道にかのう正しき行ないを習わすべし。そもそも洗礼は救い主キリストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリスト我らのために死にて、よみがえりたまひしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によみがえり、常に悪欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

司祭はまた言う。

この幼な子、使徒信經・主の祈り・十戒をおぼえ、また公会問答を學びたるうえ、主に教に願いて堅信式を受けしむべし

受洗者が壮年であるときは、司祭は次の勧めをする。

いま洗礼によりてキリストを着たる兄弟に勧む

なんじらはキリストを信ずるによりて、神の子また光の子となりたれば、慎みてその信仰するところにそむかず、常に光の子のごとく歩むべし。そもそも洗礼は救い主キリストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリスト我らのために死にて、よみがえりたまひしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によりて、常に悪欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

洗礼を受けた壮年は、速からず主教から堅信式を受けて聖餐にあずかなければならない。

### 条件洗礼式語

洗礼を受けたことの明きらかでない者に聖洗式を行なうときは、授洗の式語として次の語を用いる。「アーメン」は司式者だけが言う。

なんじ、もし洗礼を受けざりしならば、——（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに洗礼を施す アーメン

緊急洗禮

やむをえない時は、聖洗式を私宅または病室で行なう。

緊急の場合には司祭は臨席者とともに主の祈りを唱え、洗禮を受ける者の頭に水を注ぎながら次のように言う。司祭に支障のあるときは他の聖職またはだれでもこれを行なうてよい。

「アーメン」は司式者だけが言う。

——(教名) 父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに洗禮を施す アーメン

次に左の感謝をささげる。

いとあわれみ深き父よ、聖霊によりてこの人(幼な子)を新たに生まれしめ、これを子となし、聖公会の肢とならしめたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの人(幼な子)罪に死に、義に生き、キリストの死と葬りにあずかり、古き人を十字架につけて、ことごとく罪を滅ぼすことを得させたまえ。また御子の死にあずかるごとく、そのよみがえりにもあずからしめ、ついに聖公会の人々とともに限りなき御国を継がしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

この受洗者が緊急状態を脱した場合、本人を聖堂に連れて来て次の式を行なう。その時には教父母を要する。その教会の司祭が自ら洗礼を行なったときは、次のように言つて聖言に移る。

我、——（年月日・場所）において、証人の前にて聖公会の式に従い、この人（幼な子）に洗礼を施せり

もし司祭が自らその式を行なわなかつたときは、正当にこれを行なったか否かを尋ねる。司祭はまず次のように問う。

この人（幼な子）はたれに洗礼を受けしか

答

この人（幼な子）の名は何と言うか

答

その時の証人はたれなりしか

答

この人（幼な子）は、水にて洗礼を施されしか

水で洗礼を施されたときは次のように言う。

答 こたへ しかり

この人 ひと (幼 おさ な子 こ) は、父 ちち と子 こ と聖 せい 霊 れい の御 み 名 な によりて洗 せん 礼 れい を施 ほ されしか

この語を用いて洗礼を施されたときは次のように言う。

答 しかり

正当に洗礼を受けたことが明らかならば、司祭は次のように言う。明らかでないときは条件洗礼を施す。

我 われ いま会 かい 衆 しゆ に告 つ ぐ、――はすでに正 せい 当 とう に洗 せん 礼 れい を受 う けたりと認 みと む

聖 せい 言 げん

司 し 祭 さい 主 しゆ なんじらとともにいますことを

会 かい 衆 しゆ 主 しゆ なんじの霊 れい とともにいますことを

司 し 祭 さい 聖 せい マタイの福 ふく 音 いん 書 しよ 第 だい 二 に 十 じゅう 八 はち 章 しょう 十 じゅう 八 はち 節 せつ 以 い 下 か の言 こと 葉 は をきくべし

会 かい 衆 しゆ 主 しゆ に栄 えい 光 こう あらんことを

イエス進 すす みきたり彼 かれ らに語 かた りて言 い いたもう、「我 われ は天 てん にても地 ち にても、すべての権 けん を与 あた へられたり。さればなんじら行 ゆ きて、もろもろの国 くに びとを弟 でし 子 こ となし、父 ちち と子 こ と聖 せい 霊 れい を

霊の名によりてバプテスマを施し、わがなんじらに命ぜしすべての事を守るべきを教えよ。見よ、我は世の終わりまで常になんじらとともにあるなり」。

会衆 主に感謝し奉る

### 誓約

次に司祭は洗礼を受けた者、または教父母に言う。

なんじ神とこの会衆の前にて（幼な子にかわりて）約束すべし

問 なんじ悪魔とそのわざを捨て、この世の虚栄・貧欲を離れ、肉の悪欲を去り、

これらのものに惑わざること努むるか

答 我ことごとくこれを捨て、神の助けによりて惑わざること努む

問 なんじ天地の造り主・全能の父なる神を信ずるか

答 なんじ又、そのひとり子・我らの主イエス・キリストを信ずるか。主は聖霊

によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこよりきたりて生ける人と死ぬる人をさばきたまわん。なんじこれを信するか。なんじ又、聖霊を信するか。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信するか

答 我すべてこれを堅く信ず

問 されば、なんじ生涯、神の御心に従い、その戒めを守ることを努むるか

答 われ神の助けによりてこれを努む

次に司祭は言う。「アーメン」は司祭だけが言う。

我この人（幼な子）をキリストの群れに受け、その額に十字架の形をしるす（ここで額に十字架の形をしるす）、このしるしは、キリストの十字架を恥とせず、生涯キリストのしもべとなり、また忠義なる兵卒となり、その旗もとにありて、勇ましく罪と世と悪魔とに向かい戦うことを表わすものなり アーメン

司祭は次の感謝を唱える。

いとあわれみ深き父よ、聖霊によりてこの人（幼な子）を新たに生まれしめ、これを子となし、聖公会の肢とならしめたまいしことを感謝し奉る。願わくはこの人（幼な

子こ）罪つみに死しに、義ぎに生いき、キリストの死しと葬まじりにあずかり、古ふるき人ひとを十じ字じ架かにつけて、ことごとく罪つみを滅ほろぼすことを得えさせたまえ。また御み子の死しにあずかるごとく、そのよみがえりにもあずからしめ、ついに聖せい公こう会かいの人々ひとびととともに、限かぎりなき御み国くにを継つがしめたまえ。主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉こぞまうる。アーメン

受洗者が幼な子であるときは、司祭は次の勧めをする。

教父母に告ぐ

なんじらこの幼おとな子こにかわりて、惡魔あくまとそのわざを捨て、神かみを信じ、神かみに仕つかうることを約束やくそくせり。ゆえに幼おとな子この道理どうりをわきもうる年としごろに至いたらば、このおごそかなる約束やくそくをこれに教おしうるは、なんじらの義務ぎむなり。されば幼おとな子こに聖書せいしょの教おしえをきかせ、ことに使徒信經しとしんきやう・主しゅの祈いのり・十戒じふかいを学まなばせ、その他た、魂たましいを養やしなうに必要なるものを教おしえ、よくこれを育て、キリストの道みちにかのう正ただしき行おこないを習ならわすべし。そもそも洗せん礼れいは救すくい主しゅキリストの模範もはんに従したがい、これに似にるべきことを示しめすものなり。さればキリスト我われらのために死しにて、よみがえりたまひしごとく、洗せん礼れいを受うけたる者ものも罪つみに死しに、義ぎによみがえり、常つねに惡欲あくよくを滅ほろぼし、日々ひびますます徳とくに進すすみ、神かみに忠誠ちゅうせいを尽つくくすべし



司祭はまた言う。

この幼な子、使徒信經・主の祈り・十戒をおぼえ、また公会問答を學びたるうえ、主  
教に願いて堅信式を受けしむべし

受洗者が壮年であるときは、司祭は次の勸めをする。

なんじはキリストを信ずるによりて、神の子また光の子となりたれば、懷みてその信  
仰するところにそむかず、常に光の子のごとく歩むべし。そもそも洗礼は救い主キリ  
ストの模範に従い、これに似るべきことを示すものなり。さればキリスト我らのため  
に死にて、よみがえりたまひしごとく、洗礼を受けたる者も罪に死に、義によりがえ  
り、常に惡欲を滅ぼし、日々ますます徳に進み、神に忠誠を尽くすべし

# 公<sup>こう</sup>会<sup>かい</sup>問<sup>もん</sup>答<sup>どう</sup>

堅信式を受ける前に学ぶ。

## 一問<sup>もん</sup>

あなたの教名<sup>きょうめい</sup>は何<sup>なん</sup>といいますか

答<sup>こた</sup>

——といいます

## 二問

答

だれがその名<sup>な</sup>をつけましたか  
洗礼<sup>せんれい</sup>を受けて、キリストの肢<sup>えだ</sup>・神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>・天国<sup>てんごく</sup>の世<sup>よ</sup>継<sup>つぎ</sup>ぎとされたとき、教父<sup>きょうふ</sup>

母<sup>ぼ</sup>がつけました

## 三問

答

そのとき、教父<sup>きょうふ</sup>母<sup>ぼ</sup>はあなたのために何<sup>なに</sup>をしましたか  
わたくしにかわって、三つのことを約束<sup>やくそく</sup>しました

第一<sup>だいいち</sup>は、惡魔<sup>あくま</sup>とそのわざ、この世<sup>よ</sup>の虚榮<sup>きよえい</sup>・貧欲<sup>どんよく</sup>・肉<sup>にく</sup>の惡欲<sup>あくよく</sup>を捨<sup>す</sup>てること

第二<sup>だいいち</sup>は、使徒<sup>しと</sup>信經<sup>しんきやう</sup>の信仰<sup>しんいう</sup>簡条<sup>かんじょう</sup>を信<sup>しん</sup>じること

第三<sup>だいいち</sup>は、生涯<sup>しやうがい</sup>、神<sup>かみ</sup>の御心<sup>みこころ</sup>に従<sup>したが</sup>い、その戒め<sup>いじめ</sup>を守<sup>まも</sup>ること

あなたはここの約束<sup>やくそく</sup>を守<sup>まも</sup>る責任<sup>せきにん</sup>がありますか

## 四問

公<sup>こう</sup>会<sup>かい</sup>問<sup>もん</sup>答<sup>どう</sup>

答

その責任を感じ神の助けによつてこの約束を守ります。また天の父なる神が救い主イエス・キリストによつて、わたくしをこの救いの道に召したもうたことを心から感謝し、神の恵みによつて、生涯この道を離れないように祈ります

五 問

答

使徒信經を唱えなさい

我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず

我はそのひとり子・我らの主イエス・キリストを信ず。主は聖靈によりて

やどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのとき苦しみを受

け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者

のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。

かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん

我は聖靈を信ず。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみが

えり、限りなき命を信ず アーメン

使徒信經の主意は何ですか

六 問

答

第一は わたくしと万物とを造られた父なる神を信じること  
第二は わたくしと万民とを贖われた子なる神を信じること  
第三は わたくしとすべて神に選ばれた民とをきよめられる聖霊なる神を信じること

七 問

あなたが守ることを、教父母が代わって約束した神の戒めは、いくつありますか

答

十あります

八 問

答

それは出エジプト記第二十章に示された神の言葉です

我はなんじの神・主なり。なんじをエジプトの地、その奴隷たる家より導きいだしたる者なり

第一 なんじ我のほかなにものを神とするなけれ

第二 なんじ、おのれのために、上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの形に似せて偶像を作り、これにひ

れ伏し仕うるなかれ

第三 なんじの神・主の名を、みだりに言うなかれ

第四 なんじ安息日を聖として忘るるなかれ

第五 なんじ父と母とを敬え

第六 なんじ殺すなかれ

第七 なんじ姦淫するなかれ

第八 なんじ盗むなかれ

第九 なんじ偽りの証しを立つるなかれ

第十 なんじ、むさぼるなかれ

この十戒は何を教えていますか

十戒は第一に神に対する義務、第二に隣人に対する義務を教えています

神に対する義務とは何ですか

神に対する義務とは、神を信じ、神をおそれ、心を尽くし、精神を尽くし

思いを尽くし、力を尽くして神を愛し、また礼拝・感謝・祈禱をささげ、

二 問

答

九 問

答

## 二 問

答

心から信頼し、御名と御言葉を敬い、生涯、忠実に神に仕えることです。隣人に対する義務とは何ですか。

隣人に対する義務とは、自分を愛するように人を愛し、人にしてもらいたいと思うことは、人にもしてあげ、父母を愛し、敬い、助け、権威を持つ者に従い、教師・聖職・主人・目上の人を敬い、言葉や行ないで人を害せず、人との交わりに真実をつくし、人を恨むこと、憎むこと、盗むこと、悪口を言うこと、うそを言うことをせず、節制・貞操を守り、人のものをほしがらず、職業をはげんで自活し、神の定めたもう身分に応じて、自分の義務を尽くすことです。

## 三 問

答

あなたは自分の力でこれらの事をすることはできません。神の特別な恵みを受けて、始めてこれらの戒めを守り、神に仕えることができます。それゆえいつも熱心に神の恵みを祈らねばなりません。主の祈りを唱えなさい。天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我

## 三 問

答

らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいたしたまえ アーメン

この祈りによつて、あなたは神に何を願いますか

すべての良いものを与えられる天の父なる神に祈り、わたくしとすべての人が恵みによつて、正しく神を拜み、神に仕え、神に従ふことのできるように願います。また魂とからだに必要なものを願ひ求め、神がわたくしちの罪をゆるし、魂とからだを守つて、すべての危難をふせぎ、罪と悪と悪魔を退け、限りなき死からのがれさせていただくように願います。そして神がわたくしたちを愛し、主イエス・キリストによつてこれらのことをなさると信じますから、アーメン（どうぞ、そのようにして下さい）と言います

## 四 問

答

キリストが公会のために建てられた聖餐は、いくつありますか  
救いのためにだれにも必要な聖餐はただ二つです。すなわち洗礼と聖餐

五 問

です  
聖餐とは何ですか

答

聖餐とは、わたくしたちが、目に見える外のしによつて与えられる内なる靈の恵みにあずかる方法、またその保証として、キリストが自ら定められたものです。

六 問

一つの聖餐を、いくつの部分に分けることができますか

答

目に見える外のしと、内なる靈の恵みの二つです

七 問

洗礼の、目に見える外のしは何ですか

答

水です。水で、父と子と聖靈の御名によつて洗礼を授けられます

八 問

洗礼の、内なる靈の恵みは何ですか

答

罪に死に、義に新しく生まれることです。わたくしたちはもともと罪のうちに生まれ、怒りの子でしたが、洗礼によつて恵みの子とされました。

九 問

洗礼を受ける人に必要なことは何ですか

答

悔い改めと信仰です。悔い改めて罪を捨て、信仰をもつて、神がこの聖餐



三 問

により、その人に約束やくそくされたことをかたく信しんじることです  
これらのことのできない幼おな子こに、なぜ洗せん礼れいを施ほしますか  
答こたへ 教おや父ふ母ぼが幼おな子こにかわつて、この二つのことを約束やくそくするからです。幼おな子こ

三 問

は成長せいちやうしてから、この約束やくそくを守まもらなければなりません  
主しゅは何なんのために、聖せい餐あんの聖せい奠でんを定さだめられましたか  
答こたへ キリストの死しのいけにえと、それによつて受うける恵めぐみを常つねに記念きねんさせるた

めです

三 問

聖せい餐あんの、外そとのしるしは何なんですか  
答こたへ パンとぶどう酒しゅです。主しゅはこれを受うけることを命めいじられました

三 問

このしるしの示しめすものは何なんですか  
答こたへ キリストのからだと血ちです。信しん徒とは聖せい餐あんで真しん実じつにこれを受うけます

三 問

これにあずかることによつて、わたくしたちはどんな恵めぐみを受うけますか  
答こたへ わたくしたちのからだはパンとぶどう酒しゅによつて強つよめられるように、わたくしたちの魂たましいは、キリストのからだと血ちによつて強つよめられます

## 二五 問

答

聖餐せいさんにあずかるには、どんな準備じゅんびが必要ひつようですか

自分じぶんをよく省かきみて、次のようになさることで

過去の罪つみをまことに悔くやみ、行なないを改あらめる決心けつしんをしているかどうか

キリストの死しを感謝かんしゃし、キリストによつて示しめされた神かみの愛あいを眞実しんじつに信しんじているかどうか。そしてすべての人ひとを愛あいしているかどうか

聖職は主日に少年少女を集め、聖書を引いて、ねんごろにこの問答を教え、父母、教父母はつとめて少年少女をこれに出席させなければならない。彼らが相当の年齢に達し、この問答をよく学んだのち堅信式を受けさせなければならない。

堅

信

式

(信徒按手式)

洗礼を受けて道理をわきまえることのできる年になった人に手をおく式である。

この式を受ける者は、あらかじめ公会問答を学ばなければならない。

司祭は堅信式を受けようとする者の教名、氏名、生年月日、受洗年月日、場所、司式者名をしるして主教に提出する。

堅信式を受ける者は、おのの教父母一人または他の適当な立会人一人とともに、主教の前に立つ。会衆は座につき、主教は次のように言う。

## 序言

愛する兄弟よ、公会はキリストの使徒たちの模範にならいて堅信式を行のうなり。すなわち使徒行伝第八章にかくしるされたり

ここに散らされたる者ども、経めぐりて、御言葉を宣べしが、ピリポはサマリヤの町にくだりて、キリストのことを伝う。ピリポが神の国とイエス・キリストの御名とにつきて宣べ伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。エルサレムにおける使徒たちは、サマリヤびと神の御言葉を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとをつかわしたれば、彼らくだりて人々の聖霊を受けんことを祈れり。これ主イ

エスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖靈いまだそのひとりだに下らざりしなり。ここにふたりの者かれらの上に手をおきたれば、みな聖靈を受けたり。聖書はかく按手と祈禱によりて、聖靈の特別な賜物の与えらるることを教う。かかる賜物は、ただ神によりてのみ与えらるるものなれば、すでに、洗礼によりて神の子とせられし者、いま按手によりて聖靈にて強められんことを全能の神に祈るべし。

### 再 宣 誓

主教は次のように言う。

聖洗式につづいて堅信式を行なうときはこれを省く。

わが子よ、この按手を受けんと願う者は、洗礼のおごそかなる誓いに基つきて、悪魔とそのわざを捨て、キリスト教の信仰箇条を信じ、生涯、神の御心に従い、その戒めを守る約束を堅めざるべからず。されば我なんじらに問わん。なんじ今、神とこの会衆の前にてこの約束を堅むるか。

堅信式を受ける者はおの答える。

われこの約束を堅む

こゝで一同立つ。

堅 信 (按 手)

主教

我らの助けは主の御名にあり

会衆

主は天地を造りたまえり

主教

主の御名はほむべきかな

会衆

とこしえに至るまでほめたとうべし

主教

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの靈とともにいますことを

主教

我ら祈るべし

とこしえにいます全能の神よ、主はさきに水と聖靈とをもつて、このしもべらを新たに生まれしめ、そのすべての罪をゆるしたまえり。願わくは聖靈をもつて彼らを強め、もろもろの賜物を与えたまえ。彼らに知恵と悟りの靈、深慮と力の靈、主を知り知識と主を敬う靈を授け、また主をかしこむ靈を常にみたしたまえ。アーメン

次に教父母または立会人は堅信式を受ける者を導いて主教の前にひざまずかせる。

主教はおのおのの頭に手をおいて言う。  
次の二つの「アーメン」は司式者だけが言う。

——（教名）父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに手をおく アーメン  
主よ、天の恵みをもつてこのしもべを守りたまえ。常に主に属し、日々ますます聖霊に満たされ、ついに御国に至ることを得させたまえ アーメン

主教 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

主教 我ら祈るべし

会衆はひざまずき、一同主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。国も力も栄えも世々に父のものなればなり アーメン

次に主教は言う。

御心にかのう良き志を立て、これを行なわせたもう全能の神よ、我いま使徒たちの模範に従い、このしもべらに手をおきて主の慈愛を示せり。願わくは父よ、御手をもつて彼らをおおい、聖霊をもつて常に彼らを導き、ますます御言葉を悟り、これに従い、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

祝福

主教は次の語を用いて新たに堅信式を受けた者を祝福する。

願わくは父と子と聖霊なる全能の神の恵み、なんじらの上に臨み、常になんじらとともにあらんことを。アーメン

堅信式を受けた者、またはその準備を終えて主教から特別の許可を受けた者でなければ、聖餐にあずかることはできない。

# 聖婚式

結婚しようとするものはこの式文によつて結婚の本義、神の恵みおよび夫婦の責務につき司牧者から学ばなければならない。司祭は公禱の時次の予告を二回する（一回は主日に限る）。但し教区主教の許可があるときは予告を省いてもよい。

「——と——遠からず結婚せんとす。もし故障を知る者あらば申し立つべし。これ第一回の予告なり。」結婚する者の所属教会が違ふときは、双方で同一の予告をする。結婚の当日、新郎・新婦は立会人とともに聖堂に来て定められた所に、新郎は右、新婦は左に立ち、司祭は次のように言う。

愛する兄弟よ、今われら神と会衆との前に集まりたるは、この男とこの女に夫婦の神聖なる縁を結ばしめんがためなり。そもそも結婚は人いまだ罪を犯さざる前に、神の定めたまいし尊きことにして、キリストとその教会の一体なることの型なり。キリストも自らガリラヤのカナにて婚宴につらなり、始めて奇跡を行ないてこれを祝したまい、聖書もこれを尊ぶべしとねんごろに勧めたり。ゆえに結婚はみだりに、軽々しくなすべきにあらず、神をおそれ、慎みてうやうやしくこれをなすべし。

このふたりいま神聖なる縁を結ぶためにここにきたれり。もしこの結婚について故障



ありと知る者あらば今ここにて申し立つべし。しからざれば後日に至りてさらに何事をも言うべからず

次に司祭は結婚する人に言う。

我なんじらふたりに命ず。なんじら、もしこの結婚について故障あることを知らばこれを隠さず、すべての人の心の秘密あらわるべき、さばきの日に答うるごとく、今ここにて言い表わすべし。神の言葉にそむきて結びたる縁は、神のそわせたもうにあらず、その結婚は不法なりと知るべし

もし結婚の故障を申し立て、その証拠をあげる者があれば、結婚式を延期する。故障がない時は司祭は新郎に言う。

——（教名）なんじ、この女をめとり、神の定めに従いて夫婦の神聖なる縁を結ぶことを願うか。又これを愛し、これを慰め、これを敬い、健やかなる時も病める時もこれを守り、その命の限りほかの者に依らず、この女のみになうことを願うか

新郎は答える。

我これを願う

司祭は新婦に言う。

——（教名）なんじこの男にとつぎ、神の定めに従いて夫婦の神聖なる縁を結ぶことを願うか。またこれに従い、これに仕え、これを愛し、これを敬い、健やかなる時も病める時もこれを守り、その命の限りほかの者に依らず、この男のみにそうことを願うか

新婦は答える。

我これを願う

司祭は言う。

この男にめあわすために、この女をわたす者はたれか

ここで親またはその代理者は新婦の右手をとつて司祭にわたす。司祭は受けて新郎に授ける。

新郎は新婦の手をとり司祭に従つて言う。

われ神の定めに従いてなんじをめとる。今よりのち幸いにも災いにも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、生涯なんじを保つべし。われ今これを約す

両人手を放す。新婦は右手で新郎の右手をとり、司祭に従つて言う。

われ神の定めに従いてなんじにとつぐ。今よりのち幸いにも災いにも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、なんじに従い、生涯なんじを保つべし。われ今これを約す

兩人手を放す。指輪を用いるときは、新郎は指輪を司祭の祈禱書の上に置く。司祭は指輪を祝福するとき次のように言う。

主よ、願わくはこの指輪を祝し、これを与うる者と受くる者とを恵み、生涯、相愛して過ごさせたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

新郎は司祭から指輪を受けて新婦の左手の無名指にはめ、これを持ちながら司祭に従つて言う。

指輪を用いないときは、かつこ内の語を省く。

父と子と聖霊の御名によりて、「この指輪をもつて」なんじをめとり、わが物をなんじのものとす アーメン

新郎新婦はひざまずく。司祭は言う。

我ら祈るべし

とこしえにいます神・万民を造り、万民を守り、すべての霊なる恵みをささげ、限り

なき命いのちを与あたえたもう主しゅよ、願ねがわくは今主いましゅの名なによりて祝いのちするこのふたりのしもべに幸さいわいいを下くだしたまえ。今「指輪ゆびわをしるしとして」立たてし誓ちかいを常つねにまもり、互たがいに愛あいし、互たがいに親したしみ、ともに主しゅの律法おきてに従したがうことを得えさせたまえ。主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

司祭は兩人の右手を合わせて言う。

神かみの合あわせたまえる者ものは、人ひとこれを離はなすべからず

次に司祭は会衆に告げる。「アーメン」は司祭だけが言う。

——と——(教名) 夫婦ふうふの神聖しんせいなる縁えんを結び、神かみと会衆かいしゅとの前まえにて、ともに誓ちかいを立たて、かつ「指輪ゆびわを授受じゅじゆし」互たがいに手てをとり合あひて証あかしをなせり。ゆえにわれ父ちちと子こと聖靈せいれいの名なによりて、彼らかれの夫婦ふうふたることを示しめす アーメン

司祭は次の言葉で、結婚した者を祝福する。

願ねがわくは父ちちなる神かみ・子こなる神かみ・聖靈せいれいなる神かみ、なんじらを祝いのちし、常つねになんじらを守りたまわんことを。願ねがわくは主しゅあわれみをもつてなんじらを願ねがひ、霊れいの恵めぐみをもつてなんじらを飽あかせ、むつまじくこの世よを渡わたり、後のちの世よには限かぎりなき命いのちに至いたらせたまわんこ

とを。アーメン

次に新郎・新婦は司祭に従い至聖所の入口に行つてひざまずく。その間に次の詩篇の一つを歌ひまたは唱える。

詩百二十八篇

一 主を恐るる者はさいわいなり＝ その道を歩む者はみなさいわいなり  
 二 なんじおのが手の勤勞の実をくろうべし＝ なんじは幸いを得、また安らかなるべし

三 なんじの妻は家の奥におりて、多くの実を結ぶぶどうの木のごとく＝ なんじの子らは食卓をかこみてオリブの若木のごとし

四 見よ、主を恐るる者は＝ かくさいわいを得ん

五 主はシオンよりなんじを祝し＝ なんじ世にあらん限りエルサレムの幸いを見んことを

六 なんじおのが子らの子を見＝ イスラエルの上に平安あらんことを  
 父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩六十七篇

願わくは神われらを恵み祝したまわんことを＝ 御顔の光を我らの上に照らした

まわんことを

二 こはなんじの道のあまねく地に知られ＝ なんじの救いのもろもろの国に知られ

んためなり

三 神よ、民らはなんじに感謝し＝ もろもろの民はなんじをほめたとうべし

四 国々はたのしみ、また喜びうとうべし＝ なんじは公平をもて民らをさばき、地

の上なる国々を治めたまえばなり

五 神よ、民らはなんじに感謝し＝ もろもろの民はなんじをほめたとうべし

六 地は産物をいだせり＝ 神・われらの神はわれらを祝したまえり

七 神はわれらを祝したまえり＝ 地のもろもろのはて、ことごとく神をおそるべし

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

聖 婚 式

四四〇

つづいて聖餐式を行なわないときは、司祭は兩人に向かつて言う。

司祭

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司祭

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いだしたまえ アーメン

司祭

主よ、このふたりのしもべを救いたまえ

会衆

彼ら主にたよれり

司祭

主よ、天より彼らを助けたまえ

会衆

常に彼らを守りたまえ

司祭

彼らのために堅固なる城となりたまえ

会衆

彼らの敵を防ぎたまえ

司祭

主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆

我らの声を主の御前に至らせたまえ

司祭

我ら祈るべし

次に司祭は言う。但し聖餐式を行なうときは以下の祈りを祝福の前に用いる。

天の父なる神よ、このしもべらを祝し、主の御言葉を学びてこれを行なわしめたまえ。願わくは、彼ら主の守りをこうむり、常に御心に従い、生涯主の愛におることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

新婦が子を生む年を過ぎているときは次の第一の祈りを省く

天の父よ、人のふゆるは主の恵みによれり。願わくはこの夫婦を恵みて子を産ましめ、又ともに長きよわいを保ち、操をまもり、互いに愛し、御心のままにそのこどもを育て、御栄えをあらわすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン



聖 婚 式

四四二

神よ、主は結婚を聖別し、これをもつてキリストとその教会は霊なる結婚によりて一体なることを示したまえり。願わくば、いつくしみをもつてこのふたりを顧み、主の御言葉に従いて互いに愛し、互いに敬い、つつしみと和らぎとを保つことを得させたまえ。主よ、彼らを祝して限りなき御国に至らせたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は次のように言つて兩人を祝福する。

願わくは全能の神、なんじらに豊かなる恵みを注ぎ、なんじらを清め、なんじらを祝し、なんじらの身も魂も御心にかない、生涯相愛して世を過ごさせたまわんことを。

アーメン

結婚した者は当日または、なるべく早い機会に聖餐を受けなければならない。

聖 餐 式

結婚式につづいて聖餐式を行なうときは次の特祷・使徒書・福音書を用いる。

特 祷

天の父なる神よ、主は結婚によりてふたりの者を一体となしたもう。願わくはこのしもべらを清め祝し、忠実にその誓いを守り生涯相愛して安らかにこの世を過ごさせたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エペ五章二五—三三

夫たる者よ、キリストの教会を愛し、これがためにおのれを捨てたまひしごとく、なんじらも妻を愛せよ。キリストのおのれを捨てたまひしは、水の洗いをもちて言葉によりて教会を清め、これを聖なるものとして、しみなく、しわなく、すべてかくのごときたぐいなく、清き、きずなき尊き教会を、おのれの前に建てんためなり。かくのごとく夫はその妻をおのれの体のごとく愛すべし。妻を愛するはおのれを愛するなり。おのれの身を憎む者はかつてあることなし、皆これを育て養う、キリストの教会にけるもまたかくのごとし。我らは彼の体の肢なり、「このゆえに人は父母を離れ、その妻に合いてふたりのもの一体となるべし」。この奥義は大いなり、わが言う所はキリストと教会とを指せるなり。なんじらおのおの、おのれのごとくその妻を愛せよ。

妻もまたその夫を敬うべし。

福音書 マル 一〇章六—九

イエス言いたもう。「開びやくの初めより『人を男と女とに造りたまえり』。『かかるゆえに人はその父母を離れて、ふたりのもの一体となるべし』。されば、はやふたりにはあらず、一体なり。このゆえに神の合わせたもうものは、人これを離すべからず。

夫婦の義務について説教がないときは、司祭は次の勧告の全部または一部を用いて  
もよい。

勸 告

すでに結婚したる者、また結婚せんとする者は、夫婦の義務にかかわる聖書の言葉を聞くべし。

聖パウロ、エペソ書第五章に結婚せし者に命じていわく

夫たる者よ、キリストの教会を愛し、これがために、おのれを捨てたまひしごとくなんじらも妻を愛せよ。キリストのおのれを捨てたまひしは、水の洗いをもち、こ  
とばによりて教会を清め、これを聖なる者として、しみなく、しわなく、すべてか

くのごとき、たぐいなく、清き傷なき尊き教会を、おのれの前に建てんためなり。  
かくのごとく夫はその妻をおのれのからだのごとく愛すべし、妻を愛するは、おのれを愛するなり。おのれの身をにくむ者は、かつてあることなし。皆これを育て養う、キリストの教会におけるも、またかくのごとし。我らは彼のからの肢なり、「このゆえに人は父母を離れ、その妻に合いて、ふたりのもの一体となるべし」。この奥義は大いなり、わが言うところはキリストと教会とを指せるなり。なんじらのおの、おのれのごとくその妻を愛せよ

又コロサイ書に次のごとくいえり

夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦きをもてこれをあしろうな

又キリストの使徒にして、妻帯せし聖ペテロが結婚せし者にいえる言葉を聞くべし  
夫たる者よ、なんじらその妻を、おのれより弱き器のごとくし、知識に従いてともに住み、命の恵みとともに継ぐ者としてこれを尊べ。これなんじらの祈りに妨げなからんためなり

以上読みし言葉は、夫が妻に對してなすべき義務を示すものなり、次に妻たるもの

も、夫おとこに對たいしてなすべき義務ぎむを學まなぶべし。これも聖書せいしょに明あきらかにしるされたり

聖せいパウロ、エペソ書しよだ第五章ごしやうのうちに次つぎのごとく教おしう

妻つまたる者ものよ主しゆに従したがうごとくおのれの夫おとこに従したがえ、キリストきりすとは自みづから、からだの救すくい主ぬしにして、教会きやうかいのかしらなるごとく、夫おとこは妻つまのかしらなればなり。教会きやうかいのキリストきりすとに従したがうごとく、妻つまもすべてのこと夫おとこに従したがえ

また言いわく

妻つまもまたその夫おとこを敬うやまふべし

又またコロサイ書しよのうちに次つぎの短みじき教おしえあり。いわく

妻つまたるものよ、その夫おとこに従したがえ、これは主しゆにある者もののなすべきことなり

聖せいペテロも良よく教おしえて言いわく

妻つまたる者ものよ、なんじらその夫おとこに従したがえ、たとい御言葉みことばに従したがわぬ夫おとこありとも、なんじらの清きよく、かつ、うやうやしき行状ぎやうじやうを見て、言葉ことばによらず妻つまの行状ぎやうじやうによりて救すくいに入いらんためなり。なんじらは髪かみを編あみ、金さんを掛かけ、ころもを装よそおうごとき、うわべのものものを飾かざりとせず、心こころのうちの隠かくれたる人ひと、すなわち柔和にやわ、しとやかなる靈れいの朽くち

ぬ物を飾りとすべし、これこそは神の前にて価とうときものなり。むかし神に望みを置きたる清き女たちも、かくのごとくその夫に従いて、おのれを飾りたり。すなわちサラが、アブラハムを主と呼びてこれに従いしごとし。なんじらも善を行ないて、何事にもおののき恐れずば、サラの子たるなり。

産後感謝式

産婦は肥立つたとき、聖堂にきて定められた場所にひざまずく。司式者は立つて次のように言う。

全能の神は大いなる恵みをもつてなんじを守り、出産せしめたまえり。ゆえに、いま真心をもつて感謝し奉るべし

次に左の詩篇の一つを用いる

詩百二十七篇

- 一 主家を建てたもうにあらずば、建つる者の勤勞はむなし＝ 主城を守りたもうにあらずば、見張りびとのさめおるはむなしきことなり
- 二 なんじら早く起き、おそく伏して辛苦の糧を食ろうはむなしきなり＝ 主はそういったもう
- 三 見よ、子らは主の与えたまえる嗣業なり＝ 胎の実はその報いのたまものなり
- 四 年若きときの子らは矢のごとし＝ ますらおの手にある矢のごとし

五 矢の満ちたる矢筒を持つ人はさいわいなり＝ 彼らは門にありてあたと物言うと

きはすかしめられじ

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩百十六篇 一一二、四一八

一 われ主をいつくしむ＝ わが声とわが願いをききたまえばなり

二 主耳をわれに傾けたまえり＝ われ世にある限り主を呼びまつらん

三 その時われ主の御名をよべり＝ 「主よ、わが魂をすくいたまえ」と

四 主は恵み豊かにして正しくましませり＝ われらの神はあわれみふかし

五 主は愚かなる者を守りたもう＝ わが低くせられし時われをすくいたまえり

六 わが魂よ、なんじの安きにかえれ＝ 主は豊かになんじをあしらいたまえり

七 なんじはわが魂を死よりすくい＝ わが目を涙より、わが足をつまずきより助け

いだしたまえり

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ



始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ アーメン

司式者

主よ、この姉妹を救いたまえ

会衆

彼は主にたよれり

司式者

彼のために堅固なる城となりたまえ

会衆

彼の敵を防ぎたまえ

司式者 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司式者 我ら祈るべし

全能の神よ、この姉妹を救い、つつがなく出産の苦しみと危うきとを過ぎさせたまいしことを感謝し奉る。慈悲ふかき父よ、願わくはこの姉妹をして、今の世においては忠実に主に仕え、後の世においては限りなき栄光をうくることを得させたまえ。この感謝と祈禱を主イエスⅡキリストによりてささげ奉る。アーメン

ここで適当な祈りを用いてもよい。  
産後感謝をする人は信施をささげる。当日またはなるべく早い機会に聖餐を受けなければならぬ。

# 病者訪問式

病人がある時は司祭に通知しなければならない。司祭は病人の状態に応じて次の式の全部または一部を用いる。

## 訪問

司祭は病人の家に入るとき、次のように言う。

願わくは平安なんじらにあらんことを

司祭は病人のそばで言う。

司祭

主よ、あわれみたまえ

答

キリストよ、あわれみたまえ

司祭

主よ、あわれみたまえ

一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も

与<sup>あた</sup>えたまえ。我<sup>われ</sup>らに罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>すものを我<sup>われ</sup>ら赦<sup>ゆる</sup>すごとく、我<sup>われ</sup>らの罪<sup>つみ</sup>をも赦<sup>ゆる</sup>したまえ。我<sup>われ</sup>らを試<sup>こころ</sup>みにあわせず、惡<sup>あく</sup>より救<sup>すく</sup>いいただいたまえ　アーメン

司祭

主<sup>しゅ</sup>よ、このしもべを救<sup>すく</sup>いたまえ

答

彼<sup>かれ</sup>は主<sup>しゅ</sup>にたよれり

司祭

主<sup>しゅ</sup>よ、天<sup>てん</sup>より彼<sup>かれ</sup>に助<sup>たす</sup>けを与<sup>あた</sup>えたまえ

答

常<sup>つね</sup>に御<sup>み</sup>力<sup>ちから</sup>をもつて守<sup>まも</sup>りたまえ

司祭

あだなす者<sup>もの</sup>に勝<sup>か</sup>たしめたまえ

答

惡<sup>あく</sup>しき者<sup>もの</sup>をしりぞけたまえ

司祭

主<sup>しゅ</sup>よ、堅<sup>けん</sup>固<sup>こ</sup>なる城<sup>しろ</sup>となりて彼<sup>かれ</sup>を守<sup>まも</sup>りたまえ

答

彼<sup>かれ</sup>の敵<sup>てき</sup>を防<sup>かへ</sup>ぎたまえ

司祭

主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>らの祈<sup>いの</sup>りをききたまえ

答

我<sup>われ</sup>らの声<sup>こゑ</sup>を主<sup>しゅ</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まえ</sup>に至<sup>いた</sup>らせたまえ

司祭

我<sup>われ</sup>ら祈<sup>いの</sup>るべし

主<sup>しゅ</sup>よ、

願<sup>ねが</sup>わくはあわれみをもつてこのしもべを願<sup>ねが</sup>ひ、その心<sup>こゝろ</sup>を励<sup>はげ</sup>まし、主<sup>しゅ</sup>にたよる信<sup>しん</sup>

仰うやうを強つよめ、あだを防かへぎて、常つねに安やすらかに守もりたまえ。主しゅイエス・キリストによりてこ  
いねがい奉ほうる。アーメン

全能ぜんのうの神かみ・あわれみ深ふかき救すくい主しゅよ、病びやうになやむこのしもべに恵めぐみを与あたえたまわんこ  
とを。アーメン

願ねがわくはこの苦くるしみによりて、おのが弱よわきを悟さとり、ますます信しん仰うやうを強つよめ、まことの悔く  
い改あらために至いたることを得えさせたまえ。アーメン

病びやうのいゆること御心みこころならば、生涯しやがいのしゆ主しゅをおそれ、主しゅの栄光えいこうをあらわすことを得えさせ  
まえ。アーメン

生いくるも死しぬるも常つねに主しゅに属ぞくし、御心みこころに従したがひ、ついに限かぎりなき命いのちに入り、主しゅとともに  
住すましましたまえ。主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉ほうる。アーメン

## 信仰しんうやうと祈禱きとうの勸め

司祭は病人に公会の信仰を堅く守ることを勧める。また神と親しく交わる機会を与  
えられたことを悟らせ、主の十字架を思い、祈禱と代禱をすることを勧め、ともに  
使徒信經を唱える。

使徒信經

我われは天地てんちの造つくり主ぬし・全能ぜんのうの父ちちなる神かみを信しんず

我われはそのひとり子こ・我われらの主しゅイエス・キリストを信しんず。主しゅは聖靈せいれいによりてやどり、おとめマリヤより生うまれ、ポンテオ・ピラトのとき苦くるしみを受うけ、十字架ごうじかにつけられ、死しにて葬もろられ、よみにくだり、三日目かみに死しにし者もののうちよりよみがえり、天てんに昇のぼり、全能ぜんのうの父ちちなる神かみの右みぎに座ざしたまえり。かしこよりきたりて生いける人と死しねる人ひとをさばきたまわん

我われは聖靈せいれいを信しんず。また聖公会せいこうかい、聖徒せいとの交まじわり、罪つみの赦ゆるし、からだのよみがえり、限かぎりなき命いのちを信しんず　アーメン

懺悔の勧め

司祭は病人に自らをよく省みて、過去の罪をまことに悔やみ、行ないを改める決心をしていのかどうか、キリストの死を感謝し、キリストによって示された神の愛を眞実に信じていのかどうか、そしてすべての人を愛しているかどうかを、ただすこゝとを勉める。

また他人から受けた害を心から赦し、他人に害を加えたことがあればその赦しを求め力の及ぶ限り償うこと、また財産、貸借の処理、寄進等を明らかにしておくことを勧める。病人が自責のため安心を得ない時は、つまびらかに罪を懺悔することを勧める。罪の懺悔はいつでもすべきことであるが、病のときは特にその必要がある。懺悔のときは家人を退けて病人は次のように言う。

我は父と子と聖霊なる神に罪を懺悔し奉る。(ここで司祭に罪を告白する) 我はこれらおよび多くの記憶せざる罪をまことに悔やみ、これを改善せんと堅く決心し、師父の教えと赦罪の宣告をせつに願う

司祭は懺悔をきき、適当な指導をあたえて次の赦罪を告げる。

願わくは主その大いなるあわれみによりて、なんじの罪を赦したまわんことを。

アーメン

我らの主イエスキリストはまことに罪を悔やみ、主を信ずるすべての人に罪の赦しを告ぐる権威を公会にのこしたまえり。われ今、主のゆだねたまえる権威により、父と子と聖霊の御名によりて、なんじのすべての罪の赦しを宣言す。アーメン

この懺悔と赦罪は他の場合に用いてもよい。

## 病者ひようしゃの陪餐ばいさん

人は、いつ死に臨んでも不安がないように、聖堂でしばしば聖餐にあずからなければならぬ。司祭はこのことを会衆に教えなければならない。

聖堂に来ることのできない病人が、自宅で聖餐にあずかることを望むならば、司祭に申し出る。司祭は聖品を病床に奉持して授けるか、または病者聖餐式を行なう。

そのときは次の特祷・使徒書・福音書または当日のものをを用いる。

式を短縮する必要がある時は次の順序による——懺悔・赦罪・聖別・陪餐・祝祷。

さらに急を要するときは聖別と分餐語だけでよい。但し聖品を奉持したときは聖別を用いない。

### 特とく 祷とう

とこしえにいます全能ぜんのうの父よ、主しゅはいのちと健康けんかうを与あたえたもう。願ねがわくはこの病やめるしもべのためにささぐる我われらの祈いのりを聞きこし召めし、御心みこころならばその病やまをいやし、主しゅの宮みやにて感謝かんしゃをささぐることを得えさせたまえ。主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

### 使徒書しとど コリ後一章三、四

はむべきかな、我われらの主しゅイエスキリストの父ちちなる神かみ、すなわちもろもろの慈悲じひの父ちち、



すべての慰めの神、われらをすべての悩みのうちに慰め、我らをしてみずから神に慰めらるる慰めをもて、もろもろの悩みにおける者を慰むることを得しめたもう。

福音書 マタ 二章二八

イエス言いたもう、「すべて勞する者、重荷を負う者、我にきたれ、われなんじらを休ません」。

老衰等で聖堂に来ることのできない者にもこの方法を用いてよい。  
やむを得ない事情で聖品を受けることができない者は靈的にこれにあずかることができる。

病者按手

病人が希望するときは司祭はこの式を行なう。抹油の直前にこれを用いてもよい。  
救い主なる神よ、このしもべを顧みたまえ。願わくは罪より救い、身と魂の苦しみを除き、その病をいやして感謝をささぐることを得させたまえ。主は父と聖靈とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

次に司祭は病人の頭に手を置いて言う。「アーメン」は司祭だけが言う。

父と子と聖靈の御名によりて、我なんじに手をおく、願わくは主イエス・キリストそのあわれみによりてなんじの病をいやしたまわんことを アーメン

ここで祝福を用いてもよい。

### 病児按手

司祭

主よ、あわれみたまえ

答

キリストよ、あわれみたまえ

司祭

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ アーメン

司祭

神よ、あわれみたまえ

答 主よ、幼な子を守りたまえ

司祭 主よ、我らの祈りをききたまえ

答 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司祭 我ら祈るべし

主イエスよ、主は幼な子をいだきて、これを祝したまえり。願わくはこの幼な子を祝し、その病をいやし、生涯主に仕うることを得させたまえ。アーメン

限りなく生ける神よ、主はたえなる知恵をもって天の使いと世の人との位を立て、その務めを定めたまえり。願わくは天において常に主に仕うる使いに命じて、地にあるこの幼な子を守らしめたまえ。主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に司祭は幼な子の頭に手を置いて言う。「アーメン」は司祭だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに手をおく。願わくは御子イエス、その大いなるいつくしみによりて、なんじの病をいやしたまわんことを アーメン

司祭は次の語をもって幼な子を祝福する。

願わくは父と子と聖霊なる全能の神の恵み常になんじとともにあらんことを。

アーメン

## 抹油

抹油には主教の聖別した純粹のオリブ油を用いる。やむをえないときには、司祭が油を聖別する祈りによつて聖別してもよい。

愛する兄弟よ、抹油にかかわるヤコブ書第五章の言葉を聞くべし

なんじらのうちに病める者あるか、その人教会の長老たちを招け。彼らは主の名により、その人に油をぬりて祈るべし。さらば信仰の祈りは病める者を救わん。主かれを起こしたまわん。もし罪を犯ししことあらば赦されん

司祭は右の親指を聖油に浸し、次の語を用いて病人の額または胸に十字架の形をしるす。

「アーメン」は司祭だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、我なんじに抹油す アーメン

司祭はまた言う。

神よ、願わくは今、油ぬられししもべの罪を赦し、御心になわばその病をいやしたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭はここで親指をぬぐう。

次に司祭は次の語をもつて病人を祝福する。

願わくは主なんじを祝し、なんじを守りたまわんことを。願わくは主、御顔をもつてなんじを照らし、なんじを恵みたまわんことを。願わくは主御顔をなんじに向け、限りなく平安を与えたまわんことを。アーメン

この式と病者の陪餐を同時に行なうときは、陪餐をさきにする。

### 司祭が油を聖別する祈り

いつくしみ深き全能の神よ、主は御子を世にくだし、我らをして命を得しめ、かつ豊かに得させたもう。願わくは聖霊をもつてこの油を祝しきよめ、これを受くる者、御子の贖いのいさおによりて強められ、罪の赦しと病のいやしを受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

## 病者のための諸祈禱

次の祈りを適当に用いてよい。

### 一 病児のため

全能の神・慈悲の父よ、生死を定むる力はただ主にあり。あわれみをもつて、いま病み悩む幼な子をみそなわしたまわんことを、ひたすら祈り奉る。願わくは主のよしとしたもう時にそのからだの苦しみをのぞき、主の救いを施したまえ。又その命をながろうることを御心になわば、忠実に主に仕え、生涯よき行ないをもつて主の栄光をあらわす器とならしめたまえ。もし御心になわすば、主イエスにありて眠れる者の常に樂しむ所に入らせたまえ。主イエスⅡキリストの愛によりてこいねがい奉る。

アーメン

### 二 病危篤なる者のため

慈悲の父・慰めのもととなる神よ、我らが悩むとき主のほかにも助くる者なし。我らこのしもべのために助けを求め奉る。願わくはあわれみをもつてみそなわし、肉体は衰う

るとも、聖靈の恵みをもつてますますその魂を強めたまえ。願わくはまことに罪を悔やみ、御子イエスを堅く信ずる心をあたえ、世を去る前にその罪をことごとく消し、天において全く赦したまえ。御心になわば、今にても主はこのしもべを起こしてながらえしめたもう。されどその容体たのみ少く見ゆるゆえに、願わくは主の助けをこうむりて臨終の用意をととのえ、主に親しみ、安らかに世を去るのち、その魂かぎりなき御国に入ることを得させたまえ。御子・われらの救い主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

### 三 死に臨める人のため

全能の神よ、全うせられたる義人の魂は、肉体を離るる後も主とともにおりて生きながらう。今われらの愛する兄弟の魂を、世の造り主・慈悲ふかき救い主にゆだね、これを尊きものと認めたまわんことをこいねがい奉る。願わくは世の罪を除くためにほふられたまいし小羊の血にて洗い、この世にて肉の欲、サタンのいざないによりて受けし汚れを清め、傷なき者となりて主の御前にいずることを得させたまえ。御子・われらの主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 四 安心を得ざる人のため

慈悲の父・なぐさめのもとなる神よ、あわれみをもつてこのしもべの悩みを顧みたまわんことをこいねがい奉る。願わくはこのしもべ、おのれを知り、主の怒りとあわれみを悟り、ほかのものにたよらずして、ただ主にたより、すべてのいざないに勝ち、その心のいゆることを得させたまえ。願わくはしもべを守りてあだを恐るることなからしめ、御顔の光をあらわして平安を与えたまえ。主イエス・キリストのとりなしによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 五 病床に集まれる者のため

とこしえにいます全能の神・あわれみふかき主よ、願わくは我らの命のはかなきことを深く感じ、聖霊の導きによりて常に行ないを清くし、世にありて主に仕うることを終わらば、良心の責めもなく、聖公会をも離れず、信仰と望みを堅くし、主に喜ばれ、人を愛する心をいだきて、先祖に加わることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

#### 六 快方に向こうときの感謝



人の命をつかさどりたもう全能の神よ、この兄弟の病を快方に向かわしめ、我らの悲しみを喜びに変えたまいし恵みを感じし奉る。主はこのしもべを見捨てたまわず、天より慰めを下し、苦しみに耐え、御定めに従う心をあたえ、おりにかのう助けを得させたまえり。願わくはますます恵みをくわえ、その療養を祝し、からだを魂とを健やかにし、喜びて主の宮に上り、供え物をささげて主のもろもろの恵みを感じすることを得しめたまえ。父と聖霊とともに栄光ある主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

七

病者の用うる祈り

世の救い主よ、主は十字架と尊き血にて我らを贖いたまえり。願わくは我らを救い、我らを助けたまえ。アーメン

病者のために適當なる聖語

一 病のいやし

列王紀略下五章一一四、マタイ伝八章五十二、三、ルカ伝四章三八―四〇

二 神への信頼

詩篇二七、四六、九一、一二一、箴言三章一一、二六、イザヤ書二六章一

一九、四〇章一一一、四〇章二五—三一 エレミヤ哀歌三章二—四一

マタイ伝六章二四—三四 ロマ書八章三一—三九

三 神の守り 詩篇三〇、三四

四 神の助けを求むる祈り 詩篇四三、八六、一四三

五 痛悔 詩篇五一、一三〇

六 感謝と賛美 詩篇一〇三、一四六 イザヤ書一二章

七 試練 ヨブ記三三章一四—三〇

八 苦しむ者の模範なるキリスト イザヤ書五三章 マタイ伝二六章三六—四六 ルカ伝

二三章二七—四九

九 神は悔い改めと信仰を勧めたもう イザヤ書五五章

一〇 八つの祝福の教え マタイ伝五章一一—二二

一一 施しと備え ルカ伝一二章三二—四〇

一二 良き牧者なるキリスト 詩篇二三 ヨハネ伝一〇章一一—一八

一三 復活 活 ヨハネ伝二〇章一一—一八、二〇章一九—三一 コリント後書四章

一三—五章九

一四 贖罪しよく ざい ロマ書五章一一、八章一八—三九

一五 キリスト信徒の愛きりすと しんとうのあい コリント前書一三章

一六 信仰の恵みしんいうのめぐみ エペソ書三章一二—二一、六章一〇—二〇 ビリビ書三章七一—四

一七 忍耐にんたい ヤコブ書五章一〇—二〇

一八 神の愛かみのかい ヨハネ第一書三章一一七、四章九—二一

一九 来世らいせい 黙示録七章九—一七、二一章一一七、二二章二—二七、二三章一—五

二〇 受難前の主の最後の教えじゆなんぜんのしゅのさいごのくわい ヨハネ伝一四章、一五章、一六章、一七章

二一 臨終における信徒の望みりんじゆうにおけるしんとうののぞみ 申命記三三章二七 ヨハネ伝三章一六 コリント後書四章

一六—五章一 黙示録二一章四—七

# 死に臨める者のための祈り

司祭が臨席しないときは信徒が用いる。

司式者ししきしや 父なる神よちちなるかみ

答こたへ しもべをあわれみたまえ

司式者 子なる神よこなるかみ

答 しもべをあわれみたまえ

司式者 聖靈なる神よ

答 しもべをあわれみたまえ

司式者 至聖なる三位一体の神よ

答 しもべをあわれみたまえ

司式者 すべての罪と惡、および苦しみより

答 主よ、救いたまえ

司式者 主の肉体と成りたまひしこと、十字架と苦しみ、尊き死と葬りにより

答 主よ、救いたまえ

司式者 榮光ある復活と昇天、また聖靈の降臨により

答 主よ、救いたまえ

司式者 主なる神よ、我ら罪びとの願いをきき、しもべの魂を惡の力と、とこしえの

死より救いだしたまえ

答 主よ、ききたまえ

司式者

願わくはあわれみをもつてすべての罪を赦したまえ

答

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは安らかなるいこいを与えたまえ

答

主よ、ききたまえ

司式者

願わくは主の聖徒とともに御国の喜びにあずからしめたまえ

答

主よ、ききたまえ

司式者

世の罪を除きたもう神の小羊よ

答

彼をあわれみたまえ

司式者

世の罪を除きたもう神の小羊よ

答

彼をあわれみたまえ

司式者

世の罪を除きたもう神の小羊よ

答

主の平安をあたえたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

答

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いいただいたまえ。アーメン

司式者は言う。

我ら祈るべし

とこしえにいます全能の神よ、願わくはこのしもべの魂を、すべての惡ともろもろのきずなより解き放ちて、主の聖徒とともにとこしえの御国にて安らかにいこわせたまわんことを、父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス。キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司式者が司祭のときは次のように言う。

願わくは、あわれみ深き全能の神、なんじの罪をことごとく赦し、聖霊の恵みと力を与えて限りなき命に至らせたまわんことを。アーメン

死期の迫ったときには次のように言う。

キリストを信ずる者の魂よ

なんじを造りたまひし全能の父なる神の御名により

なんじを贖いたまいしイエス・キリストの御名により

なんじをきよめたまいし聖霊の御名により

安らかにゆくべし

願わくは神なんじをバラダイスに伴いて安らかにいこわせたまわんことを。アーメン

逝去直後の折り

あわれみ深き救い主よ、我ら今、肉体を離れし主のしもべの魂を御手にゆだね奉る。願わくは主の贖いたまいししもべを忘ることなく、あわれみの御手をのべて彼をいだき、とこしえの平安を与え、主の聖徒とともに住まわせたまえ。アーメン

葬<sup>そう</sup>

送<sup>そう</sup>

式<sup>しき</sup>

この式は洗礼を受けない者・明らかに大罪を犯して悔い改めない者・自殺した者には用いない。  
司式者は棺を迎え、これにさきだつて聖堂あるいは墓に行くとき、次の聖語の一節または数節を歌いあるいは唱える。

葬<sup>そう</sup>

禱<sup>とう</sup>

主<sup>しゅ</sup>言<sup>い</sup>いたもう、我<sup>われ</sup>はよみがえりなり、命<sup>いのち</sup>なり、我<sup>われ</sup>を信<sup>しん</sup>ずるものは死<sup>し</sup>ぬとも生<sup>い</sup>きん。お  
およそ生<sup>い</sup>きて我<sup>われ</sup>を信<sup>しん</sup>ずる者は、とこしえに死<sup>し</sup>なざるべし ヨハネ伝二一章二五、二六節  
われ知<sup>し</sup>る、我<sup>われ</sup>を贖<sup>あがな</sup>う者は生<sup>い</sup>く、後<sup>のち</sup>の日<sup>ひ</sup>にかれ必<sup>かならず</sup>地<sup>ち</sup>のうえに立<sup>た</sup>たん。わがこの皮<sup>かわ</sup>、こ  
の身<sup>み</sup>の朽<sup>く</sup>ち果<sup>は</sup>てん後<sup>のち</sup>、われ肉<sup>にく</sup>を離<sup>はな</sup>れて神<sup>かみ</sup>を見<sup>み</sup>ん。われ自<sup>みづか</sup>ら彼<sup>かれ</sup>を見<sup>み</sup>たてまつらん。わが  
目<sup>め</sup>かれを見<sup>み</sup>んに、知<sup>し</sup>らぬ者<sup>もの</sup>のごとくならじ ヨブ記一九章二五―二七節  
我<sup>われ</sup>らは何<sup>なに</sup>をも携<sup>たづな</sup>えて世<sup>よ</sup>にきたらず、また何<sup>なに</sup>をも携<sup>たづな</sup>えて世<sup>よ</sup>を去<sup>さ</sup>ることあたわず。主<sup>しゅ</sup>あた  
え、主<sup>しゅ</sup>取<sup>と</sup>りたもうなり、主<sup>しゅ</sup>の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>はほむべきかな テモテ前書六章七節、ヨブ記一章二二節



聖堂に入りあるいは墓に行つて次の詩の一篇または二、三篇を歌いあるいは唱える。

詩九十篇

一 主よ、なんじは我らの住みかなり＝ いにしえより世々われらの住みかなり

二 山いまだ成りいえず、なんじいまだ地と世界を造りたまわざりし時より、なんじは神なり＝ とこしえよりとこしえまで、なんじは神なり

三 なんじ人をちりにかえらしめ＝ 「人の子よ、なんじらかえれ」と言いたもう

四 なんじの目には、ちとせもすでに過ぐるきのうのごとく＝ また夜の間のひとと  
きにおなじ

五 なんじは彼らを流れ去らしめたもう＝ 彼らはひと夜の夢のごとく、あしたに、

はえいずる青草のごとし

六 あしたに、はえいでて栄え＝ ゆうべには、しおれて枯るるなり

七 我らはなんじの怒りによりて消えうせ＝ なんじの憤りによりておじまどう

八 なんじ我らの不義を御前におき＝ われらの隠れたる罪を御顔の光のなかにおき  
たまえり

九 我らのもろもろの日はなんじの怒りのもとに過ぎ去り＝ 我らがすべての年の尽

くるはひと息のごとし

二〇 我らが世にあるは七十年に過ぎず＝ あるいは健やかにして八十年にいたらん

されどその誇るところは、ただ悩みと悲しみとのみ＝ その去りゆくことすみやかにして我らもまた飛び去るなり

二 なんじの怒りの力を知るものはたれぞ＝ なんじをかしこみ恐れ、その憤りを知るものはたれぞ

三 願わくは我らにおのが日をかぞうることをおしえ＝ 知恵の心を得しめたまえ  
主よ、かえりみたまえ、いつまで怒りたもうや＝ 願わくはなんじのしもべらを

あわれみたまえ

四 あしたに我らをなんじのいつくしみにて飽きたらしめ＝ 世を終わるまで喜び樂  
しませたまえ

五 我らを苦しめたまえる日、我らが災いにあいし年の多きをおもい＝ 我らの喜び  
の日を長からしめたまえ

一六 みわざをなんじのしもべらにしめし＝ なんじの栄光えいこうをその子こらにあらわした

まえ

一七 我われらの神かみ・主しゅの恵めぐみを我われらの上うへにくだし＝ 我われらの手てのわざを我われらの上うへに榮さかえし

めたまえ、我われらの手てのわざを榮さかえしめたまえ

主しゅよ、とこしえの平安へいあんを＝ 彼かれらにあたえ

絶たえざる御光みひかりをもて＝ 照てらしたまえ

詩し三十九篇へん

一 われ言いえり、「われ舌したをもて罪つみを犯おかさざらんために、わが道みちをつつしみ＝ 惡あしき

者もののわが前まえにおる間あいだはわが口くちにくつつわをかけん」と

二 われ黙もくして語かたらず、わが口くちを堅かたくとざせり＝ されどわが悩なやみなおつのれり

三 わが心こころわがうちに熱あつくなり、思おもいつづくるほどに火ひもえたり＝ かくてわれ舌したを

もていえり

四 「主しゅよ、願ねがわくはわが終おわりとわが日ひの数かずとを知らしめたまえ＝ わが命いのちのはか

なきを知らしめたまえ

五 見よ、なんじわがすべての日をつかのまに過ぎ去らしめたもう＝ わがいのち御前にては、なきにひとし

げにすべての人はむなし＝ 人の世にあるは影にことならず

六 彼らのさわぎ立つはむなし＝ その積みたくわえしもの、たれの手におさまるを知らず

七 主よ、われ今なにをか待たん＝ わが望みはなんじにあり

八 願わくはわがすべてのとがより我を助けいだしたまえ＝ 愚かなる者にそしらるることなからしめたまえ

九 われは黙して口を開かず＝ そは、なんじかくなさしめたまえばなり

一〇 願わくはなんじの下したまえる災いを取り去りたまえ＝ われなんじの御手にうち懲らさるるによりて滅ぶるばかりなり

二 なんじ罪を責めて人を懲らし、その慕い喜ぶものを、しみの食ろうごとく消えせしめたもう＝ げにすべての人はむなし

三 主よ、願わくはわが祈りをきき、わが叫びに耳をかたむけたまえ＝ わが涙を見

て黙したもうなかれ  
我はなんじに身を寄する旅びとなり＝ わがすべての先祖のごとく宿れる者なり  
我ここを去りてうせんとす＝ 願わくは見すぐして我をさわやかならしめたま

え」

主よ、とこしえの平安を＝ 彼らにあたえ

絶えざる御光をもて＝ 照らしたまえ

詩百三十篇

二一 主よ、われ深き淵よりなんじをよぶ＝ 主よ、願わくはわが声を聞き、わが願

いに耳をかたむけたまえ

三 主よ、なんじもし、もろもろの不義に目をとめたまわば＝ 主よ、たれかよく立

つことを得んや

四 されどなんじにゆるしあり＝ されば人にかしこまれたもうべし

五 われ主を待ち望む、わが魂はまちのぞむ＝ 我は御言葉によりてのぞみをいだく

六 わが魂の主を待つは見張りびとの暁を待つにまさる＝ げに見張りびとの暁を待

つにまさるなり

セ イスラエルよ、主によりて望みをいだけ＝ 主にはいつくしみあり、また豊かなるあがないあり

ハ 主はイスラエルをすくい＝ そのもろもろのよこしまより、あがないたまわん

主よ、とこしえの平安を＝ 彼らにあたえ

絶えざる御光をもて＝ 照らしたまえ

ここでコリント前書第一五章二〇節から二八節、三五節から三八節、および四二節から五八節まで、またはコリント後書四章一六節から五章一〇節までを朗読する。

まさしくキリストは死人のうちよりよみがえり、眠りたるものの初穂となりたまえり。それ死の人によりてきたりしごとく、死人のよみがえりもまた人によりていできたり。すべての人アダムによりて死ぬるごとく、すべての人キリストによりて生くべし。しかしておのおのそのついでに従ごう。まず初穂なるキリスト、次はそのきたりたもうときキリストに属する者なり。つぎに終わってきたらん。その時キリストはもろもろの権能・権威・権力を滅ぼして国を父なる神にわたしたもうべし。彼はすべて

の敵をその足の下におきたもうまで王たらざるを得ざるなり。いやはての敵なる死もまた滅ぼされん。神はよろずの物を彼の足の下に従わせたまいたればなり。よろずの物を彼に従わせたりとのたもう時は、よろずの物を従わせたまいし者のそのうちになきこと明らかなり。よろずの物かれに従う時は、子もまたみずからよろずの物をおのれに従わせたまいし者に従わん。これ神はよろずの物においてよろずの事となりたまわんためなり。されど人あるいは言わん、死人いかにしてよみがえるべきか、いかなる体をもてきたるべきかと。愚かなる者よ、なんじのまところの物まず死なずば生きず。またそのまところのものは後に成るべき体をまくにあらず、麦にてもほかの穀にてもただ種粒のみ。しかるに神は御心に従いてこれに体を与え、おのおのの種にその体を与えたもう。死人のよみがえりもまたかくのごとし。朽つる物にてまかれ、朽ちぬものによみがえらせられ、卑しきものにてまかれ、栄光あるものによみがえらせられ、弱きものにてまかれ、強きものによみがえらせられ、血氣の体にてまかれ、靈の体によみがえらせられん。血氣の体あるごとく、また靈の体あり。しるして、はじめの人アダムは生ける者となれりとあるがごとし。しかして終わりのアダムは命を

与<sup>あ</sup>うる靈<sup>れい</sup>となれり。靈<sup>れい</sup>のものは先<sup>さき</sup>にあらず、かえつて血<sup>けつ</sup>氣<sup>き</sup>のもののさきにおいて靈<sup>れい</sup>のものの後<sup>のち</sup>にあるなり。第一<sup>だいいち</sup>の人は地<sup>ち</sup>よりいでて土<sup>つち</sup>に属<sup>ぞく</sup>し、第二<sup>だいいち</sup>の人は天<sup>てん</sup>よりいでたる者<sup>もの</sup>なり。この土<sup>つち</sup>に属<sup>ぞく</sup>するものにすべて土<sup>つち</sup>に属<sup>ぞく</sup>するものは似<sup>に</sup>、この天<sup>てん</sup>に属<sup>ぞく</sup>するものにすべて天<sup>てん</sup>に属<sup>ぞく</sup>するものは似<sup>に</sup>るなり。我<sup>われ</sup>ら土<sup>つち</sup>に属<sup>ぞく</sup>するものの形<sup>かたち</sup>をもてるとく、天<sup>てん</sup>に属<sup>ぞく</sup>するものの形<sup>かたち</sup>をもつべし。兄弟<sup>きょうだい</sup>よ、我<sup>われ</sup>これを言<sup>い</sup>わん、血<sup>けつ</sup>肉<sup>にく</sup>は神<sup>かみ</sup>の国<sup>くに</sup>を継<sup>つ</sup>ぐことあたわず、朽<sup>く</sup>つるものは朽<sup>く</sup>ちぬものを継<sup>つ</sup>ぐことなし。見<sup>み</sup>よ、我<sup>われ</sup>なんじらに奥<sup>おく</sup>義<sup>ぎ</sup>を告<sup>つ</sup>げん、我<sup>われ</sup>らはことごとく眠<sup>ねむ</sup>るにはあらず、終<sup>お</sup>わり<sup>り</sup>のラッパの鳴<sup>な</sup>らん時<sup>とき</sup>みなたちまたたく間に化<sup>か</sup>せん。ラッパ鳴<sup>な</sup>りて死人<sup>しにん</sup>は朽<sup>く</sup>ちぬものによみがえり、我<sup>われ</sup>らは化<sup>か</sup>するなり。そはこの朽<sup>く</sup>つるものは朽<sup>く</sup>ちぬものを着<sup>き</sup>、この死<sup>し</sup>ぬるものは死<sup>し</sup>なぬものを着<sup>き</sup>るべければなり。この朽<sup>く</sup>つるもの朽<sup>く</sup>ちぬものを着<sup>き</sup>、この死<sup>し</sup>ぬるもの死<sup>し</sup>なぬものを着<sup>き</sup>るとき、「死<sup>し</sup>は勝<sup>か</sup>ちにのまれたり」としてされたる言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>は成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>すべし。「死<sup>し</sup>よ、なんじの勝<sup>か</sup>ちはいずにかある。死<sup>し</sup>よ、なんじの針<sup>はり</sup>は罪<sup>つみ</sup>なり、罪<sup>つみ</sup>の力<sup>ちから</sup>は律<sup>りつ</sup>法<sup>ぽう</sup>なり。されど感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>すべきかな、神<sup>かみ</sup>は我<sup>われ</sup>らの主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストによりて勝<sup>か</sup>ちを与<sup>あた</sup>えたもう。さればわが愛<sup>あい</sup>する兄<sup>きやう</sup>弟<sup>だい</sup>よ、堅<sup>かた</sup>くして勤<sup>う</sup>くことなく、つねに励<sup>はげ</sup>みて主<sup>しゅ</sup>のわざを努<sup>と</sup>めよ、な



んじらその勞の主にありてむなしからぬを知らねばなり。

または

このゆえに我らはきおちせず、我らが外なる人はやぶるれども、内なる人は日々新  
たなり。それ我らが受くるしばらくの輕き悩みは、きわめて大いになるとこしえの重き  
光榮を得しむるなり。われらの願みるところは、見ゆるものにあらず見えぬものなれ  
ばなり。見ゆるものはしばらくにして、見えぬものはとこしえに至るなり。我らは知  
る、我らの幕屋なる地上の家破るれば、神の賜う建物、すなわち天にある、手にて造  
らぬ、とこしえの家あることを。我らはその幕屋にありて嘆き、天よりたもう住みか  
をこの上に着んことをせつに望む。これを着るときは裸にてあることなからん。我ら  
この幕屋にありて重荷を負えるごとくに嘆く、これを脱がんとあらでこの上に着ん  
ことを欲すればなり。これ死ぬべき者の命にのまれんためなり。我らをこの事にかの  
うものとなし、その証として御霊を賜いし者は神なり。このゆえに我らはつねに心強  
し、かつ身におるうちは主より離れおるを知る、見ゆるところによらず、信仰により  
て歩めばなり。かく心強し、願うところはむしろ身を離れて主とともにあらんことな

り。されば身におるも身を離るるも、ただ御心になわんことを努む。我らはみな必ずキリストのさばきの座の前にあらわれ、善にもあれ、惡にもあれ、おのおのその身になしたることに従いて報いを受くべければなり。

一同立つ。

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いいだしたまえ アーメン

司式者 主よ、しもべのさばきにかかわりたもうなかれ

会衆

そは生けるものひとりだに御前に義とせらるるはなし

司式者

主よ、とこしえの平安を彼にあたえたまえ

会衆

絶えざる御光をもて照らしたまえ

司式者

われ生ける者の地において主のいつくしみを見るたのみなくば

会衆

わが望みはいかにぞや

司式者

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

司式者

我ら祈るべし

次に左の祈りの全部または一部を用いる。さらに諸聖徒日、復活前日、三位一体後第十二主日の特祷等、適当な祈りを選んで用いてもよい。

全能の神よ、主にありて世を去る者の霊、主とともにおりて生きながらえ、主を信ずるものの魂、肉の重荷をおろすのち、主とともにおりて樂しむ。願わくは主のしもべ（――）をあわれみ、この世にておかせた罪をことごとく赦し、終わりの日に彼を正しき者とともによみがえらせ、天の御国に至り、主の聖徒とともに住まわせたまえ。

我らの贖い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神よ、全うせられたる義人の魂は主とともに生きなごう。我ら今、主のしもべ・愛する兄弟の魂を、世の造り主・慈悲ふかき救い主にゆだね、これを尊きものと認めたまはんことをこいねがい奉る。願わくは世の罪を除くためにほふられたまいし小羊の血にて洗い、この世にて肉の欲、悪魔のいざないによりて受けし汚れを清め、傷なき者となりて主の御前にいずることを得させたまえ。また我ら世にある者、おのが命のはかなきを悟り、その日をかぞえ、限りなき命に至る知恵を得させたまえ。ひとりの御子・我らの主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

万民の父なる神よ、世を去りし兄弟のために祈り奉る。願わくは主の平安をかれに与え、とこしえの御光をもつて彼を照らし、いつくしみ深き知恵と全能の御力とをもつて、主のまつたき御旨を成し遂げたまはんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

願わくは世を去りし者の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

聖餐式

葬禮につづいて聖餐式を行なうときは次の特禱・使徒書・福音書を用いる。

特禱

すべての人の造り主・贖い主なる神よ、願わくは主のしもべ（――）の魂をみそなわし、御子の苦しみのいさおによりて、その量るべからざる恵みを受け、終わりの日に世を去りしすべての忠義なるしもべとともに、喜びて主の御顔を仰ぎ見ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 テサ前四章一三一―一八

兄弟よ、すでに眠れる者のことにつきては、なんじらの知らざるを好まず、望みなきほかの人のごとく嘆かざらんためなり。我らの信ずるごとく、イエスも死にてよみ

がえりたまひしならば、神はイエスによりて眠りにつきたる者を、イエスとともに連れきたりたもうべきなり。我ら主の言葉をもてなんじらに言わん、我らのうち主のきたりたもう時に至るまで生きて残れる者は、すでに眠れる者に決して先だたじ。それ主は号令と御使いのおさの声と神のラッパとともに、みずから天より下りたまわん。その時キリストにある死人まずよみがえり、後に生きて残れる我らは彼らとともに雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎え、かくていつまでも主とともにあるべし。さればこれらの言葉をもて互いに相なぐさめよ。

福音書 ヨハ十六章 三七—四〇

イエス言いたもう、「父の我に賜うものはみな我にきたらん、我にきたる者は我これをしりぞけず。それわが天より下りしは、わが心をなさんためにあらず、我をつかわしたまいし者の御心をなさんためなり。我をつかわしたまいし者の御心は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終わりの日によみがえらすこれなり。わが父の御心は、すべて、子を見て信ずる者のとこしえの命を得るこれなり。われ終わりの日にこれをよみがえらすべし」。

告 別

葬禮または聖餐式につづいて次の告別を用いてもよい。  
司式者は棺のかたわらに立つて次のように言う。

われ堅く信ず、死も命も、御使いも權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、このほかの造られたるものも、我らの主キリストイエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを

ロマ書八章三八、三九節

われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。されば生くるも死ぬるも我らは主のものなり。それキリスト死にてまた生きたまいしは、死にたる者と生ける者との主どならんためなり  
わが父の家には住みか多し、しからずば我かねてなんじらに告げしならん。我なんじらのために所を備えにゆく

ロマ書一四章八、九節

ヨハネ伝一四章二節

司式者 主よ、あわれみたまえ

会衆 かいしゅう

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いいただいたまえ アーメン

司式者

主よ、よみの門より

会衆

彼の魂をすくいたまえ

司式者

彼を安らかにいこわせたまえ

会衆

アーメン

司式者

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの靈とともにいますことを

司式者

我ら祈るべし



常に我らをあわれみて赦したもう神よ、願わくは御定めにによりて世を去りし主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞こし召し、彼をあだの手に渡すことなく、御使いに命じてバラダイスに迎え入れしめたまえ。彼は主を望み、主を信じたれば、主の大いなるいつくしみにによりて限りなき喜びをうることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神・慈悲の父よ、悲しむ者に御力を与えたまわんことを、せつに祈り奉る。願わくはすべての思い煩いを主にゆだね、主の愛の慰めを悟ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司式者 主よ、とこしえの平安を彼にあたえ

会衆 絶えざる御光をもて照らしたまえ

司式者 彼を安らかにいこわせたまえ

会衆 アーメン

司式者 願わくは世を去りし者の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを

会衆 アーメン

埋まい

葬そう

墓はかに行き棺をおろす間、司式者は墓のかたわらに立つて、次の語を唱えまたは会衆とともに歌う。

女をんなより生うまれし者はその日ひ少すくなくして、なやみ多おほし。そのきたること花はなのごとくにして散ちり、その馳はすること影かげのごとくにしてとどまらず

我われら、いのちの半なかばにも死しに臨のぞむ、我われらの罪つみを怒いかりたもうことは、まことに正ただし。されど主しゅのほか、たれに助けを求もとむべき

至し聖せいなる神かみ・いと強つよき主しゅ・聖せいにしてあわれみ深ふかき救すくい主ぬしよ、我われらを限りなき死しの苦くるしみに至いたせたまうなかれ

我われらの心の秘ひみつ密みつを知しりたもう主しゅよ、我われらの祈いのりにあわれみの耳みみを閉とじたもうなかれ  
至し聖せいなる主しゅ・いと強つよき神かみ・聖せいにしてあわれみ深ふかき救すくい主ぬし・とこしえにいます正ただしきさばき主ぬしよ、我われらを救ゆるし、臨終りんしゅうのとき死しのなやみのために主しゅを離はなるることなからしめたまへ

ここで司式者が次のように言うとき、かたわらに立つ者は棺の上に土を投じる。

全能の神、大いなるあわれみをもつて、我らが愛するこの兄弟を召したまいたれば、  
今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし、終わりの日  
のよみがえりと後の世の命とを主イエス・キリストによりて堅く望む 主イエス世を  
さばかんとて大いなる威光をもつて再びきたりたもうとき、地および海の中より死人  
を呼びだし、万物をおのれに従わせうる力をもつて、主において眠れる者の卑しき  
からだを変え、その栄光のからだにかたどらしめたもうべし

ここで司式者は次の語を歌いまたは唱える。

天より声ありて我にものを言うを聞けり。いわく、なんじこの言葉をしるせ。今よりの  
ち主にありて死ぬる死人は幸いなり。御霊も言いたもう、彼らはその働きをやめて休  
まん

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者　主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いいだしたまえ　アーメン

司式者は言う。

我ら祈るべし

神よ、主のいつくしみは量りがたし。願わくは世を去りし主のしもべ（――）のためにささぐる祈りを聞こし召し、彼を光と喜びの御国に至らせ、聖徒の交わりに入ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

我らの主イエス・キリストの父・あわれみ深き神よ、主イエスは、我はよみがえりなり、命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は、とこ

しえに死なざるべしと教え、また主において眠れる者につきて、望みなき人のごとく嘆くなかれと使徒聖パウロによりて教えたまえり。願わくは父よ、我らを罪の死より義の命によみがえらせ、この世を去るとき、主イエスにありて安らかにいこうことを得させたまえ。御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

願わくは世を去りし者の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

火葬・水葬の時にもこの式を用いる。火葬の時には、「今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし」とあるのを「今そのかばねを火にゆだね」とし、水葬のときには、「今そのかばねを海にゆだね」とする。遺骨埋葬の時には「今その遺骨を地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし」と言う。

## 墓地聖別

聖別してない墓地に埋葬するときは「女より生まれし者……」の前に司祭は次の祈りを用いる。

主イエス・キリストよ、主はヨセフの備えし新しき墓にねむり、これを御民のために望みの伏しどとして清めたまえり。願わくはこの墓地を清め、ここに葬らるるしもべらの休み所となして、彼らを安らかにいこわせたまえ。主はよみがえり、また命にして、父と聖霊とともに世々限りなく生きて統べ治めたもうなり。アーメン

# 幼年葬送式

この式は洗礼を受けた幼な子に用いる。  
司式者は棺を迎え、これにさきだつて聖堂あるいは墓に行くとき、次の聖語の一節  
または数節を歌いあるいは唱える。

葬

禱

主しゅ言いいたもう、我われはよみがえりなり、命いのちなり、我われを信しんずるものは死しぬとも生いきん。お  
およそ生いきて我われを信しんずる者ものはとこしえに死しなざるべし　ヨハネ伝一一章二五、二六節  
なんじら慎つつしみてこの小ちひさき者もののひとりをも侮あなづるな。我われなんじらに告つぐ、彼かれらの御使みつかい  
たちは天てんにありて、天てんにいますわが父ちちの御顔みかおを常つねに見みるなり　マタイ伝一八章一〇節  
我われら何なにをも携たづなえて世よにきたらず、また何なにをも携たづなえて行ゆくことあたわず。主しゅあたえ、主しゅ  
取とりたもうなり、主しゅの御名みなはほむべきかな　テモテ前書六章七節、ヨブ記一章二二節

聖堂に入りまたは墓に行つて次の詩を歌いあるいは唱える。

一 主はわが牧者なり＝ 我は乏しきことなからん

二 主は我をみどりの野に伏さしめ＝ いこいのみぎわにともないたもう

三 主はわが魂を生かし＝ 御名のために正しき道にみちびきたもう

四 たといわれ死の陰の谷を歩むとも災いをおそれじ＝ なんじ我とともにいまし、

なんじのむち、なんじのつえ我をなぐさむ

五 なんじわがあだの前にわがために宴をもうけ＝ わがこうべに油を注ぎたもう、

わが杯はあふるるなり

六 われ世にあらんかぎり恵みとあわれみとは必ず我にそいきたらん＝ 我はとこし

えに主の宮のうちに住まわん

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

ここで聖マルコの福音書第一〇章一三節から一六節までを朗読する。

イエスのさわりたまわんことを望みて、人々幼な子らを連れきたりしに、弟子たちい  
ましめたれば、イエスこれを見、憤りて言いたもう、「幼な子らの我にきたるを許せ、



止むな、神の国はかくのごとき者の国なり。まことになんじらに告ぐ、おおよそ幼な子のごとくに神の国を受くる者ならずば、これに入ることあたわず。かくて幼な子をいだし、手をその上におきて祝したまえり。

一同立つ。

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いだしたまえ。アーメン

司式者

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

司式者 我ら祈るべし

主イエス・キリストよ、主は幼な子をいだきて祝したまえり。我ら主のいつくしみを堅く信じて、この幼な子を主の大いなる愛の御手にゆだね奉る。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

命のもとなる全能の神よ、主の摂理はくすしく、いつくしみは量りがたし。願わくはこの幼な子のために嘆くしもべらを慰め、この世にては主を信じ、主に仕え、とこしえの御国にては彼とともに主の約したまえる幸いにあずかることを得させたまえ。主イエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで適当な祈りおよび次の語を用いてもよい。

司式者 主の御前にはみち足れる喜びあり

会衆 主の右にはもろもろの楽しみ、とこしえにあり

願わくは世を去りし幼な子の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

聖せい餐さん式しき

葬持につづいて聖餐式を行なうときは次の特持・使徒書・福音書を用いる。

特とく持もち

限りなく生ける神よ、主はたえなる知恵をもつて天の使いと世の人との位を立て、その務めを定めたまえり。願わくは天において常に主に仕うる御使いに命じて、地にある我らを守らしめたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使し徒と書しよ 黙もく五章一―一四

我また見しに、御位と生物と長老たちとの囲りにおる多くの御使いの声を聞けり。その数、千々万々にして、大声に言う「ほふられたまいし小羊こそ力と富と知恵と勢いと尊きと栄光と賛美とを受くるにふさわしけれ」。我また天に、地に、地の下に、海にあるよろずの造られたる物、またすべてそのうちにある物の言えるを聞けり。いわく「願わくは御位に座したもうものと小羊とに賛美と尊きと栄光と力と世々限りなくあらんことを」。四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拜せり。

福音書 ヨハ一章四七—五一

イエス、ナタナエルのおのがもとにきたるを見、これをさして言いたもう、「見よ、これまことにイスラエルびとなり、そのうちに偽りなし」。ナタナエル言う、「いかにして我を知りたもうか」。イエス答えて言いたもう、「ピリポのなんじを呼ぶまえに、我なんじがいちじくの木の下におるを見たり」。ナタナエル答う、「ラビ、なんじは神の子なり、なんじはイスラエルの王なり」。イエス答えて言いたもう、「我なんじがいちじくの木の下におるを見たりと言いにしによりて信ずるか、なんじこれよりもさらに大なる事を見ん」。また言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、天ひらけて人の子の上に神の使いたちの上り下りするをなんじら見るべし」。

告別

葬禮または聖餐式につづいて次の告別を用いてもよい。

司式者は棺のかたわらに立つて、会衆とともに次の詩を歌いまたは唱える。

詩の前に司式者または始唱者は次の語を用い、栄光の頌の後には一同で用いる。

彼は主より幸いをうけ— その救いの神より義をうくべし

詩二十四篇

一 地ちとそれに満みてるものは主しゅのものなり＝ 世界せかいとそのなかに住すむものは主しゅのものなり

二 主しゅはその基もとを大海おほうみの上にすえ＝ これを大川おおかわの上にさだめたまえり

三 主しゅの山やまに登のぼるべき者はたれぞ＝ その聖所せいじょに立つべき者はたれぞ

四 手てきよく心こゝろいさぎよき者ものぞその人ひとなる＝ むなしきことを仰あおぎ望のぞまず、偽いつはりりの誓ちか

いをせざる者ものぞその人ひとなる

五 かかる人ひとは主しゅより幸さいわいいをうけ＝ その救すくいの神かみより義ぎをうくべし

六 これぞ神かみを慕しとう者もののやから＝ ヤコブの神かみの御顔みがおを求もとむる者もののやからなる

七 門かどよ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸とよ、あがれ＝ 栄光えいこうの王おういりたまわん

まわん

八 栄光えいこうの王おうはたれなるか＝ 力ちからを持もちたもう主しゅなり、戦たたかいに勇いさましき主しゅなり

九 門かどよ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸とよ、あがれ＝ 栄光えいこうの王おういりたまわん

まわん

二〇 この栄光の王はたれなるか＝ 万軍の主、これぞ栄光の王なる

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン  
彼は主より幸いをうけ＝ その救いの神より義をうくべし

司式者 主よ、あわれみたまえ

会衆 キリストよ、あわれみたまえ

司式者 主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめた  
まえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も  
与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我ら  
を試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ アーメン  
司式者 罪なきゆえになんじは我を受けたまえり

会衆

なんじは、とこしえに我を御顔の前におきたもうなり

司式者

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

司式者

我ら祈るべし

いつくしみ深き全能の神よ、主は洗礼を受けて新たに生まれ、御定めによりて世を去りし幼な子に限りなき命を与えたもう。願わくは我らに御恵みを与え、この世にて忠実に主に仕え、ついに天の御国にて彼らとともに、とこしえの幸いにあずかることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に司祭は言う。

願わくは世を去りし幼な子の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

埋

葬

墓に行き棺をおろす間、司式者は墓のかたわらに立つて次の語を唱えまたは会衆とともに歌う。

女より生まれし者はその日少なくして、なやみ多し。そのきたること花のごとくにして散り、その馳すること影のごとくにしてとどまらず

主は牧者のごとくその群れを養い、そのかいなにて小羊をいだき、これをそのふところにいれて携え、乳をふくます者を柔らかに導きたまわん

なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住みか多し、しからずば我かねてなんじらに告げしならん

ここで司式者が次のように言うとき、かたわらに立つ者は棺の上に土を投じる。

全能の神、大いなるあわれみをもって我らが愛するこの幼な子を召したまいたれば、今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし、終わりの日のよみがえりと後の世の命とを主イエス・キリストによりて堅く望む。主イエス世をさばかんとて大いなる威光をもって再びきたりたもうとき、万物をおのれに従わせうる力をもって、主にありて眠れる者の卑しきからだを変え、その栄光のからだにかた



どらしめたもうべし

ここで司式者は次の語を歌いまたは唱える。

彼らは神の御位のまえにありて、昼も夜もその聖所にて神に仕う。みくらに座したも

う者は、彼らの上に幕屋を張りたもうべし。

彼らは重ねて飢えず、重ねてかわかず、日も熱も彼らを侵すことなし

御位の前にいます小羊はかれらを牧して命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より涙

をぬぐいたもうべし

司式者 主よ、あわれみたまえ

会衆 キリストよ、あわれみたまえ

司式者 主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も

与<sup>あた</sup>えたまえ。我<sup>われ</sup>らに罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>すものを我<sup>われ</sup>ら赦<sup>ゆる</sup>すごとく、我<sup>われ</sup>らの罪<sup>つみ</sup>をも赦<sup>ゆる</sup>したまえ。我<sup>われ</sup>らを試<sup>こころ</sup>みにあわせず、惡<sup>あく</sup>より救<sup>すく</sup>いいだしたまえ　アーメン

司式者

幼<sup>おさ</sup>な子<sup>ご</sup>の我<sup>われ</sup>にきたるを許<sup>ゆる</sup>せ

会衆

神<sup>かみ</sup>の国<sup>くに</sup>はかくのごとき者<sup>もの</sup>の国<sup>くに</sup>なり

司式者

主<sup>しゅ</sup>なんじらとともにいますことを

会衆

主<sup>しゅ</sup>なんじの靈<sup>れい</sup>とともにいますことを

司式者

我<sup>われ</sup>ら祈<sup>いの</sup>るべし

いとあわれみ深<sup>ふか</sup>き父<sup>ちち</sup>よ、我<sup>われ</sup>らこの幼<sup>おさ</sup>な子<sup>ご</sup>の魂<sup>たましひ</sup>を慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>の御<sup>み</sup>手<sup>て</sup>にゆだね奉<sup>たてまつ</sup>る。願<sup>ねが</sup>わくは我<sup>われ</sup>らに恵<sup>めぐ</sup>みを与<sup>あた</sup>え、この世<sup>よ</sup>にて主<sup>しゅ</sup>をおそれ、主<sup>しゅ</sup>を愛<sup>あい</sup>し、この世<sup>よ</sup>を去<sup>さ</sup>るとき、主<sup>しゅ</sup>のいつくじみによりて平安<sup>へいあん</sup>にいこうことを得<sup>え</sup>させたまえ。願<sup>ねが</sup>わくは終<sup>お</sup>わりの日<sup>ひ</sup>のよみがえりの時<sup>とき</sup>、彼<sup>かれ</sup>とともに我<sup>われ</sup>らを御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>にかのう者<sup>もの</sup>と認<sup>みと</sup>め、御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>イエス・キリストより、わが父<sup>ちち</sup>に祝<sup>ゆづ</sup>せられたる者<sup>もの</sup>よ、きたりて世<sup>よ</sup>の初<sup>はじ</sup>めより、なんじらのために備<sup>た</sup>えられたる国<sup>くに</sup>を継<sup>つ</sup>げとの御<sup>み</sup>声<sup>こゑ</sup>をきく幸<sup>さいわい</sup>にあずからしめたまえ。我<sup>われ</sup>らの贖<sup>あがな</sup>い主<sup>ぬし</sup>イエス・キリストによりて

こいねがい奉る。アーメン  
全能の神・慈悲の父よ、悲しむ者に御力を与えたまわんことをせつに祈り奉る。願わ  
くはすべての思い煩いを主にゆだね、主の愛の慰めを悟ることを得させたまえ。主イ  
エスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は言う。

願わくは世を去りし幼な子の魂、主のあわれみによりて安らかにいこわんことを。

アーメン

# 大齋懺悔式

この式は大齋始日その他主教の定める日に用いる。ただし詩五十一篇を省き、以下を嘆願の「キリストよ、我らの願いをききたまえ」につづけてもよい。

一同ひざまずき次の詩を歌いまたは唱える。

## 詩五十一篇

- 一 ああ神よ、願わくはなんじのいつくしみによりて我をあわれみ＝なんじの豊か  
なるあわれみによりて、わがもろもろのとがを消したまえ
- 二 わが不義をことごとくあらい去り＝我をわが罪よりきよめたまえ
- 三 我はわがとがを知る＝わが罪は常にわがまえにあり
- 四 我はひとえになんじに罪をおかし、御前に悪しきことをおこなえり＝さればな  
んじの宣告はなんじの義をしめし、なんじのさばきはあやまりなし
- 五 見よ、我よこしまのうちに生まれ＝わが母罪のうちにありて我をはらみたりき
- 六 なんじはわがうちにまことを求めたもう＝さればわが心ふかく知恵を知らしめ  
たまえ

セ ヒソブをもて我を清めたまえ、さらば我きよくならん＝ われを洗いたまえ、さ

らばわれ雪よりもしろくならん

願わくはわれに喜びと楽しみとをみたし＝ なんじが砕きし骨を喜ばせたまえ

願わくは御顔をわが罪よりそむけ＝ わがすべての不義をけしたまえ

神よ、わがために清き心をつくり＝ わがうちに直き霊をあらたにおこしたまえ

我を御前より捨てたもうなかれ＝ なんじのきよき霊を我より取りたもうなかれ

なんじの救いの喜びを我にかえし＝ 自由の霊にて我をささえたまえ

さらば我、とがを犯せる者になんじの道をおしえん＝ 罪びとはなんじに帰りき

たるべし

神よ、わが救いの神よ、血を流しし罪より我を助けいだしたまえ＝ わが舌は声

たからかなんじの救いをうたわん

主よ、わがくちびるを開きたまえ＝ さらにわが口なんじの誉れをあらわさん

なんじはいけにえを好みたまわず＝ たといわれ燔祭をささぐるともなんじ喜び

たまわず

七 神かみの求めたもう供え物もつは砕けたるたましいなり＝ 神かみよ、なんじは砕けたる悔い

し心こころを輕かろしめたもうまじ

八 願ねがわくは御心みこころに従したがいてシオンをさきわい＝ エルサレムの石いしがきを、ふたたびき

ずきたまえ

九 その時ときなんじ正ただしきいけにえと燔祭はんさいと全またき燔祭はんさいとを喜よろこびたまわん＝ かくて人々ひとびと

なんじの祭壇さいだんに雄牛おしをささげん

父ちちと子こと聖靈せいれいに＝ 栄光えいこうあれ

始はじめにあり、今いまあり＝ 世々よよ限りなくあるなり アーメン

司式者ししきしゃ 主しゅよ、あわれみたまえ

会衆かいしゅう キリストよ、あわれみたまえ

司式者ししきしゃ 主しゅよ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天てんにまします我われらの父ちちよ、願ねがわくは御名みなを聖せいとなさしめたまえ。御国みくにをきたらしめた

まえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ アーメン

司式者 主よ、しもべを救いたまえ

会衆 我ら主にたよれり

司式者 主よ、天より助けをくだしたまえ

会衆 大いなる力をもつて常に我らを守りたまえ

司式者 救いの神よ、我らを助けたまえ

会衆 御栄えのために我らを救い、御名のゆえに我ら罪びとをあわれみたまえ

司式者 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司式者 我ら祈るべし

主よ、あわれみをもつて我らの祈りを聞こし召し、その罪を懺悔する者をことごとく赦したまえ。願わくは罪のために良心の責めらるる者は、慈悲ふかき主より赦しをこ

うむりて、全く安んずることを得させたまえ。主イエスⅡキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

慈悲ふかき父・全能の神よ、主は造りたまひし物を一つも憎まず、すべての人を深くあわれみ、罪びとの死ぬるを好まずして、その惡を離れ救はるることを喜びたまう。願わくはあわれみをもつて我らのとがを赦したまえ。我らはまことに罪に悩み、その重荷に耐えがたし。父よ、我らを受け、我らを慰めたまえ。主は常にあわれみあり、ただ主のみ罪を赦したもう。慈悲ふかき主よ、我らを赦したまえ。贖いたまえるしもべを赦したまえ。願わくは土くれのごとき罪びとをさばきたもうなかれ。我らはおのれの卑しきを知り、自らの罪を深く悲しめり。主よ、怒りたまうことなく、今すみやかに我らを助け、後の世に限りなく主とともにおらしめたまえ。主イエスⅡキリストによりて聞こし召したまわんことをこいねがい奉る。アーメン

次に一同、次の祈りを用いる。

慈悲ふかき主よ、我らをかえしたまえ、我ら主に帰らん。主よ、願ひたまえ。いま悲



しみと祈りと断食とをもつて主に帰るしもべを願ひたまえ。主はあわれみふかく、恵みち、ながく忍びたまう。主は罰せらるべき者をも赦し、怒りの中にもあわれみを忘れたまわず。慈悲ふかき主よ、願わくは赦したまえ。主の民を赦したまえ。主のゆずりを滅ぶるに任がせたもうなかれ。恵みに富みたまう主よ、大いなるあわれみをもつて我らを願ひ、我らの祈りを聞き召したまえ。御子イエスキリストのいさおによりてこいねがい奉るアーメン

次に司式者は言う。

願わくは主われらを祝し、我らを守りたまわんことを。願わくは主、御顔をもつて我らを照らし、我らを恵みたまわんことを。願わくは主御顔を我らに向け、限りなく平安をあたえたまわんことを。アーメン

説教のないとき、司式者は次の勧告を詩五十一篇または嘆願の前に用いてもよい。

兄弟よ、むかし公会には明らかに大罪を犯したる者を大斎の初めに当たり、会衆の前にて懲らしむるなりあり。これ、この世にて罰せらるるとも、主の日に救われんため、また他人にも戒めとなりて罪を犯すことを恐れしめんために、罪に対する神の大

いなる怒りと、悔い改めざる者にきたるべきさばきとを思い、罪と怠りとを嘆き、行ないを改むることを決心し、神のあわれみを願うためなり。

今や木の根におのは置かる。ゆえにすべて良き実を結ばざる木は切られて火に投げ入れらる。主の日のきたるはぬすびとの夜きたるがごとし。人々平和無事なりと思うとき滅びたちまちきたらん。主言いたもう、「その時かれら我を呼ばん。されど我こたえじ。ひたすら我を求めん。されど我に会わじ。彼ら知識を憎み、主をおそるる事を喜ばず、わが務めに従わず、すべてわが懲らしめを卑しめたるによりてなり」と。門を閉じて後たたくは遅れたり。さばきのときあわれみを願うはおそし。その時かれらの罪を正しく定めたもう主は、いと恐るべき声にて言いたまわん、「のろわれたる者よ、我を離れて悪魔とその使いらのために備えられたる消えざる火に入れ」と。

ゆえに兄弟よ、救いの日の過ぎざるうちに慎むべし。夜きたらば、たれも、わざをなすことあたわず。されば光あるうちに光を信じ、光の子のごとく歩むべし。神の恵みをなみするなかれ。神は大いなるあわれみをもつて我らを悔い改めに導き、また真心をもつて帰る者の罪を赦すことを約したまえり。我ら罪を犯したれども、我らをと

なす義なるイエス・キリスト父のまえにあり、彼は我らの罪のために、なだめの供え物なり。彼は我らのとがのために傷つけられ、我らの不義のために打たれたまえり。ゆえにあわれみ深き主に帰るべし。必ず我らを受け、我らの罪を赦したもうことを疑うなかれ。常に主にならいてへりくだり、耐え忍び、愛する心をいだき、聖霊の導きに従い、主の栄光をあらわし、感謝して主に仕うることを努むべし。

願わくは大いなるあわれみによりて、我らを御国に至らせたまわんことを　アーメン

# 聖職按手式

序

言

聖書ともろもろの古書を研究すれば、キリストの公会に使徒時代より主教・司祭・執事の職位ありしこと明らかなり。しかしてこの職位はいにしえより大いに重んずるところにして、なにびとたりとも、あえて、みずからほしいままに行のうことを許さず。必ずまず召され、試みられ、適當なる者と認められ、公禱式と正當なる有権者の按手により立てられたる者にかぎられたり。日本聖公会においても、長くこの職位を維持し、うやうやしくこれを行のうものなり。ゆえに、まず召され、試みられ、次の式に従いて立てられたる者、または聖公会の主教によりて立てられたる者にあらざれば、日本聖公会の主教・司祭・執事と認め、その職を行のうことを得ず。また法規に定めたる年齢の者にあらざればこれらの職に任命すべからず

主教自ら調査し、あるいは他の証明によって、執事志願者または司祭志願者が品行

正しく罪過のないことをつまびらかにし、また試験して、その人が聖書に通じ、法規に定めた学識があることを認めたときは次の式に従つて、会衆の前で執事・司祭に任じることができる。

この式は聖職按手節に行なう。必要のときは主日または他の祝日あるいは平日に行なつてもよい。

## 執事 按手

あまねく教会の祈禱と立証を求めるため、教区主教が教区内各教会および各教区に  
あらかじめ公告した日に、早禱が終わってから、主教指名の聖職が執事の職分のこ  
と、その職位の公会に必要なこと、信徒はこれを尊敬すべきこと等を示す説教をす  
る。説教が終わって主教は祭壇に近い座に着く。一人の司祭は正服を着けた志願者  
を伴い聖所の入口に立つて次のように推薦する。

師父よ、この人々を執事の職に任せんことを願う

主教は言う。

今なんじが推薦する人々は品行正しく学問あり、その職責を尽くして神の栄光をあら  
わし、聖公会の徳を建つるに適當なりや

司祭は答える。

すでにこの人々のことを調査し、また試験してかくのごとき者なりと思ふ

次に主教は会衆に言う。

兄弟よ、もしこの人々に著しき罪、または執事とせらるるに故障あることを知る者あ

らば、いま神の御名によりて申し立つべし

もし著しい罪、または故障があると申し立てる者があれば、その按手を中止して事の明白になるまで待たなければならぬ。

主教は言う。

我ら執事の職に任ずるに適當と認められたるこの人々のために祈るべし

ここで一同黙禱し、嘆願を歌いまたは唱える。主教・司祭・執事のための願いの次に主教は立つて左の願いを加える。

主教

願わくは今、執事の職に任ぜらるるこのしもべらを祝し、主の恵みを彼らに注ぎ、その務めを正しく行ないて聖公会の徳を建て、御名の栄光をあらわさせたまはんことを

会衆

主よ、ききたまえ

次に聖餐式を行ない、左の特禱・使徒書・福音書を用いる。

特禱

全能の神よ、主はくすしき摂理をもつて聖公会のうちに聖職を立て、その位を分かち、また使徒たちを導きて、最初の殉教者聖ステパノと他の人々を執事の職に選ばし

めたまえり。今この職に召されたるしもべらを見そなわしたまわんことをこいねがい  
奉る。願わくは主の道の真理をもつて彼らを満たし、清き生涯をもつて彼らを装い、  
忠実に主に仕え、その教えと行ないをもつて御名の栄光をあらわし、聖公会の徳を  
建つることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主イエス・キ  
リストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書　テモ前　三章八一―一三

執事もまた同じく謹厳にして、言葉を二つにせず、大酒せず、恥ずべき利をとらず、  
きよき良心をもつて信仰の奥義を保つものたるべし。まず彼らを試みて責むべき所なく  
ば、執事の職に任ずべし。女もまた謹厳にして人をそしらず、みずから制してすべて  
の事にまめやかなる者たるべし。執事はひとりの妻の夫にして子どもとおのが家とを  
よく治むる者たるべし。よく執事の職をなす者は良き地位を得、かつキリスト・イエ  
スにおける信仰につきて大いなる勇氣を得るなり。

または　使六章二―七

ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う、「我ら神の言葉をさしおきて食卓に



仕<sup>つか</sup>うるはよろしからず。されば兄弟<sup>ぎやうだい</sup>よ、なんじらのうちより御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>と知<sup>ち</sup>恵<sup>え</sup>にて満<sup>み</sup>ちたるよき聞<sup>き</sup>こえある者<sup>もの</sup>七<sup>にん</sup>人<sup>にん</sup>を見<sup>み</sup>いだせ、それにこの事<sup>こと</sup>をつかさどらせん。我<sup>われ</sup>らは、もつばら祈<sup>いの</sup>りをなす事<sup>こと</sup>と御<sup>み</sup>言<sup>ご</sup>葉<sup>は</sup>に仕<sup>つか</sup>うる事<sup>こと</sup>とを努<sup>つと</sup>めん」。集<sup>あつ</sup>まれるすべての者<sup>もの</sup>この言<sup>ご</sup>葉<sup>は</sup>をよしとし、信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>と聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>とにて満<sup>み</sup>ちたるステバノ及び<sup>およ</sup>ビリポ、プロコロ、ニカノル、デモン、パルメナ、またアンテオケの改<sup>かい</sup>宗<sup>しゆ</sup>者<sup>しや</sup>ニコラオを選<sup>えら</sup>びて、使<sup>し</sup>徒<sup>と</sup>たちの前<sup>まえ</sup>に立<sup>た</sup>てたれば、使<sup>し</sup>徒<sup>と</sup>たち祈<sup>いの</sup>りて手<sup>て</sup>をその上<sup>うへ</sup>におけり。かくて神<sup>かみ</sup>の言<sup>ご</sup>葉<sup>は</sup>ますます広<sup>ひろ</sup>まり、弟子<sup>でし</sup>の数<sup>かず</sup>エルサレムにてはなはだ多<sup>おほ</sup>くなり、祭<sup>さい</sup>司<sup>し</sup>のうちにも信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>の道<sup>みち</sup>に従<sup>したが</sup>へるもの多<sup>おほ</sup>かりき。

ここで主教は座につき、志願者に次のように問う。

主<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>

なんじらこの職<sup>しやく</sup>に任<sup>にん</sup>ぜられんとするは、聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>の感<sup>かん</sup>化<sup>か</sup>によると信<sup>しん</sup>じ、神<sup>かみ</sup>に仕<sup>つか</sup>え、

答<sup>こたえ</sup>

我<sup>われ</sup>これを信<sup>しん</sup>ず  
その栄<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>をあらわし、主<sup>しゆ</sup>の民<sup>たみ</sup>の徳<sup>とく</sup>を建<sup>た</sup>つるためなりと信<sup>しん</sup>ずるか

主<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>

なんじらこの職<sup>しやく</sup>に召<sup>め</sup>さるるは、主<sup>しゆ</sup>イエス・キリストの御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>にかない、また日<sup>にっ</sup>本<sup>ほん</sup>聖<sup>せい</sup>公<sup>こう</sup>会<sup>かい</sup>の律<sup>りつ</sup>法<sup>ぽう</sup>にかなえりと思<sup>おも</sup>うか

答<sup>こたえ</sup>

しか思<sup>おも</sup>う

主教

なんじら聖書は神より与えられ、主イエス・キリストによりて成就されたる神の啓示を我らに伝うるものなりと信ずるか

答

我これを信ず

主教

なんじら教会に集まる人々に、聖書を熱心に読み聞かすことを努むるか

答

我これを努む

主教

そもそも執事の職務は礼拝のさい、ことに聖餐を分け与うるとき、司祭を助け、また聖書を読み、少年・少女に公会問答を教え、司祭欠席のとき幼な子に洗礼を施し、主教の許しあらば説教することなどなり。また、病める者・貧しき者・弱き者を尋ね、その住所・姓名・その他の状況を司祭に報告し、会衆および他の人の信施をもつて救助にあずからしむることも執事の務めなり。なんじら喜びてこれをなすか

答

われ神の助けによりてこれをなさん

主教

なんじら慎みておのれと家族との行ないをキリストの道にかなわせ、力の及ぶ限りキリストの群れの良き模範となることを努むるか

答

われ神の助けによりてこれを努む

主教

なんじらの上に立てられたる主教と司祭を敬い、これに服し、喜びてその正しき勸告に従うか

答

われ神の助けによりてこれをなさん

主教は立つて言う。

愛する兄弟よ、いま主の公会にて執事の職に召されし主のしもべらを受け、天よりの祝福を与えたまわんことを全能の神に祈るべし

ここで一同ひざまずいて黙祷する。

主教

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

主教

なんじら心を挙げよ

会衆

我ら心を主に挙げん

主教

主なる神に感謝し奉るべし

会衆

それは正当にしてなすべきことなり

主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正當にしてなすべき務めなり。ことに主は大いなるいつくしみによりて、働きびとを刈り入れ場に送り、このしもべらを公会の執事の職に召したまいしことを感謝し、御名をほめ奉る。願わくは聖霊を彼らに満たし、七つの賜物によりて、忠実にその約束を守り、慎みへりくだりて務めをばげみ、謹厳にして清き良心を保たしめ、御子キリストによりて彼らを強めたまわんことを。願わくは栄光世々限りなく父と子と聖霊にあらんことを。アーメン

ここで志願者は主教の前にひざまずき、会衆は立つ。主教は両手を各志願者の頭において言う。

「アーメン」は司式者だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて、神の公会において執事の職を行のう権威をなんじに授く  
アーメン

主教はおのおのに新約聖書を渡して言う。

神の公会において福音を読み、また主教の許しあらば説教する権威をなんじに授く

次に主教の指名した新執事は福音書を読む。

福音書 ルカ二章 三五—三八

イエス言いたもう、「なんじら腰に帶し、ともしびをともしておれ。主人、婚宴より歸りきたりて戸をたたかば、ただちに開くために待つ人のごとくなれ。主人のきたるとき、目をさましおるを見らるるしもべどもは幸いなるかな。我まことになんじらに告ぐ、主人、帶してそのしもべどもを食事の席に着かせ、進みて給仕すべし。主人、夜の半ばごろもしくわ夜の明くるころにきたるとも、かくのごとくなるを見らるるしもべどもは幸いなり」。

主教は聖餐式をつづける。新執事は主教とともに聖餐を受ける。  
祝福の前に次の祈りを用いる。

もろもろの良き物を与えたもう全能の神よ、大いなる恵みをもつてこのしもべらを受け、主の公会の執事の職に用いたもうことを感謝し奉る。願わくは彼ら常に懐みへりくだり、怠りなくその職を行ない、快く公会のおきてに従い、良心の責めなく、御子キリストにありてますます強くなり、正しくこの務めを行のうことを得させたまえ。

我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。願わくは誉れと栄え、世々限りなくイエス・キリストにあらんことを。アーメン

主教は正当な理由があるときのほか、新執事が一年以上在職しなければ司祭に按手しない。

# 司祭按手

あまねく教会の祈祷と立証を求めるため、教区主教が教区内各教会および各教区に  
あらかじめ公告した日に、早禱が終わってから、主教指名の聖職が司祭の職分のこ  
と、その職位の公会に必要なこと、信徒はこれを尊敬すべきこと等を示す説教をす  
る。説教が終わって主教は祭壇に近い座につく。一人の司祭は正服を着けた志願者  
を伴い次のように推薦する。

師父よ、この人々を司祭の職に任ぜんことを願う

主教は言う。

今なんじが推薦する人々は品行正しく學問あり、その職責を尽くして神の栄光をあら  
わし、聖公会の徳を建つるに適當なりや

司祭は答える。

すでにこの人々のことを調査し、また試験してかくのごとき者なりと思う

次に主教は会衆に言う。

兄弟よ、今日この人々を司祭の職位に任ぜんとす。我らはすでに彼らを試験して、正  
しくこの職に召され、またその職務を行のうに適當なる者と思う。しかれども、もし

この人々に著しき罪、またはこの職位に任ぜらるるに故障あることを知る者あらば、いま神の御名によりて申し立つべし

もし著しい罪または故障があると申し立てる者があれば、その接手を中止して事の明白になるまで待たなければならぬ。  
主教は言う。

我ら司祭の職に任ずるに適當と認められたるこの人々のために祈るべし

ここで一同黙禱し、嘆願を歌いまたは唱える。主教・司祭・執事のための願いの次に主教は立つて左の願いを加える。

主教

願わくは今、司祭の職に任ぜらるるこのしもべらを祝し、主の恵みを彼らに注ぎ、その務めを正しく行ないて聖公会の徳を建て、御名の栄光をあらわさ

せたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

次に聖餐式を行ない、左の特禱・使徒書・福音書を用いる。

特禱

もろもろの良き物を与えたもう全能の神よ、主は聖霊をもつて公会のうちに聖職を立



で、その位くらゐを分わかちたまえり。いま司祭しさいの職しやくに召よされたるこのしもべらを見みそなわし  
たまわんことをこいねがい奉ほうる。願ねがわくは主しゅの道みちの真理しんりをもつて彼らかれを満みたし、清きよき  
生涯しやうがいをもつて彼らかれを装まい、忠実ちゅうじつに主しゅに仕つかえ、その教おしえと行おこないをもつて御名みなの榮光えいこうを  
あらわし、聖公會せいこうかいの徳とくを建たつることを得えさせたまえ。父ちちと聖靈せいれいとともに世々よよ統すべ治おさめ  
たもう救すくい主ぬしイエス・キリストのいさおによりてこいねがい奉ほうる。アーメン

使徒書 エペ四章 七一—三

我われらはキリストの賜物たまものの量はかりにしたがついて、おのおの恵めぐみを賜たまはりたり。されば言いえ  
ることあり、「かれ高たかきところところに上のぼりしとき、多おほくのとりこをひきい、人々ひとびとに賜物たまものを  
賜たまえり」と。すでに上のぼりしと言いえば、まず地ちの低ひくき所ところまで下くだりしにあらずや。下くだりし  
者ものはすなわちよろずの物ものに満みたんために、もろもろの天てんの上うへに上のぼりし者ものなり。彼かれはあ  
る人ひとを使徒しととし、ある人ひとを預言者よげんしやとし、ある人ひとを伝道者でんどうしやとし、ある人ひとを牧師ぼくしとして与あた  
えたまえり。これ聖徒せいとを全まじうして務めつとめを行おこなわせ、キリストのからだを建たて、我らわれを  
してみな信仰しんようと神かみの子こを知る知識ちしきとに一致いちちせしめ、全まじき人ひと、すなわちキリストの満みち  
足たれるほどに至いたらせんためなり。

福音書 マタ九章 三六―三八

イエス群衆を見て、その飼う者なき羊のごとく悩み、かつ倒るるをいたくあわれみ、ついに弟子たちに言いたもう、「刈り入れは多く働きびとはすくなし。このゆえに刈り入れの主に働きびとをその刈り入れ場につかわしたまわんことを求めよ」。

または ヨハ一〇章 一一―一六

イエス言いたもう、「まことになんじらに告ぐ、羊のおりに門より入らずして、ほかより越ゆる者は、盗びとなり、強盗なり。門より入る者は、羊の羊飼いななり。門守は彼のために開き、羊はその声をきき、彼はおのれの羊の名を呼びてひきいだす。ことごとくその羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その声を知るによりて従うなり。ほかの者には従わず、かえつて逃ぐ、ほかの者どもの声を知らぬゆえなり」。イエスこの譬を言いたまへど、彼らその何事を語りたもうかを知らざりき。このゆえにイエスまた言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、我は羊の門なり。すべて我より先にきたりし者は盗びとなり、強盗なり、羊はこれに聞かざりき。我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入りをなし、草をうべし。盗びとのきたる

は盗み、殺し、滅ぼさんとするの外なし。わがきたるは羊に命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり。我は良き羊飼いななり、良き羊飼いは羊のために命を捨て。羊飼いならず、羊もおのがものならぬ雇いびとは、おおかみのきたるを見れば羊を捨てて逃ぐ、——おおかみは羊をうばいかつ散らす、——彼は雇いびとにて、その羊を顧みぬゆえなり。我は良き羊飼いにしてわがものを知り、わがものは我を知る、父の我を知り、我の父を知るがごとし、我は羊のために命を捨て。我にはまたこのおりのものならぬほかの羊あり、これをも導かざるを得ず、彼らはわが声をきかん、ついに一つの群れひとりの羊飼いとなるべし」。

ここで会衆は座につき、主教は座して言う。

兄弟よ、なんじらが召されたる職位のいと尊く、いと重きことを試験の時にも学び、今また説教にても福音書・使徒書のうちにても聞けり。我も主イエス・キリストの名によりて重ねてなんじらに勉む。なんじらこの位のいかに尊く、この職のいかに重きかを思うべし。なんじらは主の使い・主の斥候・主の家づかさとなりて、主の家族を教え、これを戒め、これを養い、これを守り、また散りたるキリストの羊を集め、この

悪しき世にある主の子供らを尋ね、キリストの限りなき救いに導くことを努むべき者なり。ゆえに、なんじら心に於て常に忘るることなかれ。なんじらが預かる宝はまことに大なり。これキリストの羊にして尊き血をもつて買いたまいしものなり。なんじらが仕うべき教会は主の花嫁・主のからだなり。もしその教会あるいはその信徒が、なんじらの怠りによりて害をうけ、またはつまずくことあらば、その罪のいかに大いにして、その罰のいかに恐るべきかを悟るべし。ゆえに神の子供ら、キリストの花嫁・キリストのからだに對するなんじらの職務をよく考え、苦勞をいとわず、力を尽くして、なんじらの預かる会衆を導き、彼ら相ともにますます神を信じ、神を知り、ついにキリストにありて全き者となり、誤れる信仰・よこしまの行ないに入るべき余地なきに至らしむるよう努むべし。なんじらの職務はかくのごとく尊くして容易ならざるものなれば、深く心をくばり、思いを巡らしてこれに当たり、なんじらをこの尊き職位に召したまいし主に忠義を尽くし、自らつまずかず、また他人をつまずかせざるよう慎むべし、しかれどもこれを願う志とこれをなす力とはおのれよりのものにあらず、ただ神の賜物なれば、ひたすら聖靈を求めざるべからず。また人々の救い

にかかわるこの重き職務は、聖書の教えとこれにかのう行ないとによらずして尽くすことあたわされば、ねんごろに聖書を学び、努めておのれと家族との行ないをその戒めになわさせ、また力の及ぶ限り、この世の思わずらいを捨つべし。思うになんじらすでに自らこれらのことをよくはかり、力を尽くしてその身をこの職にゆだね、一心にこれに従事することを神の恵みによりて決心したるならん。またなんじら、これがために、必らず救い主イエス・キリストのとりなしによりて常に父なる神に祈り、聖霊の助けを求め、また日々聖書を読み、これを味わい、これによりてますますその職に熟達し、絶えずなんじらと家族との行ないを清めて、キリストの教えにかのう良き模範となることを努むるならん

我いま神とその公会の名をもつて、なんじらに問わん。これ、この会衆なんじらの誓約を聞きてなんじらの心を知り、またなんじらも一層その務めを励まんためなり

主教

なんじらこの職に召さるるは主イエス・キリストの御心にかない、また日本聖公会の律法にかなえりと思ふか

答

しか思おもう

主教

なんじら聖書せいしよはイエス・キリストによりて限りなき救すくいをうるに必要な教おしえをことごとく載のせたりと信しんずるか。またこの聖書せいしよをもつてなんじらにゆだねられたる人々ひとびとを教おしえ、かつ聖書せいしよをもつて証明しやうめいし得えざることは何なにをも限りなき救すくいに必要ひつようとして教おしえざることを決心けっしんしたるか

答

我われかく信しんじ、また神かみの恵めぐみによりてかくなさんと決心けっしんせり

主教

なんじら神かみの命めいじたまひしごとく、また公会こうかいが神かみの命めいによりて奉ほうずることく、常に勵はげみて教理きうりを教おしえ、聖餐せいあんを行おこない、キリストの戒いめを説とき、なんじが預あずかる会衆かいしゆにこれを守まもることをねんごろに教おしうるか

答

われ神かみの助たすけによりてかくなさん

主教

なんじら神かみの御言葉みことばにそむく異なる教おしえを教会きやうかいより払い去さり、健すこやかなる者ものと病やめる者ものとのわかちなく、公けにも私わたくしにも、すべての信徒しんとを戒いしめ、また勸すすむることを努つとむるか

答

われ神かみの助たすけによりてかくなさん

主教しゅきやう

なんじら世よと肉にくとの思おもい図はかりを捨て、祈いのりを励はげみ、聖書せいしよを讀よみ、その研究けんぎゆの助たすけとなる學問がくもんをなすことを努つとむるか

答こたへ

われ神かみの助たすけによりてこれを努つとむ

主教

なんじら慎つつしみておのれと家族かぞくとの行おこないをキリストの道みちにかなわせ、力ちからの及およぶかぎりキリストの群むれの良よき模範もはんとなることを努つとむるか

答

われ神かみの助たすけによりてこれをなさん

主教

なんじら力ちからを尽つくしてキリストの民たみ、ことになんじらの預あづかる会衆かいしゆの間まの平和へいと愛あいを常つねに保たもたしむることを努つとむるか

答

われ神かみの助たすけによりてこれをなさん

主教

なんじらの上うへにたてられたる主教しゅきやうを敬うやまい、喜よろこびてその正ただしき勸告かんこくに従したがひ、その正ただしき裁決さいけつに服あづかするか

答

われ神かみの助たすけによりてかくなさん

主教は立つて言う。「アーメン」は主教だけが言う。

願ねがわくはこの志こころざしをなんじらに与あたえたまいし全能ぜんんのうの神かみ、これらの事ことを成なし遂とぐる力ちからを与あたへ

え、なんじらの心に始めたまいしみわざを全うしたまわんことを、主イエス・キリストによりて願う アーメン

主教はまた言う。

愛する兄弟よ、いま公会にて司祭の職に召されし主のしもべらを受け、天よりの祝福を与えたまわんことを全能の神に祈るべし

一同ひざまずいて黙祷する。

黙祷の後に、主教と会衆は交互に次の聖歌の各節を一小節ずつ歌いまたは唱える。

### 聖霊を求むる歌

- |   |          |          |
|---|----------|----------|
| 一 | みたまよくだりて | ながつくりましし |
|   | こころにめぐみを | あふれしめたまえ |
| 二 | ななのたまものの | あぶらをそそぎて |
|   | いのちのいずみを | ひらきのましめよ |
| 三 | こころのくらきを | てらしみちびきて |
|   | けがれもはじをも | とりのぞきたまえ |



四

わがうちにやどり やすきを たもたせ

そとべより おそう あたを ふせぎてよ

五

ちち みこ みたまの みつの くらいなる

ひとりの みかみを さとらしめ たまえ

六

ちち みこの おくる みたま みちびけば

かみの みさかえを とこしえに うたわん

アーメン

主教しゅじょう

主しゅなんじらとともにいますことを

会衆かいしゅう

主しゅなんじの 霊れいとともにいますことを

主教

なんじら心こころを挙げよ

会衆

我われら心こころを主しゅに挙げん

主教

主しゅなる神かみに感謝かんしゃし 奉たてまつるべし

会衆

そは正せい当とうにしてなすべきことなり

主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正當にしてなすべき務めなり。主は大いなるいつくしみによりて、ひとりの御子イエス・キリストを与え、我らの贖い主・限りなき命の与え主となしたまえり。御子はその死をもって我らの贖いを成就し、天に昇りしのち使徒・預言者・伝道者・教師・牧師を送り、その働きによりて全地にわたりて大いなる群れをあつめ、御名の誉れをあらわしたまえり。かく大いなる恵みをたれ、今また救いのために定めたまえる同じ職位にこのしもべらを召したまいしことを感謝し、主をほめたたえ、主を拝み奉る。願わくは聖霊をもって彼らを満たし、ここにもいずこにても、主の御名を呼ぶ者、つねにこの恵みを感謝し、日々信仰に進み、またこの仕えびとら及びその預かる教会、常に御名をほめ、ますます御国をひろむることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで志願者は主教の前にひざまずき会衆は立つ。主教は両手を各志願者の頭において言う。臨席の司祭も主教とともに手をおく。「アーメン」は主教だけが言う。

父と子と聖霊の御名によりて我なんじに手をおく。なんじ神の公会にて司祭の職位に

つき、その務めを行のうために、聖霊を受けよ。なんじ、たれの罪をゆるすともその罪ゆるされ、たれの罪を定むるともその罪定めらるべし。なんじ忠実に神の言葉をわかし、聖奠を施すことを努むべし。アーメン

主教はおのおのに聖書を渡して言う。

なんじの預かる教会に神の言葉を宣べ、聖奠を行のう權威を授く

次にニケヤ信経を歌いまたは唱える。主教はつづいて聖餐式を行なう。新司祭は主教とともに聖餐を受ける。

祝福の前に次の祈りを用いる。

いつくしみ深き全能の父よ、願わくはこのしもべらに天の恵みをくだし、義の衣をもつて彼らを装い、その宣ぶる御言葉むなしくならず、豊かに良き実を結ぶことを得させたまえ。また願わくは彼ら御言葉を宣べ、あるいはこれに基づきて教うるるとき、我ら救いの道としてこれを受け、言葉と行ないをもつて御栄えをあらわし、御国をひろむることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

執事按手式と司祭按手式とをあわせ行なうときは、まず執事志願者を推薦し、次に司祭志願者を推薦する。嘆願は一度だけ用い、特祷は順に二つとも用いる。使徒書

はエペソ書第四章七節―一三節までを朗読し、後直ちに執事志願者を試問して任職する。次にそのひとり福音書、マタイ伝第九章三六節―三八節まで、またはルカ伝第二章三五節―三八節までを朗読し、終わって司祭志願者を試問して任職する。

# 主教按手

あまねく教会の祈祷と立証を求めるため、主教会が各教区に、また当該教区主教あるいは管理主教がその教区内各教会に、あらかじめ公告した日に、早禱が終わつてから、司式主教は聖餐式を行ない、次の特禱を用いる。

## 特禱

全能の神よ、主は御子イエス・キリストをもつて、聖なる使徒たちにもろもろの良き賜物をさづけ、主の群れを養うことを命じたまえり。願わくは主の民を牧するすべての主教、忠実に御言葉を宣べ、正しく公会を治め、信徒ら喜びてこれに従い、ともに限りなき栄光の冠を受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に主教の一人は使徒書を、他の一人は福音書を歌いまたは朗読する。

## 使徒書 テモ前三章 一―七

「人もし監督の職を慕わば、これ良きわざを願うなり」とは、信ずべき言葉なり。それ監督は責むべき所なく、ひとりの妻の夫にして自ら制し、憤み、品行正しく、旅び

とをねんごろにもてなし、よく教え、酒をたしなまず、人を打たず、寛容にし、争わず、金をむさぼらず、よくおのが家を治め、謹厳にして子どもを柔順ならしむる者たるべし、(人もしおのが家をおさむることを知らずば、いかでか神の教会を扱うことを得ん)。また新たに教えに入りし者ならざるべし、おそらくは高慢になりて惡魔と同じさばきを受くるに至らん。外の人にもよき聞こえある者たるべし、しからずばしりと惡魔のわなとに陥らん。

または 使二〇章 一七一三五

パウロ、ミレトより人をエペソにつかわし、教会の長老たちを呼びて、そのきたりし時、かれらに言う、「わがアジアにきたりし初めの日より、いかなるさまにて常になんじらとともにおりしかは、なんじらの知るところなり。すなわち謙その限りをつくし、涙を流し、ユダヤびとのばかりごとによりて迫りきし試験に耐えて主に仕え、益となることは何くれとなくはばからずして告げ、公けにても家々にてもなんじらを教え、ユダヤびとにもギリシヤびとにも、神に對して悔い改め、我らの主イエスに對して信仰すべきことを証しせり。見よ、今われは心からめられて、エルサレムに行く。

かしこにていかなることの我に及ぶかを知らず。ただ聖霊いずれの町にても我に証しして、なわめと悩みと我を待てりと告げたまう。されど我わが走るべき道のりと、主イエスよりうけし務め、すなわち神の恵みの福音を証しすることを果さんためには、もとより命をも重んぜざるなり。見よ、今われは知る、さきになんじらのうちを経巡りて御国を宣べ伝えしわが顔を、なんじら皆ふたたび見ざるべきを。このゆえに、我きょうなんじらに証しす、我はすべての人の血につきていさぎよし。我ははばかりずして神の御旨をことごとくなんじらに告げしなり。なんじらみずから心せよ、またすべての群れに心せよ、聖霊はなんじらを群れのなかに立てて監督となし、神のおのれの血をもて買ったまいし教会を牧せしめたもう。われ知る、わがいで去るのち、荒きおおかみなんじらのうちに入りきたりて群れを惜しまず、またなんじらのうちよりも、弟子たちをおのが方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。さればなんじら目をさましおれ。三年のあいだわが夜も昼も休まず、涙をもてなんじらのおのを訓戒せしことをおぼえよ。われ今なんじらを、主およびその恵みの御言葉にゆだね。御言葉はなんじらの徳を建て、すべての清められたる者とともに嗣業を受けし

め得るなり。われは人の金銀、衣服をむさぼりしことなし。この手はわが必要にそなえ、また我ともなる者に備えしことをなんじらみずから知る。我すべてのことにおいて例を示せり、すなわちなんじらもかく働きて、弱きものを助け、また主イエスのみずから言いたまいし、『与うるは受くるよりも幸いなり』との御言葉を記憶すべきなり。

福音書 ヨハ二一章 一五—一七

イエス、シモンⅡペテロに言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、なんじこの者どもにまさりて我を愛するか」。ペテロ言う、「主よ、しかり、わがなんじを愛することは、なんじ知りたもう」。イエス言いたもう、「わが小羊をやしなえ」。またふたび言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」。ペテロ言う、「主よ、しかり、わがなんじを愛することは、なんじ知りたもう」。イエス言いたもう、「わが羊を飼え」。三たび言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」。ペテロ三たび、「われを愛するか」と言いたもうを憂いて言う、「主よ、知りたまわぬところなし。わがなんじを愛することは、なんじ知りたもう」。イエス言いたもう、「わが羊をやしなえ」。



または ヨハ二〇章 一九―二三

この日、すなわち一週の初めの日の夕べ、弟子たちエダヤびとを恐るるによりて、おる所の戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らのうちに立ちて言いたもう、「平安なんじらにあれ」。かく言いてその手とわきとを見せたもう、弟子たち主を見て喜べり。イエスまた言いたもう、「平安なんじらにあれ、父の我をつかわしたまえるごとく、我もまたなんじらをつかわす」。かく言いて、息を吹きかけ言いたもう、「聖靈をうけよ。なんじらたれの罪を赦すともその罪ゆるされ、たれの罪をとどむるともその罪とどめらるべし」。

または マタ二八章 一八一―二〇

イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう、「われは天にても地にても、すべての権を与えられたり。さればなんじら行きて、もろもろの国びとを弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、わがなんじらに命ぜしすべてのことを守るべきを教えよ。見よ、我は世の終わりまでつねになんじらとともにあるなり」。

ニケヤ信經が終わつて、司式主教は祭壇に近い座につく。他の二人の主教は正服の

一部を着けた被選主教を伴い次のように推薦する。

師父よ、この人をひとをしゅきょう主教の職に任にんぜんことを願ねがう

司式主教は所定の証明書を朗読させ、また被選主教に次の誓約をさせる。

神の御名によりて、アーメン。日本聖公会——教区の主教に選挙せられたる我——  
必ず日本聖公会の教理・訓戒・拜式を守ることを誓う。神よ、願わくはイエス・キリストによりて助けたまわんことを

次に司式主教は言う。

兄弟よ、聖書にしろせるごとく、我らの救い主キリストは十二使徒を選び、これをつかわす前に、よもすがら祈りたまえり。またアンテオケにありし弟子たちも、パウロとバルナバに手をおきてつかわす前に、断食と祈祷をなせり。ゆえに我らもこの人を立て、聖霊の召したもう所におくらんとするに当たり、救い主キリストと使徒たちの模範にならない、全能の神に祈るべし

ここで嘆願を歌いまたは唱える。主教・司祭・執事のための願いの次に司式主教は立って左の願いを加える。

司式者

願わくはこの兄弟を祝し、御恵みをくだして、正しくその務めを尽くし主の

公会の徳を建て、御名の誉れと栄光をあらわさせたまわんことを

会衆

主よ、ききたまえ

嘆願の「キリストよ、我らの願いをききたまえ」につづいて司式主教は次の祈りを  
用いる。

もろもろの良きものを与えたもう全能の神よ、主は聖霊をもつて公会のうちに聖職を  
立て、その位を分かちたまえり。いま主教の職に召されたるこのしもべを見そなわし  
たまわんことをこいねがい奉る。願わくは主の道の真理をもつて彼を満たし、清き生  
涯をもつて彼を装い、忠実に主に仕え、その教えと行ないをもつて御名の栄光をあら  
わし、聖公会の徳を建て、良くこれを治めしめたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治  
めたもう救い主イエスキリストのいさおによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで会衆は座につき、司式主教は座して被選主教に問う。

兄弟よ、聖書においても、いにしえの公会のおきてにおいても、軽々しく人に手をお  
くことを戒め、キリストが尊き血をもつて買いたまいし公会を治むる権威をみだりに

与<sup>あ</sup>うることを禁<sup>きん</sup>じたり。ゆえに今<sup>いま</sup>この務<sup>つと</sup>めをなんじにゆだねんとするに当<sup>あ</sup>たり、次<sup>つぎ</sup>の箇<sup>かど</sup>条<sup>じょう</sup>をもつてなんじに問<sup>と</sup>わん。これなんじが神<sup>かみ</sup>の公<sup>こう</sup>会<sup>かい</sup>において、いかに行<sup>おこ</sup>なわんとするかを会<sup>かい</sup>衆<sup>しゆ</sup>とともに試<sup>こころ</sup>み、かつ証<sup>あかし</sup>しせんがためなり

司<sup>し</sup>式<sup>しき</sup>者<sup>や</sup>

なんじこの職<sup>しやく</sup>に召<sup>め</sup>さるるは主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストの御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>にかない、また日本<sup>にっぽん</sup>聖<sup>せい</sup>

答<sup>こたえ</sup>

しか思<sup>おも</sup>う

司<sup>し</sup>式<sup>しき</sup>者<sup>や</sup>

なんじ聖<sup>せい</sup>書<sup>しよ</sup>はイエス・キリストによりて限<sup>かぎ</sup>りなき救<sup>すく</sup>いをうるに必要な<sup>ひつよう</sup>なる教<sup>きやう</sup>理<sup>り</sup>をことごとく載<sup>の</sup>せたりと信<sup>しん</sup>ずるか。また聖<sup>せい</sup>書<sup>しよ</sup>をもつてなんじにゆだねられたる人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>を教<sup>おし</sup>え、かつ聖<sup>せい</sup>書<sup>しよ</sup>をもつて証<sup>しょう</sup>明<sup>めい</sup>し得<sup>え</sup>ざることは何<sup>なに</sup>をも限<sup>かぎ</sup>りなき救<sup>すく</sup>いに必要<sup>ひつよう</sup>として教<sup>おし</sup>えざることを決<sup>けつ</sup>心<sup>しん</sup>したるか

答<sup>こたえ</sup>

我<sup>われ</sup>かく信<sup>しん</sup>じ、また神<sup>かみ</sup>の恵<sup>めぐ</sup>みによりてかくなさんと決<sup>けつ</sup>心<sup>しん</sup>せり

司<sup>し</sup>式<sup>しき</sup>者<sup>や</sup>

さればなんじねんごろに聖<sup>せい</sup>書<sup>しよ</sup>をきわめ、これを悟<sup>さと</sup>らんことを神<sup>かみ</sup>に祈<sup>いの</sup>り、その正<sup>ただ</sup>しき教<sup>おし</sup>えをもつて人<sup>ひと</sup>をさとし、反<sup>はん</sup>対<sup>たい</sup>者<sup>しや</sup>を服<sup>かく</sup>せしむることを努<sup>つと</sup>むるか

答

われ神の助けによりてかくなさん

司式者

なんじ神の御言葉にそむく異なる教えを公会より払い去り、また公けにも私にも人々に勧めてこの事をなさしむるか

答

われ神の助けによりてかくなさん

司式者

なんじ神に逆ろう心と世の欲とを捨て、神をうやまい、正義を行ない、身を修めて人々の模範となり、敵する者をしてなんじをそしる余地なからしめんとするか

答

われ神の助けによりてこれをなさん

司式者

なんじ力を尽くしてすべての人の間に平和と愛を保たしめ、また神の言葉と公会のおきてに従いて人々を治めんとするか

答

われ神の助けによりてこれを努む

司式者

なんじ慎みて、人に手をおきて聖職に任じ、これをつかわすことを努むるか  
われ神の助けによりてこれを努む

答

司式者

なんじキリストのために、貧しき者・寄るべなき者を柔和にあしろうことを

努むるか

答 われ神の助けによりてこれを努む

司式主教は立つて言う。「アーメン」は司式主教だけが言う。

願わくはこの志をなんじに与えたまいし天の父・全能の神、これらの事を成し遂ぐる力を与え、なんじの心に始めたまいしみわざを全うし、終わりの日に責むべきところなからしめたまわんことを、主イエス・キリストによりて願う アーメン

司式主教はまた言う。

愛する兄弟よ、いま公会にて主教の職に召されし主のしもべを受け、天よりの祝福を与えたまわんことを全能の神に祈るべし

一同ひざまずいて黙祷する。

黙祷のうちに被選主教は正服の残部を着ける。

次に司式主教と会衆は、交互に左の聖歌の各節を一小節ずつ歌いまたは唱える。

聖霊を求むる歌

一 みたまよくだりて      ながつくりましし

こころにめぐみを      あふれしめたまえ

二 　　ななの たまものの あぶらを そそぎて

いのちの いずみを ひらきの ましめよ

三 　　こころの くらきを てらし みちびきて

けがれも はじをも とりのぞき たまえ

四 　　わがうちに やどり やすきを たもたせ

そとべより おそう あたを ふせぎてよ

五 　　ちち みこ みたまの みつの くらいなる

ひとりの みかみを さとらしめ たまえ

六 　　ちち みこの おくる みたま みちびけば

かみの みさかえを とこしえに うたわん

アーメン

司式者<sup>ししきしや</sup> 主<sup>しゅ</sup>なんじらと ともに いますことを

会衆<sup>かいしゆ</sup> 主<sup>しゅ</sup>なんじの 霊<sup>れい</sup>と ともに いますことを

司式者 　　なんじら心<sup>こころ</sup>を 挙げよ

会衆 我ら心を主に挙げん

司式者 主なる神に感謝し奉るべし

会衆 そは正當にしてなすべきことなり

司式主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正當にしてなすべき務めなり。主はその大いなるいつくしみによりて、ひとりの御子イエス・キリストをあたえて我らの贖いを成就し、天に昇りしのち使徒・預言者・伝道者・教師・牧師を送り、その働きによりて公会の徳を建てたまひしことを感謝し奉る。願わくは聖霊をもつて今このしもべを満たし、つねに喜びて平和の福音をひろめ、またその権威を用いて人をほろぼさず、かえつて人をたすけ、ついに主の家族をやしなう忠実なるしもべと認められ、限りなき喜びに入ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで被選主教は、司式主教の前にひざまずき、会衆は立つ。司式主教は臨席主教



とともに被選主教の頭に手をおき、司式主教は言う。「アーメン」は司式主教だけが言う。

父と子と聖靈の御名によりて我なんじに手をおく。なんじ神の公会にて主教の職位につき、その務めを行のうために聖靈を受けよ アーメン

なんじこの按手によりて受けし神の恵みをますます盛んならしむることを努めよ。神の我らに賜える靈は臆する靈にあらず、力と愛と慎みの靈なり

次に司式主教は新主教に聖書を渡して言う。

なんじこれを読むことと、人を勧め教うることを努め、これにしるせることをよく考へ、ひたすらこれに心を寄せてなんじの進歩をあらわすべし。なんじおのれを慎み、また教えに心して、常にこれらのことを努めよ。さらばなんじおのれを救い、またなんじに聞く者を救はん。なんじキリストの群れの牧者となりて、おおかみとなるなかれ。これを養いてこれを食らうなかれ。弱き者を助け、病をいやし、傷つける者をいたわり、捨てられし者を見ちびき歸し、迷える者をたずね求むべし。なんじ人をあわ

れむにゆるやかに過ぎず、人を懲らすにあわれみを忘るるなかれ。さらば大牧者の現  
われたもうとき、その御手より朽ちざる栄光の冠を受けん。我らの主イエス・キリス  
トによりて アーメン

司式主教は聖餐式をつづける。新主教もともに聖餐を受ける。祝福の前に次の祈り  
を用いる。

いつくしみ深き全能の父よ、願わくはこのしもべに天の恵みをくだし、聖霊をもつて  
彼をみたし、主の御言葉を宣べ伝え、よく忍び、よく教え、熱心に人を戒め、人を勧  
むることを得させたまえ。また言葉と行ない、愛と信仰、聖潔と節制をもつて信徒の  
模範となり、走るべき道のりを走り、終わりの日に正しきさばき主より義の冠を受く  
ることを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう  
主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

# 主教就任式

主教会議長またはその指名を受けた司式主教は座につき、就任する主教は二名の司祭を従えて聖所の入口に立つ。司式主教は指定した者に、就任主教の主教按手の証を朗読させる。終わって司式主教は会衆に言う。

兄弟よ、いま我ら神の御前にありて、我らの敬愛する主教——師をこの教区に迎え、その就任式をなさんとす。ゆえに我ら心をあわせ、うやうやしく神の恵みを祈るべし

一同ひざまずく。

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我ら

を試みにあわせず、惡より救いいただいたまえ アーメン

次に司式主教は立つて言う。

司式者 主よ、主のしもべ——を救いたまえ

会衆 彼は主にたよれり

司式者 願わくは聖所より助けを彼におくりたまえ

会衆 天より力を彼に与えたまえ

司式者 主よ、彼のために堅固なる城となりたまえ

会衆 彼の敵を防ぎたまえ

司式者 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司式者 我ら祈るべし

司式主教は次の祈りをする。

全能の父・主なる神よ、主はこのしもべを召し、この教区の牧者・主教となしたまえり。願わくは聖靈の恵みによりて、正しくその務めを尽くし、公会の聖奠を行ない、

ゆだねられたる群れを治め導くことを得させたまえ。また教えと行ないをもつて、御名の栄光をあらわし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。救い主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで会衆は立つ。就任主教は管理主教に導かれて司式主教の前に立つ。司式主教は就任主教の指に指輪をはめる。次に司式主教は就任主教に牧杖を渡して言う。

なんじこれを受け、なんじに与えられし権威をもつて、ゆだねられたる群れを導くしとせよ

就任主教は牧杖を右手にもち、司式主教の導きに從つて主教座につき、牧杖を陪侍司祭に渡す。次に常置委員長は就任主教に左のように言う。

尊き師父よ、——教区常置委員長たる我——、当教区の聖職と信徒を代表し、ここに師父を迎え、父と子と聖霊の御名によりて、師父を我らの主教と仰ぎ、その権威に服従することを約す。願わくは主なる神、今よりいつまでも、なんじのいずると入るとを守りたまはんことを

就任主教はその座から次のように言う。

愛する兄弟よ、われ神の摂理と恵みによりて、キリストの公会の主教に選ばれ、御旨により、いま日本聖公会——教区の主教職に就任す。われ御力にたより、至誠と全力を尽くしてことに当たらんことを期す。されど我ひとりにてこの重任を全うするのとあたわず。なんじらよろしく主において心を同じゅうし、相和らぎ、力をあわせ、神の栄光をあらわし、公会の徳を建て、福音の宣揚につとむべし。われ今これがために祈らん

就任主教は祭壇の前に立つて言う。

主教

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの靈とともにいますことを

主教

我ら祈るべし

一同ひざまずき、就任主教は自己のために祈る。

わが主・わが神よ、主はくすしき摂理と大いなる恵みをもって、しもべを召し、使徒たちよりの唯一の聖公会の主教に選び、この教区につかわしたまいしことを感謝し奉る。我いま身と魂を主にささげ、力の限り主に仕えまつるべし。願わくは絶えずしも

べを守り、常にまことの信仰に堅く立ち、清き良心を保ち、すべての良き徳に富むことを得させたまえ。願わくは我をあわれみ、力と愛と懐みとをもって、隠せず御心に従い、この尊き務めを行ない、主の群れを牧することを得させたまえ。我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に就任主教は立つて教区のために祈る。

天地万物を統べ治めたもう全能の神よ、あわれみをもってこの教区に祝福をくだしたまえ。願わくは聖職と他の伝道者に熱心と知識をさづけ、すべての信徒に必要な恵みを増し加えたまえ。幼き者を祝してこれを守り、信仰あつき者を強めてその数を増し、病める者を慰めてこれをいやし、悪に陥るものを呼びかえして善に向かわしめ、眠れる者をさまし、倒れたる者を起こし、悔ゆる者をゆるし、この教区のすべての未信者を主の救いに入らしめたまえ。また願わくは我らこころを一つにして聖公会の発展をはかり、声を合わせて、聖徒に伝えられし信仰の道を言い表わすことを得させ、異端・分裂・党派を生ずることなく、すべての者、聖霊のたもう平和と喜び、謙遜と愛をもって主に仕え、相交わり、主の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つることを

得<sup>え</sup>させたまえ。我<sup>われ</sup>らの救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>・唯一<sup>ゆいいつ</sup>のとりなし・主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストによりてこいね  
が<sup>たてまつ</sup>い奉<sup>ほう</sup>る。アーメン

就任主教は次の祈りをもつて会衆を祝福する。

願<sup>ねが</sup>わくはとこしえの契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の血<sup>ち</sup>によりて、羊<sup>ひつぎ</sup>の大<sup>だい</sup>牧<sup>ぼく</sup>者<sup>しや</sup>となれる我<sup>われ</sup>らの主<sup>しゅ</sup>イエスを、死<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>  
のうちよりよみがえらせたまいし平<sup>へい</sup>和<sup>わ</sup>の神<sup>かみ</sup>、その喜<sup>よろこ</sup>びたもうところをイエス・キリス  
トによりてなんじらのうちに行<sup>おこ</sup>ない、御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>を行<sup>おこ</sup>なわしめんために、すべての良<sup>よ</sup>きこと  
につきてなんじらを全<sup>きん</sup>うしたまわんことを。願<sup>ねが</sup>わくは世<sup>よ</sup>々<sup>よか</sup>限<sup>ぎん</sup>りなく榮<sup>は</sup>光<sup>こう</sup>、主<sup>しゅ</sup>にあらん  
ことを。アーメン



# 礼拝堂聖別式

礼拝堂を聖別するときは、あらかじめその敷地、建物その他附属物件について負債のないこと、および日本聖公会の所有に属することを証明する書類を添えて教区主教に願ひ出なければならぬ。主教は聖別に支障のないことを認めたとき、日を定めてこの式を行なう。

当日会衆は堂の外で主教と他の聖職を迎え、教会委員の一人は主教に言う。

師父よ、この堂を聖別せんことを願う

主教は言う。

願ひのごとくこの堂を聖別すべし。愛する兄弟よ、父と子と聖霊なる全能の神われらとともにいまして、我らのささぐるこの堂をきよめたまわんことを祈るべし  
主よ、變わらざる恵みにて我らにさきだち、絶えざる助けにて我らをとめない、何事をなすにも始めより終わりまで主にたより、御名の栄光をあらわし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

主教は他の聖職とともに次の詩を歌いまたは唱えながら堂の外側をめぐる。入口で歌いまたは唱えてもよい。詩の前に司式者または始唱者は次の語を用い、栄光の顔の後にはこれを一同で用いる。以下詩百二十二篇、詩五十一篇もこれにならう。

神の恐るべきさまは＝ その聖所よりあらわる

詩六十五篇

一 神よ、シオンにてなんじをほめたとうるはふさわし＝ 人はなんじに誓いをはた

さん

二 祈りを聞きたもうものよ＝ もろびとは罪を悔いてなんじにきたらん

三 我らおのがとがになやむとき＝ なんじ我らをきよめたまわん

四 なんじに選ばれ、なんじに近づけられて、大庭に住もう者はさいわいなり＝ 我

らはなんじの家、なんじの聖なる宮の恵みにて飽くことをえん

五 救いの神よ、なんじは恐るべきみわざをもて我らを救い、我らに答えたまわん＝

なんじは地のもろもろのはて、また海のはてにある者のものぞみなり

六 神は大能をおび＝ その御力によりて、もろもろの山を堅く立たしめたもう

七 海のひびき大波のひびきをしずめ＝ もろもろの民の騒ぎをしずめたまえり

ハ されば地のはてに住める人々も、なんじのもろもろのしるしを見ておそる＝ な

んじ、あしたとゆうべのいずる所をも喜びうたわしめたもう

九 なんじ地に臨みて水そそぎ＝ 大いにこれを豊かにしたまえり

神の川に水みちたり＝ なんじかく備えをなして穀物を彼らにあたえたまえり

二 なんじ田みぞを豊かにうるおし、うねをととのえ＝ むらさめにてこれを柔げ、

そのもえいずるを祝したまえり

二 なんじ御恵みをもて年の冠としたまえり＝ なんじの道にはあぶらしたたる

三 野の牧場はうるおい＝ 小山は喜びにかこまる

三 牧場はみな羊の群れを着、もろもろの谷は穀物におおわれたり＝ 彼らはみな喜

びて呼ばわりまた歌う

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

神の恐るべきさまは＝ その聖所よりあらわる

次に主教は堂の入口に立つて言う。

とこしえにいます全能の神よ、主のいまさざる所なく、主の働きたまわざる所なし。  
願わくは主の建てたまひしこの堂をまもり、惡の力を返け、常に聖靈の働きによりて  
御心にかのう礼拝をささぐることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこい  
ねがい奉る。アーメン

主教は牧杖の石突きで堂のとびらを三度たたいて言う。

門よ、なんじらのこうべを挙げよ。とこしえの戸よ、あがれ、栄光の王いりたまわん

執事または教会委員の一人、堂の内から言う。

栄光の王はたれなるか

主教は言う。

力を持ちたまうたけき主なり、戦いにたけき主なり。万軍の主、これぞ栄光の王なる

主教はまた言う。

開けよ、開けよ、開けよ

執事または教会委員は内からとびらを開いて言う。

これぞ主の門なる。正しき者は内にいるべし

主教は牧杖で入口に十字架の形をしるして言う。

平安この堂に、又すべてここに入る者にあらんことを、父と子と聖霊の御名によりて

アーメン

次に左の詩を歌いまたは唱えながら、主教と他の聖職は聖所の入口まで進む。会衆はこれに従って堂に入る。詩の前後に次の語を用いる。

ほむべきかな＝ 主の御名によりてきたる者

詩百二十二篇

一 人われに向かいて、「いざ主の家に往かん」と言えるとき我よろこべり＝ エル  
二 サレムよ、我らの足はなんじの門のうちに立てり

三 エルサレムよ、なんじはかたく立ち＝ しげくつらなりたる町なり

四 もろもろのやから、主のやから、かしこに上りきたりて主の御名に感謝す＝ こ

れイスラエルの定めなり

五 かしこにさばきの御位もうけらる＝ これダビデの家のみくらなり

六 エルサレムのために平安をいのれ＝ 「エルサレムを愛する者をさかえしめた

まえ

七 なんじの石がきのうちに平安あり＝ なんじのもろもろの殿のうちに幸いあらん

ことを」と

八 わが兄弟わが友のために言わん＝ 「なんじのうちに平安あらんことを」と

九 我らの神・主の家のために＝ 我なんじの幸いをもとめん

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

ほむべきかな＝ 主の御名によりてきたる者

主は聖所の入口にひざまずく。他の聖職はその左右に、会衆はその席についてひざまずく。

主と会衆は交互に次の聖歌の各節を一小節ずつ歌いまたは唱える。

聖霊を求むる歌

一 みたまよくだりて ながつくりましし

ところにめぐみを あふれしめ たまえ

二 ななの たまもの あぶらを そそぎて

三  
いのちの いずみを  
こころの くらきを  
てらし みちびきて

四  
けがれも はじをも  
わがうちに やどり  
やすきを たもたせ

五  
そとべより おそう  
あたを ふせぎてよ

六  
ちちみこ みたまの  
みつの くらいなる

七  
ひとりの みかみを  
さとらしめ たまえ

八  
ちちみこのおくる  
みたま みちびけば

九  
かみの みさかえを  
とこしえに うたわん

アーメン

次に主教の指名した司祭が一同とともに嘆願を歌いまたは唱える。天下の聖公会の  
ための願いの後に、主教は立つて左の願いを加える。

主教

会衆

願わくはこの堂を祝し、御使いに命じて守らしめたまわんことを  
主よ、ききたまえ

主教、願わくは御名の栄光のために、この堂と祭壇を祝しきよめたまわんことを

会衆 主よ、ききたまえ

ここで主教はひざまずき、司祭は嘆願をつづける。嘆願が終わって一同立つ。主教と他の聖職は次の詩を歌いまたは唱えながら堂内を一巡する。詩の前後に次の語を用いる。

主よ、ヒソブをもて我をきよめたまえ、さらば我きよくならん＝ 我を洗いたまえ、さらば雪よりも白くならん

### 詩五十一篇

- 一 ああ神よ、願わくはなんじのいつくしみによりて我をあわれみ＝ なんじの豊かなるあわれみによりて、わがもろもろのとがを消したまえ
- 二 わが不義をことごとくあらい去り＝ 我をわが罪よりきよめたまえ
- 三 我はわがとがを知る＝ わが罪は常にわがまえにあり
- 四 我はひとえになんじに罪をおかし、御前に悪しきことをおこなえり＝ さればなんじの宣告はなんじの義をしめし、なんじのさばきはあやまりなし
- 五 見よ、我よこしまのうちに生まれ＝ わが母罪のうちにありて我をはらみたりき



六 なんじはわがうちにまことを求めたまえ＝ さればわが心ふかく知恵を知らしめ

たまえ

七 ヒソブをもて我を清めたまえ、さらば我きよくならん＝ 我を洗いたまえ、さら

ばわれ雪よりもしるくならん

八 願わくはわれに喜びと楽しみとをみたし＝ なんじが砕きし骨を喜ばせたまえ

九 願わくは御顔をわが罪よりそむけ＝ わがすべての不義を消したまえ

一〇 神よ、わがために清き心をつくり＝ わがうちに直き霊をあらたに起こしたまえ

二 我を御前より捨てたもうなかれ＝ なんじのきよき霊を我より取りたもうなかれ

三 なんじの救いの喜びをわれにかえし＝ 自由の霊にて我をささえたまえ

三 さらば我、とがを犯せる者になんじの道をおしえん＝ 罪びとはなんじに帰りき

たるべし

四 神よ、わが救いの神よ、血を流しし罪より我を助けいだしたまえ＝ わが舌は声

たからかになんじの救いをうたわん

五 主よ、わがくちびるを開きたまえ＝ さらばわが口なんじの誉れをあらわさん

六 なんじはいけにえを好こみたまわず＝ たといわれ燔はん祭さいをささぐるともなんじ喜よろこび  
たまわす

七 神かみの求もとめたもう供たえ物は碎くだけたるたましいなり＝ 神かみよ、なんじは碎くだけたる悔くい  
し心を軽かろしめたもうまじ

八 願ねがわくは御心みこころに従したがいてシオンをさきわい＝ エルサレムの石いしがきを、ふたたびき  
ずきたまえ

九 その時ときなんじ正ただしきいけにえと燔はん祭さいと全まづき燔はん祭さいとを喜よろこびたまわん＝ かくて人々ひとびと  
なんじの祭壇さいだんに雄牛お牛をささげん

父ちちと子こと聖靈せいれいに＝ 栄光えいこうあれ  
始めはじめにあり、今いまあり＝ 世々よよ限りなくあるなり アーメン

主しゅよ、ヒソブをもて我われをきよめたまえ、さらば我われきよくならん＝ 我われを洗あらいたま  
え、さらば雪ゆきよりも白しろくならん

主しゅ教きょうは再び聖所の入口に行き、会衆はひさますく。

主しゅ教きょう

主しゅなんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

主教

我ら祈るべし

御名のためにささぐる物を清めたもう神よ。願わくはこの堂に恵みをくだし、主の御名を呼ぶすべての者を助けたまえ。御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

天地万物を統べたもう至聖なる父・全能の神よ、願わくは主の大きいなるいつくしみにより、聖なる奥義を行なわしめんとて、三位一体の栄光のために建てしこの堂を聖別し、御光をもつて照らしたまえ。願わくはこの教会の信徒をまもりて公会の信仰を堅く保たせ、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで会衆は立つ。

祭壇の聖別

主教は祭壇に行きながら次の語を唱える。

われ神の祭壇にゆき、またわが喜びよろこぶ神にゆかん

主教は会衆に向かつて言う。

愛する兄弟よ、全能の神、我らの祈りを聞こし召し、聖なるいけにえのためにこの祭壇を清め、主のしもべらのささぐる供え物を聖別したまわんために、また主イエス・キリストの御名によりてささぐる祈り、香の煙のごとく御前に昇らんために祈るべし

主教 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

主教 なんじら心を挙げよ

会衆 我ら心を主に挙げん

主教 主なる神に感謝し奉るべし

会衆 そは正当にしてなすべきことなり

主教は次の言葉を歌いまたは唱える。

至聖なる父・とこしえにいます全能の神よ、いついずこにても主に感謝し奉るは、正

当とうにしてなすべき務つとめなり。我われらは卑いやしきしもべなれども、御名みなの榮光えいこうのためにこの祭壇さいだんをささげ奉もてまる。願ねがわくはこれを祝しゆし、きよめ別わかち、我われらの供え物ともことに感謝かんしゃ賛美びのいけにえを受けたまわんことをこいねがい奉もてまる。また我われらの救すくい主ぬしイエス・キリストのからだと血ちの聖餐せいあんにあずかり、みな恵めぐみと力ちからとに満みたされ、限りなき命いのちをうるに至いたらせたまわんことを 父ちちと聖靈せいれいとともに一体いつたの神かみにましまして世々よよ統すべ治おさめたもう御子みこ・我われらの主しゆイエス・キリストによりてこいねがい奉もてまる。アーメン

次に十字架、燭台その他祝福すべき物があれば、主教はそれらを祝福して祭壇に置かせる。

洗礼盤せんらいばんの聖別せいべつ

主教は聖職とともに洗礼盤に行きながら次の語を唱える。

川かわあり、その流れ神かみの都みやとを喜よろこばしめ、いと高たかき者の住すみたもう聖所せいじよをよろこばしむ

主教しゆしやう

会衆かいしゆ

なんじら全世界ぜんせかいを巡めぐりて

主教しゆしやう

すべての人ひとに洗礼せんらいをほどこせ

我われら祈いのるべし

全能の神よ、願わくは我らのささぐるこの洗礼盤をみそなわし、聖霊によりてこれを清め、ここにて洗礼を受くる者を洗いきよめ、主のあわれみによりて、すべての罪の赦しを受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

### 洗礼を受くる者のため

もろもろの徳と恵みの源なる全能の神よ、願わくは御名の栄光のためにこの洗礼盤を清め、ここにて信仰を告白し、生まれかわりの洗礼を受くる者に限りなき命を得させたまえ。御子イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 聖書台および説教壇の聖別

主教は補式聖職とともに聖書台および説教壇に行きながら次の語を唱える。

我なんじのさとしを語り、なんじの道に心をとめん

主教 なんじの御言葉はわが足のともしびなり

会衆 わが道の光なり

主教 我ら祈るべし

全能の神よ、主は真理をもつてしもべらの心を照らしたもう。願わくはこの聖書台と説教壇を祝し、ここに立つ者に知恵・悟り・深慮の霊をみだし、御力を与えて、としえの命の福音を宣べ伝うることを得させたまえ。また願わくは教えを受くる者を恵み、御言葉を悟り、ついに、我は道なり、真理なり、命なりとのたまひし主のみもとに至ることを得させたまえ。我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

主教は補式聖職とともに至聖所の入口に行く。

# 罪を懺悔する者のため

、主教は補式聖職とともに次の語を唱える。

我はわがとがを知る、わが罪は常にわが前にあり

もしおのれの罪を言いあらわさば

神はまことにして正しければ、我らの罪を赦したまわん

主教

我ら祈るべし

主よ、主の民、もし罪を犯さば主に帰り、ここにて罪を懺悔し、祈り、願ひ、神の小

羊ひつぎの血ちにて洗あらいきよめられ、その信仰しんうによりて義ぎと認めらるることを得えさせたまえ。  
主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

### 堅信式けんしんしきを受ける者もののため

主教は補式聖職とともに次の語を唱える。

末すえの世よに至いたりて、わが靈れいをすべての人ひとにそそがん

主教 ペテロとヨハネ彼らかれの上に手てをおきしに

会衆 彼らかれみな聖靈せいれいを受けたり

主教 我らわれ祈いのるべし

主しゅよ、主しゅは使徒しとたちに聖靈せいれいをくだし、また彼らかれが手てをおく者ものに同じ聖靈せいれいを与あたえたまえ  
り。願ねがわくは我らわれの祈いのりを聞きこし召めし、ここに堅信式けんしんしきを受うくる者ものに聖靈せいれいをくだし、  
その宮みやとなさしめたまえ。主しゅイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

### 聖婚式せいこんしきをあぐる者もののため

主教は補式聖職とともに次の語を唱える。

人ひとを造つくりたまひし者もの、始めよりこれを男おとこと女めづとに造つくりたまえり。ゆえに人ひとはその妻つまと



合あいて、ふたりのもの一いっ体となるべし

主しゅ教きやう

神かみの合あわせたもうものは

会かい衆しゆ

人ひとこれを離はなすべからず

主しゅ教きやう

我われら祈いのるべし

とこしえにいます全ぜん能のうの神かみよ、願ねがわくはこの所ところにて聖せい婚こん式しきをあぐる者もの、唯ただ一の主しゅによ  
りて一いっ体とせられ、愛あいと誠まことと操さくを保たもち、信しん仰やうをもつて子こどもをそだて、健すこやかに、幸さい  
いに、命いのちながく、ついに天てんの御み国くにに至いたることを得えさせたまえ。主しゅイエス・キリストに  
よりてこいねがい奉ほうる。アーメン

聖せい餐さんを受うくる者もののため

主しゅ教きやうは補ほ式しき聖せい職しやくとともに次の語を唱える。

われは命いのちのパンなり、我われにきたる者ものは飢うえず、我われを信しんずる者ものはいつまでもかわくこと  
なからん

主しゅ教きやう

わが肉にくはまことの食くい物もの、わが血ちはまことの飲のみ物ものなり

会かい衆しゆ

わが肉にくを食くし、わが血ちを飲のむ者ものは我われにおり、我われもまた彼かれにおる

主教 我ら祈るべし

主よ、願わくはここにてキリストの尊きからだと血の聖餐を受くる者、まことの悔い改めと信仰と愛をもつて、主のふるまいにあずかり、天の祝福に満たされ、罪のゆるしと主の苦しみによりてきたるもろもろの恵みを受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

この聖堂にて祈るすべての人のため

主教は祭壇に向かい補式聖職とともに次の語を唱える。

なんじらが、わが名によりて願うことは、我みなこれをなさん

主教 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

主教 我ら祈るべし

ほめ奉るべき主よ、願わくはこの堂にて主に近づき、御手より受けし恵みを感じ、御名をほめ、罪を懺悔し、からだと魂とに必要なものを願う人々、みな信仰をあつくし、うやうやしく主を拝み、主に喜ばれ、主の良しとしたもう賜物を受くることを

得<sup>え</sup>させたまえ。これらのことをほむべき救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>イエス・キリストによりてこいねがい  
 率<sup>たせう</sup>る。アーメン

次に主教は牧杖を左手に持つて至聖所の入口に立ち、会衆に向かつて言う。「アー  
 メン」は主教だけが言う。

神<sup>かみ</sup>の公会<sup>こうかい</sup>にて我<sup>われ</sup>にゆだねられし権威<sup>けんい</sup>により、この堂<sup>どう</sup>を神<sup>かみ</sup>にささぐ。今<sup>いま</sup>より後<sup>のち</sup>この聖堂<sup>せいどう</sup>  
 を世俗<sup>せぞく</sup>の用<sup>よう</sup>に供<sup>あづか</sup>せず、神<sup>かみ</sup>によりて清められし物<sup>もの</sup>は、公会<sup>こうかい</sup>の礼拝<sup>れいはい</sup>と聖奠<sup>せいでん</sup>のために用<sup>もち</sup>いら  
 るるなり。我<sup>われ</sup>いま父<sup>ちち</sup>と子<sup>こ</sup>と聖靈<sup>せいれい</sup>の御名<sup>みな</sup>によりて、この堂<sup>どう</sup>の聖別<sup>せいべつ</sup>せられしことを宣言<sup>せんげん</sup>す

アーメン

、  
 主教は座につき、一人の司祭に聖別の証を朗読させ、終われば立つてこれを祭壇の  
 上におき、会衆に向かつて言う。

主教<sup>しゆきやう</sup> 主<sup>しゆ</sup>なんじらとともにいますことを

会衆<sup>かいしゆ</sup> 主<sup>しゆ</sup>なんじの靈<sup>れい</sup>とともにいますことを

主教 主<sup>しゆ</sup>よ、エルサレムの宮<sup>みや</sup>のために

会衆 我<sup>われ</sup>らのうちになせしみわざを堅<sup>かた</sup>からしめたまえ

いつくしみ深き全能の神、願わくはこの聖堂につどえるなんじらを知恵と悟りの靈にて満たし、正しき信仰を保たせ、望みと愛とをもて終わりまで耐え忍ぶことを得させたまえ。又ここにもいずこにても、なんじらの祈りをきき、なんじらの罪を赦し、悪より救い、ついに天のうたげにあずかることを得させたまえ。アーメン

つづいて聖餐式を行ない、次の特禱・使徒書・福音書を用いる。

### 特 禱

いと恵み深き神よ、天も地も主をいれ奉るに足らず。願わくはいつくしみをもつて、この聖堂を御名の榮光のために用い、ここに主に呼ばれる者をみちびき、靈と真理にて主を拝み、その行ないによりて主をほめたとうることを得させたまえ。父と聖靈とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 使 徒 書 黙 二一章二一五

我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる花嫁のごとく備えして、神のもとをいで、天より下るを見たり。また大いなる声の御位よりいずるを聞けり。

いわく、「見よ、神の幕屋、人とともにあり、神、人とともに住み、人、神の民となり、神みずから人とともにいまして、彼らの目の涙をことごとくぬぐい去りたまわん。今よりのち死もなく、悲しみも、叫びも、苦しみもなかるべし。さきのものすでに過ぎ去りたればなり」。かくて御位に座したもうもの言いたもう、「見よ、我すべてのものを新たにするなり」。また言いたもう、「書きしるせ、これらの言葉は信すべきなり、まことなり」。

福音書 マタ二二章一〇一六

イエス、エルサレムに入りたまえば、都ごぞりてさわざ立ちて言う、「これはたれなるぞ」。群衆いう、「これガリラヤのナザレよりいでたる預言者イエスなり」。イエス宮に入り、その内なるすべての売り買いする者を追いだし、両替する者の台・はとを売る者の腰掛けを倒して言いたもう、「わが家は祈りの家となえらるべし」として、されたるに、なんじらはこれを強盗の巢となす」。宮にてめしい、足なえどもみもとにきたりたれば、これをいやしたまえり。祭司長・学者らイエスのなしたまえる不思議なるわざと宮にて呼ばわり、「ダビデの子にホサナ」と言いおる子どもとを見、憤

りて、イエスに言う、「なんじ彼らの言うところを聞くか」。イエス言いたもう、「しかり『みどり子、乳のみ子の口に賛美を備えたまえり』とあるをいまだ読まぬか」。

主教は祝福の前に次の祈りを用いる。

全能の神よ、願わくは御名の栄光のためにささげられしこの聖堂にて主に祈る人の願いを聞こし召し、豊かなる恵みを与えたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう御子・我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

# 牧師任命式

主教は祭壇のかたわらに進み、牧師候補者および他の聖職と教会委員二名（一名は聖堂のかぎを持つ）とは聖所の入口に向かつて立つ。主教が臨席しえない時は、司祭に代理させてもよい。

主教は立つて次のように言う。

愛する兄弟よ、我らここに集まりたるは、司祭——師をこの教会の牧師に任ぜんがためなり。我いまこれに任命書を授けんとす。されどこの任命について故障ありと知る者あらば今申し立つべし

故障を申し立てる者があれば主教はこの式を中止するか否かを判定する。中止する理由がなければ任命書を朗読する。

任命書授与の後、教会委員は新任牧師にかぎを渡して言う。

当教会は司祭——師を牧師として受け、その証しとして当教会の信徒にかわり、この堂のかぎを呈す

新任牧師はかぎを受けて次のように言う。

我この聖堂のかぎをなんじらより受けたり。我いま父と子と聖霊の御名によりて忠実

なる牧者たらんことを約す

主教 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

主教 我ら祈るべし

主よ、変わらざる恵みにて我らにさきだち、絶えざる助けにて我らをとめない、何事をなすにも始めより終わりまで主にたより、御名の栄光をあらわし、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いだしたまえ アーメン

主教は新任牧師を聖所の内に入らせ、聖書・祈祷書、および法憲法規を渡して言う。



なんじこれを受けて神の言葉を伝え、礼拝をつかさどり、教会を牧するよりどころとせよ。また何事にも、なんじにゆだねられたる群れの模範となることを努むべし

次に左の詩篇の一つを歌いまたは唱える。

## 詩六十八篇

一 神よ、立ちたまえ、願わくはそのあだはことごとく散らされ＝ 神をにくむ者は

御前より逃げ去らんことを

二 煙の追いやらるることく彼らを追いやりたまえ＝ 悪しき者は火の前にろうの溶

くるごとく、神の御前にてほろびんことを

三 されど正しき者にはよろこびあり＝ 神の御前にて楽しみ喜びて踊らん

四 神の御前に歌い、御名をほめたたえよ＝ 雲に乗りたもう者に向かいてうたえ

五 きよき住まいにまします神は＝ みなしごの父、やもめの守りなり

六 神は寄るべなきものを家族のうちにおらしめ、めしゅうどを解きて榮えしめたも

う＝ されどそむく者はうるおいなき地に住むなり

七 神よ、なんじは民にさきだちてい＝ また荒れ野を進みゆきたまいき

ハ そのとき神の御前に地はふるい、天は激しく雨を降らせたり＝ シナイの山すら  
神・イスラエルの神の御前にふるいうごけり

九 神よ、なんじは豊かなる雨をふらせ＝ なんじの嗣業の地の疲れ衰えたるとき、  
これを立てなおしたまえり

一〇 なんじの民はその中に住まいをえたり＝ 神よ、なんじは恵みをもて貧しき者に  
食物をあたえたまえり

二 主はみことのりを下したまえり＝ そのおとずれを宣ぶる多くの女は群れをなし  
て言う

三 「もろもろの王たちは逃げ去る、逃げ去る」と＝ 家における女たちはその獲物を  
わかつ

三 なんじら羊のおりの中にとどまるとも＝ はとの翼のしろがねにおおわれ、その  
毛のこがねにおおわるがごとくならん

四 全能者かしこにて王たちを散らしたまえり＝ そのときサルモンの山に雪ふれり  
五 パシヤンの山は大いなる山なり＝ パシヤンの山は峰重なれる山なり

一六 峰かきなれる山よ、なんじいかなれば神の住まいに選びたまえる山をねたみ見る

や＝ されど主はとこしえにこの山に住みたまわん

一七 主はちよろずのいくさ車もてシナイよりきたり＝ 聖所に入りたまえり

一八 なんじはとりこを率いて高き山にのぼり＝ 人々より、またそむく者より禮物を

受けたまえり、主なる神ここに住みたまわんためなり

一九 日ごとに我らをささえたもう主はほむべきかな＝ 神は我らのすくいなり

二〇 我らの神は救いの神なり＝ 死よりのがるるは主なる神による

二一 神はあだのこうべを砕きたまわん＝ 悪の道をあゆむ者の髪毛おおき頂を打ちく

だきたまわん、

二二 主言いたまえり、「われバシヤンより彼らを携えかえり＝ 海の深き所よりたず

さえかえらん

二三 かくてなんじの足をそのあだの血にてあらひ＝ これをなんじの犬の舌になめし

めん」と

二四 神よ、人はなんじの進み行きたもうを見たり＝ わが神・わが王の聖所に進み行

きたもうを見たり

三 歌うものは前に行き、琴ひく者はあとにしたがい＝ 鼓うつおとめはその中にありて言う

六 「大いなるつどいにて神をほめよ＝ イスラエルの源よりいずる者よ、主をほめまつれ」と

七 かしこに年若きベニヤミンさきだてり、その群れの中にユダの君たちあり＝ ゼブルンの君たち、ナフタリのきみたちあり

八 神よ、御力を奮い起こしたまえ＝ 我らのためにみわざを行ないたまひし神よ、御力をしめたまえ

九 王たちなんじに禮物をささぐ＝ これエルサレムなるなんじの宮のためなり  
一〇 願わくは輩のなかに住む獸をいましめ＝ もろもろの民の雄牛と子牛の群れをいましめたまえ

三 みつぎ物をむさぼる者をふみつけ＝ 戦いを好むもろの民を散らしたまえ  
青銅をエジプトより携えきたらせ＝ エチオピアにはあわただしく神に向かいて

手をのべさせたまえ

三 地のもろもろの国よ、神に向かいてうたえ＝ 主をほめうたえ

三 いにしえよりの天の天に乗りたもう者に向かいてうたえ＝ 見よ、主は御声をい

だしたもう、勢いある御声をいだしたもう

三 なんじら力を神に帰せよ＝ そのみいつはイスラエルの上にとどまり、御力は雲

のなかにあり

三 神の恐るべきさまはその聖所よりあらわる＝ イスラエルの神はその民に力と勢

いとを与えたもう、神はほむべきかな

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩二十六篇

一 主よ、願わくは我をさばきたまえ、我はわが全きによりてあゆみたり＝ 我また

迷うことなく主に寄りたのめり

二 主よ、我をしらべまた試みたまえ＝ わが心と思いとをねりきよめたまえ

三 そはなんじのいつくしみわが目の前にあり＝ 我はまことによりてあゆめり

四 我は欺く人とともにすわらず＝ 偽りかざる者とともにあゆまず

五 われ悪をなす者のつどいをにくみ＝ 悪しき者とともにすわらじ

六 われ手を洗いて罪なきを示さん＝ かくて主よ、我なんじの祭壇をめぐり

七 感謝のうたを高らかにうたい＝ なんじのくすしきみわざを、ことごとく宣べつ

たえん

八 主よ、我なんじのいます家をしたい＝ なんじが栄光のとどまる所をいつくしむ

九 願わくは我を罪びとともに捨てず＝ わが命を血を流す者とともに取り去りた

もうなかれ

一〇 かかる人の手には悪しきくわだてあり＝ その右の手はまいないにて満つ

一一 されど我はわが全きによりて歩まん＝ 願わくは我をあがない、我をあわれみた

まえ

一二 わが足は平らかなるところに立つ＝ われ大いなるつどいにて主をほめまつらん

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

主教

律法はモーセによりて与えられ

会衆

恵みと真理とはイエス・キリストによりてきたれり

一同

主は万物の上にありて世々譽れを受くべき神なり

主教

我ら祈るべし

すべてのよき賜物をあたえたもう全能の神よ、主は聖公会のうちに聖職を立て、その位を分かちたまえり。今この会衆をゆだねられたるしもべに恵みを与えたまわんことを、せつに祈り奉る。願わくは主の道の真理をもつて彼をみだし、清き行ないをもつて彼を装い、忠実に主に仕えしめ、御名の栄光をあらわし、聖公会の徳を建つことを得させたまえ。ひとりのとりなしイエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

主イエスよ、主は公会をあがない、我は世の終わりで常になんじらとともにあるなりと使徒たちに約したまえり。願わくはこの宮にて祈祷と賛美をささげんとてつかわ

されたるしもべの務めを祝したまえ。我らの岩・我らのあがない主よ、このしもべの口の言葉・心の思いを常に御心にかなわしめたまえ。アーメン

すべての信徒を清めたもう聖霊なる神よ、この会衆に恵みをくだし、限りなき福音の光をもって彼らを照らし、真理を愛する愛をその心につぎ、ますます熱心に主に仕えしめ、もろもろの善をもって養い、また大いなる恵みをもって絶えずこの幸いにおらしめたまえ。父と子と一体の神にましますほむべき聖霊を世々あがめ奉らん。

アーメン

祝　　福

願わくは、とこしえの契約の血によりて、羊の大牧者となれる我らの主イエスを死人のうちよりよみがえらせたまいし平和の神、その喜びたもうところをイエス・キリストによりてなんじらのうちに行ない、御心を行なわしめんために、すべての良きことにつきてなんじらを全うしたまわんことを。願わくは世々限りなく栄光、主にあらんことを。アーメン



次に新任牧師は祭壇の前にひざまずき、自己のために祈る。

わが主・わが神よ、しもべは主をわが屋根のしたに入れまつるに足らぬ者なり。されど主はしもべを召して祭壇に仕うることを許したもう。我いま身をも魂をも主にささげ、力のかぎり主に仕え奉るべし。願わくはつねに御言葉を記憶し、聖霊の光に照らされ、教えと行ないによりて、主の生けるまことの言葉を示し、正しく聖餐を行ない、今ゆだねられたる民を救いの道に進ましむることを得させたまえ。主よ、つねに我とともにいましてわが務めを助けたまわんことを。父と聖霊とともに世々限りなく統べ治めたもう主にこいねがい奉る。アーメン

新任牧師は立つて言う。

牧師

主なんじらとともにいますことを

会衆

主なんじの霊とともにいますことを

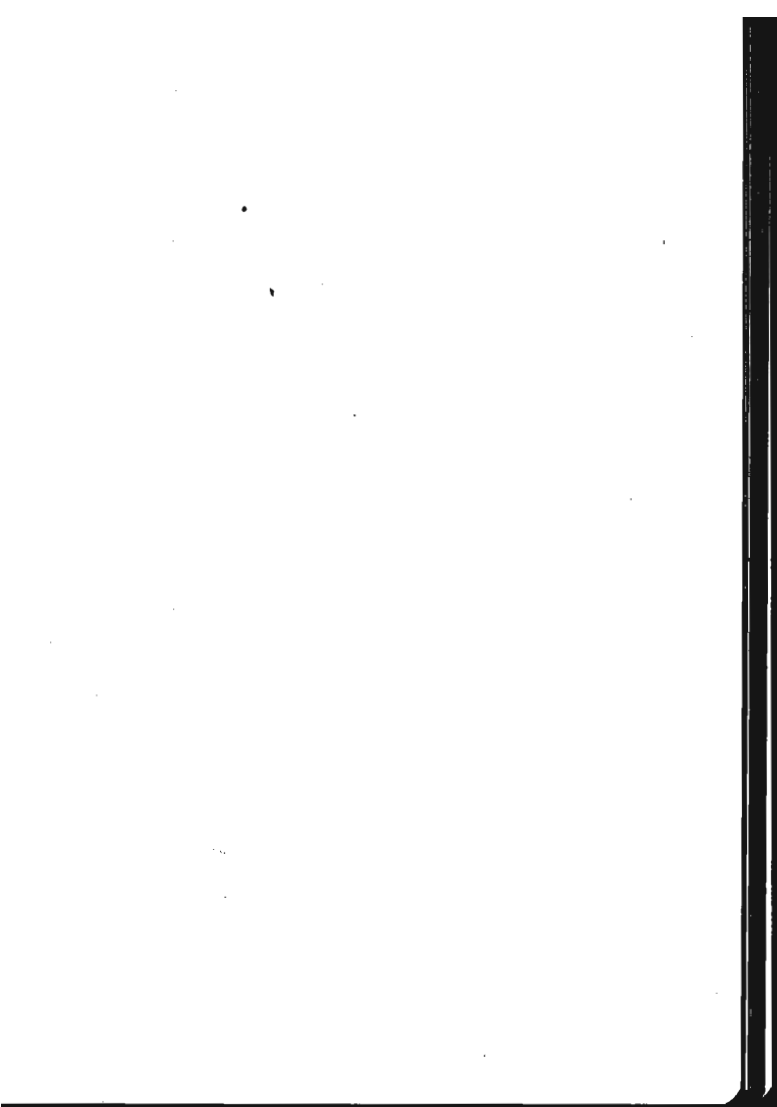
牧師

我ら祈るべし

全能の神よ、主は使徒と預言者の基のうえに公会をたて、イエス・キリストをすみの親石となしたまえり。願わくは聖霊の感化によりて信徒らみな心を一つにし、相和ら

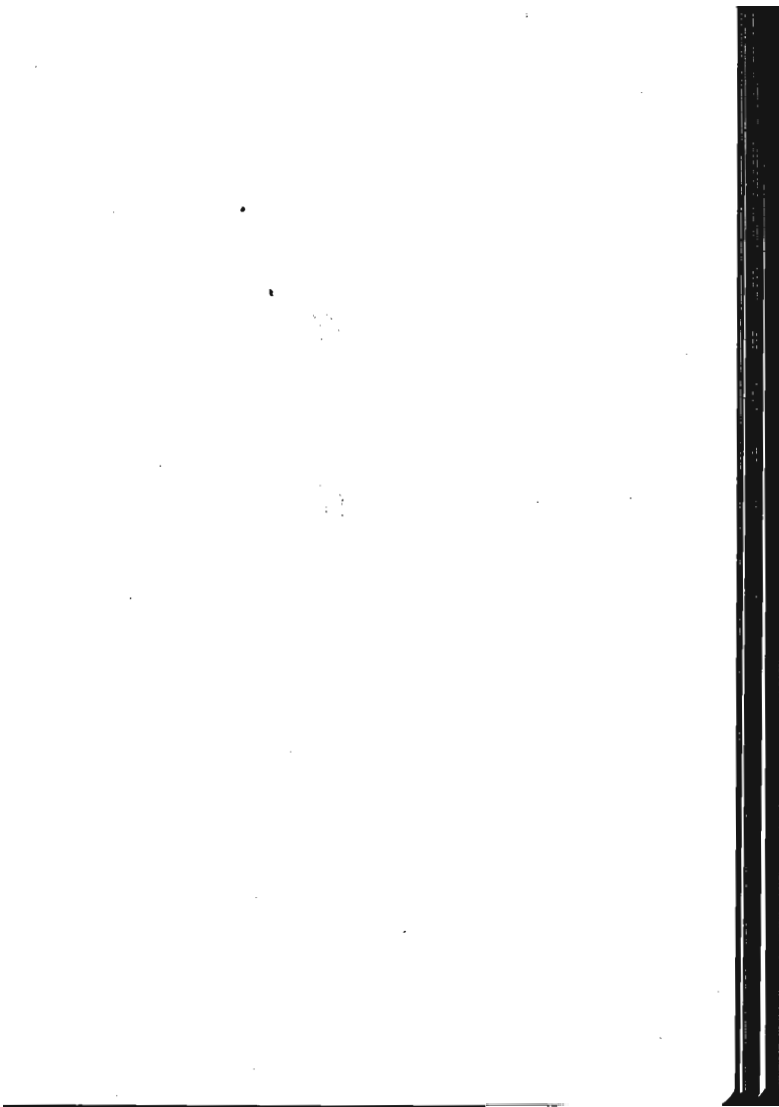
ぎ、御心にかのう清き宮となることを得させたまえ。ことにこの会衆の上に主の恵みを豊かにくだし、彼らをして一心に聖公会の進歩を図り、声を合わせて聖徒に伝えられし信仰の道を言い表わすことを得させ、異端分派を生ずることなく、高ぶる者の足に踏まれ、悪しき者の手に倒さるることなからしめたまえ。また願わくはこの世を安らかに治め、主の公会に平安をあたえ、つねに喜びて主につかえ、真実と平和の道をあゆみ、ついに限りなき栄光にある聖徒の数に入れらるることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に新任牧師は説教をする。説教が終わって聖餐式を司式する。



付

録



## 家族の朝の祈り

聖書を読み、使徒信經を唱えて、次の祈りをする。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ アーメン

全能の神よ、主は我らを顧み、昨夜も我らの身と家を守り、もろもろの災いを防ぎたまえり。これらの恵みのために主にほめ奉る。願わくは今日も我らを守り、我らを導きて、御心にかのう良きわざをなし、御名の栄光を現わさしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで他の祈りをしてよい。

願わくは主イエス・キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに

に限りなくあらんことを。アーメン

## 家族の夕の祈り

聖書を読み、使徒信經を唱えて、次の祈りをする。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救いいただいたまえ アーメン

天の父よ、我らを守りて、恵みのうちに今日も過ごさせたまひしこと（特に——）を感謝し奉る。主よ、我ら今まことに罪を悔やみ、悲しみて懺悔す。（ここでしばらく一日の反省をする）主よ、我らをあわれみ赦したまえ。願わくは今晚われらを守り、すべての危うきを防ぎ、安き眠りをさずけて明日の務めをなす力を養わせたまえ。また我ら

の教会を祝し、親族・友人・隣人に恵みをくだし、貧しき者・病める者・不幸なる者を慰め助け、また主を知らざる人々を救いに導きたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで他の祈りをしてよい。

願わくは主イエス・キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。アーメン



家族の朝・夕の祈りに用うるに適當なる祈り

ページ

ページ

平安のため

七四、八五

降臨節第三主日

一七四

めぐみのため

七四

福音記者使徒聖マタイ日

三八九

みたすけのため

八五

福音記者聖マルコ日

三六九

聖職のため――

福音記者聖ルカ日

三九三

降臨節第三主日

一七四

福音記者使徒聖ヨハネ日

一八三

聖職と信徒のため

一〇四

敬神――

三一五

万民のため

一〇八

三位一体後第七主日

三一五

一般的に用うる感謝

一二五

キリストの模範――

二二八

公会のため――

復活前主日（受難）

二二八

受苦日の第二・第三・特禱

二五九

復活後第二主日（きよき生涯）

二七九

三位一体後第十六主日

三三四

顕現後第六主日（きよき生活）

二〇四

三位一体後第二十二主日

三四六

導きのため――

二九一

使徒聖シモン・聖ユダ日

三九五

聖霊降臨日

三〇九

諸聖徒日

三九八

三位一体後第四主日

一九四

聖書研究――

顕現後第一主日

三四〇

降臨節第二主日

一七二

三位一体後第十九主日

三四〇

顯現後第四主日

大齋第二主日

三位一体後第十八主日

赦しと救いのため――

三位一体後第二十一主日

三位一体後第二十四主日

二〇〇

二一八

三三八

三四四

三五〇

大齋前第三主日

大齋第四主日

神への信賴――

三位一体後第八主日

顯現後第二主日

三位一体後第二主日

二〇六

二二三

三一七

一九六

三〇四

午

禱

一同立ち、準備の黙禱の後に次の唱和を用いる。

司式者

会衆

一同

神よ、すみやかに我らを救いたまえ

主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

父と子と聖霊に栄光あれ、始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり

ここで次の聖歌を歌いまたは唱える。

アーメン

一 まことの みかみは みひかりをはなち

うつろうこのよを しろしめしたもう

二 つみの ほのおけし あしきおもいさり

みとたまを まもり やすきを えさせよ

三 みちちと みたまと とわに ひとつなる

みこイエスによりて いのり たてまつる

アーメン

ここで次の詩の全部または一部を歌いあるいは唱える。

詩百十九篇 八一—九六、九七一—一二、一一三—一二八

二 わが魂たまはなんじの救すくいを慕したいて絶たえ入いるばかりなり＝ われは御言葉みことばによりての

ぞみをいだく

三 わが目めは御誓みちかいを待まちち望のぞみておとろう＝ われ言いえり、「なんじいずれの時ときわれ

を慰なぐさむるや」と

四 我われは煙けむりの中の皮袋かわふくろのごとくなりぬ＝ されどなお、なんじのおきてをわすれず

五 なんじのしもべはいつまでしのおべきや＝ なんじいずれの時ときわれを責せむる者ものを

さばきたもうや

六 高たかぶるもの我われをおとしいれんとて穴あなをほれり＝ 彼かれらはなんじの律法おきてにしたがわ

ざるなり

七 なんじの戒いましめめはみなまことなり＝ 彼かれらは偽いつはりりをもて我われを責せむ、願ねがわくは我われを助たす

けたまえ

八 彼かれらは地ちにてほとんど我われをほろぼさんとせり＝ されど我われはなんじの戒いましめめを捨すて

ざりき

六 願わくはなんじのいつくしみによりて我を生かしたまえ＝ さればわれ御口より

いずるあかしをまもらん

六 主よ、御言葉はさだまれり＝ 天にてとこしえにさだまれり

六 なんじのまことはよろず世におよぶ＝ なんじ地を定めたまえば、地はかたく立てり

九 これらのものは御定めに従い、常にありてきょうにいたる＝ よろずのものは、

なんじのしもべなればなり

三 なんじの律法わが喜びとならざりしならば＝ 我はわが悩みのうちに滅びたりし

ならん

三 我つねになんじの戒めをわすれじ＝ なんじこれをもて我を生かしたまえばなり

四 我はなんじのものなり、願わくは我を救いたまえ＝ 我なんじの戒めをもとめた

ればなり

五 悪しき者は我を滅ぼさんとして待ち伏せたり＝ されど我はただなんじのあかし

をおもいめぐらす

六

我もろもろの全きに、はてあるを見たり＝ されどなんじのいましめは、きわま

りなし

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

七

我なんじの律法をいつくしむこといかばかりぞや＝ 我ひねもすこれをふかくお

もう

八

なんじの戒めはつねに我とともにあり＝ 我をわがあだにまさりてさとからしむ

九

我はなんじのあかしを深くおもう＝ ゆえに我すべての師にまさりて知恵おとし

一〇

我はなんじの戒めをまもりたり＝ ゆえに老いたる者にまさりて事をわきまもう

なり

一一

われ御言葉を守らんためにわが足をとどめ＝ もろもろの悪しき道にゆかしめず

一二

我なんじの定めを離れざりき＝ なんじ我を教えたまいたればなり

二三 御言葉の味わいはわが口に甘きこといかばかりぞや＝ 蜜の甘きにまされり

二四 我なんじの戒めによりて知恵をえたり＝ このゆえに偽りのすべての道をにくむ

二五 なんじの御言葉はわが足のともしびなり＝ わが道のひかりなり

二六 われなんじの正しき定めをまもらん＝ 我これを誓いかつかたくせり

二七 我いたくくるしめり＝ 主よ、願わくは御言葉に従いて我をいかしたまえ

二八 主よ、願わくは賛美の供えものをうけ＝ なんじの定めをおしえたまえ

二九 わが命はつねにあやうし＝ されど我なんじの律法をわすれず

三〇 悪しき者わがためにわなをもうけたり＝ されど我なんじの戒めより迷いいでず

三一 なんじのあかしはとこしえにわが嗣業なり＝ これわが心のよろこびなり

三二 我なんじのおきてに心をかたむけ＝ 終わりに至るまでたえずこれをまもらん

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

二三 我ふたごろの者をにくむ＝ されどなんじの律法をいつくしむ

二四 なんじはわが隠れが、わが盾なり＝ われ御言葉によりて望みをいだく

二五 悪をなす者よ、我をはなれ去れ＝ 我わが神のいましめを守らん

二六 御誓いに従い、我をささえてながらえしめたまえ＝ わが望みにつきて恥なからしめたまえ

二七 我をささえたまえ、さらば我安らかなるべし＝ 我つねになんじのおきてに心を

そそがん

二八 すべておきてより迷いずる者をなんじかろしめたもう＝ 彼らの欺きはむなし

ければなり

二九 なんじは地のすべての悪しき者を金かすのごとくみなしたもう＝ されば我なんじのあかしをあいす

三〇 わが身はなんじを恐るるによりてふるう＝ 我はなんじのさばきをおそる

三一 我は正と義とを行ないたり＝ 我を捨てて、しいたぐる者にゆだねたもうなかれ

三二 なんじのしもべのなかだちとなりて我をまもり＝ 高ぶる者の我をしいたぐるを許したもうなかれ



二三 わが目はなんじの救いを待ちのぞみておとろう＝ なんじの正しき誓いを慕うに  
よりてなり

二四 願わくはなんじのいつくしみに従いてなんじのしもべをあしらい＝ 我になんじ  
のおきてをおしえたまえ

二五 我はなんじのしもべなり＝ 我に知恵を与えてなんじのあかしを知らしめたまえ

二六 今は主の働きたもうべきときなり＝ 彼らはなんじの律法をやぶれり

二七 ゆえに我なんじのいましめをあいし＝ こがねよりも混じりなきこがねよりもま  
さりて、これをしよう

二八 ゆえに我なんじのもろもろの戒めによりてあゆみ＝ すべての偽りの道をにくむ  
父と子と聖靈に＝ 栄光あれ  
始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

司者式は次の聖語を朗誦する。

すべてのこと試みて良きものを守り、すべて悪のたぐいに遠ざかれ

会衆かいしゅう

主に感謝し奉るしゅに かんしゃ ほうる

司式者ししきしや

われ常に主を祝いまつらんわれ つねに しゅを いわいまつらん

会衆

われ常に主を祝いまつらんわれ つねに しゅを いわいまつらん

司式者

主をたとうる言葉はわが口に絶えじしゅを たとうる ことばは わが くに 絶えじ

会衆

主を祝いまつらんしゅを いわいまつらん

司式者

父と子と聖靈に栄光あれちちと こと せいれい えいこう あれ

会衆

われ常に主を祝いまつらんわれ つねに しゅを いわいまつらん

司式者

主はわが牧者なり、我は乏しきことなからんしゅ は わが ぼくしや なり、 わは ちかしく こと なからん

会衆

主は我をみどりの野に伏さしめたもうしゅ は わを みどりの のに ふさしめたもう

司式者

主よ、我らの祈りをききたまえしゅ よ、 われらの いのを ききたまえ

会衆

我らの声を主の御前に至らせたまえわれらの こゑを しゅの みまへに いたせたまえ

司式者

我ら祈るべしわれら いのべし

特とく 禱たう

付録 午 禱

ここで当日の特禱を用いる。つづいて次の祈り、伝道のためその他の代禱を用いてもよい。

いと恵みふかき我らの主・われらの神イエスよ、主はわれら罪に死に義に生きんがため、昼のころ、十字架のうえにて大いなる苦しみを受けたまえり。願わくは主の十字架を記憶せしめ、この世にてきよき生涯をおくり、後の世にて主の栄光にあずかることを得させたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

次に左のように言う。

司式者 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司式者 我ら主を祝いまつらん

会衆 主に感謝し奉る

司式者 願わくは主イエスキリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我

らとともに限りなくあらんことを。アーメン

終しゆう

禱たう

一同立ち、準備の黙禱の後に次の唱和を用いる。

司式者ししきしや

願ねがわくは全能ぜんのうの神かみ、今夜こんやわれらを安やすらかにいこわせたまわんことを

会衆かいしゆう

アーメン

司式者は次の聖語を朗読する。

兄弟きやうだいよ、慎しんみて目をさましおれ。なんじらのあだなる惡魔あくま、ほゆるししのごとく、経へめぐりて、のむべきものを尋たずぬ。なんじら信仰しんいうを堅かうして彼かれを防ふげ

ペテロ前書五章八、九節

会衆

主しゆに感謝かんしやうし奉たもる

司式者

我われらの助たすけは主しゆの御名みなにあり

会衆

主しゆは天地てんちを造つくりたまえり

一同ひざまずいて次の懺悔をする。ただしすでに晩禱序式または聖餐式準備で懺悔を用いたときは、これを省いて「神よ、すみやかに、我らを救いたまえ」に移る。

父と子と聖靈なる全能の神よ、われら思いと言葉と行ないにて多くの罪を犯せしことを悲しみ懺悔し奉る。願わくは全能の神、我らをあわれみ、われらの罪をことごとく赦し、限りなき命に至らせたまわんことを。アーメン

司祭は立つて次のように言う。

願わくはあわれみ深き全能の神、なんじらの罪をことごとく赦し、聖靈の恵みと力とを与え、悔い改めにかのう新たなる生涯を送らしめたまわんことを

会衆

アーメン

司式者

救いの神よ、我らを帰えしたまえ

会衆

我らに向かい御怒りをやめたまえ

司式者

神よ、すみやかに我らを救いたまえ

会衆

主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

一同立つて次のように言う。

父と子と聖靈に栄光あれ、始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり アーメン

司式者・なんじら主をほめまつれ

会衆 主の御名をほめまつるべし

ここで次の詩の全部または一部を歌いあるいは唱える。

詩 四 篇

一 わが義の守りなる神よ、わが呼ばわるときに聞きたまえ＝ わが悩みしとき、なんじ我をくつろがせたまえり、願わくは我をあわれみ、わが祈りにこたえたまえ  
二 人々よ、なんじらいつまでわが譽れをきずつけ＝ むなしきことを好み、偽りを慕いもとむるや

三 されど知れ、主は神を敬う人をきよめ別ちて、おのがものとなしたまいしを＝  
われ呼ばわらば主はききたまわん  
四 なんじら怒るとも罪をおかすなかれ＝ 伏しどにておのが心にかたりて、もだせ  
五 なんじら正しきいけにえをささげよ＝ なんじら主によりたのめ  
六 多くの人は言う、「我らに良き事を示すものなきや＝ 主よ、願わくは御顔の光をのぼらせて我らを照らしたまえ」と

七 なんじはわが心に喜びを与えたまえり＝ かれらの穀物と酒との豊かなときの

喜びにまされり

八 われ安らかに伏しまた眠らん＝ 主よ、ただなんじのみ我を安らかにおらしめた

もう

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩三十一篇 一―五

一 主よ、我なんじに寄り頼む、願わくはとこしえに恥なからしめたまえ＝ なんじ

の義をもて我を助けたまえ

二 なんじの耳をかたむけ、すみやかに我を救いたまえ＝ 願わくはわが寄り頼む岩

となり、われを救う堅固なる城となりたまえ

三 げに、なんじはわが岩わが城なり＝ 御名のために我をみちびきたまえ

四 願わくはひそかに設けられたる網より、我を引きいだしたまえ＝ そはなんじは

わが避けどころなればなり

五 わが魂をなんじの御手にゆだね＝ 主よ、まことの神よ、なんじは我をあがない

たまえり

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩九十一篇

一 いと高き者のもと、その隠れ場にすまい＝ 全能者の陰にやどるものあり

二 かれ主に言わん＝ 「なんじはわが避け所、わが城、わが寄り頼む神なり」と

三 神なんじをかりゆうどのわなより助けいだし＝ 恐ろしき疫病よりのがれしめた

まわん

四 主その羽をもてなんじをおおい、なんじその翼の下にかくれん＝ 主のまことは

盾なり、こだてなり

五 夜は驚くべきことあり＝ 昼はとびきたる矢あり

六 暗きにはしのびよる疫病あり、真昼には激しきほろびあり＝ されどなんじ恐る

ることあらじ



七 千人<sup>にん</sup>なんじのかたわらに倒<sup>たお</sup>れ、万人<sup>ばんにん</sup>なんじの右<sup>みぎ</sup>にたおる＝ されどその災<sup>わざ</sup>いはなんじに近<sup>ちか</sup>づくことなからん

八 なんじの目<sup>め</sup>はただこの事<sup>こと</sup>をながめ見るのみ＝ なんじ悪<sup>あく</sup>しき者<sup>もの</sup>のむくいを見<sup>み</sup>ん  
九 なんじは主<sup>しゅ</sup>を避<sup>さ</sup>けどころとし＝ いと高<sup>たか</sup>き者<sup>もの</sup>をその住<sup>す</sup>まいとなせり

一〇 されば災<sup>わざ</sup>いなんじにいたらず＝ 悩<sup>なや</sup>みなんじの天幕<sup>てんまく</sup>にちかつかじ

二 そは主<sup>しゅ</sup>なんじのために御使<sup>みつか</sup>いにおおせ＝ なんじが歩<sup>あふ</sup>むもろもろの道<sup>みち</sup>にて、なんじを守<sup>まも</sup>らせたまえばなり

三 彼<sup>かれ</sup>ら手<sup>て</sup>にてなんじをささえ＝ なんじの足<sup>あし</sup>を石<sup>いし</sup>にふれざらしめん

三 なんじはししとまむしとを踏<sup>ふ</sup>み＝ 若<sup>わか</sup>きししとへびとを足<sup>あし</sup>の下<sup>した</sup>に踏<sup>ふ</sup>みにじらん

四 彼<sup>かれ</sup>われを愛<sup>あい</sup>して離<sup>はな</sup>れざるゆえに我<sup>われ</sup>これを救<sup>すく</sup>わん＝ 彼<sup>かれ</sup>わが名<sup>な</sup>を知る<sup>し</sup>るゆえに我<sup>われ</sup>これをまもらん

五 彼<sup>かれ</sup>われを呼<sup>よ</sup>ばわれ答<sup>こた</sup>えん＝ 我<sup>われ</sup>その悩<sup>なや</sup>みの時<sup>とき</sup>にともにおりて彼<sup>かれ</sup>を助<sup>たす</sup>け、彼<sup>かれ</sup>にほ

まれを得<sup>え</sup>させん

六 われ長<sup>なが</sup>き命<sup>いのち</sup>をもて彼<sup>かれ</sup>をみち足<sup>た</sup>らしめ＝ わが救<sup>すく</sup>いを彼<sup>かれ</sup>に示<sup>しめ</sup>さん

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ  
始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

ここで次の聖歌を歌いまたは唱える。

一 このひも おわりぬ よの つくりぬしよ

こよいも まもりて やすらに ふさせよ

二 サタナをしりぞけ おそれを のぞきて

きよらに いこわせ みまもりを たまえ

三 みちちと みたまど とわに ひとつ なる

みこイエスによりて いのり たてまつる

アーメン

司式者は次の聖語を朗読する。

主よ、なんじは我らのうちにいます。我らはなんじの名をもてとなえらるる者なり。  
我らを捨てたもうなかれ

エレミヤ記一四章九節

会衆 主に感謝し奉る

付録 終 禱

司式者

神よ、我らをひとみのごとく守り

会衆

主の翼のかげにかくしたまえ

次にシメオンの頌または詩百三十四篇を歌いあるいは唱える。

シメオンの頌

一 主よ、今こそ御言葉にしたがいて＝ しもべを安らかに逝かしめたもうなれ

二 わが目は、はや＝ 主の救いを見たり

三 これもろもろの民の前に＝ 備えたまいしもの

四 異邦人をてらすひかり＝ 御民イスラエルの栄光なり

父と子と聖霊に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

詩百三十四篇

一 よる主の家に立ち主に仕うるもろもろのしもべよ＝ 主をほめまつれ

二 なんじら聖所に向かいて手をあげ＝ 主をほめまつれ

三 願わくは主シオンよりなんじを祝したまわんことを＝ 主は天地を造りたまえり

父と子と聖靈に＝ 栄光あれ

始めにあり、今あり＝ 世々限りなくあるなり アーメン

ここで一同ひざまずく。

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず。悪より救いいただいたまえ。アーメン

司式者

主よ、今夜われらを守りたまえ

会衆

罪を犯すことなからしめたまえ

司式者 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司式者 我ら祈るべし

いと高きみくらにいます主よ、願わくは天の光をもつて夜の暗きを照らし、光の子とせられし我らを守りて、暗きわざに組することなからしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に左の祈りまたはその他の祈りを用いてもよい。

生ける神の御子・主イエス・キリストよ、主は墓にこい、墓をきよめて御民のため望みの伏しどとなしたまえ。願わくは主の苦しみのもととなりし我らの罪を深くあわれみ、我らのからだ、ちりに伏すとき、我らの魂、主とともに生くることを得させたまえ。主は父と聖霊とともに一体の神にましまして世々限りなく統べ治めたもうなり。アーメン

あわれみ深き神よ、願わくはともにいまして目さむるまで我らを守り、このはかなき世にて疲れし我ら、とこしえに変わることなき主にたよりて安らうことを得させたま

え。主しゅイエススキリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン  
主しゅよ、願ねがわくはこの家いえに臨のぞみて、あだの手てだてをことごとく退ひけ、主しゅの御使みつかいを住すま  
わせて我われらを安やすらかに守まもり、常つねにさきわいたまわんことを、御子みこ・我われらの救すくい主ぬしイエ  
ススキリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

次に左のよう言う。

司式者 主しゅよ、我われらの祈いのりをききたまえ

会衆 我われらの声こゑを主しゅの御前みまへに至いたらせたまえ

司式者 我われら主しゅを祝いわいまつらん

会衆 主しゅに感謝かんしゃし奉たてまつる

司式者 願ねがわくは父ちちと子こと聖靈せいれいなる全能ぜんのうの神かみ、我われらをさきわい守まもりたまわんことを

会衆 アーメン

# 日本聖公会組織成立記念日祈禱

早禱・晩禱または聖餐式に用いる。

早禱序式または晩禱序式の聖語にかえて、司式者は次の聖語を朗読する。

万軍の神よ、願わくは歸りたまえ。天より望み見てこのぶどうの木をかえりみたまえ。なんじが右の手にて植えたまえるものを守り、おのがために強くなしたまえる枝を守りたまえ

詩八〇篇一四、一五節

なんじらはもはや旅びとまた宿りびとにあらず、聖徒と同じ国びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト―イエス自らそのすみの親石たり

エペソ書二章一九、二〇節

平日に聖餐式を行なうときは、次の特禱・使徒書・福音書を用いる。  
主日には当日の特禱の次にこの特禱を用いる。

特禱

全能の神よ、主は福音の光をもってわが国を照らし、我らを召して使徒たちよりの聖

公会きうかいにありて主しゅに仕つかえしめたまえり。願ねがわくはこの恵めぐみをますます感謝かんしゃし、正ただしく信しん仰うの道みちを歩あゆむことを得えさせたまえ。また願ねがわくはすべて御名みなを唱となうる者ものを導みちき、御子みこにありて全く一つになる時ときをすみやかにきたらせたまえ。父ちちと聖靈せいれいとともに一体いつたの神かみにましまして世々よよ限りなく続つべ治おさめたもう主しゅイエスイエスキリストによりて聞きこし召めしたまわんことをこいねがい奉ほうる。アーメン

使徒書 エペ二章一三—二二

さきに遠とほかりしなんじら今いまキリストイエスにありて、キリストの血ちによりて近ちかづくことを得えたり。彼は我われらの平和へいわにしておのが肉にくにより、さまざまの戒いせめと定めより成なる律法おきてを廃はいして二つのものを一つとなし、恨うらみなる隔へだての中なかがきをこぼちたまえり。これは二つのものをおのれにおいて一つの新あらたしき人ひとに造つくりて平和へいわをなし、十字架じゅうじかによりて恨うらみを滅ほろぼし、またこれによりて二つのものを一つの体からだとなして神かみと和やわらがしめんためなり。かつきたりて、遠とほかりしなんじらにも平和へいわを宣のたまべ、近ちかきものにも平和へいわを宣のたまべたまえり。そはキリストによりて我われら二つのもの一つ御靈みたまにありて父ちちに近ちかづくことを得えたればなり。さればなんじらはもはや、旅たびびとまた宿やどりびとにあらず、聖徒せいとと



同じ国びとまた神の家族なり。なんじらは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリストイエスみずからそのすみの親石たり。おのおのの建て物、彼にありて建て合わせられ、いやましに聖なる宮、主のうちに成るなり。なんじらもキリストにありてともに建てられ、御霊によりて神の御住まいとなるなり。

福音書

ヨハ一七章一四—二一

イエス祈りて言いたもう、「我は御言葉を彼らにあたえたり、しかして世は彼らを憎めり、われの世界のものならぬごとく、彼らも世のものならぬによりてなり。わが願うは、彼らを世より取りたまわんことならず、惡より免れしめたまわんことなり。我の世界のものならぬごとく、彼らも世のものならず。真理にて彼らを清め別かちたまえ、なんじの御言葉は真理なり。なんじ我を世につかわしたまいしごとく、我も彼らを世につかわせり。また彼らのために我はおのれをきよめ別かつ、これ真理にて彼らもきよめ別かたれんためなり。我かれらのためのみならず、その言葉によりて我を信する者のためにも願う、これみな一つとならんためなり。父よ、なんじ我にいまし、我なんじにおるごとく、彼らも我らにおらんためなり、これなんじの我をつかわしたまい

しことを世の信ぜんためなり」。

聖餐式では祝福の前に、早禱・晩禱では第三特禱の次に左の祈り用いる。

とこしえにいます全能の神よ、くすしき摂理をもつて、わが国にも聖公会のえだを植え、これを守り育てたもうことを感謝し奉る。願わくはあわれみをもつて我らの罪とあやまちと怠りとを赦し、聖徒のひとたび伝えられたる信仰の道を堅くまもり、ますます深く父と御子を知り、聖霊によりて聖なる宮に建て合わせられ、御名の栄光をあらし、かつ御国を広むることを得させたまえ。御子・我らの救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

# 収<sup>しゅう</sup>穫<sup>かく</sup>感謝<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>

早禱・晩禱または聖餐式に用いる。

早禱序式または晩禱序式の聖語にかえて、司式者は次の聖語を朗読する。

神は知恵をもつて地をさだめ、悟りをもつて天をすえたまえり。その知識によりて源  
はわきいで、雲は露を注ぐなり

箴言三章一九、二〇節

なんじの宝となんじがすべての成りいで物の初なりをもて神をあがめよ。さらばなん  
じの倉は満ちて余り、なんじの酒ぶねは新しき酒にてあふれん 箴言三章九、一〇節  
すべてのこと感謝せよ。これイエス・キリストによりて神のなんじらに求めたもうと  
ころなり。

テサロニケ前書五章一八節

平日に聖餐式を行なうときは、次の特禱・使徒書・福音書を用いる。  
主日およびその他の祝日には当日の特禱の次にこの特禱を用いる。

## 特<sup>とく</sup>禱<sup>とく</sup>

恵みふかき神よ、源はわきいで、雲は露をそそぎ、まくとき去り、刈る時きたるは主

の御わざによれり。今年も地に物をおい茂らせ、刈り入れを豊かならしめ、またもろもろの恵みを施したまえることを感謝し奉る。願わくはこの大いなる恵みに感じ、生涯行ないを清くし、慎みて主に仕うることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。願わくは父と子と聖霊に世々栄光あらんことを。アーメン

使徒書 ガラ 六章七一〇

神は侮るべき者にあらず、人のまくところは、その刈るところとならん。おのが肉のためにまく者は肉によりて滅びを刈りとり、御霊のためにまく者は御霊によりてこしえの命を刈りとらん。われら善をなすにうまざれ、もしたゆまずば、時いたりて刈り取るべし。このゆえにおりにしたがいて、すべての人ことに信仰の家族に善をおこなえ。

福音書 マタ 五章四三―四八

イエス言いたもう、「なんじの隣を愛し、なんじのあだを憎むべし」と言えることあるをなんじら聞けり。されど我はなんじらに告ぐ、なんじらのあだを愛し、なんじらを責むる者のために祈れ。これ天にいますなんじらの父の子とならんためなり。天の

父はその日を悪しき者の上にも、よき者の上にものぼらせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせたもうなり。なんじらおのれを愛する者を愛すとも、何の報いがか得べき、取税人もしかするにあらずや。兄弟にのみあいさつすとも何のまさることがある、異邦人もしかするにあらずや。さらばなんじらの天の父の全きがごとく、なんじらも全かれ」。

# 伝道祈祷

早祷・晩祷または聖餐式に用いる。  
早祷序式または晩祷序式の聖語にかえて、司式者は次の聖語を朗読する。

神はキリストにありて世をおのれと和らがしめ、その罪をこれにおわせず、かつ和ら  
がしむる言葉を我らにゆだねたまえり

コリント後書五章一九節

なんじら行きて、もろもろのくにびとを弟子となし、父と子と聖霊の名によりて洗礼  
を施し、わがなんじらに命ぜしすべてのことを守るべきを教えよ。見よ、我は世の終  
わりまで常になんじらとともにあるなり アーメン

マタイ伝二八章一九、二〇節

マタイ伝九章三七、三八節

早祷には詩九十五篇にかえて詩九十六篇を用いる。

詩 篇 第七十二篇

第一日課 イザ四二章一一七

第二日課 ロマ一〇章

晩祷には詩九十七篇、百十五篇を用いる。

第一日課 イザ六〇章一―一六

第二日課 使一七章二一―三一

主の祈りの次に司式者は立つ。

司式者

主よ、あわれみを我らに現わしたまえ

会衆

主の救いをあたえたまえ

司式者

主よ、正しきをもつて主の仕えびとを装いたまえ

会衆

主の聖徒を喜ばせたまえ

司式者

主よ、もろもろの国を主のゆずりとなしたまえ

会衆

地のはてまで御国とならしめたまえ

司式者

主よ、御言葉をいだしたまえ

会衆

さらば伝うる者いや増さん

司式者

彼らの声を全地にひびかしめたまえ

会衆

その言葉を地のはてにまで至らせたまえ

司式者

主のみわざをしもべらに示したまえ

会衆 主の栄光をその子らに現わしたまえ

司式者 主の麗しきを我らの上に臨ましめたまえ

会衆 我らの手のわざを堅からしめたまえ

司式者 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

司式者 我ら祈るべし

神よ、一つの血筋より万民をいだして地の全面に住ましめ、また御子をくだして、遠き者にも近き者にも、やわらぎを宣べしめたまえり。願わくはわが国の人々を恵みて主を探ることを得させたまえ。またすみやかに約束を遂げ、万国の民に御霊をそそぎたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 教会振起のため

主よ、願わくは御民の心を励まし、多くの良き行ないの実を結び、豊かに主より報いを受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン



早禱の「恵みのため」の祈り、または晩禱の「みたますけのため」の祈りをここに用いる。次に司式者はひざまずき、左の祈りを用いる。

## 伝道のため

全能の神よ、御子イエス・キリストは使徒たちに、あまねく世界を巡りてすべての人に福音を宣べ伝えよと命じたまえり。願わくは召されて公会にある者を導き、こころよくこの御言葉に従いて福音を人々に教え、救いの道を万国にひろむることを深く望ましめたまえ。天の父よ、願わくは主を知らず、飼う者なき羊のごとく散り離れたる異邦人をあわれみ、働く者を刈り入れ場におくり、天の力をもつてこれを強め、その働きを祝し、ついに異邦人のかず満ち、イスラエルの人のことごとく救われる時をきたらしめたまえ。また願わくはすべてキリストの名を唱うる者、みな主にありて心一つにし、熱心に祈り、豊かに供え物をささげて御国をひろめ、御栄えを現わすことを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主キリストの御名によりてこいねがい奉る。アーメン

## 主教のため

全能の神よ、主は御子イエスキリストをもつて、聖なる使徒たちにさまざまの良き賜物をさづけ、主の群れを飼うことを命じたまえり。願わくは主の民を牧するすべての主教、忠実に御言葉を宣べ、正しく公会を治め、信徒ら喜びてこれにしたがい、ともに限りなき栄光の冠を受くることを得させたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 伝道者のため

慈悲ふかき父よ、主を知らざる人々のうちに働くしもべらの上に、天の恵みをくだしたまえ。願わくは正しきをもつて彼らを装い、その口に御言葉を満たし、その語るところ、むなしくならず、つねに実を結ぶことを得させたまえ。また願わくは力と愛と慎みの霊をあたえ、患難と辛苦に耐うる力を添え、その行ないと教えとをもつて主の栄光を現わし、人々を救いに導くことを得させたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

### 信徒のため

全能の神よ、主は迷える者にまことの教えの光をあらわし、正しき道に帰らせたも

う。願わくはキリストの公会につらなりたる人々、みなその奉ずるところにかなわざるものを去り、もっぱらこれにかのうものを追ひ求むることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

未信者のため

万民の造り主・あわれみ深き神よ、主は造りたまひし者をことごとく愛し、罪びとの死ぬるを好まず、主に帰りて生くることを喜びたまう。願わくは未信者・異端者をあわれみ、そのかたくななるを和らげ、御言葉を軽んずる心を除きたまえ。ほめ奉るべき主よ、彼らをまことのイスラエルびとともに救い、一つの群れとなし、ひとりの羊飼いに従わせたまえ。父と聖霊とともに一体の神にましまして世々統べ治めたもう主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

平日に聖餐式を行なうときは、「神よ、一つの血筋より」(六三三ページ)の祈りを特祷とし、次の使徒書・福音書を用いる。

使徒書 エペ二章一一—二二

されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行ないたる、かの割礼あり

とどのうる者に無割礼むかつれいとなえらるるなんじら、さきにはキリストなく、イスラエルの民籍みんせきに速く、約束やくそくに属ぞくするもろもろの契約けいやくにあずかりなく、世よにありて望みなく、神なき者ものなりき。されどさきに速とかりしなんじら今キリストいまイエスにありて、キリストの血ちによりて近づくことを得たり。彼はわれらの平和へいにして、おのが肉にくにより、さまざまの戒めと定めより成る律法おきてを廃はいして二つのものを一つとなし、恨みなる隔てへだの中なかがきをこぼちたまえり。これは二つのものをおのれにおいて一つの新らしき人ひとに造りて平和をなし、十字架によりて恨みをほろぼし、またこれによりて二つのものを一つの体からだとなして神と和やわらがしめんためなり。かつきたりて、速とかりしなんじらにも平和を宣べ、近き者ものにも平和を宣べたまえり。そはキリストによりて我ら二つのもの一つ御霊みたまにありて父に近づくことを得たればなり。されば、なんじらはもはや旅たびびとまた宿りびとにあらず、聖徒せいとと同じ国くにびとまた神の家族かぞくなり。なんじらは使徒しとと預言者よげんとの基もとの上に建てられたる者にして、キリストイエスみずからそのすみの親石おやいしたり。おのおのの建物たてもの、かれにありて建て合あわせられ、いやましに聖なる宮みや、主しゅのうちに成るなり。なんじらもキリストにありてともに建てられ、御霊みたまによりて神の御住みすま

いとなるなり。

福音書 ヨハ一〇章七一六

イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、我は羊の門なり。すべて我よりさきにきたりし者は、盗びとなり強盗なり、羊はこれに聞かざりき。我は門なり。おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入りをなし、草をうべし。盗びとのきたるは盗み、殺し、滅ぼさんとするのほかなし。わがきたるは羊に命を得しめ、かつ豊かに得しめんためなり。我はよき羊飼いななり、よき羊飼いは羊のために命を捨つ。羊飼いならず、羊もおのがものならぬ雇いびとは、おおかみのきたるを見れば羊を捨てて逃ぐ、——おおかみは羊をうばいかつ散らす——彼は雇いびとにてその羊を顧みぬゆえなり。我はよき羊飼いにしして、わがものを知り、わがものは我を知る、父の我を知り我の父を知るがごとし、我は羊のために命を捨つ。我にはまたこのおりのものならぬほかの羊あり、これをも導かざるを得ず、彼らはわが声をきかん、ついに一つの群れひとりの羊飼いとなるべし」。

# 洗礼志願式

志願者は聖堂の入口に立つ。  
司式者は次のように問い、志願者はおののそれに答える。

問

答

なんじ天地の造り主・唯一のまことの神を信ずるか  
我これを信ず

問

答

なんじ迷信を捨て、偶像を拜むことをやめたるか  
我これをやめたり

問

答

なんじキリストの道を学び、洗礼を受くる備えをなさんと願うか  
我これを願う

問

答

なんじ努めて聖公会の礼拝に列するか  
我これをつとむ

次に司式者は志願者おののに言う。「アーメン」は司式者だけが言う。

我なんじを受けて聖公会の洗礼志願者となす

願わくはこのよき志を起こさせたまえる全能の神、なんじに御力をあたえて、これを全うせしめたまわんことを、主イエス・キリストによりて願う アーメン

次に司式者は左の勧めをする。

なんじらは洗礼志願者となれり。ゆえに今より必ず妄信を去り、不義のわざを捨て、慎みて身を修めざるべからず。また聖書の教えを学び、日々聖霊の助けを祈り、罪に勝つ力と真理を悟る知識とをひたすら願わざるべからず

ここで志願者はひざまずく。司式者は次の祈りをする。

慈悲の父・全能の神よ、このしもべらを導きて、まことの道に帰る決心をなさしめたまえることを感謝し奉る。願わくは我らの祈りをきき、このしもべらの心をひらきて明らかに主を知ることを得させたまえ。また天よりの力をあたえて、まことに悔い改め、信仰を保ち、ついに洗礼を受くることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

# 伝道師認可式

司祭は志願者を主教または主教の指名を受けた司祭の前に伴い、次のように推薦する。

この人々を日本聖公会の伝道師に任ぜんことを願う

主教は言う。

なんじこの人々のことを調査し、品行正しく聖書に通じたる者と認むるか

司祭は答える。

しかり。この人々を調査し、伝道師の職に適する者と認む

主教は次のように言う。

わが子よ、なんじら神の公会にて伝道師とならんと欲せば、よろしくその責任の重きを熟考し、その職を尽くす力を全能の神に求むべし。おおよそ伝道師たる者は、怠らず聖書を説き、ねんごろに洗礼志願者を教え、未信者または道を離れんとする者を導き、聖公会の法規に定めたる職務を熱心に尽くすべし。さればなんじらに問わん



主教しゅきやう

なんじ怠おこらず聖書せいしよを研究けんきゆうし、これを教おしうることを努つとむるか

答こたえ

我われこれを努つとむ

主教

なんじ慎しんみてなんじの主しゅ教きやう・司祭しさいに従したがうか

答

我われこれに従したがわん

ここで会衆はひざまずく。

主教

主しゅよ、主しゅのしもべを救すくいたまえ

会衆

彼かれは主しゅにたよれり

主教

その口くちに知恵ちえを語かたらしめたまえ

会衆

その舌したに公平こうへいを宣のべしめたまえ

主教

そむける者ものに主しゅの道みちを教おしえしめたまえ

会衆

さらば罪つみびと主しゅに帰かえらん

主教

主しゅよ、彼かれの眼めを開ひらきたまえ

会衆

さらば律法おきての奥義おくぎを見みることを得えん

主教

主しゅのさとしをもつて彼かれをみちびきたまえ

会衆　主の榮光のうちに彼を入れたまえ

主教　主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆　我らの声を主の御前に至らせたまえ

主教　我ら祈るべし

すべての良き賜物をあたえたもう全能の神よ、御名をあまねく世に現わすことを我らに命じたまえり。願わくはこのしもべに恵みをくだし、伝道師の職務を尽くさしめ、御言葉をしらぶる知恵を与え、これを教うる力を授けたまえ。また言葉をつつしみ、行ないを清くし、罪びとを主に導くことを努め、また常に主の慰めをこうむりて危うきを忍び、なやみに耐え、ついに限りなき命に至ることを得させたまえ。主イエスⅡ

キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

次に主教は認可状を与えて次のように言う。

父と子と聖靈の御名により、神の公会の伝道師の職務を行のうことを認可す。なんじ正しく神の御言葉を伝うることを努めよ

次に主教は左の祝福を用いる。

願<sup>ねが</sup>わくは父<sup>ちち</sup>と子<sup>こ</sup>と聖<sup>せい</sup>靈<sup>れい</sup>なる全<sup>ぜん</sup>能<sup>のう</sup>の神<sup>かみ</sup>の恵<sup>めぐ</sup>み、なんじらの上<sup>うへ</sup>に臨<sup>のぞ</sup>み、常<sup>つね</sup>になんじらととも<sup>も</sup>にあらんことを。アーメン

# 女執事任命式

志願者を推薦する司祭は主教に向かつて次のように言う。

師父よ、この人々を女執事の職に任ぜんことを願う

主教は言う。

なんじが推薦する人々は、品行正しく、聖書に通じ、この務めを尽くして神の栄光を現わし、聖公会の徳を建つるに適当なりや。これは大いに懐むべきことなり

司祭は答える。

すでにこの人々のことを調査し、この職に適する者なりと認む

主教は言う。

さればなんじ今ここに集まりたる人々に、女執事にかかわる言葉を告ぐべし

司祭は会衆に向かつて言う。

兄弟よ、我らの救い主イエスキリスト、肉体となりて世にいましめるとき、主に仕えたる多くの女たちあり。よみがえりたまえる後にも、主は彼らをしてこの喜びのおと

ずれを弟子たちに告げ知らせたまえり。また聖パウロは福音のために我とともに努めたる女たちを助けよとビリビびとに書きおくり、ロマびとにはケンクレヤの教会の執事なる我らの姉妹フィベをなんじらに薦むと言いおくれり

これによりて、女執事の職務につき聖公会の法規に定められたところは、司祭の指示をうけて病める者を訪ね、貧しき者を助け、女と子どもとに信仰の道を教え、御国を広むることなり。この人々はかかる職務に任せられんためにここにきたるなり

次に主教は言う。

兄弟よ、この人々はすでに法規に定めたる手続にしたがいたり。もしこの人々女執事となるに故障ありと知る者あらば、いま神の御名によりて申し立つべし

故障を申し立てる者がいない時は次のように言う。

主教

我ら女執事の職に任ずるに適當と認められたるこの人々のために祈るべし

ここで会衆はひざまずく。

主教

主よ、あわれみを我らに現わしたまえ

会衆

我ら主にたよれり

主教 天の御位にいますものよ

会衆 われ主にむかいて目を挙ぐ

主教 しもべその主の手に目をそそぎ

会衆 はしためその主婦の手に目をそそぐがごとし

主教 我ら祈るべし

とこしえにいます神よ、主は昔より清き女の働きをよみしこれを祝したまえり。願わくは女執事の職に任ぜられんとするこの姉妹をあわれみ、その願いをゆるし、励みてわざをなし、喜びて主に仕え、主の栄光を現わすことを得させたまえ。父と聖霊とともに世々統べ治めたもう救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

主教と会衆は座につき、志願者は立つ。主教は次のように問う。

主教 神の公会にて女執事の職を願う姉妹よ、いまなんじらと全会衆の聞きごと

く、この務めは、悩める者・貧しき者を慰め、弱き者を助け、迷える者を導き、また御言葉と聖餐をつかさどる聖職を助くるものなれば、なんじらその責任のいかに重きかを熟考したるか

答

しかり

主教

なんじらこの世の心づかいを捨て、おのが行ないをキリストの道にかなわ

答

せ、日々怠らずその聖なる務めを行のうか

主教

神のたすけによりてこれを努めん

答

なんじらこの志を成し遂ぐる恵みを日々祈り求むるか

次に主教は立つて言う。

願わくはこの良き志を起こさせたまえる全能の神、なんじらに御力を与えてこれを遂げさせたまわんことを、主イエス・キリストによりて願う。アーメン

ここで志願者はひざまずき、主教はおのおのに次のように言う。  
「アーメン」は主教だけが言う。

父と子と聖霊の御名により、我なんじを神の公会の女執事たる職に任ず アーメン

主教

主よ、あわれみたまえ

ここで会衆はひざまずく。

会衆 かいしゆ

キリストよ、あわれみたまえ

主教

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救い出したまえ アーメン

主教は次のように言う。

聖靈の光をもつて御民の心を照らしたまいし神よ、この姉妹も同じ聖靈の賜物によりてそのなすべきことを悟り、これを成し遂ぐる恵みを受けることを得させたまえ。また主の慰めをうけ、もろもろの試みをしのび、つねに励みて弱き者・苦しむ者に仕えしめたまえ。願わくはすべてこの職務に召されたる者を祝し、互いに労を負い、ついに御国の喜びに入ることを得させたまえ。救い主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン



全能の神よ、主は柔和・しとやかなる霊をもつて飾りとすべしと教えたまえり。願わくはこの姉妹をして主キリストにならない、柔和と寛容とをもつて装い、謙そんと忠実とをもつて主に仕えしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

願わくは望みの神、信仰よりいずるすべての喜びと平安とをなんじらに満たしめ、聖霊の力によりて望みをますます豊かならしめたまわんことを。アーメン

# 逝せい去きよ者しゃ記き念ねん

## 逝せい去きよ者しゃ記き念ねん聖せい餐さん式しき

特とく 禱とう

すべての人の造つくり主ぬし・贖あがない主ぬしなる神かみよ、願ねがわくは主しゅのしもべ（――）の魂たましいをみそなわし、御み子この苦くるしみのおによりて、その量はかるべからざる恵めぐみを受け、終おわりの日ひに世よを去さりしすべての忠あやど義ぎなるしもべとともに、喜よろこびて主しゅの御み顔かおを仰あおぎ見みることを得えさせたまえ。父ちちと聖せい霊れいとともに一いつ体たいの神かみにましまして世よ々よ統すべ治おさめたもう御み子こイエス・キリストによりてこいねがい奉たてまつる。アーメン

使し徒と書しょ コリ後ご 四し章しょう一いち六ろく―五ご章しょう四し

我われらは氣き落おちせず、我われらが外そとなる人ひとは破やぶれるれども、内うちなる人ひとは日ひ々び新あらたなり。それ我われらが受うくるしばらくの輕かろき悩なやみは、きわめて大おおいになるとこしえの重おもき榮えい光こうを得えしむるなり。我われらの願ねがみるところは見みゆるものにあらず見えぬものなればなり。見みゆるもの

はしばらくにして、見えぬものはとこしえに至るなり。我らは知る、我らの幕屋なる地上の家破るれば、神の賜う建物、すなわち天にある、手にて造らぬ、とこしえの家あることを。我らはその幕屋にありて嘆き、天より賜う住みかをこの上に着んことをせつに望む。これを着るときは裸にてあることなからん。我らこの幕屋にありて重荷を負えるごとくに嘆く、これを脱がんとにあらでこの上に着んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の命にのまれんためなり。

福音書 ヨハ 五章二四—二八

イエス言いたもう、「まことに、まことになんじらに告ぐ、わが言葉をききて我をつかわしたまいし者を信ずる人は、とこしえの命をもち、かつさばきに至らず、死より命に移れるなり。まことに、まことになんじらに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでにきたれり、しかして聞く人は生くべし。これ父みずから命を持ちたまうごとく、子にもみずから命をもつことを得させ、また人の子たるによりてさばきする権を与えたまいしなり。なんじらこれを怪しむな、墓にある者みな神の声をききていずる時きたらん」。

幼年逝去者の記念聖餐式には、幼年葬送式中の聖餐式の特禱・使徒書・福音書を用いる。

## 逝去者記念式

家庭でこの式を用いてもよい。

司式者

父と子と聖霊の御名によりて アーメン

司式者

主よ、あわれみたまえ

会衆

キリストよ、あわれみたまえ

司式者

主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行なわしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いいだしたまえ アーメン

詩二十三篇

一 主はわが牧者なり＝ 我は乏しきことなからん

二 主は我をみどりの野に伏さしめ＝ いこいのみぎわにともないたもう

三 主はわが魂を生かし＝ 御名のために正しき道にみちびきたもう

四 たといわれ死の陰の谷を歩むとも災いをおそれじ＝ なんじ我とともにいまし、

なんじのむち、なんじのつえ我をなぐさむ

五 なんじわがあだの前にわがために宴をもうけ＝ わがこうべに油を注ぎたもう、

わが杯はあふるるなり

六 われ世にあらんかぎり恵みとあわれみとは必ず我にそいきたらん＝ 我はとこし

えに主の宮のうちに住まわん

主よ、とこしえの平安を＝ 彼らにあたえ

絶えざる御光をもて＝ 照らしたまえ

詩八十四篇

一 万軍の主よ＝ なんじの御住まいはいかに愛すべきかな

- 二 わが魂は絶えいるばかりに主の大庭をしたい＝ わが心わが身は生ける神に向か  
いてよろこびうとう
- 三 万軍の主・わが王・わが神よ＝ なんじの祭壇のほとりに、すずめも宿りをえ、  
つばめもそのひなを入るる巢をえたり
- 四 なんじの家に住むものはさいわいなり＝ かかる人はつねに、なんじをたたえま  
つらん
- 五 なんじを力とする者はさいわいなり＝ そのころシオンの大路にある者はさい  
わいなり
- 六 彼らは涙の谷を過ぐれども、そこを多くの泉あるところとなす＝ また前の雨は  
もろもろの恵みをもてこれをおおえり
- 七 彼らは力より力にすすみ＝ ついにシオンに至りて神にまみゆ
- 八 主よ、万軍の神よ、わが祈りをききたまえ＝ ヤコブの神よ、耳を傾けたまえ
- 九 神よ、我らの盾なる者をみそなわし＝ なんじに油そそがれし者の顔をかえりみ  
たまえ

二 なんじの大庭に住もう一日は千日にもまされり＝ われは悪の天幕におらんより

はむしろわが神の家の門守とならんことをねごうなり

二 そは主なる神は日なり盾なり＝ 主は恩と栄光をあたえ、直くあゆむ者によりき物

を拒みたまふことなし

万軍の主よ＝ なんじに寄り頼む者はさいわいなり

主よとこしえの平安を＝ 彼らにあたえ

絶えざる御光をもて＝ 照らしたまえ

ここでヨハネ伝第一四章一節から一三節までを朗読する。

イエス言いたもう、「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住みか多し、しからずば我かねてなんじらに告げしならん。我なんじらのために所を備えに行く。もし行きてなんじらのために所を備えば、またきたりてなんじらわがもとに迎えん、わがおる所になんじらもおらんためなり。なんじらはわが行く所にいたる道を知る」。トマス言う、「主よ、いずこに行きたもうかを知らず、いかでその道を知らんや」。イエス彼に言いたもう、「われは道なり、真理なり、命なり、我

によらではたれにても父のみもとに至る者なし。なんじら、もし我を知りたらばわが父をも知りしならん。今よりなんじらこれを知る、すでにこれを見たり」。ピリポ言う、「主よ父を我らに示したまえ、さらば足れり」。イエス言いたもう、「ピリポ、我かく久しくなんじらとともにおりしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、いかなれば『われらに父を示せ』と言うか。我の父におり、父の我にいたもうことを信ぜぬか。わがなんじらに言う言葉はおのれによりて語るにあらず、父われにいましてみわざを行ないたもうなり。わが言うことを信ぜよ、われは父におり、父は我にいたもうなり。もし信ぜずば、わがわざによりて信ぜよ。まことに、まことになんじらに告ぐ、我を信ずる者はわがなすわざをなさん、かつこれよりも大いなるわざをなすべし、われ父に行けばなり。なんじらがわが名によりて願うことは、我みなこれをなさん、父、子によりて栄光を受けたまわんためなり」。

次に左の折りをする。ただし幼年逝去者のときはこれを用いない。

世々限りなくいます主・命のもとなる神よ、主の御名は、世を去れる者にも、世にある者にも、ひとしくあがめられたもう。我ら、やすみに入れる主のしもべ（――）の



ゆえによりて御名をほめ奉る。願わくはパラダイスおよびこの世にある、主の全公会に御光を放ち、天よりの慰めをあたえたまえ。願わくは我らをあわれみ、よき模範のこせる主のしもべの跡をふみ、主を愛し、主に仕え、ついに彼らとともにとこしえの喜びに入ることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

幼年逝去者のときは次の祈りを用いる。

主イエス・キリストよ、この世にいましめるとき、幼な子をいだきて祝し、天国はかくのごとき者の国なりと教えたまえり。願わくはいつくしみ深き御手をもつて主が招きたまいし幼な子たちの、今もなお主によるこばれ、御守りのうちにあることを信ぜしめ、我らをして、つねに主のなぐさめを感謝し、御名をあがむる心を増させたまえ。父と聖霊とともに唯一の神にましまして世々限りなく統べ治めたもう主にこいねがい奉る。アーメン

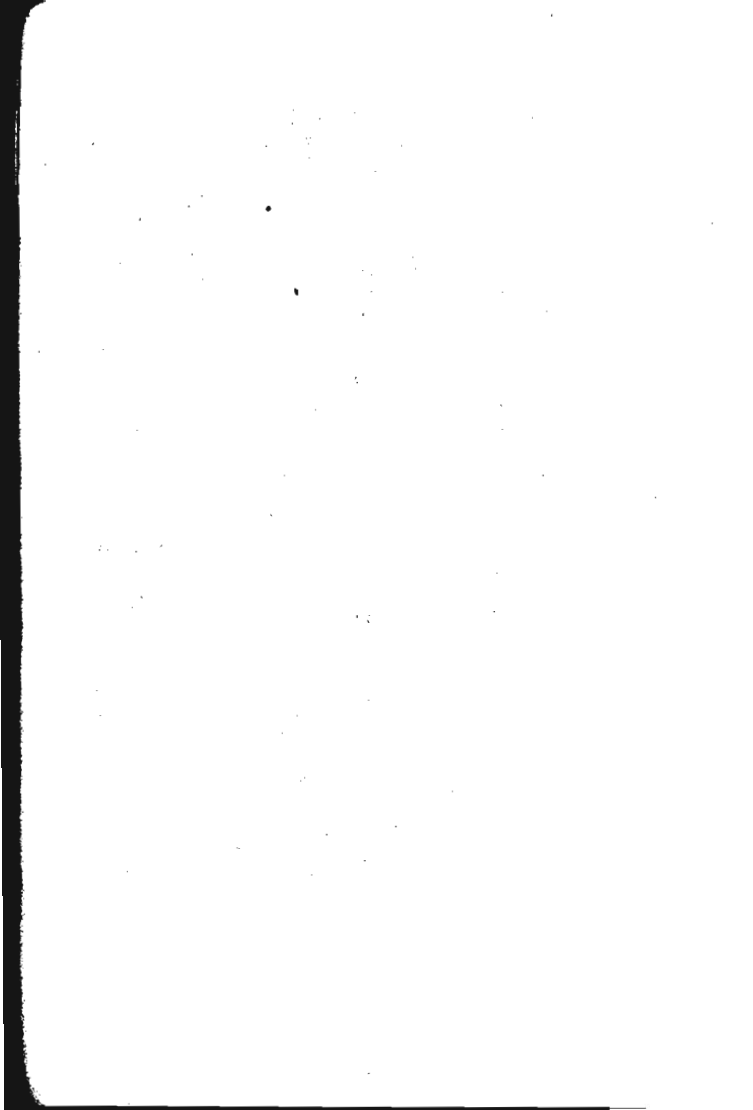
つづいて以下の祈りをする。

主イエス・キリストよ、主は十字架の死によりて死の針を除きたまえり。願わくはし

もべらをして主を信じ、主にありて安らかに眠り、主の御姿に目ざむることを得させたまえ。父と聖霊とともに世々限りなく一体の神にまします主のあわれみによりてこいねがい奉る。アーメン

全能の神よ、主は選びたまひし者を結び合わせ、御子われらの主キリストのからだなる公会に連ねたまえり。願わくは我らに恵みをあたえ、主の聖徒の模範にしたがいて常に清きことを行ない、ついに主を愛する者のために備えたまいし大いなる喜びにあずかることを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

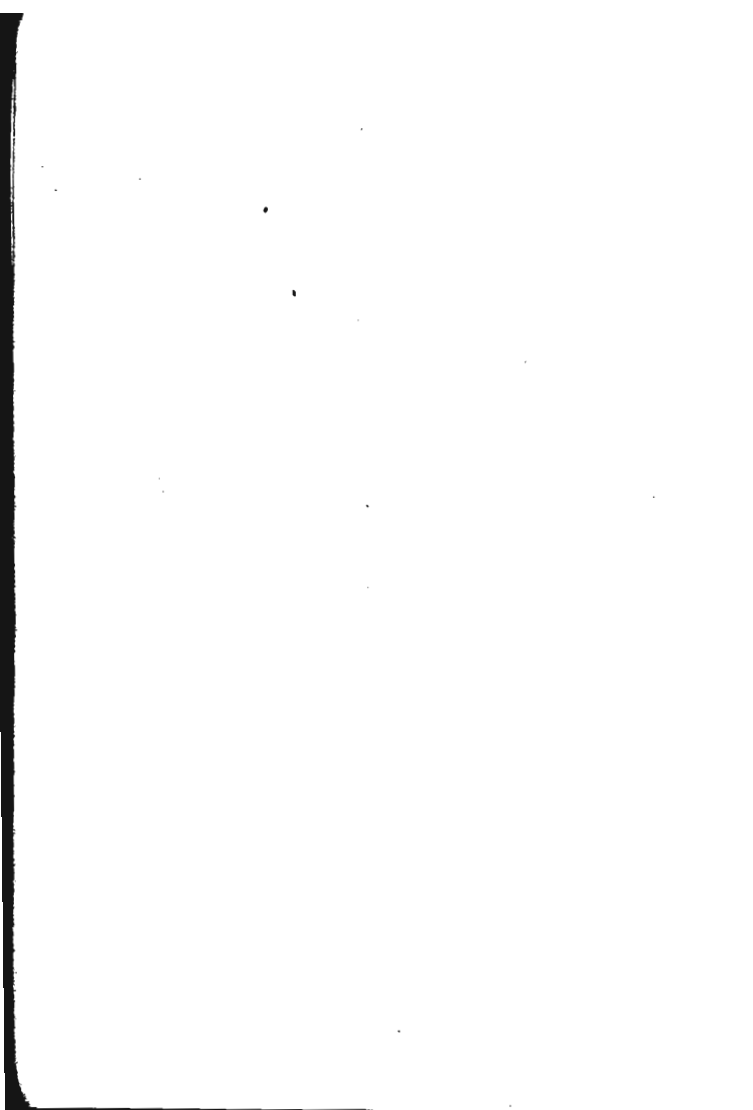
願わくはあわれみ深き全能の神、すべて主を信じて世を去りし者に光明と平安とをあたえ、とこしえの命に至らせたまわんことを。アーメン



救主降生一九五九年改定

詩

篇



詩

篇

一日早禱

第一篇

一 惡しき者のはかりごとに歩まぬ人はさいわいなり＝ 罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいなり

二 かかる人は主の律法をよろこび＝ 昼も夜もこれをおもう

三 かかる人は流れのほとりに植えし木のごとし＝ 時いたりて実を結び、葉もまたしおれず、そのなすところみなさかえん

四 惡しき人はしからず＝ 風の吹き去るもみがらのごとし

五 されば惡しき者はさばきに耐えず＝ 罪びとは正しき者のつどいに立つことを得ざるべし

六 主は正しき者の道を知りたもう＝ されど惡しき者のみちはほろびん

第二篇

一 いかなれば国々くこくにはあいむすび＝ 民たみらはむなしきことをはかるや

二 地の王ぢのきうらは立ちかまえ＝ つかさらはともにはかり、主しゆとその油あぶらそそがれし者ものに

さからいて言う

三 「我われらそのなわを断たち＝ その綱つなを捨てん」と

四 天てんに座ざするもの笑わらいたまわん＝ 主しゆかれらをあざけりたもうべし

五 かくて主しゆは憤いらいりをもてもの言い＝ 激はげしき怒いかりりをもて彼かれらをおじ惑まどわしめて言いい

たもう

六 「我われわが王きうを立てたり＝ わが聖せいなる山やまシオンに立たてたり」と

七 われ主しゆの詔みことばを宣のたまへん＝ 主しゆわれに言いいたもう、「なんじはわが子こなり、きよう我われ

なんじを生うめり

八 我われに求めよ、さらばもろもろの国くにをなんじの嗣業しぎやうとしてあたえ＝ 地ちのはてをも

なんじのものとしてあたえん

九 なんじ鉄てつのつえをもてかれらを打うちやぶり＝ 陶工とうこうのうつわのごとくに打うちくだ

かん」と

- 一 さればもろもろの王よ、なんじらさとかれ＝ 地のつかさら戒めをうけよ  
二 おそれをもて主につかえ＝ おのきをもて御足に口づけせよ  
三 しからずば主いかりをはなち＝ なんじら道にてほろびん  
その憤り、すみやかに燃ゆればなり＝ すべて主に寄り頼む者はさいわいなり

### 第三篇

- 一 主よ、我に敵する者いかにとおおき＝ 我に逆らいて起こり立つ者のかずおとし  
二 多くの人われにつきて言う＝ 「神かれを助くることなし」と  
三 されど主よ、なんじは我を囲める盾なり＝ わが榮えなり、わがかしらをもたげ  
たもうものなり

- 四 われ声をあげて主に呼ばわる＝ 主その聖なる山より我にこたえたもう  
五 われ伏して眠り、また目をさます＝ 主われをささえたもうなり  
六 われを囲みて立ち構うる者を我はおそれ＝ ちよろずの民をもわれはおそれじ  
七 主よ立ちたまえ、わが神よわれを救いたまえ＝ なんじわがすべての敵のほおを



打ち、惡しき者の齒を折りたもうなり

救いは主にあり＝願わくはみめぐみなんじの民にあらんことを

## 第四篇

一 わが義の守りなる神よ、わが呼ばわるときに聞きたまえ＝わが悩みしとき、なんじ我をくつろがせたまえり、願わくは我をあわれみ、わが祈りにこたえたまえ人々よ、なんじらいつまでわが譽れをきずつけ＝むなしきことを好み、偽りを慕いもとむるや

二 されど知れ、主は神を敬う人をきよめ別ちて、おのがものとなしたまいしを＝

三 われ呼ばわらば主はききたまわん

四 なんじら怒るとも罪をおかすなかれ＝伏しどにておのが心にかたりて、もだせ

五 なんじら正しきいけにえをささげよ＝なんじら主によりたのめ

六 多くの人は言う、「我らによき事を示すものなきや＝主よ、願わくは御顔の光

七 をのぼらせて我らを照らしたまえ」と

八 なんじはわが心に喜びを与えたまえり＝かれらの穀物と酒との豊かなるとき

喜びにまされり

八 われ安らかに伏しまた眠らん＝ 主よ、ただなんじのみ我を安らかにおらしめたもう

### 第五篇

一 主よ、願わくはわがことばに耳をかたむけ＝ わが嘆きにみこころをとめたまえ  
二 わが王、わが神よ、わが叫びの声をききたまえ＝ 我なんじにいのればなり  
三 主よ、朝ごとになんじわが声をききたまわん＝ われ朝ごとにいけにえの備えして、なんじを待ちのぞむべし

四 なんじは悪しきことを喜びたもう神にあらず＝ 悪しき人はなんじのみもとにとどまるを得ざるなり

五 高ぶる者はなんじの前に立つことをえず＝ なんじはすべて悪を行のう者をにくみたもう

六 なんじは偽りをいう者をほろぼしたもう＝ 主は血をながす者、あざむく者をにくみたもうなり

七 されどわれは豊かなるみいつくしみによりて、なんじの家に入らん＝ 我はなん

じをかしこみつつ聖なる宮にむかいておがまん

八 主よ、願わくはなんじの義をもて我をみちびき＝ なんじの道をわが前に直くし

たまえ、われに敵するもののおおければなり

九 彼らの口にはまことなく、心にては滅びをはかる＝ そののどは開きし墓、その

舌はへつらいを言う

一〇 神よ、願わくは彼らにおのが罪を負わせ＝ そのはかりごとによりて自ら倒れし

めたまえ

そのとがの多きによりて彼らを追いいだしたまえ＝ 彼らはなんじにそむきたれ

ばなり、

二 されどすべてなんじに寄り頼む者をよろこばせたまえ＝ とこしえに喜びよばわ

らせたまえ

なんじは彼らを守り＝ 御名を愛する者をなんじによりて喜ばせたまえ

三 主よ、なんじは正しき者をさきわいたまわん＝ 盾をもて囲むごとく恵みをもて

かこみたまわん

# 一日晩禱

## 第六篇

一 主よ、願わくは憤りをもて我を責めたもうなかれ＝ はげしき怒りをもて我を懲らしめたもうなかれ

二 主よ、我をあわれみたまえ、我しほみ衰うるなり＝ 主よ、我をいやしたまえ、わが骨わななきふるう

三 わが魂さえも、いたく震いわななく＝ 主よ、かくていつまで我を責めたもうや  
四 主よ、かえりみてわが命をすくいたまえ＝ なんじのいつくしみによりて我をたすけたまえ

五 そは死にありてはなんじを思いいずることなし＝ よみにありては、たれかなんじをほめたたえん

六 われ嘆きによりてつかれたり＝ 夜ごとに涙をもてわが伏しどをただよわせ、わ

がしとねをひたせり

セ わが目は憂うれいによりておとろえ＝ もろもろのあだのゆえに老いぬ

ハ なんじら悪あくを行おこのう者ものことごとく我われをはなれよ＝ 主しゅはわが泣なくこえを聞ききたま  
いたり

九 主しゅわが願ねがいをききたまえり＝ 主しゅわが祈いのりをうけたもう

一〇 わがもろもろのあだは恥はじて大おおいにおじまどい＝ たちどころに恥はじてしりぞ  
かん

## 第七篇

一 主しゅ・わが神かみよ、我われなんじに寄よりたのむ＝ 願ねがわくはすべて追おいせまる者ものよりわれ  
を救すくい、我われをたすけたまえ

二 しからずば彼かれししのごとく我われをかき裂さき＝ 助たすくる者ものなき間にわれを引ひきゆかん

三 主しゅ・わが神かみよ、もし我われこの事ことをなししならんには＝ もしわが手てによこしまのま  
つわりおらんには

四 もし悪あくをもてわが友ともに報むくいしならんには＝ あだびとの物ものを、ゆえなくかすめし

ことあらんには

五 あだする者のわれを追ひ捕うるにまかせ＝ わが命を土にふみにじり、わが魂を

ちりに置くにまかせよ

六 主よ、御怒りをもて起き、わがあだの憤りに向かいて立ちたまえ＝ わがために

目をさましたまえ、なんじはさばきを仰せいだしたまえり

七 もろもろの民のつどいをなんじのまわりにあつめ＝ その上なる高みくらに座し

たまえ

八 主はもろもろの民をさばきたもう＝ 主よ、わが正しきとわが誠とに従いて我を

さばきたまえ

九 願わくは悪しき者の悪を断ちて、正しき者をかたく立たせたまえ＝ 正しき神よ

なんじは人の心と思いをさぐり知りたもう

一〇 わが盾をとるものは神なり＝ 神はこころ直き者をすくいたもう

二 神は正しきさばき主なり＝ 日ごとに憤りをおこしたもう神なり

三 人もし立ち帰らずば神はその剣をとぎ＝ その弓を張りてかまえたまわん

- 三 また死の武器をそなえ＝ その矢に火を添えたまわん  
四 見よ、悪しき人はよこしまをはらみ＝ 害悪をやどし、いつわりを生むなり  
五 また穴を掘りてふかくし＝ おのが作れるその穴におちいる  
六 その害悪はおのがこうべにかえり＝ その暴虐はおのがかしらにくだる  
七 われ主に向かいてその義にふさわしき感謝をささげ＝ いと高き主の御名をほめ  
うたわん

## 第 八 篇

- 一 主・われらの神よ、なんじの御名は地にあまねくしてとうときかな＝ その栄光  
は天にあり  
二 幼な子、乳のみ子もなんじをほめたとう＝ なんじはあだびとと恨みを報ゆる者  
とをおし静めんために、敵に備えてとりでをもうけたまえり  
三 我なんじの指のわざなる天を見るに＝ なんじの設けたまえる月と星とをみるに  
四 人はいかなる者なれば、これを御心に留めたもうや＝ 人の子はいかなる者なれ  
ば、これを顧みたもうや

五 ただ少しく人を神より低くつくり＝ 栄光と誉れとをこうむらせ  
六 またこれに御手のわざを治めしめ＝ よろずのものをその足の下に置きたまえり  
七 すべての羊、牛また野の獣もしかり＝ 空の鳥、海の魚、もろもろの海路を通う  
ものまで皆しかなしたまえり  
八 主・われらの神よ＝ なんじの御名は地にあまねくしてとうときかな

## 二日早禱

### 第九篇

一 われ心を尽くして主に感謝し＝ もろもろのくすしきみわざを宣べつたえん  
二 我なんじによりて、喜びたのしまん＝ いと高き者よ、なんじの御名をほめうた  
わん  
三 わがあだ、しりぞくとき＝ つまづき倒れて御前にほろびたり  
四 なんじはわが正しき訴えをまもり＝ 御位に座して正しきさばきをなしたまえり  
五 なんじもろもろの国民を責め、悪しきものをほろぼし＝ 世々限りなくかれらの



名を消し去りたまえり

六 あだは絶えはててその跡あれすたれ＝ なんじのくつがえしたまえる、もろもろの町はうせて、これを思いいずるものだになし

七 主はとこしえに御位に座したもう＝ さばきのために、その御位を設けたまえり  
八 主は正しきをもて世をさばき＝ 公平をもて、もろもろの民にさばきをおこない

たもう

九 主はしいたげらるる者のとりでなり＝ 悩みの時のとりでなり

一〇 御名を知るものはなんじに寄りたのむ＝ 主よ、なんじを尋ぬる者の捨てられし

ことなればなり

二 シオンに住みたもう主に向かいてほめうたえ＝ そのみわざをもろもろの民のな

かに宣べつたえよ

三 血をながす者にあだをかえしたもう者は、苦しむ者を心にとめたもう＝ その叫

びを忘れたまわす

三 我を死の門より救いだしたもう主よ＝ 我をにくむ者よりわが受くる悩みを見

たまえ

四　さらば我なんじのすべての養れを述ぶるをえん＝　またシオンの娘の門にてなん

じの救いをよろこばん

五　国々の民はおのが作れる穴におちいり＝　その隠し設けたる網におのが足をとら

えらる

六　主はおのれを知らしめ、さばきを行ないたまえり＝　悪しき人はおのが手にて作

れるわなにかかれり

七　悪しき人はよみに去り行くべし＝　神を忘るる国々の民もまたしからん

八　貧しき者は常にわすれらるるにあらず＝　苦しむ者の望みもとこしえには絶ゆる

ことなし

九　主よ、立ちたまえ、願わくは勝ちを人にえしめたもうなかれ＝　御前にて国々の

民にさばきをうけしめたまえ

一〇　主よ、願わくは彼らに恐れをおこさしめたまえ＝　国々の民に、おのれのただ、

人なることを知らしめたまえ

第十篇

一 ああ主よ、なんじ何とてはるかに立ちたもうや＝ なんぞ悩みのときにかくれたもうや

二 悪しき人は高ぶりて貧しき者をはげしく攻む＝ かれらを自ら企てしはかりごと  
に捕われしめたまえ

三 悪しき人はおのが心の願いをほこり＝ むさぼる者は主をのろい、主を捨つ  
四 悪しき人はほこり高ぶりて神をたずねもとめず＝ すべてその思いに「神なし」

とせり

五 かれの道はつねにさかえ、なんじのさばきを見ることをせず＝ 彼はそのもろも  
ろの敵を口さきにて吹く

六 かくておのが心のうちに言う、「われは動かさるることなし＝ 世々われに災い  
なかるべし」と

七 その口はのろいと偽りと、しいたげに満ちたり＝ その舌の下には、そこないと  
よこしまとあり

ハ かれは村里の忍びやかなる所にひそみ、隠れたる所にて罪なきものをころす＝

その目はひそかに寄るべなき者をうかごう

九 隠れ場におけるししのごとくひそみ待ち、貧しき者を捕えんと伏しねろう＝ 貧し

き者をその網に引きいれてとろう

二〇 寄るべなき者は彼の力によりて＝ 打ちくだかれ、よろめきたおる

二 かれ心のうちに言う＝ 「神はわすれたり、神はその顔をかくせり、神は見るこ

となかるべし」と

三 主よ、立ちたまえ、神よ、御手をあげたまえ＝ 苦しむ者を忘れたもうなけれ

三 いかなれば悪しき者は神をあなどるや＝ なんぞ心のうちに、「なんじはとがむ

ることをせじ」と言うや

二四 なんじは見そなわしたもう＝ なやみと苦しみをみて、これを御手に取りあげた

もう

寄るべなき者は身をなんじにゆだね＝ なんじは昔よりみなしごを助けたもうも

のなり

- 五 願わくは悪しき者と悪を行のう者の腕を折りたまえ＝ その悪を一つだに残らぬ  
までに探りいだしたまえ
- 六 主はとこしえに王なり＝ 国々の民はほろびて主の御国より跡をたたん
- 七 主よ、なんじは柔和なる者のねがいを聞き＝ 彼らの心をつよくしたまわん
- 八 なんじ耳をかたむけて聞き、みなしごと、しいたげらるる者とのためにさばきをなし＝ 地につける人のふたたびおびやかすこと、なからしめたまわん

## 第十一篇

- 一 われは主に寄りのためり＝ なんじらなんぞ我に向かいて言うや、「鳥のごとく  
山にのがれよ、
- 二 見よ、悪しき者は弓を張り、弦に矢をつがえ＝ 暗きにかくれ、心なおき者を射  
んとするなり
- 三 基みなくずれたり＝ 正しき者なにをかなしえん」と
- 四 主はその聖なる宮にいます、主のみくらは天にあり＝ その目は人の子を見、そ  
のまぶたは彼らをこころみたもう

五 主は正しき者と悪しき者をこころみ＝ そのみこころは暴虐をこのむ者をにくみ

たもう

六 主は悪しき者のうえに火と硫黄を降らせたまわん＝ 燃ゆる風はかれらの杯に受

くべきものなり

七 主は正しくして正しきことを愛したもう＝ 直き者はその御顔をあおぎみん

## 二 日晚禱

### 第十二篇

一 ああ主よ、助けたまえ、そは神を敬う人は絶え＝ 誠ある者は人の子のなかより

消えうせたり

二 人はみな偽りをもてその隣と相かたり＝ くちびるをもてへつらい、ふたごころ

をもてもの言う

三 主よ、すべてへつらいを言うくちびると＝ 大いなることを語る舌を断ちたまわ

んことを

四 彼らは言う、「われら舌をもて勝ちをえん」 このくちびるはわがものなり、たれか我らに主たらんや」と

五 主いたもう、「貧しき者かすめられ、乏しきもの嘆くがゆえに我いま立たん＝ 彼らをその慕い求むるやすきにおかん」と

六 主の言葉は清きことばなり＝ 地に設けたる炉にてねり、七たび清めたる白がねのごとし

七 主よ、我らをまもり＝ われらを助けて、とこしえにこのやからより免れしめたまえ

八 悪しき者ここやかしこにあるくなり＝ 人の子のなかに卑しきことあがめらるればなり

## 第十三篇

一 ああ主よ、かくていつまでぞや、なんじとこしえにわれを忘れたもうや＝ いつまで御顔をかくしたもうや

二 いつまでわれは心に悲しみをいただき、ひねもす魂に痛みを負うべきか＝ いつま

であだはわれに勝ちほこるや

三 主わが神よ、我を顧みて答えたまえ＝ わが目を明らかにしたまえ、おそらくは

われ死のねむりにつかん

四 おそらくはわがあだ言わん、「我かれに勝てり」と＝ おそらくはわが敵わが動  
かざるによりてよろこばん

五 されど我はなんじのいつくしみに寄りたのみ＝ わが心はなんじの救いによりて  
よろこばん

六 われ主に向かいてうたわん＝ 我を豊かにあしらいたまいたればなり

#### 第十四篇

一 愚かなる者は心のうちに「神なし」と言えり＝ かれらは腐れたり、憎むべき事  
をなせり、善を行のうものなし

二 主は天より人の子をのぞみ＝ さとき者、神をたずぬる者ありやと見たまえり  
三 みな迷いいでてことごとくけがれたり＝ 善をなす者なし、ひとりだになし

四 不義を行のう者はみな悟りなきか＝ かれらはもの食うごとくわが民をくらい、



また主しゅを呼よぶことをせざるなり

五 見みよ、彼かれらは大おおいにおそれん＝ 神かみは正ただしき者ものとともにいませばなり

六 なんじらは貧またしき者もののはかりごとを侮あざとりはずかしむ＝ されど主しゅはその避さけどころなり

七 願ねがわくはシオンよりイスラエルの救すくいのいでんことを＝ 主しゅその民たみをふたたび栄さかえしめたもうとき、ヤコブは喜よろこびイスラエルはたのしまん

### 三日早禱

#### 第十五篇

一 主しゅよ、なんじの幕屋まぐやのうちに宿やどるべき者ものはたれぞ＝ なんじの聖せいなる山やまに住すむべ

き者ものはたれぞ

二 直なおく歩あゆみ義ぎを行おこのう者ものぞその人ひとなる＝ 心こころよりまことを言いう者ものぞその人ひとなる

三 かかる人ひとは舌したをもてそしらず、その友ともをそこなわず＝ またその隣となりをはずかしむる言ことば葉はをあげもちいず

四 神に捨てられし者を見たいとい軽んじ、主を恐るる者をとうとび＝ 誓いしこと

はおのれに災いとなるも変うることなし

五 金を貸して利をとらず、まいないを受けて罪なき者をそのうことをせざるな

り＝ かかる人はとこしえに動かさるることなかるべし

### 第十六篇

一 神よ、願わくは我を守りたまえ＝ 我なんじに寄りたのむ

二 われ主に言えり、「なんじはわが主なり＝ なんじのほかにかわが幸いはなし」と

三 地にある聖徒はすぐれたる者なり＝ わがきわめてよろこぶものなり

四 主にかえてほかの神をとるもの悲しみはいやまさん＝ われ彼らのささぐる血

の滙祭をささげず、その名を口に唱うることをせじ

五 主はわが嗣業なり、またわが杯ににうくべきものなり＝ なんじはわが領地をま

もりたまわん

六 測りなわはわがために楽しき地に落ちたり＝ げに我よき嗣業を得たるかな

七 我はさとしを授けたもう主をほめまつらん＝ 夜はわが心またわれをおしう

ハ われ常に主をわが前におけり＝ 主わが右にいませば、われ動かさることなかるべし

九 このゆえにわが心は樂しみ、わが魂はよろこぶ＝ わが身もまたやすらかなり  
二〇 なんじは我をよみに捨てたまわず＝ なんじを敬うものを墓に下らせたまわざるなり

二 なんじは命の道をわれに示したもう＝ なんじの前には満ち足れる喜びあり、なんじの右にはもろもろの樂しみとこしえにあり

## 第十七篇

一 ああ主よ、正しき訴えをきき、わが叫びに御心をとめたまえ＝ 偽りなきくちびるよゆいずるわが祈りに耳をかたむけたまえ  
二 願わくは御前よりいずる宣告われを義とし＝ なんじの目、正しきを見たまわんことを

三 なんじわが心を試み、また夜われに臨み、我をただしたもうとも、なにの惡をも見いだしたまわざるべし＝ わが口は罪を犯すことなし

四 行ないのことを言わば＝ 我なんじのくちびるの言葉にしたがいて、暴逆の道を

さけたり

五 わが歩みは堅くなんじの道にたち＝ わが足はよろめくことなかりき

六 神よ、我なんじをよべり、なんじ我にこたえたまわん＝ 願わくは耳を傾けてわ

が述べるところを聞きたまえ

七 願わくはなんじのたえなるいつくしみを現わしたまえ＝ なんじは右の手をもて

なんじにたよる者をそのあだよりすくいたもう

八 願わくは我をひとみのごとく守り＝ 御翼の陰にかくしたまえ

九 我をかすむる悪しき者をふせぎ＝ 我を囲みてわが命をそこなわんとするあだよ

りのがれしめたまえ

一〇 彼らはあわれみの心をとじ＝ その口をもて誇りがにもの言えり

一一 彼らは我を迫いつめ、我をとりかこみ＝ 地に投げ倒さんと目をとむ

一二 彼らはかき裂かんといらだつしのごとく＝ 隠れたる所にひそみ待つ若きし

のごとし

三 主よ、立ちたまえ、願わくは彼らに立ち向かいてこれをたおし＝ 御剣をもて悪

しき者よりわが命をすくいたまえ

四 主よ、御手をもて我を助けいだしたまえ＝ この世のものをおのが受くべき分と

なす人びとより助けいだしたまえ

彼らはなんじのたくわえたまいしものにて、その腹をみたされんことを＝ 彼ら

の子はすべてのものに満ちたりて、その富を幼な子にのこすなり

五 されどわれは義にありて御顔をみん＝ 目さむる時みかたちをもて飽き足ること

を得ん

三 日 晩 禱

第十八篇

一 わが力なる主よ＝ 我なんじをいつくしむ

二 主はわが岩、わが城、われを救う者、わが神、わが寄り頼む岩なり＝ わが盾、

わが救いの角、わが高きやぐらなり

- 三 われほめたとうべき主をよびまつり＝ あだびとより救わるるなり
- 四 死のつな我をめぐり＝ 滅びの激しき流れわれをおそえり
- 五 よみの綱われをかこみ＝ 死のわな我にたちむかえり
- 六 われ悩みのうちにありて主をよび、わが神にさけびたり＝ 主はその宮よりわが  
声を聞きたまえり、御前にてわがよびし声はその耳にいれり
- 七 このとき主いかりたもうによりて地はふるい＝ 山の基はゆるぎうごきたり
- 八 煙その鼻よりたち上り、火その口よりいでて焼きつくし＝ 燃えさかる炭火うち  
より吹きいでたり
- 九 主は天をたれて下りたもう＝ その御足の下は暗きことはなはだし
- 一〇 主はケルブに乗りてとび＝ 風の翼にてかけりたまえり
- 一一 主はやみをおおいめぐらして幕となし＝ 黒き雲をおおひとなしたまえり
- 一二 そのみまへの輝きによりて黒雲ひらけ＝ ひようと燃ゆる炭と降りきたれり
- 一三 主は天にいかずちをとどろかせたまえり＝ いと高き者の声いでて、ひようと燃  
ゆる炭と降りきたれり

四 主は矢を放ちて彼らをうちちらし＝ いなずまを放ちて、彼らを打ちやぶりたまえり

五 かかるときに海の底みえ、地の基あらわれいでたり＝ ああ主よ、なんじの怒り

となんじの鼻のいぶきによりてなり

六 主は高きより手をのべて我をとらえ＝ 大水より引きあげたまえり

七 わが強きあだと我を憎むものより我を助けいだしたまえり＝ 彼らは我にまさり

ていとつよかりき

八 わが災いの日に彼ら迫りきたれり＝ されど主はわが支えとなりたまいき

九 主は我をたずさえて広きところにいだし＝ 我を喜びたもうがゆえに我を助けた

まえり

一〇 主はわが正しきに従いて賜物をたまひ＝ わが手のきよきに従いて報いたまえり

一一 そはわれ主の道をまもり＝ わが神よりはなるる悪をなさず

一二 そのすべてのおきてはわがまえにあり＝ 我その定めを捨てしことなければなり

一三 われ神の御前に責むべき所なく＝ おのれをまもりて不義をはなれたり

四 このゆえに主はわが正しきに報い＝ その目の前にわが手の清きに從いてむくい

たまえり

五 なんじ誠ある者には誠ある者となり＝ 全きものには全きものとなり

六 清きものには清きものとなり＝ ひがむ者にはひがむ者となりたもう

七 なんじ苦しめる民をすくい＝ 高ぶる目をひくくしたもう

八 なんじわがともし火をともし＝ わが神・主わが暗きをてらしたまわん

九 我なんじによりて敵を打ち破り＝ わが神によりて城壁をおどりこゆ

一〇 げに神の道は全く、主の言葉はまことなり＝ 主はすべて寄り頼む者のたてなり

一一 主のほかに神はたれぞや＝ われらの神のほかに岩はたれぞや

一二 神は力をわれに帯させ＝ わが道を安らかならしめたまえり

一三 神はわが足をめじかの足のごとくし＝ 我を高き所に立たせたもう

一四 神はわが手を戦いにならわせ＝ わが腕に青銅の弓をひくことを得しめたもう

一五 なんじの救の盾をわれに与えたまえり＝ なんじ右の手をもてわれを支え、我を

助けて大いならしめたまえり



三 なんじわが歩む所を広くしたまえり＝ かくてわが足よろめかざりき

三 我あだを追いてこれに追いせまり＝ 彼らの滅ぶるまでは帰ることをせざりき

三 われ彼らを刺し貫きたれば、彼ら立つことをえず＝ わが足のもとになおれたり

三 なんじ戦いのために力を我に帯びさせ＝ 我に逆ろう者をわがもとに服せしめた

まいたればなり

三 なんじわがあだの背をわれに向けたまえり＝ されば我を憎むものを我ほろぼし

たり

三 彼ら叫びたれども救うものなく＝ 主に向かいて叫びたれども答えたまわざりき

三 我かれらを打ち碎きて風の前のちりのごとくし＝ ちまたの泥のごとくに打ち捨て

てたり

三 なんじ我を民の争いより助けいだし、国々のかしらとなしたまえり＝ わが知ら

ざりし民も我につかえたり

三 彼らわが事をききて、ただちに我にしたがい＝ 異邦の人々きたりておもねり仕

えたり

異邦いほうの人々ひとびとは打ちしおれ＝ その城しろよりおののきいでたり

哭なみ主しゅは生きていますり、わが岩いわはほむべきかな＝ わが救すくいの神かみはあがむべきかな

哭なみわがためにあだをむくい＝ 異邦いほうの人々ひとびとを我われに服ふくせしめたまいしはこの神かみなり

哭なみ神かみは我われをあだより救すくいたまえり＝ げになんじは我われに逆さかろう者ものの上うへに我われをあげ、

荒あらぶる人ひとより我われを助けいだしたまえり

哭なみこのゆえに主しゅよ、我われもろもろの国くにびとのなかにてなんじをたたえ＝ 御名みなをほめ

うたわん

吾われ主しゅは大おおなる勝利しょうりをその王おうにあたえ＝ 油あぶらそそがれし者ものダビデとその末すえとに世々よよ

限りなくいつくしみをたもう

## 四日早禱

### 第十九篇

一 もろもろの天てんは神かみの栄光えいこうをあらわし＝ 大空おおぞらは御手みてのわざをしめす

二 この日ひことばをかの日ひにつたえ＝ この夜知識よちしきをかの夜よにおくる

三 語らずいわず＝ その声きこゆることなし

四 されどその響きは全地にあまねく、その言葉は地のはてにまで及べり＝ 神は日のため天に幕屋を設けたまへり

五 日は花婿がその殿をいずるがごとく＝ ますらおがその道を喜びはしるに似たり

六 そのいで立つや天のはてよりし、その巡り行くや天のはてにいたる＝ 物として

七 その暖まりをこうむらざるはなし

八 主のおきては全くして魂を生きかえらしめ＝ 主のあかしは堅くして愚かなる者

をさとからしむ

九 主のさとしは直くして心をよろこばしめ＝ 主の戒めは清くしてまなこを明らか

ならしむ

一〇 主を恐るる道は清くして世々に絶ゆることなく＝ 主のおきてはまことにしてこ

とごとくただし

一一 これは金よりも、多くの純金よりも慕わしく＝ 蜜よりもはちの巣のしたたりよ

りもあまし

二 なんじのしもべはこれらによりて戒めをうく＝ これらを守らば大いなる報いあらん

三 たれかおのれのあやまちを知り得んや＝ 願わくは我をかくれたとがより解きはなちたまえ

三 願わくはなんじのしもべを守りて、ことさらなる罪を犯さしめず、これをわが主たらしめたもうなかれ＝ さればわれ傷なきものとなりて、大いなるとがを免るることをえん

二四 ああ主よ、わが岩よ、わが贖いぬしよ＝ わが口の言葉、わが心の思いを御心にかなわしめたまえ

### 第二十篇

一 願わくは主なやみの日になんじにこたえ＝ ヤコブの神の御名なんじを守りたまわんことを

二 聖所より助けをなんじにおくり＝ シオンより力をなんじに与えたまわんことを  
三 なんじのもろもろの供え物をみこころにとどめ＝ なんじの燔祭をうけたまわん

ことを

四 なんじの心こころの願ねがいをゆるし＝ なんじのはかりごとをことごとく遂とげしめたまわ  
んことを

五 我われらなんじの勝しょう利りを喜よろこび歌うたい、我われらの神かみの御み名なによりて旗はたをたてん＝ 願ねがわくは

主しゅなんじの求もとめをことごとく遂とげしめたまわんことを

六 我われいま知る、主しゅその油あぶらそそがれし者ものを救すくいたもうを＝ 主しゅは右みぎの手てによる大おおいな

る勝しょう利りにて、そのきよき天てんより彼かれにこたえたまわん

七 あるいは車くるまをたのみ、あるいは馬うまをたのみとするものあり＝ されど我われらはわが

神かみ・主しゅの御み名なをほこらん

八 彼かれらはかがみ、またたおる＝ されどわれらは起おきて直なおく立たてり

九 主しゅよ、王おうに勝しょう利りをあたえ＝ 我われらが呼よぶときこたえたまえ

### 第二十一篇

一 主しゅよ、王おうはなんじの力ちからによりてよろこび＝ なんじの助たすけによりて大おおいによろこ

ばん

- 二 なんじかれの心の願いをゆるし＝ そのくちびるの求めをいなみたまわざりき
- 三 なんじ彼のために良き賜物をそなえ＝ 純金の冠を彼のこうべにただかせたまえり
- 四 かれ命を求めしになんじこれをあたえ＝ そのよわいを世々限りなからしめたまえり
- 五 なんじの助けによりてその栄光おおいなり＝ なんじは尊きとみいつとを彼に与えたまえり
- 六 なんじ彼をとこしえに幸いなるものとなし＝ 御前にて樂しませたまえり
- 七 王は主に寄りのめり＝ いと高き者のいつくしみをこうむるがゆえに動かさるることなからん
- 八 なんじの手はそのもろもろのあだを尋ねいだし＝ なんじの右の手はなんじを憎むものを尋ねいだすべし
- 九 なんじきたるときは彼らを燃ゆる炉のごとくにせん＝ 主は激しき怒りによりて彼らをのみたまわん、火は彼らをくらくつくさん

一〇 なんじ彼らの末を地より絶ち＝ 彼らの種を人の子のなかよりほろぼさん

二 彼らはなんじに向かいて悪しきことをくわだて＝ はかりごとをめぐらすとも、

これを遂げざるべし

三 なんじ彼らを逃げはしらせ＝ その顔に向かいて弓をひかん

三 主よ、御力を現わしてみずからを高くしたまえ＝ 我らはなんじの御力をほめう

たわん

## 四 日 晚 禱

### 第二十二篇

一 わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひしや＝ いかなれば遠く離れて、我を救

わず、わが嘆きの声を聞きたまわざるか

二 ああわが神、われ昼よばわれどもなんじ答えたまわず＝ 夜よばわれども我やす

きを得ず

三 されどなんじは聖なり＝ なんじはイスラエルの賛美の上に座したもう

四 我<sup>われ</sup>らの先祖<sup>せんぞ</sup>はなんじに寄<sup>よ</sup>りたのめり＝ 彼<sup>かれ</sup>ら寄<sup>よ</sup>り頼<sup>たの</sup>みたれば、なんじこれ<sup>な</sup>を助<sup>たす</sup>け

たまえり

五 彼<sup>かれ</sup>らなんじを呼<sup>よ</sup>びて救<sup>すく</sup>いを得<sup>え</sup>たり＝ なんじに寄<sup>よ</sup>りたのみて恥<sup>は</sup>を受けしことなかりき

六 されど我<sup>われ</sup>らは虫<sup>むし</sup>にして人<sup>ひと</sup>にあらず＝ 世<sup>よ</sup>にそしられ民<sup>たみ</sup>にいやしめらる

七 すべて我<sup>われ</sup>を見るものは我<sup>われ</sup>をあざけりわらい＝ くちびるをそらし、こちべを振<sup>ふ</sup>りて言<sup>い</sup>う

八 「彼<sup>かれ</sup>は主<sup>しゅ</sup>に寄<sup>よ</sup>りたのめり、主<sup>しゅ</sup>たすくべし＝ 主<sup>しゅ</sup>かれを喜<sup>よろこ</sup>びたもうがゆえに助<sup>たす</sup>くべ

し」と

九 されどなんじは我<sup>われ</sup>を母<sup>はは</sup>の胎<sup>たい</sup>より取<sup>と</sup>りいだしたまえる者<sup>もの</sup>なり＝ 母<sup>はは</sup>の胸<sup>むね</sup>にありしと

き、すでになんじは我<sup>われ</sup>を守<sup>まも</sup>りたまえり

一〇 われ生<sup>う</sup>まれいでし時<sup>とき</sup>よりなんじに委<sup>ゆた</sup>ねられたり＝ わが母<sup>はは</sup>われを生<sup>う</sup>みし時<sup>とき</sup>よりな

んじはわが神<sup>かみ</sup>なり

二 我<sup>われ</sup>に遠<sup>とほ</sup>ざかりたもうなかれ＝ 悩<sup>なや</sup>みちかづきて助<sup>たす</sup>くるものなし



三 多くの雄牛われをめぐり＝ バシヤンの力強き雄牛われを囲めり

三 彼らは口をあけて我にむかえり＝ 獲物をかき裂き、ほえたけるしのごとし

四 われ水のごとく注ぎいだされ、わが骨はことごとくはずれ＝ わが心はろうのご

とくなりて胸のうちに溶けたり

五 わが力はかわきて陶器のくだけのごとく、わが舌はあごにひたつけり＝ なんじ

我を死のちに伏させたまえり

六 犬われをめぐり、悪しきものの群れわれをかこみ＝ わが手わが足を刺しつらぬ

けり

七 わが骨はことごとくあらわになりぬ＝ 悪しきもの目をとめてわれを見る

八 彼れたがいになが衣をわかち＝ わが下着をくじにす

九 主よ、遠く離れたもうなかれ＝ わが助けよ、願わくはとくきたたりて我を助

けたまえ

二〇 願わくはわが魂を剣より助けいだし＝ わが命を犬のたけき勢いより免れしめた

まえ

二 われをししの口より救い<sup>すく</sup>いだしたまえ＝ 悩めるわが魂<sup>たましい</sup>を野牛<sup>のうし</sup>の角<sup>つの</sup>よりすくいた

まえ

三 われなんじの御名<sup>みな</sup>をわがはらからに宣<sup>の</sup>べつたえ＝ なんじをつどいにてほめたた

えん

三 主<sup>しゅ</sup>を恐<sup>おそ</sup>るる者<sup>もの</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>をほめたたえよ＝ ヤコブのもろもろの末<sup>すえ</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>をあがめ、

イスラエルのもろもろの末<sup>すえ</sup>よ、主<sup>しゅ</sup>をかしこめ

三 主<sup>しゅ</sup>は悩める者<sup>もの</sup>の苦<sup>くる</sup>しみを軽<sup>かろ</sup>んじ捨<sup>す</sup>てたまわす＝ 御顔<sup>みかお</sup>をおおうことなく、その叫<sup>さけ</sup>

ぶときに聞<sup>き</sup>きたもうなり

三 大いなるつどいにて我<sup>われ</sup>なんじをほめたとう、これなんじよりいずるなり＝ 主<sup>しゅ</sup>を

恐<sup>おそ</sup>るる者<sup>もの</sup>の前<sup>まえ</sup>にてわが誓<sup>ちか</sup>いを主<sup>しゅ</sup>にはたさん

三 貧<sup>まず</sup>しき者<sup>もの</sup>はくらいて飽<sup>あ</sup>くこと得<sup>え</sup>、主<sup>しゅ</sup>を尋<sup>たず</sup>ね求<sup>もと</sup>むる者<sup>もの</sup>は主<sup>しゅ</sup>をほめたたえん＝ 願<sup>ねが</sup>わ

くはなんじらの心<sup>こころ</sup>とこしえに生<sup>い</sup>きんことを

三 地<sup>ち</sup>のはてまでもみな思<sup>おも</sup>ひだして主<sup>しゅ</sup>にかえり＝ もろもろの国<sup>くに</sup>のやからは皆<sup>みな</sup>みま

えに伏<sup>ふ</sup>しおがまん

- 二 国は主のものなり＝ 主はもろもろの国びとを統べ治めたもう  
元 地にありて誇り高ぶる者もみな主をおがみ＝ ちりに下る者とおのが命を長ろう  
ることあたわざる者も皆その御前にひざまずかん  
三 民の末は主につかえ＝ 主のことは世々に語りつたえらるべし  
三 彼らは主の救いを宣べん＝ こは主のみわざなりと、後に生まるる民につたえん

## 第二十三篇

- 一 主はわが牧者なり＝ 我は乏しきことなからん  
二 主は我をみどりの野に伏さしめ＝ いこいのみぎわにともないたもう  
三 主はわが魂を生かし＝ 御名のために正しき道にみちびきたもう  
四 たといわれ死の陰の谷を歩むとも災いをおそれ＝ なんじ我とともにいまし、  
なんじのむち、なんじのつえ我をなぐさむ  
五 なんじわがあだの前にわがために宴をもうけ＝ わがこうべに油を注ぎたもう、  
わが杯はあふるるなり  
六 われ世にあらんかぎり恵みとあわれみとは必ず我にそいきたらん＝ 我はとこし

えに主の宮のうちに住まわん

## 五日早禱

### 第二十四篇

一 地とそれに満てるものは主のものなり＝ 世界とそのなかに住むものは主のものなり

二 主はその基を大海の上にすえ＝ これを大川の上にさだめたまえり

三 主の山に登るべき者はたれぞ＝ その聖所に立つべき者はたれぞ

四 手きよく心いさぎよき者ぞその人なる＝ むなしきことを仰ぎ望まず、偽りの誓いをせざる者ぞその人なる

五 かかる人は主より幸いをうけ＝ その救いの神より義をうくべし

六 これぞ神を慕う者のやから＝ ヤコブの神の御顔を求むる者のやからなる

七 門よ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸よ、あがれ＝ 栄光の王いりたまわん

ハ 栄光の王はたれなるか＝ 力を持ちたもう主なり、戦いに勇ましき主なり  
九 門よ、なんじらのこうべを挙げよ、とこしえの戸よ、あがれ＝ 栄光の王いりた

まわん

一〇 この栄光の王はたれなるか＝ 万軍の主、これぞ栄光の王なる

第二十五篇

一 主よ、我わが魂をなんじに挙げ＝ わが神よ、われなんじに寄りのめり

二 願わくは我に恥をおわしめたもうなかれ＝ わがあだの我に勝ち誇るることなから

しめたまえ

三 なんじを待ちのぞむ者はずかしめず＝ みだりに誠を捨つる者はずかしめた

まえ

四 主よ、なんじの大路をわれにしめし＝ なんじの道をおしえたまえ

五 我をなんじのまことに導き、われを教えたまえ＝ なんじはわが救いの神なり、

我ひねもすなんじを待ちのぞむ

六 主よ、なんじのあわれみといつくしみを忘れたもうなかれ＝ これいにしえより

絶えざるものなればなり

七 わが若き時の罪とわがとは思いいでたもうなかれ＝ 主よ、なんじの恵みの

ゆえにいつくしみに従いて我を思いいでたまえ

八 主は恵み深くして直くましませり＝ ゆえに罪人に道をおしえたもう

九 へりくだる者を正しきにみちびき＝ へりくだる者にその道をしめしたまわん

一〇 主の道はすべていつくしみなり、まことなり＝ その契約とあかしとを守るもの

にはしかるなり

二 主よ、御名のためにわがとがをゆるしたまえ＝ わがとがは大いなればなり

三 主を恐るる者はたれなるか＝ 主は選ぶべき道を彼にしめしたまわん

三 かかる人はさかえ＝ その末は地をつぐべし

四 主のしたしみは主を恐るる者とともにあり＝ 主はその契約を彼らにしめしたま

わん

五 わが目はつねに主にむこう＝ 主はわが足を網より取りいだしたまわん

六 願わくは我をかえりみ、我をあわれみたまえ＝ 我ひとりわびしく、また苦し

おるなり

七 願わくはわが心の憂いをゆるめ＝ 我を災いよりのがれいでしめたまえ

六 わが悩み、わが苦しみをかえりみ＝ わがすべての罪をゆるしたまえ

五 わがあだを見たまえ、彼らの数はおとし＝ 彼らいたく我をにくめり

四 我をまもり我を助けたまえ＝ 我に恥を受けしめたもうなかれ、我はなんじに寄

りたのめり

三 願わくは全きと直きをもて我を守りたまえ＝ 我なんじを待ちのぞめり

二 神よ、願わくはイスラエルをあがない＝ すべての憂いより救いだしたまえ

### 第二十六篇

一 主よ、願わくは我をさばきたまえ、我はわが全きによりてあゆみたり＝ 我また

迷うことなく主に寄りたのめり

二 主よ、我をしらべまた試みたまえ＝ わが心と思いをねりきよめたまえ

三 そはなんじのいつくしみわが目の前にあり＝ 我はまことによりてあゆめり

四 我は欺く人とともにすわらず＝ 偽り飾るものとともにあゆまず

五 われ惡をなす者のつどいをにくみ＝ 惡しき者とともにすわらじ

六 われ手を洗いて罪なきを示さん＝ かくて主よ、我なんじの祭壇をめぐり

七 感謝のうたを高らかにうたい＝ なんじのくすしきみわざを、ことごとく宣べつ

たえん

八 主よ、我なんじのいます家をしたい＝ なんじが榮光のとどまる所をいつくしむ

九 願わくは我を罪びととともに捨てず＝ わが命を血を流す者とともに取り去りた

もうなけれ

一〇 かかる人の手には惡しきくわだてあり＝ その右の手はまいないにて満つ

二 されど我はわが全きによりて歩まん＝ 願わくは我をあがない、我をあわれみた

まえ

三 わが足は平らかなるところに立つ＝ われ大いなるつどいにて主をほめまつらん

## 五日晩禱

### 第二十七篇



一 主はわが光、わが救いなり、我たれをかおそれん＝ 主はわが命のとりでなり、

わが恐るべき者はたれぞや

二 悪しき者、わが敵、わがあだおそいきたりて我をそしるとき＝ 彼らはつまずき

かつ倒れん

三 たといいくさびと營をつらねて我を攻むるとも、わが心おそれじ＝ たとい戦い

起こりて我を攻むるとも我になおたのみあり

四 われかつて一つの事を主にこえり＝ 我なおこれをもとむべし

願わくは世にあらん限りは主の家にすみ＝ 主のうるわしきを仰ぎ、その宮にて

主にまみえんことを

五 主は悩みの日にその仮り宮のうちに我を潜ませ、その幕屋の奥にわれをかくし＝

岩の上に我を高く置きたまわん

六 今わがこうべは我をめぐるあだの上に高くあげらるべし＝ このゆえにわれ主

の幕屋にて喜びのいけにえをささげ、歌をもて主をほめたたえん

七 主よ、われ声をあげてさけぶ時ききたまえ＝ またあわれみて我にこたえまえ

ハ 「なんじらわが顔をたずね求めよ」とのたまえるとき、わが心なんじに言えり＝

「主よ、われなんじの御顔をたずねもとめん」と

九 願わくは御顔をかくしたもうなかれ＝ 怒りてなんじのしもべを遠ざけたもうなかれ

なんじはわがたすけなり＝ わが救いの神よ、われを追いいだし我を捨てたもうなかれ

二 わが父母われをすてたり＝ されど主は我をむかえたまわん

二 主よ、なんじの道を我におしえ我を平らかなる道にみちびきたまえ＝ われに敵

する者おおければなり

三 偽りのあかしをなすもの暴言を吐くもの、我に逆らいて起りたり＝ 願わくは

我をあだに渡してその心のままになさしめたもうなかれ

三 われ生ける者の地にて＝ 主のいつくしみを見んことを信ず

四 主を待ち望め、雄々しかれ、なんじの心をかとうせよ＝ 必ずや主を待ちのぞめ

### 第二十八篇

- 一 ああ主よ、我なんじを呼ばん、わが岩よ、願わくは我に向かいて黙したもうな  
れ＝ なんじ黙したまわば、おそらくはわれ墓に下るものと等しからん
- 二 我なんじに向かいて叫ぶとき、わが願いの声をききたまえ＝ 至聖所に向かいて  
手をあぐるとき聞きたまえ
- 三 よこしまなる人また悪を行のう者とともに我を取り去りたもうなかれ＝ 彼らは  
その隣とやわらぎを語れども、心にはそこないをいだけり
- 四 そのわざに従い、そのなす悪に従いて彼らにむくいたまえ＝ その手のわざに従  
いて報い、その受くべきものをあたえたまえ
- 五 彼らは主のもろもろのみわざ、その御手のわざをかえりみず＝ このゆえに主か  
れらを打ち倒して建てたもうことなからん
- 六 主はほむべきかな＝ わが祈りの声をききたまえり
- 七 主はわが力、わが盾なり＝ わがこころ主に寄りたのめり
- 八 われ助けを得たればわが心いたくよろこぶ＝ われ歌をもて主をほめまつらん  
主はその民のちからなり＝ その油そそがれし者の救いの城なり

九 願わくは主の民を救い、主のゆずりをさきわいたまえ＝ 彼らを養いてとこしえにいだきたすけたまえ

## 第二十九篇

一 神の子らよ、主にささげまつれ＝ 栄えと力とを主にささげまつれ

二 御名にふさわしき栄光を主にささげまつれ＝ 清き装いもて主をおがみまつれ

三 主の御声は水のうえにあり＝ 栄光の神いかずちをとどろかせ、主大水の上にと

どろかせたもう

四 主の御声はちからあり＝ 主の御声はみいつあり

五 主の御声は香柏を折りくだく＝ 主レバノンの香柏を折りくだきたもう

六 主レバノンを子牛のごとくおどらせ、シリオンを若き野牛のごとく踊らせたもう

七 主の御声はいなずまをひらめかす＝ 主の御声は野を震わせ、主カデシの野を震

わせたもう

八 主の御声はかしの木を吹き上げ、また林をはだかにす＝ その宮にあるすべての

もの呼ばわりて言う、「栄光なるかな」と

一 主は洪水のうえに座したもう＝ 主はみくらに座してとこしえに王なり  
二 主よ、御民に力をあたえたまえ＝ 平安をもてその民をさきわいたまえ

六日早禱

第三十篇

一 主よ、我なんじをあがめん、なんじ我を起こしたまえり＝ なんじはわがあだの、  
わがことによりて喜ぶをゆるしたまわざりき  
二 わが神・主よ、我なんじに呼ばわれり＝ なんじ我をいやしたまえり  
三 主よ、なんじわが魂をよみよりあげたまえり＝ われを生き返らせて墓に下らせ  
たまわざりき  
四 主の聖徒よ、主をほめうたいまつれ＝ その聖なる御名に感謝せよ  
五 その怒りはただしばしにて、その恵みは命とともにながし＝ 夜はよもすがら泣  
き悲しむとも、あしたにはよろこびうたわん  
六 われ安らかなりし時に言えり＝ 「我はとこしえに動かさることならん」と

七 主よ、なんじ恵みをもて我を山のごとく堅く立たせたまえり＝ なんじ御顔を隠

したまいたれば、我おちまどいたり

八 主よ、我なんじに呼ばわれり＝ 我ひたすら主にねがえり

九 「われ墓に下らばわが死、何の益あらん＝ ちりはなんじをほめたたえんや、な

んじのまことを宣べつたえんや

一〇 主よ聞きたまえ、我をあわれみたまえ＝ 主よ、願わくはわが助けとなりたま

え」と

二 なんじわが嘆きを踊りにかえ＝ わが荒布を解き、よろこびをもてわが帯とした

まえり

三 わが魂は主をほめうたいて黙することなからん＝ わが神・主よ、我とこしえに

なんじに感謝せん

### 第三十一篇

一 主よ、我なんじに寄り頼む、願わくはとこしえに恥なからしめたまえ＝ なんじ

の義をもて我をたすけたまえ

二 なんじの耳をかたむけ、すみやかに我を救いたまえ＝ 願わくはわが寄り頼む岩

となり、われを救う堅固なる城となりたまえ

三 げに、なんじはわが岩わが城なり＝ 御名のために我をみちびきたまえ

四 願わくはひそかに設けられたる網より、我を引きいだしたまえ＝ そはなんじは

わが避けどころなればなり

五 わが魂をなんじの御手にゆだね＝ 主よ、まことの神よ、なんじは我をあがない

たまえり

六 なんじはむなしき偶像に心を寄する者を憎みたもう＝ 我はただ主に寄したのむ

七 我はなんじのいつくしみを喜びたのしまん＝ なんじわが苦しみをかえりみ、わ

が悩みを御心にとめたまえり

八 なんじ我をあだの手に渡したまわず＝ わが足を広き所に立たせたまえり

九 われ迫り苦しめり、主よわれをあわれみたまえ＝ わが目は憂いによりて衰え、

身も魂もおとろえぬ

一〇 わが命は悲しみによりて消えゆき、わが年は嘆きによりて過ぎ去れり＝ わが力

は苦しみによりて衰え、わが骨は枯れはてたり

二 我もろもろのあだにそしられ、隣人はわれをおそる＝ 相知る者には忌みはばか

られ、町にて我を見る者は避けてのがる

三 我は死にたる者のごとく、人の心に忘れられ＝ 破れたる器物のごとくなれり

三 げに我は多くの人のそしりを聞き、至る所におそれあり＝ 彼ら我に逆らいてと

もに凶り、わが命を取らんとたくらむなり

四 されど主よ、我なんじに寄りのむ＝ われ言えり、「なんじはわが神なり」と

五 わが時はすべてなんじの御手にあり＝ 願わくは我をあだの手より、また我に追

い迫る者より助けいだしたまえ

六 なんじのしもべの上に御顔の光をかがやかせ＝ なんじのいつくしきをもて我を

すくいたまえ

七 主よ、我に恥を負わしめたもうなかれ、そは我なんじをよべばなり＝ 願わくは

悪しき者に恥を受けしめ、口をつぐみてよみに行かしめたまえ

八 偽りのくちびるをつぐましめたまえ＝ 彼らは高ぶりと侮りをもてみだりに正し



き者をののしればなり

元 なんじを恐るる者のためにたくわえたまえるいつくしみは大いなるかな＝ なん

じに寄り頼む者のために人の子の前にて施したまえるいつくしみは大いなるかな

二 なんじ彼らを御前のひそかなる所に隠して、人のはかりごとよりまぬかれしめ＝

仮り宮のうちにひそませて、舌の争いを避けしめたもう

三 主はほむべきかな＝ 敵に囲まれし町におるごとくわが悩まされしとき、主はく

すしき愛をわれに現わしたまえり

三 われ驚きあわてしとき言えり、「我はなんじの目の前より追われたり」と＝ さ

れど我、なんじに呼び求めしに、なんじわが願いをききたまえり

三 なんじらもろもろの聖徒よ、主をいつくしめ＝ 主はまことある者を守り、高ぶ

る者にきびしく報いたもう

四 主を待ちのぞむ者よ、雄々しかれ＝ なんじらみな心をつよくせよ

第三十二篇

- 一 そのとがを赦ゆるされたる者は幸さいいなり＝ その罪つみをおおわれたる者は幸さいいなり
- 二 主しゅによりて不義ふぎを負おわせられざる者は幸さいいなり＝ 心こころに偽いつはりりなき者は幸さいいなり
- 三 われ罪つみを言いいあらわさざりし時とき、わが身みは疲つかれおとろえたり＝ 我われひねもすうめ  
き苦くるしみたればなり
- 四 なんじの御手みでは昼ひるも夜よるもわが上うへにありて重おもし＝ わが力ちからは夏なつのひでりに会あいしごとく、かわきおとろえたり
- 五 われ御前みまへにてわが罪つみをみとめ＝ わが不義ふぎをおおわざりき  
われ言いえり、「わがとがを主しゅに言いいあらわさん」と＝ かくてなんじわが犯かせる  
罪つみをゆるしたまえり
- 六 されば神かみを敬うやまつう者は皆みななんじにいのるべし＝ 大水おほみづあふれ流ながるる悩なやみの時ときも、彼かれ  
らの身みにおよばじ
- 七 なんじはわが隠かくれがなり＝ なんじわが悩なやむときわれを守まもり、救すくいをもて我われをか  
こみたまわん

ハ 我なんじを教え、なんじを行くべき道にみちびき＝ わが目をなんじに留めてき  
とさん

九 なんじわきまえなき馬のごとく、うさぎ馬のごとくなるなかれ＝ 彼らはくつわ  
たづなのごとき具をもて引きとめずば、従いきたることなし

二〇 悪しき者は悲しみおとし＝ されど主に寄り頼む者はいつくしみにてかこまれん  
二 正しき者よ、主をよろこび樂しめ＝ すべて心の直き者よ、喜びよばわるべし

## 第三十三篇

一 正しき者よ、主によりてよろこべ＝ 賛美は直き者にふさわしきなり

二 琴をもて主を賛美せよ＝ 十弦の琴をもて主をほめうたえ

三 新しき歌を主に向かいてうたい＝ 喜びの声をあげて、たくみに琴をかきならせ  
四 主の御言葉はなおし＝ その行ないたもうところまことなり

五 主は義と公平とをこのみたまう＝ 主のいつくしみはあまねく地にみつ  
六 もろもろの天は主の御言葉によりて成り＝ 天の万軍は主の口の息によりて造ら

れたり

セ 主はかめの中に集むるごとく海の水をあつめ＝ 深き淵を倉におさめたまえり

ハ 全地は主をおそるべし＝ 世に住めるもろもろの人は主を恐れかしこむべし

九 主いたまえばその事成り＝ 仰せたまえばその事さだまれり

二〇 主はもろもろの国のはかりごとをむなくし＝ もろもろの民の企てをくじきた

もう

二 主のはかりごととはとこしえに立ち＝ その御心の思いは世々にいたる

三 主をおのが神とする国はさいわいなり＝ 主の嗣業に選ばれたる民はさいわい

なり

三 主は天より見おろし＝ すべての人の子らを見たもう

四 そのいます所よりのぞみ＝ 地に住むもろもろの人をみそなわしたもう

五 主はすべて彼らの心をつくり＝ そのなすことをことごとくかんがみたもう

六 王者はいくさびと多きをもて救いをえず＝ 勇士ちから大いなるをもて助けをえ

ざるなり

七 馬は勝利に益なく＝ その大いなる力も人を助くることなからん

六 見よ、主の目は主をおさるる者の上にあり＝ そのいつくしみをのぞむ者の上にあり

元 こは主かれらの魂を死よりすくい＝ ききんの時にも彼らをなからえしめたまわ

んがためなり

三 我らの魂は主を待ちのぞむ＝ 主はわれらの助け、われらの盾なり

三 我らは聖なる御名に寄り頼めり＝ われらの心は主にありてよろこばん

三 主よ、我らなんじを待ちのぞめり＝ 願わくはいつくしみを我らにくだしたまえ

## 第三十四篇

一 われ常に主をほめまつらん＝ 主をたとうる言葉はわが口にたえじ

二 わが魂は主によりてほこらん＝ 苦しめる者よ、聞きてよろこべ

三 我とともに主をあがめよ＝ 我らともに御名をたたえまつらん

四 われ主を尋ねたれば主われにこたえ＝ もろもろの恐れより助けいだしたまえり

五 主を仰ぎ見て光をえよ＝ さらばなんじらの顔は恥じ赤らむことなし

六 この苦しむ者叫びたれば主これをきき＝ すべての悩みより救いいだしたまえり

- セ 主の使いは主を恐るる者のまわりにあり＝ 營をつらねてこれをたすく  
ハ なんじら主の恵みふかきを味わい知れ＝ 主に寄り頼む者は幸いなり  
九 主の聖徒よ、主をおそれよ＝ 主を恐るる者には乏しきことなし  
二〇 若きししは乏しくして飢うることあり＝ されど主をたずぬる者は良きものに欠くることなし  
二 子らよ、きたりて我にきけ＝ 主を恐るべきことをなんじらに教えん  
三 命を慕う者はたれなるか＝ 幸いを見んとて命ながきを好む者はたれなるか  
三 なんじの舌をおさえて惡につかしめず＝ なんじのくちびるをおさえて偽りを言わざらしめよ  
四 惡を離れて善をおこない＝ やわらぎを求め、せつに追いもとめよ  
五 主の目は正しき者をかえりみ＝ その耳は彼らの叫びにかたむく  
六 主の御顔は惡をなす者にむかい＝ その跡を地より断ちほろぼしたもう  
七 正しきもの叫びたれば主これをきき＝ そのすべての悩みより助けいだしたもう  
八 主は心のいたみ悲しめる者にちかくいまし＝ 魂の悔いくずおれたる者をすくい

たもう

元 正しき者はなやみおとし＝ されど主はすべてその中より助けいだしたもう

二 主は彼のすべての骨を守りたもう＝ その一つだに折らるることなし

三 悪は悪しき者をころさん＝ 正しき人をにくむ者は罪せらるべし

三 主はそのしもべらの魂をあがないたもう＝ 主に寄り頼む者はひとりだに罪せらるることなからん

# 七日早禱

## 第三十五篇

一 主よ、願わくは我と争う者とあらそい＝ われと戦う者とたたかいたまえ

二 盾と大盾とをとり＝ わが助けに立ちいでたまえ

三 やりと投げやりをとりて我に追ひ迫るものの道をふさぎ＝ 我に向かいて「我はなんじの救いなり」と言いたまえ

四 わが命を求むるもの恥を得ていやしめられ＝ 我をそこなわんと計るもの退けら

れて、あわてふためかんことを

五 彼らは風の前のもみがらのごとく＝ 主の御使によりて追いやられんことを

六 彼らの道は暗くかつすべらかなり＝ 主の御使によりて追われんことを

七 彼らはゆえなく我を捕えんとてひそかに網をふせ＝ われを滅ぼさんとて穴をほ

れり

八 願わくは思いよらぬ間に彼らのほろびきたり＝ おのがふせたる網に捕えられ、

みずから穴に落ちいりて滅びんことを

九 かくてわが魂は主によりてよろこび＝ その救いをよろこばん

一〇 わがすべての骨は言わん＝ 「主よ、たれかなんじにたぐうべき者あらんや

なんじは弱き者を力強きものよりすくい＝ 苦しむ者、貧しき者をかすめ奪う者

より助けいだしたもう」と

二 ところ悪しきあかしと起こり＝ わが知らざることなじり問う

三 彼らは悪をもてわが善にむくい＝ わが魂をよるべなきものとせり

三 されど我かれらが病みしときに荒布をつけ、食を断ちてわが身を苦しめたり＝



我われはこゝべを深ふかくたれていのれり

四 こはわが友ともわが兄まこと弟だいにになせるにことならず＝ 母ははの喪もにありて嘆なげくがごとく悲かなし

みうなだれてあゆめり

五 されど彼かれらはわが倒たおれんとせしとき喜よろこびつどい＝ わが知しらざる惡あしきもの集あつま

りきたり、われを責せめてやまざりき

六 彼かれらはいよいよ汚けがれし言こと葉はにてあざけり＝ 我われに向むかいて齒はをかみならせり

七 主しゅよ、いつまでいたずらに見みすごしたもうや＝ 願ねがわくはわれを彼かれらの暴ほう逆ぎやくより

救すくい、わが命いのちを若わかきししよりまぬかれしめたまえ

八 われ大おほいなるつどいにてなんじに感かん謝しゃし＝ 多おほくの民たみの中なかにてなんじをほめたた

えん

九 偽いつはりりて我われにあだする者もののわがゆえに喜よろこぶことを許ゆるしたもうなかれ＝ ゆえなくし

て我われをにくむ者もののたがいに目めくばせすることなからしめたまえ

二〇 彼かれらは平へい和わをかたらず＝ 欺あざむきの言こと葉はをつくり、国くにのうちに穩おだやかに住すもう者ものを

そこなわんとはかる

三 彼らわれに向かいて口をあけひろげ＝ 「見よや見よや、われらの目これを見た

り」と言えり

三 主よ、なんじすでにこれを見たまえり、願わくは黙したもうなかれ＝ 主よ、我

に遠ざかりたもうなかれ

三 わが神よ、わが主よ、起きたまえ、醒めたまえ＝ 願わくはわがためにさばきを

なし、わが訴えをいれたまえ

三 主よ、わが神よ、なんじの義にしたがいて我をさばきたまえ＝ わがことにより

て、彼らに喜びを得しめたもうなかれ

三 彼らに心のうちにて、「見よ、これわが願いしところなり」と言わしめたもうな

かれ＝ 「我かれを飲み尽くせり」と言わしめたもうなかれ

三 願わくはわが災いを喜ぶもの、恥じてあわてふためき＝ 我に向かいて誇りがに

高ぶる者、恥とはずかしめをこうむらんことを

三 わが義とせらるるを望む者をば喜びうたわしめ＝ 「主は大いなるかな、そのし

もべの幸いを喜びたもう」と、つねに言わしめたまえ

二六 かくてわが舌はなんじの義をかたり＝ ひねもす、なんじの誉れを宣べん

## 第三十六篇

一 悪しきものの心のうちに罪はかたりて言う＝ 「わが目には神を恐るるのおそれなし」と

二 彼は心のままに、みずからおもねりて言う＝ 「わがよこしま現わるることなく、憎まるることなからん」と

三 その口の言葉はよこしまなり、いつわりなり＝ 知恵を軽んじ善を行のうことをやめたり

四 彼はその伏しどにて、よこしまなることをはかり＝ 良からぬ道に立ちとどまりて悪をきらわず

五 主よ、なんじのいつくしみは天にいたり＝ なんじのまことは雲にまでおよぶ  
六 なんじの正しきは神の山のごとく、なんじのさばきは大きいなる淵のごとし＝ 主

よ、なんじは人と獣とを救いたもう

七 神よ、なんじのいつくしみはとうときかな＝ 人の子はなんじの翼のかげに避け

どころをうるなり

ハ 彼らはなんじの家の豊かなるによりて飽くことをえん＝ なんじはその喜びの川

の水を彼らに飲ましめたもう

九 そは命の泉はなんじにあり＝ 我らはなんじの光によりてひかりを見ん

一〇 願わくはなんじを知る者に絶えずいつくしみをほどこし＝ 心なおき者に絶えず

救いをほどこしたまえ

二 願わくは高ぶる者の足われを踏み＝ 悪しき者の手われを追ひ払うを許したもう

なかれ

三 よこしまを行のう者はかしこに倒れたり＝ 彼ら打ち伏せられてまた立つことあ

たわず

## 七日晚禱

### 第三十七篇

一 悪をなす者のゆえに心をなやますなかれ＝ 不義をおこのう者をねたむなかれ

二 彼らはやがて草のごとくおとろえ＝ 青菜のごとく打ちしおるべし

三 主に寄り頼みて善をおこなえ＝ さらばなんじこの国に住みて安きをたのしまん

四 主によりてよろこべ＝ 主はなんじの心の願いを許したまわん

五 なんじの道を主にゆだねよ＝ かれに寄り頼まばこれをなしとげたまわん

六 主は光のごとくなんじの義をあきらかにし＝ 真昼のごとくなんじの正しきを明

らかにしたまわん

七 なんじ主の御前にしずまり、耐え忍びて主を待ちのぞめ＝ おのが道を歩みて榮

ゆるものと、悪しきはかりごとを遂ぐる人のゆえに心を悩むるなかれ

八 怒りをやめ、憤りをすてよ＝ 心を悩むるなかれ、これ悪に至るのみなり

九 悪を行のう者は断ちほろばされ＝ 主を待ち望むものは国をつぐべし

一〇 悪しき者は久しからずしてうせ＝ なんじつぶさにその所を尋ねるとも、おらざ

るべし

二 されど柔和なる者は国をつぎ＝ 豊かに榮えてたのしまん

三 悪しき者は正しき者に逆らいてはかりごとをめぐらし＝ これに向かいて齒がみ

せり

三 されど主は悪しき者を笑いたもう＝

彼の日きたるを見たまえばなり

四 悪しき者は劍をぬき、弓をはりて＝

貧しき者と乏しき者とを倒し、直く歩む者

をころさんとす

五 されどその劍はおのが胸をさし＝ その弓は折らるべし

六 正しき人の持てる物、よし少なくとも＝ 多くの悪しき者の豊かなるにまされり

七 悪しき者の腕は折らるべし＝ されど主は正しき者を助けさえたもう

八 主は全き者のもろもろの日を知りたもう＝ 彼らの嗣業はとこしえにいたらん

九 かれら災いに会うとき恥をこうむらず＝ ききんの時にも飽くことを得ん

一〇 悪しき者はほろび＝ 主のあだは牧場の栄えの枯るごとくうせ、煙のごとく消

えゆくなり

一一 悪しき者はもの借りてかえずあたわず＝ 正しき者はめぐみあり、かつほどこし

あとう

一二 神の祝したもう人は国をつぎ＝ 神ののろいたもう人は断ちほろぼさるべし

三 人の歩みは主によりてさだめらる＝ 主は彼にその喜びたもう道をかたく歩ませ  
たもう

四 たといその人倒るることありとも、全く打ち伏せらるることなし＝ 主かれの手  
を助けさえたまえばなり

五 我むかし年若くして今老いたり＝ されど正しき者の捨てられ、あるいはその末  
の糧を請い歩くを見しことなし

六 正しき者はつねに恵みあり、かつ貸しあとう＝ その子らはさいわいなり  
悪をばなれて善をなせ＝ さらばなんじとこしえにながらえん

七 主は正義を愛し、その聖徒をすてたまわず＝ 彼らはとこしえに守り助けられ、  
悪しき者の末は断ちほろぼさるべし

八 正しき者は国をつぎ＝ その中に住まいてとこしえにおよばん  
正しき者の口は知恵をかたり＝ その舌は正義をのぶ

九 その心には神のおきてあり＝ その歩みはひと歩みだにすべることなし  
悪しき者は正しき者をうかがい＝ これを殺さんとはかる

三 主は正しき者を悪しき者の手にゆだねたまわず＝ さばきの時にも罪に定めたも

うことあらじ

四 主を待ち望みてその道を守れ、さらばなんじを上げて国を継がせたもう＝ なん

じ悪しき者の断ちほろぼさるるを見ん

五 われ悪しき者の高ぶるを見たり＝ レバノンの香柏のそびえ立つがごとし

六 されどわれ再びきたりしに、見よ、彼はおらざりき＝ 我これを尋ねしかど見い

だすことあたわざりき

七 全き人に目をそそぎ、直き人を見よ＝ おだやかなる人には世つぎあり

八 罪をおかす者はことごとくほろぼされ＝ 悪しき者の子らは断たるべし

九 正しき者の救いは主よりいず＝ 主は彼らの悩みのときの避けどころなり

一〇 主は彼らを助け、彼らを解きはなちたもう＝ 悪しき者より解きはなちて救いた

もう、主をその避け所とすればなり

## 八日早禱



## 第三十八篇

一 主よ、願わくは憤りをもて我を責めたもうなかれ＝ 激しき怒りをもて我を懲らしめたもうなかれ

二 なんじの矢われにあたり＝ なんじの御手いたく我をおさえたり

三 なんじの怒りによりてわが肉には全きところなく＝ わが罪によりてわが骨には健やかなるところなし

四 わが不義はわがこうべをすぎて高く＝ 重荷のごとく負いがたし

五 わが傷悪しきにおいを放ちて腐れただれたり＝ わが愚かなるによりてなり

六 われ折れかがみていたくうなだれたり＝ 我ひねもす悲しみあるく

七 わが腰はことごとく焼くるがごとく＝ わが肉に全きところなし

八 われ衰え果てていたく打ちくだかれ＝ 心の激しき騒ぎによりてうめきさけぶ

九 主よ、わがすべての願いはなんじに知られ＝ わが嘆きはなんじに隠るることなし

一〇 わが胸はいたく騒ぎ、わが力おとろえ＝ わが眼の光もまたわれを離れたり

二 わが友、わが親しめる者はわが災いを見て遠ざかり＝ わがはらからまたはるかに立てり

三 わが命を求むる者はわなをもうけ＝ 我をそこなわんとする者は滅ぼすことを語り、またひねもす図りてあざむかんとす

三 されど我は耳しいのごとくきかず＝ 口を開かぬおしのごとし

四 げに我は聞かざる人のごとく＝ そしりを口にせぬ人のごとし

五 主よ、我なんじを待ちのぞむ＝ 主・わが神よ、なんじかならず答えたもうべし

六 われは祈る、「願わくは彼らわがことによりてよろこぶことなく＝ わが足のす

べらんとし、我に向かいて誇ることなからしめたまえ」と

七 われ倒るるばかりになりぬ＝ わが苦しみはたえずわが前にあり

八 我みずから不義をいいあらわし＝ わが罪のためにかなしまん

九 ゆえなくして我に敵するもの力たけく＝ ゆえなく我をにくむ者おおし

一〇 悪をもて善に報ゆる者わがあたとなれり＝ われ良き事にしたごうゆえなり

一一 主よ、願わくは我を捨てたもうなかれ＝ わが神よ、われに遠ざかりたもうな

かれ

三 わが主、わが救いよ＝ とくきたりて我を助けたまえ

第三十九篇

一 われ言えり、「われ舌をもて罪を犯さざらんために、わが道をつつしみ＝ 悪しき

者のわが前におる間はわが口にくつわをかけん」と

二 われ黙して語らず、わが口を堅くとざせり＝ されどわが悩みなおつのれり

三 わが心わがうちに熱くなり、思いつづくるほどに火もえたり＝ かくてわれ舌を

もて言えり

四 「主よ、願わくはわが終わりとわが日の数とを知らしめたまえ＝ わが命のはか

なきを知らしめたまえ

五 見よ、なんじわがすべての日をつかのまに過ぎ去らしめたもう＝ わがいのち御

前にては、なきにひとし

げにすべての人はむなし＝ 人の世にあるは影にことならず

六 彼らのさわぎ立つはむなし＝ その積みたくわえしもの、たれの手におさまるを

しらず

七 主よ、われ今なにをか待たん＝ わが望みはなんじにあり

八 願わくはわがすべてのとがより我を助けいだしたまえ＝ 愚かなる者にそしらす

ることなからしめたまえ

九 われは黙して口を開かず＝ そは、なんじにかくなさしめたまえばなり

二 願わくはなんじの下したまえる災いを取り去りたまえ＝ われなんじの御手にう

ち懲らさるるによりて滅ぶるばかりなり

二 なんじ罪を責めて人を懲らし、その慕い喜ぶものを、しみの食ろうごとく消えう

せしめたもう＝ げにすべての人はむなし

三 主よ、願わくはわが祈りをきき、わが叫びに耳をかたむけたまえ＝ わが涙を見

て黙したもうなかれ

我はなんじに身を寄する旅びとなり＝ わがすべての先祖のごとく宿れる者なり

三 我ここを去りてうせんとす＝ 願わくは見すぐして我をさわやかならしめたま

え

第四十篇

一 われ耐えしのびて主を待ちのぞみたり＝ 主は耳をかたむけてわが叫びを聞きた  
まえり

二 主われを滅びの穴と泥沼よりとりいだし＝ わが足を岩の上におき、わが歩みを  
かたくしたまえり

三 主は新しき歌をわが口におき、我らの神に賛美をささげしめたもう＝ 多くの  
人はこれを見て恐れ、かつ主に寄りたのまん

四 主をおのが頼みとする人はさいわいなり＝ 高ぶる者にたよらず、迷いいでて偽  
りの神に従う者に、たよらざる人はさいわいなり

五 わが神・主よ、なんじのなしたまえるくすしきみわざと我らのための御思いはい  
と多し＝ げになんじにたぐうべきものなし

六 我はこれを宣べ伝えんとすれども＝ かぞえ尽くすことあたわず  
なんじはいけにえと供え物を喜びたまわす、わが耳を開きたまえり＝ なんじ

は燔祭と罪祭を求めたまわす

- 七 その時われ言えり、「見よ、われ行かん＝ わがことは巻物の書にしるされたり  
八 わが神よ、われは御心に従うことをたのしむ＝ なんじの律法はわが心のうちに  
あり」と  
九 われ大いなるつどいにて救いの喜ばしきおとずれを語れり＝ 見よ、我くちびる  
を閉じず、主よなんじこれを知りたもう  
一〇 我なんじの救いをわが心のうちに秘めおかず、なんじの眞実と救いを宣べつたえ  
たり＝ 我なんじのいつくしみとまことを大いなるつどいにてかくさざりき  
二 主よ、なんじのあわれみを我に惜しみたもうなかれ＝ いつくしみとまことをも  
て常に我をまもりたまえ  
三 かぞえがたき災い我をかこみ＝ わが不義われに迫り、もの見ることあたわ  
ぬまでになりぬ  
四 わが罪の多きことわがかしらの毛にもまさり＝ わが心消えうするばかりなり  
五 主よ、願わくはわれを救いたまえ＝ 主よ、とくきたりて我をたすけたまえ  
六 願わくはわが命をたずね滅ぼさんとする者みな恥じあわてんことを＝ わがそこ

なわるるを喜ぶもの皆うしろに退きて恥をおわんことを

五 願わくは我に向かいて、「見よや、見よや」という者おどろき＝ おのが恥によ

りておののかんことを

六 願わくはなんじを尋ね求むるもの、皆なんじによりて樂しみ喜ばんことを＝ な

んじの救いを慕うもの、常に「主は大いなるかな」ととなえんことを

七 我は貧しくかつともし＝ されど主われをかえりみたもう

なんじはわが助けなり、我を救いたもう者なり＝ ああわが神よ、願わくはため  
らいたもうなかれ

# 八日晩禱

## 第四十一篇

一 貧しき者をかえりみる人はさいわいなり＝ 主かかる者をわざわいの日にたすけ

たまわん

二 主これを守り、これをながらえしめたまわん、彼はこの地にありて幸いなる者と

となえらる＝なんじ彼をあたの心のままになさせたまわす

三 主は彼が病の床にあるときこれをたすけ＝わづろう時、その病をことごとくい

やしたまわん

四 われ言えり、「主よ、あわれみて我をいやしたまえ＝我なんじに向かいて罪を

犯したり」と

五 わがあた我をそしりて言う＝「彼いずれのとくに死に、いずれのとくにその名

ほろびん」と

六 彼また我を見んとてきたるとき、偽りをかたり＝よこしまをその心に募らせ、

そとにいではこれを述べ

七 すべて我をにくむ者たがいになきやき＝わがために災いを思いめぐらす、

八 彼ら言う、「大いなる災い彼につきまといたり＝かれ倒れ伏してふたたび立つ

ことなからん」と

九 わが頼みとせし者わが糧をくらしいし親しき友さえも＝我にそむきてそのくびす

をあげたり



二 主よ、願わくは我をあわれみたまえ＝ われを起こして彼らに報ゆることを得させたまえ

二 わがあだ我に打ち勝ちしことなし＝ これによりてわれ知る、なんじ我をいつく

しみたもうことを

三 なんじわが全きによりて我をささえ＝ 我をとこしえに御前におきたもう

三 イスラエルの神・主はほむべきかな＝ とこしえよりとこしえまでほむべきかな

アーメン、アーメン

第四十二篇

一 神よ、しかの谷川を慕いあえぐがごとく＝ わが魂もなんじを慕いあえぐなり

二 わが魂はかわけるごとくに神を慕う、生ける神をぞしとう＝ いずれの時にか我

ゆきて御顔をあおがん

三 彼ら絶え間なくわれに向かいて、「なんじの神はいずこにありや」と言う＝ 我

はただ涙のみ夜昼そそぎてわが糧とせり

四 我むかし群れをなして祝いの日を守る多くの人とともにゆき＝ 喜びと賛美の声

をあげて、彼らを神の家にともないたり

われ今これらのことを思いおこし＝ わがうちより魂を注ぎいだすなり

五 わが魂よ、なんじなんぞうなだるや＝ なんぞわがうちに思いみだるや

なんじ神を待ちのぞめ＝ 我なおわが助けなるわが神をほめたとうべければなり

六 わが魂はわがうちにうなだる＝ さればわれヨルダンの地、またヘルモンの地、

ミサルの山よりなんじをおもいいず

七 なんじの大滝のひびきによりて淵々よびこたえ＝ なんじの波、なんじの大波こ

とごとくわが上をこえゆけり

八 されど昼は主そのいつくしみを施したまわん＝ 夜は主の歌われとともにあり、

これわが命の神にささぐるいのりなり

九 我わが岩なる神に言わん、「なんじなんぞ我を忘れたまいしや＝ 我なんぞあだ

のしいたげによりて悲しみゆくや」と

一〇 わが身はいたく傷つけられ、わが敵われをのしれり＝ 彼ら絶え間なく我に向

かいて言う、「なんじの神はいずこにありや」と

二 わが魂よ、なんじなんぞうなだるるや＝ なんぞわがうちに思いみだるるや

三 なんじ神を待ちのぞめ＝ 我なおわが助けなるわが神をほめたとうべければなり

第四十三篇

一 神よ、願わくは我をさばき、神を恐れざる民に向かいわが訴えを守りたまえ＝

偽り多きよこしまなる人より我を助けいだしたまえ

二 なんじはわが寄り頼む神なり、なんぞ我を捨てたまひしや＝ 我なんぞあだのし

いたげによりてかなしみゆくや

三 願わくはなんじの光となんじのまことを放ちて、我をみちびき＝ なんじの聖な

る山とその幕屋とに行かしめたまえ

四 さらにわれ神の祭壇にゆき、またわが喜びよろこぶ神にゆかん＝ 神よ、わが神

よ、われ琴をもてなんじをほめたたえん

五 わが魂よ、なんじなんぞうなだるるや＝ なんぞわがうちに思いみだるるや

なんじ神を待ちのぞめ＝ 我なおわが助けなるわが神をほめたとうべければなり

# 九日早禱

## 第四十四篇

一 神よ、なんじはむかし我らの先祖たちの日にみわざをなしたまえり＝ 我らこれを耳にきけり、先祖たちこれを我らに告げたりき

二 なんじ御手をもて国々の民を追いしりぞけ、我らの先祖たちを植え＝ もろもろの民を悩まして我らの先祖たちをはびこらせたまえり

三 彼らはおのが劔によりて国を獲しにあらず＝ おのが腕によりて勝ちを得しにあらず

ただなんじの右の手、なんじの御腕、なんじの御顔の光によれり＝ そはなんじ彼らを恵みたまいたればなり

四 神よ、なんじはわが王なり＝ なんじの御定めによりてヤコブは勝ちをえたり

我らはなんじによりて敵をたおし＝ 我らに逆らいて起り立つ者を御名によりて踏みにじるべし

六 そは我わが弓に寄りのまず＝ わが劔もまた我を救うことあたわざればなり

- 七 なんじ我<sup>われ</sup>らを敵<sup>てき</sup>よりすくい＝ 我<sup>われ</sup>らをにくむ者をまどわしめたまえり
- 八 我<sup>われ</sup>らはつねに神<sup>かみ</sup>によりてほこれり＝ 我<sup>われ</sup>らとこしえになんじの御名<sup>みな</sup>に感謝<sup>かんしゃ</sup>せん
- 九 されど今<sup>いま</sup>はなんじ我<sup>われ</sup>らを捨てて恥<sup>はじ</sup>をおわせたまえり＝ 我<sup>われ</sup>らのいくさびとと、と  
もにいでゆきたまわす
- 一〇 なんじ我<sup>われ</sup>らを敵<sup>てき</sup>の前<sup>まえ</sup>より退<sup>ひき</sup>かせたまえり＝ 我<sup>われ</sup>らをにくむ者<sup>もの</sup>その心<sup>こころ</sup>のままに我<sup>われ</sup>ら  
をかすめうばえり
- 二 なんじ我<sup>われ</sup>らをほふるる羊<sup>ひつぎ</sup>のごとくし＝ 我<sup>われ</sup>らを国々<sup>くにくに</sup>の民<sup>たみ</sup>の中にちらしたまえり
- 三 なんじ僅<sup>わずか</sup>かなる価<sup>あたい</sup>にてその民<sup>たみ</sup>をうり＝ 高<sup>たか</sup>き価<sup>あたい</sup>を求めたまわざりき
- 三 なんじ我<sup>われ</sup>らを隣人<sup>きみびと</sup>にそしらしめ＝ 我<sup>われ</sup>らをめぐる者<sup>もの</sup>にあざけり侮<sup>あやぢ</sup>らしめたまえり
- 四 もろもろの国<sup>くに</sup>のなかに我<sup>われ</sup>らを笑<sup>わら</sup>いぐさとなし＝ もろもろの民<sup>たみ</sup>のなかに笑<sup>わら</sup>いもの  
となしたまえり
- 五 わがはずかしめ、ひねもすわが前<sup>まえ</sup>にあり＝ わが恥<sup>はじ</sup>わが顔<sup>かお</sup>をおおえり、
- 六 これ我<sup>われ</sup>をそしり我<sup>われ</sup>をののしる者<sup>もの</sup>のことばによれり＝ 我<sup>われ</sup>にあだし、我<sup>われ</sup>に恨<sup>うら</sup>みを報<sup>むか</sup>  
ゆる者<sup>もの</sup>のゆえによれり

一七 これらのこと皆われらに臨めども、なおなんじを忘れず＝ 我らなんじの契約に  
もとらざりき

一八 我らの心そむかず＝ 我らの歩みなんじの道をはなれざりき

一九 されどなんじは山犬の住みかにて我らをきずつけ＝ 暗やみをもて我らをおおい  
たまえり

二〇 我らもし我らの神の御名を忘れたらんには＝ あるいは我らの手をあだし神に俾  
べしことあらんには

二一 神はこれを見いだしたまわざらんや＝ 神はこころの隠れたることをも知したも  
うなり

二二 我らはひねもすなんじのために死にわたされ＝ ほふられんとする羊のごとくせ  
られたり

二三 主よ、さめたまえ、いかなれば眠りたもうや＝ 起きたまえ、我らをとこしえに  
捨てたもうなかれ

二四 いかなれば御顔をかくしたもうや＝ いかなれば我らがうくる悩みとしいたげと

を忘れたもうや

二五 我らの魂はかがみてちりに伏し＝ 我らの身は土につきたり

二六 願わくは起きて我らをたすけ＝ なんじのいつくしみのゆえをもてすくいたまえ

第四十五篇

一 わが心は麗わしきことにてあふる、我は王のためにわが歌をよみいでん＝ わが舌はすみやかに物書く人のふでなり

二 なんじは人の子らにまさりて麗わし、みやびそのくちびるにあふる＝ このゆえに神はとこしえになんじをさきわいたまえり

三 ますらおよ、その榮え、その威をもて＝ なんじの剣を腰におおべし

四 なんじまことと正しきとのために威儀をもて勝ちて乗りすすめ＝ なんじの右の手なんじに恐るべきことをおしえん

五 なんじの矢は鋭くして王のあだの胸をつらぬき＝ もろもろの民はなんじのもとにたおる

六 神より賜わりしなんじの位はとこしえに立ち＝ 王のつえは公平のつえなり

七 なんじは義を愛し惡をにくむ＝ このゆえに神なんじの神は喜びの油をなんじの友にまさりて、なんじにそそぎたまえり

八 なんじの衣にはみな没薬、蘆薈、肉桂のかおりあり＝ 琴の音は象牙の殿よりい

でてなんじをよるこばしむ

九 なんじの尊き女のうちには王たちのむすめあり＝ きさきはオフルのこがねを飾

りてなんじの右にたつ

一〇 娘よ、聞け、目を注げ、なんじの耳をかたむけよ＝ なんじの民となんじの父の

家をわすれよ

二 さらに王はなんじの麗わしきをしたわん＝ 王はなんじの主なり、これを伏しお

がめ

三 ツロの民は贈り物をもてきたり＝ 民のうちの富める者もまたなんじの恵みを請

いもとめん

三 王の娘は殿のうちにて栄えかがやき＝ その衣は金をもておりなせり

四 彼は色麗わしき衣も着て、王のもとにみちびかる＝ これに伴えるおとめもその



あとにしたがいゆかん

一五 彼らは喜びと樂しみとをもてみちびかれ＝ 王の殿にいらん

一六 なんじの子らは先祖たちに代わりて立ち＝ なんじは彼らを全地に君となさん

一七 我なんじの名をよるず代に知らしめん＝ ゆえにもろもろの民は世々限りなくな  
んじに感謝すべし

## 第四十六篇

一 神は我らの避け所なり、ちからなり＝ 悩めるときのにと近きたすけなり

二 さればたとい地は変わるとも＝ 山は海の真中にうつるとも

三 よしその水はあわだちて鳴りとどろき＝ その騒ぎによりて山はゆるぐとも我ら

はおそれじ

四 川あり、その流れ神の都をよろこばしめ＝ いと高き者の住みたもう聖所をよろ

こばしむ

五 神その中にいませば都はうごかじ＝ 神は朝つとにこれをたすけたまわん

六 もろもろの国はさわぎ立ち、国々は揺りうごけり＝ 神その声をいだしたまえば

地は溶けさる

七 万軍の主は我らとともにあり＝ヤコブの神は我らの高きやぐらなり

八 きたりて主のみわざを見よ＝主は多くの恐るべきことを地になしたまえり

九 主は地のはてまでも戦いをやめしめ＝弓を折り、やりを断ち、いくさ車を火にて焼きたもう

一〇 「なんじら静まりて我の神たるを知れ＝我は国々のうちにあがめられ、全地に

あがめらるべし」

一一 万軍の主は我らとともにあり＝ヤコブの神は我らの高きやぐらなり

## 九日晩禱

### 第四十七篇

一 もろもろの民よ、手をうちならせ＝神に向かいて喜びの歌を高らかにうたえ

二 主はいと高し、またおそろし＝全地をしろしめす大いなる王にましませり

三 主はもろもろの民をわれらにしたがわせ＝国々を我らの足もとにまつろわせた

まえり

四 主はわれらのために嗣業を選びたまえり＝ これそのいつくしみたまうヤコブの

ほまれなり

五 神は喜びさけぶ声とともにのぼり＝ 主はラッパの声とともにのぼりたまえり

六 ほめうたえ、神をほめうたえ＝ ほめうたえ、我らの王をほめうたえよ

七 神は全地の王なり＝ 歌をもてほめたたえよ

八 神は国々の民を統べ治めたもう＝ 神はその聖なる御座にすわりたまう

九 もろもろの民の君たちはつどいきたりて、アブラハムの神の民となれり＝ 地の

もろもろの盾は神のものなり、神はいとときかな

第四十八篇

一 主は大いなり、いたくたたえられたもうべし＝ 我らの神の都にてほめられたも

うべし

二 主の聖なる山は高くうるわし、喜びを全地にあとう＝ 北のはてなるシオンの山

は大いなる王のみやこなり

三 そのもろもろのとりでのうちに神はおのれをあらわし＝ 堅き守りとなりたま

えり

四 見よ、王たちは相つどい＝ ともに進みきたれり

五 されど都を見ておどろき＝ 恐れてたちまちのがれされり

六 おののき彼らにのぞみ＝ その苦しみは子を産まんとする女のごとし

七 なんじは東風をおこし＝ タルシシの舟をやぶりたまえり

八 我らさきに聞きしことを、いま万軍の主の都われらの神の都にて見ることをえた

り＝ 神はこの都をとこしえに堅く立てたまわん

九 神よ、我らはなんじの宮につどい＝ そのうちにてみいつくしみをおもえり

一〇 神よ、なんじの誉れはその御名のごとく地のはてにまでおよべり＝ なんじの右

の手は正しきにて満てり

一一 なんじのもろもろのさばきによりてシオンの山はよろこび＝ ユダの娘たちはた

のしむべし

一二 シオンのまわりをあゆみ＝ あまねく巡りてそのやぐらをかぞえよ

三 その石がきに心をとめ、そのもろもろのとりでを見よ＝ なんじらこれを次の代に語り伝えんためなり

二四 この神は世々限りなく我らの神なり＝ とこしえに我らをみちびきたまわん

## 第四十九篇

一 もろもろの民よ聞け＝ すべて地に住むもの耳をそばだてよ

二 卑しきものも尊きものも聞け＝ 富めるもの貧しき者もともにきくべし

三 わが口は知恵を語り＝ わが心はさときことをおもわん

四 われ耳をたとえにかたむけ＝ 琴をならしてわがなぞをときあかさん

五 悩みの日にも我いかでおそるべき＝ 追いせまる者の悪われを囲むとも、いかで

おそるべき

六 おのが富をたのむものも＝ 宝多きをほこるものも

七 たれひとりおのれをあがのうことあたわず＝ 命の価を神に払うことをえず

八 命をあがのうには価いと高し＝ これをことごとく払うことを得ざるなり

九 たれひとり、とこしえに生きながろうることあたわず＝ また墓に入らざるもの

なし

一〇 賢かどき者ものも死しに、愚おろか者ものも、しれ者ものもひとしくほろび＝ その富とみをほかの人ひとにのこ

すことは常つねに見みるところなり

二 彼かれらはその地ちにおのが名なをおわせたり＝ されど墓はかこそ彼かれらのとこしえの家いえ、世よ

々よの住すみかなれ

三 人ひとは榮えい華がのうちに長ながくとどまらず＝ 滅ほろびうするけもののごとし

三 此これ愚おろかなることを心こころのたのみとする者ものの道みちなり＝ おのが分ぶんをよろこびとする

人ひとのはてなり

四 かれらは羊ひつぎの群むれのごとくに、よみのものとさだめられ＝ 死しはこれが牧ぼく者しやとな

らん

彼かれらはただちに墓はかに下くだりて、その形かたちきえうせ＝ 墓はかはかれらの家いえとならん

五 されど神かみはわが魂たましいをよみの力ちからよりあがないたまわん＝ そは神かみわれを受うけたもう

べければなり

六 なんじ人ひとの富とむときおそるるなかれ＝ その家いえのさかええ加くわわらるときおどろく

なかれ

七 かれ死ぬるときは何ひとつ携え行くことあたわず＝ その榮えは彼に従いてよみに下ることあらじ

八 かかる人は生きながろうるほどに、おのれを幸いと思えども＝ またみずからを

豊かにして、人にほめらるるとも

九 彼は先祖たちの世にゆかん＝ 絶えて光を見ざるべし

三 人は榮華のうちに長くとどまらず＝ 滅びうするけもののごとし

# 十日早禱

## 第五十篇

一 全能の神・主みことのりし＝ 日のいずる所より日の入る所まで、あまねく地をよびたまえり

二 神は光をはなち＝ 麗わしきのきわみなるシオンよりはなちたまえり

三 我らの神はきたりて黙したまわじ＝ 火その御前に物を焼きつくし、あらしその

まわりに吹きあれん

四 神はその民をさばかんために＝ 上なる天を呼び、また地をよびたまわん  
五 「わが聖徒をわがもとにあつめよ＝ いけにえをもて我と契約を立てし者をあつめよ」と

六 もろもろの天は神の義をあらわさん＝ 神はみずからさばきびとなり

七 「わが民よ、聞け、我もの言わん、イスラエルよ、我なんじに向かいてあかしを

なさん＝ われは神・なんじの神なり

八 わがなんじを責むるはいけにえのゆえにあらず＝ なんじの燔祭はつねにわがま

えにあり

九 我はなんじの家より雄牛をとらず＝ なんじの囲より雄やぎをとるまじ

一〇 林のもろもろの獣はわがものなり＝ よろずの岡の家畜もみなしかり

二 われは空のすべての鳥をしる＝ 野の生き物も皆わがものなり

三 たといわれ飢うるともなんじに告げじ＝ 世界とその中に満つるものはわがもの

なればなり



三 われいかで雄牛おしの肉にくをくらい＝ いかで雄おやぎの血ちを飲のまんや

四 感謝かんしゃのいけにえを神かみにささげよ＝ なんじの誓ちかいをいと高たかき者ものにはたせ

五 悩なやみの日ひにわれをよべ＝ 我われなんじを救すくわん、なんじ我われをあがむべし」

六 されど神かみは悪あしき者ものに言いいたもう＝ 「なんじ何なにのかかわりありて、わがおきて

を述のべ、わが契けい約やくを口くちにするや

七 なんじは戒かいめをにくみ＝ わが言こと葉はを捨すてされり

八 なんじ盜ぬすびとを見みればこれを友ともとし＝ 姦かん淫いんを行おこのう者もののなかまとなれり

九 なんじその口くちを悪あくにわたし＝ なんじの舌したは欺あそきを組くみ成なせり

二〇 なんじ座ざして兄弟きょうだいをそしり＝ おのが母ははの子こをののしれり

二一 なんじこれらのことをなししをわれ黙もくしいたれば、なんじ我われをおのれに似にたるも

のと思おもえり＝ されど今いまわれなんじを責せめて、その罪つみをなんじの目めの前まえにつらぬ

べし

三 神かみを忘わするるものよ、今いまこのことをおもえ＝ しからずば我われなんじをかき裂さかんと

き助たすくるものあらじ

三 感謝かんしゃのいけにえをささぐる者は我われをあがむ＝ おのれの行なないを懐こむ者ものには、われ神かみの救すくいをあらわさん」

### 第五十一篇

一 ああ神かみよ、願ねがわくはなんじのいつくしみによりて我われをあわれみ＝ なんじの豊ゆたかなるあわれみによりて、わがもろもろのとがを消けしたまえ

二 わが不義ふぎをことごとくあらい去り＝ 我われをわが罪つみよりきよめたまえ

三 我われはわがとがを知る＝ わが罪つみは常つねにわがまえにあり

四 我われはひとえになんじに罪つみをおかし、御前みまへに悪わるしきことをおこなえり＝ さればな

五 んじの宣告せんこくはなんじの義ぎをしめし、なんじのさばきはあやまりなし

六 見よ、我われよこしまのうちに生うまれ＝ わが母罪はつみのうちにありて我われをはらみたりき

七 なんじはわがうちにまことを求めたもう＝ さればわが心こころふかく知恵ちえを知らしめたまえ

八

九 ヒソプをもて我われを清きよめたまえ、さらば我われきよくならん＝ 我われを洗あらいたまえ、さらばわれ雪ゆきよりもしろくならん

ハ 願わくはわれに喜びと楽しみとをみまし＝ なんじが碎きし骨を喜ばせたまえ

九 願わくは御顔をわが罪よりそむけ＝ わがすべての不義を消したまえ

一〇 神よ、わがために清き心をつくり＝ わがうちに直き霊をあらたに起こしたまえ

一 われを御前より捨てたもうなかれ＝ なんじのきよき霊を我より取りたもうな

かれ

三 なんじの救いの喜びをわれにかえし＝ 自由の霊にて我をささえたまえ

三 さらば我、とがを犯せる者になんじの道をおしえん＝ 罪びとはなんじに帰りき

たるべし

四 神よ、わが救いの神よ、血を流しし罪より我を助けいだしたまえ＝ わが舌は声

たからかになんじの救いをうたわん

五 主よ、わがくちびるを開きたまえ＝ さらばわが口なんじの誉れをあらわさん

六 なんじはいけにえを好みたまわず＝ たといわれ燔祭をささぐるともなんじ喜び

たまわず

七 神の求めたもう供え物は碎けたるたましいなり＝ 神よ、なんじは碎けたる悔い

し心を輕しめたもうまじ

一六 願わくは御心に従いてシオンをさきわい＝ エルサレムの石がきを、ふたたびきずきたまえ

一七 その時なんじ正しきいけにえと燔祭と全き燔祭とを喜びたまわん＝ かくて人々なんじの祭壇に雄牛をささげん

### 第五十二篇

一 力ある者よ、なんじいかなれば、神を敬う人に災いを与えしことをほこるや＝  
なんじはひねもす人を滅ぼさんとくわだつるなり

二 偽りを行のうものよ＝ なんじの舌は鋭きかみそりのごとし

三 なんじは善よりも惡をたしなみ＝ 正しきを言うよりも偽りを言うをこのむ

四 なんじはすべて滅ぼす言葉をこのむ＝ ああ、欺きの舌なるかな

五 されど神はとこしえになんじを碎き、なんじを捕えて幕屋より引きいだし＝ 牛

ける者の地よりなんじの根をたやしたまわん

六 正しき者はこれを見ておそれ＝ かつ彼を笑いて言わん

- 七 「神をおのが力となさざる人を見よ＝ 彼はその富の豊かなるを頼み、その宝をおのが力となせり」と
- 八 されど我は神の家にある青きオリブの木のごとし＝ われは世々限りなく神のいつくしみに寄りたのまん
- 九 なんじのみわざによりて我とこしえになんじに感謝し＝ 神を敬う人の前にて御名をのべ伝えん、これよろしきにかなえばなり

十日晩禱

第五十三篇

- 一 愚かなるものは心のうちに「神なし」と言えり＝ 彼らは腐れたり、憎むべき惡を行なえり、善をおこのう者なし
- 二 神は天より人の子をのぞみ＝ さとき者、神をたずぬる者ありやと見たまえり
- 三 みな離れ去りて、ことごとくけがれたり＝ 善をなす者なし、ひとりだになし
- 四 惡を行のうものは悟りなきか＝ 彼らはもの食うごとく、わが民をくらい、また

神かみを呼よぶことをせざるなり

五

見みよ、彼かれらは、かつてなき大おほいなる恐おそれにとらわれたり。これ神かみ、あしき者ものの骨ほねを散ちらしたもうゆえなり＝ 神かみかれらを捨てたまいしによりて、かれらは恥はじをこ

うむらん

六

願ねがわくはシオンよりイスラエルの救すくいのいでんことを＝ 神かみその民たみをふたたび榮さかえしめたもうとき、ヤコブは喜よろこびイスラエルはたのしまん

### 第五十四篇

一

神かみよ、願ねがわくは御名みなによりて我われをすくい＝ 御力みぢからをもてわがためにさばきを行おこな

二

神かみよ、わが祈いのちりをききたまえ＝ わが口くちの言葉ことばに耳みみをかたむけたまえ

三

高たかぶる者ものは我われに逆さからいて起おこりたち、あらぶる人ひとはわが命いのちをもとむ＝ 彼かれらは神かみ

四

見みよ、神かみは我われをたすくるものなり＝ 主しゅはわが命いのちをまもる者ものなり

したまえ

六 われ喜びていけにえをなんじにささげん＝ 主よ、われ御名に感謝せん、これよ

ろしきになえばなり

七 主はすべての悩みより我を救い＝ わが目にあだの破るるを見させたまえり

## 第五十五篇

一 神よ、わが祈りに耳を傾けたまえ＝ わが願いを避けて身を隠したもうなかれ

二 我に御心をとめ、我にこたえたまえ＝ われ悩みによりてつかれはてたり

三 我あだの声と悪しき者のしいたげによりていたく悩み＝ 彼ら災いをもて我に

迫り、憤りて我をせむるなり

四 わが心わがうちに憂いたみ＝ 死の恐れわれにせまれり

五 恐れとおののき我にのぞみ＝ はなはだしき恐れわれをおおえり

六 われ言う、「願わくは、はとのごとく翼あらんことを＝ さればわれ飛び去りて

安きをえん

八七 見よ、我はるかにのがれ去りて野に住まん＝ 我すみやかに、はやてとあらしを

のがれん」と

九

われ都のうちにあらびと争いをみたり＝ 主よ、願わくは彼らを滅ぼし、その言

葉をみだしたまえ

一〇

彼らは昼も夜も石がきの上を歩いて町をめぐる＝ 町のうちにはよこしまと悪し

きくわだてあり

一一

滅びそのうちにあり＝ しいたげと欺きその広場を離るることなし

一二

我をそしめる者はわがあだにあらず＝ もししからば、我これを忍びうるなり

われに向かい高ぶる者はわが敵たりし者にあらず＝ もししからば、われ身を

隠して彼を避けしならん

一三

されどこれなんじなり、我と等しきものなり＝ わが友、われと親しきものなり

一四

われらたがい親しき語らいをなし＝ またともに神の家のうちを歩みたりき

一五

死かれらに臨み、彼ら生けるままにてよみに下らんことを＝ 恐れをもて墓に去

り行かんことを

一六

されど我は神をよばん＝ 主はわれを救いたもうべし



七 タベに、あしたに、昼にわれ嘆きうめかん＝ 主はわが声をききたもうべし

六 主はわが戦うとき我を救いいだして、安きを得しめたまわん＝ そは我を攻むるもの多ければなり

五 神は聞きたまわん、昔より御位に座したもう者は彼らを低くしたまわん＝ 彼は律法を守らず、神を恐れざればなり

四 わが友はその親しき者に手向かい＝ おのが契約をやぶりたり

三 その言葉は乳のあぶらよりなめらかなれど、その心はたたかいなり＝ その語ることばは油にまさりてやわらかなれども、抜きたる剣にことならず

二 なんじの重荷を主にゆだねよ、さらばなんじをささえたまわん＝ 主は正しき人の動かさるるをゆるしたもうまじ

一 神よ、なんじは彼らを滅びの穴におとし入れたまわん＝ 血をながす者、悪しき者は生きてそのよわいの半ばにも至らざるべし、されど我はなんじに寄り頼まん

第五十六篇

一 神よ、願わくは我をあわれみたまえ＝ 人われを踏みつけ、あだする者ひねもす  
我をしいたぐ

二 わが敵ひねもす我をふみつけ＝ 誇り高ぶりて我と戦うものおとし

三 われ恐るときなんじに寄り頼まん＝ われ神によりて御言葉をほめまつらん

四 われ神に寄り頼みたれば恐ることあらじ＝ 人われに何をなし得んや

五 ひねもす彼らはわがなす事をさまたげ＝ その思いはことごとく我にわざわいを

なす

六 彼らは群れつどいて身をひそめ＝ わが歩みに目をとめてわが命をうかごう

七 神よ、彼らの罪にむくい＝ 憤りをもてもろもろの民をたおしたまえ

八 なんじわがさすらいを数えたまえり＝ なんじの皮袋にわが涙をたくわえたま

え、こはみななんじの書にしるさるるにあらずや

九 わが呼び求むる日にはわがあだしりぞかん＝ これによりて神の我を守りたもう

ことを知る

- 一 われ神によりて御言葉をはめまつらん＝ われ主によりて御言葉をほめまつらん  
二 われ神に寄り頼みたれば恐るることあらじ＝ 人われに何をなし得んや  
三 神よ、我はなんじに立てし誓いはたすべし＝ われ感謝の供え物をなんじにさ  
さげん  
三 なんじわが魂を死より救い、われを倒さじとわが足を守りたまえり＝ これ命の  
光のうちにて神の前にわが歩まんがためなり

第五十七篇

- 一 我をあわれみたまえ、神よ、我をあわれみたまえ、わが魂はなんじに寄りのたの  
む＝ 我なんじの翼の陰に避けて滅びのあらしの過ぎ去るをまたん  
二 我はいと高き神によばわん＝ わがためにすべての事をなしとげたもう神によば  
わん  
三 神はいづくしみとまことを天より送りてわれをすくい＝ われを踏みつくる者を  
恥ずかしめたまわん  
四 我は人の子らをむさぼり食ろうししのうちに伏す＝ その齒はやりのごとく矢の

ごとく、その舌は鋭きつるぎのごとし

五 神よ、願わくはみずからを天よりも高くし＝ なんじの御榮えを全地のうえにあ

げたまえ

六 彼らはわが足を捕えんとて網を設く、わが魂はうなたる＝ 彼らはわが道に穴を

掘りたり、しかしてみずからその中におちいれり

七 わが心さだまれり、神よ、わが心さだまれり＝ われ歌いまつらん、たたえまつ

らん

八 わが魂よ、さめよ。琴よ、立琴よ、さめよ＝ 我しのめを呼びさまさん

九 主よ、我もろもろの民のなかにてなんじに感謝し＝ 国々のなかにてなんじをほ

めうたわん

一〇 そはなんじのいつくしみは大いにして天にまでいたり＝ なんじのまことは雲に

までおよぶ

二 神よ、願わくはみずからを天よりも高くし＝ なんじの御榮えを全地のうえにあげ

たまえ

第五十八篇

一 力ある者よ、なんじらまことに義を宣べ＝ 公平をもて人の子をさばくや

二 いな、なんじらは心に悪しきことをはかり＝ その手は地にてあらびをおこのう  
なり

三 悪しき者は胎を離るるやまよいいで＝ 生まれいずるやあやまちを犯し、いつわ  
りを言う

四 彼らの毒はへびのどくのごとし＝ 彼らは耳ふさぐ耳しいのまむしのごとし  
五 魔術を行のう者のこえをきかず＝ たくみに呪文を唱うとも聞かざるまむしのご  
とし

六 神よ、彼らの口の齒を折りたまえ＝ 主よ、若きししのきばを抜きだきたまえ  
七 願わくは彼らを流れ行く水のごとくに消えうせしめ＝ 踏みにじらるる草のごと  
く枯れはてしめたまえ

八 また溶けて消えゆくかたつむりのごとくならしめ＝ 時ならず生まれて日を見ぬ  
子のごとくならしめたまえ

九 なんじらの釜<sup>かま</sup>いまだいばらの火<sup>ひ</sup>を受けざるにさきだち＝ 青<sup>あお</sup>きも燃<sup>も</sup>えたるも、と  
もにつむじ風<sup>かぜ</sup>にて吹き去<sup>さ</sup>らるるごとくならしめたまえ  
二 正<sup>ただ</sup>しき者はあだ返<sup>かえ</sup>さるるを見てよろこび＝ その足<sup>あし</sup>を悪<sup>あ</sup>しき者の血<sup>ち</sup>にてあらわん  
かくて人<sup>ひと</sup>は言うべし、「げに正<sup>ただ</sup>しき者にむくいあり＝ げに、さばきを行<sup>おこ</sup>ないたもう神<sup>かみ</sup>はいますなり」と

## 十一日晚禱

### 第五十九篇

一 神<sup>かみ</sup>よ、願<sup>ねが</sup>わくは我<sup>われ</sup>をあだより助けいだしたまえ＝ われに逆<sup>さか</sup>らいて起<sup>お</sup>こりたつ者<sup>もの</sup>よりまもりたまえ  
二 悪<sup>あく</sup>を行<sup>おこ</sup>のう者<sup>もの</sup>より我<sup>われ</sup>を助けいだし＝ 血<sup>ち</sup>に飢<sup>う</sup>えし人<sup>ひと</sup>より我<sup>われ</sup>をすくいたまえ  
三 見<sup>み</sup>よ、彼<sup>かれ</sup>らはひそみ隠<sup>かく</sup>れてわが命<sup>いのち</sup>をうかがい、たけき者<sup>もの</sup>むれつどいてわれを攻<sup>せ</sup>む＝ 主<sup>しゅ</sup>よ、こは我<sup>われ</sup>にとがあるにあらず、われに罪<sup>つみ</sup>あるにあらず  
四 彼<sup>かれ</sup>ら走りまわりて、備<sup>そな</sup>えをなし、あやまちなきに我<sup>われ</sup>をそこなわんとす＝ 願<sup>ねが</sup>わく

は目をさまし見てわれを助けたまえ

五 万軍の神なる主よ、なんじはイスラエルの神なり＝願わくは目をさまして、も

ろもろの国民を罰し、悪をたくらむ者をひとりだに残したもうなかれ

六 彼ら日ごと夕べにかえりきたり＝犬のごとくほえて町を經あるく

七 見よ、彼らは口にてほえ、またうなり＝「たれかこれを聞かんや」と言う

八 されど主よ、なんじは彼らをわらい＝もろもろの国民をあざわらいたもう

九 わが力よ、我なんじをほめまつらん＝神よ、なんじはわがとりでなり

一〇 わが神はいつくしきをもて我を迎えたまわん＝わが神は我にあだの破るるを見

させたまわん

二 彼らを殺したもうなかれ、こはわが民の忘れざらんためなり＝主、われらの盾

よ、御力をもて彼らをよろめき倒れしめたまえ

三 願わくは彼らその口の罪、くちびるのことばにより＝高ぶりのわなに陥らんこ

とを

三 彼らの語るのろいと偽りにより、憤りをもて彼らを滅ぼして跡なからしめ＝神

のヤコブを治めたもうことを地のはてにまで知らしめたまえ

四 彼らは日ごと夕べに帰ってきたり＝ 犬のごとくほえて町を経あるく

五 彼らは行きめぐりて食い物をあさり＝ 飽くことなくば怒りてうなるなり

六 されど我はなんじの御力をうたい＝ あしたに声をあげてなんじのいつくしみを

うたいまつらん

なんじはわが悩みの日にとりでとなり＝ わが避け所となりたまえり

七 わが力よ、我なんじをほめうたわん＝ 神よ、なんじはわがとりで、我をいつく

しみたもう神なり

## 第六十篇

一 神よ、なんじ我らを捨て、我らの守りを破りたまえり＝ なんじは憤りたまえ

り、願わくはふたたび我らを起こしたまえ

二 なんじ国を震わせてこれを裂きたまえり＝ 願わくはその多くの割れ目をふさぎ

たまえ、地は揺りうごくなり

三 なんじはその民を耐えがたき苦しみにあわせ＝ 人をよろめかす酒を我らに飲ま



せたまえり

四 なんじ一つの旗をなんじを恐るる者のためにたて＝ 射手をのがれし者をそのも

とに集めたまえり

五 なんじの愛したもう者を救わんために＝ 右の御手をもて勝ちをあたえ、我らに

こたえたまえ

六 神はその聖所にて言いたまえり＝ 「我いたく喜びてシケムを分かち、スコテの

谷をあたえん

七 ギレアデはわがもの、マナセはわがものなり＝ エフライムはわがかぶと、ユダ

はわがつえなり

八 モアズはわが足だらいなり、エドムにはわがくつを投げん＝ ペリシテに向かい

てはわれ勝ちどきをあげん」と

九 われを堅固なる町に進ましむるものはたれぞ＝ われをエドムに導かんものはた

れぞ

一〇 神よ、なんじは我らを捨てたまひしにあらずや＝ 神よ、なんじは我らのいくさ

びとともにいでゆきたまわす

二 願わくは助けを我にあたえて敵にむかわしめたまえ＝ 人の助けはむなしければ

なり

三 我らは神によりて勇ましくはたらかん＝ われらの敵を踏むものは神なればなり

### 第六十一篇

一 神よ、願わくはわが叫びを聞き＝ わが祈りに耳をかたむけたまえ

二 わが心くずおるる時、地のはてよりなんじを呼ばん＝ なんじ我をみちびきて高

き岩にいたらせたまえ

三 なんじはわが避けどころなり＝ われをあだより守る堅固なるやぐらなり

四 我をとしえになんじの幕屋にすまわせ＝ 御翼の下にかくしたまえ

五 神よ、なんじはわがもろもろの誓いを聞き＝ 御名を恐るる者にたもう嗣業を我

に与えたまえり

六 願わくは王の命を長からしめ＝ そのよわいを世々に至らせたまわんことを

七 神の御前にその位をとしえにたまたしめ＝ いつくしみとまことをもて彼をま

もりたまえ

ハ　さらば我われとこしえに御名みなをほめうたい＝　日ひごとにわがもろもろの誓ちかいはた  
さん

十二日早禱

第六十二篇

一　わが魂たましいは黙もくしてただ神かみをまつ＝　わが救すくいは神かみよりいずるなり

二　神かみこそわが岩いわ、わがすくいなれ＝　わがとりでなれば我われいたくは動うごかされじ

三　なんじらいずれの時ときまで人ひとに押しおせまるや＝　なんじら傾かたむける石いしがきのごとく、

揺り動うごけるまがきのごとく相あひともに人ひとを倒たおさんとするか

四　彼かれらは人ひとを尊きよき位くらより落おさんとのみはかり＝　偽いつはりりを喜よろこび、その口くちにては祝いはいそ

の心こころにてはのろう

五　わが魂たましいは黙もくしてただ神かみをまつ＝　わが望のぞみは神かみよりいずればなり

六　神かみこそわが岩いわ、わがすくいなれ＝　わがとりでなれば我われは動うごかされじ

- セ わが救い、わが誉れは神にあり＝ 神はわが力の岩、わが避けどころなり  
ハ 民よ、いかなる時にも神に寄りのため＝ その御前になんじらの心を注ぎいだ  
セ、神はわれらの避けどころなり  
九 げに低き人はむなく、高き人はいつわりなり＝ 彼らをはかりに置かば、みな  
上にあがりて息よりもかろし  
二 しいたげをもて頼みとするなかれ、かすめ奪うをもてほこるなかれ＝ 富の増し  
加わるときはこれに心をよするなかれ  
二 力は神にあり＝ 神ひとたびこれをのたまえり、我ふたびこれを聞けり  
三 ああ主よ、いつくしみもまたなんじにあり＝ なんじは人おのおのわざに従い  
て報いをなしたもう

### 第六十三篇

- 一 神よ、なんじはわが神なり、わが魂はかわきて、なんじをたずねもとむ＝ 水な  
き、かわき衰えたる地にあるごとく、わが身はなんじをこいしとう  
二 さらに我、聖所にありてなんじに目をそそぎ＝ 御力と御栄えとをみたり

三 なんじのいつくしみは命にもまされり＝ わがくちびるは、なんじをほめまつらん

四 われ生くるかぎり、なんじをほめ＝ わが手をあげて御名をよびまつらん

五 われ床にありてなんじをおもいで＝ 夜のふくるまに、なんじをふかくおもわん

六 かかるとき、わが魂は髓とあぶらにて、もてなさるごとく飽くことをえ＝ わが口は喜びのくちびるをもてなんじをほめたたえん

七 なんじはわがたすけなり＝ 我なんじの翼の陰にてよろこびうたわん

八 わが魂はなんじを慕いてはなれず＝ なんじの右の手はわれをささえたもう

九 されどわが命を滅ぼさんとしてたずね求むるものあり＝ 彼らは地の深きところにゆかん

一〇 また、剣の刃にわたされ＝ 山犬のえじきとならん

二 されど王は神をよろこび、神によりて誓いを立つる者はみなほこることを得ん＝ 偽りを言うものの口はふさがるべし

第六十四篇

- 一 神よ、わが嘆くときわが声をききたまえ＝ わが命を守りてあだの恐れより免れしめたまえ
- 二 願わくは我を隠して悪しき者のひそかなるはかりごとよりのがれしめ＝ よこしまなる者のたくらみより、免れしめたまえ
- 三 彼らは剣のごとくおのが舌をとぎ＝ 苦き言葉を矢のごとくはなつ
- 四 彼ら隠れたるところより罪なきものを射んとす＝ にわかになれを射ておそるることなし
- 五 彼らたがいに悪しき企てを交うることなく、ともにばかりて、ひそかにわなをもうけんとす＝ かくて言う、「たれか我らを見破ることを得んや
- 六 たれか我らの罪を探りいだし得んや＝ 我らはいと巧みにはかりごとをめぐらせり」と、げに人の内なる思いと心はふかし
- 七 されど神は矢をもて彼らを射たもうべし＝ 彼らにはわかにならずをうけん
- 八 彼らの舌のゆえによりて神は彼らを滅ぼしたまわん＝ これを見る者みなかしら

をふらん

九 かかる時ときもろもろの人は恐おそれ、神かみのみわざを宣のべつたえ＝ そのなしたまえるこ

とをかんごうべし

一〇 正ただしき者は主しゅを喜よろこびてこれに寄よりたのみ＝ すべて心直こゝろなおき者はみなほこるべし

## 十二日晚禱

### 第六十五篇

一 神かみよ、シオンにてなんじをほめたとうるはふさわし＝ 人ひとはなんじに誓ちかいはた

さん

二 祈いのりを聞ききたもうものよ＝ もろびとは罪つみを悔くいてなんじにきたらん

三 我われらおのがとがになやむとき＝ なんじ我われらをきよめたまわん

四 なんじに選えらばれ、なんじに近ちかづけられて、大庭おおにわに住すもう者はさいわいなり＝ 我われ

らはなんじの家いえ、なんじの聖せいなる宮みやの恵めぐみにて飽あくことをえん

五 救すくいの神かみよ、なんじは恐おそるべきみわざをもて我われらを救すくい、我われらに答こたえたまわん＝

なんじは地のもろもろのはて、また海のはてにある者のものぞみなり

六 神は全能をおび＝ その御力によりて、もろもろの山を堅く立たしめたもう

七 海のひびき大波のひびきをしずめ＝ もろもろの民の騒ぎをしずめたまえり

八 されば地のはてに住める人々も、なんじのもろもろのしるしを見ておそる＝ な

んじ、あしたとゆうべのいずる所をも喜びうたわしめたもう

九 なんじ地に臨みて水そそぎ＝ 大いにこれを豊かにしたまえり

神の川に水みちたり＝ なんじかく備えをなして穀物を彼らにあたえたまえり

一〇 なんじ田みぞを豊かにうるおし、うねをととのえ＝ むらさめにてこれを柔らげ、

そのもえいずるを祝したまえり

二 なんじ御恵みをもて年の冠としたまえり＝ なんじの道にはあぶらしたたる

三 野の牧場はうるおい＝ 小山は喜びにかこまる

三 牧場はみな羊の群れを着、もろもろの谷は穀物におおわれたり＝ 彼らはみな喜

びて呼ばわりまた歌う

## 第六十六篇



二一 全地よ、神に向かいて喜びよばわれ＝ 御名の栄光を歌い、ほめたたえよ

三 神に告げまつれ、「なんじのもろもろのみわざは恐るべきかな＝ 御力大いなる

によりて、あだはなんじにおそれしたがわん

四 全地はなんじを拜みてうたい＝ 御名をほめうたわん」と

五 きたりて神のみわざをみよ＝ 人の子らのうちになしたもうことは、おそるべき

かな

六 神は海をかえて、かわける地となしたまえり＝ 人々川を歩みて渡り、そのとこ

ろにて我らは神をよろこべり

七 神は大能をもてとこしえに統べ治め、その目はもろもろの国民を見たもう＝ そ

むく者おのれをあがむべからず

八 もろもろの民よ、我らの神をほめまつれ＝ 神をほめたとうる声をきこえしめよ

九 神は我らを生きたがらしめ＝ 我らの足のすべるをゆるしたまわす

一〇 神よ、なんじは我らをこころみ＝ しろがねを練るごとくに我らをねりたまえり

二 なんじ我らを網にひきいれ＝ 我らの腰に悩みをおきたまえり

三 なんじ人々に我らのかしらの上を乗り越えしめたまいき＝ 我らは火のなか水の

なかを過ぎゆけり

されどなんじその中より我らを引きだし＝ 広き所にいたらしめたまえり

三 われ燔祭をもてなんじの家にゆき＝ わが誓いをなんじに果たさん

四 こは、わが悩みに会いしとき＝ わがくちびるにて言いいで、わが口にて誓いし

ものなり

五 われ肥えたるものを燔祭とし、雄羊のいけにえの煙とともになんじにささげ＝

雄牛と雄やぎとをそなえまつらん

六 神をおそる人よ、皆きたりて聞け＝ われ神のわがためになしたまえることを

告げん

七 われ声をあげて神によばわり＝ わが舌をもて敬いあがめたり

八 われ心に不義をいだきしならば＝ 主はわれに聞きたまわざりしならん

九 されど、神はまことに聞きたまえり＝ 御心をわが祈りの声にとめたまえり

二〇 神はほむべきかな、わが祈りをしりぞけたまわず＝ そのいつくしみを我より取

り去りたまわざりき

第六十七篇

一 願わくは神われらを恵み祝したまわんことを＝ 御顔の光を我らの上に照らした  
まわんことを

二 こはなんじの道のあまねく地に知られ＝ なんじの救いのもろもろの国に知られ  
んためなり

三 神よ、民らはなんじに感謝し＝ もろもろの民はなんじをほめたとうべし

四 国々はたのしみ、また喜びうとうべし＝ なんじは公平をもて民らをさばき、地  
の上なる国々を治めたまえばなり

五 神よ、民らはなんじに感謝し＝ もろもろの民はなんじをほめたとうべし

六 地は産物をいだせり＝ 神・われらの神はわれらを祝したまえり

七 神はわれらを祝したまえり＝ 地のもろもろのはて、ごとごとく神をおそるべし

十三日早禱

第六十八篇

- 一 神よ、立ちたまえ、願わくはそのあだはことごとく散らされ＝ 神をにくむ者は  
御前より逃げ去らんことを
- 二 煙の追いやらるることく彼らを追いやりたまえ＝ 悪しき者は火の前にろうの溶  
くるごとく、神の御前にてほろびんことを
- 三 されど正しき者にはよろこびあり＝ 神の御前にて楽しみ喜びて踊らん  
神の御前に歌い、御名をほめたたえよ＝ 雲に乗りたもう者に向かいてうたえ
- 四 きよき住まいにまします神は＝ みなしごの父、やもめのまもりなり
- 五 神は寄るべなきものを家族のうちにおらしめ、めしゅうどを解きて榮えしめたも  
う＝ されどそむく者はうるおいなき地に住むなり
- 六 神よ、なんじは民にさきだちていで＝ また荒れ野を進みゆきたまいき
- 七 そのとき神の御前に地はふるい、天は激しく雨を降らせたり＝ シナイの山すら  
神・イスラエルの神の御前にふるいうごけり
- 八 神よ、なんじは豊かなる雨をふらせ＝ なんじの嗣業の地の疲れ衰えたるとき、

これを立てなおしたまえり

二〇 なんじの民はその中に住まいをえたり＝ 神よ、なんじは恵みをもて貧しき者に

食物をあたえたまえり

二 主はみことのりを下したまえり＝ そのおとずれを宣ぶる多くの女は群れをなし

て言う

三 「もろもろの王たちは逃げ去る、逃げ去る」と＝ 家における女たちはその獲物を

わかつ

三 なんじら羊のおりの中にとどまるとも＝ はとの翼のしろがねにおおわれ、その

毛のこがねに、おおわるるがごとくならん

四 全能者かしこにて王たちを散らしたまえり＝ そのときサルモンの山に雪ふれり

五 バシヤンの山は大いなる山なり＝ バシヤンの山は峰重なれる山なり

六 峰かさなれる山よ、なんじいかなれば神の住まいに選ばたまえる山をねたみ見る

や＝ されど主はとこしえにこの山に住みたまわん

七 主はちよろずのいくさ車もてシナイよりきたり＝ 聖所に入りたまえり

一 なんじはとりこを率いて高き山にのぼり＝ 人々より、またそむく者より礼物を

受けたまえり、主なる神ここに住みたまわんためなり

二 日ごとに我らをささえたもう主はほむべきかな＝ 神は我らのすくいなり

三 我らの神は救いの神なり＝ 死よりのがるは主なる神による

三 神はあだのこうべを砕きたまわん＝ 惡の道をあゆむ者の髪毛もおおき頂を打ちく

だきたまわん

三 主言いたまえり、「われバシヤンより彼らを携えかえり＝ 海の深き所よりたず

さえかえらん

三 かくてなんじの足をそのあだの血にてあらひ＝ これをなんじの犬の舌になめし

めん」と

二 神よ、人はなんじの進み行きたもうを見たり＝ わが神・わが王の聖所に進み行

きたもうを見たり

二 歌うものは前に行き、琴ひく者はあとにしたがい＝ 鼓うつおとめはその中にあ

りて言う

六 「大いなるつどいにて神をほめよ＝ イスラエルの源よりいずる者よ、主をほめ

まつれ」と

七 かしこに年若きベニヤミンさきだてり、その群れの中にユダの君たちあり＝ ゼ

ブルンの君たち、ナフタリのきみたちあり

八 神よ、御力を奮い起こしたまえ＝ 我らのためにみわざを行ないたまひし神よ、

御力をしめしたまえ

九 王たちなんじに礼物をささぐ＝ これエルサレムなるなんじの宮のためなり

一〇 願わくは葦のなかに住む獣をいましめ＝ もろもろの民の雄牛と子牛の群れをい

ましめたまえ

一一 みつぎ物をむさぼる者をふみつけ＝ 戦いを好むもろもろの民を散らしたまえ

一二 青銅をエジプトより携えきたらせ＝ エチオピアにはあわただしく神に向かい

手をのべさせたまえ

一三 地のもろもろの国よ、神に向かいてうたえ＝ 主をほめうたえ

一四 いにしえよりの天の天に乗りたもう者に向かいてうたえ＝ 見よ、主は御声をい

だしたもう、勢いさまある御声みこえをいだしたもう

四 なんじら力ちからを神かみに帰かきせよ＝ そのみいつはイスラエルの上うへにとどまり、御力みちからは雲くも

のなかにあり

五 神かみの恐おそるべきさまはその聖所せいじよよりあらわる＝ イスラエルの神かみはその民たみに力ちからと勢いさま

いと与あたえたもう、神かみはほむべきかな

## 十三日晚禱

### 第六十九篇

一 神かみよ、われを救すくいたまえ＝ 大水おおいづな流れきたりてわが首くびにまでおよべり

二 われ立たちどなき深ふかき泥どろの中なかにしずめり＝ われ深ふかき水みづに陥おちる、大水おおいづなわが上うへをあふ

れずぐ

三 われ叫さけび疲つかれて、のどはかわきたり＝ わが目めは神かみを待まちちわびておとろえぬ

四 ゆえなくしてわれを憎にくむもののおおし＝ わがかしらの毛けよりもおおし

偽いつはりりを言いいてわれを攻せめ、我われを滅はろぼさんとする者ものの勢いさまいつよし＝ 我われかすめざり



し物をもつぐのわせらるべきや

神よ、なんじはわが愚かなるを知りたもう＝ わがもろもろの罪はなんじにかく

れざるなり

六 万軍の主なる神よ、なんじを待ちのぞむ者の、わがゆえによりて、恥ずかしめらるることなからしめたまえ＝ イスラエルの神よ、なんじを求むる者わがゆえによりて恥を負わしめらるることなからしめたまえ

七 我なんじのためにそしりを負い＝ 恥はわが顔をおおえり

八 我わがはらからには旅人のごとく＝ わが母の子には他国の人のごとくなれり

九 そはなんじの家を思ふ熱心われをくらい＝ なんじをそしる者のそしり我におよ

べばなり

一〇 われ食を断ちて、わが身をくるしめたり＝ されどこれによりて、そしりをうく

一一 われ荒布をころもとなせり＝ されどかれらの語りぐさとなりぬ

一二 門に座する者はわがことをかたる＝ われは酔いたる者に歌いはやされたり

一三 されど主よ、我はなんじにいのる＝ 神よ、恵みのときに豊かなるいつくしみに

よりて、我にこたえたまえ

四 なんじのまことの救いをもて、泥のなかより我を助けいだして沈まざらしめたま

え＝ 我をにくむ者より、また深き水より助けいだしたまえ

五 大水われをおおうことなく、淵われをのむことなく＝ 穴その口をわが上に閉ず

ることなからしめたまえ

六 主よ、我に答えたまえ、なんじはいつくしみ深ければなり＝ なんじのあわれみ

はおおし、我をかえりみたまえ

七 御顔をなんじのしもべに隠したもうなかれ＝ われ悩み苦しめり、願わくはすみ

やかに我にこたえたまえ

八 われに近寄りて我をあがない＝ わがあだのゆえに我をすくいたまえ

九 なんじはわが受くるそしりと恥とあなどりとを知りたまえり＝ わが敵はみなな

んじのみまえにあり

三 そしりわが心を碎きたれば、我いたく気落ちせり＝ 我あわれみを寄するものを

待ちたれど、ひとりだになく、慰むるものを待ちたれどひとりをも見ざりき

三 彼らは苦き草をわが食い物にあたえ＝ わがかわけるときに酢をのませたり

三 彼らの前なる食卓は網となり＝ そのいけにえの宴はわなどなれ

三 その目を暗くして見えしめず＝ その腰をつねに震わしめたまえ

三 なんじの憤りを彼らの上にそそぎ＝ なんじの怒りを彼らに追いかせたまえ

三 彼らの家をあれはてしめ＝ その幕屋に人を住まわせたもうなかれ

三 彼らはなんじが打ちたたまいたる者をせめ＝ なんじが傷つけたまいし者を、なお

も苦しむるなり

三 彼らの罰に罰をくわえ＝ 彼らをゆるしたもうなかれ

三 彼らを命の書より消し＝ 正しき者とともにしるさることなからしめたまえ

三 されどわれは悩み苦しめり＝ 神よ、われを救いて高きところに置きたまえ

三 われ歌をもて神の御名をほめたたえ＝ 感謝をもて神をあがめまつらん

三 主は雄牛よりもこれをよろこび＝ 角とひずめある雄牛にまさりてよろこびたま

わん

三 しいたげらるる者はこれを見てよろこべ＝ 神を慕うものよ、なんじらの心は生

くべし

三 主は乏しき者の声をきき＝、とらわれしおのが民をかるしめたまわす

四 天も地も主をほめよ＝ 大海とその中に動くあらゆるもの主をほめまつるべし

五 神はシオンを救い、ユダのもろもろの町をふたたび建てたまわん＝ 主のしもべ

らはそこに住みて、これをおのがものとなさん

六 そのしもべらの末もまたこれを継ぎ＝ 御名をいつくしむ者はそのなかに住ま

わん

### 第七十篇

一 主よ、われを救いたまえ＝ 主よ、とく、きたりて我を助けたまえ

二 願わくはわが命をたずね滅ぼさんとする者みな恥じあわてんことを＝ わがそこ

なわるるを喜ぶもの皆うしろに退きて恥を負わんことを

三 我に向かいて、「ああ見よや、見よや」という者おどろき＝ おのが恥によりて

恐れんことを

四 なんじを尋ね求むるもの、皆なんじによりて楽しみ喜ばんことを＝ なんじの救

いを慕<sup>しと</sup>うもの常<sup>つね</sup>に、「主<sup>しゅ</sup>は大<sup>おほ</sup>いなるかな」ととなえんことを

五 我<sup>われ</sup>は貧<sup>み</sup>しくかつともし＝ されど主<sup>しゅ</sup>われをかえりみたもう

六 なんじはわが助<sup>たす</sup>けなり、我<sup>われ</sup>を救<sup>すく</sup>いたもうものなり＝ ああわが神<sup>かみ</sup>よ、願<sup>ねが</sup>わくはた

めらいたもうなかれ

## 十四日早禱

### 第七十一篇

一 主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>なんじに寄<sup>よ</sup>りたのむ＝ 願<sup>ねが</sup>わくはとこしえに恥<sup>はじ</sup>なからしめたまえ

二 なんじの義<sup>ぎ</sup>をもて我<sup>われ</sup>を助<sup>たす</sup>けいだし＝ なんじの耳<sup>みみ</sup>を我<sup>われ</sup>にかたむけて、我<sup>われ</sup>をすくい

たまえ

三 願<sup>ねが</sup>わくはなんじわが寄<sup>よ</sup>り頼<sup>たの</sup>む岩<sup>いわ</sup>となり、われを救<sup>すく</sup>う堅<sup>けんこ</sup>固<sup>こ</sup>なる城<sup>しろ</sup>となりたまえ＝

なんじはわが岩<sup>いわ</sup>わが城<sup>しろ</sup>なり

四 わが神<sup>かみ</sup>よ、悪<sup>あく</sup>しき者<sup>もの</sup>の手<sup>て</sup>より我<sup>われ</sup>をすくいだし＝ 不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>残<sup>ざん</sup>忍<sup>にん</sup>なる人<sup>ひと</sup>の手<sup>て</sup>より我<sup>われ</sup>を

まぬかれしめたまえ

五 主なる神よ、なんじはわがのぞみなり＝ わが幼き時よりのたのみなり

六 われ生まれし時よりなんじに寄りたのめり＝ なんじは我を母の胎より取りいだ

したまえる者なり、我つねになんじをほめたたえん

七 われ多くの人に驚かる者となれり＝ されど我はなんじをわが堅固なる避けど

ころとなせり

八 なんじをたとうる言葉わが口にみち＝ なんじをほむる言葉ひねもす満つるなり

九 わが年老ゆるとき、我を捨てたもうなかれ＝ わが力衰うるとき、われを離れ去

りたもうなかれ

一〇 わがあだはわがことを語り＝ わが命をうかごう者は互いにはかりて言う

二 「神は彼を捨てたり＝ 彼を助くる者なし、彼を追いてとらえよ」と

三 神よ、我に遠ざかりたもうなかれ＝ わが神よ、とくきたりて我をたすけたまえ

三 願わくはわが敵は恥じ、かつおとろえ＝ 我をそこなわんとする者はそしりと恥

とにおおわれんことを

一四 されど我はたえず望みをいただき＝ いよよ、なんじをほめたたえん

一五 わが口はひねもすなんじの義となんじの救いのみわざを語らん＝ 我その数を知

らざればなり

一六 我は主なる神の全能のみわざをかたり＝ ただなんじの義のみをほめたたえん

一七 神よ、なんじ我を幼きときより教えたまえり＝ われ今なおなんじのくすしきみ

わざを宣べつたえん

一八 神よ、われ老いて、しらがになるとも、我を離れたもうなかれ＝ さらばなんじ

の全能を世々に宣べつたえん

一九 神よ、なんじの力と義は高き大におよぶ＝ なんじは大いなることをなしたまえ

り、神よ、たれかなんじに等しき者あらんや

二〇 なんじわれらを多くの重き悩みにあわせたまえり＝ されどなんじふたたび我を

生かし、地の深き所よりあげたまわん

二一 なんじ我をいよいよ大いならしめ＝ ふたたび我をなくさめたまわん

二二 わが神よ、われまた立琴をもてなんじをほめ、なんじのまことをほめたたえん＝

イスラエルの聖者よ、われ琴をもてなんじをほめうたわん

三 なんじをほめ歌うとき、わがくちびるは喜びよばわり＝ なんじの救いたまえる

わが魂もまた大いによろこばん

四 わが舌もまたひねもすなんじの義を語らん＝ 我をそこなわんとする者、恥じあ

わつればなり

### 第七十二篇

一 神よ、願わくはなんじの正義を王にあたえ＝ なんじの義を王の子にあたえた

まえ

二 彼は義をもてなんじの民をさばき＝ 公平をもて苦しむ者をさばかんことを

三 山と岡は義によりて＝ なんじの民を榮えしめんことを

四 彼は苦しむ民の訴えをきき＝ 乏しき者を救い、しいたぐる者を碎かんことを

五 彼は日と月のあらん限り＝ 世々生きながらえんことを

六 彼は刈りとれる牧に降る雨のごとく＝ 地をうるおすむらさめのごとくならんこ

とを

七 彼の世に義はさかえ＝ 月うするとも全き平和の保たれんことを



ハ そのまつりごとは海より海にいたり＝ 川より地のはてにおよばんことを

九 敵はその前にかがみ＝ あだはちりをなめんことを

一〇 タルシシおよび島々の王たちは、みつぎをおさめ＝ シバとセバの王たちは礼物

をささげんことを

二 もろもろの王はその前にひれふし＝ もろもろの民はかれに仕えんことを

三 彼は乏しき者をその叫ぶときにすくい＝ 助けなき者、苦しむ者をすくわん

三 彼は弱き者と乏しき者をあわれみ＝ 乏しき者の命をすくうべし

四 彼らの命を、しいたげとあらびよりあがなわん＝ 彼らの血は御前にてとうとし

五 彼の命の長からんことを＝ 人はシバのこがねをささげて彼のために常に祈り、

ひねもす彼を祝わんことを

六 国のうちに穀物は豊かにみのり、山の頂にまで穂波はそよぎ＝ その実はレバノ

ンのごとく、町の人々は地の草のごとく榮えんことを

七 かれの名はつねに絶えず＝ かれの誉れは日とともに久しからんことを

人は彼によりてさいわいをえ＝ もろもろの国民はかれを幸いなる者ととなえん

ことを

六 ただイスラエルの神のみ、くすしきみわざをなしたもう＝主なる神はほむべき

かな

五 その栄光の名は世々にほむべきかな＝その栄光、全地に満ちんことを、アーメ

ン、アーメン

## 十四日晚禱

### 第七十三篇

一 神はイスラエルに向かいてめぐみあり＝こころ清き者に向かいてまことにめぐ

みあり

二 されどわが足はつまずかんとし＝わが歩みはすべらんとせり

三 こは、われ悪しき者の栄ゆるを見＝誇れる者をねたみしによる

四 彼らには苦しみなく＝その身は健やかにしてつややかなり

五 彼らは他の人のごとく憂いにおらず＝悩みに会うことなし

六 このゆえに高ぶりは飾りのごとくその首をめぐり＝ あらびは衣のごとく彼らをおおえり

七 かれら肥えふとりてその目とびいで＝ その心は愚かなる思いにみてり

八 彼らはあざけり悪意をもてもの言い＝ また高ぶり、しいたげをもておどす

九 その口を天に向けてさからい＝ その舌を地にあまねくゆかしむ

一〇 このゆえに民はひるがえりて彼らをほめ＝ 彼らにあやまちなしとせり

一一 彼らは言う、「神いがでさとらんや＝ いと高き者いかで知らんや」と

一二 見よ、彼らは悪しきものなり＝ 常に安らかにしてその富ましくわわれり

一三 まことに我はいたずらに心をきよめ＝ 罪を犯さずして手をあらいたり

一四 我ひねもす打たれ＝ 朝ごとに責めをうけたり

一五 我もし、「かかることを述べん」と言いたらんには＝ なんじの子らの代を誤らせしならん

一六 我これ知らんとして思いめぐらしたるに＝ 悟りがたくしてなやみたり

一七 われ神の聖所にゆき＝ ついに彼らのいやはてをさとりえたり

六 まことになんじは彼らをなめらかなるところに置き＝ 滅びにおとしいれたもう

元 げに彼らはまたたく間にやぶれ＝ 恐れをもてことごとくうせ去るなり

三 目さめて見ればかれらは夢のごとし＝ なんじ目をさますとき彼らの影をかるし  
めん

二 わが魂はいたみ＝ わが心はさされたり

三 われ愚かにしてさとりなく＝ 御前にありて獣にひとしかりき

三 されど我つねになんじとともにあり＝ なんじわが右の手をたもちたまえり

二 なんじのさとしをもて我をみちびき＝ 後に我を受けてほまれを得させたまわん

二 なんじのほかにかたに我たれをか天にもたん＝ 地にはなんじのほかにかたにわがしとうもの  
なし

二 わが身とわが心とはおとろう＝ されど神はわが心のちから、わがとこしえの嗣  
業なり

二 見よ、なんじに遠ざかる者はほろびん＝ なんじにそむく者はなんじこれをほろ  
ぼしたもう

二六 神に近づきまつるは我によきことなり＝ われは主なる神を避け所とし、そのもろもろのみわざを宣べつたえん

## 第七十四篇

一 神よ、いかなればなんじ我らをとこしえに捨てたまひしや＝ いかなればなんじの牧の羊に御怒りの煙あがれるや

二 願わくは昔なんじが買い求め、なんじがあがないて嗣業の民となしたまえる公会をおもいいで＝ なんじが住みたもうシオンの山を思いいでたまえ

三 とこしえの滅びの跡に御足を向けたまえ＝ あだは聖所のすべての物をこぼちつくせり

四 なんじの敵はなんじの宮のなかにほえたけび＝ おのが旗を立ててしるしとせり  
五 彼らは上なる入口にて＝ おのをもて木の格子を切りたおせり

六 また手おのとつちをもて＝ 宮の彫り物をことごとく打ちおとせり

七 彼らはなんじの聖所に火をかけ＝ 御名の住みかを汚して地にたおせり

八 彼ら心のうちに言う、「我らことごとくこれをこぼたん」と＝ かくて国のうち

なる神かみのもろもろの会堂かいどうを焼やきつくせり  
我われらのしるしは見みえず、預言者よげんしゃもいまはなし＝  
いつまでかくあるべきか、我われら

のうちに知るものなし

二 神かみよ、敵てきはいつまでかくそしるや＝  
あだはなんじの御名みなをとこしえにけがすや

二 かなれば御手みでを引ひきたもうや＝  
右みぎの御手みでをふところよりいだしたまわざるや

三 神かみはいにしえよりわが王おうなり＝  
救すくいを世よにおこないたまえり

三 なんじ御力みちからをもて海うみをわかち＝  
水みづの中なる竜りゅうのこうべをくだきたまえり

四 なんじわにのこうべを打うちくたき＝  
野のにすめる獣けものに与あたえて食しょくとなしたまえり

五 なんじは泉いずみと流ながれとをひらき＝  
もろもろの大川おおがわを枯からしたまえり

六 昼ひるもなんじのもの、夜よるもまたなんじのものなり＝  
なんじはもろもろの光ひかりと日ひと

をそなえたまえり

七 あまねく地ちのもろもろのさかいをたて＝  
夏なつと冬ふゆとをつくりたまえり

八 主しゅよ、あだはなんじをそしり、愚おろかなる民たみは御名みなをけがせり＝  
願ねがわくはこのこ

とを思おもひでたまえ

一九 なんじのはとの魂を野の荒き獣にわたしたもうなかれ＝ 苦しむ者の命をとこし

えに忘れたもうなかれ

二〇 なんじの契約をかえりみたまえ＝ 地の暗きところはあらぶる人の住まいにて満

ちたればなり

二一 しいたげらるる者はずかしめたもうなかれ＝ 悩める者と苦しむ者ともに御名を

ほめたたえしめたまえ

二二 神よ、立ちてなんじの訴えをあげつらい＝ 愚かなる者のひねもすなんじをそし

るを御心にとめたまえ

二三 なんじの敵の叫びを忘れたもうなかれ＝ なんじに逆らいて起こり立つ者の騒が

しき声はたえずあがれり

# 十五日早禱

## 第七十五篇

一 神よ、われら感謝す、我らなんじに感謝す＝ 我らなんじの御名をよび、なんじ

のくすしきみわざをかたりあえり

二 われ定めし時のいたるをまち＝ 公平をもてさばきをなさん

三 地とこれに住むすべての者よろめくとき＝ 地のもろもろの柱をかたく保つはわ

れなり

四 われ誇れる者に、「ほこるなかれ」と言い＝ 悪しき者に、「角をあぐるなかれ」

といえり

五 「なんじら角を高くあぐるなかれ＝ 首を堅くして高ぶり言うなかれ」といえり

六 上ぐることは東よりにあらず、西よりにあらず＝ また南よりにもあらざるなり

七 ただ神のみ、さばきを行ないたもう＝ 神これを下げ、彼を上げたもう

八 主の御手にさかずきあり＝ よきものを混じえたる酒あわだてり

神これを注ぎいだしたまえば＝ 地のすべての悪しき者そのおりをも飲みつくす

べし

九 されど我はとこしえによるこび＝ ヤコブの神をほめうたわん

一〇 彼は悪しき者のすべての角を切りはなたん＝ 正しき者の角はあげらるべし



## 第七十六篇

一 神はユダに知られたまえり＝ その御名はイスラエルに大いなり

二 サレムのなかにその幕屋あり＝ その御住まいはシオンにあり

三 かしこにて彼は火矢を折り＝ 盾、劍、もろもろの武器をこぼちたまえり

四 なんじは栄光あり＝ とこしえの山よりもとうとし

五 心の強き者もその獲たるものを奪われたり＝ 彼らは眠りに沈み、いくさびとも

六 皆なすすべなかりき

七 いくさ車と馬とともに深き眠りにつけり＝ ヤコブの神よ、これなんじの怒りに

八 よりてなり

九 神よ、なんじこそ恐るべきものなれ＝ ひとたび怒りたもうときは、たれか御前

一〇 に立ちえんや

一一 なんじ天より宣告を下したまえり＝ 地は恐れて黙したり

一二 神は立ちてさばきをなし＝ 地のしいたげらるる者を皆すくいたまえり

一三 げに人の怒りはなんじをほむるにいたらん＝ 怒りの余りはなんじおのれの帯と

なしたまわん

二 なんじの神・主に誓いを立ててこれを果たせ＝ その回りなるすべての者は、恐るべき者に礼物をささぐべし

三 主はもろもろの君たちのいのちを絶ちたまわん＝ 主は地の王たちの恐るべきものなり

### 第七十七篇

一 われ声をあげて神によばわん＝ われ声を神にあげなば聞きたまわん

二 われ悩みの日に主をたずね、夜わが手をのべてたゆむことなかりき＝ わが魂は慰めらるるをこぼみたり

三 われ神を思いてなげき＝ われ深く思いてわが魂おとろえぬ

四 なんじはわがまぶたを閉じしめたまわず＝ 我はもの言うことあたわぬほどに悩みたり

五 われ昔の日をおもい＝ いにしえの年をおもいいだせり

六 われ夜、わが心とかたり＝ 深く思いてわが魂をさぐりたり

セ 「主はとこしえに捨てたもうや＝ ふたたびめぐみを施したまわざるや  
ハ そのいつくしみはとこしえに絶えしや＝ その誓いは世々にすたれしや  
九 神は恵みを施すことを忘れたまいしや＝ 怒りをもてそのあわれみを閉じたまい  
しや」と

二〇 かくてわれ言う＝ 「わが悩みはいと高き者の右の手の変わりしことなり」と  
二一 われ主のみわざを思いおこさん＝ いにしえの、くすしきみわざをおもいいだ

さん

三 我またなんじのすべてのみわざを思いめぐらし＝ なんじのなしたまえる事をふ  
かくおもわん

三 神よ、なんじの道は聖なり＝ われらの神のごとく大いなる神はたれぞや

四 なんじはくすしきみわざをなしたまえる神なり＝ もろもろの民のうちに御力を  
しめしたまえり

五 御腕をもてなんじの民をたすけ＝ ヤコブ、ヨセフの子らをあがないたまえり  
六 神よ、大水なんじを見たり＝ 大水なんじを見ておののき、淵もまたふるえり

七 雲は水をそそぎ、空はひびきをいだし＝ なんじの矢はよみに走りいでたり  
八 なんじのいかずちの声はあらしのうちにありき＝ いなずまは世を照らし、地は  
ふるいうごけり  
九 なんじの大路は海のなかにあり＝ なんじの道は大水のなかにあり、されどなん  
じの御跡は見えざりき  
十 なんじその民を羊の群れのごとくみちびき＝ モーセとアロンとの手によりてみ  
ちびきたまえり

## 十五日晩禱

### 第七十八篇

一 わが民よ、わが教えをきき＝ わが口の言葉に耳をかたむけよ  
二 われ口を開きて、たとえをかたり＝ いにしえよりのなぞを語らん  
三 これ我らが聞きしところ、知りしところなり＝ 我らの先祖の語り伝えしところ  
なり

四 我らこれを子らにかくさず＝ 主のもろもろの誉れあるみわざと力と、そのなしたまえるくすしきことをきたらんとする世に告げん  
五 主はあかしをヤコブのうちに立て、律法をイスラエルのうちにさだめ＝ これをその子らに告げ知らさんことを我らの先祖に命じたまえり  
六 これきたらんとする世、後に生まるる子らがこれを知り＝ みずから立ちてそのまた子らに伝えんためなり  
七 彼らをして神によりたのみ＝ 神のみわざを忘れず、その戒めを守らしめんためなり

八 またその先祖のごとく、かたくなにしてそむく者とならず＝ その心定まらず、そのたましい神に不忠なる者とならざらんためなり  
九 エフライムの子らは武装して弓をとれり＝ されど戦いの日にうしろをむけたり  
一〇 彼らは神の契約をまもらず＝ その律法に従いて歩むことをこばみたり  
一一 主のなしたまえることをねすれ＝ 彼らに示したまえるくすしきみわざをわすれたり

三 神はエジプトの国にて、ゾアンの野にて＝ 彼らの先祖の前にくすしきみわざを  
なしたまえり

三 海をわかつて彼らを過ぎしめ＝ 水を積みてうずたかくしたまえり

四 昼は雲をもて彼らをみちびき＝ 夜はよもすがら火の光をもてみちびきたまえり

五 神は荒れ野にて岩をさき＝ 大いなる淵よりくむがごとくに、彼らに飲ましめた  
まえり

六 また岩より流れをひき＝ 川のごとくに水を流れしめたまえり

七 しかるに彼らなお罪をかさねて神にさからい＝ 荒れ野にていと高き者にそむき  
たり

八 またおのが欲のために食をもとめ＝ その心のうちに神をこころみたり

九 彼らまた神に逆らいていえり＝ 「神は荒れ野にて宴を設けたもうをえんや

二〇 岩を打ちたまえば、水ほとばしりいでて流れあふれたり＝ されど糧をも与えた  
もうを得んや、その民のために肉を備えたまわんや」と

二一 主はこれを聞きて、憤りたまえり＝ 火はヤコブに向かいて燃えあがり、怒りは

イスラエルに向かいて立ちのぼれり

三 こは彼ら神を信ぜず＝ その救いの力に寄り頼まざりしゆえなり

三 されどなお神は大空に命じ＝ 天の戸を開きたまえり

四 彼らの上にマナを降らせてくらわしめ＝ 天の穀物をあたえたまえり

五 人みな御使いの糧をくらえり＝ 神は彼らに食物を豊かにおくりたまえり

六 神は東風を天に吹きおこさしめ＝ 御力をもて南の風をみちびきたまえり

七 神はかれらの上にちりのごとく肉をふらせ＝ 海のまさごのごとく翼ある鳥をふ

らせ

八 その営の中にくだし＝ その住む所のおとしたまえり

九 かくて彼らはくらいて飽きたりぬ＝ 神はこれにその望みし物を与えたまえり

一〇 彼らはいまだその欲をはなれず＝ その食い物なお彼らの口にあり

一一 そのとき神の怒りは彼らに向かいて立ちのぼり＝ 彼らのうちにいてと強き者を

殺し、イスラエルのすぐれたる者を打ちたおせり

一二 これらのことありしかど、彼らはなお罪をおかし＝ そのくすしきみわざを信ぜ

ざりき

三 このゆえに神は彼らの日をむなくすごさせ＝ その年をおそれつつすごさせた

まえり

四 神かれらを殺したまえるとき彼ら神をたずね＝ 悔やみてねんごろに神をもとめ

たり

五 彼らは神のおのが岩なることをさとり＝ いと高き神はおのが贖い主なることを

おもいいだせり

六 されど彼らはただその口をもて神にへつらい＝ その舌をもて神に偽りを言いし

のみ

七 彼らの心は神に向かいて堅からず＝ その契約を守るに忠信ならざりき

八 されど神はあわれみ満ちたまえば、彼らのとがを赦して滅ぼしたまわず＝ しば

しばその御怒りを転じて、ことごとくは憤りを振り起こしたまわざりき

九 また彼らがただ肉なるをおもい＝ 過ぎ去ればふたたび帰りこぬ風なるを思いい

だしたまえり



四〇 彼らは野にて神にそむき＝ 荒れ野にて神を憂いしめしこといくたびぞや

四一 彼らかえすがえす神をこころみ＝ イスラエルの聖者の怒りをまねけり

四二 彼らは神の御力をわすれ＝ 敵よりあがないたまいし日をも思いいださざりき

四三 神はそのもろもろのしるしをエジプトにてあらわし＝ そのくすしきみわざをゾ

アンの野にて行ないたまえり

四四 彼らの川を血にかわらせ＝ その流れより飲むあたわざらしめたまえり

四五 またはえの群れを送りて彼らをくらわせ＝ かわずを送りて彼らをほろぼさせた

まえり

四六 神は彼らの作物を青虫にわたし＝ 彼らの勤勞の実をいなごにあたえたまえり

四七 ひよをもて彼らのぶどうの木をからし＝ 霜をもて彼らの桑の木を枯らしたま

えり

四八 その家畜をひよにわたし＝ その群れを燃ゆるいなすまにわたしたまえり

四九 彼らの上に激しき怒りをくだし＝ 憤りと怒りと悩みと、滅びの使いの群れをお

くりたまえり

吾 神はその怒りのほとばしる道を設け、彼らを死よりまぬかれしめず＝ その命を

疫病にわたしたまえり

五 エジプトにてすべてのういごを撃ち＝ ハムの天幕にてかれらの長子をうちたまえり

五 されどおのれの民を羊のごとくに引きだし＝ 荒れ野にて群れのごとくにみち

びきたまえり

五 彼らを伴いて恐れなく安らかならしめ＝ 彼らのあだを海におおわしめたまえり

五 神はかれらを聖なる地にともない＝ その右の手にて獲たまえる山にみちびきた

まえり

五 彼らの前にてもろもろの国びとを追いいだし＝ その地をわかつて嗣業となし、

イスラエルのやからをかれらの天幕に住まわせたまえり

五 されど彼らはいと高き神をこころみ＝ これにそむきてそのもろもろのあかしを

まもらず

五 そむき去りてその先祖のごとくまことをうしない＝ くるえる弓のごとくねじれ

たり

亅 高き所たかところを設もけて神かみの憤いらいりをひき＝ 刻きざめる像ぞうにて神かみのねたみを起おこしたり

𠄎 神かみききたまいてはなはだしくいかり＝ イスラエルをことごとく退ひきけたまえり

𠄎 シロの御住みすまいをすて＝ 人ひとのなかに置おきたまいし幕屋まくやを去さりたまえり

𠄎 神かみおのが力ちからをとりことならしめ＝ その栄光えいこうを敵てきの手てにわたし

𠄎 その民たみを劍つるぎにあたえ＝ その嗣業しぎよに向むかいてはなはだしくいかりたまえり

𠄎 彼かれらの若わかき男をとこは火ひに焼やきつくされ＝ 彼かれらのおとめには婚姻こんいんの歌うたなかりき

𠄎 彼かれらの祭司さいしは劍つるぎにたおれ＝ 彼かれらのやもめは喪もの嘆なげきだにせざりき

𠄎 かかるときに、主しゅは眠ねむりし者もののさめしごとく目をさまし＝ 酒さけによりて叫さけぶ勇士ゆうし

のごとく立ちたまえり

𠄎 その敵てきを撃うちしりぞけ＝ とこしえの恥はじを彼かれらにおわせたまえり

𠄎 またヨセフの天幕てんまくをいなみ＝ エフライムのやからをえらばず

𠄎 ユダのやからをえらび＝ そのいつくしみたもうシオンの山やまをえらびたまえり

𠄎 その聖所せいじよを高たかき天てんのごとく建たて＝ とこしえに定さだめたまえる地ちのごとく建たてたま

えり

㊦ またそのしもベダビデをえらび＝ 羊ひつぎのおりの中なかより取りたまえり

㊧ 乳ちちをあとうる雌羊めひつぎを飼こう務つとめより彼かれをひきいだし＝ その民たみヤコブ、その嗣業しぎふイ

スラエルの牧者ぼくしやとなしたまえり

㊨ かくてダビデは直なおき心こころをもて彼らかれをやしない＝ 巧たくみにその手てをもてこれをみち

びけり

## 十六日早禱

### 第七十九篇

一 神かみよ、異邦人いほうじんはなんじの嗣業しぎふの地ちをおかし＝ なんじの聖せいなる宮みやを汚けがし、エルサ

レムをこぼちて石塚いしづかとなせり

二 なんじのしもべのしかばねを空そらの鳥とりに与あたえてえさとなし＝ なんじの聖徒せいとの肉にく

地の獣けものにあたえたり

三 その血ちをエルサレムのまわりに水みづのごとくながしたり＝ これを葬はなる人ひとなかりき

四 我らは隣人にそしられ＝ まわりの人々に侮りあざけらるる者となれり

五 主よ、かくていつまでぞや、なんじとこしえに怒りたもうや＝ なんじのねたみ

は火のごとく燃ゆるか

六 願わくはなんじを知らざる異邦人をいきどおり＝ 御名を呼ばざる国々の上に御

怒りをそそぎたまえ

七 彼らはヤコブをほろぼし＝ その住みかをあらしたり

八 我らに先祖のとがを報いたもうことなく、あわれみをもてすみやかに我らを迎え

たまえ＝ われらは落されてはなはだしく低くなれり

九 われらの救いの神よ、御名の栄光のために我らをたすけ＝ 御名のために我らを

救い、われらの罪をのぞきたまえ

一〇 いかなれば異邦人は言う、「かれらの神はいずこにありや」と＝ 願わくはなん

じのしもべらが流しし血の報いを我らのまのあたりになして、異邦人に知らしめ

たまえ

二 なんじの御前に捕われ人の嘆きのとどかんことを＝ 大いなる御力により、死に

定められし者を守りてながらえしめたまえ

三 主よ、我らの隣人のなんじをそしりたるそしりにむくい＝ 七倍にしてそのふと

ころにかえしたまえ

三 さらに我らなんじの民、なんじの牧の羊はとこしえになんじに感謝し＝ 世々な

んじをほめたたえん

### 第八十篇

一 イスラエルの牧者よ、羊の群れのごとくヨセフを導きたもう者よ、耳をかたむけ

たまえ＝ ケルビムの上に座したもう者よ、光をはなちたまえ

二 エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんじの力を振りおこし＝ きたりて我

らをすくいたまえ

三 神よ、ふたたび我らをかえし、御顔の光を照らしたまえ＝ さらに我らすくいを

えん

四 主よ、万軍の神よ＝ なんじその民の祈りに向かいて、いつまでいかりたもうや

五 なんじ彼らに涙の糧をくらわせ＝ 涙をますに満つるほど飲ましめたまえり

六 なんじ我<sup>われ</sup>らを隣<sup>とろひと</sup>人のあざけりとなしたもう＝ 我<sup>われ</sup>らのあだはたがいにあざわらえり

七 万<sup>ばんぐん</sup>軍の神<sup>かみ</sup>よ、ふたたび我<sup>われ</sup>らをかえし、御<sup>み</sup>顔<sup>かお</sup>のひかりを照<sup>て</sup>らしたまえ＝ さらば我<sup>われ</sup>らすくいをえん

八 なんじぶどうの木<sup>き</sup>をエジプトより携<sup>ひき</sup>えいだし＝ もろもろの国民<sup>くたみ</sup>を追<sup>お</sup>い退<sup>ひき</sup>けてこれを植<sup>う</sup>えたまえり

九 なんじその木<sup>き</sup>のために地<sup>ち</sup>をひらき＝ 深<sup>ふか</sup>く根<sup>ね</sup>ざして国<sup>くに</sup>にはびこらせたまえり

一〇 その影<sup>かげ</sup>はもろもろの山<sup>やま</sup>をおおい＝ その枝<sup>えだ</sup>は大<sup>おほ</sup>いなる香<sup>かう</sup>柏<sup>はく</sup>をおおえり

二 その木<sup>き</sup>は枝<sup>えだ</sup>を海<sup>うみ</sup>にまでのべ＝ その若<sup>わか</sup>枝<sup>えだ</sup>を川<sup>かわ</sup>にまでのべたり

三 なんじいかなればそのかきをくずし＝ 道<sup>みち</sup>ゆくすべての人<sup>ひと</sup>にその実<sup>み</sup>を摘<sup>つ</sup>みとらせ  
たもうや

三 林<sup>はやし</sup>のいのししはこれをあらし＝ 野<sup>の</sup>の獣<sup>けもの</sup>はみなこれをくろう

四 万<sup>ばんぐん</sup>軍の神<sup>かみ</sup>よ、願<sup>ねが</sup>わくは帰<sup>かえ</sup>りたまえ＝ 天<sup>てん</sup>より望<sup>のぞ</sup>み見<sup>み</sup>てこのぶどうの木<sup>き</sup>をかえりみ  
たまえ

一五 なんじが右の手にて植えたまえるものをまもり＝ おのがために強くしたまえる

枝をまもりたまえ

一六 彼らはその木を火に焼き、また切りたおせり＝ 願わくは彼ら御顔の怒りにてほ

ろびんことを

一七 御手をその右手の人の上におき＝ おのがために強くしたまえる人の子の上にお

きたまえ

一八 さらに我らなんじを退き離るることなからん＝ 願わくは我らを生かしたまえ、

われら御名をよばん

一九 主よ、万軍の神よ、ふたび我らをかえし、御顔の光を照らしたまえ＝ さらに

我ら救いをえん

### 第八十一篇

一 我らの力なる神に向かい、高らかにうたい＝ ヤコブの神に向かい、喜びの声を

あげよ

二 歌をうたい、鼓をうち＝ よき音の琴と立琴をかきならせ



三 新月しんげつと満月まんげつにラッパを吹ふき＝ われらの祭まつりの日ひに吹ふきならせ

四 これイスラエルのおきてなり＝ ヤコブの神かみのさだめなり

五 神かみさきにエジプトにいで行ゆきたまいしとき、ヨセフの中なかにこれを立たててさだめと

なしたまえり＝ われ知しらざりし言ことば葉はをかしこにてきけり

六 「我われなんじの肩かたより重荷おもにをのぞき＝ なんじの手てをかごよりまぬかれしめたり

七 なんじ悩なやめるとき呼よびしかば、我われなんじをすくえり＝ われ雷かみなりのひそむ所ところにてな

んじに答こたえ、メリバの水みづのほとりにてなんじをこころみたり

八 わが民たみよ聞きけ、我われなんじにさとさん＝ イスラエルよ、われ望のぞむ、なんじの我われに

従したがわんことを

九 なんじのうちにはかの神かみなく＝ またなんじ異ことなる神かみをおがむことなかれ

一〇 我われはエジプトの国くによりなんじを携たづなえいだしたるなんじの神かみ・主しゅなり＝ なんじの

口くちを広ひろくあけよ、われ物ものをみたしめん

二 されどわが民たみはわが声こゑにしたがわず＝ イスラエルはわれを好このまず

三 このゆえに我われかれらが心こゝろのかたくななるにまかせ＝ その心こゝろのままに行ゆくにかか

せたり

三 望むらくはわが民われに聞きしたがいは イスラエルわが道に歩まんことを

四 我すみやかに彼らのあだを服せしめ わが手を彼らの敵にむけん

五 主を憎みし者も主にしたがいは 彼らの年はとこしえにつづかん

六 我はいと良き麦をもてなんじらをやしない 岩よりいでたる蜜をもてなんじらを飽かしむべし

## 十六日晚禱

### 第八十二篇

一 神は神のつどいの中にたち ころもろの神の中にてさばきをなしたもう

二 「なんじらはいつまで正しからざるさばきをなし 悪しき者をかたより見るや

三 なんじら弱き者とみなしに公平をほどこし 苦しむ者と乏しき者のために正

しきさばきをおこなえ

四 弱き者と貧しき者をすくい 彼らを悪しき者の手より助けいだすべし

五 彼らは知ることなく悟ることなくして、暗き中をさまよえり＝ 地のもろもろの  
基はうごきたり

六 われ言う、「なんじらは神なり＝ なんじらは皆いと高き者の子なり

七 されどなんじらは人のごとく死に＝ 君たちのごとく倒れん」と

八 神よ、立ちて全地をさばきたまえ＝ もろもろの国はなんじのものなればなり

## 第八十三篇

一 神よ、黙したもうなかれ＝ 神よ、もの言わで静まりいたもうなかれ

二 見よ、なんじのあだは騒ぎたち＝ なんじを憎む者はかしらをあげたり

三 彼らは巧みなるはかりごとをもてなんじの民に立ち向かい＝ ともにばかりてな

んじの守りたもう者にさかろう

四 彼らは言う、「いざ彼らの国を断ちほろぼし＝ イスラエルの名の記憶せらるる

ことなからしめん」と

五 彼らは心を一つにしてそむき＝ たがいに誓いをなしてなんじにさかろう

六 彼らはエドムの天幕に住むもの＝ またイシマエルびと、モアブびと、ハガルび

となり

セ ゲバル、アンモン、アマレク＝ペリシテおよびツロの民なり

ハ アッスリヤもまた彼らにくみし＝ロトの子らのたすけをなせり

九 なんじさきにミデアンになしたまいしごとく彼らになしたまえ＝キシヨンの川

にてシセラとヤビシとになしたまいしごとくなしたまえ

二〇 彼らはエンドルにてほろび＝地のこやしとなれり

二 彼らの貴人をオレブとゼエブのごとくなし＝その君たちをゼバとザルムンナの

ごとくなしたまえ

三 彼らは言えり＝「われら神の牧を取りてわがものとなすべし」と

三 わが神よ、彼らを巻き上げらるるちりのごとくなし＝風の前のもみがらのごと

くなしたまえ

二四 火の林を焼くがごとく＝炎の山を燃やすがごとく

二五 なんじのあらしをもて彼らを追い＝なんじのつむじ風をもて彼らを恐れしめた

まえ

- 一 彼らに恥を満たしめたまえ＝ さらば主よ、彼らなんじの御名をもとめん  
二 彼らをとこしえに恥じおそれしめ＝ あわて惑いて滅びうせしめたまえ  
三 さらに彼らは知るべし＝ 御名を主と呼ぶなんじのみ全地をしろしめすいと高き者なりと

## 第八十四篇

- 一 万軍の主よ＝ なんじの御住まいはいかに愛すべきかな  
二 わが魂は絶えいるばかりに主の大庭をしたい＝ わが心わが身は生ける神に向かいてよろこびうとう  
三 万軍の主・わが王・わが神よ＝ なんじの祭壇のほとりに、すずめも宿りをえ、つばめもそのひなを入るる巢をえたり  
四 なんじの家に住むものはさいわいなり＝ かかる人はつねに、なんじをたたえまつらん  
五 なんじを力とする者はさいわいなり＝ そのこころシオンの大路にある者はさいわいなり

六 彼らは涙の谷を過ぐれども、そこを多くの泉あるところとなす＝ また前の雨は  
もろもろの恵みをもてこれをおおえり

七 彼らは力より力にすすみ＝ ついにシオンに至りて神にまみゆ

八 主よ、万軍の神よ、わが祈りをききたまえ＝ ヤコブの神よ、耳を傾けたまえ

九 神よ、我らの盾なる者をみそなわし＝ なんじに油そそがれし者の顔をかえりみ  
たまえ

二

二 なんじの大庭に住もう一日は千日にもまされり＝ われは悪の天幕におらんより

は、むしろわが神の家の門守とならんことをねごうなり

二 そは主なる神は日なり盾なり＝ 主は恩と栄光をあたえ、直くあゆむ者によりき物

を拒みたもうことなし

万軍の主よ＝ なんじに寄り頼む者はさいわいなり

### 第八十五篇

一 主よ、なんじは御国に恵みを注ぎたまえり＝ なんじヤコブをふたたび栄えしめ

たまえり

- 二 なんじおのが民の不義をゆるし＝ そのもろもろの罪をおおいたまえり
- 三 なんじすべての怒りをすて＝ そのはげしき憤りを遠ざけたまえり
- 四 我らの救いの神よ、われらをかえし＝ われらに向かい御怒りをやめたまえ
- 五 なんじとこしえに我らを怒りたもうや＝ 世々に御怒りを引き延べたもうや
- 六 ふたたび我らを生かしたまわざるか＝ なんじの民になんじを喜ぶことを得しめ  
たまわざるか
- 七 主よ、なんじのいつくしみを我らにしめし＝ なんじの救いを我らにあたえた  
まえ
- 八 われは主なる神の語りたもうことを聞かん＝ 神はその民、その聖徒、主に心を  
向くる者に平和を語りたもうべし
- 九 げにその救いは神を恐るる者にちかし＝ かくて栄光は我らの国にとどまらん
- 一〇 いつくしみとまことと、ともに会い＝ 義と平和と互いに口づけせり
- 二 まことは地よりはえいで＝ 義は天より見おろせり
- 三 主は良きものを与えたまわん＝ かくて我らの国は産物をいだすべし

三 義は主の前にゆき＝ 主の歩みたもう跡は道とならん

## 十七日早禱

### 第八十六篇

一 主よ、なんじ耳をかたむけて我にこたえたまえ＝ 我は貧しく、乏しければなり  
二 わが命を守りたまえ、我は神をうやもうものなり＝ なんじに寄り頼むしもべを  
すくいたまえ

三 なんじはわが神なり、主よ、我をあわれみたまえ＝ 我ひねもすなんじに呼ぼう  
四 なんじのしもべの魂をよろこばせたまえ＝ 主よ、わが魂はなんじをあおぎの  
ぞむ

五 主よ、なんじは恵み豊かにして、赦すことを好みたもう＝ なんじに呼ばわるす  
べての者を、深くいつくしみたもう

六 主よ、わが祈りに耳をかたむけ＝ わが願いの声をききたまえ  
七 我わが悩みの日になんじに呼ばわん＝ なんじ我に答えたもうべし



ハ 主よ、もろもろの神かみのうちになんじに等ひとしきものはなく＝ なんじのみわざに等ひと

しきわざはなし

九 主よ、なんじの造つくれるもろもろの国民くにならは御前みまへにきたりて伏ふしおがまん＝ 彼かれらは

御名みなをあがむべし

一〇 なんじは大おほいなり、くすしきみわざをなしたもう＝ ただなんじのみ神かみにましま

すなり

二 主よ、なんじの道みちを我われに教おしえたまえ、我われなんじのまことをあゆまん＝ 心こころひとつ

に御名みなをおそれしめたまえ

三 主よ、わが神かみよ、われ心こころを尽くしてなんじに感謝かんしゃし＝ とこしえに御名みなをあがめ

まつらん

三 そはなんじのいつくしみ我われにおおいなり＝ なんじわが魂たましいをよみの深ふかき所ところより助たす

けいだしたまえり

四 神かみよ、高たかぶれる者ものはわれに逆さからいて起おこりたち＝ 荒あらぶる人ひとの群むれれはわが命いのちをも

とめ、なんじをおのが前まへに置おかざりき

一五　されど主よ、なんじはあわれみと恵みにとみ＝　怒ることおそく、いつくしみと

まこととに豊かなる神にまします

一六　我を顧み、我をあわれみたまえ＝　なんじのしもべに御力を与え、なんじのはし

ための子をすくいたまえ

一七　主よ、我に恵みのしるしを現わしたまえ、さらば我を憎むものこれを見て恥をい

だかん＝　主よ、なんじは常にわれをたすけ、我をなぐさめたまいたればなり

### 第八十七篇

二一　主の建てたまひし都は聖なる山の上にあり＝　主はヤコブのもろもろの住まいに

まさりてシオンのすべての門を愛したもう

三　神のみやこよ＝　なんじにつきて多くの栄光あること語りつたえられたり

四　我はラハブとバビロンをも我を知るものうちにあげん＝　ベリシテ、ツロ、エ

チオビヤを見よ、人々いう、「この者はかしこに生まれたり」と

五　シオンにつきてはかく言わん、「この者、かの者かしこに生まれたり」と＝　いと高き者みずからシオンの基を堅くしたもうなり

六 主は民<sup>たみ</sup>らをかぞえて＝ 「この者はかしこに生<sup>う</sup>まれたり」としるしたまわん  
七 歌<sup>うた</sup>う者<sup>もの</sup>、踊<sup>おど</sup>る者<sup>もの</sup>みな言<sup>い</sup>わん＝ 「わがもろもろの泉<sup>いづみ</sup>はなんじのうちにあり」と

第八十八篇

一 主<sup>よ</sup>よ、わが神<sup>かみ</sup>よ、われ屋<sup>いへ</sup>なんじに助<sup>たす</sup>けをもとめ＝ 夜<sup>よる</sup>、御前<sup>みまへ</sup>にさけべり  
二 願<sup>ねが</sup>わくはわが祈<sup>いの</sup>りを御前<sup>みまへ</sup>にいたらせ＝ なんじの耳<sup>みみ</sup>をわが叫<sup>さけ</sup>びにかたむけたまえ  
三 わが魂<sup>たましい</sup>は悩<sup>なや</sup>みに満<sup>み</sup>ち＝ わが命<sup>いのち</sup>はよみにちかづけり  
四 われは墓<sup>はか</sup>にくだる者<sup>もの</sup>とともにかぞえられ＝ 力<sup>ちから</sup>を失<sup>うしな</sup>える人<sup>ひと</sup>のごとくなれり  
五 われは死<sup>し</sup>ねる者<sup>もの</sup>のうちに捨<sup>す</sup>てられし者<sup>もの</sup>のごとく＝ 殺<sup>ころ</sup>されて墓<sup>はか</sup>のうちにある者<sup>もの</sup>のごとくなれり、

またなんじがふたたび心<sup>こころ</sup>にとめたまわざる人々<sup>ひとびと</sup>のごとくなれり＝ 彼<sup>かれ</sup>らは御手<sup>みて</sup>より断<sup>た</sup>ちほろぼされたるものなり

六 なんじ我<sup>われ</sup>をいと深<sup>ふか</sup>きはかに入<sup>い</sup>れ＝ 暗<sup>くら</sup>きところ深<sup>ふか</sup>き淵<sup>ふち</sup>に置<sup>お</sup>きたまえり

七 なんじの怒<sup>いか</sup>りはいたく我<sup>われ</sup>にせまる＝ なんじ、そのもろもろの波<sup>なみ</sup>をもて我<sup>われ</sup>をくるしめたまえり

- ハ わが親しき者を我より遠ざけ、我を彼らの忌みきろう者となしたまえり＝ われは閉じこめられていずることあたわず
- 九 わが目は悲しみによりておとろえぬ＝ 主よ、われ日ごとになんじを呼び、なんじに向かい、わがもろ手をのべたり
- 二 なんじ死ぬる者にくすしきみわざを現わしたまわんや＝ うせたる者立ちてなんじをほめたたえんや
- 二 なんじのいつくしみは墓のなかに述べられんや＝ なんじのまことは滅びのなかにつたえられんや
- 三 なんじのくすしきみわざは暗きに知られんや＝ なんじの義は忘れの国に知らるることあらんや
- 三 されど主よ、我なんじに向かい、てさけべり＝ あしたにわが祈りはみまえにいたらん
- 四 主よ、なんじいかなれば我を捨てたもうや＝ いかなれば我に御顔をかくしたもうや

一五 われ若きときより苦しみて死ぬるばかりなり＝ 我なんじの脅かしにあいておと

ろえはてたり

一六 なんじの激しき怒りわれをおそい＝ なんじのきびしき脅かしわれを攻めてほろ  
ぼせり

一七 これらの事ひねもす大水のごとく我をめぐり＝ ともにきたりて我をかこみふさ  
げり

一八 なんじ我よりわが友と我をいつくしむ者とを速ざけ＝ わが親しき者を暗きに入  
れたまえり

# 十七日晚禱

## 第八十九篇

一 主よ、我なんじのいつくしみをとこしえに歌わん＝ わが口をもてなんじのまこと  
とをよろず代に告げしらせん

二 なんじのいつくしみはとこしえに堅く立てられ＝ なんじのまことは天のごとく

堅くさだまれり

三 なんじ言いたもう、「我わが選えらびし者と契けい約やくをむすび＝ わがしもベダビデにち  
かいたり

四 我なんじのすえを、とこしえに堅かうし＝ なんじの位ゐを立たてて世よ々におよばしめ  
ん」と

五 主よ、もろもろの天てんはなんじのくすしきみわざをほめたたえん＝ なんじのまこ  
とは聖せいなる者もののつどいにてほめらるべし

六 大空おおそらのうちにてたれか主しゅにたぐう者ものあらんや＝ 神かみの子こらのなかに、たれか主しゅの  
ごときものあらんや

七 神は聖せいなる者もののつどいにてかしこむべきものなり＝ 彼かれのまわりにあるすべての  
者ものにまさりて恐おそるべきものなり

八 主よ、万軍ばんぐんの神よ、なんじのごとく大能たいのうある者ものはたれぞや＝ なんじのまことは  
なんじをめぐりたり

九 なんじ海の荒あるるをおさめ＝ その波なみの立たち上あらんときはこれを静しずめたもう

一〇 なんじラハブを打ちくだきて、殺されし者のごとくし＝ 強き御腕をもてあだを散らしたまえり

二 もろもろの天はなんじのもの、地もまたなんじのものなり＝ 世界とそのなかに満つるものとはなんじの基したまえるものなり

三 北と南はなんじ造りたまえり＝ タボル、ヘルモンは御名を喜びたたえん

三 なんじに大能のみうであり＝ なんじの御手は強く、なんじの右の御手はたかし義と公平はなんじの御位のもといなり＝ いくしきとまことは御前にさきだち

ゆく

五 祭りの歌声を知る民はさいわいなり＝ 主よ、彼らは御顔の光のなかをあゆめり

六 彼らは御名によりてひねもすよろこび＝ なんじの義をほめたとう

七 彼らの力の輝きはなんじなり＝ なんじの恵みによりて我らの角はたかく上げられん

八 我らの盾は主のものなり＝ 我らの王はイスラエルの聖者につけり

九 そのとき幻をもてなんじの聖徒に告げたまえり、「われ力ある者に冠をさずけ＝

わが民の中よりひとりを選びてたかくあげたり

二〇 我わがしもベダビデを得＝ これにわが聖なる油をそそげり

二一 わが手は常に彼とともにあり＝ わが腕は彼をつよくせん

二二 あだは彼をあざむくことなく＝ 悪しき者は彼を輕しむることなからん

二三 我かれの前にもろもろの敵をやぶり＝ 彼を憎む者をうちたおさん

二四 わがまことといつくしみは彼とともにあり＝ わが名によりてその角は高く上げ

られん

二五 我また彼の手を海のうえにおき＝ その右の手を川の上におかん

二六 彼われに向かいてよばん＝ 『なんじはわが父なり、わが神、わが救いのいわな

り』と

二七 我また彼をわがういごとなし＝ 地の王たちのうちにいと高きものとなさん

二八 我としえにいつくしみを彼がためにたまち＝ これと立てし契約は変わるこ

なかるべし

二九 我またその末をとしえにながらせしめ＝ その位を天の日数とひとしからし



めん

三 もしその子わが律法おきてをすて＝ またわが定めにしたがいてあゆまず

三 もしわがおきてを破り＝ またわが戒めいましめをまもらずば

三 我われつえをもて彼らのとがをただし＝ むちをもてそのよこしまをただすべし

三 されど彼よりわがいつくしみを取り去らず＝ わがまことに背くことなからん

三 我おのが契約けいやくをやぶらず＝ わがくちびるよりいでし言葉ことばをかえじ

三 われひとたびわが聖なることによりてちかえり＝ われダビデにいつわりを言

わじ

三 その末すえはとこしえにつづき＝ その位くらゐは日のごとく常にわがまえにあらん

三 また月のごとくとこしえに立てられ＝ 大空おおぞらとともにかたく立たんと

三 されどなんじその油あぶらそそぎし者ものを遠ざけてこれを捨て＝ これを激しくいきどお

りたまえり

三 なんじおのがしもべに立てし契約けいやくをすて＝ その冠かんむりを地に投げうちてけがしたま

えり

四 なんじその城壁をことごとくやぶり＝ そのとりでを荒れすたれしめたまえり

四 かれは道を過ぐるすべての者にかすめられ＝ 隣人にののしらる

四 なんじ彼が敵の右の手をたくあげ＝ そのもろもろのあだを喜ばしめたまえり

四 なんじ彼の剣をうちかえし＝ 戦いに立つに堪えざらしめたまいき

四 なんじその手より王のつえをうばい＝ その位を地に投げおとしたまえり

四 その年若き日をちぢめ＝ 恥をもて彼をおおいたまえり

四 主よ、いつまでぞや、とこしえに隠れいたもうや＝ いつまで御怒りは火のごと

く燃ゆるか

四 人の命のいかに短きかを思いたまえ＝ なんじいたずらにすべての人の子を造り

たましいや

四 たれか生きて死を見ざる者あらんや＝ たれかその魂をよみの力より救いうるも

のあらんや

四 主よ、なんじはまことをもてダビデに誓いたまえり＝ 昔の、みいつくしみはい

ずこにありや

五〇 主よ、なんじのしもべの受くるそしりを御心にとめたまえ＝ 我は民らの侮りをわがふところにかく

五一 主よ、なんじのもろもろのあだは我をそしり＝ なんじに油そそがれし者の足あとをそしれり

五二 主はとしえにほむべきかな＝ アーメン、アーメン

## 十八日早祷

### 第九十篇

一 主よ、なんじは我らの住みかなり＝ いにしえより世々われらの住みかなり

二 山いまだ成りいえず、なんじいまだ地と世界を造りたまわざりし時より、なんじは神なり＝ とこしえよりとこしえまで、なんじは神なり

三 なんじ人をちりにかえらしめ＝ 「人の子よ、なんじらかえれ」と言いたもう

四 なんじの目には、ちとせもすでに過ぐるきのごとく＝ また夜の間のひとと

きにおなじ

五 なんじは彼<sup>かれ</sup>らを流<sup>なが</sup>れ去<sup>さ</sup>らしめたもう＝ 彼<sup>かれ</sup>らはひと夜<sup>よ</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>のごとく、あしたに、  
はいえいずる青<sup>あお</sup>草<sup>くさ</sup>のごとし

六 あしたに、はいえいでてさかえ＝ ゆうべには、しおれて枯<sup>か</sup>るるなり

七 我<sup>われ</sup>らはなんじの怒<sup>いか</sup>りによりて消<sup>き</sup>えうせ＝ なんじの憤<sup>いらい</sup>りによりておじまどう

八 なんじ我<sup>われ</sup>らの不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>を御<sup>み</sup>前<sup>まえ</sup>におき＝ われらの隠<sup>かく</sup>れたる罪<sup>つみ</sup>を御<sup>み</sup>顔<sup>かお</sup>の光<sup>ひかり</sup>のなかにおき  
たまえり

九 我<sup>われ</sup>らのもろもろの日はなんじの怒<sup>いか</sup>りのもとに過<sup>す</sup>ぎ去<sup>さ</sup>り＝ 我<sup>われ</sup>らがすべての年<sup>とし</sup>の尽<sup>つ</sup>  
くるはひと息<sup>いき</sup>のごとし

二〇 我<sup>われ</sup>らが世<sup>よ</sup>にあるは七十年<sup>せちねん</sup>にすぎず＝ あるいは健<sup>すこ</sup>やかにして八十年<sup>はちねん</sup>にいたらん  
されどその誇<sup>ほこ</sup>るところは、ただ悩<sup>なや</sup>みと悲<sup>かな</sup>しみとのみ＝ その去<sup>さ</sup>りゆくことすみや  
かにして我<sup>われ</sup>らもまた飛<sup>と</sup>び去<sup>さ</sup>るなり

二一 なんじの怒<sup>いか</sup>りの力<sup>ちから</sup>を知るものはたれぞ＝ なんじをかしこみ恐<sup>おそ</sup>れ、その憤<sup>いらい</sup>りを知<sup>し</sup>  
るものはたれぞ  
願<sup>ねが</sup>わくは我<sup>われ</sup>らにおのが日<sup>ひ</sup>をかぞうることをおしえ＝ 知<sup>ち</sup>恵<sup>え</sup>の心<sup>こころ</sup>を得<sup>え</sup>しめたまえ

二三 主よ、かえりみたまえ、いつまで怒りたもうや＝ 願わくはなんじのしもべらを  
あわれみたまえ

二四 あしたに我らをなんじのいつくしみにて飽きたらしめ＝ 世を終わるまで喜び榮  
しませたまえ

二五 我らを苦しめたまえる日、我らが災いにあいし年の多きをおもひ＝ 我らの喜び  
の日を長からしめたまえ

二六 みわざをなんじのしもべらにしめし＝ なんじの榮光をその子らにあらわした  
まえ

二七 我らの神・主の恵みを我らの上にくだし＝ 我らの手のわざを我らの上に榮えし  
めたまえ、我らの手のわざを榮えしめたまえ

## 第九十一篇

一 いと高き者のもと、その隠れ場にすまい＝ 全能者の陰にやどるものあり  
二 かれ主に言わん＝ 「なんじはわが避け所、わが城、わが寄り頼む神なり」と  
三 神なんじをかりゆうどのわなより助けいだし＝ 恐ろしき疫病よりのがれしめた

まわん

四 主<sup>しゅ</sup>その羽<sup>はね</sup>をもてなんじをおおい、なんじその翼<sup>つばさ</sup>の下<sup>した</sup>にかくれん＝ 主<sup>しゅ</sup>のまことは

盾<sup>たて</sup>なり、こだてなり

五 夜<sup>よる</sup>は驚<sup>おどろ</sup>くべきことあり＝ 昼<sup>ひる</sup>はとびきたる矢<sup>や</sup>あり

六 暗<sup>くら</sup>きにはしのびよる疫<sup>えび</sup>病<sup>びょう</sup>あり、真<sup>ま</sup>昼<sup>ひる</sup>には激<sup>げ</sup>しきほろびあり＝ されどなんじ恐<sup>おそ</sup>る

ることあらじ

七 千<sup>にん</sup>人<sup>にん</sup>なんじのかたわらに倒<sup>たお</sup>れ、万<sup>ばん</sup>人<sup>にん</sup>なんじの右<sup>みぎ</sup>にたおる＝ されどその災<sup>わざ</sup>いはな

んじに近<sup>ちか</sup>づくことなからん

八 なんじの目<sup>め</sup>はただこの事<sup>こと</sup>をながめ見るのみ＝ なんじ悪<sup>あく</sup>しき者<sup>もの</sup>のむくいを見<sup>み</sup>ん

九 なんじは主<sup>しゅ</sup>を避<sup>さ</sup>けどころとし＝ いと高<sup>たか</sup>き者<sup>もの</sup>をその住<sup>す</sup>まいとなせり

一〇 されば災<sup>わざ</sup>いなんじにいたらず＝ 悩<sup>なや</sup>みなんじの天<sup>てん</sup>幕<sup>まく</sup>にちかづかじ

一一 そは主<sup>しゅ</sup>なんじのために御<sup>み</sup>使<sup>つか</sup>いにおおせ＝ なんじが歩<sup>あゆ</sup>むもろの道<sup>みち</sup>にて、なん

じを守<sup>まも</sup>らせたまえばなり

一二 彼<sup>かれ</sup>ら手<sup>て</sup>にてなんじをささえ＝ なんじの足<sup>あし</sup>を石<sup>いし</sup>にふれざらしめん

三 なんじはししとまむしとを踏み＝ 若きししとへびとを足の下に踏みにじらん

四 彼われを愛して離れざるゆえに我これを救わん＝ 彼わが名を知るゆえに我これ

をまもらん

五 彼われを呼ばわれ答えん＝ 我その悩みの時にもにおりて彼を助け、彼にほ

まれを得させん

六 われ長き命をもて彼をみち足らしめ＝ わが救いを彼に示さん

第九十二篇

一 主に感謝するはよきかな＝ いと高き者よ、御名をほめたとうるはいとよきかな

二 あしたになんじのいつくしみをあらわし＝ 夜な夜な、なんじのまことを表わす

はいとよきかな

三 十弦の琴と立琴をもちい＝ 琴のたえなる調べに合せてたとうるはいとよき

かな

四 主よ、なんじみわざをもて我を楽しませたまえり＝ われ御手のわざをよろこび

うたわん

- 五 主よ、なんじのみわざは大いなるかな＝なんじのもろもろの思いはいとふかし  
六 鈍き者はこれを知らず＝愚かなる者はこれをさとらず  
七 悪しき者は草のごとくもえいで＝不義を行のう者はことごとくさかゆとも  
八 彼らはとこしえに滅びに定められたり＝されど主よ、なんじはとこしえに高き  
ところになしませり  
九 ああ主よ、なんじのあだは、見よ、なんじのあだはほろびん＝不義を行のう者  
はことごとく散らさるべし  
一〇 されど、なんじわが角を野牛のごとく高く上げたまえり＝われは新しき油をそ  
そがれたり  
二 わが目はわが敵のたおるるを見＝わが耳はわれを攻むる悪しき者のほろぶるを  
聞けり  
三 正しき者はしゆるの木のごとくさかえ＝レバノンの香柏のごとくそだつべし  
四 彼らは宮にうえられ＝我らの神の大庭にさかゆるなり  
五 彼らは年老いてなお実をむすび＝豊かにうるおいて緑したたるべし



一五 これ主の直きことをしめすなり＝ 主はわが岩なり、主には不義あることなし

十八日晚禱

第九十三篇

一 主は統べ治めたもう＝ みいつを着たまえり

主は力を衣とし、帯となしたまえり＝ 世界も堅く立ちて動かさることなし

二 なんじの御位はいにしえより堅くたちぬ＝ なんじはとこしえよりいませり

三 大水は声をあげたり、主よ、大水その声をあげたり＝ 大水そのとどろきのこえ

をあぐ

四 高きにいます主はいとつよし＝ その勢いは多くの水のとどろくにまさり、海の

大波にまされり

五 なんじの詔はいとかたし＝ 主よ、聖なることはとこしえまでなんじの家にふさ

わしきなり

第九十四篇

一 主よ、あだをかえすはなんじにあり＝ 神よ、あだをかえすはなんじにあり、願

わくは御光をはなちたまえ

二 世をさばきたもう者よ、立ちたまえ＝ 高ぶる者にその受くべき報いをあたえた

まえ

三 主よ、悪しき者いつまでほこるや＝ いつまで勝ちほこるや

四 彼らはみだりに言葉をいだして誇りがにかたり＝ すべて不義を行のう者はみず

からたかぶれり

五 主よ、彼らはなんじの民をうちくだき＝ なんじの嗣業をくるしむ

六 彼らはやめと宿りびとの命をとり＝ みなしごをころすなり

七 彼ら言う、「主は見ず＝ ヤコブの神は悟らざるべし」と

八 民のうちのいと鈍き者よ、なんじらさとれ＝ 愚かなる者よ、なんじらいずれの

日にか、かしこからん

九 耳を植えしもの、聞くことをせざらんや＝ 目を造れるもの、見ることをせざら

んや

一 もろもろの国民を懲らすもの、罰することをせざらんや＝ 人に知識を与うるも

の、知ることなからんや

二 主は人の思いをしり＝ そのむなしきことを知りたもう

三 主よ、なんじの懲らしめたもう人はさいわいなり＝ なんじの律法を教えらるる

人はさいわいなり

三 なんじかかる人を災いの日よりのがれしめて、安きをあたえたまわん＝ 悪しき

者のためには穴掘らるべし

四 そは主その民を捨てたまわず＝ その嗣業を見捨てたまわざればなり

五 正義は正しき者に帰し＝ 心直き者はみなそのあとにしたがわん

六 たれかわがために立ちて悪しき者に向かわんや＝ たれかわがために立ちて悪を

行のう者をせめんや

七 主われを助けたまわざりせば＝ わが魂はとく音なき所に住まいしならん

八 されどわが足すべりぬと思ひしとき＝ 主よ、なんじのいつくしみ我をささえた

まえり

- 元 わがうちに思おもい煩わづいの満みつるとき＝ なんじの慰なぐさめ、わが魂たましひをよろこばしむ  
 二 悪あくしき王おうたちはなんじに親したしむことを得えんや＝ 彼かれらはおきてを設もうけ、悪あくをはか  
 るなり  
 三 彼かれらは相あい結むすびて正ただしき者ものの命いのちをそこない＝ 罪つみなき者ものを死しにさだむ  
 三 されど主しゅはわが高たかきやぐらとなり＝ 寄より頼たのむ岩いわとなりたまえり  
 三 主しゅはかれらの不ふ義ぎをその身みにむくい、かれらをその悪あくしきことのゆえに滅ほろぼした  
 まわん＝ 我われらの神かみ・主しゅは彼かれらを滅ほろぼしたまわん

## 十九日早禱

### 第九十五篇

- 一 いざ我われら主しゅに向むかいてうたい＝ 救すくいの岩いわに向むかいて喜よろこばしき声こゑをあげん  
 二 我われら感謝かんしゃをもてその御み前まえにゆき＝ 主しゅに向むかい歌うたをもて喜よろこばしき声こゑをあげん  
 三 主しゅは大おほいなる神かみなり＝ もろもろの神かみにまされる大おほいなる王おうなり  
 四 地ちの深ふかき所ところみなその手てにあり＝ 山やまの頂たてもまた神かみのものなり

五 海は神のもの、その造りたもうところなり＝ かわける地もまたその手にてつく  
りたまえり

六 いざ我ら拜みひれ伏し＝ 我らを造れる主の御前にひざまずくべし

七 主は我らの神なり＝ 我らはその牧の民、その手のひつじなり

八 きようなんじら御声をきけよかし＝ なんじらメリバとマサにありし日のごとく  
心をかたくなにするなかれ

九 その時なんじらの親たち我をこころみ＝ 我をためし、わがわざを見たり

一〇 我その世のために憂いて四十年を経たり＝ われ言えり、「彼らは心あやまれる  
民、わが道を知らざりき」

二 このゆえにわれ憤りて誓えり＝ 「彼らはわが休みに入るべからず」と

第九十六篇

一 新しき歌を主に向かいてうたえ＝ 全地よ、主に向かいてうたへし

二 主に向かい歌い、御名をほめよ＝ 日ごとにその救いを宣べつたえよ

三 国々のなかにその栄光をあらわし＝ もろもろの民の中にそのくすしきみわざを

宣べつたえよ

四 主は大いなり、いともほめたとうべきものなり＝ もろもろの神にまさりて恐る

べきものなり

五 民らのもろもろの神は皆むなしきものなり＝ されど主はもろもろの天をつくり

たまえり

六 養れとみいつはその御前にあり＝ 力と麗わしきとはその聖所にあり

七 もろもろの民のやからよ、主に帰しまつれ＝ 栄光と力を主に帰しまつれ

八 その御名にふさわしき栄光を主に帰しまつり＝ 供え物をたずさえてその大庭に

きたれ

九 清き装いもて主を拝みまつれ＝ 全地よ、その御前におののけ

一〇 国々の民のなかに言え＝ 「主は統べ治めたもう」と

世界も堅く立ちて動かさるることなし＝ 主は公平をもてもろもろの民をさばき

たまわん

二 天は喜び地はたのしみ＝ 海とそのなかに満つるものとは鳴りどよみ

三 野原とその中のすべての物とは喜ぶべし＝ 林のもろもろの木もまた主の御前に

よろこびうたわん

三 そは主きたりたもう＝ 地をさばかんとてきたりたまえばなり

主は義をもて世界をさばき＝ まことをもてもろもろの民をさばきたまわん

第九十七篇

一 主は統べ治めたもう＝ 全地はたのしみ、多くの島々はよろこぶべし

二 雲とやみとはそのまわりにあり＝ 義と公平とはその御位のもといなり

三 火はその御前にすすみ＝ そのまわりの敵をやきつくす

四 主のいなずまは世界をてらす＝ 地はこれを見てふるえり

五 もろもろの山は主の御前にてとけ＝ 全地の主の御前にてろうのごとくとけぬ

六 もろもろの天はその義をあらわし＝ もろもろの民はその栄光をみたり

七 すべて刻める像を拜み、空しき者によりて誇る者ははずかしめをうくべし＝ も

ろもろの神は主の御前にひれ伏さん

八 シオンは聞きて喜び、ユダの娘たちはたのしまん＝ 神よ、これなんじのさばき

のゆえによりてなり

九 主よ、なんじ全地の上にましましていと高く＝ もろもろの神にまさりていとと

うとし

一〇 主は悪をにくむ者をいつくしみ＝ 聖徒の命をまもりて、悪しき者の手より助け

いだしたもう

二 光は正しき人のためにあらわれ＝ 喜びは心直き者のためにあらわる

三 正しき人よ、主によりてよろこべ＝ その聖なる御名に感謝せよ

## 十九日晚禱

### 第九十八篇

一 新しき歌を主に向かいて歌え、主はたえなることをおこない＝ その右の手その

聖なる腕をもて、勝利を得たまえり

二 主はその勝利をしらしめ＝ その義をもらもろの国民の前にあらわしたまえり

三 イスラエルの家に向かいて、いつくしみとまことを忘れたまわず＝ 地のはて



もことごとくわが神の勝利を見たり

四 全地よ、主に向かいて喜ばしき声をあげよ＝ 声をはなちて喜び歌い、ほめたた

えよ

五 琴をもて主をほめ＝ 琴の音と歌の声をもてたたえよ

六 ラッパと角笛を吹きならし＝ 王なる主の御前に喜ばしき声をあげよ

七 海とそれに満てるもの鳴りどよみ＝ 世界とその中に住むもの鳴りどよむべし

八 大水はその手をうち鳴らし＝ もろもろの山はともに主の御前に喜びうとうべし

九 主は地をさばかんためにきたり＝ 義をもて世界をさばき、公平をもてもろもろ

の民をさばきたまわん

## 第九十九篇

一 主は統べ治めたもう、もろもろの民はおののくべし＝ 主はケルビムの上に座し

たもう、地は震わん

二 主はシオンにましまして大いなり＝ もろもろの民の上にいましてとうとし

三 彼らはなんじの大いなる恐るべき御名をほめたとうべし＝ 主は聖なるかな

四 大能の王、義を愛したもうものよ＝ なんじはかたく公平をたて、ヤコブの中に

さばきと正しきとおこないたもう

五 我らの神・主をあがめ、その足台のもとにて拝みまつれ＝ 主は聖なるかな

六 その祭司のなかにモーセとアロンとあり、その御名を呼ぶ者のなかにサムエルあ

り＝ 彼ら主を呼びしにこたえたまえり

七 主は雲の柱のうちにいまして彼らに語りたまえり＝ 彼らはそのあかしとその賜

わりたるおきてを守りたり

八 我らの神・主よ、なんじは彼らに答えたまえり＝ なんじは彼らを赦したもう神

にいませり、されどその悪しきわざには報いたまえり

九 我らの神・主をあがめ、その聖なる山にて拝みまつれ＝ 我らの神・主は聖なれ

ばなり

## 第百篇

二一 全地よ、主に向かいて喜ばしき声をあげよ＝ 喜びをいただきて主に仕え、歌いつ

つその御前<sup>みまえ</sup>にきたれ

三 知れ、主<sup>しゅ</sup>こそ神<sup>かみ</sup>にますなれ＝ 我<sup>われ</sup>らを造<sup>つく</sup>りたまえる者<sup>もの</sup>は主<sup>しゅ</sup>にましますば、我<sup>われ</sup>らは

そのものなり

四 我<sup>われ</sup>らはその民<sup>たみ</sup>なり＝ その牧<sup>まき</sup>のひつじなり

感謝<sup>かんしゃ</sup>しつつ御門<sup>みかど</sup>に入り、ほめたたえつつ大庭<sup>おおいわ</sup>に入れ＝ 感謝<sup>かんしゃ</sup>して御名<sup>みな</sup>をほめたた

えよ

五 主<sup>しゅ</sup>は恵<sup>めぐ</sup>み深く、そのいつくしみかぎりなく＝ そのまことよろず世<sup>よ</sup>におよぶなり

第一百一篇

一 われ誠<sup>まこと</sup>と正<sup>ただ</sup>しきにつきてうたわん＝ 主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>なんじに向<sup>む</sup>かいてうたわん

二 我<sup>われ</sup>は全<sup>また</sup>き道<sup>みち</sup>に心<sup>こころ</sup>をとめん、なんじいずれるとき我<sup>われ</sup>にきたりたもうや＝ われ直<sup>ただ</sup>き

心<sup>こころ</sup>をもてわが家<sup>いえ</sup>のうちをあゆまん

三 我<sup>われ</sup>わが目<sup>め</sup>の前<sup>まえ</sup>に卑<sup>いや</sup>しきことをおかず＝ 道<sup>みち</sup>にそむく者<sup>もの</sup>のわざを憎<sup>にく</sup>む、そのわざは

我<sup>われ</sup>にかかわりなし

四 我<sup>われ</sup>はひがめる心<sup>こころ</sup>をいだかず＝ 悪<sup>あく</sup>を知<sup>し</sup>ることなからん

五 我<sup>われ</sup>ひそかにその友<sup>とも</sup>をそしる者<sup>もの</sup>をほろぼさん＝ 高<sup>たか</sup>ぶる目<sup>め</sup>、おごれる心<sup>こころ</sup>のものを忍<sup>しの</sup>

ばじ

六 我<sup>われ</sup>は国<sup>くに</sup>のうちのまことある者<sup>もの</sup>に目<sup>め</sup>をとめ、我<sup>われ</sup>とともに住<sup>す</sup>まわせん＝ 全<sup>まじ</sup>き道<sup>みち</sup>を歩<sup>あゆ</sup>

む人はわれにつかえん

七 欺<sup>あや</sup>く者<sup>もの</sup>はわが家<sup>いえ</sup>のうちに住<sup>す</sup>むことをえず＝ 偽<sup>いつはり</sup>りを言<sup>い</sup>う者<sup>もの</sup>はわが目<sup>め</sup>の前<sup>まえ</sup>に立<sup>た</sup>つこ

とをえじ

八 われ朝<sup>あさ</sup>な朝<sup>あさ</sup>なこの国<sup>くに</sup>の悪<sup>あく</sup>しき者<sup>もの</sup>をことごとくほろぼし＝ 悪<sup>あく</sup>を行<sup>おこ</sup>のう者<sup>もの</sup>を主<sup>しゅ</sup>の町<sup>まち</sup>

よりことごとく断<sup>た</sup>ちのぞかん

## 二十日早禱

### 第百二篇

一 主<sup>しゅ</sup>よ、わが祈<sup>いの</sup>りを聞<sup>き</sup>きたまえ＝ わが叫<sup>さけ</sup>びの声<sup>こゑ</sup>を御<sup>み</sup>前<sup>まえ</sup>にいたらせたまえ  
二 わが悩<sup>なや</sup>みの日<sup>ひ</sup>に御<sup>み</sup>顔<sup>かお</sup>を隠<sup>かく</sup>したもうなかれ＝ なんじの耳<sup>みみ</sup>を我<sup>われ</sup>にかたむけ、わが叫<sup>さけ</sup>  
ぶ目<sup>め</sup>にすみやかにこたえたまえ

三 わがもろもろの日は煙のごとく消え＝ わが骨は炉のごとく燃ゆるなり

四 わが心は草のごとく打たれてしおれたり＝ われ糧をくろうことを忘れたり

五 わが骨はわが肉につく＝ わが大いなる嘆きによりてなり

六 我は荒れ野のはげたかのごとく＝ 荒れ跡のふくろうのごとし

七 われは夜もねむらず＝ 友なくして屋根におるすずめのごとくなれり

八 わがあだはひねもす我をそしる＝ 我をあざける者わが名によりてのろう

九 我は糧をくろうごときに灰をくらい＝ わが飲みものには涙をまじえたり

二〇 こはみななんじの怒りと憤りによりてなり＝ なんじ我をもたげて投げすてたま

えり

二 わが命は夕日の影のごとし＝ 我は草のごとくしおれたり

三 されど主よ、なんじはとこしえに御位に座したもう＝ その御名はよろず世にお

よばん

三 なんじ立ちてシオンをあわれみたまわん＝ その定まれる時はきたれり、シオン

に恵みを施したもうときなり

- 一四 なんじのしもべらはシオンの石をもよろこび＝ そのちりをさえいとおしむ
- 一五 もろもろの国民は主の御名をおそれ＝ 地のもろもろの王はその榮えをおそれん
- 一六 主はシオンをきずき＝ 榮光をもてあらわれたまわん
- 一七 主は乏しき者の祈りをかえりみ＝ 彼らの願いを輕しめたまわざるべし
- 一八 きたらんとする後の世のためにこのことをしるさん＝ さらに後に生まるる民は主をほめたとうべし
- 一九 主は聖なる高き所より見おろし＝ 天より地を見たまえり
- 二〇 捕われびとの嘆きをきき＝ 死に定まれる者を解きはなちたまえり
- 二一 これ人々シオンにて主の御名をあらわし＝ エルサレムにてその譽れをあらわさんためなり
- 二二 その時のもろの民つどいあつまり＝ 国々主をおがみまつらん
- 二三 主はわが力を道の半ばにて衰えしめ＝ わが命を短くしたまえり
- 二四 われ言えり、「わが神よ、わが命の半ばにて我を取り去りたもうなかれ＝ なんじの年は世々かぎりなし

三三 なんじいにしえ地の基をすえたまえり＝ 天もまた御手のわざなり

三六 これらは滅びん＝ されどなんじは常にながらえたまわん

三九 これらはみな衣のごとくふるびん＝ なんじこれらを上着のごとく替えたまえば  
彼らはうせ去らん

四二 されどなんじは変わることなく＝ なんじの年は終わらざるなり

四五 なんじのしもべらの子は安らかに住み＝ その末は御前に堅く立てらるべし

## 第百三篇

一 わが魂よ、主をほめまつれ＝ わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名を

ほめまつれ

二 わが魂よ、主をほめまつれ＝ そのすべての恵みをわするなかれ

三 主はなんじのすべてのとがをゆるし＝ なんじのすべての病をいやし

四 なんじの命を墓よりあがないだし＝ いつくしみとあわれみを、なんじにこう

むらせたもう

五 主はなんじの生けるかぎり良き物に飽かしめたもう＝ かくてなんじ若やぎてわ

しのごとく新たになるなり

六 主は正しきをおこない＝ すべてしいたげらるる者のためにさばきをおこないた

もう

七 主はおのれの道をモーセに知らしめ＝ そのみわざをイスラエルの子らに知らし

めたまえり

八 主はあわれみ深くめぐみみち＝ 怒りたもうことおそく、いつくしみ豊かにまし

ませり

九 つねに責むることなしたまわす＝ とこしえに怒りをいだきたまわざるなり

一〇 主は我らの罪にしたがいて我らをあしらいたまわす＝ 我らの惡の多きにしたが

いて、報いたまわす

二 天の地よりも高きごとく＝ 主を恐るる者にたもういつくしみはおおいなり

三 東の西を離るること遠きごとく＝ 我らよりとがを遠ざけたもうなり

三 父のその子をあわれむごとく＝ 主はおのれを恐るる者をあわれみたもうなり

四 主は我らの造られしさまを知り＝ 我らのちりなることを忘れたまわざるなり



五 人の命は草のごとく＝ その榮えは野の花のごとし

六 風すぐればうせて跡なく＝ そのありし所に問えど、さらに知らざるなり

七 されど主のあわれみはとこしえよりとこしえまで主を恐るる者にいたり＝ その正しきは子らのまた子らにいたる

八 その契約を守るものにおよび＝ その戒めを心にとめて行のうものにおよぶ

九 主はその御位をもろもろの天に堅くすえたまえり＝ そのまつりごとはよろずの物のうえにあり

一〇 主の御使いよ、主をほめまつれ＝ 主の御言葉の声をきき、これを行のう勇士よ、

主をほめまつれ

一一 主の万軍よ、主をほめまつれ＝ その御心を行のうしもべらよ、主をほめまつれ  
造りたまえるよろずの物よ、そのまつりごとの下なるすべてのところにて主をほ

めまつれ＝ わが魂よ、主をほめまつれ

第百四篇

一 わが魂よ、主をほめまつれ＝ わが神・主よ、なんじはいと大いなり、誉れとみ  
いつとを着たまえり

二 なんじ光を衣のごとくにまとい＝ 天を幕のごとくに張りたまう

三 なんじ水の上におのが殿のうつばりをおき＝ 雲をおのが車となし、風の翼に乗  
りあるきたもう

四 なんじ風を使いとなし＝ 火と炎をしもべとなしたもう

五 なんじ地を基の上におき＝ とこしえにゆるぐことなからしめたもう

六 なんじ衣にておおうごとく、大水にて地をおおいたまえり＝ 水はたたえて山の  
うえを越ゆ

七 なんじ責めたまえば水しりぞき＝ いかずちをとどろかせたまえば、水たちまち  
去りぬ

八 山はあらわれ、谷は沈み＝ なんじの定めたまえるごとくなれり  
九 なんじ水に境を設けて、これを越えしめず＝ ふたたび地をおおうことなからし

めたまえり

二 主は泉を谷にわきいでしめたもう＝ その流れは山のあいだにはしる

二 かくて野のもろもろの獣はその水を飲み＝ 野のろばもそのかわきをいやす

三 空の鳥もそのほとりにすみ＝ こずえの間にさえずりうとう

三 主は高き殿よりもろもろの山に水そそぎたもう＝ 地はみわざの実によりて満ち

たりぬ

四 主は草をはえしめて家畜にあたえ、人に作物をつくらしめたもう＝ かくて人は

土より食い物をいだすなり

五 また人の心を喜ばしむるぶどう酒をつくり＝ 人の顔をつややかならしむる油、

人の心を強からしむる糧をつくるなり

六 主の木はゆたかに水そそがれ＝ その植えたまえるレバノンの香柏はうるおい

たり

七 鳥はそのなかに巢をつくり＝ こうのとりは、もみの木をその住まいとせり

八 野のやぎには高き山あり＝ 穴ぐまの隠れがには岩あり

- 元 主は月をつくりて季節をつかさどらせたまえり＝ 日はその傾くときを知る
- 二 なんじ暗やみを造りたまえば夜あり＝ そのとき林の獣はみな忍び忍びにでき  
たる
- 三 若きしほえてえをあざり＝ 神に向かいて食いものをもとむ
- 三 日いずれば彼らしりぞき＝ みなその穴に伏す
- 三 人はいでてわざをなし＝ その勤勞は夕べにまでいたる
- 四 主よ、なんじのみわざはいとおおきかな＝ これらはみななんじの知恵にて造り  
たまえり、地はなんじの造りたまいしものにて満つ
- 五 かしこに大いなる広き海あり＝ そのなかに数しられぬもの満ち、小さな大い  
なる生けるものあり
- 六 舟その上をはしり＝ なんじの造りたまえるわにそのうちにあそびたわむる
- 七 彼らはみななんじを待ちのぞむ＝ なんじ良き時に食い物をこれに与えたもう
- 八 彼らはなんじの与えたもう物をひろう＝ なんじ御手を開きたまえば、彼ら良き  
物にあきたりぬ

元 なんじ御顔みかおをおおいたまえば、彼らかれはあわてふためく＝ なんじ彼らかれの息いきをとり  
たまえば、彼らかれは死しにてちりにかえる

三 なんじ御霊みたまをいだしたまえば、すべてのものみな造つくらる＝ なんじ地ちの面おもてを新あらた  
になしたもう

三 願ねがわくは主しゅの栄光えいこうとこしえにあらんことを＝ 主しゅそのみわざを喜よろこびたまわんこ  
とを

三 主地しゅちを見たまえば、地ちはふるい＝ 山やまに触ふれたまえば山やまはけむりをいだす  
われ生いけるかぎり主しゅに向むかいてうたい＝ わがながろうるほどはわが神かみをほめう  
たわん

三 わが思おもい主しゅによりこばれんことを＝ われ主しゅによりてよろこべばなり  
罪つみびとは地ちより断たち滅ほろぼされ、悪わるしき者ものまたあらざらんことを＝ わが魂たましいよ、主しゅ  
をほめたたえよ、主しゅをほめまつれ

## 第百五篇

- 一 主しゅに感謝かんしゃしてその御名みなをよび＝ そのみわざをろもろの民たみのなかに知らしめよ
- 二 主しゅに向むかいてうたえ、主しゅをほめうたえ＝ そのもろもろのくすしきみわざをかたれ
- 三 その聖せいなる御名みなをほこれ＝ 主しゅをたずね求もとむる者ものの心こころはよろこぶべし
- 四 主しゅとその御力みちからを尋ねもとめよ＝ つねにその御顔みかおをたずねよ
- 五 そのなしたまえるたえなるみわざをおぼえ＝ くすしきみわざと御口みくちのさばきをこころにとめよ
- 六 そのしもべアブラハムの末すえよ、これをおもえ＝ ヤコブの子こらよ、主しゅの選えらびたま
- いし者ものよ、これを心こころにとどむべし
- 七 かれは我われらの神かみ・主しゅなり＝ そのみさばきは全地ぜんちにあり
- 八 主しゅはとこしえにその契約けいやくを御心みこころにとめたまえり＝ その御言葉みことばはよろず世よに命めいじ
- たましいものなり
- 九 アブラハムと結むすびたましい契約けいやくなり＝ イサクに与あたえたまいしちかいなり

二〇 主しゅこれを堅かたくし、ヤコブのためにおきてとなし＝ イスラエルのためにとこしえの契約けいやくとなしたまえり

二 かくて主しゅは言いいたもう、「我われなんじにカナンかなんの地ちをあたえ＝ なんじらの嗣業しぎふの分ぶんとなさん」と

三 そのとき彼かれらはいと少すくなくして数かずうるに足たらず＝ その地ちに宿やどれるものなりき

三 この国くによりかの国くにに行ゆき＝ この国くによりほかの民たみに行ゆけり

四 主しゅは人ひとの彼かれらをしいたぐるを許ゆるしたまわず＝ 彼かれらのゆえによりて王おうたちを懲こらしめたまえり

五 かくて言いいたもう、「わが油あぶらそそぎし者ものにふるるなかれ＝ わが預言者よげんしやをその

うなかれ」と

六 主しゅはきぎんを地ちにまねき＝ 人ひとのつえとする糧かてをことごとくくださったまえり

七 また彼かれらの前まへにひとりをつかわしたまえり＝ そは売うられてしもべとなりしヨセフなり

八 その足あしはかせにて痛いためられ＝ その首くびは鉄てつのかせにてつながれたり

- 元 かくて彼の言いしごとくなるまで＝ 主の御言葉かれをころみたまえり
- 二 王は人をつかわして彼を解き＝ もろもろの民を治むる者はかれをゆるし
- 三 彼をその家づかさとなし＝ その宝をことごとくつかさどらせ
- 三 心のままにこの国の君たちをみちびき＝ 長老たちに知恵をさずけしむ
- 三 そのときイスラエルはエジプトにきたり＝ ヤコブはハムの地にやどれり
- 四 主は大いにその民を増しくわえ＝ これをその敵よりも強くしたまえり
- 五 また敵のころを變えてその民を憎ましめ＝ おのれのしもべらを欺きあしらわしめたまえり
- 六 主はそのしもべモーセをおくり＝ その選びたまえるアロンをつかわしたまえり
- 七 彼らは主のしるしをハムの地にしめし＝ またその国にくすしきわざをおこなえり
- 八 主はやみをつかわして地を暗くしたまえり＝ されど彼らはその御言葉にしたがわざりき
- 九 主は彼らのすべての水を血にかえ＝ その魚をころしたまえり



三 彼らの国には、かわず群れいで＝ 王の殿のうちにまで満ちふさがりぬ

三 主言いたまえば、はえむらがり＝ およそのすべての境にいきたりぬ

三 主は雨にかえてひょうを降らせ＝ いなずまを彼らの国にあまねくひらめかせた

まえり

三 彼らのぶどうの木といちじくの木を撃ち＝ その国のもろもろの木を折りくだき

たまえり

三 主言いたまえばいなごきたり＝ 数知れぬいなむしきたり

三 彼らの国のすべての青物を食いつくし＝ その地の実をくいつくせり

三 主は彼らの国のすべてのういごを撃ち＝ 彼らのすべての長子を撃ちたまえり

三 かくてイスラエルをみちびき金銀を携えていで行かしたまえり＝ そのやから

のうちにひとりの倒るる者もなかりき

三 エジプトは彼らのいずるをよろこべり＝ 彼らを恐るる思いそのうちに起こりた

ればなり

三 主は雲を張りておおいとなし＝ 夜は火をもて照らしたまえり

四 彼ら求むれば主うずらをきたらしめ＝ 天の糧にて彼らをあかしめたまえり

四 岩を開きたまえば、水ほとばしりいで＝ うるおいなき地に川のごとく流れいで

たり

三 そは主その聖なる誓いをわすれず＝ そのしもべアブラハムを覚えたまいたれば

なり

三 かくて主はその民を導きて喜びつついでしめ＝ その選べる民を歌いつついで行

かしめたまえり

四 主はもろもろの国びとの地を彼らに与えたまえり＝ 彼らはもろもろの民の勤勞

の実をおのがものとせり

四 こは彼らがそのさだめに従い、その律法を守らんためなり＝ 主をほめまつれ

## 二十一日晩禱

### 第百六篇

一 主をほめまつれ、主に感謝せよ＝ その恵みはふかく、そのいつくしみはかぎり

なし

二 たれか主しゅの力ちからあるみわざをかたり＝ そのほむべきことを、ことごとく言いあら

わしえんや

三 義ぎを守る人ひとはさいわいなり＝ つねに正ただしきを行おこのう者ものはさいわいなり

四 主しゅよ、なんじの民たみを恵めぐみたもうとき、われを覺おぼえたまえ＝ 彼かれらを救すくいたもうと

き、我われをたすけたまえ

五 さらに我われなんじの選えらびたまえる者もののさいわいを見み、なんじの国くにのよろこびをよろ

こび＝ なんじの嗣業しぎふとともにほこることをせん

六 我われらも先祖せんぞとともに罪つみをおかせり＝ 我われらよこしまをなし、惡あくをおこなえり

七 我われらの先祖せんぞは、エジプトにありしとき、なんじのくすしきみわざに心こころをとめず＝

なんじの豊ゆたかなるいつくしみを思おもわず、紅海こうかいのほとりにていと高たかき者ものにそむき

たり

八 さてど主しゅは御名みなのゆえをもて彼かれらを救すくいたまえり＝ その大おおいなる御力みちからを知しらし

めんとてなり

九 また紅海を責めたまいたればかわきたり＝ かくて民を導きて野を行くごとく淵

を過ぎ行かしめたまえり

一〇 主は敵の手より彼らをすくい＝ あだの力より彼らを解きはなちたまえり

二 水その敵をおおいたり＝ そのひとりだに残りし者なかりき

三 このとき彼ら御言葉を信じ＝ そのほまれをうたえり

三 されど彼らほどなくそのみわざをわすれ＝ そのおしえを待たず

四 野にていたくむさぼり＝ 荒れ野にて神をこころみたりき

五 主は彼らの願いをかなえたまえり＝ されど病をおくりて彼らをやせ衰えしめた

まえり

六 民は營のうちにてモーセをねたみ＝ 主の聖者アロンをねたみたり

七 そのとき地ひらけてダタンをのみ＝ アビラムのともがらをおおい

八 火はこのともがらのなかに燃えおこり＝ 炎は悪しき者を焼きつくせり

九 彼らはホレブの山にて子牛をつくり＝ 鑄たる像をおがみたり

一〇 彼らは神の栄光にかえて＝ 草をくろう牛の形をつくれり

三 彼らはおのが救い主なる神をわすれ＝ エジプトにて大いなるわざをなしたまへ

る神をわすれ

三 ハムの地にてくすしきみわざをなし＝ 紅海のほとりにて恐るべきことをなした

まえる神をわすれたり

三 このゆえに神は彼らを滅ぼさんとのたまえり＝ されど選ばたまえるモーセ、こ

の危うきにのぞみ、御怒りをとめて彼らを滅びよりまぬかれしめたり

三 彼らは麗わしき地をあなどり＝ 主の約したまいしことを信ぜず

三 その天幕にてつぶやき＝ 主の御声にしたがわざりき

三 このゆえに主は彼らに向かい御手をあげ＝ 野にて彼らをたおれしめ

三 もろもろの国民のうちにその末を追いやり＝ もろもろの地に彼らを散らさんと

のたまえり

三 彼らはバアルペオルにつかえ＝ むなしき者にささげしいけにえをくらえり

三 彼らはそのわざをもて主の御怒りをまねきたれば＝ 彼らのうちに疫病おこれり

三 その時ビネハス立ちてとりなせり＝ かくて疫病はやみぬ

三 これによりてピネハスは義とせられ＝ 世々とこしえにおよべり

三 彼らはメリバの水のほとりにて主の御怒りを引きおこせり＝ 彼らのためにモー

セもわざわいにあえり

三 彼ら神の御霊をいからせ＝ モーセくちびるにてみだりにもの言いたればなり

三 彼らは主の命じたまえることにしたがわず＝ もろもろの民をほろぼさず

三 かえつてもろもろの国民とまじわり＝ 彼らのわざにならない

三 おのがわなとなりし彼らの偶像につかえ＝ そのむすこ娘を悪霊にささげ

三 罪なき血、すなわちカナン of 偶像にささげたるおのがむすこ娘の血をながしぬ＝

かくて国は血にてけがされたり

三 かく彼らのわざはみずからをけがし＝ その行ないは姦淫なりき

三 このゆえに主の怒りその民に向かいて燃えあがり＝ その嗣業をにくみたまえり

三 彼らをもろもろの国民の手にわたしたまえり＝ 彼らはおのれを憎む者におさめ

られたり

三 彼らはあだにしいたげられ＝ その力のもとに打ち伏せられたり

望 主はしばしば彼らを助けたまえり＝ されど彼らはことさらにそむき、そのよこ

しまによりて卑しきものとせられたり

望 されど主は彼らの叫びをきき＝ その悩みをかえりみたまえり

望 その契約を彼らのためにおもいいで＝ いつくしみ豊かなるにより、御心を変え

たまえり

望 彼らをとりにしたる者どもの心をかえ＝ 彼らをあわれましめたまえり

望 我らの神・主よ、我らを救い、もろもろの国民のうちより集めたまえ＝ 我らは

御名に感謝し、なんじをほめたたえてほこらん

望 イスラエルの神・主はとこしえよりとこしえまでほむべきかな＝ すべての民は

アーメンと唱うべし、主をほめまつれ

## 二十二日早禱

## 第百七篇

一 主に感謝せよ＝ その恵みは深く、そのいつくしみはかぎりなし

二 主に贖われし者はしか言うべし＝ 主は彼らを悩みよりあがないたまえり

三 彼らをもろもろの国より取り＝ 東西北南より集めたまえり

四 人なき荒れ野にさまよい＝ その住むべき町にいたる道を見いださざる者あり

五 彼ら飢えまたかわき＝ 魂そのうちにおとろえたり

六 かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝ 主かれらをその悩みより助けいだし

たまえり

七 主は彼らを直き道にみちびき＝ 住むべき町に行かしめたまえり

八 彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝ 人の子らになしたまえるくすしきみわ

ざによりて、主に感謝せんことを

九 主はかわける者をみちたらしめ＝ 飢えたる者を良きものにて飽かしめたまえば

なり

一〇 暗きと死の陰におるものあり＝ 苦しみと鎖につながれたり

一一 彼らは神の言葉にそむき＝ いと高き者の教えをかるしめたり

一二 主は苦役をもてその心を低くしたまえり＝ 彼ら倒れたれど助くる者なかりき



三 かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝ 主かれらをその悩みより助けいだし

たまえり

四 主は暗きと死の陰より彼らを導きいだし＝ そのかせをこぼちたまえり

五 彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝ 人の子らになしたまえるくすしきみわ

六 ざによりて、主に感謝せんことを

七 主は青銅の門をこぼち＝ 鉄の貫の木を断ち切りたまえばなり

八 おのが罪ふかき行ないによりて病み＝ おのがよこしまによりてなやむ者あり

九 彼らはすべての食い物をきらい＝ 死の門にちかづきたり

十 かくてその苦しみのうちにて主をよべり＝ 主かれらをその悩みより助けいだし

たまえり

十一 主はその御言葉をつかわして彼らをいやし＝ その滅びより助けいだしたまえり

十二 彼ら主のいつくしみによりて主をほめ＝ 人の子らになしたまえるくすしきみわ

十三 ざによりて、主に感謝せんことを

十四 彼ら感謝のいけにえをささげ＝ 喜びの歌をもてそのみわざを言いあらわさんこ

とを

三 舟ふねにて海うみにうかび＝ 大海おほうみにてわさをいとなむ者ものあり

四 彼かれら主しゅのわざを見み＝ 淵ふちにてそのくすしきみわざを見みたり

五 主命しゅめいじて荒あき風かぜを吹ふきおこし＝ 海うみの波なみをあげしめたまえり

六 彼かれら天てんにのぼり、また淵ふちにくだり＝ 悩なやみによりて肝きんをうしなえり

七 こなたかなたにかたむき＝ 酔よいたる者もののごとくよろめきて、そのなすところを

知らず

八 かくてその苦くるしみのうちにて主しゅをよべり＝ 主しゅかれらをその悩なやみより助けいだし

たまえり

九 主しゅはあらしをしずめ＝ 波なみを穩おだやかになしたまえり

一〇 かくて彼かれらはその静しずまれるをよろこべり＝ 主しゅは彼かれらをその望のぞむ港みなとにみちびきた

たまえり

一一 彼かれら主しゅのいつくしみによりて主しゅをほめ＝ 人ひとの子こらになしたまえるくすしきみわ

ざによりて、主しゅに感謝かんしゃせんことを

三 彼ら民の集會にて主をあがめ＝長老のつどいにて主をほめたとうべし

三 主は川を野にかわらせ＝泉をかわける地にかわらせ

三 肥えたる地を塩の地にかわ寄せたもう＝そのなかに住める民の惡によりてなり

三 主はまた荒れ野を池にかわらせ＝かわける地を泉にかわ寄せたもう

三 主は飢えたる者をそこに住ませ＝彼らはおのが住むべき町をたてたり

三 彼らは畑にたねをまき＝ぶどう園を設けて豊かなる実を得たり

三 主の祝福によりて彼らはいたくふえひろがり＝主はその家畜の減ることをゆる

したまわす

三 彼らがしいたげと悩みと悲しみにより＝その数少なくなり、かついやしめられ

しとき

四 主はもろもろの君に悔りをそそぎ＝道なき荒れ地にさまよわせたまえり

四 されど主は貧しき者を悩みのうちよりあげ＝そのやからを羊の群れのごとくな

らしめたまえり

四 直き者はこれを見てよろこび＝もろもろの惡はその口をふさげり

三 すべて賢き者はこれらのことに心をよせ＝ 主のいつくしみをさとるべし

## 二十二日晚禱

### 第百八篇

一 神よ、わが心さだまれり＝ われ歌いまつらん、たたえまつらん、わがたましい

よ、さめよ

二 琴よ、立琴よ、さめよ＝ 我しのめを呼びさまさん

三 主よ、我もろもろの民のなかにてなんじに感謝し＝ 国々のなかにてなんじをほ

めうたわん

四 そはなんじのいつくしみは大いにして天の上にいたり＝ なんじのまことは雲に

までおよぶ

五 神よ、みずからを天よりもたかくし＝ 御栄えを全地の上にあげたまえ

六 なんじの愛したもう者を救わんために＝ 右の御手をもて助け、我に答えたまえ

七 神はその聖所にて言いたまえり＝ 「我いたく喜びてシケムをわかちスコテの谷

をあたえん

ハ  
ギレアデはわがもの、マナセはわがものなり＝ エフライムはわがかぶと、ユダ

はわがつえなり

九  
モアブはわが足<sup>あし</sup>だらいななり、エドムにはわがくつを投<sup>な</sup>げん＝ ペリシテに向<sup>む</sup>かい

てはわれ勝<sup>か</sup>ちどきをあげん」と

一〇  
我<sup>われ</sup>を堅<sup>けん</sup>固<sup>こ</sup>なる町<sup>まち</sup>に進<sup>すす</sup>ましむるものはたれぞ＝ 我<sup>われ</sup>をエドムに導<sup>さ</sup>くものはたれぞ

二  
神<sup>かみ</sup>よ、なんじは我<sup>われ</sup>らを捨<sup>す</sup>てたまいしにあらずや＝ 神<sup>かみ</sup>よ、なんじは我<sup>われ</sup>らのいくさ

びとともにいで行<sup>ゆ</sup>きたまわす

三  
願<sup>ねが</sup>わくは助<sup>たす</sup>けを我<sup>われ</sup>にあたえて敵<sup>てき</sup>に向<sup>む</sup>かわしめたまえ＝ 人<sup>ひと</sup>の助<sup>たす</sup>けはむなしければ

なり

三  
我<sup>われ</sup>らは神<sup>かみ</sup>によりて勇<sup>いさ</sup>ましくはたらかん＝ 我<sup>われ</sup>らの敵<sup>てき</sup>を踏<sup>ふ</sup>むものは神<sup>かみ</sup>なればなり

### 第百九篇

一  
わがほめまつる神<sup>かみ</sup>よ＝ 黙<sup>もく</sup>したもうなかれ

二  
彼<sup>かれ</sup>らは悪<sup>あ</sup>しき口<sup>くち</sup>と欺<sup>き</sup>きの口<sup>くち</sup>をあけて我<sup>われ</sup>にむかい＝ 偽<sup>いつはり</sup>りの舌<sup>しん</sup>をもてわれにかたり

- 三 恨みの言葉をもて我をなやまし＝ ゆえなく我を攻めたり  
四 われ愛するに彼らかえりてわが敵となる＝ されど我かれらのために祈るなり  
五 彼らは悪をもてわが善にむくい＝ 恨みをもてわが愛にむくゆるなり  
六 願わくは彼の上に悪しき人をたて＝ 訴うる者に彼を訴えしめたまえ  
七 彼さばかりる時は、罪あるものとせられ＝ その祈りも罪とせられんことを  
八 その日は少なくなり＝ その富はほかの人にとられ  
九 その子らはみなしごととなり＝ その妻はやもめとなるべし  
一〇 その子らはさすらいて物をこい＝ その荒れたる住まいより追いいだされんことを  
二 その持てるすべての物は貸し主にうばわれ＝ その勤勞の実は見知らぬ人にかすめられ  
三 彼に恵みをほどこす者ひとりだになく＝ そのみなしごをあわれむ者もなく  
四 その末は絶えはて＝ その名は次の代にて消えうせんことを  
五 その先祖の罪は主の御前におぼえられ＝ その母の罪はぬぐい去られず

- 一五 これらはつねに主の御前におかれ＝ 地にてかれを覚ゆる者なからしめたまえ  
一六 そは彼あわれみを施すことを思わず＝ かえつて貧しき者、乏しき者、心痛める  
一七 者を責めて殺さんとしたればなり  
一八 彼はのろうことを好む、ゆえにのろいを彼に臨ましめたまえ＝ 彼は恵むことを  
一九 好まず、ゆえに恵みを彼より遠ざけたまえ  
二〇 彼は衣のごとくにのろいを着たり＝ さればのろい水のごとく彼の身にしみ、油  
二一 のごとくその骨にしみ入らんことを  
二二 おのれの着たる衣のごとくのろいを着＝ 帯のごとくつねにまとわんことを  
二三 我を責むる者にかくのごとくむくい＝ 我に逆らいて悪しきことを言う者の、主  
より受くる報いとなしたまえ  
二四 されど主なる神よ、御名のために我をかえりみたまえ＝ なんじのいつくしみ深  
二五 きによりて我をすくいたまえ  
二六 我は貧しくしてともし＝ わが心わがうちにてもだえるしむ  
二七 我は夕日の影のごとく去りゆき＝ またいなごのごとく吹き去らるるなり

二 わがひざは断食だんじきによりてよろめき＝ わが身みはやせおとろう

三 我われは彼らかれにそしらるる者ものとなれり＝ かれら我われを見るとき、かしらを振ふる

六 わが神かみ・主しゅよ、願ねがわくは我われをたすけ＝ なんじのいつくしみによりて我われをすくい  
たまえ

七 これ、なんじの御手みてのわざなるを彼らかれに知らしめたまえ＝ 主しゅよ、なんじこれを  
なしたまえり

六 彼らかれはのろえどもなんじは祝ゆづしたもう＝ 我われを攻せむる者ものをはずかしめ、なんじの  
しもべを喜よろこばせたまえ

元 我われを責せむる者もの、はずかしめを着き＝ おのが恥はじを上うわ着ぎのごとくまとわんことを

三 我われはわが口くちをもて大おほいに主しゅに感謝かんしゃし＝ 多おほくの人のなかにて主しゅをほめまつらん  
主しゅは貧みしき者ものの右みぎに立たち＝ 彼かれを死しに定さだむる者ものより救すくいたまえばなり

## 二十三日早禱

### 第百十篇



一 主わが主に言いたもう＝「我なんじのあだをなんじの足台とするまで、わが右に座すべし」と

二 主はなんじの力あるつえをシオンよりいだしたまわん＝なんじはもろもろのあだのなかにて王となるべし

三 なんじ聖なる山に軍勢を率いる日に、民は喜びておのれをささげん＝なんじの若き者はあしたの胎よりいずる露のごとくなんじにきたらん

四 主は誓いを立てて御心を変えたもうことなし＝「なんじはメルキゼデクの位にしたがいてとこしえに祭司たり」と

五 主はなんじの右にあり＝その怒りの日に王たちを打ちやぶりたまわん

六 主はもろもろの国のなかにてさばきを行ないたまわん＝しかばねをもてこれを満たし、広き地を統ぶるおさたちを打ちやぶりたまわん

七 彼は道のほとりの川よりくみて飲み＝かくてそのこうべをあげん

## 第百十一篇

一 主をほめまつれ＝我は直き者のつどいにて、また公会にて心を尽くして主に感

謝せん

二 主<sup>しゅ</sup>のみわざはおおいなり＝ そのみわざを慕<sup>もと</sup>う者はみなこれをかんがえきわむ

三 そのみわざは誉<sup>ほ</sup>れとみいつに満<sup>み</sup>てり＝ その正<sup>ただ</sup>しきはとこしえにうすることなし

四 主<sup>しゅ</sup>はそのくすしきみわざを人<sup>ひと</sup>の心<sup>こころ</sup>に留<sup>とど</sup>めしめたまえり＝ 主<sup>しゅ</sup>は恵<sup>めぐ</sup>みありあわれみ

ふかし

五 主<sup>しゅ</sup>はおのれを恐<sup>おそ</sup>るる者<sup>もの</sup>に糧<sup>かて</sup>をあたえたもう＝ その契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>をとこしえに御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>にとめ

たまわん

六 主<sup>しゅ</sup>はもろもろの国民<sup>くわんたみ</sup>の領<sup>りやう</sup>地<sup>ち</sup>をおのが民<sup>たみ</sup>にあたえ＝ そのみわざの力<sup>ちから</sup>をこれに現<sup>あらわ</sup>わ

したまえり

七 その御<sup>み</sup>手<sup>て</sup>のわざはまことなり、正<sup>ただ</sup>しきなり＝ そのもろもろのみさとしは変<sup>か</sup>わる

ことなし

八 これらは世<sup>よ</sup>々<sup>々</sup>限<sup>かぎ</sup>りなく堅<sup>かた</sup>くさだめられ＝ まことと正<sup>ただ</sup>しきをもておこなわる

九 主<sup>しゅ</sup>はその民<sup>たみ</sup>にあがないをほどこし、その契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>をとこしえに立<sup>た</sup>てたまえり＝ その

御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>は聖<sup>せい</sup>にしてあがむべきなり

二 主を恐るるは知恵のはじめなり＝ これを行のう者はみな明らかなる悟りを得ん  
主の譽れはとこしえにうすることなし

第一百十二篇

一 主をほめまつれ＝ 主を恐れてそのもろもろの戒めをいたく喜ぶ者はさいわいなり

二 かかる人の末は地にてつよく＝ 正しき者のやからはさいわいをえん

三 富と宝はその家にあり＝ その正しきはとこしえにうすることなし

四 正しき者のために暗きなかにも光あらわる＝ 主は恵み豊かにあわれみ満ち、か

つただし

五 恵みをほどこし貸すことをなす者はさいわいなり＝ 正しきをもておのがわざを

行のう者はさいわいなり

六 正しき者はとこしえに動かさることなく＝ また忘らることなからん

七 彼は悪しきおとずれをおそれず＝ その心は主に寄り頼みてゆるがず

八 その心は堅く立ちて恐ることなく＝ 敵につきての願いをついに見るべし

九 彼は惜しみなくほどこし、貧しき者にあとう＝ その正しきはとこしえにうする

ことなく、その角は譽れをうけてあげられん

一〇 悪しき者はこれを見て怒り、齒がみしつつ溶けさらん＝ 悪しき者の願いはほろ

ぶべし

### 第百十三篇

一 主をほめまつれ＝ 主のしもべよ、ほめまつれ、主の御名をほめまつれ

今よりとこしえに至るまで主の御名はほむべきかな＝ 日のいずるところより日

の入るところまで主の御名はほめらるべし

四 主はもろもろの国民の上にありて高く＝ その栄光は天よりもたかし

我らの神・主にたぐうべき者はたれぞや＝ 主は高きところにいまし天と地をは

るかに見おろしたもう

七 主は貧しき者をちりよりあげ＝ 乏しき者をあくたよりあげたもう

彼らをもろもろの君たちとともにすわらせ＝ その民の君たちとともにすわらせ

たまわん

九 また子を産まぬ女に家をあたえ、多くの子らの喜ばしき母たらしめたもう＝ 主  
をほめまつれ

二十三日晚禱

第百十四篇

- 一 イスラエルの民エジプトをいで＝ ヤコブの家、異なる言葉の民をはなれしとき
- 二 ユダは主の聖所となり＝ イスラエルは主の所領となれり
- 三 海はこれを見て逃げ＝ ヨルダンはうしろにしりぞけり
- 四 山は雄羊のごとくおどり＝ 小山は小羊のごとくおどれり
- 五 海よ、なんじ何とて逃ぐるや＝ ヨルダンよ、なんじ何とてうしろにしりぞくや
- 六 山よ、何とて雄羊のごとくおどるや＝ 小山よ、何とて小羊のごとくおどるや
- 七 地よ、なんじの主の御前にふるえ＝ ヤコブの神の御前におののけ
- 八 主は岩を池にかわらせ＝ 石を泉に変わらせたもう

第百十五篇

- 一 主よ、栄光を我らに帰するなかれ、我らに帰するなかれ＝ なんじのいつくしみ  
とまことのゆえによりて、ただ御名にのみ帰したまえ  
二 いかなればもろもろの国民はいう＝ 「かれらの神はいずこにありや」と  
三 我らの神は天にいまし＝ 御心のままにすべてのことをおこないたもう  
四 彼らの偶像はしろがねとこがねなり＝ 人の手のわざなり  
五 その偶像は口あれと言わず＝ 目あれと見ず  
六 耳あれと聞かず＝ 鼻あれどかがず  
七 手あれど取らず足あれど歩まず＝ のどより声をいだすことなし  
八 これを造る者はこれにひとしく＝ これに寄り頼む者はみなこれにおなじからん  
九 イスラエルよ、主に寄りのたてなり＝ 主は彼らの助け彼らのたてなり  
一〇 アロンの家よ、主に寄りのたてなり＝ 主は彼らの助け彼らのたてなり  
一一 主を恐るる者よ、主に寄りのたてなり＝ 主は彼らの助け彼らのたてなり  
一二 主は我らを御心にとめたまえり＝ 我らをめぐみたまわん  
一三 イスラエルの家を恵み、アロンの家をめぐみ＝ 小さなも大いなるも、主を恐

るる者をめぐみたまわん

四 願わくは主なんじらを増しくわえ＝ なんじらとその子らを増し加えたまわんこ

とを

五 天地を造りたまひし主＝ なんじを恵みたまわんことを

六 天は主の天なり＝ されど地は人の子らにあたえたまえり

七 死にたる人は主をほむることなし＝ 音なきところに下れる者は主をたとうることなし

となし

八 されど我らは今よりとこしえに至るまで主をたたえん＝ 主をほめまつれ

## 二十四日早禱

### 第百十六篇

一 われ主をいつくしむ＝ わが声とわが願いをききたまえばなり

二 主耳をわれに傾けたまえり＝ われ世にある限り主を呼びまつらん

三 死の綱われをまとい、よみの苦しき我をとらえたり＝ われは悩みとうれいに会

えり

四 その時われ主の御名をよべり＝ 「主よ、わが魂をすくいたまえ」と

五 主は恵み豊かにして正しくましませり＝ われらの神はあわれみふかし

六 主は愚かなる者を守りたもう＝ わが低くせられし時われをすくいたまえり

七 わが魂よ、なんじの安きにかえれ＝ 主は豊かになんじをあしらいたまえり

八 なんじはわが魂を死よりすくい＝ わが目を涙より、わが足をつまずきより助け

いだしたまえり

九 我は生ける者の国にてながらえ＝ 主のみまえに歩まん

一〇 「われ大いになやめり」と言えり＝ されど我なお信じたり

一一 我あわてしときに言えり＝ 「すべての人はいつわりなり」と

一二 我なにを主にささげん＝ いかにしてそのもろもろの恵みにむくいんや

一三 われ救いの杯をとり＝ 主の御名を呼びまつらん

一四 我わが誓いを主に果たさん＝ 主のすべての民の前にてはたさん

一五 主のとうとしと見たもうものあり＝ 主の聖徒の死ぬることなり



主よ、まことに我はなんじのしもべなり＝ 我はなんじのはしための子にしてなんじのしもべなり、なんじわがなわめを解きたまえり  
われ感謝のいけにえをなんじにささげ＝ 主の御名を呼びまつらん  
われわが誓いを主に果たさん＝ 主のすべての民の前にてはたさん  
エルサレムよ、なんじのなかにて、主の家の大庭のなかにて果たさん＝ 主をほめまつれ

## 第一百十七篇

一 もろもろの国よ、主をほめまつれ＝ もろもろの民よ、主をたたえまつれ  
二 我らにたもういつくしみはおおいなり＝ 主のまことはとこしえに絶ゆることなし、主をほめまつれ

## 第一百十八篇

一 主に感謝せよ、主の恵みはふかし＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし  
二 イスラエルは、いざ言うべし＝ 「そのいつくしみは、とこしえに絶ゆることな

し」と

三 アロンの家は、いざ言うべし＝「そのいつくしみは、とこしえに絶ゆることな

し」と

四 主を恐るる者は言うべし＝「そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし」と

五 われ悩みのなかより主によばわれり＝主われに答え、我を解きはなちたまえり

六 主われとともにいませば、我におそれなし＝人われに何をなし得んや

七 主われとともにいまして我を助けたもう＝されば我をにくむ者のほろぶるを我

は見るべし

八 主に寄り頼むはよし＝人にたよるよりもまさりてよし

九 主に寄り頼むはよし＝もろもろの王にたよるよりもまさりてよし

一〇 もろもろの国民は我をかこめり＝われ主の御名によりて彼らをほろぼさん

一 彼らは我をかこめり、げに彼らは我をかこめり＝われ主の御名によりて彼らを

ほろぼさん

二 彼らは、はちのごとく我をかこみ、いばらの火のごとく燃えあがれり＝われ主

の御名によりて彼らをほろぼさん

われ押し迫られて倒れんとせり＝ されど主われを助けたまえり

主はわが力、わが歌なり＝ 主はわが救いとなりたまえり

なんじら正しき者の天幕にあがる喜びの勝ちうたを聞くべし＝ 「主の右の手は

勇しき働きをなしたもう

主の右の手は高くあがり＝ 主の右の手は勇しき働きをなしたもう」

我は死ぬることなからん＝ ながらえて主のみわざを言いあらわさん

主はいたく我を懲らしたまえり＝ されど死にはわたしたまわざりき

わがために義の門をひらけ＝ 我そのうちに入りて主に感謝せん

こは主の門なり＝ 正しき者はそのうちに入るべし

我なんじに感謝せん＝ なんじ我に答えて、わが救いとなりたまえばなり

家造りの捨てたる石は隅の親石となれり＝ これ主のなしたまえることにして、

われらの目には、くすしきことなり

これ主の設けたまえる日なり＝ 我らはこの日によるこび樂しまん

三 主よ、願わくは我らを救いたまえ＝ 主よ、我らを榮えしめたまえ

二 主の御名によりてきたる者はさいわいなり＝ 我ら主の家よりなんじらを祝す

一 主は神なり、我らに光をあたえたまえり＝ 祭りの列をつくり、枝をたずさえて  
祭壇の角にいたれ

二 なんじはわが神なり、我なんじに感謝せん＝ なんじはわが神なり、我なんじを  
たたえまつらん

三 主に感謝せよ、主は恵みふかし＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

## 二十四日晚禱

### 第百十九篇

各区分ごとに栄光の頌を用いる。

- 一 おのが道を直くする者はさいわいなり＝ 主の律法をあゆむ者はさいわいなり  
二 主のもろもろのあかしをまもり＝ 心を尽くして主をたずね求むる者はさいわい  
なり

三 かかる人は悪をおこなわず＝ 主の道をあゆむなり

四 主よ、なんじ戒めを我らにあたえ＝ ねんごろにこれを守らしめたまえり

五 願わくはなんじわが道をかたくたて＝ なんじのおきてを守らしめたまえ  
とを

六 我なんじのもろもろの戒めに目をとめん＝ さらばわれ恥ずることあらじ

七 我なんじの正しき定めをまなばん＝ さらば直き心をもてなんじに感謝せん

八 我はなんじのおきてをまもらん＝ 我を捨てさりたもうなかれ

九 若き人は何によりてかその道をきよめん＝ 御言葉によりて慎むのほかぞなき

一〇 われ心を尽くしてなんじを尋ねもとめん＝ 願わくはなんじの戒めより迷いで

しめたもうなかれ

一一 我なんじの御言葉をわが心にたくわえたり＝ なんじに向かいて罪を犯さざらん

ためなり

一二 主よ、なんじはほむべきかな＝ 願わくはなんじのおきてを我におしえたまえ

三 我<sup>われ</sup>なんじの口<sup>くち</sup>よりいずるもろもろの定め<sup>さだめ</sup>を宣<sup>のたま</sup>へ＝ わがくちびるをもてこれをつ

と

四 我<sup>われ</sup>なんじのあかしの道<sup>みち</sup>をよろこぶ＝ もろもろの宝<sup>たから</sup>をよろこぶがごとし

五 我<sup>われ</sup>なんじの戒<sup>いさめ</sup>めをおもひ＝ なんじの道<sup>みち</sup>に目<sup>め</sup>をとめん

六 我<sup>われ</sup>はおきてをよろこび＝ 御言<sup>みことば</sup>葉<sup>は</sup>を忘<sup>わす</sup>るることなからん

七 願<sup>ねが</sup>わくはなんじのしもべを豊<sup>ゆた</sup>かにあしらいたまえ＝

我<sup>われ</sup>ながらえて御言<sup>みことば</sup>葉<sup>は</sup>をまも

らん

八 なんじわが目<sup>め</sup>をひらき＝ なんじの律法<sup>りつぽう</sup>のうちなるくずしきことを我<sup>われ</sup>に見<sup>み</sup>させた

まえ

九 われは世<sup>よ</sup>にある旅人<sup>たびひと</sup>なり＝ 我<sup>われ</sup>になんじの戒<sup>いさめ</sup>めをかくしたもうなかれ

一〇 われ常<sup>つね</sup>になんじの定め<sup>さだめ</sup>をしたい＝ わが魂<sup>たましい</sup>は絶<sup>た</sup>えいるばかりなり

一一 なんじの戒<sup>いさめ</sup>めより迷<sup>まよ</sup>いする＝ 高<sup>たか</sup>ぶる者<sup>もの</sup>、のろわれし者<sup>もの</sup>をなんじ責<sup>せ</sup>めたもう

一二 我<sup>われ</sup>なんじのあかしをまもりたり＝ 彼<sup>かれ</sup>らのそしりと侮<sup>あざ</sup>りを我<sup>われ</sup>より取<sup>と</sup>り去<sup>さ</sup>りたまえ

三 もろもろの君は座して相はかり、我をそこなわんとす＝ されどなんじのしもべはおきてをふかくおもわん

四 なんじのもろもろのあかしは我をよろこばせ＝ 我をさとすものなり

五 わが魂はちに伏す＝ 御言葉にしたがいて我を生かしたまえ

六 我わが歩める道を語りしとき、なんじ我に答えたまえり＝ なんじのおきてを我におしえたまえ

七 なんじの戒めの道を我に悟らしめたまえ＝ 我なんじのくすしきみわざをふかくおもわん

八 わが魂は悲しみによりにて溶けゆく＝ 願わくは御言葉にしたがいて我をつよくしたまえ

九 偽りの道を我より遠ざけ＝ ねんごろになんじの律法をおしえたまえ

一〇 我はまことの道をえらび＝ なんじのもろもろの定めをわがまえにおけり

一一 我なんじのあかしを慕いてはなれず＝ 主よ、願わくは我を恥ずがしめたもうな

かれ

三 なんじわが悟りをひろくしたまわん＝ さらば我なんじの戒めの道をはしるべし

## 二十五日早禱

三 主よ、願わくはなんじのおきての道を我に教えたまえ＝ われ終わりに至るまで

これを守らん

四 われに知恵をあたえたまえ＝ さらば我なんじの律法を守り、心を尽くしてこれ

にしたがわん

五 我なんじの戒めの道を歩ましめたまえ＝ 我その道をたのしめばなり

六 わが心をなんじのあかしに寄らしめたまえ＝ むさぼりに傾かしめたもうなかれ

七 わが目をそむけてむなしきことを見ざらしめ＝ なんじの道にて我を生かした

まえ

八 なんじのしもべに御誓いをかたくしたまえ＝ これなんじを恐るる者のためなり

九 わが恐るるそしりをのぞきたまえ＝ なんじのさばきは正しければなり



四 我<sup>われ</sup>なんじの戒<sup>いさめ</sup>めをしたえり＝ 願<sup>ねが</sup>わくはなんじの義<sup>ぎ</sup>をもて我<sup>われ</sup>を生<sup>い</sup>かしたまえ

四 主<sup>しゅ</sup>よ、なんじのいつくしみを我<sup>われ</sup>にくだし＝ 御<sup>み</sup>誓<sup>ちか</sup>いに従<sup>したが</sup>いてなんじの救<sup>すく</sup>いをきた

らしめたまえ

四 さらば我<sup>われ</sup>をそしる者<sup>もの</sup>に我<sup>われ</sup>は答<sup>こた</sup>うることをえん＝ われ御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>に寄<sup>よ</sup>りたのめばなり

四 またわが口<sup>くち</sup>よりまことの言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>を取<sup>と</sup>り去<sup>さ</sup>りたもうなかれ＝ 我<sup>われ</sup>なんじのさばきをの

ぞめばなり

四 我<sup>われ</sup>たえずなんじの律<sup>りつ</sup>法<sup>ぽう</sup>をまもり＝ とこしえまでこれをまもらん

四 われ恐<sup>おそ</sup>れなくあゆまん＝ 我<sup>われ</sup>なんじの戒<sup>いさめ</sup>めをもとめたればなり

四 我<sup>われ</sup>また王<sup>おう</sup>たちの前<sup>まえ</sup>になんじのあかしを語<sup>かた</sup>らん＝ しかして我<sup>われ</sup>は恥<sup>は</sup>ずかしめらるる

ことなからん

四 我<sup>われ</sup>なんじの戒<sup>いさめ</sup>めをよろこぶ＝ 我<sup>われ</sup>これを愛<sup>あい</sup>すればなり

四 我<sup>われ</sup>わが愛<sup>あい</sup>するなんじの戒<sup>いさめ</sup>めをとらとび＝ なんじのおきてをふかくおもわん

四

願わくはなんじのしもべにたまひし御言葉をおぼえたまえ＝ なんじこれによりて我に望みをいだかしめたまえり

五

なんじの御誓い我を生かしたり＝ これわが悩みのときのちからなり

五

高ぶる者大いに我をあざわらえり＝ されど我なんじの律法をはなれず

五

主よ、我いにしえよりのなんじの定めを思いいだし＝ これによりて我はちからをえたり

五

我は激しき怒りをおこせり＝ これなんじの律法を捨てし悪しき者のゆえによりてなり

五

なんじのおきてはわが歌となれり＝ わが旅路の家にてこれをうとう

五

主よ、われ夜なんじの御名をおぼえ＝ なんじの律法をまもれり

五

我なんじの戒めをまもりたり＝ ゆえにこの恵みを得たるなり

五

主はわが受くべき分なり＝ 我なんじの御言葉をまもることを約す

五

われ心を尽くしてなんじの恵みを請いもとむ＝ 願わくは御誓いにしたがいて我

を恵<sup>めぐ</sup>みたまえ

五 我<sup>われ</sup>なんじのすべての道<sup>みち</sup>をおもい＝ 足<sup>あし</sup>をかえしてなんじのあかしに向<sup>む</sup>かわん

六 我<sup>われ</sup>すみやかにしてためらわざりき＝ これなんじの戒<sup>いさめ</sup>を守<sup>まも</sup>らんとすればなり

六 悪<sup>あ</sup>しき者のなわ我<sup>われ</sup>にまつわるとも＝ 我<sup>われ</sup>なんじの律<sup>おきて</sup>法<sup>ぽう</sup>をわすれず

三 我<sup>われ</sup>れ夜<sup>よ</sup>半<sup>わ</sup>に起<sup>お</sup>きいでてなんじに感<sup>かん</sup>謝<sup>しや</sup>せん＝ なんじの正<sup>ただ</sup>しきさばきによりてなり

三 我<sup>われ</sup>はなんじを恐<sup>おそ</sup>るるもの<sup>もの</sup>の友<sup>とも</sup>なり＝ なんじの戒<sup>いさめ</sup>を守<sup>まも</sup>る者<sup>もの</sup>のともなり

四 主<sup>しゅ</sup>よ、なんじのいつくしみは地<sup>ち</sup>にみてり＝ 願<sup>ねが</sup>わくはなんじのおきてを我<sup>われ</sup>におし

えたまえ

五 主<sup>しゅ</sup>よ、なんじ恵<sup>めぐ</sup>みをほどこし＝ 御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>に従<sup>したが</sup>いてしもべをあしらいたまえり

六 我<sup>われ</sup>なんじの戒<sup>いさめ</sup>を信<sup>しん</sup>じたり＝ 願<sup>ねが</sup>わくはわれに悟<sup>さと</sup>りと知<sup>ち</sup>識<sup>しき</sup>をおしえたまえ

七 我<sup>われ</sup>れ苦<sup>くる</sup>しまざるさきには迷<sup>まよ</sup>いでたり＝ されど今<sup>いま</sup>は御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>をまもる

八 なんじは善<sup>ぜん</sup>にして善<sup>ぜん</sup>を行<sup>おこ</sup>ないたもう＝ 願<sup>ねが</sup>わくはなんじのおきてを我<sup>われ</sup>におしえた

まえ

充 高ぶる者いつわりをもて我にのぞめり＝ われ心を尽くしてなんじの戒めをまも

らん

己 彼らの心は肥えふとりてあぶらのごとし＝ されど我はなんじの律法をよろこぶ

己 苦しみに会いしは我に良きことなり＝ これによりて我なんじのおきてをまなび

えたり

己 なんじの口の律法はわがためによし＝ あまたのこがねしろがねにまされり

## 二十五日晚禱

主 なんじの御手はわれを造り、われを形づくれり＝ 願わくは悟りを与えて我にな

んじの戒めを学ばしめたまえ

主 なんじを恐るる者はわれを見てよろこばん＝ われ御言葉によりて望みをいだけ

ばなり

主 よ、我はなんじのさばきの正しきを知る＝ またなんじは、まことの故により

て我を苦しめたまえり

其願わくはなんじのしもべにたまひし御言葉により＝なんじのいつくしきをもて

我をなぐさめたまえ

其なんじのあわれみを我に臨ませ、我を生かしたまえ＝なんじの律法はわがよる

こびなればなり

其高ぶる者に恥をこうむらせたまえ、彼らは偽りをもて我をくつがえしたり＝さ

れど我はなんじの戒めをふかくおもはん

其なんじを恐るる者を我に帰らしめたまえ＝彼らはなんじのあかしをさとらん

其わが心を全くしてなんじのおきてを守らしめたまえ＝さらばわれ恥をこうむる

ことなからん

其わが魂はなんじの救いを慕いて絶え入るばかりなり＝われは御言葉によりでの

ぞみをいだく

其わが目は御誓いを待ち望みておとらう＝われ言えり、「なんじいずれの時われ

を慰むるや」と

三 我は煙の中の皮袋のごとくなりぬ＝ されどなお、なんじのおきてをわすれず

四 なんじのしもべはいつまでのぶべきや＝ なんじいずれの時われを責むる者を

さばきたもうや

五 高ぶるもの我をおとしいれんとて穴をほれり＝ 彼らはなんじの律法にしたがわ

ざるなり

六 なんじの戒めはみなまことなり＝ 彼らは偽りをもて我を責む、願わくは我を助

けたまえ

七 彼らは地にてほとんど我をほろぼさんとせり＝ されど我はなんじの戒めを捨て

ざりき

八 願わくはなんじのいつくしみによりて我を生かしたまえ＝ さればわれ御口より

いずるあかしをまもらん

九 主よ、御言葉はさだまれり＝ 天にてどこしえにさだまれり

十 なんじのまことはよろず世におよぶ＝ なんじ地を定めたまえば、地はかたく立

てり

九一 これらのものは御定めに従い、常にありてきようにいたる＝ よろずのものは、

なんじのしもべなればなり

九二 なんじの律法わが喜びとならざりしならば＝ 我はわが悩みのうちに滅びたりし

ならん

九三 我つねになんじの戒めをわすれじ＝ なんじこれをもて我を生かしたまえばなり

九四 我はなんじのものなり、願わくは我を救いたまえ＝ 我なんじの戒めをもとめた

ればなり

九五 悪しき者は我を滅ぼさんとして待ち伏せたり＝ されど我はただなんじのあかし

をおもう

九六 我もろもろの全きに、ばてあるを見たり＝ されどなんじのいましめは、きわま

りなし

九七 我なんじの律法をいつくしむこといかにばかりぞや＝ 我ひねもすこれを、ふかく

おもふ

六 なんじの戒めはつねに我とともにあり＝ 我をわがあだにまさりてさとからしむ  
九 我はなんじのあかしを深くおもふ＝ ゆえに我すべての師にまさりて知恵おとし  
一〇 我はなんじの戒めをまもりたり＝ ゆえに老いたる者にまさりて事をわきもうる  
なり

一二 われ御言葉を守らんためにわが足をとどめ＝ もろもろの悪しき道にゆかしめず  
一三 我なんじの定めを離れざりき＝ なんじ我を教えたまいたればなり  
一四 御言葉の味わいはわが口に甘きこといばかりぞや＝ 蜜の甘きにまされり  
一五 我なんじの戒めによりて知恵をえたり＝ このゆえに偽りのすべての道をにくむ

## 二十六日早禱

一五 なんじの御言葉はわが足のとしびなり＝ わが道のひかりなり  
一六 われなんじの正しき定めをまもらん＝ 我これを誓いかつかたくせり  
一七 我いたくくるしめり＝ 主よ、願わくは御言葉に従いて我を生かしたまえ



一〇 主よ、願わくは賛美の供えものをうけ＝ なんじの定めをおしえたまえ

一一 わが命はつねにあやうし＝ されど我なんじの律法をわすれず

一二 悪しき者わがためにねなをもうけたり＝ されど我なんじの戒めより迷いいます

一三 なんじのあかしはとしえにわが嗣業なり＝ これわが心のよろこびなり

一四 我なんじのおきてに心をかたむけ＝ 終わりに至るまでたえずこれをまもらん

一五 我ふたごころの者をにくむ＝ されどなんじの律法をいつくしむ

一六 なんじはわが隠れが、わが盾なり＝ われ御言葉によりて望みをいタク

一七 悪をなす者よ、我をはなれ去れ＝ 我わが神のいましめを守らん

一八 御誓いに従い、我をささえてながらえしめたまえ＝ わが望みにつきて恥なから

しめたまえ

一九 我をささえたまえ、さらばわれ安らかなるべし＝ 我つねになんじのおきてに心

をそそがん

二〇 すべておきてより迷いゝずる者をなんじかろしめたもう＝ 彼らの欺きはむなし

ければなり

二九 なんじは地のすべての悪しき者を金かすのごとくみなしたもう＝ されば我なん

じのあかしをあいす

三〇 わが身はなんじを恐るるによりてふるう＝ 我はなんじのさばきをおそる

三一 われは正と義とを行ないたり＝ われを捨てて、しいたぐる者にゆだねたもうな  
かれ

三二 なんじのしもべのなかだちとなりて我をまもり＝ 高ぶる者の我をしいたぐるを  
許したもうなかれ

三三 わが目はなんじの救いを待ちのぞみておとろう＝ なんじの正しき誓いを慕うに  
よりてなり

三四 願わくはなんじのいつくしみに従いてなんじのしもべをあしらい＝ 我になんじ  
のおきてをおしえたまえ

三五 我はなんじのしもべなり＝ われに知恵をあたえて、なんじのあかしを知らしめ

たまえ

一六 今いまは主しゅの働はたらきたもうべきときなり＝ 彼かれらはなんじの律おきて法はふをやぶれり

一七 ゆえに我われなんじのいましめをあいし＝ こがねよりも混まじりなきこがねよりもまさりて、これをしよう

一八 ゆえに我われなんじのもろもろの戒おそめによりてあゆみ＝ すべての偽いつはりりの道みちをにくむ

一九 なんじのあかしはいとくすし＝ ゆえにわが魂たましひこれをまもる

二〇 御言みことば葉はうち開ひらくれば光ひかりをはなち＝ 愚おろかなる者ものに知恵ちえをあとう

二一 われ口くちを広ひろくあけてあえぎもとめ＝ なんじのいましめをしたえり

二二 願ねがわくは顧おもみて我われをめぐみ＝ 御名みなを愛あいする者ものにつねにしたもうごとく、我われになしたまえ

二三 御言みことば葉はによりてわが歩あゆみをととのえ＝ もろもろのよこしまを我われに主しゅたらしめたもうなかれ

二四 我われを人ひとのしいたげよりあがないたまえ＝ さらに我われなんじの戒おそめをまもらん

三三 願わくは御顔の光をなんじのしもべの上に照らし＝ なんじのおきてを我におし  
えたまえ

三三 わが目の涙は川のごとくになる＝ 人なんじの律法を守らざればなり

三七 主よ、なんじはただしく＝ なんじのさばきはなおし

三六 なんじ正しきをもてそのあかしを立て＝ こよなきまことをもて立てたまえり

三六 わが熱心われを焼きつくせり＝ わが敵なんじの御言葉を忘るればなり

三六 なんじの誓いはいとかたし＝ ゆえになんじのしもべはこれをあいす

三六 我はいと小さき者にて人にあなどらる＝ されどなんじの戒めをわすれず

三六 なんじの義はとこしえに義なり＝ なんじの律法はまことなり

三六 悩みと憂い我にのぞめり＝ されどなんじのいましめはわがよろこびなり

三六 なんじのあかしはとこしえに正し＝ 願わくは知恵をあたえて、我を生きながら  
えしめたまえ

二十六日晚禱

一 聖 われ心を尽くして呼ばわる＝ 主よ、我に答えたまえ、我なんじのおきてをまも

らん

二 我 我なんじに呼ばわる＝ 願わくは我を救いたまえ、我なんじのあかしをまもらん

三 聖 われ朝まだき起きいでて呼ばわる＝ われ御言葉によりて望みをいタク

四 夜の時きたらぬに先だちて我は目ざめ＝ なんじの誓いをおもう

五 願わくはなんじのいつくしみによりて、わが声をききたまえ＝ 主よ、なんじの

さばきによりて、我を生かしたまえ

六 悪しき企てをもて我に追いせまる者ちかづけり＝ 彼らはなんじの律法にとおく

離る

七 されど主よ、なんじは我に近くいます＝ なんじのすべてのいましめは、まこと

なり

八 これなんじのとしえに立てたまえるところなり＝ われ早くよりなんじのあか

しによりて知れり

一五 願わくはわが悩みを見て我をすくいたまえ＝ 我なんじの律法を忘れざればなり

一五 わが訴えを聞きて我をあがない＝ 御言葉にしたがいて我を生かしたまえ

一五 救いは悪しき者より遠くはなる＝ 彼らはなんじのおきてを求めざればなり

一五 主よ、なんじのあわれみはおおいなり＝ なんじの義によりて我を生かしたまえ

一五 われを攻むる者、われに敵する者おとし＝ されど我なんじのあかしを離るこ

となかりき

一五 我まことなき者を見て忌みきろう＝ 彼らなんじの御言葉を守らざればなり

一五 わがいかになんじの戒めを愛するかを思いたまえ＝ 主よ、なんじのいつくしみ

に従いて我を生かしたまえ

一五 なんじの御言葉はことごとくまことなり＝ なんじの正しき定めはとこしえに絶

ゆることなし

一六 もろもろの君はゆえなくして我を責む＝ されどわが心はただなんじのみことばをおそる

一七 我なんじの御言葉をよろこぶ＝ 大なる獲物を得たる人のごとし

一八 われ偽りを憎み、これを忌みきろう＝ されどなんじの律法をあいす

一九 われ一日に七たびなんじをほめたとう＝ なんじの正しきさばきのゆえによりてなり

二〇 なんじの律法を愛するものには大なるやすきあり＝ 彼らをつまずかするものなし

二一 主よ、我なんじの救いをのぞみ＝ なんじのいましめをおこのう

二二 わが魂はなんじのあかしをまもる＝ 我はいたくこれを愛す

二三 我なんじの戒めとなんじのあかしをまもる＝ わがすべての道はみまえにあればなり

二四 主よ、願わくはわが呼ぶ声を御前にいたらせ＝ 御言葉にしたがいて我に知恵を

あたえたまえ

一七 わが願ねがいを御前みまへにいたらせ＝ 御言葉みことばにしたがいて我われをたすけたまえ

一八 わがくちびるは賛美さんびをいだすべし＝ なんじ我われにみおきてを教おしえたまえばなり

一九 わが舌したは御言葉みことばをうとうべし＝ なんじのすべてのいましめは義ぎなればなり

二〇 なんじの御手みでをつねにわが助けとなしたまえ＝ 我われなんじの戒いさめめをえらびたればなり

二一 主しゅよ、我われなんじの救すくいをしとう＝ なんじの律法おきてはわがよろこびなり

二二 願ねがわくは我われをながらえしめたまえ、さらばなんじをほめまつらん＝ なんじの定め我われをたすけんことを

二三 我われは失うしなわれたる羊ひつぎのごとく迷まよいでぬ＝ なんじのしもべを尋たずねたまえ、我われなんじのいましめを忘れざればなり

## 二十七日早禱

### 第百二十篇



一 われ悩みに会いて主に呼ばわる＝ 主われにこたえたまわん  
二 「主よ、願わくは偽りのくちびるより我をのがれしめ＝ 欺きの舌より助けいだしたまえ」

三 欺きの舌よ、なんじに何をあたえられ＝ なんじに何を加えらるべきか

四 ますらおの鋭き矢なり＝ えにしだのあつき炭なり

五 わざわいなるかな、我はメセクにやどり＝ ケダルの特幕のかたわらに住めり

六 われは安きをにくむ者とともにながく住めり＝ 我はやすきを願えども我もの言えは彼ら戦いをなさんとす

## 第百二十一篇

一 われ山に向かいて目をあげん＝ わが助けはいずこよりきたるべきぞ

二 わが助けは主よりきたる＝ 主は天地を造りたまえり

三 主はなんじの足の動かさるを許したまわず＝ なんじを守る者はまどろみたもうことなし

四 見よ、イスラエルを守りたもう者はまどろむこともなく＝ 眠ることなからん

五 主はなんじを守るものなり＝ 主はなんじの右手をおおう陰なり

六 昼は日なんじを撃たず＝ 夜も月なんじを撃たじ

七 主はなんじを守りてもろもろの災いをまぬかれしめ＝ なんじの命をまもりたま

わん

八 主はなんじのいずると入るとをまもり＝ 今よりとこしえに至るまでまもりたま

わん

### 第百二十二篇

一 人われに向かい、<sup>いざ</sup>主の家に<sup>ゆ</sup>行かん」と言えるとき我よろこべり＝ エル

サレムよ、我らの足はなんじの門のうちに立てり

三 エルサレムよ、なんじはかたく立ち＝ しげくつらなりたる町なり

四 もろもろのやから、主のやから、かしこに上りきたりて主の御名に感謝す＝ こ

れイスラエルの定めなり

五 かしこにさばきの御位もうけらる＝ これダビデの家のみくらなり

六 エルサレムのために平安をいのれ＝ 「エルサレムを愛する者をさかえしめた

まえ

七 なんじの石がきのうちに平安あり＝ なんじのもろもろの殿のうちに幸いあらん

ことを」と

八 わが兄弟、わが友のために言わん＝ 「なんじのうちに平安あらんことを」と

九 我らの神・主の家のために＝ 我なんじの幸いをもとめん

## 第百二十三篇

一 天の御位にいますものよ＝ われなんじに向かいて目をあぐ

二 見よ、我らはわが神・主に目をそそぎ＝ 我らをあわれみたまわんことをまつ

三 しもべその主の手に目をそそぎ＝ はしためその主婦の手に目をそそぐがごとし

四 主よ、我らをあわれみたまえ、我らをあわれみたまえ＝ 我らにあなどり満ちあ

ふれたればなり

五 心づかいなき者のはずかしめ我らの魂にあふれ＝ 高ぶる者のあなどり満ちあふ

れぬ

## 第百二十四篇

一 主もし我らとともにいまさざりしならんには＝ 今イスラエルはかく言うべし  
人々われらに逆らいて起こりたつとき＝ 主もし我らとともにいまさざりしなら

んには

三 彼らの怒り我らに向かいておこりしとき＝ 我らを生けるままにてのみしならん

大水われらを押し流し、われらの魂をうち越え＝ さか巻く水われらの上をうち

こえしならん

六 主はほむべきかな＝ 我らを彼らの齒に渡してかみくらわせたまわざりき

七 我らは鳥取りのわなをのがる鳥のごとくにのがれたり＝ わなは破れて我らは

のがれたり

八 我らの助けは主の御名にあり＝ 主は天地をつくりたまえり

### 第百二十五篇

一 主に寄り頼む者はシオンの山のごとく＝ 動かさるることなくしてとこしえにあ

るなり

二 エルサレムを山のかこめるごとく＝ 主は今よりとこしえにその民をかこみたま

わん

三 惡のつえは正しき者の領地にとどまることなかるべし＝ かくて正しき者はその

手をのべて惡をおこなわず

四 主よ、願わくは良き人をめぐみ＝ ころ直き者をさきわいたまえ

五 されど翻りておのが曲れる道に入る者は、惡をなす者とともに主これを去らしめ

たまわん＝ 願わくはイスラエルに平安あらんことを

## 二十七日晩禱

### 第百二十六篇

一 主シオンをふたたび榮えしめたまいしとき＝ われらは夢みる者のごとくなりき

二 そのとき我らの口にわらい満ち＝ 我らの舌によるこびの声みちたり

もろもろの国民のなかにて言えるものありき＝ 「主は彼らのために大いなる事

をなしたまえり」と

三 主は我らのため大いなることをなしたまえり＝ かくて我らはよろこべり

四 主よ、願わくは我らをふたたびさかえしめ＝ ネゲブの川のごとくに榮えしめた

まえ

五 涙とともにまくものは＝ 喜びとともに刈りとらん

六 種をたずさえ涙を流していで行くものは＝ 束をたずさえ喜びてかえりきたらん

### 第二百二十七篇

一 主家を建てたもうにあらずば、建つる者の勤勞はむなし＝ 主城を守りたもうに

あらずば、見張りびとのさめおるはむなしきことなり

二 なんじら早く起き、おそく伏して辛苦の糧をくろうはむなしきなり＝ 主はその

いつくしみたもう者を眠れるときにも満たしたもう

三 見よ、子らは主の与えたまえる嗣業なり＝ 胎の実はその報いのたまものなり

四 年若きときの子らは矢のごとし＝ ますらおの手にある矢のごとし

五 矢の満ちたる矢筒を持つ人はさいわいなり＝ 彼らは門にありてあたと物言うと

きはすかしめられじ

### 第二百二十八篇

一 主を恐るる者はさいわいなり＝ その道を歩む者はみなさいわいなり  
二 なんじおのが手の勤勞の実をくろうべし＝ なんじは幸いを得、また安らかなるべし

三 なんじの妻は家の奥におりて、多くの実を結ぶぶどうの木のごとく＝ なんじの子らは食卓をかこみてオリブの若木のごとし

四 見よ、主を恐るるものは＝ かくさいわいをえん

五 主はシオンよりなんじを祝し＝ なんじ世にあらん限りエルサレムの幸いを見んことを

六 なんじおのが子らの子を見＝ イスラエルのうえに平安あらんことを

## 第百二十九篇

一 「彼らはしばしばわが若きときより我をなやませり」＝ 今イスラエルはかく言うべし

二 彼らはしばしばわが若きときより我をなやませり＝ されど我に勝つことを得ざりき

三 耕<sup>ひ</sup>す者はわが背<sup>せ</sup>をたがやし＝ そのうねをながくせり」と  
主<sup>しゅ</sup>は正<sup>ただ</sup>しくましませり＝ 惡<sup>あ</sup>しき者<sup>もの</sup>のなわを断<sup>た</sup>ちたまえり  
四 シオンをにくむ者<sup>もの</sup>ははじを受け＝ みな退<sup>ひ</sup>けられんことを  
五 彼<sup>かれ</sup>らは屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>のうえの草<sup>くさ</sup>のごとく＝ 育<sup>そだ</sup>たざるさきに枯<sup>か</sup>れんことを  
六 これを刈<sup>か</sup>る者<sup>もの</sup>はその手<sup>て</sup>に満<sup>み</sup>たず＝ これをつかぬる者<sup>もの</sup>はその束<sup>たば</sup>ふところに満<sup>み</sup>たざ  
七 るなり  
八 かたわらを過<sup>す</sup>ぐる者<sup>もの</sup>、「主<sup>しゅ</sup>の恵<sup>めぐ</sup>みなんじらの上<sup>うへ</sup>にあれ」と言<sup>い</sup>わず＝ 「主<sup>しゅ</sup>の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>  
によりてなんじらを祝<sup>ゆづ</sup>す」といわず

### 第百三十篇

一 主<sup>しゅ</sup>よ、われ深<sup>か</sup>き淵<sup>ち</sup>よりなんじをよぶ＝ 主<sup>しゅ</sup>よ、願<sup>ねが</sup>わくはわが声<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>き、わが願<sup>ねが</sup>い  
二 に耳<sup>みみ</sup>をかたむけたまえ  
三 主<sup>しゅ</sup>よ、なんじもし、もろもろの不<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>に目<sup>め</sup>をとめたまわば＝ 主<sup>しゅ</sup>よ、たれかよく立<sup>た</sup>  
四 つことを得<sup>え</sup>んや  
五 されどなんじにゆるしあり＝ されば人<sup>ひと</sup>にかしこまれたもうべし



五 われ主<sup>しゅ</sup>を待ち望<sup>のぞ</sup>む、わが魂<sup>たましい</sup>はまちのぞむ＝ 我<sup>われ</sup>は御言<sup>みことば</sup>葉によりてのぞみをいだけ  
六 わが魂<sup>たましい</sup>の主<sup>しゅ</sup>を待つは見張<sup>みは</sup>りびとの咥<sup>あぢけ</sup>を待つにまさる＝ げに見張<sup>みは</sup>りびとの咥<sup>あぢけ</sup>を待つにまさるなり

七 イスラエルよ、主<sup>しゅ</sup>によりて望<sup>のぞ</sup>みをいだけ＝ 主<sup>しゅ</sup>にはいつくしみあり、また豊<sup>ゆた</sup>かなるあがないあり

八 主<sup>しゅ</sup>はイスラエルをすくい＝ そのもろもろのよこしまより、あがないたまわん

第百三十一篇

一 主<sup>しゅ</sup>よ、わが心<sup>こころ</sup>おごらず、わが目<sup>め</sup>たかぶらず＝ 我<sup>われ</sup>におよばぬ大<sup>おお</sup>いなる事<sup>こと</sup>とくすしきわざをなさざりき

二 我<sup>われ</sup>はわが魂<sup>たましい</sup>を静<sup>しず</sup>め、また安<sup>やす</sup>らかならしめたり＝ わが魂<sup>たましい</sup>は母<sup>はは</sup>の胸<sup>むね</sup>にある幼<sup>おさ</sup>な子<sup>こ</sup>のごとく安<sup>やす</sup>らかなり

三 イスラエルよ、主<sup>しゅ</sup>にたより＝ 今<sup>いま</sup>よりとこしえに望<sup>のぞ</sup>みをいだけ

二十八日早禱

第百三十二篇

- 一 主よ、願わくはダビデをおもい＝ その忍びし苦しみをおぼえたまえ
- 二 ダビデ主に誓いをたて＝ ヤコブの全能者にちかいて言う
- 三 「我わが家に入らず＝ わが伏しどにのほらず
- 四 わが目を眠らしめず＝ わがまぶたを閉じしめず
- 五 主のために所をたずねいだし＝ ヤコブの全能者のために住まいを見いだすまで  
にいたらん」と
- 六 見よ、我らエフラタにてこれを聞き＝ ヤアルの野にてこれを見いだせり
- 七 「我らはその住まいにゆき＝ その足台の前にひれ伏さん」
- 八 主よ、立ちてなんじの休みどころに入り＝ なんじの契約の箱とともに入りた  
まえ
- 九 なんじの祭司たちは義を着＝ なんじの聖徒はみな喜び呼ぼうべし
- 一〇 なんじのしもベダビデのために＝ なんじに油そそがれし者の顔をしりぞけたも  
うなかれ

二 主、堅くダビデに誓いたまいたれば、これにたごうことあらじ＝「我なんじの身よりいでし者をなんじの位に座せしめん」

三 なんじの子らわが教うる契約とあかしをまもらば＝ 彼らの子らもまたとこしえになんじの位に座すべし＝

三 主はシオンをえらび＝ おのが住まいにせんと望みたまえり

四 「こはとこしえにわが休みどころなり＝ 我ここに住まわん、そは我これを望めばなり」

五 我シオンの糧をゆたかに祝し＝ 食物をもてその貧しき者を飽かしめん

六 われ救いをその祭司たちに着せん＝ その聖徒はみな喜び呼ぼうべし

七 われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん＝ わが油そそぎし者のためにともし火をそなえたり

八 我かれのあだに恥を着せん＝ されど彼の冠はかがやかん

## 第百三十三篇

一 見よ、はらからの相むつむはいかによきかな＝ 相ともにおるはいかにたのしき

かた

二 この樂<sup>たの</sup>しみはこうべに注<sup>そそ</sup>がれたる尊<sup>あや</sup>き油<sup>あぶ</sup>のひげに流<sup>なが</sup>れ＝ アロンのひげに流<sup>なが</sup>れ、

その衣<sup>え</sup>のえりにまで流<sup>なが</sup>れたたるがごとし

三 またヘルモンの露<sup>つゆ</sup>くだりてシオンの山<sup>やま</sup>に流<sup>なが</sup>るるがごとし＝ 主<sup>しゅ</sup>はかしこに幸<sup>さいわ</sup>いを

下<sup>くだ</sup>し、限<sup>かぎ</sup>りなき命<sup>いのち</sup>を与<sup>あた</sup>えたまえばなり

### 第百三十四篇

一 よる主<sup>しゅ</sup>の家<sup>いえ</sup>に立<sup>た</sup>ち主<sup>しゅ</sup>に仕<sup>つか</sup>うるもろもろのしもべよ＝ 主<sup>しゅ</sup>をほめまつれ

二 なんじら聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>に向<sup>む</sup>かいて手<sup>て</sup>をあげ＝ 主<sup>しゅ</sup>をほめまつれ

三 願<sup>ねが</sup>わくは主<sup>しゅ</sup>シオンよりなんじを祝<sup>ゆめ</sup>したまわんことを＝ 主<sup>しゅ</sup>は天地<sup>てんち</sup>を造<sup>つく</sup>りたまえり

### 第百三十五篇

一 なんじら主<sup>しゅ</sup>をほめまつれ、主<sup>しゅ</sup>の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>をほめまつれ＝ 主<sup>しゅ</sup>のしもべらよ、主<sup>しゅ</sup>をほめ

たたえよ

二 なんじらは主<sup>しゅ</sup>の家<sup>いえ</sup>に立<sup>た</sup>つものなり＝ 我<sup>われ</sup>らの神<sup>かみ</sup>の大<sup>おお</sup>庭<sup>にわ</sup>に立<sup>た</sup>つものなり

三 主<sup>しゅ</sup>は恵<sup>めぐ</sup>み深<sup>か</sup>し、なんじら主<sup>しゅ</sup>をほめたたえよ＝ 主<sup>しゅ</sup>のあわれみは大<sup>おほ</sup>いなり、その御<sup>み</sup>

名をほめうたえ

四 そは主おのがためにヤコブをえらび＝ イスラエルを選びておのがものとなした  
まえり

五 われ主の大きいなるを知り＝ 我らの主のもろもろの神にまされるを知れり

六 主はその御心にかのう事をことごとくなし＝ 天にも地にも海にも淵にもこれを  
なしたもうなり

七 主は地のはてより雲をのぼらせ＝ 雨のためにいなすまを造り、その歳より風を  
いだしたもう

八 主はエジプトのういごを撃ち＝ 人より獣にいたるまでこれを撃ちたまえり

九 エジプトよ、主はなんじの中にしとくすしきみわざとをおくり＝ パロとそ  
のしもべらに望ませたまえり

一〇 主は多くの国民を撃ち＝ また勢いある王たちをうち殺したまえり

一一 アモリびとの王シホン、バシヤンの王オグをころし＝ カナンのすべての国を撃  
ちたまえり

- 三 主は彼らの地をゆずりとし＝ その民イスラエルの嗣業としてあたえたまえり  
三 主よ、なんじの御名はとこしえに絶ゆることなし＝ 主よ、なんじの誉れはよろ  
ず世におよばん  
四 主はその民のためにさばきをなし＝ そのしもべらにあわれみをしめじたまわん  
五 もろもろの国の偶像はしろがねとこがねなり＝ 人の手のわざなり  
六 彼らは口あれと言わず＝ 目あれど見ず  
七 耳あれど聞かず＝ またその口に息あることなし  
八 これを造る者はこれにひとしく＝ これに寄り頼む者はみなこれに同じからん  
九 イスラエルの家よ、主をほめまつれ＝ アロンの家よ、主をほめまつれ  
一〇 レビの家よ、主をほめまつれ＝ 主を恐るる者よ、主をほめまつれ  
一一 エルサレムに住みたもう主はシオンにてほむべきかな＝ 主をほめまつれ

## 二十八日晚祷

### 第百三十六篇

一 主しゅに感謝かんしゃせよ、主しゅはめぐみふかし＝ そのいつくしみはとこしえに絶たゆることなし

二 もろもろの神かみの神かみに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶たゆることなし

三 もろもろの主しゅの主しゅに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶たゆることなし

四 ただひとりくすしきわざをなしたもう者ものに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみはとこし

えに絶たゆることなし

五 知恵ちえをもてもろもろの天てんを造つくりたまえる者ものに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみはとこ

しえに絶たゆることなし

六 地ちを水みづの上に敷しきたまえる者ものに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶たゆる

ことなし

七 大おほいなる光ひかりを造つくりたまえる者ものに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶たゆる

ことなし

八 昼ひるをつかさどらすために日ひを造つくりたまえる者ものに感謝かんしゃせよ＝ そのいつくしみは

とこしえに絶たゆることなし

九 夜をつかさどらすために月ともろもろの星を造りたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一〇 エジプトのういごを撃ちたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一一 イスラエルをエジプトより導きいだしたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一二 御腕をのばし強き御手をもてこれを引きいだしたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一三 紅海を二つに分けたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一四 イスラエルをしてそのなかを渡らしめたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

一五 パロとその軍勢を紅海のうちに倒したまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし



二六 その民をみちびきて荒れ野を過ぎ行かしめたまえる者に感謝せよ＝ そのいつく

しみはとこしえに絶ゆることなし

二七 大いなる王たちを撃ちたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶

ゆることなし

二八 名ある王たちを殺したまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆ

ることなし

二九 アモリびとの王シホンを殺したまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこし

えに絶ゆることなし

三〇 パシヤンの王オグを殺したまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに

絶ゆることなし

三一 彼らの地を嗣業として与えたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえ

に絶ゆることなし

三二 そのしもペイスラエルに嗣業としてこれを与えたまえる者に感謝せよ＝ そのい

つくしみはとこしえに絶ゆることなし

三 我らが卑しかりしときに覺えたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこし

えに絶ゆることなし

二 我らを敵より助けいだしたまえる者に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに

絶ゆることなし

一 すべての生ける者に食い物をあたえたもう者に感謝せよ＝ そのいつくしみはと

こしえに絶ゆることなし

二 天の神に感謝せよ＝ そのいつくしみはとこしえに絶ゆることなし

### 第百三十七篇

一 我らバビロンの川のほとりにすわり＝ シオンを思いいでて涙をながしぬ

二 そのあたりにやなぎあり＝ 我らこれに琴をかけたなり

三 我らをとりこにせしもの我らに歌をもとめたり＝ 我らを苦しむる者おのれを喜

ばせんとて、「シオンの歌一つうたえ」と言えり

四 われら異国にあり＝ いかで主の歌をうたわんや

五 エルサレムよ、もし我なんじを忘れなば＝ わが右の手その巧みをわすれよかし

六 もし我<sup>われ</sup>なんじを思<sup>おも</sup>ひいださず、もし我<sup>われ</sup>エルサレムをわがすべての喜<sup>よろこ</sup>びのきわみとなさずば＝ わが舌<sup>した</sup>はあごにつけよかし

七 主<sup>しゅ</sup>よ、願<sup>ねが</sup>わくはエルサレムの日<sup>ひ</sup>にエドムの人々<sup>ひとびと</sup>の言<sup>い</sup>いしことを御<sup>み</sup>心にとめたまえ＝ 「これを払<sup>はら</sup>いのぞけ、その基<sup>もと</sup>までも払<sup>はら</sup>いのぞけ」と彼<sup>かれ</sup>らは言<sup>い</sup>えり

八 バビロンの娘<sup>むすめ</sup>、我<sup>われ</sup>らをほろぼす者<sup>もの</sup>よ＝ なんじが我<sup>われ</sup>らになししごとく、なんじに報<sup>むく</sup>ゆる人はさいわいなり

九 なんじのみどりごを取りて＝ 岩<sup>いわ</sup>に投<sup>な</sup>げうつ者<sup>もの</sup>はさいわいなり

第百三十八篇

一 主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>われ</sup>は心<sup>こころ</sup>を尽<sup>つ</sup>くしてなんじに感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>し＝ もろもろの神<sup>かみ</sup>の前<sup>まえ</sup>にてなんじをほめ

うたわん

二 我<sup>われ</sup>なんじの聖<sup>せい</sup>なる宮<sup>みや</sup>に向<sup>む</sup>かいて伏<sup>ふ</sup>しおがみ＝ なんじのいつくしみとまことのゆ

えによりて御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>に感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>せん

そはなんじ御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>と御<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>をたかくし＝ よろずのものにまさりて高<sup>たか</sup>くしたまいたればなり

三 なんじわが呼ばわりし日に我こたえ＝ わが魂の力を増しくわえたまえり  
四 主よ、地のすべての王はなんじをほめたたえん＝ 彼らはなんじの口のもろもろ  
の言葉をききたればなり

五 彼らは主のもろもろの道につきて歌わん＝ 主の栄光おおいなればなり

六 主は高くましませども、卑しきものを顧みたまう＝ されどまた高ぶる者を遠き  
より知りたまえり

七 たといわれ悩みのなかを歩むともなんじわれを生かし＝ 御手を伸べてわがあだ  
の怒りを防ぎ、その右の御手われを救いたもう

八 主はわがために御心をなし遂げたまわん＝ 主よ、なんじのいつくしみはとこし  
えに絶ゆることなし、願わくはなんじの御手のわざを捨てたもうなかれ

## 二十九日早禱

### 第百三十九篇

一 主よ、なんじは我をさぐり＝ 我を知りたまえり

二 なんじはわが甘<sup>あま</sup>なるをも立<sup>た</sup>つをも知<sup>し</sup>り＝ また速<sup>と</sup>くよりわが思<sup>おも</sup>ひをわきまえたもう

三 なんじはわが歩<sup>あゆ</sup>むをもわが伏<sup>ふ</sup>すをも探<sup>さぐ</sup>りいだし＝ わがもろもろの道<sup>みち</sup>をことごとく知<sup>し</sup>りたまえり

四 我<sup>われ</sup>ひとことも語<sup>かた</sup>らざるさきに＝ 主<sup>しゅ</sup>よ、なんじことごとく知<sup>し</sup>りたもう

五 なんじは前<sup>まえ</sup>より、うしろより我<sup>われ</sup>をかこみ＝ わが上<sup>うへ</sup>に御<sup>み</sup>手<sup>て</sup>をおきたもう

六 かかる知<sup>ち</sup>識<sup>し</sup>はいとくすしくして我<sup>われ</sup>に過<sup>す</sup>ぐ＝ また高<sup>たか</sup>くしておよぶことあたわず

七 我<sup>われ</sup>いずこに行<sup>ゆ</sup>きてなんじの御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>をはなれんや＝ 我<sup>われ</sup>いずこに行<sup>ゆ</sup>きてなんじの御<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>をのがれんや

八 われ天<sup>てん</sup>にのぼるともなんじかしこにいまし＝ 我<sup>われ</sup>わが床<sup>とこ</sup>をよみに設<sup>しや</sup>くとも、なんじかしこにいます

九 われあけぼのの翼<sup>つばさ</sup>をかりてとび＝ 海<sup>うみ</sup>のはてに至<sup>いた</sup>りて住<sup>す</sup>むとも

一〇 かしこにてなおなんじの手<sup>て</sup>、我<sup>われ</sup>をみちびき＝ なんじの右<sup>みぎ</sup>の手<sup>て</sup>、我<sup>われ</sup>をささえたまわん

二 「やみ我をことごとくおおい＝ 我をかこむ光は夜となれ」とわれ言うとも

三 なんじにはやみも暗きことなく、夜も昼のごとくかがやく＝ なんじには暗きも光も異なることなし

三 なんじはわがはらわたをつくり＝ またわが母の胎にてわれを組み成したまえり  
四 我なんじをほめたたえん、なんじは恐るべくまたくすし＝ なんじのみわざはく

すし、なんじ我をことごとく知りたもう

五 われ隠れたる所にて造られ、地の深き所にてたえにつづり合わされしとき＝ わが骨なんじに隠るることなかりき

六 わがからだいまだ組み成されざるに、なんじの目は早くよりこれを見たまえり＝  
わがために設けたまいし月日の、いまだ一日もなかりしとき、その月日はことごとくなんじの書にしるされたり

七 神よ、なんじのもろもろの御思いは我に尊きこといかばかりぞや＝ その御思いのすべくくりはいかに大いなるかな

八 我これを教えんとすれどもその数は砂よりもおおし＝ われ目さむるときもなお

なんじとともにあり

一九 神よ、なんじ悪しき者を殺したまわんことを＝ 血をながす者はわれを離れ去ら

んことを

二〇 彼らは悪しき企てをもてなんじにさからい＝ 高ぶりて悪をおこのうなり

二一 主よ、我はなんじを憎む者をにくみ＝ なんじに逆らいて起こり立つ者をいとう  
にあらすや

二二 我いたく彼らをにくみ＝ 彼らをわがあだとなすなり

二三 神よ、願わくは我を探りてわが心を知り＝ われを試みてわがもろもろの思いを  
知りたまえ

二四 我によこしまなる道のありやなしやを見＝ 我をとこしえの道にみちびきたまえ

第百四十篇

一 主よ、願わくは悪しき人より我を助けいだし＝ われを守りて荒らぶる者よりの

がれしめたまえ

二 彼らは心のうちに悪しきことをくわだて＝ 絶えず戦いをおこす

三 彼らはへびのごとくおのが舌をするどくし＝ そのくちびるにはまむしの毒あり  
主よ、われを守りて悪しき人の手よりのがれしめ＝ わが足をつまずかせんと計

四 る荒らぶる人よりのがれしめたまえ

五 高ぶる者はわがために落し穴を設け、綱をもてあみをはり＝ 道のほとりにわな  
を伏せたり

六 われ主に言えり、「なんじはわが神なり＝ 主よ、願わくはわが祈りの声をき

たまえ

七 わが救いの力、主なる神よ＝ なんじは戦いの日にわがこうべをおおいたまえり  
主よ、悪しき人の願いを許したもうなかれ＝ その悪しき企てを遂げしめたもう

なかれ

八 我を囲む者そのこうべをあぐ＝ 彼らはそのくちびるの悪しき言葉にて、みずか

ら打ちひしがれんことを

九 燃ゆる炭かれらの上に落ち＝ 彼らは深き穴に投げ入れられて、ふたたび起きい  
ずることあたわざらしめたまえ



二 悪しきことを言う者は世に立てられず＝ 荒らぶる者はすみやかに災いに追ひし

かれてたおさるべし」と

三 われ知る、主は苦しむ者の訴えをきき＝ 貧しき者のために正しきさばきをなし

たもうことを

三 正しき者はかならず御名に感謝し＝ 直き者はみまえに住まわん

## 二十九日晚禱

### 第四百十一篇

一 主よ、われなんじを呼べり、願わくはすみやかにきたりたまえ＝ 我なんじに呼

ばわるとき、わが声に耳をかたむけたまえ

二 わが祈りは御前に立ちのぼる香のごとく＝ わが手をあぐること夕べのいけにえ

のごとくなしたまえ

三 主よ、わが口<sup>くち</sup>に門<sup>かど</sup>もりをおき＝ わがくちびるの戸<sup>と</sup>をまもりたまえ

四 悪しきことにわが心<sup>こころ</sup>をかたむけず、悪<sup>あく</sup>を行<sup>おこ</sup>のう者<sup>もの</sup>とともに悪しきわざにくみする

廿 ことなからしめ＝ 彼らのうまき物をくらわしめたもうなかれ  
正しき者にいつくしみをもて我を打たせ、また責めさせたまえ＝ されど悪しき

者の油をわがかしらに注がしめたもうなかれ、わが祈りは絶えず彼らの悪しきわざにさかろう

六 彼らおのれを罪に定むるものにわたさるとき＝ 主の御言葉のまことなるを知

るにいたらん

七 裂かれて地に打ちくだかる岩のごとく＝ かれらの骨はよみの口にまき散らさ

れん

八 されど主なる神よ、わが目はなんじに向こう＝ 我はなんじに寄り頼む、われを

助けなきままに捨ておきたもうなかれ

九 我を守りて彼らがわがために設くる落し穴をのがれしめ＝ 悪を行のう者のわな

を免れしめたまえ

一〇 悪しき者は皆おのが網に陥らんことを＝ されど我はのがれしめたまえ

### 第百四十二篇

一 かれ声をいだして主によぼわり＝ 声をいだして主にこいもとむ

二 われは御前にわが嘆きをそそぎいだし＝ わが悩みをかたる

三 わが息たえんとする時も、なんじわが道を知りたまう＝ 人われを捕えんとてわ

四 が行く道に落し穴をもうけたり

五 我はわが右に目を注ぎて見たれど、我に心をとむる者ひとりだになし＝ 我には

六 避け所なく、また我をかえりみるものなし

七 主よ、我なんじに呼ばわりていう＝ 「なんじはわが避け所、生ける者の地にて

八 わが受くべき分なり」と

九 わが叫びに御心をとめたまえ＝ 我いと低くせられたればなり

一〇 われを責むる者より助けいだしたまえ＝ 彼らは我にまさりて強ければなり

一一 願わくは我をひとやよりいだしたまえ＝ さらばわれ御名に感謝せん

一二 正しき者わが囲りにつどわん＝ なんじ豊かに我をあしらいたもうべければなり

第四百十三篇

一 主よ、願わくはわが祈りをきき、わが願いに耳をかたむけたまえ＝ なんじのま

ことなんじの正しきをもて我にこたえたまえ

二 なんじのしもべのさばきにかかわりたもうなかれ＝ そは生ける者ひとりだに御前に義とせらるるはなし

三 あだは我を攻め、わが命を地にうちくだき＝ 死にて久しなりし者のごとく、われを暗き所にすまわせたり

四 わが霊はわがうちに消えうせんとし＝ わが心はわがうちにおとろえ果てたり

五 われはいにしえの日を思いいで、なんじの行ないたまひしすべてのことをかんがえ＝ なんじの御手のわざをおもう

六 われはなんじに向かいて手をのべ＝ わが魂はかわきたる地のごとくなんじをしどう

七 主よ、すみやかに我に答えたまえ、わが霊はおとろう＝ われに御顔を隠したもうなかれ、恐らくはわれ墓にくだる者のごとくならん

八 あしたになんじのいつくしみを聞かしめたまえ＝ 我なんじに寄りのめばなりわが歩むべき道を知らしめたまえ＝ 我わが魂をなんじにあぐればなり

九 主よ、我われをわがあだより助けいだしたまえ＝ われ隠かくれんとしてなんじにはしり  
ゆけり

一〇 なんじはわが神かみなり、我われに御心みこころを行おこのうことを教おしえたまえ＝ 恵めぐみふかき御霊みたまを  
もて、我われを平たいらかなる道みちにみちびきたまえ  
二 主よ、願ねがわくは御名みなのために我われを生いかし＝ なんじの義ぎによりて我われを悩なやみより救すく  
いだしたまえ

三 またなんじのいつくしみによりてわがあだを絶たち＝ わが敵てきをことごとく滅ほろぼし  
たまえ、我われはなんじのしもべなればなり

三十日早禱

第百四十四篇

一 主・わが岩いわはほむべきかな＝ 主しゅはいくさすることをわが手てに教おしえ、戦たたかうことを  
わが指ゆびにおしえたもう

二 主はわが岩いわ、わが城しろなり＝ わがとりで、我われをすくうものなり

三 主はわが盾、わが寄り頼むものなり＝ もろもろの民をおのれに従わせたもう  
主よ、人はいかなる者なればこれを願みたもうや＝ 人の子はいかなる者なれば  
これを御心にとめたもうや

四 人は息にことならず＝ そのながろうる日は過ぎゆくかげにひとし  
主よ、願わくはなんじの天をたれてくだり＝ 御手を山につけて煙をたたしめた  
まえ

六 いなずまを放ちて彼らをちらし＝ なんじの矢を放ちて、彼らをやぶりたまえ  
七 上より御手を伸べて我をすくい＝ 大水より、異邦人の手より助けいだしたまえ  
八 彼らの口は偽りをかたり＝ その右の手は偽りの右の手なり  
九 神よ、我なんじに向かいて新らしき歌をうたい＝ 十弦の立琴に合せてなんじ  
をほめうたわん

二 なんじは王たちに勝利をあたえ＝ しもベダビデをすくいいたもう  
二 願わくは血に飢えしつるぎより我をすくい、異邦人の手より助けいだしたまえ＝  
彼らの口はいつわりを語り、その右の手はいつわりの右の手なり

三 我らの若きむすこらは、よく育ちたる草木のごとく＝ 我らの娘らは宮造りのた

めに刻まれし、すみの柱のごとくならんことを

三 我らの倉は満ち足りてさまざまのものをそなえ＝ 我らの羊は野にて千よろずの

子を産まんことを

四 我らの家畜はみごもり、子を産むに誤ることなく＝ 我らのちまたには悩みの叫

び絶えてなからんことを

五 かかる恵みをうくる民はさいわいなり＝ 主をおのが神とする民はさいわいなり

## 第四百五篇

一 わが神・主よ、我なんじをあがめ＝ 世々限りなく御名をほめまつらん

二 われ日ごとになんじをほめ＝ 世々限りなく御名をほめたたえん

三 主は大いなり、いともほむべきかな＝ その大いなること尋ね知りがたし

四 この代は次の代に向かいみわざをほめたたえ＝ なんじの大能の働きを宣べつ

たえん

五 我はみいつの栄光ある輝きをおもい＝ くすしみわざをふかくおもわん

六 人はなんじの恐るべきみわざの力をかたり＝ 我はなんじの大いなることを宣べ

つたえん

七 彼らはなんじの賜いし豊かなる恵みを言いいで＝ なんじの義を声高くほめうた

わん

八 主は恵み深くあわれみに富み＝ また怒りたもうことおそく、いつくしみゆたか

なり

九 主はよろずのものにめぐみあり＝ そのあわれみは造りたまえるすべてのものの

上にあまねし

一〇 主よ、すべてのみわざはなんじに感謝し＝ なんじの聖徒はなんじをほめたな

えん

二 かれらは御国の栄光をかたり＝ 御力を宣べつたえん

三 彼らはなんじの大能のはたらきを人の子らにさとらせ＝ 御国の栄光あるかがや

きを知らすべし

三 なんじの国はとこしえの国なり＝ そのまつりごとはよろず代に絶ゆることなし



主しゅのすべての御言葉みことばはまことなり＝ そのすべてのみわざにはめぐみあり

主しゅはすべて倒たおれんとするものをささえ＝ かがむ者ものを直なおく立たたしめたもう

よろずのものの目はなんじを待ち＝ なんじは時ときにしたがいて彼らかれに糧かたをあたえ

たもう

なんじ御手みでをひらき＝ もろもろの生いけるものの願ねがいを飽あかしめたもう

主しゅはそのすべての道みちにただしく＝ すべてのみわざにめぐみふかし

主しゅはすべておのれを呼よぶものに近ちかくいまし＝ まことをもて呼よぶものに近ちかくまし

ませり

主しゅはおのれを恐おそるものの願ねがいを遂とげしめ＝ その叫さけびをききてこれをすくい

もう

主しゅはすべて主しゅを愛あいする者ものを守りたもう＝ されど悪あしき者ものをことごとくほろぼし

たまわん

わが口くちは主しゅのほまれをかたり＝ よろずの者ものは世々よよ限かぎりなくその聖せいなる御名みなをほ

めまつるべし

第四百十六篇

一 なんじら主をほめまつれ＝ わが魂よ、主をほめまつれ

二 われ生ける限り主をほめまつり＝ わがながらうるほどはわが神をほめうたわん

三 もろもろの君にも人の子にも寄り頼むなかれ＝ そは彼らに助けあることなし

四 その息いで行けば彼は土にかえる＝ その日かれのもろもろの企てはほろぶ

五 ヤコブの神をおのが助けとする者はさいわいなり＝ その望みをおのが神・主に

おく者はさいわいなり

六 神は天地と海とそのなかなるすべてのものを造り＝ とこしえにまことをまもり

たもう

七 しいたげらるる者のために正しきさばきをおこない＝ 飢えたる者に食い物をあ

たえたもう

八 主は捕われたる人を解き放ちたもう＝ 主はめしいの目をひらきたもう

主はかがむ者を直く立たせたもう＝ 主は正しき者をいつくしみたもう

九 主は宿りびとを守り、やもめとみなしごをささえたもう＝ されど悪しき者の道

を滅ぼしたもう

二 シオンよ、なんじの神・主は世々とこしえに続べ治めたまわん＝ 主をほめまつれ

三十日晚禱

第百四十七篇

一 主をほめまつれ、我らの神をほめ歌うはよきことなり＝ 主は恵み深し、主をほめ歌うはふさわしきことなり

二 主はエルサレムをきずき＝ イスラエルのさすらえる者をあつめたもう

三 主は心のくだかれし者をいやし＝ その傷をつつみたもう

四 主は星のかずをさだめ＝ すべてこれに名をあたえたもう

五 我らの主は大いなり、また力にとみたもう＝ その知恵はかりがたし

六 主はしいたげられたる者をたこうし＝ 悪しき者を地に投げすてたもう

七 主に感謝してうたえ＝ 琴にあわせて我らの神をほめうたえ

ハ 主は雲をもて天をおおい、地のために雨をそなえ＝ もろもろの山に草をはえし

めたもう

九 主はくいものを獣にあたえ＝ また鳴くこがらすにあたえたもう

一〇 主は馬の力を喜びたまわず＝ 人の足をよみしたまわず

二 されど主を恐るる者をよろこび＝ そのいつくしみを望む者をよみしたもう

三 エルサレムよ、主をほめまつれ＝ シオンよ、なんじの神をほめまつれ

三 主はなんじの門の貫の木をかうし＝ なんじのうちなる子らをさきわいたまえ

ばなり

四 主はなんじの国のうちに安きをあたえ＝ いと良き麦をもてなんじを飽かしめた

もう

一五 主はその戒めを地にくだしたもう＝ その御言葉はすみやかにはしる

一六 主は雪をひつじの毛のごとく降らせ＝ 霜を灰のごとくにまきたもう

一七 主は氷をつぶてのごとくに投げうちたもう＝ たれかその寒さに耐ええんや

一八 主御言葉をくだしてこれを溶かし＝ その風を吹かせたまえばもろもろの水はな

がる

一九 主は御言葉をやコブにしめし＝ もろもろのおきてと定めをイスラエルにしめし

たもう

二〇 主はいずれの国民をもかくあしらいたまいしにあらす＝ 彼らは主の定めを知ら

ざるなり、主をほめまつれ

第四百四十八篇

一 主をほめまつれ、もろもろの天より主をほめまつれ＝ もろもろの高き所にて主

をほめまつれ

二 主の御使いよ、みな主をほめまつれ＝ 主の万軍よ、みな主をほめまつれ

三 日よ、月よ、主をほめまつれ＝ かがやく星よ、みな主をほめまつれ

四 いと高き天よ、主をほめまつれ＝ 天のうえなる水よ、主をほめまつれ

五 彼らはみな主の御名をほめまつるべし＝ 主命じたまいたれば彼らは造られたり

六 主かれらをとこしえに堅くたて＝ 越ゆべからざる境をさだめたまえり

七 龍よ、すべての淵よ＝ 地より主をほめまつれ

ハ 火よ、あられよ、雪よ、霜よ＝ 御言葉にしたごうあらしよ

九 もろもろの山、もろもろの丘よ＝ 実をむすぶ木、すべての香柏よ

一〇 獣ともろもろの家畜よ＝ 地をほうものと翼ある鳥よ

一一 地の王たちともろもろのたみよ＝ 君たちともろもろのつかさびとよ

一二 若き男と若きおんなよ＝ 老いたる人とおさなきものよ

一三 みな主の御名をほめまつるべし＝ 主の御名は高くしてたぐいなく、その栄光は

地よりも天よりも上にあればなり

一四 主はその民のために一つの角をあげたまえり＝ こはもろもろの聖徒、主に近き

イスラエルの民のほめたとうべきものなり、主をほめまつれ

### 第百四十九篇

一 主をほめまつれ、主に向かいて、新らしき歌をうたえ＝ 聖徒のつどいにて主の

ほまれをうたえ

二 イスラエルはおのれを造りたまひし者をよろこび＝ シオンの子らはおのが王の

ゆえによりてたのしむべし

三 彼ら踊りつつその御名をほめたたえ＝ 鼓と琴をもて主をほめうとうべし

四 主はおのが民をよろこび＝ へりくだる者を勝利に輝かせたまわん

五 聖徒を榮光によりてよろこばせ＝ その伏しどにてよろこび歌わしめたまえ

六 その口には神をほむるうたあり＝ その手にはもろ刃のつるぎあり

七 こはもろもろの国にあだをかえし＝ もろもろの民を懲らし

八 彼らの王たちを鎖をもてつなぎ＝ 彼らの貴人をくろがねのかせをもていましめ

九 しるされたるさばきを彼らに行のうためなり＝ これもろもろの聖徒の誉れな

り、主をほめまつれ

第百五十篇

一 主をほめまつれ、聖所にて神をほめまつれ＝ 御力のあらわるる大空にて神をほ

めまつれ

二 大能の働きゆえをもて神をほめまつれ＝ すぐれて大いなることのゆえにより

て神をほめまつれ

三 ラッパの声をもて神をほめまつれ＝ 十弦の琴と立琴とをもて神をほめまつれ

四 鼓<sup>つづみ</sup>と踊<sup>おど</sup>りをもて神<sup>かみ</sup>をほめまつれ＝緒<sup>おと</sup>琴<sup>と</sup>と笛<sup>ふえ</sup>をもて神<sup>かみ</sup>をほめまつれ  
五 音<sup>おと</sup>のたかきシンバルをもて神<sup>かみ</sup>をほめまつれ＝鳴<sup>な</sup>りひびくシンバルをもて神<sup>かみ</sup>をほめまつれ  
六 息<sup>いき</sup>ある者<sup>もの</sup>はみな主<sup>しゅ</sup>をほめまつれ＝主<sup>しゅ</sup>をほめまつれ



昭和三十四年十一月三十日 初版

発行所 日本聖公会教務院

東京都渋谷区常盤松二十三番地  
電話(40)二三一四・振替東京七八五三六

印刷所 新興印刷製本株式会社 製本所 星共社

